

一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書)

鳥取県西伯郡名和町

名和飛田遺跡

2005

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書）

鳥取県西伯郡名和町

名和飛田遺跡

2005

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所



1 竪穴住居 2・3 完掘状況 (北から)



2 掘立柱建物 1 完掘状況 (南東から)

カラー図版 2



1 第3調査地第1遺構面出土土器



2 竪穴住居2・3出土彩色記号須恵器



3 竪穴2出土移動式竈・甕・甑



1 第3調査地E区完掘状況(北東から)



2 竪穴住居6完掘状況(北東から)



3 竪穴住居5遺物出土状況(北から)

カラー図版 4



1 第3調査地第2遺構面出土土器



2 竪穴住居6出土玉類



3 竪穴5出土絵画土器

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところでありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道9号（東伯中山道路・名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、名和町にある名和飛田遺跡では、弥生時代の絵画土器や古墳時代の大型掘立柱建物跡など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。発掘調査終了直前には、現地説明会を開催し多くの方々の御来場をいただいたところですが、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 有田博充

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取 島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

名和淀江道路は、西伯郡名和町から西伯郡大山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成16年度は、「名和中畝遺跡」、「名和飛田遺跡」、「門前上屋敷遺跡」、「門前第2遺跡」の4遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「名和飛田遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成17年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所 長 嘉本 昭夫

例 言

1. 本報告書は、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが「一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査」として平成15・16年度に実施した名和飛田遺跡の調査報告である。
2. 本報告書に収載した遺跡は、西伯郡名和町大字名和字飛田2043番地ほかに所在する。
3. 本発掘調査では、16,631m²を調査した。
4. 本報告書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第 系 の値である。また、レベルは海拔標高を表す。
5. 本報告書に掲載した地図は、名和町発行の1 / 2,500地形図、および国土地理院発行の1 / 25,000地形図を縮小して使用した。
6. 本発掘調査にあたり、出土した鉄関連遺物の分類をたたら研究会委員穴澤義功氏に、石材鑑定を遠藤勝壽氏に、出土土器の胎土分析を岡山理科大学白石純氏にそれぞれお願いした。また、白石氏には玉稿を賜った。記して深謝いたします。
7. 本発掘調査にあたり、遺跡の航空写真、基準点および地形測量、遺物実測の一部、炭化物の樹種同定、放射性炭素年代測定、赤色顔料の成分分析、ガラス玉の蛍光X線分析、石器石材の蛍光X線分析をそれぞれ専門業者に委託した。
8. 掲載した遺構図は文化財主事、調査員および調査補助員が作成したものを整理作業員が浄書した。
9. 遺物実測図の作成は文化財主事、調査員および整理作業員が行なった。なお石器の実測・浄書は一部を除き専門業者に委託した。
10. 遺構および遺物の写真撮影は文化財主事および調査員が行った。
11. 発掘調査時に作成した図面、写真などの記録類、および出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
12. 本報告書の作成は文化財主事および調査員が協議して行い、北、三木が編集した。文責は目次および文末に記した。
13. 現地調査および報告書の作成にあたっては上記の方々のほかに、多くの方々からご指導、ご助言およびご支援いただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）

辻 信広（名和町教育委員会） 下高瑞哉（米子市教育委員会） 佐伯純也（米子市文化事業団） 山田康弘（島根大学） 角田徳幸 柳浦俊一 稲田陽介（島根県埋蔵文化財調査センター） 中川 渉 柏原正民（兵庫県教育委員会） 谷本 進（養父市教育委員会） 山崎真治（東京大学大学院） 和田大作（岡山大学大学院） 池田 毅（神戸市立博物館） 米田克彦 石田為成（岡山県古代吉備文化財センター）

凡 例

1. 遺跡の略称はN T Tとした。
2. 現場で採取した図面、写真などの記録類、遺物の注記にはすべて調査時点の地区名称および遺構番号を記載している。本書での名称と調査時名称との対応は本文に記載した新旧地区名称対照表、新旧遺構対照表に示した。
3. 遺構図・遺物実測図の縮尺は図中に表示した。
4. 遺物番号には次の略号を付し、遺物の種別ごとに番号を通した。
番号のみ：土器、土製品 S：石器 F：鉄製品 B：玉類
5. 本文、挿図および写真図版の遺物番号は一致する。
6. 遺物実測図のうち須恵器は断面を黒塗り、それ以外は白抜きで表した。その他の表現は図中に凡例を示している。
7. ピット計測表、遺物観察表は本文末に一括して記載した。
8. 土器の分類と編年上の位置づけ、遺構の時期決定にはおもに下記の文献を参照した。

< 弥生時代 >

清水真一1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年（山陽・山陰編）』木耳社

濱田竜彦2003「大山北麓地域における弥生時代後期土器の編年」『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会

< 古墳時代 >

大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11 島根考古学会

岡野雅則2004「古墳時代中期から後期の土器について」『茶畑遺跡群（第3分冊）』財団法人鳥取県教育文化財団

牧本哲雄1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜 園第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団

なお、縄文土器の分類・時期決定の参考にした文献は本文中に記載した。

目 次

序

序文

例言・凡例

目次

挿図目次

挿表目次

図版目次

第1章 発掘調査の経緯

- 第1節 調査に至る経緯……………(北)・ 1
- 第2節 調査体制…………… 2

第2章 位置と環境

- 第1節 地理的環境……………(日置)・ 4
- 第2節 歴史的環境……………(日置)・ 4

第3章 調査の概要

- 第1節 遺跡の概要……………(北)・ 7
- 第2節 調査の経過と方法……………(北)・ 8

第4章 第1調査地・第2調査地の調査

- 第1節 第1調査地……………(北)・ 8
- 第2節 第2調査地…………… 9
 - 1. 概要……………(北)・ 9
 - 2. 調査地内の堆積……………(北)・ 9
 - 3. 第1遺構面……………(北・日置)・ 9
 - 4. 第2遺構面……………(北)・ 11
 - 5. 第3遺構面……………(北)・ 13
 - 6. 第4遺構面……………(北)・ 13
 - 7. ⑤・⑥層出土遺物……………(北)・ 15

第5章 第3調査地の調査

- 第1節 調査の概要……………(北)・ 21
- 第2節 調査地内の堆積……………(北)・ 21
- 第3節 第1遺構面の調査…………… 28
 - 1. 概要……………(北)・ 28
 - 2. 中世の調査……………(三木)・ 28
 - 3. 古墳時代の調査……………(北・三木・日置)・ 34

4 . 第 1 遺構面遺構外出土遺物	(北)	79
第 4 節 第 2 遺構面の調査		82
1 . 概要	(北)	82
2 . 弥生時代の調査	(三木)	82
3 . 縄文時代の調査	(北・日置)	101
4 . 時期不明の遺構	(三木・日置)	110
第 5 節 遺物包含層の調査		115
1 . 概要	(北)	115
2 . 弥生土器	(日置)	118
3 . 縄文土器	(北)	126
4 . 石器	(北)	149

第 6 章 特論

第 1 節 竪穴住居 3 出土須恵器杯身赤色部の顔料分析	藤根 久(パレオ・ラボ)	180
第 2 節 名和飛田遺跡から出土した炭化材の樹種	パリノ・サーヴェイ株式会社	182
第 3 節 名和飛田遺跡竪穴 2 出土炭化材の放射性炭素年代測定		
	株式会社 加速器分析研究所	184
第 4 節 ガラス小玉の分析	藤根 久(パレオ・ラボ)	186
第 5 節 名和飛田遺跡出土土器の胎土分析	白石 純(岡山理科大学自然科学研究所)	189
第 6 節 石器石材原産地推定	藤根 久(パレオ・ラボ)	195
第 7 節 縄文時代早期末・前期初頭の土器と石器について	(北)	202
第 8 節 名和飛田遺跡出土の彩色記号をもつ須恵器について	(三木)	213
第 9 節 大型建物をもつ古墳時代後期の名和飛田遺跡	(日置)	219

第 7 章 まとめ

ピット計測表	230
遺物観察表	236

図版

特論図版

報告書抄録

挿図目次

図 1	名和飛田遺跡位置図……………	1	図 33	土坑 4(2)……………	39
図 2	周辺の遺跡……………	6	図 34	竪穴住居 2(1)……………	40
図 3	名和飛田遺跡地区配置図……………	7	図 35	竪穴住居 2(2)……………	42
図 4	第 1 調査地完掘平面図および 土層断面図……………	9	図 36	竪穴住居 2(3)……………	43
図 5	第 2 調査地内土層断面図……………	10	図 37	竪穴住居 3(1)……………	44
図 6	第 2 調査地 第 1 遺構面……………	10	図 38	竪穴住居 3(2) 上層出土遺物……………	46
図 7	土坑 1 ~ 3……………	11	図 39	竪穴住居 3(3) 中 ~ 下層出土遺物……………	47
図 8	第 2 調査地 第 2 遺構面……………	12	図 40	竪穴住居 3(4)……………	48
図 9	第 2 調査地 第 3 遺構面……………	12	図 41	竪穴住居 3(5) 床面直上出土遺物……………	49
図 10	第 2 調査地 第 4 遺構面……………	13	図 42	竪穴 1(1)……………	50
図 11	第 2 調査地 第 4 遺構面 遺構外出土遺物(④層出土)……………	14	図 43	竪穴 1(2)……………	51
図 12	第 2 調査地 ⑤・⑥層出土縄文土器(1) [早期 ~ 中期]……………	15	図 44	竪穴 2(1)……………	52
図 13	第 2 調査地 ⑤・⑥層出土縄文土器(2) [後期]……………	16	図 45	竪穴 2(2)……………	54
図 14	第 2 調査地 ⑤・⑥層出土縄文土器(3) [粗製土器・底部]……………	17	図 46	竪穴 2(3)……………	55
図 15	第 2 調査地 ⑤・⑥層出土石器(1)……………	19	図 47	竪穴 2(4)……………	56
図 16	第 2 調査地 ⑤・⑥層出土石器(2)……………	20	図 48	掘立柱建物 1(1)……………	58
図 17	第 3 調査地内土層断面模式図……………	21	図 49	掘立柱建物 1(2)……………	59
図 18	第 3 調査地内土層断面図(1)……………	22	図 50	掘立柱建物 2……………	60
図 19	第 3 調査地内土層断面図(2)……………	23	図 51	掘立柱建物 3……………	61
図 20	第 3 調査地内土層断面図(3)……………	24	図 52	掘立柱建物 4……………	63
図 21	第 3 調査地内土層断面図(4)……………	25	図 53	土坑 5……………	64
図 22	第 3 調査地内土層断面図(5)……………	26	図 54	土坑 6……………	65
図 23	第 3 調査地内土層断面図(6)……………	27	図 55	土坑 7……………	66
図 24	第 3 調査地第 1 遺構面 遺構配置図……………	29-30	図 56	土坑 8・9……………	67
図 25	第 3 調査地第 1 遺構面地形測量図……………	31	図 57	土坑 10 ~ 16……………	68
図 26	中世ピット(1) P16……………	32	図 58	土坑 17 ~ 19……………	69
図 27	中世ピット(2) P17 ~ P19……………	33	図 59	溝 1(1)……………	70
図 28	中世ピット(3) P20・P21……………	34	図 60	溝 1(2)……………	71
図 29	竪穴住居 1(1)……………	35	図 61	溝 1(3) 上層出土遺物……………	73
図 30	竪穴住居 1(2)……………	36	図 62	溝 1(4) 下層出土遺物……………	74
図 31	竪穴住居 1(3)……………	37	図 63	溝 1(5) 下層出土遺物……………	75
図 32	土坑 4(1)……………	38	図 64	溝 1(6) 下層出土遺物……………	76
			図 65	溝 1(7) 下層出土遺物……………	76
			図 66	第 1 遺構面ピット P24……………	77
			図 67	第 1 遺構面ピット出土遺物……………	77
			図 68	第 3 調査地遺構外出土遺物……………	78
			図 69-1	第 3 調査地第 1 遺構面 ピット配置図(1)……………	80

図 69-2	第3調査地第1遺構面 ピット配置図(2)・・・	81	図105	縄文土器グリッド別出土量模式図(1) [早期末～前期初頭土器]・・・	128
図 70	第3調査地第2遺構面 遺構配置図・・・	83-84	図106	縄文土器グリッド別出土量模式図(2) [後期有文土器]・・・	128
図 71	第3調査地調査後地形測量図・・・	85	図107	縄文土器グリッド別出土量模式図(3) [粗製土器]・・・	129
図 72	竪穴住居4(1)・・・	86	図108	包含層出土縄文土器(1) [早期～前期初頭]・・・	131
図 73	竪穴住居4(2)・・・	87	図109	包含層出土縄文土器(2) [早期末～前期初頭]・・・	132
図 74	竪穴住居5(1)・・・	90	図110	包含層出土縄文土器(3) [早期末～前期初頭]・・・	134
図 75	竪穴住居5(2)・・・	91	図111	包含層出土縄文土器(4) [早期末～前期初頭]・・・	135
図 76	竪穴住居6(1)・・・	92	図112	包含層出土縄文土器(5) [早期末～前期初頭]・・・	136
図 77	竪穴住居6(2)・・・	93	図113	包含層出土縄文土器(6) [早期末～前期初頭]・・・	138
図 78	竪穴3・・・	96	図114	包含層出土縄文土器(7) [早期末～前期初頭]・・・	139
図 79	竪穴4・・・	97	図115	包含層出土縄文土器(8) [早期末～前期初頭]・・・	140
図 80	竪穴5(1)・・・	98	図116	包含層出土縄文土器(9) [前期・中期]・・・	141
図 81	竪穴5(2)・・・	99	図117	包含層出土縄文土器(10) [後期初頭～前葉]・・・	141
図 82	土抗20・・・	100	図118	包含層出土縄文土器(11) [後期中葉]・・・	142
図 83	土抗21・・・	100	図119	包含層出土縄文土器(12) [後期中葉]・・・	143
図 84	土抗22(1)・・・	102	図120	包含層出土縄文土器(13) [後期後葉ほか]・・・	144
図 85	土抗22(2)・・・	103	図121	包含層出土縄文土器(14) [粗製土器]・・・	145
図 86	土抗23・・・	104	図122	包含層出土縄文土器(15) [粗製土器・底部]・・・	146
図 87	土抗24・・・	106	図123	包含層出土突帯文土器(1)・・・	147
図 88	土抗25・・・	107	図124	包含層出土突帯文土器(2)・・・	148
図 89	土抗26・・・	108	図125	石器グリッド別出土量模式図(1) [出土石器全点]・・・	152
図 90	土抗27～29・・・	109	図126	石器グリッド別出土量模式図(2) [黒曜石製石器]・・・	152
図 91	土抗30～36・・・	110			
図 92	土抗37～41・・・	112			
図 93	土抗42～47・・・	113			
図 94	溝2・・・	114			
図 95	第2遺構面ピット出土遺物・・・	115			
図 96-1	第3調査地第2遺構面 ピット配置図(1)・・・	116			
図 96-2	第3調査地第2遺構面 ピット配置図(2)・・・	117			
図 97	包含層出土弥生土器(1) [前期]・・・	118			
図 98	包含層出土弥生土器(2) [中期]・・・	119			
図 99	包含層出土弥生土器(3) [中期]・・・	121			
図100	包含層出土弥生土器(4) [中期]・・・	122			
図101	包含層出土弥生土器(5) [中期]・・・	123			
図102	包含層出土弥生土器(6) [後期]・・・	124			
図103	包含層出土弥生土器(7) [後期]・・・	125			
図104	包含層出土弥生土器(8) [蓋・底部]・・・	126			

図127	石器グリッド別出土量模式図(3) [安山岩製石器]…153	図150	包含層出土石器(23) 石錘}…177
図128	包含層出土石器(1) 石鏃}…154	図151	包含層出土石器(24) 石錘}…178
図129	包含層出土石器(2) 石鏃}…155	図152	包含層出土石器(25) [敲石・磨石・砥石]…179
図130	包含層出土石器(3) 石鏃}…156	図153	遺跡内での時期別による 胎土比較(K-Ca)…192
図131	包含層出土石器(4) 石鏃}…157	図154	遺跡内での時期別による 胎土比較(Rb-Sr)…192
図132	包含層出土石器(5) 石鏃}…158	図155	弥生中期の各遺跡における 胎土比較(K-Ca)…193
図133	包含層出土石器(6) 石鏃}…159	図156	弥生中期の各遺跡における 胎土比較(Rb-Sr)…193
図134	包含層出土石器(7) 石鏃未製品}…160	図157	古墳後期の器種・焼成別 胎土の比較(K-Ca)…194
図135	包含層出土石器(8) [スクレイパー]…162	図158	古墳後期の器種・焼成別 胎土の比較(Rb-Sr)…194
図136	包含層出土石器(9) [スクレイパー]…163	図159	黒曜石の産地判別図…200
図137	包含層出土石器(10) [スクレイパー]…164	図160	サヌカイト・ガラス質安山岩の 産地判別図…201
図138	包含層出土石器(11) 楔形石器}…165	図161	口縁・隆帯形態の分類…202
図139	包含層出土石器(12) 楔形石器}…166	図162	隆帯文土器の特徴の比較…206
図140	包含層出土石器(13) 楔形石器}…167	図163	石器製作工程模式図…208
図141	包含層出土石器(14) 楔形石器}…168	図164	石器製作の遺跡間格差…209
図142	包含層出土石器(15) [その他の器種]…169	図165	彩色記号土器出土遺跡分布図…214
図143	包含層出土石器(16) 石核}…170	図166	名和飛田遺跡出土彩色記号須恵器…216
図144	包含層出土石器(17) 石核}…171	図167	外周柱穴列を伴う大型建物の諸例…225
図145	包含層出土石器(18) 石核}…172	図168	線刻絵画…227
図146	包含層出土石器(19) プランク}…173	図169	鉄製品・製鉄関連遺物構成図…261
図147	包含層出土石器(20) 打製石斧}…174		
図148	包含層出土石器(21) 磨製石器}…175		
図149	包含層出土石器(22) 石錘}…176		

挿表目次

表1	周辺遺跡一覧表……………	6	表26	名和飛田遺跡周辺集落消長表……………	226
表2	新旧地区対照表……………	7	表27	鳥取県内出土絵画土器一覧……………	227
表3	第2調査地内新旧遺構対照表……………	9	表28	第1遺構面ピット計測表(1)……………	230
表4	土坑1～3計測表……………	11	表29	第1遺構面ピット計測表(2)……………	231
表5	第2調査地⑤・⑥層出土石器組成表…	20	表30	第1遺構面ピット計測表(3)……………	232
表6	第3調査地内第1遺構面 新旧遺構対照表…	28	表31	第2遺構面ピット計測表(1)……………	232
表7	土坑5～19計測表……………	65	表32	第2遺構面ピット計測表(2)……………	233
表8	第3調査地内第2遺構面 新旧遺構対照表…	82	表33	第2遺構面ピット計測表(3)……………	234
表9	土坑20～47計測表……………	101	表34	弥生土器・土師器・須恵器観察表(1)…	235
表10	縄文土器出土数組成表……………	127	表35	弥生土器・土師器・須恵器観察表(2)…	236
表11	石器石材別組成表……………	149	表36	弥生土器・土師器・須恵器観察表(3)…	237
表12	グリッド別石器組成表(1)……………	150	表37	弥生土器・土師器・須恵器観察表(4)…	238
表13	グリッド別石器組成表(2)……………	151	表38	弥生土器・土師器・須恵器観察表(5)…	239
表14	蛍光X線分析による ポイント分析結果…	181	表39	弥生土器・土師器・須恵器観察表(6)…	240
表15	成分分析を行ったガラス玉と その詳細…	186	表40	弥生土器・土師器・須恵器観察表(7)…	241
表16	蛍光X線によるガラス玉の 半定量分析結果…	188	表41	弥生土器・土師器・須恵器観察表(8)…	242
表17	名和飛田遺跡出土土器 分析値一覧表…	191	表42	弥生土器・土師器・須恵器観察表(9)…	243
表18	分析した黒曜石製・ ガラス質安山岩製石器…	195	表43	弥生土器・土師器・須恵器観察表(10)…	244
表19	黒曜石製・ガラス質安山岩製石器の 測定結果と原産地推定…	198	表44	弥生土器・土師器・須恵器観察表(11)…	245
表20	黒曜石原産地の判別群名称……………	199	表45	弥生土器・土師器・須恵器観察表(12)…	246
表21	名和飛田遺跡出土隆帯文土器の 属性構成…	204	表46	弥生土器・土師器・須恵器観察表(13)…	247
表22	第3調査地A・B・C区 出土石器組成表…	207	表47	縄文土器観察表(1)……………	248
表23	早期末～前期初頭遺跡の石器数と 製作形態…	208	表48	縄文土器観察表(2)……………	249
表24	彩色記号土器出土遺跡一覧……………	215	表49	縄文土器観察表(3)……………	250
表25	大型四面庇付掘立柱建物の諸例……………	221	表50	縄文土器観察表(4)……………	251
			表51	縄文土器観察表(5)……………	252
			表52	縄文土器観察表(6)……………	253
			表53	縄文土器観察表(7)……………	254
			表54	縄文土器観察表(8)……………	255
			表55	縄文土器観察表(9)……………	256
			表56	縄文土器観察表(10)……………	257
			表57	縄文土器観察表(11)……………	258
			表58	玉類観察表……………	258
			表59	石器観察表(1)……………	259
			表60	石器観察表(2)……………	260
			表61	鉄製品・製鉄関連遺物観察表……………	261

図版目次

カラー図版1	1 竪穴住居 2・3 完掘状況	カラー図版3	1 第3調査地 E 区完掘状況
	2 掘立柱建物 1 完掘状況		2 竪穴住居 6 完掘状況
カラー図版2	1 第3調査地第1遺構面出土土器		3 竪穴住居 5 遺物出土状況
	2 竪穴住居2・3出土彩色記号土器	カラー図版4	1 第3調査地第2遺構面出土土器
	3 竪穴 2 出土移動式竈・甕・甑		2 竪穴住居 6 出土玉類
			3 竪穴 5 出土絵画土器

図版 1	1 調査地遠景 1 調査前	2 竪穴住居 1 完掘状況	
	2 調査地遠景 2 2004年度調査後	3 竪穴住居 1 掘り方完掘状況	
図版 2	1 調査地近景 1 調査前	図版13	1 竪穴住居 2 土層断面・遺物出土状況
	2 調査地近景 2 2003年度調査後		2 竪穴住居 2 遺物出土状況 1
図版 3	1 調査地近景 3 2004年度調査後		3 竪穴住居 2 遺物出土状況 2
	2 調査地近景 4 2004年度調査後	図版14	1 竪穴住居 2 完掘状況
図版 4	1 第 1 調査地完掘状況		2 竪穴住居 2・3 完掘状況
	2 第 2 調査地第 1 遺構面完掘状況	図版15	1 竪穴住居 3 土層断面
	3 土坑 1 完掘状況		2 竪穴住居 3 遺物出土状況 1
図版 5	1 土坑 2 土層断面		3 竪穴住居 3 遺物出土状況 2
	2 土坑 3 土層断面	図版16	1 竪穴住居 3 165・159・162出土状況
	3 第 2 調査地第 2 遺構面完掘状況		2 竪穴住居 3 161ほか出土状況
	4 第 2 調査地第 3 遺構面完掘状況		3 竪穴住居 3 158・160出土状況
図版 6	1 第 2 調査地第 4 遺構面完掘状況		4 竪穴住居 3 155出土状況
	2 第 2 調査地完掘状況		5 竪穴住居 3 156・160出土状況
	3 第 2 調査地西壁土層断面		6 竪穴住居 3 P5焼土検出状況
図版 7	1 A 区北壁東半部 A - A'土層断面	図版17	1 竪穴住居 3 完掘状況
	2 A 区北壁西半部 A - A'土層断面		2 掘立柱建物 1 完掘状況 1
	3 B 区南北トレンチ D - D'土層断面	図版18	1 掘立柱建物 1 P1土層断面
図版 8	1 C 区南北トレンチ D - D'土層断面		2 掘立柱建物 1 P2土層断面
	2 E 区北壁 F - F'土層断面		3 掘立柱建物 1 P3土層断面
	3 E 区南北トレンチ G - G'土層断面		4 掘立柱建物 1 P9土層断面
図版 9	1 A 区第 1 遺構面完掘状況		5 掘立柱建物 1 P13土層断面
	2 E 区第 1 遺構面完掘状況		6 掘立柱建物 1 P14土層断面
図版10	1 E 区第 1 遺構面完掘状況		7 掘立柱建物 1 P15土層断面
	2 D 区第 1 遺構面完掘状況		8 掘立柱建物 1 P16土層断面
図版11	1 竪穴住居 1 遺物出土状況 1	図版19	1 掘立柱建物 1 完掘状況 2
	2 竪穴住居 1 遺物出土状況 2		2 掘立柱建物 2 完掘状況
	3 竪穴住居 1 91出土状況	図版20	1 掘立柱建物 4 P3土層断面
	4 竪穴住居 1 P5土層断面		2 掘立柱建物 4 P4土層断面
図版12	1 竪穴住居 1 土層断面		3 掘立柱建物 4 P5土層断面

- | | | |
|------|----------------------|-------------------------------|
| | 4 掘立柱建物 4 P11土層断面 | 2 溝 1 B - B'土層断面 |
| | 5 掘立柱建物 4 完掘状況 | 3 溝 1 C - C'土層断面 |
| 図版21 | 1 竪穴 1 土層断面 | 4 溝 1 完掘状況 2 [E 区] |
| | 2 竪穴 1 遺物出土状況 | 5 D 区第 2 遺構面完掘状況 |
| | 3 竪穴 1 174・176出土状況 | 図版29 |
| | 4 竪穴 1 171出土状況 | 1 C・D・E 区第 2 遺構面完掘状況 |
| 図版22 | 1 竪穴 1 169出土状況 | 2 E 区第 2 遺構面完掘状況 |
| | 2 竪穴 1 170出土状況 | 図版30 |
| | 3 竪穴 2 土層断面 1 | 1 E 区第 2 遺構面全景 1 |
| | 4 竪穴 2 土層断面 2 | 2 E 区第 2 遺構面全景 2 |
| 図版23 | 1 竪穴 2 遺物出土状況 1 | 図版31 |
| | 2 竪穴 2 遺物出土状況 2 | 1 A 区東半第 2 遺構面完掘状況 |
| | 3 竪穴 2 炭化材出土状況 1 | 2 A 区西半第 2 遺構面完掘状況 |
| | 4 竪穴 2 炭化材出土状況 2 | 図版32 |
| | 5 竪穴 2 P1遺物出土状況 | 1 B 区第 2 遺構面完掘状況 1 |
| 図版24 | 1 竪穴 2 完掘状況 | 2 B 区第 2 遺構面完掘状況 2 |
| | 2 土坑 4 炭化材出土状況 | 図版33 |
| | 3 土坑 4 遺物出土状況 | 1 C 区第 2 遺構面完掘状況 |
| | 4 土坑 5 土層断面 | 2 E 区第 2 遺構面完掘状況 |
| | 5 土坑 5 遺物出土状況 | 図版34 |
| 図版25 | 1 土坑 6 遺物出土状況 | 1 竪穴住居 4・5、竪穴 3・4・5
完掘状況 1 |
| | 2 土坑 7 遺物出土状況 | 2 竪穴住居 4・5、竪穴 3・4・5
完掘状況 2 |
| | 3 土坑 8 土層断面 | 図版35 |
| | 4 土坑 9 土層断面 | 1 竪穴住居 4 土層断面 |
| | 5 土坑10完掘状況 | 2 竪穴住居 4 遺物出土状況 |
| | 6 土坑11土層断面 | 3 竪穴住居 4 306・311・309出土状況 |
| | 7 土坑12土層断面 | 4 竪穴住居 4 S22出土状況 |
| | 8 土坑13土層断面 | 図版36 |
| 図版26 | 1 土坑14完掘状況 | 1 竪穴住居 4 完掘状況 |
| | 2 土坑15完掘状況 | 2 竪穴住居 5 土層断面 |
| | 3 土坑16完掘状況 | 3 竪穴住居 5 遺物出土状況 |
| | 4 土坑17完掘状況 | 図版37 |
| | 5 土坑18土層断面 | 1 竪穴住居 5 318出土状況 |
| | 6 土坑18完掘状況 | 2 竪穴住居 5
P2土層断面・遺物出土状況 |
| | 7 土坑19完掘状況 | 3 竪穴住居 5 完掘状況 |
| | 8 P16遺物出土状況 | 4 竪穴住居 6 土層断面 |
| 図版27 | 1 P18遺物出土状況 | 図版38 |
| | 2 P20遺物出土状況 | 1 竪穴住居 6 遺物出土状況 |
| | 3 P20被熱痕跡がある石出土状況 | 2 竪穴住居 6 320出土状況 |
| | 4 P21遺物出土状況 | 3 竪穴住居 6 P5土層断面 |
| | 5 溝 1 A - A'土層断面 | 4 竪穴住居 6 完掘状況 |
| 図版28 | 1 溝 1 完掘状況 1 [B 区] | 図版39 |
| | | 1 竪穴 3 土層断面 |
| | | 2 竪穴 3 遺物出土状況 |
| | | 3 竪穴 3 完掘状況 |
| | | 図版40 |
| | | 1 竪穴 4 土層断面 |
| | | 2 竪穴 4 325出土状況 |
| | | 3 竪穴 4 完掘状況 |
| | | 図版41 |
| | | 1 竪穴 5 土層断面 1 |
| | | 2 竪穴 5 土層断面 2 |

- 3 竪穴5遺物出土状況
- 図版42 1 竪穴5完掘状況
2 土坑22土層断面
3 土坑22遺物出土状況1
4 土坑22遺物出土状況2
- 図版43 1 土坑21土層断面1
2 土坑21土層断面2
3 土坑21完掘状況
- 図版44 1 土坑23遺物出土状況
2 土坑24土層断面・遺物出土状況
3 土坑24完掘状況
4 土坑25完掘状況
5 土坑26完掘状況
6 土坑27完掘状況
7 土坑28完掘状況
8 土坑29完掘状況
- 図版45 1 土坑30完掘状況
2 土坑31完掘状況
3 土坑32完掘状況
4 土坑33完掘状況
5 土坑34完掘状況
6 土坑35完掘状況
7 土坑36完掘状況
8 土坑37完掘状況
- 図版46 1 土坑38完掘状況
2 土坑39完掘状況
3 土坑40完掘状況
4 土坑43完掘状況
5 土坑44完掘状況
6 土坑45完掘状況
7 土坑46土層断面
8 溝2完掘状況
- 図版47 第2調査地第4遺構面
遺構外出土遺物(1)
- 図版48 第2調査地⑤・⑥層出土縄文土器(1)
- 図版49 第2調査地⑤・⑥層出土縄文土器(2)
- 図版50 1 第2調査地第4遺構面
遺構外出土遺物(2)
2 第3調査地中世ピット出土土師皿
3 竪穴住居1出土土器(1)
- 図版51 1 土坑4出土土器(1)
2 竪穴住居2出土土器(1)
- 図版52 1 土坑4出土土器(2)
2 竪穴住居2出土土器(2)
3 竪穴住居3出土土器
- 図版53 竪穴住居3上層出土土器
- 図版54 竪穴住居3下層・床面出土土器、
竪穴2出土土器
- 図版55 1 竪穴1出土土器
2 竪穴2出土土器
- 図版56 1 竪穴住居3・竪穴1出土
手づくね土器
2 竪穴2出土移動式竈
3 掘立柱建物1・3・4出土土器
- 図版57 土坑5出土土器
- 図版58 1 土坑7・8・9出土土器
2 土坑6出土土器
3 溝1上層出土土器
4 溝1下層出土土器
- 図版59 溝1出土土器(1)
- 図版60 溝1出土土器(2)
- 図版61 1 溝1出土土器(3)
2 第1遺構面ピット出土土器
3 第1遺構面遺構外出土土器(1)
4 第1遺構面遺構外出土土器(2)
- 図版62 竪穴住居4・5出土土器
- 図版63 1 竪穴住居4出土土器
2 竪穴住居5出土土器
3 竪穴3・4・5出土土器
- 図版64 1 竪穴5出土土器
2 竪穴4出土土器
3 土坑20出土土器
4 竪穴住居6・土坑21出土玉類
- 図版65 第3調査地包含層出土弥生土器(1)
- 図版66 第3調査地包含層出土弥生土器(2)
- 図版67 第3調査地包含層出土弥生土器(3)
- 図版68 1 第3調査地包含層出土弥生土器(4)
2 第3調査地包含層出土弥生土器(5)
- 図版69 1 土坑22出土土器(1)
2 土坑22出土土器(2)
3 土坑23出土土器
- 図版70 1 土坑24~28出土土器
2 第3調査地包含層出土縄文土器(1)
- 図版71 第3調査地包含層出土縄文土器(2)

図版72 第3調査地包含層出土縄文土器(3)
図版73 第3調査地包含層出土縄文土器(4)
図版74 第3調査地包含層出土縄文土器(5)
図版75 第3調査地包含層出土縄文土器(6)
図版76 第3調査地包含層出土縄文土器(7)
図版77 第3調査地包含層出土縄文土器(8)
図版78 第3調査地包含層出土縄文土器(9)

図版79 1 第3調査地包含層出土石器器種
2 第3調査地包含層出土石核類
3 第3調査地包含層出土
磨製石器・砥石
図版80 1 第3調査地出土鉄製品・
製鉄関連遺物
2 第3調査地出土鉄製品・
製鉄関連遺物X線写真

特論図版1 赤色顔料付着須恵器杯の
マイクロSCOPE写真
特論図版2 赤色顔料付着須恵器杯の
元素マッピング図
特論図版3 竪穴2出土炭化材顕微鏡写真
特論図版4 ガラス小玉(1~3)の
マイクロSCOPE写真(1)

特論図版5 ガラス小玉(4・5)の
マイクロSCOPE写真(2)
特論図版6 ガラス小玉(1~3)の
蛍光X線スペクトル図(1)
特論図版7 ガラス小玉(4・5)の
蛍光X線スペクトル図(2)

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、国土交通省が山陰自動車道建設の一環として進める一般国道9号(名和淀江道路)の改築工事を原因とし、西伯郡名和町大字名和字飛田の工事予定地に存在する埋蔵文化財包蔵地の記録保存を目的としたものである。建設予定地内は周知の遺跡として登録されていなかったが、分布調査により遺物の散布が認められたことから、遺跡の存在が予想された。そのため、国土交通省倉吉河川国道事務所長より埋蔵文化財の確認調査についての依頼を受けた名和町教育委員会が平成14年度に試掘調査を実施したところ、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が確認され、遺跡の存在が明らかになった。この結果を受け、関連諸機関と協議した鳥取県教育委員会事務局文化課は遺跡の現状保存は困難と判断し、記録保存のための事前発掘調査を行うことになった。これを受けて国土交通省倉吉河川国道事務所長は文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出した。その上で、記録保存のための事前発掘調査の指示を受けた国土交通省倉吉河川国道事務所は、発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。そこで、財団法人鳥取県教育文化財団理事長から鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法57条に基づく発掘届を提出し、埋蔵文化財センター名和調査事務所が調査を実施した。(北)

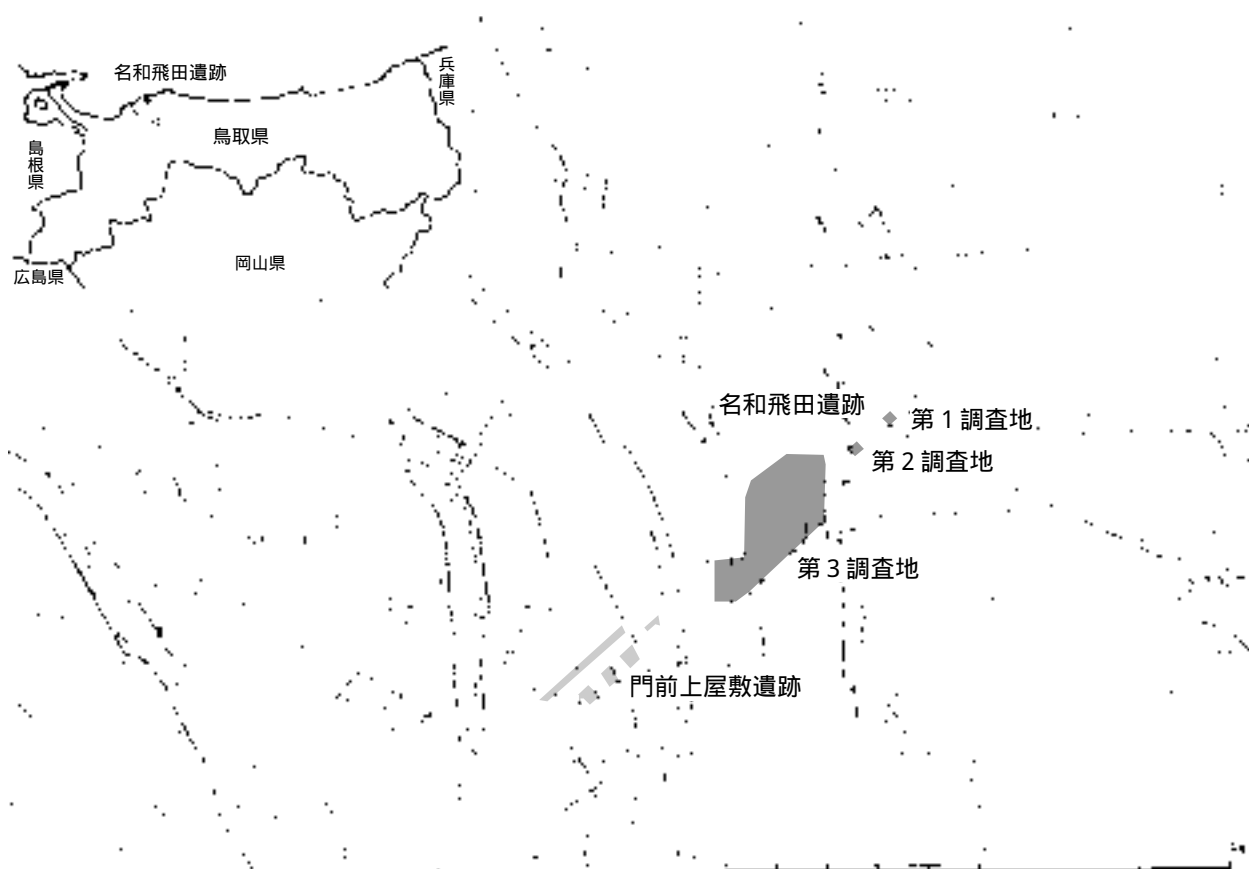


図1 名和飛田遺跡位置図

第2節 調査体制

調査は、以下の体制で実施した。

平成15年度

調査主体	財団法人鳥取県教育文化財団
理事長	有田 博充
常務理事	川口 一彦（兼・鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長	下田 弘人
	埋蔵文化財センター
所長	田中 弘道（兼・鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次長	竹内 茂
次長	加藤 隆昭
調査課長（兼）	加藤 隆昭
企画調整班長	山柘 雅美
文化財主事	下江 健太
庶務課長（兼）	竹内 茂
主任事務職員	矢部 美恵
事務職員	田中 陽子 大川 秋子 植田 恵子（9月退職） 谷垣真寿美 小谷 有里
事務補助員	山根 美代（11月採用）
調査担当	名和調査事務所
所長	國田 俊雄
班長	西川 徹（押平尾無遺跡担当）
文化財主事	浜田 真人（押平尾無遺跡担当） 中森 祥、木山 清貴（茶畑六反田遺跡担当） 森本 倫弘（名和小谷遺跡担当） 岡野 雅則（古御堂笹尾山遺跡・古御堂新林遺跡担当） 北 浩明（名和飛田遺跡担当）
調査員	湯川 善一（押平尾無遺跡担当） 三木 雅子（名和小谷遺跡担当） 日置 智、小林 桃子（名和飛田遺跡担当）
調査補助員	遠藤万須美、中橋 智明、秦 美香、山本 宗昭
事務補助員	金田かおる
調査指導	鳥取県教育委員会事務局文化課
調査協力	名和町教育委員会

平成16年度

調査主体	財団法人鳥取県教育文化財団			
	理事長	有田	博充	
	事務局長	中村	登	
	埋蔵文化財センター			
	所長	田中	弘道（兼・県埋蔵文化財センター所長）	
	次長（事務）	竹内	茂	
	次長（専門）	加藤	隆昭	
	調査課			
	課長（兼次長）	加藤	隆昭	
	企画調整班長	山根	雅美	
	文化財主事	大野	哲二	下江 健太
	庶務課			
	課長（兼次長）	竹内	茂	
	主幹	福田	高之	
	事務職員	大川	秋子	谷垣真寿美 山根 美代 小谷 有里

調査担当	名和調査事務所			
	所長	國田	俊雄	
	班長	西川	徹	
	文化財主事	中森	祥、浜田 真人（門前第2遺跡担当）	
		森本	倫弘（門前上屋敷遺跡担当）	
		加藤	祐一、木山清貴（名和中畝遺跡担当）	
		北	浩明（名和飛田遺跡担当）	
	調査員	湯川	善一（門前第2遺跡担当）	
		日置	智（名和中畝遺跡担当）	
		三木	雅子（名和飛田遺跡担当）	
	調査補助員	遠藤	万須美、中橋 智明、秦 美香、山本 宗昭	
	事務補助員	金田	かおる	

調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

調査協力 名和町教育委員会

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

名和町は鳥取県の西部に位置し、東は中山町、南西は大山町と接する。北は日本海に面し、北北西約70kmに隠岐島を望む大山の裾野地帯にある。名和町域の地形は弥山などから噴出した名和火砕流、弥山火砕流などを基盤とする。西部は阿弥陀川によって形成された阿弥陀川扇状地が広がる。東部は火山台地が発達し、真子川や名和川などの河川と無数に派生する谷によって台地・丘陵・段丘が開削されている。飛田周辺は、このような谷間を南西から流下してくる名和川に、東から流下してくる東谷川が合流する場所にあたる。2つの川に形成された低位段丘上に名和飛田遺跡は立地する。調査地では、これまで度々、土石流や洪水があった氾濫原であったことが確認された。なお現況では調査地西側の名和川側は顕著な段丘崖となっている。(日置)

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代～縄文時代

<旧石器時代> 門前第2遺跡西畝地区では始良丹沢火山灰層下のローム層から、黒曜石製のナイフ形石器を主体とする石器群が良好な状態で出土している。ほかに名和小谷遺跡で黒曜石製国府型ナイフ形石器、押平尾無遺跡^{おしならおなし}で黒曜石製角錐状石器が出土している。

<縄文時代> 草創期は有茎尖頭器が下大山第6遺跡・陣構第3遺跡で単独出土している。名和川西側の丘陵上に所在する門前第2遺跡菖蒲田地区では早期の集石群と押型文土器が確認されている。早期の遺物はほかに古御堂金蔵ヶ平遺跡^{こみどうかなくらがなる}、上大山第1遺跡、角塚遺跡^{すみづか}、高田第4遺跡、茶畑山道遺跡などでみつがっている。前期には目立った遺跡は少ないが、名和乙ヶ谷遺跡^{おとがたに}で玦状耳飾^{けつじょう}などが出土している。名和衣装谷遺跡、名和中畝遺跡などでは中期の遺構と遺物が確認されている。後期のものには古御堂遺跡、南川遺跡があり、後者では石組炉を備えた後期初頭の住居跡がみつがっている。晩期には、大塚第3遺跡で住居跡が検出されているほか、高田第10遺跡、文殊領屋敷遺跡^{もずらやしき}などで遺物が出土している。

2 弥生時代

<前期> 目立った前期の遺跡は少ないが、大塚岩田遺跡で環濠の可能性のある溝が検出されている。

<中期> 当期の集落は茶畑地域を中心とする丘陵側に多い。茶畑山道遺跡・茶畑六反田遺跡や茶畑第1遺跡で、独立棟持ち柱を備える大型掘立柱建物を含む集落跡が確認され、当地の拠点であったと共に居住域の変遷を辿れる。また、押平弘法堂遺跡では土墳墓群が確認されている。名和川流域では、本遺跡の対岸の段丘上に所在する門前上屋敷遺跡で竪穴住居などが検出されている。

<後期> 名和町内には大塚塚根遺跡、押平尾無遺跡、茶畑第2遺跡、茶畑六反田遺跡、茶畑山道遺跡、東高田遺跡などがある。大山町から淀江町にまたがる妻木晩田遺跡では、多数の竪穴住居と掘立柱建物、四隅突出型墳丘墓を含む環濠集落跡が良好に遺存していた。茶畑山道遺跡、茶畑第1遺跡では、大型の竪穴住居や掘立柱建物が終末期から古墳時代前期にかけて営まれた。

3 古墳時代

前期には茶畑第1遺跡で小規模な古墳が検出されているのみで目立たない。中期古墳には、すで

に消滅したハンボ塚古墳がある。径33mの円墳で円筒埴輪や形象埴輪が出土している。中山町高塚古墳と同時期で類似する。後期には横穴を含むいわゆる群集墳が造営される。茶畑古墳群、高田古墳群、門前古墳群、富長山村古墳群、坪田古墳群、豊成古墳群^{とよしげ}などがある。集落は弥生時代終末から前期まで継続する茶畑第1遺跡、中期～後期の押平尾無遺跡、古御堂笹尾山遺跡、大塚塚根遺跡などがある。いずれも多数の竪穴住居で構成される集落跡である。

4 奈良～平安時代

<奈良時代> 律令制の施行に伴って西伯耆でも古代寺院や官衙、山陰道、条里制の施行等が各地で整備されていく。高田原廃寺では、乱石積基壇や溝状遺構が検出され、淀江町上淀廃寺跡と同型式の単弁十二葉蓮華文軒丸瓦が出土している。平安時代に編纂された『延喜式』には、名和町域が含まれる旧汗入郡には和奈駅（奈和の誤記か）が置かれていたとある。しかし、その駅の位置や山陰道のルートなど詳細は不明である。阿弥陀川の河口近くの大塚屋敷遺跡では倉庫群と推測される掘立柱建物群がみついている。栃原窯跡は炭窯と考えられ、上寺谷遺跡の製鉄炉やその周辺での鉄滓表採事例などから、鉄生産の拠点が当地にあったと推測されている。

<平安時代> 長者原遺跡、名和衣装谷遺跡、名和乙ヶ谷遺跡などがある。長者原遺跡では礎石建物やこれに伴う区画溝、大量の炭化米が出土しており、正倉と推定されている。名和衣装谷遺跡では大型掘立柱建物跡が2棟検出され、鉄滓・緑釉陶器・灰釉陶器も出土した。郡司層の居宅もしくは郡衙下部の鉄生産に関わる遺構と想定されている。茶畑六反田遺跡で条里区画の一部とみられる溝が検出されている。主軸はほぼ南北方向をとるもので、緑釉陶器や墨書土器が出土した。

5 鎌倉～室町時代

中世の遺跡には、茶畑六反田遺跡、文殊領屋敷遺跡、押平弘法堂遺跡などがある。いずれの遺跡でも鎌倉時代後半に居住域から生産域へと変遷している。門前上屋敷遺跡では、屋敷地を区画すると思われる大溝が検出された。『太平記』で知られる名和長年ゆかりのものと伝承される旧跡が多数存在するが、考古学資料からそれを裏付けるものはない。富長城跡や長野城跡などの城跡も残る。門前礎石群は礎石建物跡と推定され、白磁・青磁・染付などの出土から中世以降の寺院跡と推測されている。

6 近世以降

寛永9(1632)年に池田光仲が鳥取藩主となり、幕末まで池田氏の藩政となる。御来屋は伯耆街道の宿駅、藩の運上米の積出港として重要な位置を占めた。明治35(1902)年、山陰鉄道が境～御来屋間を結ぶ。当時設置の塚根川橋梁は現役で運用されるほか、旧阿弥陀川橋梁跡や陸軍軍馬補充部大山支部跡などの近代遺跡も少なからず残っている。 (日置)

【参考文献】

名和町誌編纂委員会編1978年『名和町誌』 名和町誌編纂委員会

辻信広2003年『鳥取県西伯郡名和町 押平弘法堂遺跡 押平天王屋敷遺跡 茶畑山道遺跡』 名和町教育委員会

鳥取県埋蔵文化財センター編1986年『鳥取県の古墳』 鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県埋蔵文化財センター編1988年『旧石器・縄文時代の鳥取県』 鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県埋蔵文化財センター編1989年『歴史時代の鳥取県』 鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

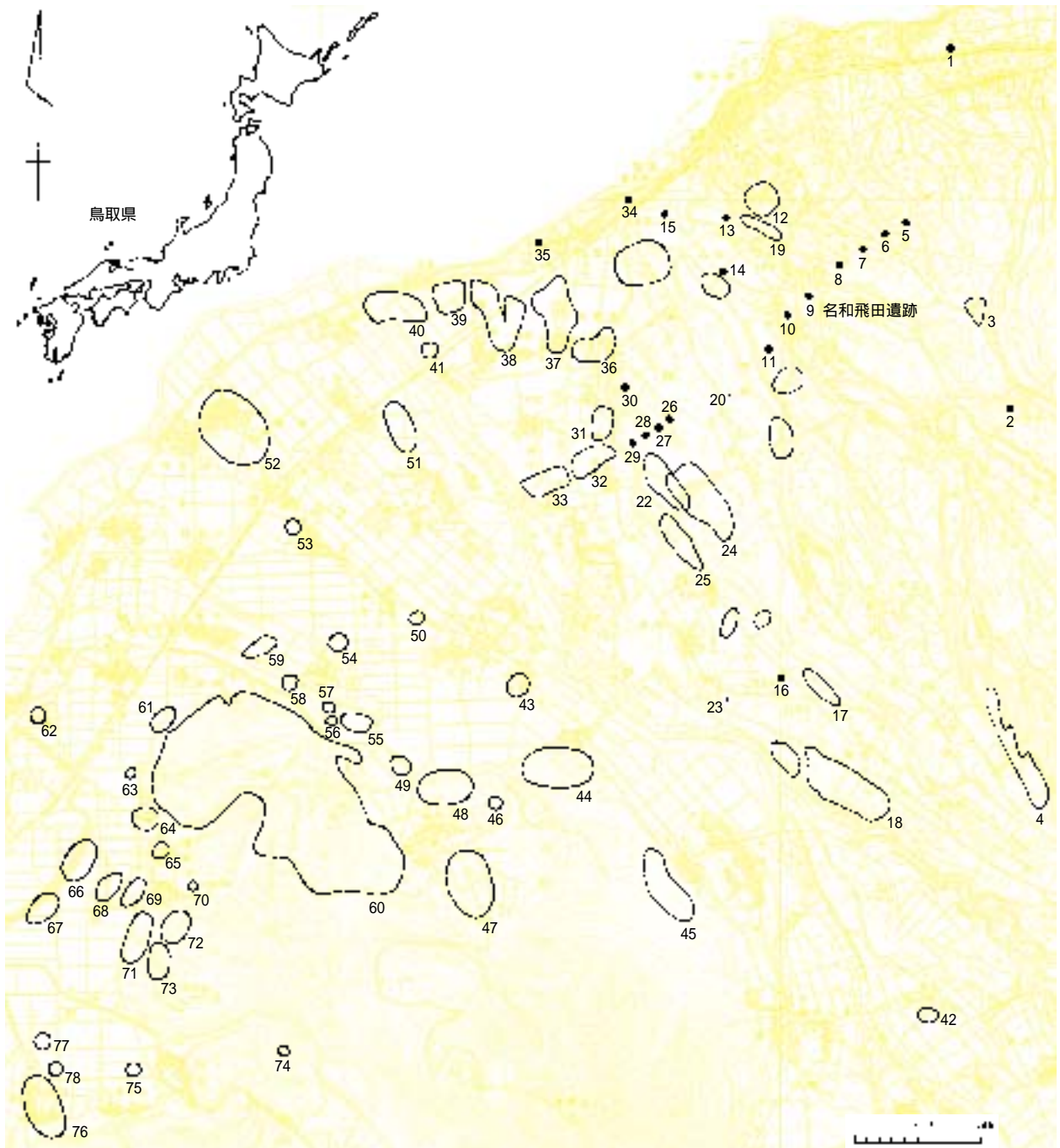


図2 周辺の遺跡

表1 周辺遺跡一覧表

遺跡名	遺跡名	遺跡名	遺跡名	遺跡名
1 龍光寺堀遺跡	17 高田第4遺跡	33 押平弘法堂遺跡	49 客尾山古墳群	65 下埜遺跡・宮廻遺跡
2 栃原窯跡	18 高田第10遺跡	34 荒田遺跡	50 清原遺跡	66 福岡遺跡
3 角塚遺跡	19 坪田古墳群	35 富長城跡	51 上野遺跡群	67 井手跨遺跡
4 上大山第1遺跡	20 門前古墳群	36 文殊領屋敷遺跡	52 国信遺跡	68 瓶山古墳群
5 名和中畝遺跡	21 富長山村古墳群	37 古御堂遺跡	53 唐王遺跡	69 向山古墳群
6 名和小谷遺跡	22 茶畑古墳群	38 大塚塚根遺跡	54 新田原遺跡	70 上淀廃寺
7 名和衣装谷遺跡	23 高田古墳群	39 大塚岩田遺跡	55 塚田遺跡	71 彼岸田遺跡
8 名和乙ヶ谷遺跡	24 茶畑第2遺跡	40 大塚第3遺跡	56 荘田古墳群	72 小枝山古墳群
9 名和飛田遺跡	25 東高田遺跡	41 大塚屋敷遺跡	57 原畑遺跡	73 城山古墳群
10 門前上屋敷遺跡	26 古御堂金蔵ヶ平遺跡	42 蔵岡第1遺跡	58 大道原遺跡	74 四十九谷横穴墓群
11 門前第2遺跡	27 古御堂笹尾山遺跡	43 中高遺跡	59 妻木法大神遺跡	75 稲吉角田遺跡
12 長者原遺跡	28 押平尾無遺跡	44 平古墳群	60 妻木晩田遺跡	76 中西尾古墳群
13 八ノボ塚古墳	29 茶畑第1遺跡	45 宮内古墳群	61 富岡播磨洞遺跡	77 鮎ヶ口遺跡
14 門前礎石群	30 原3号墳	46 徳榮方墳	62 今津岸ノ上遺跡	78 河原田遺跡
15 南川遺跡	31 茶畑山道遺跡	47 源平山古墳群	63 安原溝尻遺跡	
16 高田原廃寺	32 茶畑六反田遺跡	48 長田古墳群	64 晩田遺跡	

第3章 調査の概要

第1節 遺跡の概要

本遺跡は名和川東岸の低位段丘上に立地する。遺跡の北側には東谷川が西に流れ、遺跡の北西で名和川と合流する。河川べりに形成された遺跡のため、遺跡内の土壌の堆積は河川の沖積作用によるものが中心となる。また、河川の合流点に立地することから、調査地内には複雑な堆積を見せる部分がある。標高は名和川に近い西側ほど低く調査前で29m前後、南東から迫る丘陵に近い調査地東部が調査前で31m前後を測る。

調査地は橋脚建設予定地部分2箇所（第1・2調査地）と、県道をはさんで西側の盛土工事部分（第3調査地）に分かれている。第1調査地は遺跡の北東部分にあたる。調査では遺構や遺物包含層は確認できず、厚い客土の下に東谷川の河川堆積による砂礫層を確認して調査を終了した。第2調査地は地形の改変が調査地内では最も少なく、遺存状態はよかった。4面の遺構面を確認し、土坑やピットを検出した。厚く堆積した遺物包含層からは古墳時代中期～後期の遺物や縄文時代の遺物が多量に出土している。第3調査地は本調査の中心部分で、平面積で8,000㎡あまりを調査した。

表2 新旧地区対照表

報告時地区名	調査時地区名	報告時地区名	調査時地区名	報告時地区名	調査時地区名
第1調査地	1区	第3調査地A区	4区	第3調査地C区	7区・8区
第2調査地	2区	第3調査地B区	3区	第3調査地D区	5区
				第3調査地E区	6区

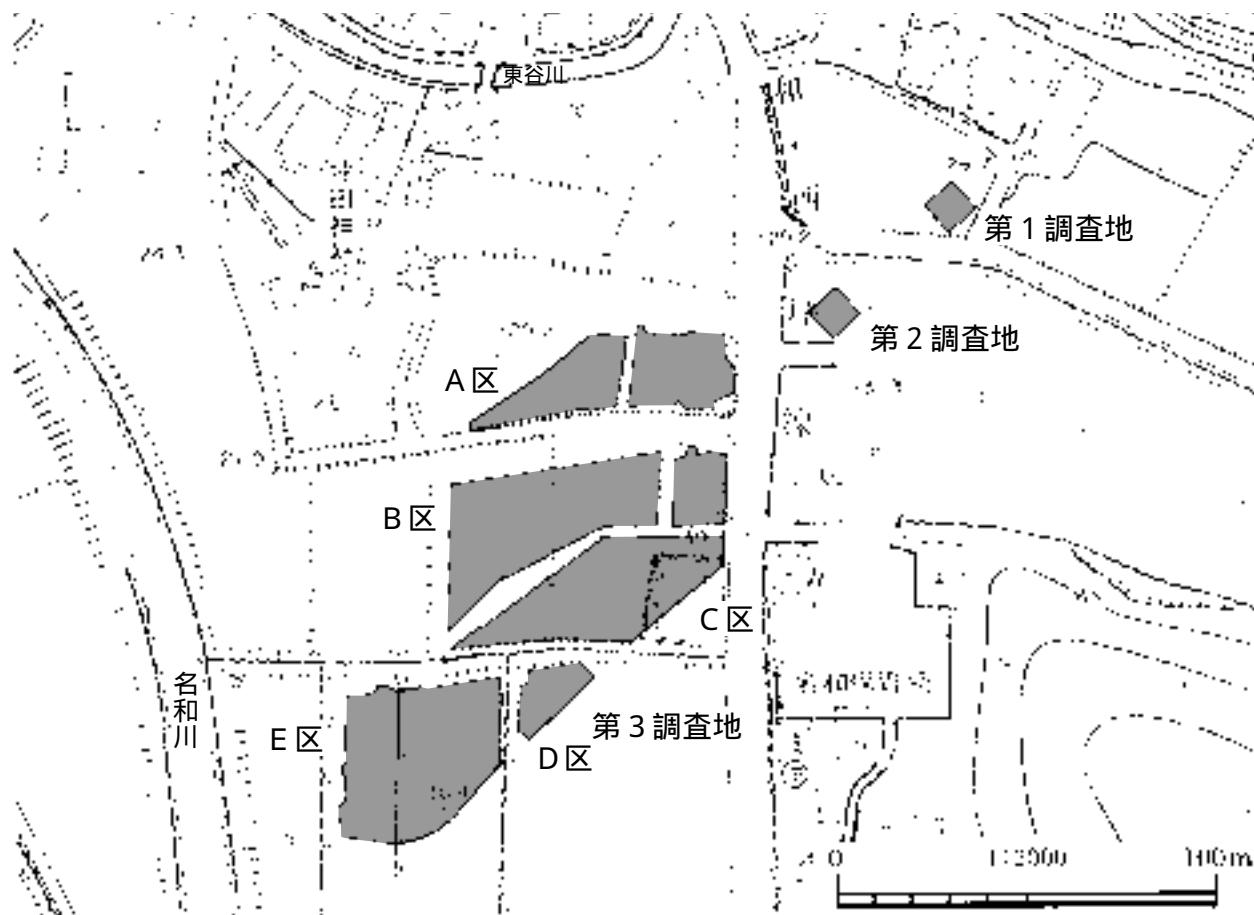


図3 名和飛田遺跡地区配置図

第3章 調査の概要

この部分では圃場整備が行われており、全面に渡って地形が改変されていた。遺存状態の悪い部分も多かったが、中世のピット、古墳時代中期末～後期末の竪穴住居や掘立柱建物などを中心とする第1遺構面と、弥生中期～後期の竪穴住居や竪穴、縄文時代の土坑を中心とする第2遺構面の、二つの遺構面を確認した。調査面積は全調査区的全遺構面を合計して16,631m²、出土遺物量はコンテナにして約90箱分である。 (北)

第2節 調査の経過と方法

水田として利用されていた第3調査地内は農道や水路が通り、田圃の畦区割りによって分割されていたため、これを調査時に6つの地区に分け、着手順に3～8区と呼称して調査した。本書ではこれらをA～E区と振り替えて報告する(表2参照)。2003年度は第1調査地と第2調査地、第3調査地の北半部分(A・B区)と南半部分の一部(D区の一部)、2004年度は第3調査地南半部(C・D・E区)を調査した。第3調査地では公共座標第1系にしたがった10m四方のグリッド(方眼)を設定し、方眼軸名は南北軸を北からアルファベットで、東西軸を東から数字で示した。各グリッドの名称は北東隅の交点のアルファベットと数字を組み合わせで表すこととした。第1調査地、第2調査地は10m平方の小さな調査地であったためグリッドは設定していない。調査はまず表土剥ぎを重機で行い、トレンチを掘削して土層の堆積と遺構検出の可能な面を確認した。その後遺構面の検出、遺構の掘り下げ、完掘、記録作業を行った。検出した遺構の測量作業はグリッド交点に打設した方眼杭を基準に主にトータルステーションを利用して行った。出土遺物は遺構内出土のものや包含層中の残存状態のよい個体に関してはトータルステーションなどで出土状況・出土位置を図化して取り上げた。包含層中のその他の遺物はグリッドおよび土層単位で一括して取り上げている。現場での写真撮影には6×7版および35mmのカラーポジ、モノクロネガフィルムをそれぞれ使用した。2003年度は5月2日に現場調査を着手し10月14日に現場作業を終了し室内整理作業に入った。2004年度は4月17日に調査を開始し、11月19日に現地での作業をすべて終了し、整理作業、報告書作成作業に入った。なお、遺構の掘り下げがほぼ終了した10月2日には名和中畝遺跡と合同で現地説明会を開催し、あいにくの雨天にもかかわらず県内外から約30名の参加者を得た。(北)

第4章 第1調査地・第2調査地の調査

第1節 第1調査地(図4、図版4)

第1調査地は橋脚建設予定地部分の東側の調査地で、遺跡の北東部分に位置する。調査範囲内では最も東谷川に近い位置になる。調査地は10m四方の方形に設定した。造成土下で、砂や砂利と径5～15cmの礫で構成された河川堆積によると考えられる層を確認した。全面でこの層を検出した後、部分的にこの砂礫層に深掘りを行ったが、遺物等を確認できなかったため調査を終了した。この砂礫層は東谷川の河川堆積で形成されたと見られ、第2調査地の⑥層に対応する可能性が高い。ただし、第2調査区⑥層には多量の縄文土器などが含まれていたが、第1調査地内では確認できていない。遺物の平面的な分布が異なっていたものと考えているが、同じ砂礫層でも堆積過程や堆積時期が違う可能性もある。造成土中から土師質の土器や須恵器、陶磁器などの小片が少量出土している。(北)

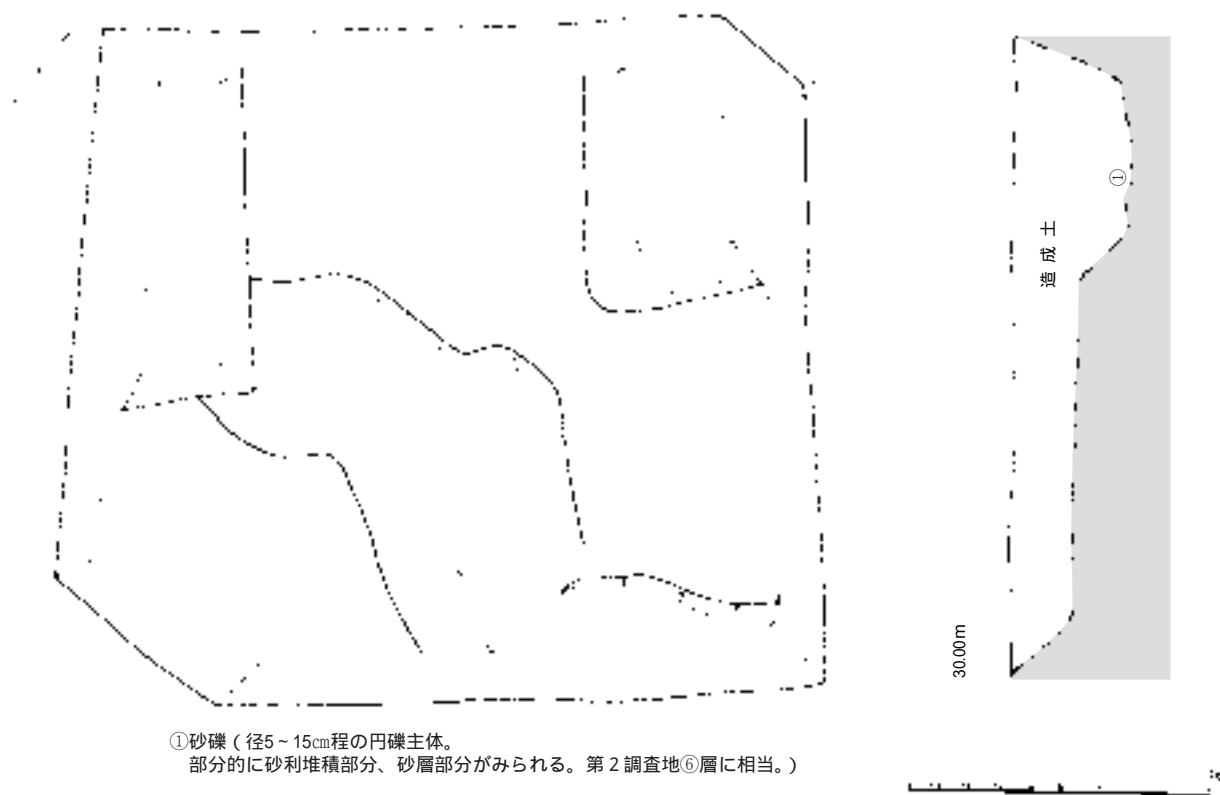


図4 第1調査地完掘平面図および土層断面図

第2節 第2調査地

1. 概要

第2調査地周辺は現況で周辺よりも1mほど段状に高くなっている。北側と西側は道路で大きく削り取られている。東側と南側では地形の改変はさほど大きくないようで、南には南東方向から延びてくる丘陵が迫り、東には東谷川によって形成された細い谷が続いている。

調査は、調査地が10m平方と狭く、また砂を中心とした脆弱な地盤であったため安全を考慮し、掘削深度にしたがって階段状に控えをとって調査する面積を狭くしていくこととした。掘り下げが表土下約3mに達した段階で、掘削深度に対して安全な面積を確保することが出来なくなったため、縄文時代の遺物を含む⑥層掘削の途中で調査を終了せざるを得なくなった。遺構面を4面確認したほか、④層で古墳時代中期～後期の遺物包含層、⑤・⑥層で縄文時代の遺物包含層を確認した。（北）

2. 調査地内の堆積（図5、図版6）

表土下に鉄分の沈着層がみられ、この下に灰色系の粘質土が2層、さらにその下位に黒褐色の粘質土が1層みられる。この上層部分の堆積は土壌化の著しい粘質土の水平堆積である。④層以下は河川堆積と見られ、砂質の強い土層や砂礫層を中心とする。④層は黒褐色のやや砂質の強い土層、⑤層は砂質土層で調査地の西端に堆積する。⑥層は砂、砂利、径5cm～15cmほどの円礫で構成される層で部分的にラミナ状の堆積が確認できる。第1遺構面を②層上面で、第2遺構面を③層上面で、第3遺構面を④層上面で、第4遺構面を⑤・⑥層上面でそれぞれ検出した。（北）

3. 第1遺構面（図6、図版4・5）

①層下、②層上面で検出した。遺構は土坑3基とピット

表3 第2調査地内新旧遺構対照表

報告時遺構名	報告時遺構名
土坑1	S K 1
土坑2	S K 2
土坑3	S K 3

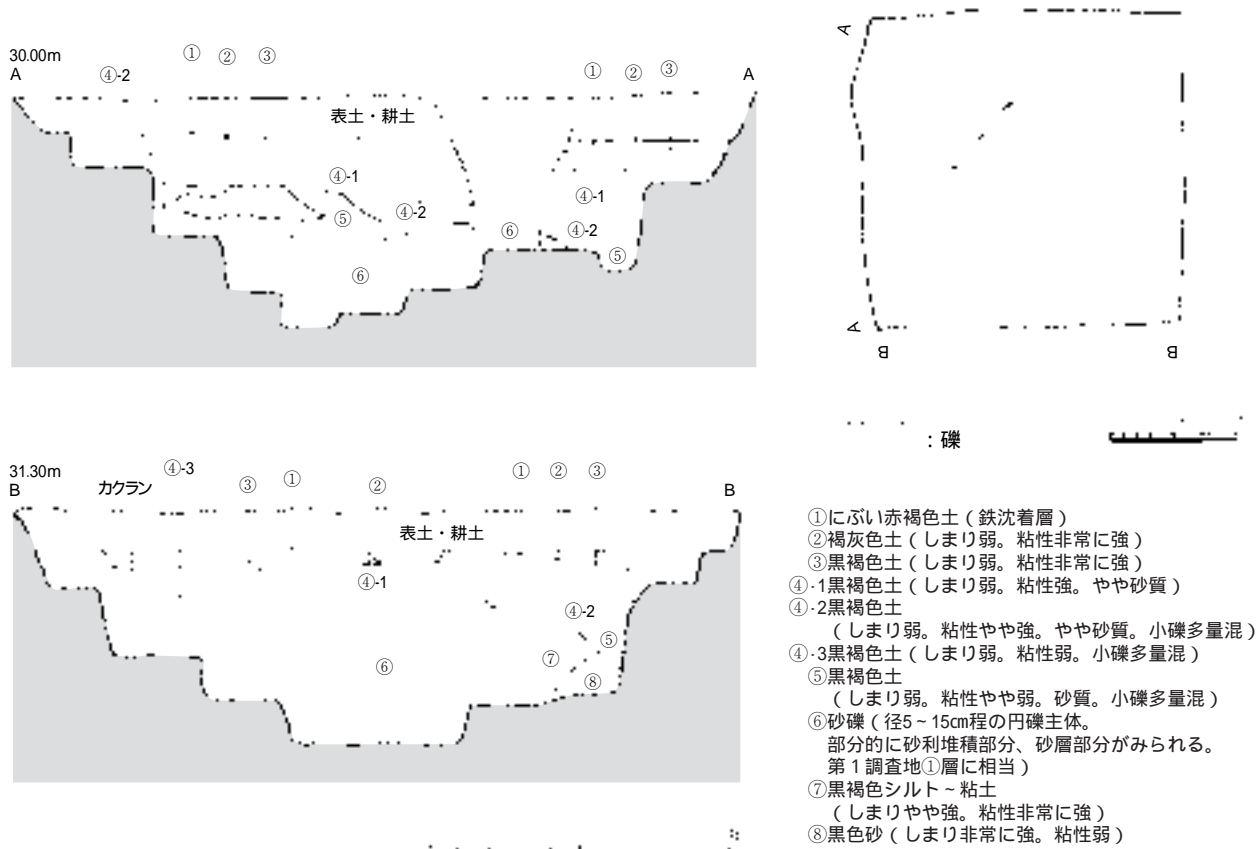


図5 第2調査地内土層断面図

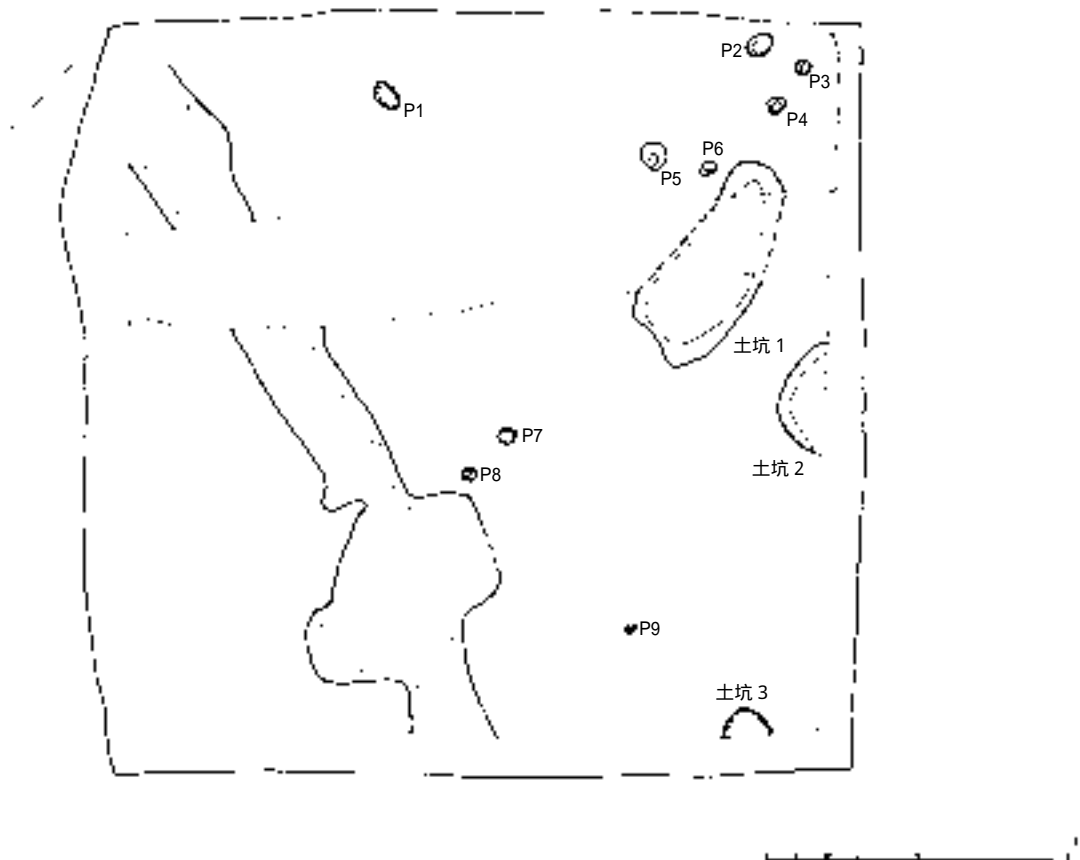


図6 第2調査地 第1遺構面

表4 土坑1～3計測表

土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)
土坑1	298×120	41
土坑2	147×(53)	49
土坑3	56×(24)	17

9基である。遺構はいずれも暗灰褐色の粘質土に覆われている。上面を覆う①層からは古墳時代の土師器や縄文土器の小片などの遊離資料しか出土していない。②層中には12～13世紀ごろのものと思われる高台をもつ土師器の杯の小片などがわずかに含まれており、これが②層包含の最新遺物である。したがって、第1遺構面は中世以降の所産ということになるだろう。(北)

土坑1 (図7、図版4・5、表4)

土坑の大部分が名和町教育委員会試掘調査時のトレンチと重複する。平面形が不整な長楕円形、断面は逆台形を呈する。基盤層と同様に土坑の埋土も土壌化が著しい。古墳時代に帰属すると思われる土師器や須恵器の小片、細片がいくらか含まれていたが、④層中に包含されていた遺物を土坑掘削時に巻き上げたものと思われる、この土坑の時期のものではない。町教育委員会試掘調査時には本土坑から「開元通宝(?)」として報告されている貨幣が出土している(辻2004 p.32)ので、中・近世の遺構である可能性が高い。(北・日置)

土坑2 (図7、図版5、表4)

土坑1の東側に並ぶが、土坑の大部分が調査地外にあり、土坑の規模、形状は不明である。埋土は小礫を含み、基盤層と同様に土壌化が著しい。遺物は出土せず、土坑の機能や時期は不明である。

土坑3 (図7、図版5、表4)

土坑の大部分は調査地外にのびており、土坑の規模、形状ともに不明である。底面よりやや浮いて垂角礫が出土したが、土坑の機能や時期は不明である。(日置)

4. 第2遺構面 (図8、図版5)

②層下、③層上面で検出した。遺構はピットを3基確認したのみである。ピットはいずれも②層

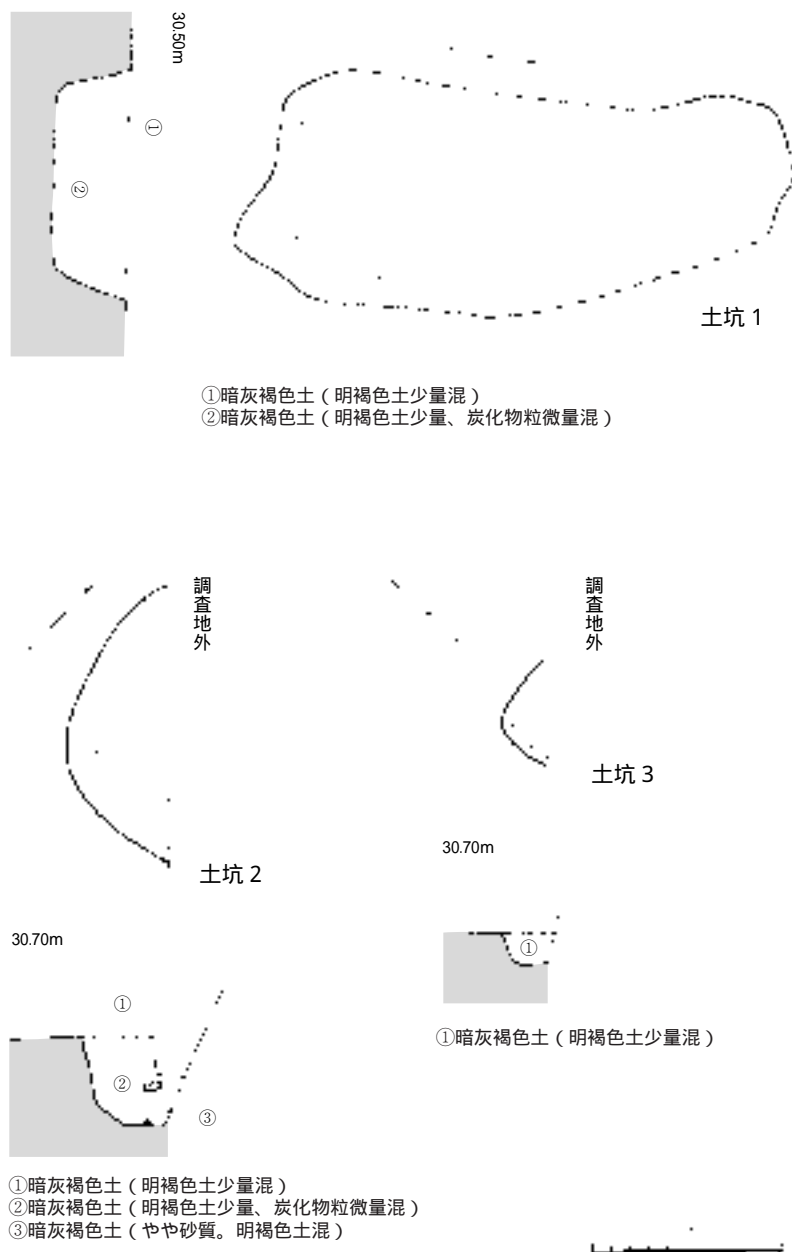


図7 土坑1～3

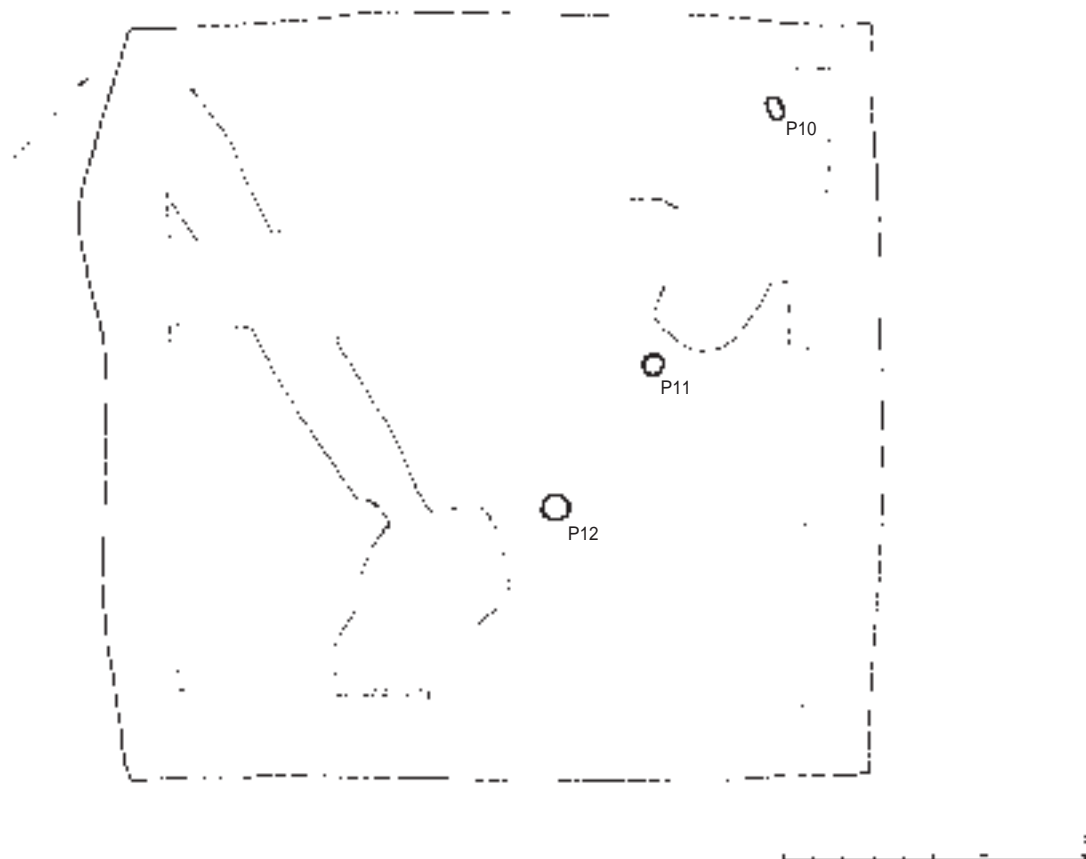


図8 第2調査地 第2遺構面

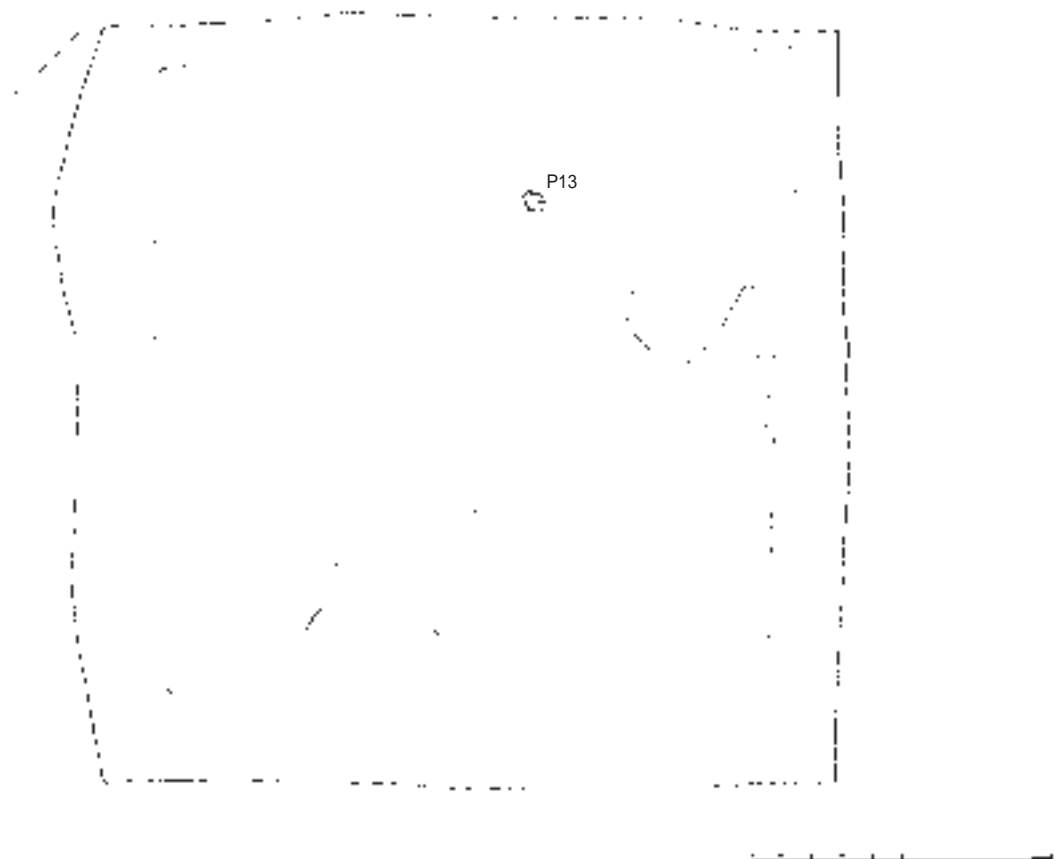


図9 第2調査地 第3遺構面

起源と考えられる褐灰色土を埋土としている。この遺構面の時期は、②層の遺物から12～13世紀以前のものと言える。③層には④層からの遊離資料と思われる古墳時代の土師器、須恵器の小片、細片がいくらか見られたのみで、遺構面の時期の上限を決める遺物は出土していない。 (北)

5. 第3遺構面 (図9、図版5)

③層下、④層上面で検出した。遺構はピット1基のみ。遺構面の時期は④層包含の最新遺物が古墳時代後期であることから、これ以降のものと考えられる。③層には先述のようにプライマリーな状態の包含遺物がないため、時期の下限は不明である。 (北)

6. 第4遺構面 (図10、図版6)

④層下、⑤層または⑥層上面で検出した。ピット2基と調査区西端部で段状の落ち込みを確認した。この落ち込みは西側が調査範囲外に続いており、形状や規模は判然としないが、南端部で立ち上がりが確認できるので、溝状遺構をなす可能性が高い。溝状遺構とした場合、南東から北西に向けて伸びるものと想定できる。これが人工的なものか、自然のものか、判定する情報に乏しいが、いずれにしても地形の高低軸に沿った方向に走っているようである。これらの遺構は④層とほぼ同質の黒褐色土を埋土としている。

遺構面の時期は、基盤層である⑥層は縄文後期中葉の土器を最新遺物として包含しているので、これが上限となる。また、この面を覆う④層中から、古墳時代中期末から後期にかけての遺物が多く出土している。時期的にまとまった遺物が多数出土している点や、これらの遺物の遺存状態が良好である点から、④層の遺物が第4遺構面に伴う可能性が高いと思われる。したがって、第4遺構面は古墳時代中期末～後期にかけて形成されたものであろう。 (北)

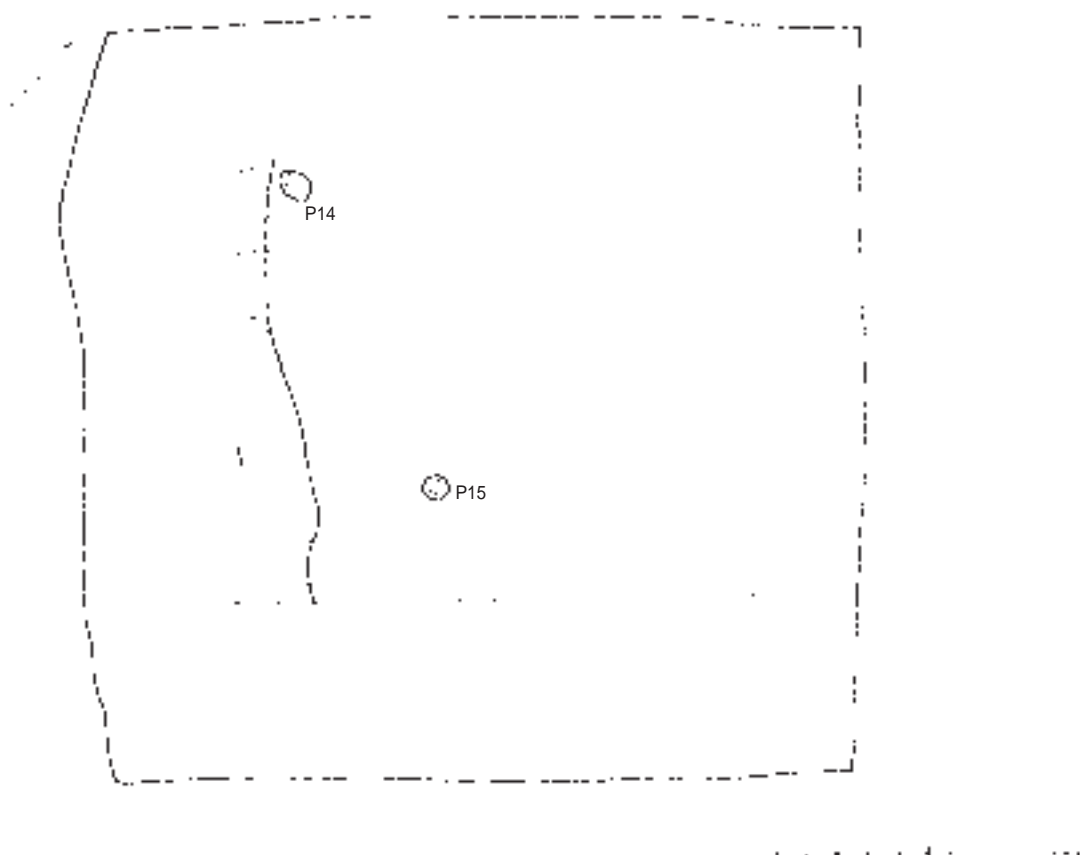


図10 第2調査地 第4遺構面

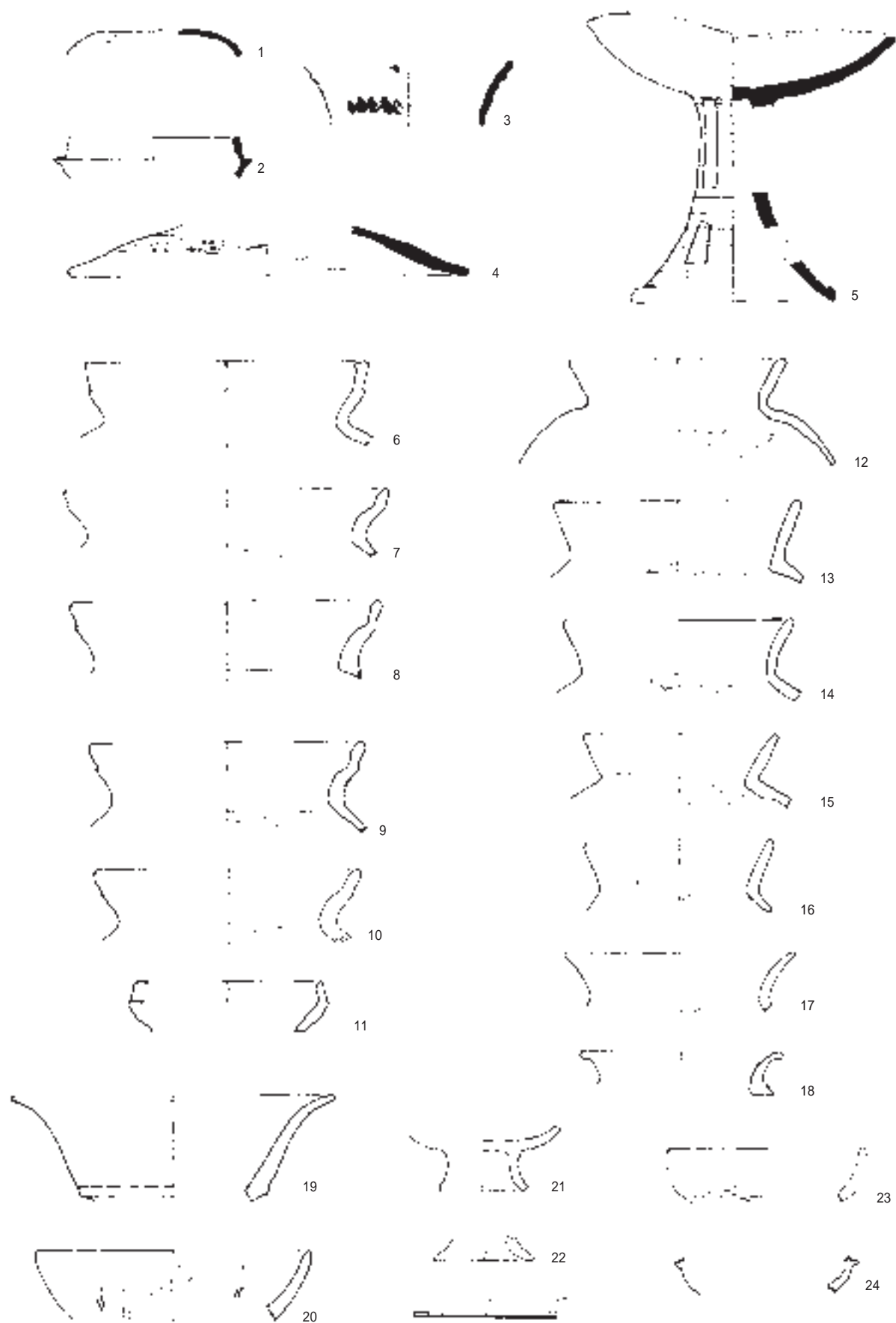


図11 第2調査地 第4遺構面 遺構外出土遺物(④層出土)

遺構外の遺物 (図11、図版47・50、表34)

第4遺構面遺構外出土の遺物として④層の遺物を示した。④層出土遺物は古墳時代中期末から後期にかけての須恵器や土師器が中心になる。1～5は須恵器。1は杯蓋で、2は杯身。3は壺頸部片。4は大型の皿状を呈す器形で、蓋と思われる。外面にはカキメが施される。焼成があまり風化が著しい。5は大型の無蓋高杯で、杯部が皿状をなし、長脚で2段、3方透かしが施される。古墳時代後期後葉ごろのものであろう。6から24は土師器で、古墳時代中期末に帰属するものが中心となる。6～11は複合口縁の甕で、いずれも中期末ごろのもの。12～18は単純口縁の甕で、12～16は中期末ごろ、17・18は後期のものであろう。19・20は高杯の杯部。21・22は低脚杯。23は碗。24は蓋杯の杯身。

(北)

7. ⑤・⑥層出土遺物 (図12～16、図版48・49、表47・48・59)

⑤・⑥層からは縄文時代の遺物が多く出土した。⑤層は黒褐色砂質土、⑥層は砂礫層で、当初は河川堆積による基盤層と判断していたが、縄文土器や石器が出土したため遺物包含層として掘り下げを続行した。ただし、前述のとおり掘削深度が安全許容の限界に達したため、これを掘りきることなく調査を終了した。砂礫層は東谷川の堆積作用によって形成されたものと思われる。遺物は当時の河川べり付近に残されたものが二次堆積したものであろう。この堆積はラミナ状の互層堆積を見せる部分があることから、一時的な堆積で短期間に形成されたものではないと思われる。したがって、二次堆積といっても上流から一気に押し流されてきたものではないと思われ、比較的遺物の移動は少ない可能性が高い。土器の遺存状態も若干摩滅したものもあるが、概して良好であった。

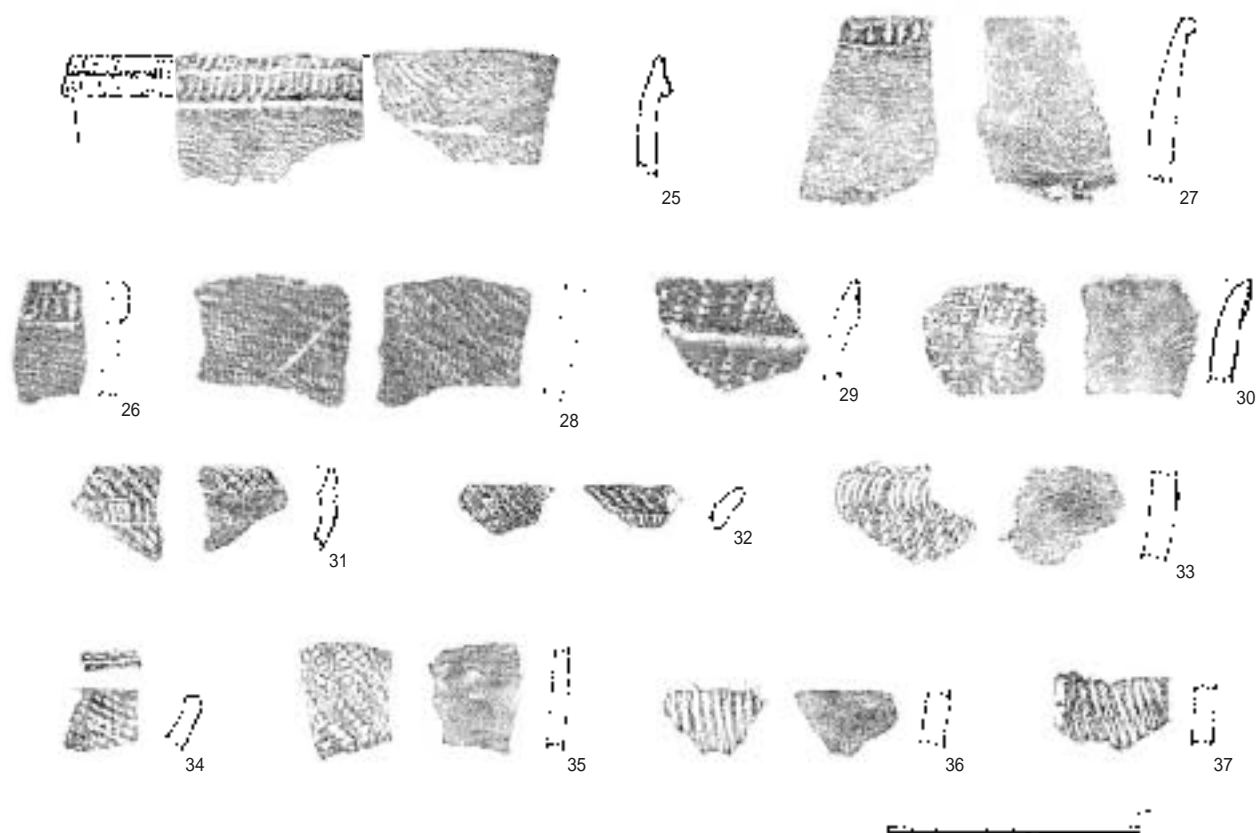


図12 第2調査地 ⑤・⑥層出土縄文土器〔1〕早期～中期〕



図13 第2調査地 ⑤・⑥層出土縄文土器〔2〕後期]

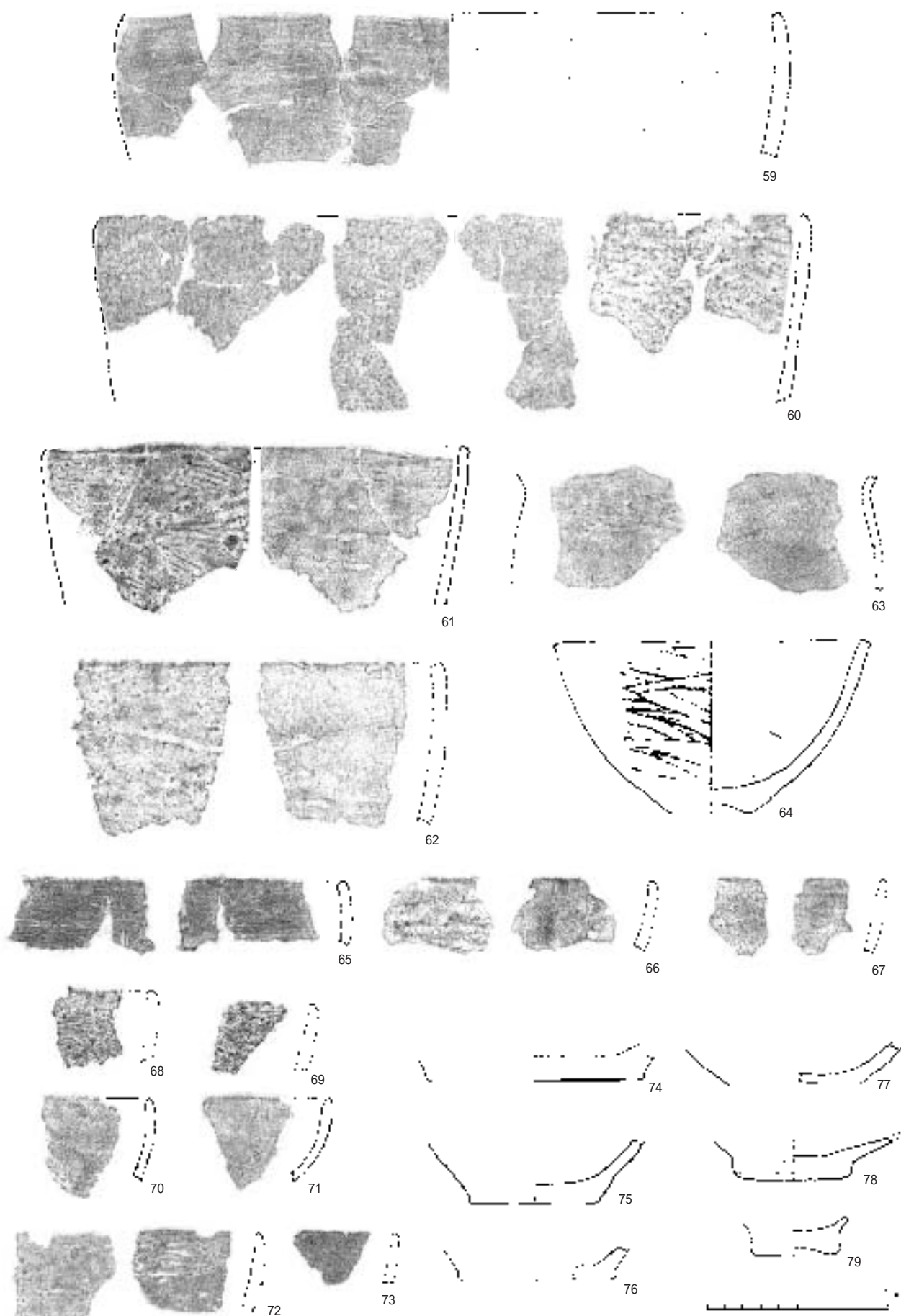


図14 第2調査地 ⑤・⑥層出土縄文土器(3)【粗製土器・底部】

縄文土器 (図12~14、図版48・49、表47・48)

縄文土器は早期後葉から後期中葉までのものが出土している。出土した土器は破片数にして863点で、内訳は早期後葉のものと思われる表裏縄文土器1点、早期末・前期初頭の隆帯文土器9点、前期初頭(西川津式)7点、前期後葉(彦崎Z2式~大歳山式)4点、中期初頭(鷹島式)1点、中期(船元式)8点、後期中葉の有文土器61点、後期に帰属すると思われる粗製土器が770点である。粗製土器が圧倒的に出土量の主体をなす。これ以外では後期中葉土器が中心となる。後期の粗製土器も有文土器と同じ時期のものと思えば、出土土器の全体の9割以上が後期中葉のものとなり、比較的時期的なまとまりをもつと言える。

図12には早期から中期にかけての土器を示した。25~28は胎土に繊維を混入する早期後葉~前期初頭の土器である。25~27は早期末・前期初頭の「長山式」(井上1991・1996)あるいは「福呂式」・「長山馬籠式」(小林2000)の深鉢である。この一群は第3調査地で大量に出土している。25・26は外面の地文に節の細かいRL縄文を施す。25は口縁端の下部に隆帯を貼り付けた後、口縁端と隆帯を工具でなでつけて断面三角形に成形し、口縁端から隆帯にかけてキザミを施しており、隆帯と口縁端部の一体的な調整、施文がなされている。26は口縁端部に幅広で低めの隆帯をもつ。27の外面は条痕調整で、口縁端に隆帯をもつ。28は表裏にRL縄文を施しており、早期後葉の菱根式と考えられるが、出土したのはこの1点のみのため、まとまった量の出土を見た早期末の外面縄文施文土器に伴う可能性もあるかもしれない。29・30は前期初頭の西川津式A類で、いずれも口縁端に幅広の隆帯をもち、隆帯上とその下を二枚貝の腹縁で刺突している。31・32は早期末の大歳山式の深鉢口縁。33は節の長いLR縄文を地文に、爪形のキザミを施す中期初頭の鷹島式の深鉢。34~37は外面に縄文を施すもので、中期船元式の範疇に入るものである。

図13には後期の有文土器を示した。いずれも中葉のものであるが、古相の四元式併行期ないしは「沖丈式」(千葉2001)の段階と、新相の彦崎K2式の段階の2時期にわたると考えられる。38~47は沈線と充填縄文で施文するもの。多くは古相の特徴をもつが、45・46は器壁が薄く、沈線が浅いことから新相のものであろう。44は浅鉢、ほかは深鉢と思われる。48~50は横走する複数条の沈線を施し、沈線内に連続刺突を施している。施文の特徴から新相に位置づけられる。48・50は浅鉢、49は深鉢ないしは浅鉢である。51~54は結節縄文を施すもので、これらも新相のものである。51は外面にわずかに赤色顔料が付着する。54は胎土、調整が粗雑な深鉢で、頸部は無文、胴部屈曲部上に沈線を施し、これ以下に横位の結節縄文を施す。55・56は注口土器で、いずれも新相のものであろう。55は注口の付け根部分の破片で、付け根部にキザミがめぐる。56は外面を丁寧に磨き、縦位に結節縄文を施しており、一乗寺K式の特徴をもつ。57は縄文のみを施すもので、頸部は無文、胴部にRL縄文を異方向に施す。58は外面に無節縄文を施す粗製深鉢である。

図14には無文粗製土器と後期土器の底部を示した。本調査区から出土した後期の有文土器は中葉のもののみで、晚期土器は皆無であることから状況から、粗製土器のほとんどは後期中葉に帰属するものと思われる。多くがバケツ形の深鉢である。63は頸部が屈曲するタイプ。64は外面に細密条痕を施す鉢形土器である。底部は平底のものが多いが、凹み底のものも1点ある。 (北)

石器 (図15・16、表5・59)

石器は全部で354点出土している。器種、石材の内訳は表5のとおりである。剥片石器の石材は黒曜石と硬質安山岩が利用され、前者が87%の比率を占める。器種別に見ると主体となるのは剥



图15 第2調查地 ⑤・⑥層出土石器(1)

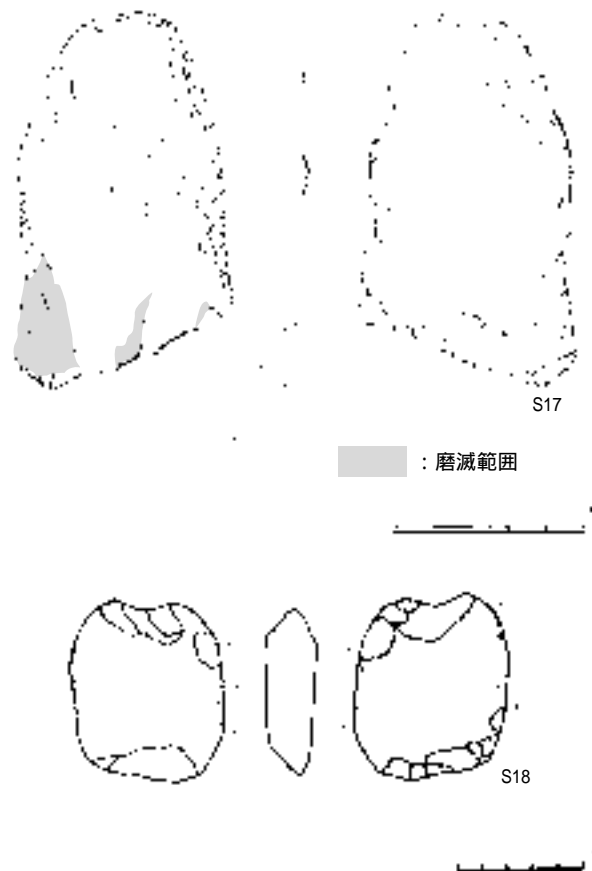


図16 第2調査地 ⑤・⑥層出土石器(2)

片・碎片類である。剥片は小型のものがほとんどで、石器器種の素材になり得るものはほとんどみられない。大半が石器器種製作時に生じた調整剥片であろう。石器器種は石鏃が主体となる。S1～S9は石鏃。S1～S7が黒曜石製ですべて凹基式。S1は素材剥片の剥離面を大きく残し周縁に調整を加えたいわゆる剥片鏃。S8・9が硬質安山岩製である。S8は平基式で、五角形鏃に近い平面形を呈する。S9は抉りの深い凹基式で、表裏に素材剥離面を一部残している。S10は緻密な黒色のガラス質安山岩製のブランクである。剥離面はすべて分割面で、原礫面が残る。S11・12は黒曜石製のスクレイパー。ともに、原礫面を残す切断剥片の一辺に刃部を作出している。S13～S16は黒曜石製の楔形石器。両極打撃による剥離痕や縁辺のつぶれがあるものを楔形石器とした。S14は剥離痕が大きく、剥片作出が目的の両極打撃による石核であろう。S15・16は狭義の楔形石器で、細かい剥離痕と著しいつぶれが見られる。いずれも使用方向を転移している。S17は粗粒安山岩製の打製石斧で、使用によると思われる磨滅痕が見られる。S18は粗粒安山岩製の打ち欠き石

錘である。

これらの石器は、⑤・⑥層出土土器の主体となる後期中葉に帰属するものが多いと考えている。

(北)

表5 第2調査地 ⑤・⑥層出土石器組成表

	石鏃	スクレイパー	楔形石器	楔形石器 削片	加工痕の ある剥片	使用痕の ある剥片	石核	ブランク	剥片	碎片	打製 石斧	石錘	合計
黒曜石	8	3	13	1	5	2	1	4	194	74			305
硬質安山岩	2		1					2	40	2			47
粗粒安山岩											1	1	2
合計	10	3	14	1	5	2	1	6	234	76	1	1	354

【引用参考文献】

井上智博1991「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学研究』38-2 考古学研究会

井上智博1996「山陰西川津式土器の土器型式構造と恩原2遺跡土器群の占める位置」『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団

小林青樹2000「縄文時代早期末葉から前期前葉土器群に関する問題」『福呂遺跡1』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

千葉豊2001「沖丈遺跡出土縄文後期土器の編年の意義 崎ヶ鼻式と『権現山式』のあいだ」『沖丈遺跡』邑智町教育委員会

辻信広2003『名和町内遺跡発掘調査報告書』名和町文化財調査報告書第33集 名和町教育委員会

柳浦俊一2000「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『島根考古学会誌』17 島根考古学会

第5章 第3調査地の調査

第1節 調査の概要

第3調査地は名和川東岸縁に位置し、南東には丘陵の尾根先端が迫っている。調査前は水田として利用されており、圃場整備が行われていた。このため地形の改変が著しく、特に調査地の西側は大きく段切りされて崖となっているほか、調査地内も削平が著しい部分がある。したがって、本来の微地形は不明であるが、大きく見ると丘陵の控える南東側が高く、名和川側の西に向けて下る地形をなしていたようである。

本調査地では遺構面を2面確認している。表土直下の層上面で第1遺構面を確認し、古墳時代中期～後期や中世の遺構を検出した。層は遺物包含層で縄文時代から弥生時代後期にかけての遺物が出土した。層除去後、層上面で第2遺構面を確認し、縄文時代や弥生中期～後期の遺構を検出した。層以下では遺構や遺物は確認できず、第2遺構面の完掘をもって調査を終了した。

(北)

第2節 調査地内の堆積 (図17～23、図版7・8)

土層堆積の方向は地形の高低に従って南東から西に向かっており、名和川や東谷川および南東の丘陵の谷からの流水による沖積作用で形成されたものと思われる。圃場整備による段切りや削平の影響を大きく受けており、プライマリーな土層の状況は不明な部分が多い。表土・耕作土の下面には水田に由来する鉄分の沈着する層が見られる。この層の下に、黒褐色の粘性砂質土～シルト層の層が堆積している。この上面で第1遺構面、下面で第2遺構面を確認した。層以下は遺物を含まない河川堆積で、砂層・砂礫層と砂礫混じりの黒色土が互層に堆積している。層、層は暗褐色の砂層をベースに砂礫が混じる。層中には拳大ほどの円礫がレンズ状堆積をなす部分が見られる。また、B区とE区では層の上面で河道堆積を確認している。層堆積後に形成された河道であろう。いずれの河道とも遺物を含んでおらず、第2遺構面の遺構が掘りこまれることから、遺跡内で人間活動が開始される以前の堆積と考えている。層、層はクロボク起源とおもわれるガラスを含む黒色土に砂礫が混じる黒色砂質土である。層は砂礫を含む粘性、しまりの非常に強い粘土層である。これら～層の堆積後、離水し安定した状況になってから人間活動が始まったものと思われる。(北)

基本層序

- 層 黒褐色(7.5YR 2/2)粘性砂質土
- 層 暗褐色(10YR 3/3)砂 5mm前後の礫をまれに含む
- 層 黒色(10YR 1.7/1)砂質土 1～20mmの礫を多く含む
- 層 暗褐色(10YR 3/4)砂 5mm前後の礫を多く含む
- 層 黒色(7.5YR 2/1)砂質土 5～30mmの礫を多く含む
- 層 黒褐色(10YR 3/2)粘質土 白色の細礫多く含む
- 層 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘質土 小礫多く含む

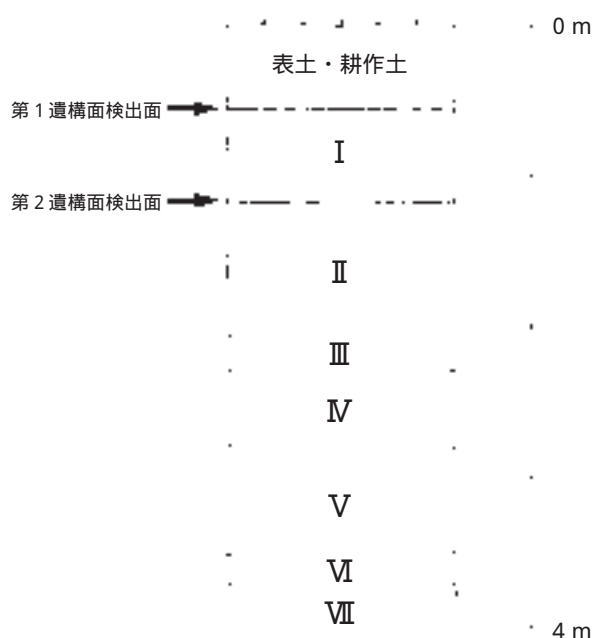


図17 第3調査地内土層断面模式図

第5章 第3調査地の調査

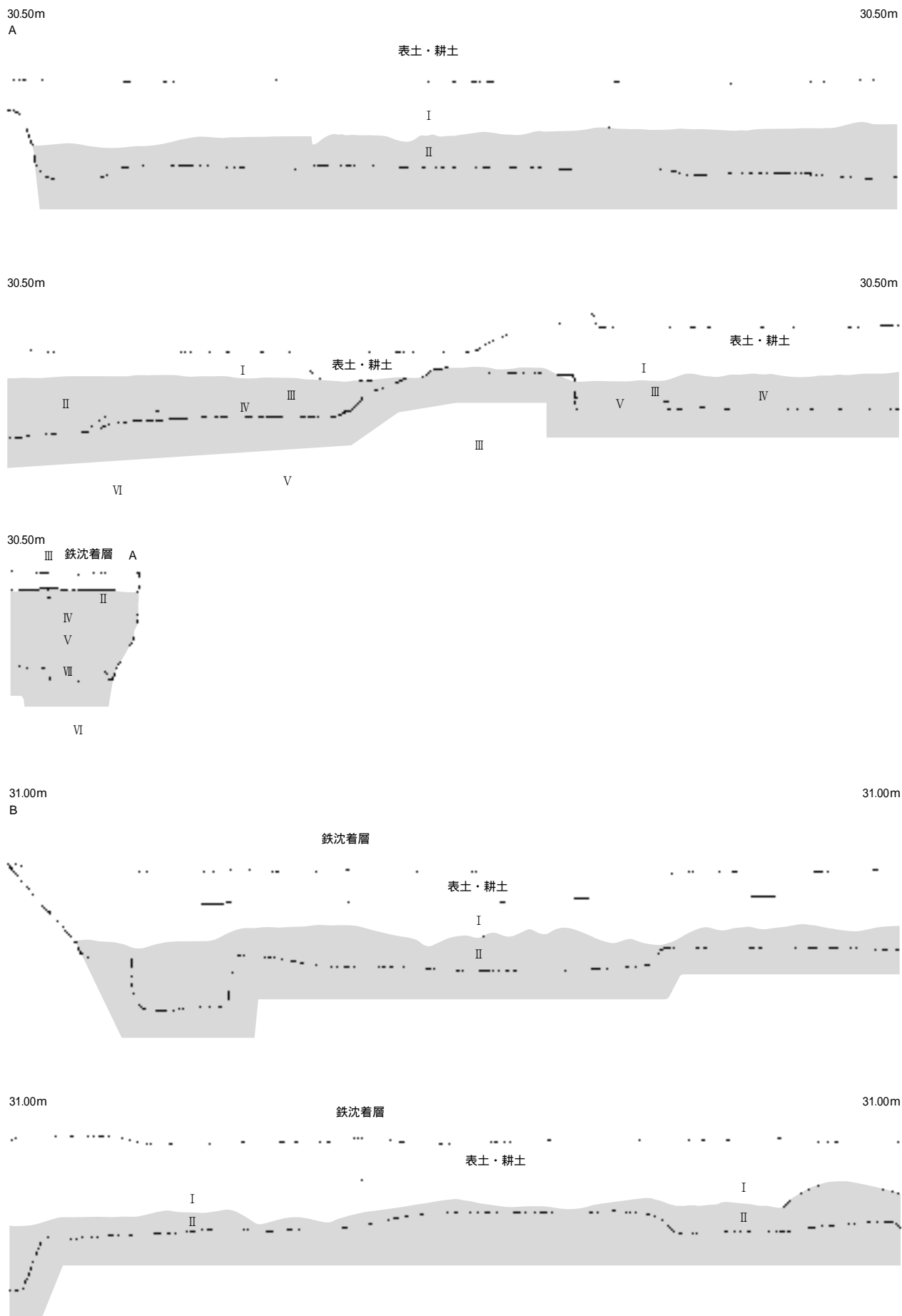


図18 第3調査地内土層断面図(1)

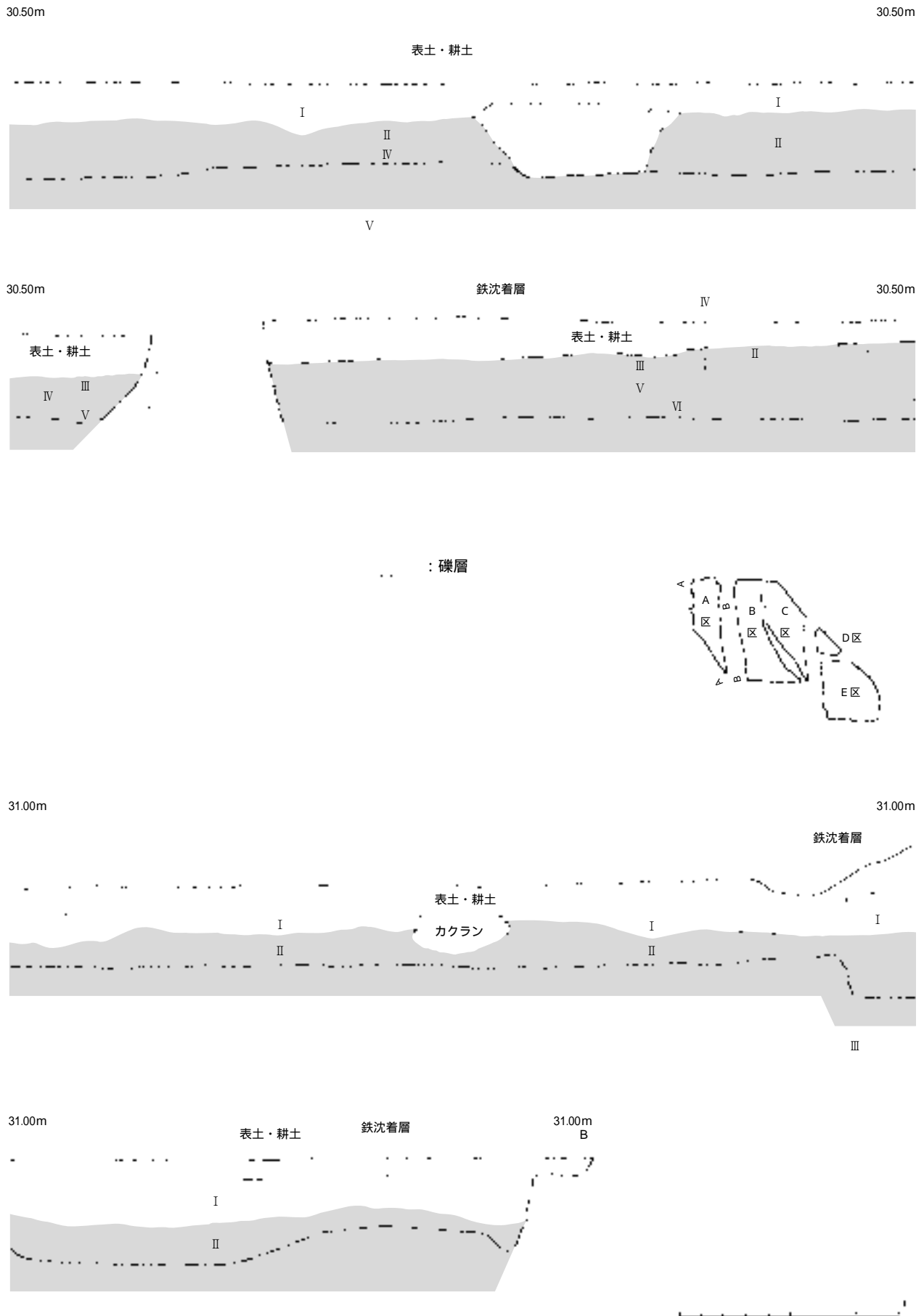


図19 第3調査地内土層断面図(2)

第5章 第3調査地の調査

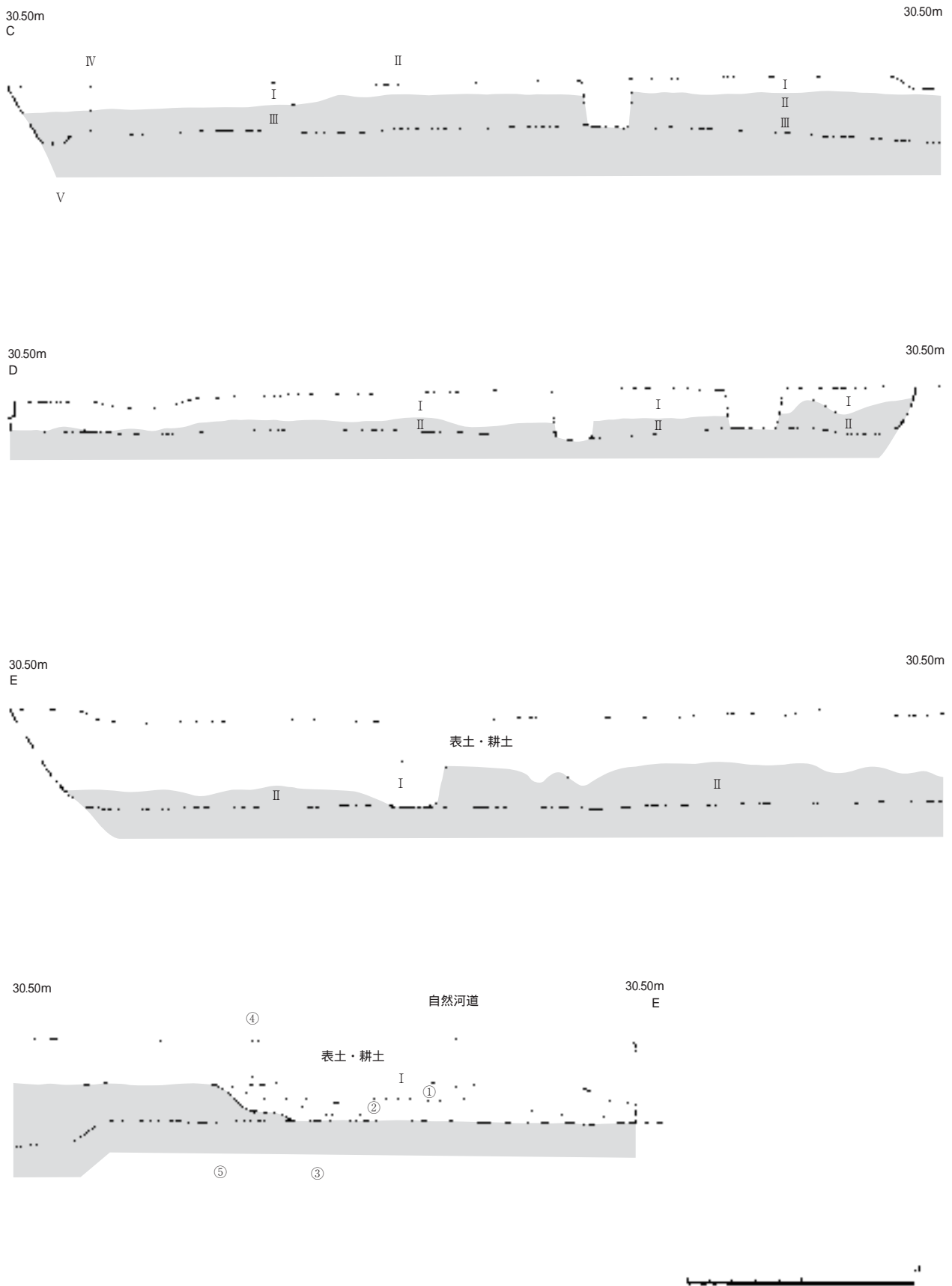


図20 第3調査地内土層断面図(3)

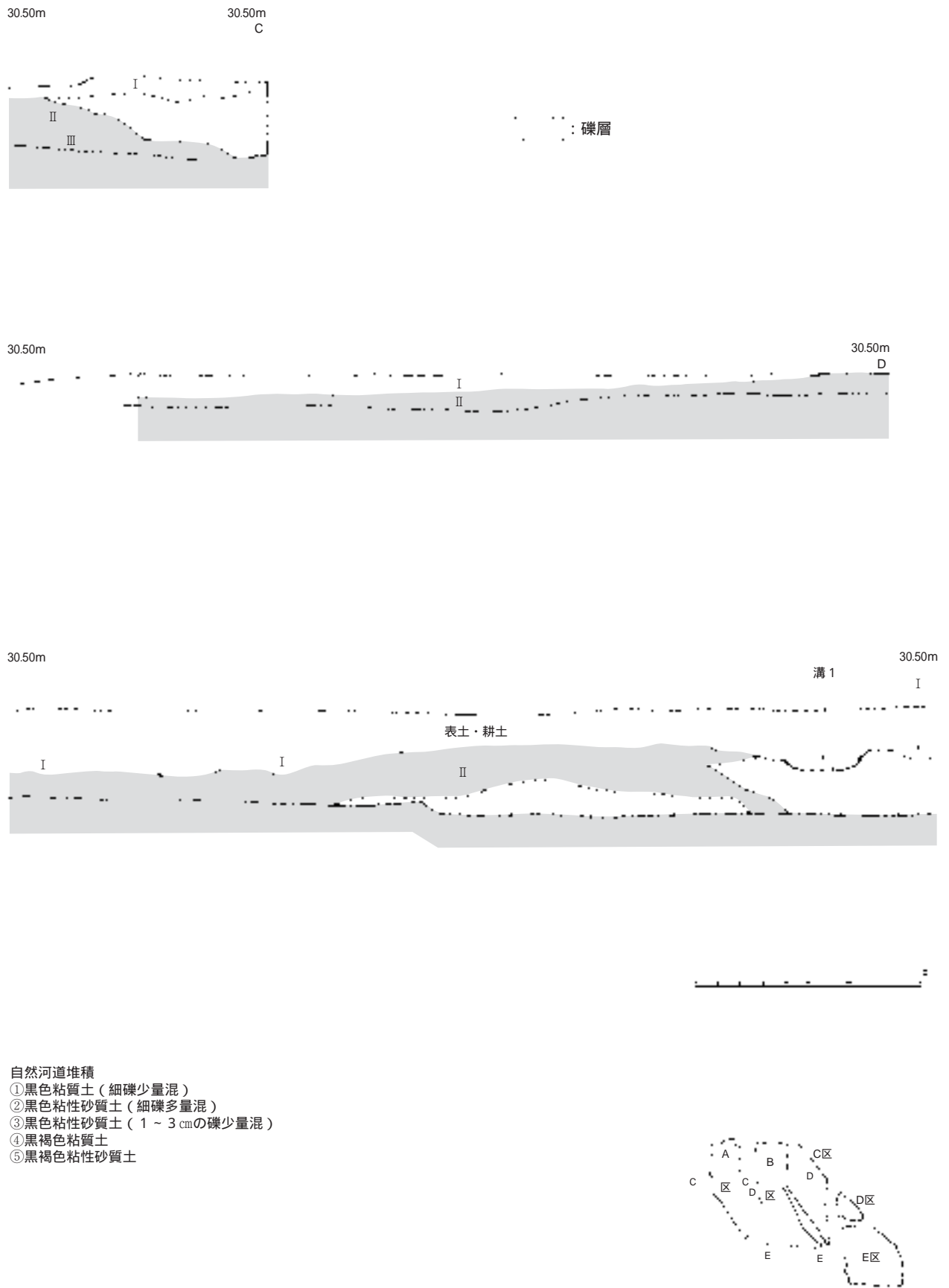


図21 第3調査地内土層断面図(4)

第5章 第3調査地の調査

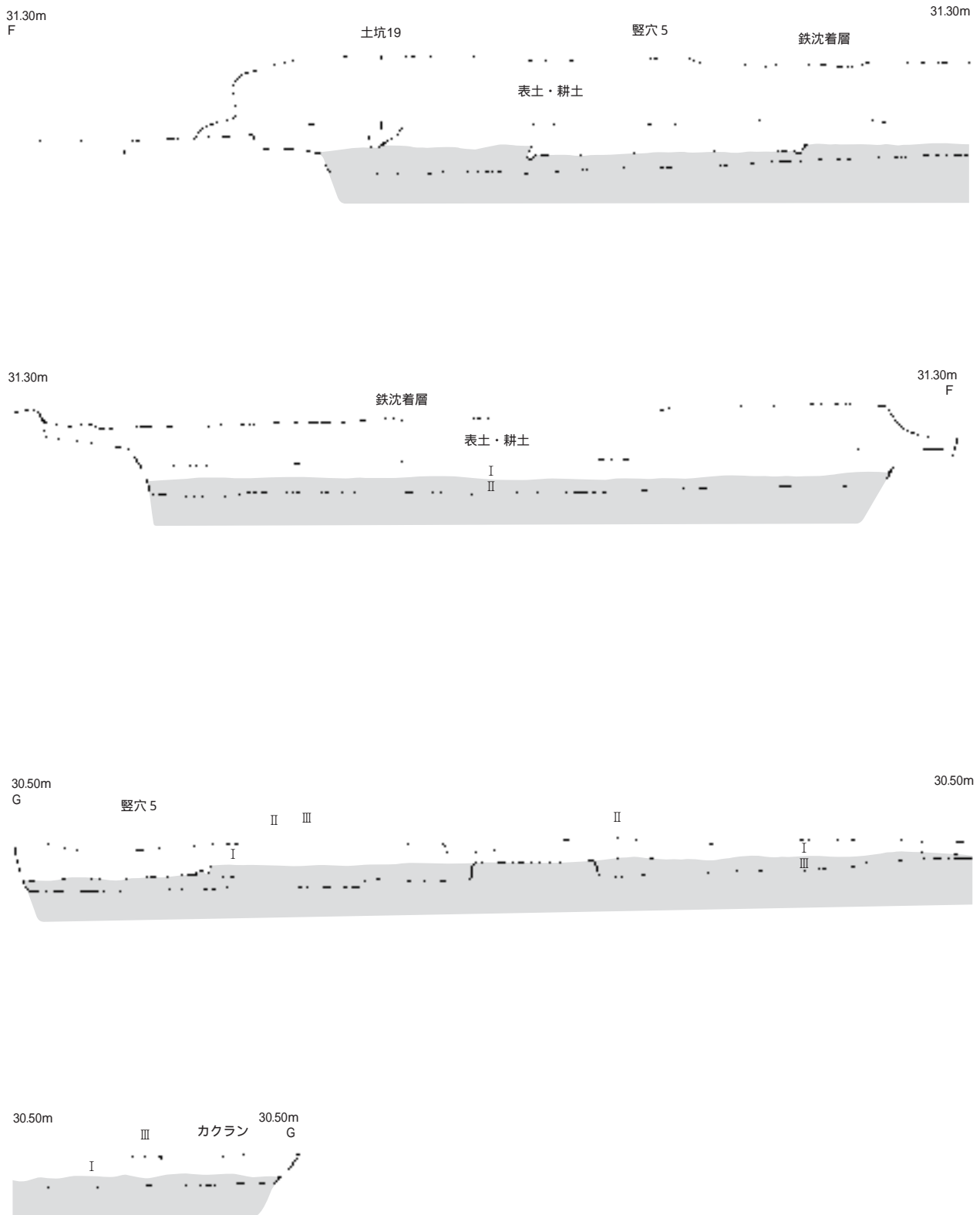


図22 第3調査地内土層断面図(5)

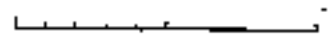
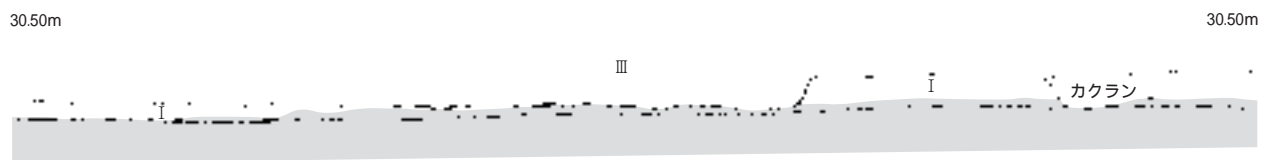
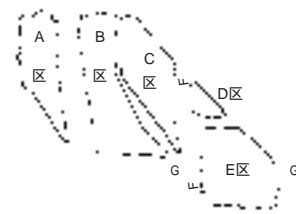
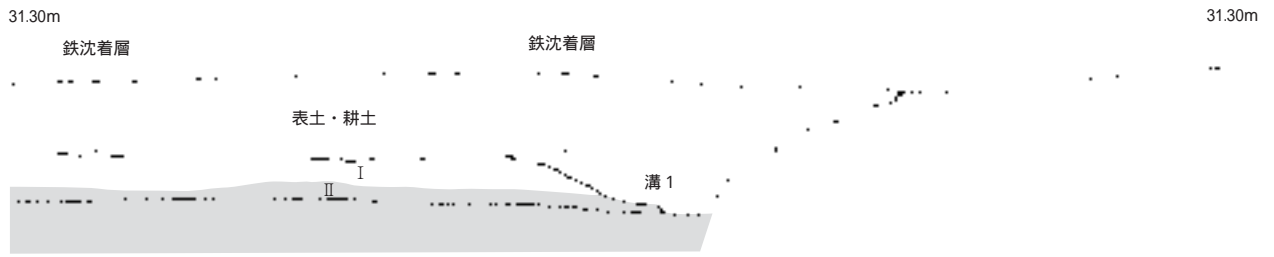


図23 第3調査地内土層断面図(6)

第3節 第1遺構面の調査

1. 概要

第1遺構面は表土・耕作土下の鉄分の沈着層を除去し、層上面を検出した段階で確認した。前述のように全面で削平をうけており、本来的な遺構面上面を残している部分はない。特にC区の東南部（J2・J3・J4・J5・K3・K4・K5グリッド付近）は削平が著しく層まで削られている。この区域では第1面の遺構を検出していないが、本来的に遺構が存在しなかったのではなく、削平によって完全に破壊された可能性もある。

検出した遺構は中世と古墳時代中期～後期の2時期に大別できる。2時期の遺構を1面で検出したが、削平の状況や周辺地形、あるいは第2調査地の調査結果から考えると、本来的には検出面よりも上に別の遺構面が存在した可能性が高く、中世の遺構はここから掘り込まれたものと思われる。したがって、中世の遺構は一部が遺存しているに過ぎず、大半は削平により消滅した可能性がある。

（北）

表6 第3調査地内第1遺構面新旧遺構対照表

報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名
竪穴住居1	S I 1	溝1	S D 1	土坑13	S K 11
竪穴住居2	S I 2	土坑4	S I 1	土坑14	S K 15
竪穴住居3	S I 3	土坑5	S K 20	土坑15	S K 14
竪穴1	S K 63	土坑6	S K 13	土坑16	S K 16
竪穴2	S I 4	土坑7	S K 50	土坑17	S K 52
掘立柱建物1	S B 13	土坑8	S K 56	土坑18	S K 53
掘立柱建物2	S B 11	土坑9	S K 55	土坑19	S K 58
掘立柱建物3	S B 15	土坑10	S D 5		
掘立柱建物4	S B 12 S A 10 S A 11	土坑11	S K 12		
		土坑12	S K 7		

2. 中世の調査

第1遺構面で検出できたピットの内、粘質の明るい灰色系土を埋土に持つピット35基が、主にE区西半で検出された。そのうちのM9・10グリッドに集中する7基からは、時期を同じくする土師皿が出土している。このことから、この灰色土系のピットはいずれも中世のものであると判断した。ただし、これらのピットは掘立柱建物などの構造物を構成する配置をとらない。圃場整備によって上面が大きく削平されていることもあり、不明な点が多いが、少なくとも土師皿などの出土した7基のピットは地鎮などの祭祀に伴う遺構であると考えている。

（三木）

P16～22（図24・26～28、図版26・27・50・80、表28・34・61）

<形態と規模>

P16はM9グリッドの北端に位置する。径55cm、検出面からの深さは87cm、底面の標高は28.49mを測る。P17はM9グリッドの中央部に位置する。径20cm、検出面からの深さは46cm、底面の標

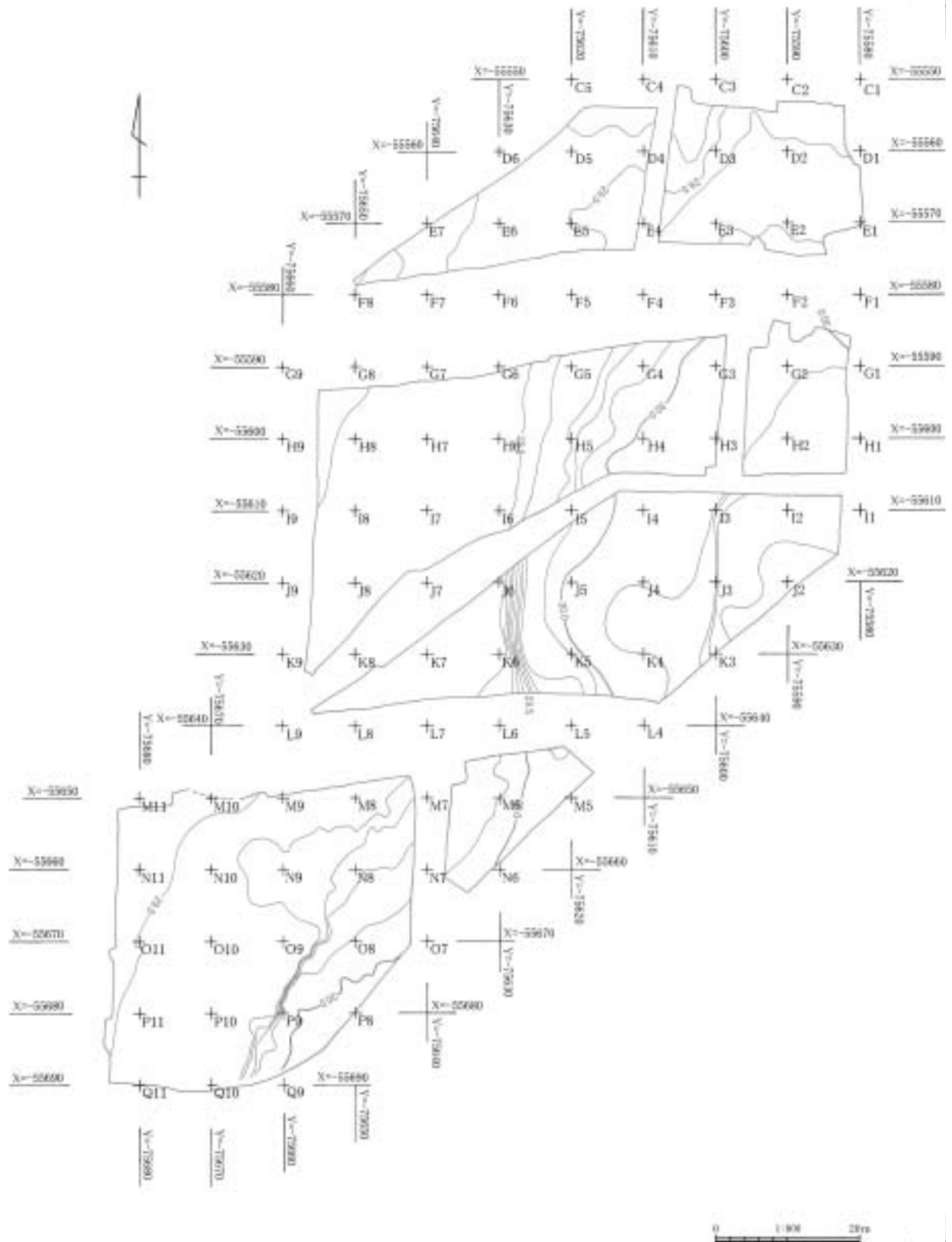


図25 第3調査地第1遺構面地形測量図

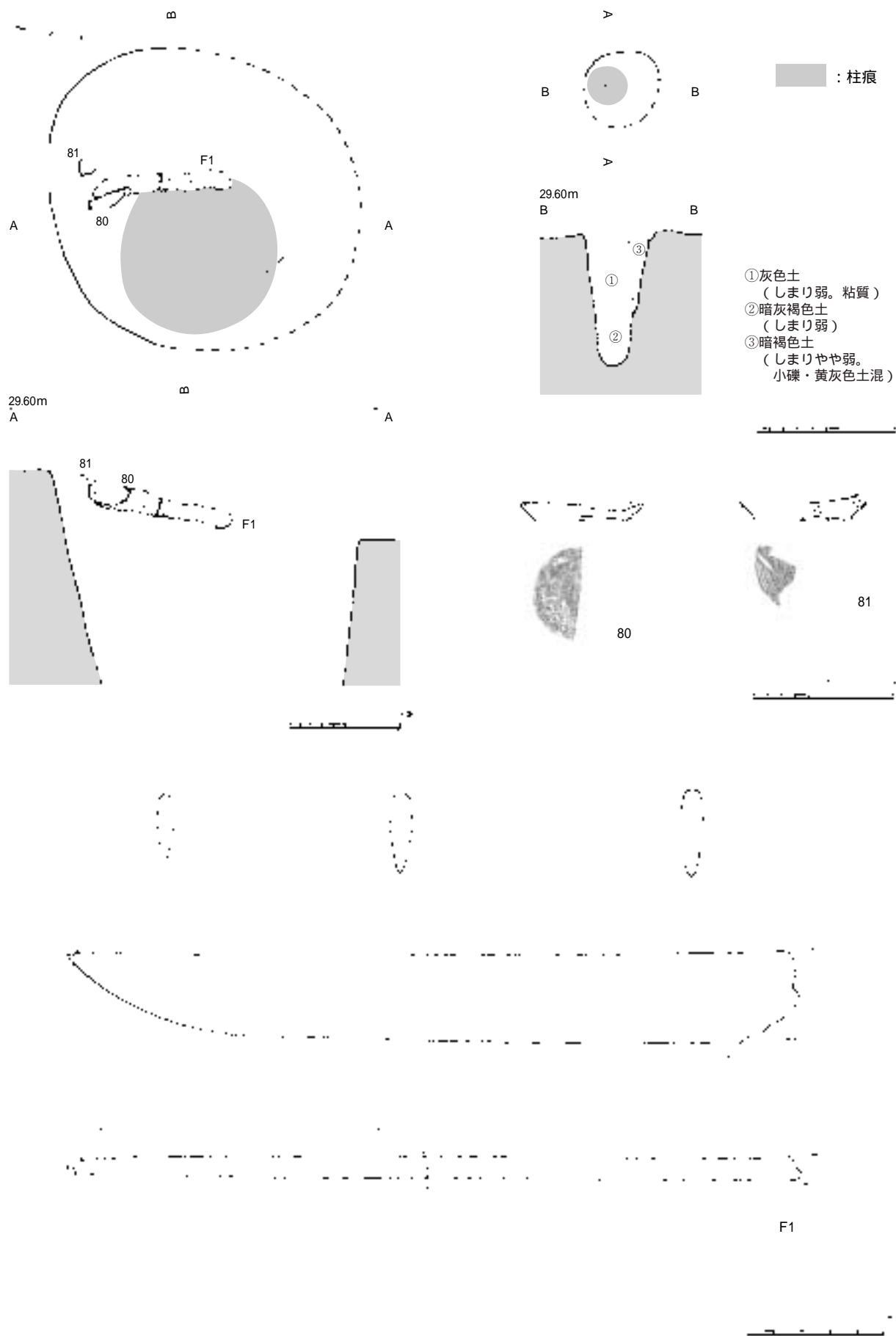
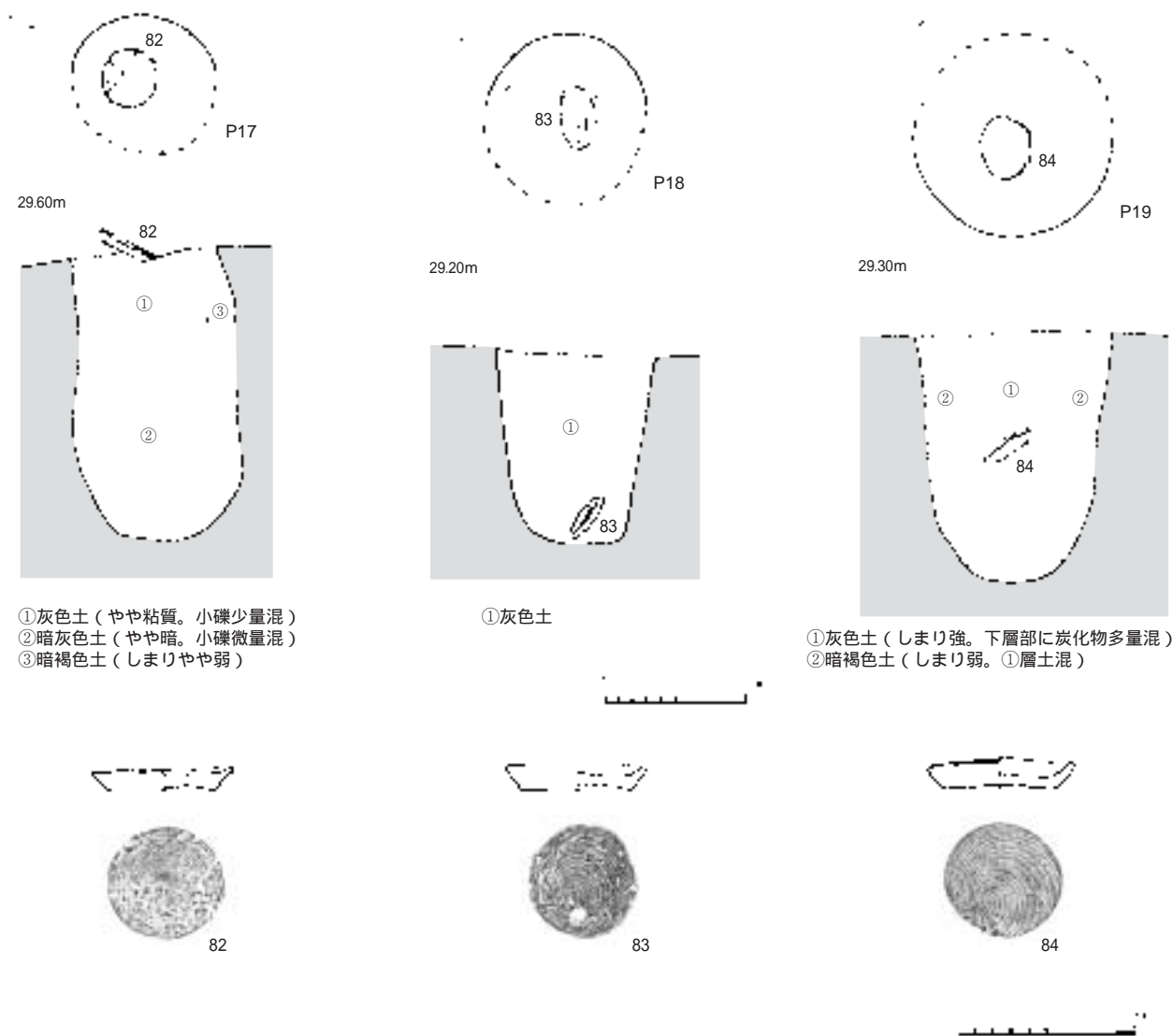


図26 中世ピット(1) P16



①灰色土（やや粘質。小礫少量混）
②暗灰色土（やや暗。小礫微量混）
③暗褐色土（しまりやや弱）

①灰色土

①灰色土（しまり強。下層部に炭化物多量混）
②暗褐色土（しまり弱。①層土混）

図27 中世ピット(2) P17～19

高は29.14mを測る。P 18はM 9グリッド北西部に位置する。径23cm、検出面からの深さは29cm、底面の標高28.81mを測る。P 19はM10グリッドの北東隅付近に位置する。径29cm、検出面からの深さは34cm、底面の標高28.88mを測る。P 20はM10グリッドの北東部に位置する。径29cm×24cm、検出面からの深さは42cm、底面の標高28.97mを測る。P 21はM10グリッドの北東部に位置する。径18cm×16cm、検出面からの深さは19cm、底面の標高29.15mを測る。

< 遺物の出土状況 >

P 16の上面からは土師皿（80・81）と刀（F 1）が出土している。刀に土師皿を伏せるような状態で出土している。P 17の上面からは完形の土師皿（82）が上向きで出土している。P 18からは完形の土師皿（83）が底面近くで、やや下向きの状態で出土している。P 19からも完形の土師皿（84）が中層から出土している。P 20の上層からは完形の土師皿（85）が上を向いた状態で出土しており、その下からは人頭大の礫が出土している。礫には一部被熱痕が見られた。P 21からも完形の土師皿（86）が出土している。検出が竪穴2の床面であったため、本来の出土層位は下層になると考えられる。埋土中からは工具痕流入滓（鍛冶炉内壁面についた工具痕のなかに溜まった滓）（F 2）も出土している。P 22埋土中からは土師皿（87）が出土している。

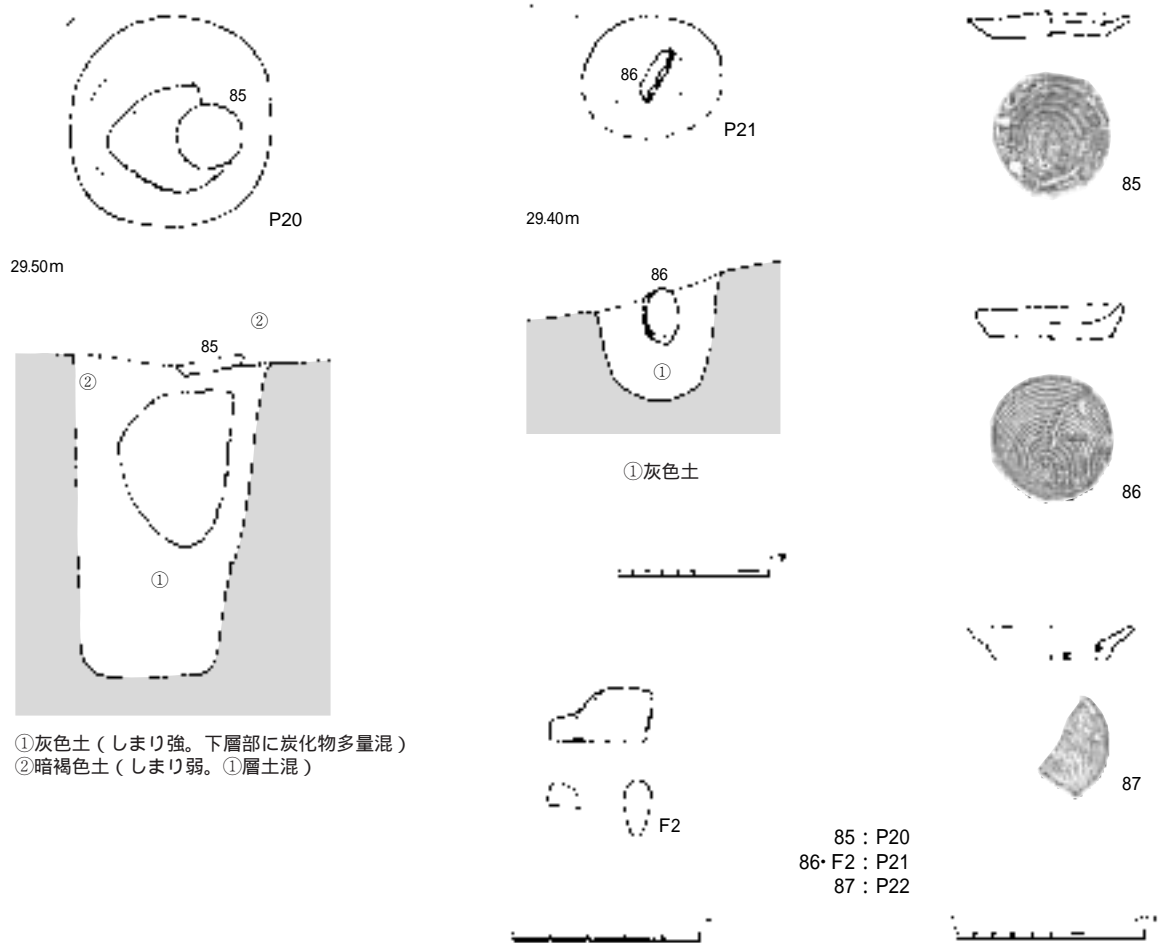


図28 中世ピット(3) P20・21

< 出土遺物 >

80は土師皿である。風化のため底部の調整は不明瞭であるが回転系きりの痕跡が認められる。底部がやや盛り上がっている。口縁部は外反している。81は土師皿もしくは杯の底部である。底部は回転系きり痕が残し、器壁は厚い。F 1は刀である。長刀か短刀かは不明である。82~87は土師皿である。すべて底部調整は回転系きりである。82は底部が厚く、立ち上がりは浅く口縁端部は外反している。83は底部がやや盛り上がっており、口縁部は外反している。84はやや口縁部がいびつな形を呈し、端部は内傾気味である。85は口縁部がいびつな形を呈しており、立ち上がりは浅く端部は外反している。86はやや厚手のつくりである。87は底部をつぎたして体部を作っており、粘土のつなぎ痕が明確にみられる。いずれも平安時代末~鎌倉時代の所産である。(三木)

3. 古墳時代の調査

古墳時代の遺物が出土し、時期の確定できた遺構は、竪穴住居3棟、竪穴2基、掘立柱建物3棟、土坑6基(土坑4を含む)、溝1条、ピット11基である。また、遺物が出土しておらず、時期が確定できない第1遺構面の他の遺構(土坑10基、ピット209基)も、中世の可能性が高いとしたもの以外は、埋土から考えてほぼすべてが古墳時代の遺構である可能性が高い。

遺物が出土した主な遺構の時期は中期末頃か後期末頃のいずれかで、大きく見て2時期の集落形

- ①黒褐色土（しまりやや強。
粘性弱。小礫多量混。土坑4埋土）
- ②黒褐色土（しまりやや弱。
粘性やや強。小礫多量混。土坑4埋土）
- ③黒褐色土
（しまり弱。粘性やや強。小礫多量混）
- ④黒褐色土（しまり弱。粘性強。
③層より赤色弱。小礫多量混）
- ⑤褐灰色土（しまり弱。粘性強。小礫混）
- ⑥黒褐色土（しまり弱。粘性やや強。）
- ⑦黒色土（しまり非常に強。
粘性弱。小礫非常に多く混）
- ⑧黒褐色土（しまり弱。粘性やや強。）
- ⑨黒褐色土（しまり強。粘性やや弱。）
- ⑩黒褐色土（しまり強。粘性やや弱。やや黄色強）
- ⑪黒色土（しまり弱。粘性強。
炭が土壌化し⑧層土と混ざったもの）
- ⑫黒色土
（しまり強。粘性やや強。小礫少量混）

■：硬化面

■：焼土

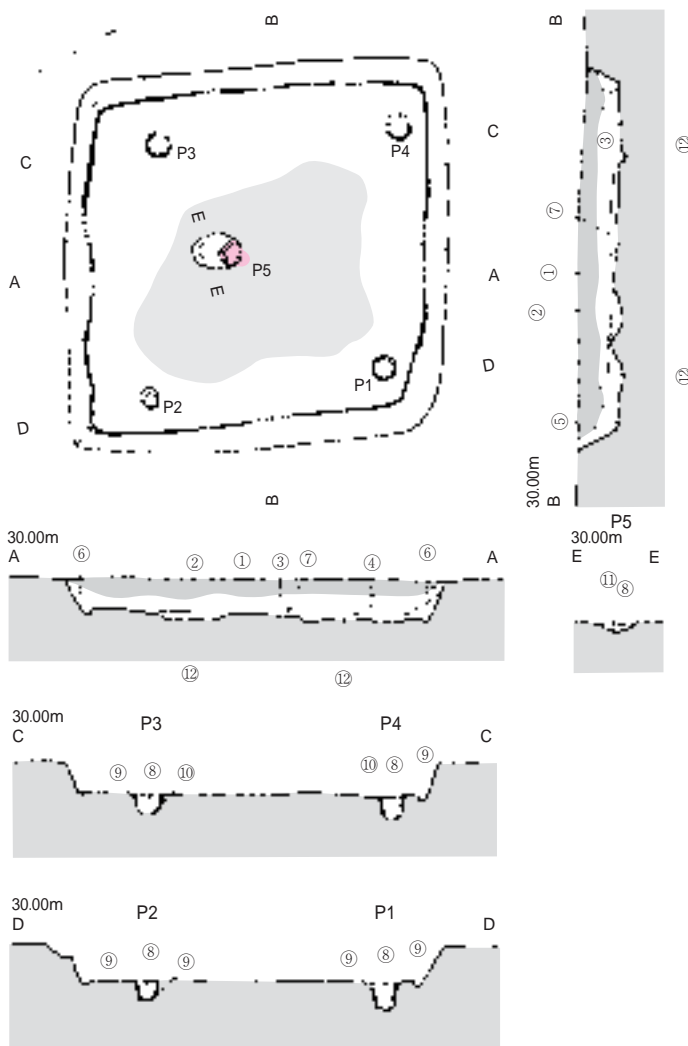


図29 竪穴住居1(1)

成が見られる。中期末と考えられる遺構には竪穴住居1、竪穴1、土坑4・5があり、後期末と考えられる遺構には竪穴住居2・3、竪穴2、掘立柱建物1・3・4、土坑6～9などがある。このうち、後期末の遺構には土器型式に差をもつものや切り合い関係を持つものが確認でき、少なくとも新古の2段階に分かれ

る。遺構の分布はピットも含めてA区東部とE区の二か所に大きく分かれている。A区東部には中期末の竪穴住居1と土坑4・5などが位置し、一方のE区には後期末の主要な遺構がまとまって分布している。なお、E区の遺構は時期的にまとまるだけでなく、配置も遺構間の有機的な関連性をうかがわせており、竪穴住居3、竪穴2、掘立柱建物1～4は遺構の軸方向がほぼ揃っている。遺構の分布域が時期的に異なっていることから、中期末と後期末では集落の範囲や中心域が違っていたと思われる。中期末の集落は、第2調査地で当該期の遺物が多く見つかったことをあわせて考えると、第3調査地北東部から北側および東側へと広がり、少なくとも第2調査地周辺までは展開していたと思われる。一方の後期末の集落はE区の北側、西側、南側それぞれに広がっていたと思われる。なお、現況ではE区の北側と西側は大きく掘削が行われているため、遺構の存在は見込めない。南側は調査地内と同じく圃場整備がなされ水田として利用されているが、遺構は残っているものと思われる。

(北)

竪穴住居1（図29～31、図版11・12・50・52、カラー図版2、表34・35）

<形態と構造>

A区東部、D3・E3グリッドにおいて現耕作土下層上面で検出した。なお、竪穴住居1は廃



図30 竪穴住居1(2)

絶後に掘り方の一部を改変して廃棄土坑としたようである（埋土①層・②層部分）。この部分は土坑4として後述する。竪穴住居1は平面方形を呈し、規模は掘り方上面で一辺4m、床面で一辺3.5m、検出面からの深さ32cm、床面積12m²である。埋土は土坑4の底面以下を竪穴住居1のものと認識した。黒褐色土、灰褐色土、黒色土の3層の堆積が見られた。これらは別の土が混ざらず、地形が高い南東から北西に向かって堆積しており、自然堆積したものとおもわれる。後述するとおり、同一個体の遺物がそれぞれまとまって出土した状況からも、短期間のうちに堆積したとおもわれる。床面は⑫層を貼り床とし平坦でほぼ水平である。周壁下に1条の周壁溝がめぐる。⑦層が硬化層である。住居中央の方は硬化し光沢を帯びていた。床面でP1～P5を検出した。主柱穴はP1～P4である。P1～P4はいずれも径24～32cm、床からの深さ28～32cmと小型である。柱穴の埋土はいずれも3層に分けられ、⑧層が柱痕もしくは抜き取り穴、⑨層と⑩層が掘り方埋土である。⑧層の幅から柱の太さは16cm程度と考えられる。P5はごく浅く底面に凹凸があるもので、底面と埋土中に炭が残り、土器の細片も含む。P5の南側底面から上端辺りには焼土面が広がる。この場で火を焚き、片付けた痕跡であるとおもわれる。

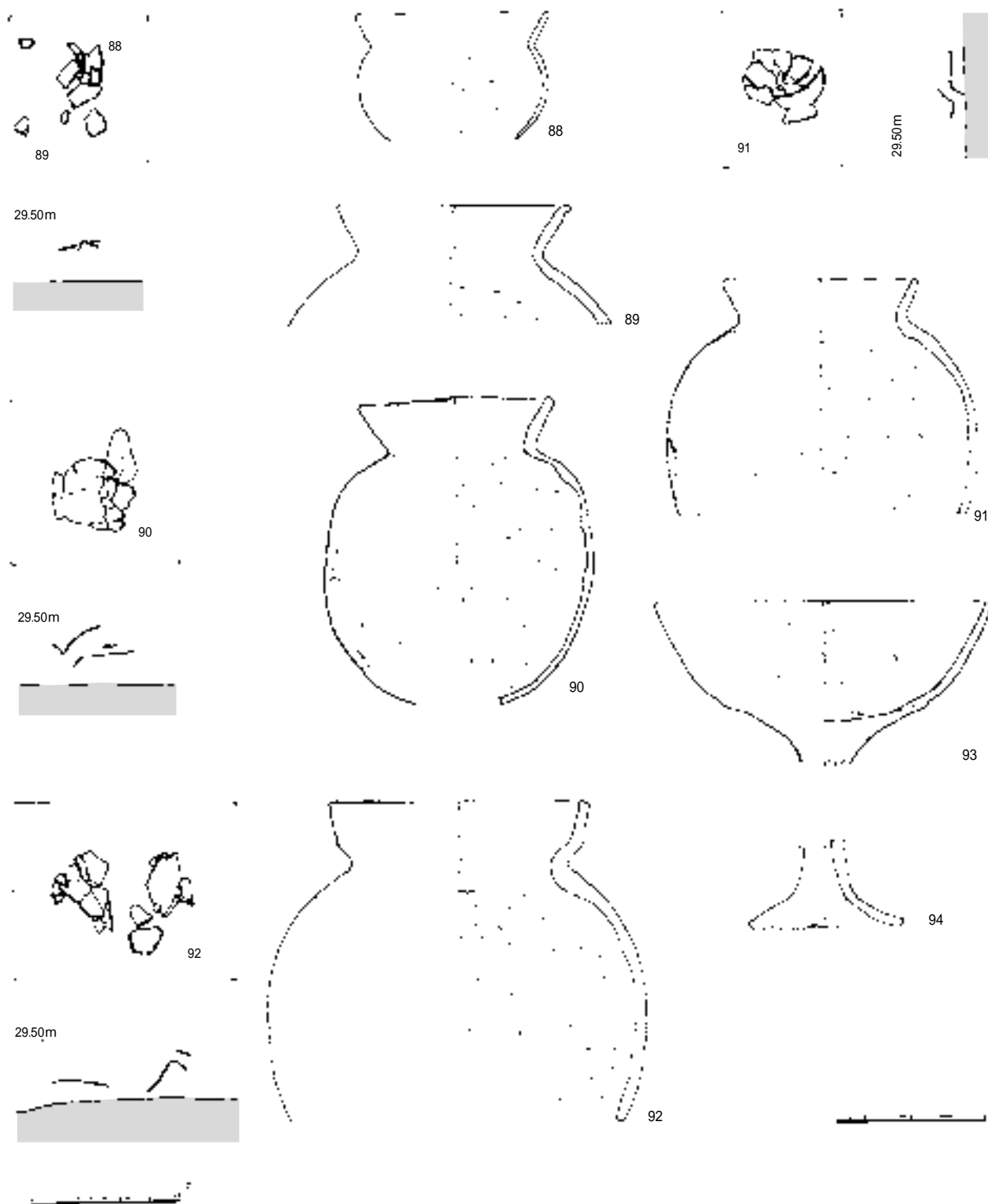


図31 竪穴住居 1(3)

< 遺物の出土状況 >

竪穴住居 1 からは多量の土器が出土した。出土した土器は全て土師器である。遺物の出土分布をみると、いずれもの土器も同一個体のものは、同一箇所にとままとて出土した。しかし、垂直分布をみると、甕91以外、石も含めて多くは床面から数cm～十数cm浮いて出土している。住居床面直上から出土したのは甕91である。甕91は住居の北東隅、P 1 南側に隣接して出土した。住居廃絶時の原位置を留めていると考える。甕88～90・高杯93・高杯94は、住居の中央寄り、埋土③層中より出

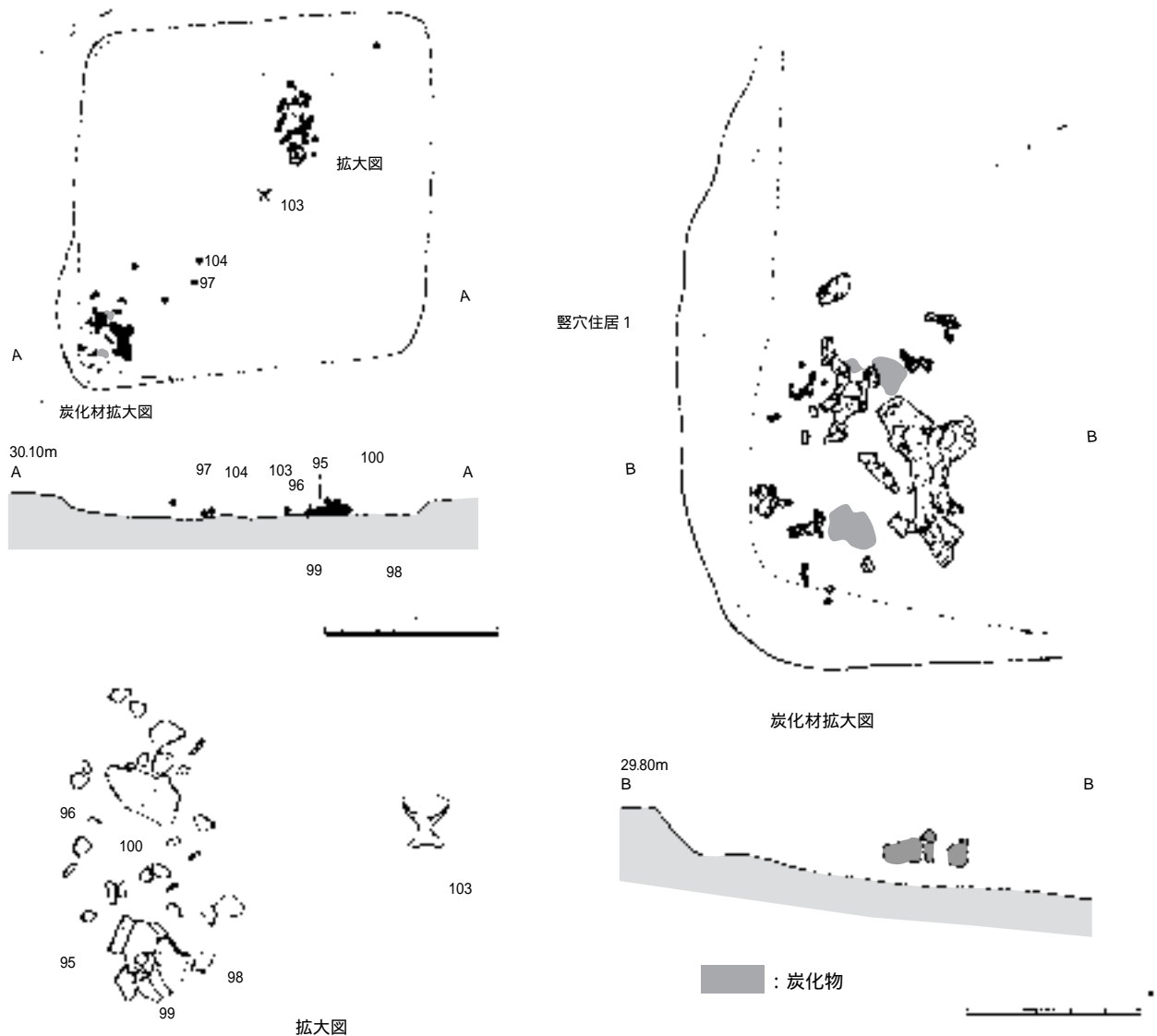


図32 土坑4(1)

土した。甕92は住居の南東隅でまとまって出土した。これらは住居廃絶時に残されものとするが、廃絶後わずかに埋土が堆積した後に廃棄された可能性もある。

<出土遺物>

出土した土器は全て土師器である。甕88～92、高杯の杯部93、高杯の94がある。これらは全体的に遺存状況がよい。出土した甕は92が複合口縁系のもの、それ以外は口縁部が頸部で「く」字状に屈曲して、そのまま上方へ開く単純口縁の形態をとる。91は肩部があまり張らず、頸部から口縁部は内湾気味に上方に開き、端部はそのまま丸く収める。体部から口縁部にかけての約3分の1には黒斑がのこる。以下の遺物は床面から浮いて出土した。甕92は、口縁部がほぼ直立する複合口縁をなす。口縁部下端はわずかに稜をなし、口縁部上端部は強くナデて外方に突出部をつくる。肩部より下半は煤が付着し、内面にも煤が付着する箇所がある。甕88は底部を欠損する。器高が低く、器高に対し口径が大きい。肩部は張らず、口縁部は直線的に伸びて、端部をそのまま丸く収める。器壁は薄い。甕89は、頸部から口縁部は斜め上方に開く。口縁端部は強くナデて面をなす。甕90は底部が欠損する。肩部はあまり張らず、頸部から口縁部は斜め上方へ直線的に開く。端部はそのまま丸く収める。口縁部の器壁は厚い。高杯93は、杯底部からの立ち上がり部に緩い段を有する。内

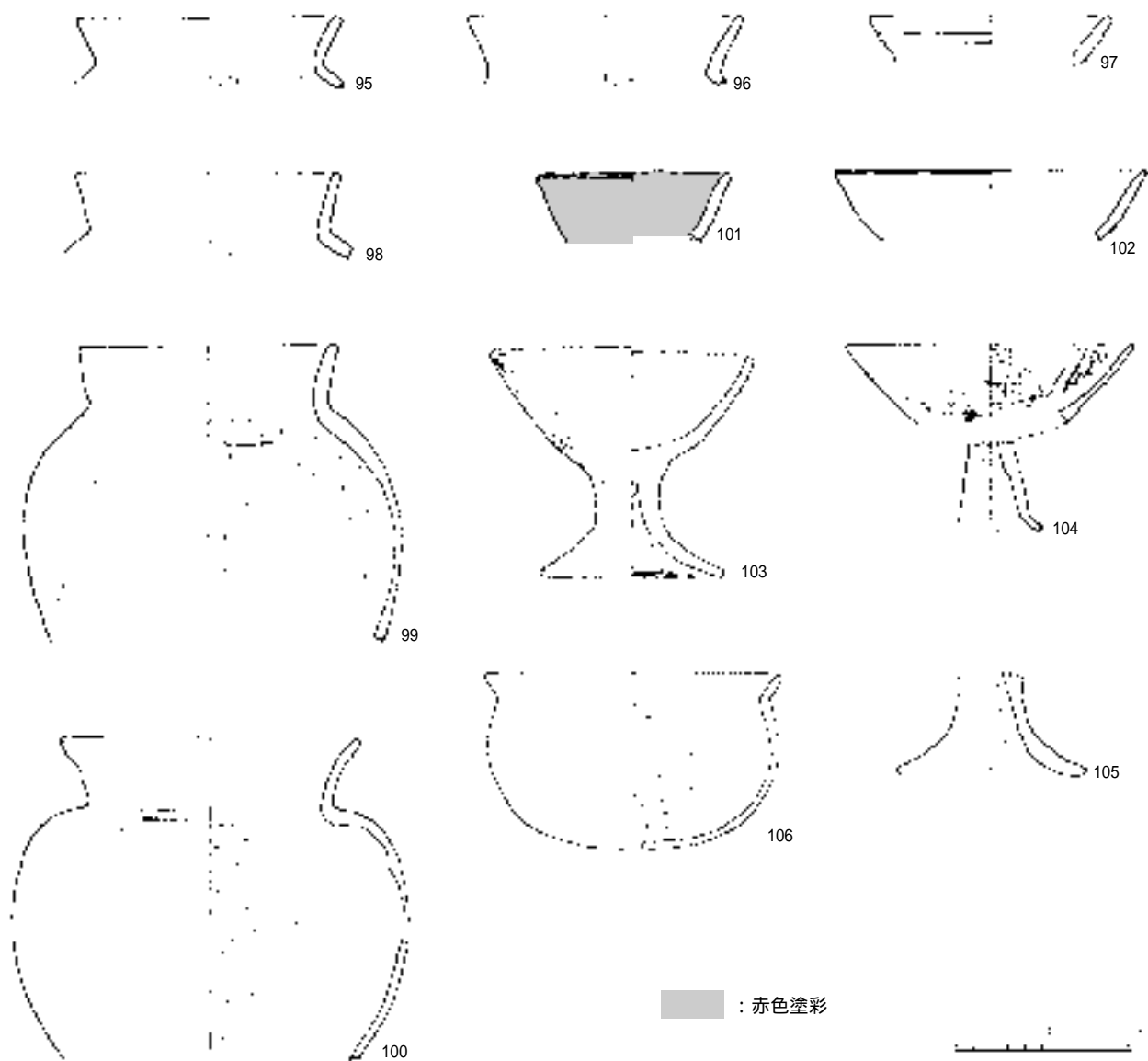


図33 土坑4(2)

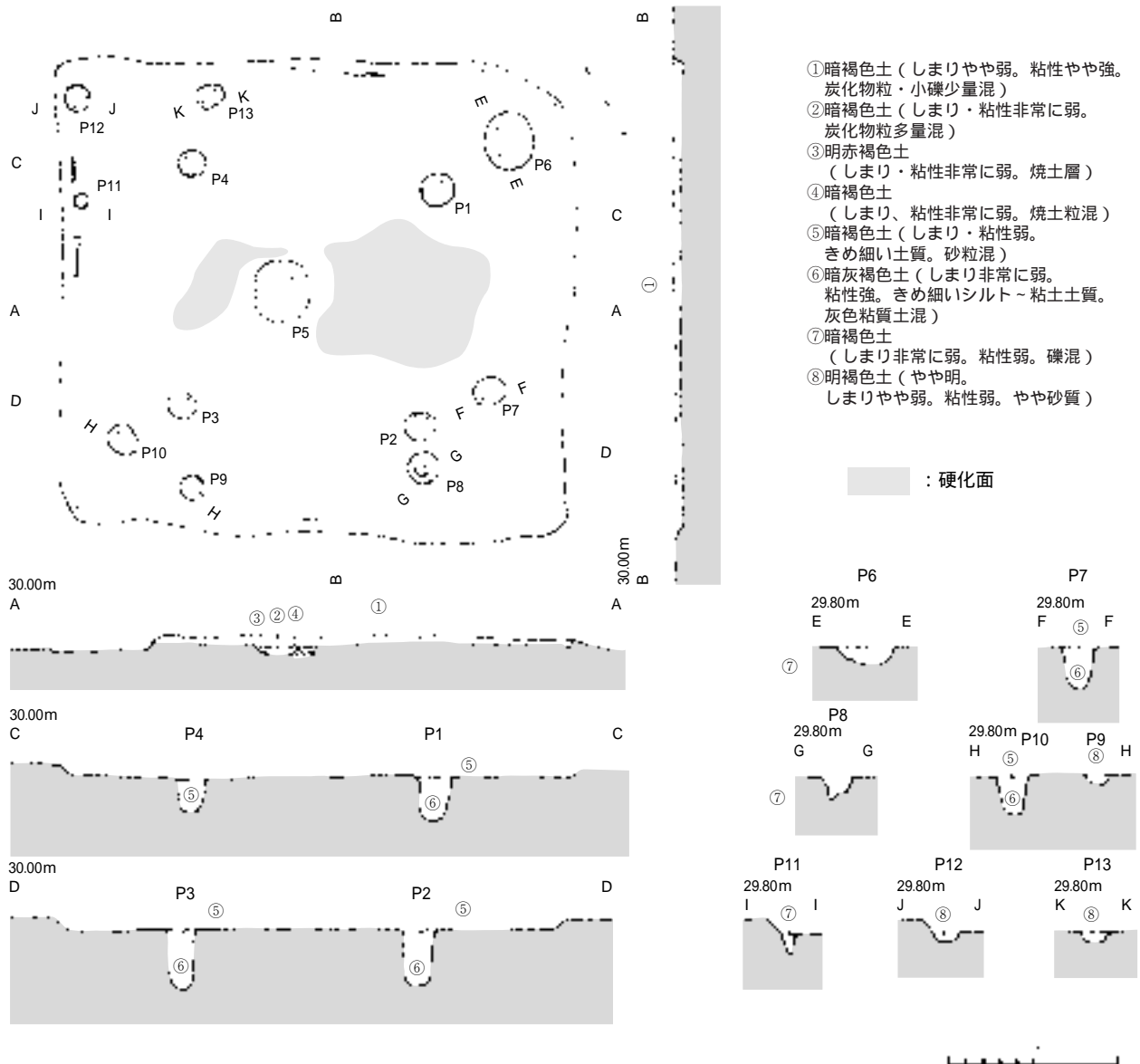
面・断面に接合痕が明瞭にのこる。94は高杯脚部である。やや粗雑な作りである。これらの土器は調整がいずれも類似し、ハケは条間が広く明瞭であり、ナデは丁寧なものが多い。

これらの遺物はほぼ古墳時代中期末の様相を示すことから、竪穴住居1は古墳時代中期末のものと考えられる。
(日置)

土坑4 (図32・33、図版24・51・52、表35)

竪穴住居1を埋没過程で土坑として利用したものである。竪穴住居1の埋没の途中で竪穴部掘り方の南東隅部を掘削して拡張している点や、拡張がなされた面で炭や土器がほぼそろって出土したことから、この面以上の埋土上層部分を別の土坑として認識した。

土坑4からは、基盤土中に含まれる人頭大の垂角礫や炭化材と共に、多量の土器が出土した。土器は竪穴部北西側で、垂角礫と共にまとまっており、竪穴部南東隅部では炭化材がまとまって出土している。この付近は竪穴部掘り方を再掘削して拡張している。ほかに焼土や被熱痕跡は認められなかった。土坑4の埋土は2層に分けたが、基盤土と近似したもので、混入物も少ない。自然堆積



とおもわれる。

出土した土器は全て土師器である。95～100・106は甕、101～105は高杯である。全体的に遺存状況がよい。甕は97を除いて、口縁部が、頸部で「く」字状に屈曲しそのまま直線的にやや開くもので、横ナデ整形するものである。95は口縁部の立ち上がりは短く、端部は面をなす。96は口縁部を内湾気味に開き、端部は丸く収める。98は頸部から直上に近く口縁部が傾き、端部は面をなす。99は頸部から直立に近い角度で、口縁部が立ち上がり、端部は面をなす。頸部から口縁部の器壁は厚い。100は肩部が張り、口縁部は上位がわずかに内湾させ、端部は丸く収める。97は口縁部が頸部から外傾し中位に稜をなす。複合口縁が退化したものである。106は器高が低く、胴径に対し口径が大きい。口縁部は頸部から外傾し、端部はそのまま丸く収める。高杯101は内外面とも赤色塗彩している。103はやや粗雑な作りである。杯部は深く下位でゆるく立ち上がる。口縁端部は面をなす。甕100はやや古い要素をもつが、甕97などは新しい。これらの土器はおおよそ古墳時代中期末の様相を示している。

出土土器からこの土坑は古墳時代中期末のものと考えられる。各遺物の出土状況には規則性が求

められないことから、埋没しつつあった竪穴住居掘り方を廃棄土坑としたものであろう。（日置）

竪穴住居2（図34～36、図版13・14・51・52、カラー図版1・2、表35）

<形態と構造>

E区西部、N10グリッドに位置する。前述のように、E区に集中する主要遺構はほぼ軸方向が揃うが、これのみほかのものと軸があわない。掘立柱建物3のP1・13・14に切られる。長軸5.8m×短軸5.6mの、ほぼ正方形に近い平面形を呈する。圃場整備によって上面を大きく削平されており、検出面からの深さは6cm前後と非常に浅い。床面までの埋土①層は自然堆積層で、層近似土をベースに土壌化した層が含まれる。床面は地山で、床中央が高く、端が低くなっていた。床面積は29.5m²を測る。床中央には地山が硬化した部分が見られる。床面端では周壁溝を確認しているが、遺存状態が非常に悪く一部にしか残っていない。周壁溝は残存状況のもっとも良好な部分で幅8cm、深さ4cmほどである。周壁溝の遺存状態が悪いことや、硬化範囲が床中央の一部に限られることから、本来の床面上面は大半が流失ないしは土壌化してしまったものと思われる。床面でピットを13基検出した。支柱穴はP1～P4でほぼ正方形に配置され、規模は径約35～40cm、深さは約40cm～65cmを測る。柱間距離は2.8mでそうろう。埋土はそれぞれ同じ層を含み、P4は⑤層の単層、ほかは⑤層と⑥層の2層で構成される。いずれの層とも柱穴の掘り方に流入した自然堆積である。P5が中央ピットで、浅い土坑状を呈する。埋土は3層確認した。中層の③層は焼土層で、②層には多量の炭化物が、④層には焼土粒が含まれることから、P5は火処であったと思われる。残りのピットはその機能、性格が不明なものである。P7とP10は埋土やサイズが支柱穴と共通しているので、この遺構に伴う柱穴である可能性が高いものの、配置に規則性を見出せない。そのほかのピットはいずれも柱穴とするには十分な大きさ、深さを備えていない。

<遺物の出土状況>

削平を大きく受けていたため、出土遺物は床面直上かそれに準じる位置に包含されていたもののみである。遺物の垂直分布を見ると、いずれも床面から数cm前後浮いている。また、前述したように床面自体の遺存状態が悪く、本来の床面がほとんど残っていない。こうした点から、これらは厳密な意味での床面直上出土遺物ではなく、廃棄時の原位置を完全には保ってはいないだろう。遺物は北東部にまとまりをもち、須恵器杯身112、土師器碗116、土師器甕118・120・121・122などが出土している。土師器甕122は大部分の破片がかたまってつぶれた状態で出土したが、一部離れた場所に散らばっていたものもある。二次的な移動があった可能性が高いだろう。ほかに西壁際中央部付近でほぼ完形の須恵器杯蓋107と土師器甕119が隣り合って出土している。遺物以外にも、住居内からは粘土やこれらの粘土が焼けてできた焼土の広がる範囲をいくつか見つかっている。これらは2～3cmほどの厚さで、数cmから30cmほどの大きさをもつ。北西部と北東部に分布のまとまりがある。粘土はローム起源のものと思われ、遺跡内の地山にはない。近隣の丘陵から持ち込んだものであろうか。これらの粘土は住居の構築材に由来するものと思われるが、出土状況からはこれらの性格を判断できない。

<出土遺物>

出土遺物は土器のみで、107～113が須恵器、114～122が土師器である。

須恵器の器種には蓋杯の蓋と身、甕がある。107～111は杯蓋である。108・109は外面肩部に沈線

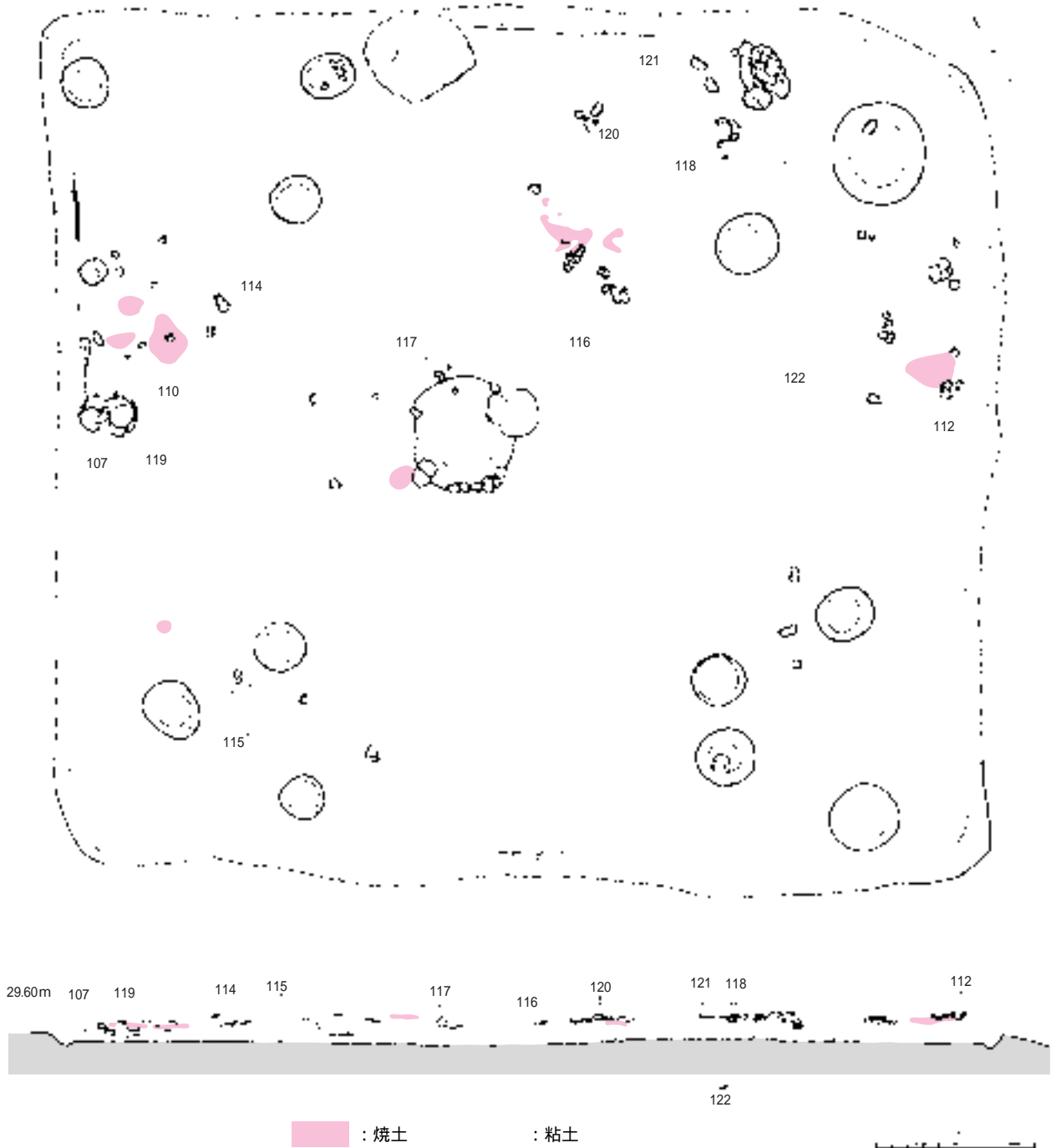


図35 竪穴住居2(2)

を施して稜をつけ、口縁内面には端部からわずかに上に浅く沈線を入れて段を作る。107・111は外面の稜や口縁内面端に段を持たないタイプ。ほぼ完形の107の天井部は外周に3周ほどケズリを施し中央をナデで処理する。以上の特徴からこれらの杯蓋は大谷分類のA5型に相当し、大谷編年の出雲4期、陶邑編年のTK209型式併行にあたる。112は杯身。立ち上がり部分が高く、かなり内傾し、全体のバランスが悪い。立ち上がりの高さ以外では杯蓋と同様A5型の特徴を備えているので、蓋と同型式期のものとおもわれる。この杯身には外面に赤色顔料で記号状のものが施されている(これを「彩色記号」と呼ぶ。以下同)。現状ではケズリとナデの境に器体横方向に引かれた一本線の記号が二箇所観察できる。本住居内からは彩色記号の見られる須恵器はこれ1点のみの出土であるが、竪穴住居3からも出土している。彩色記号須恵器は一般に古墳などから出土するもので、祭

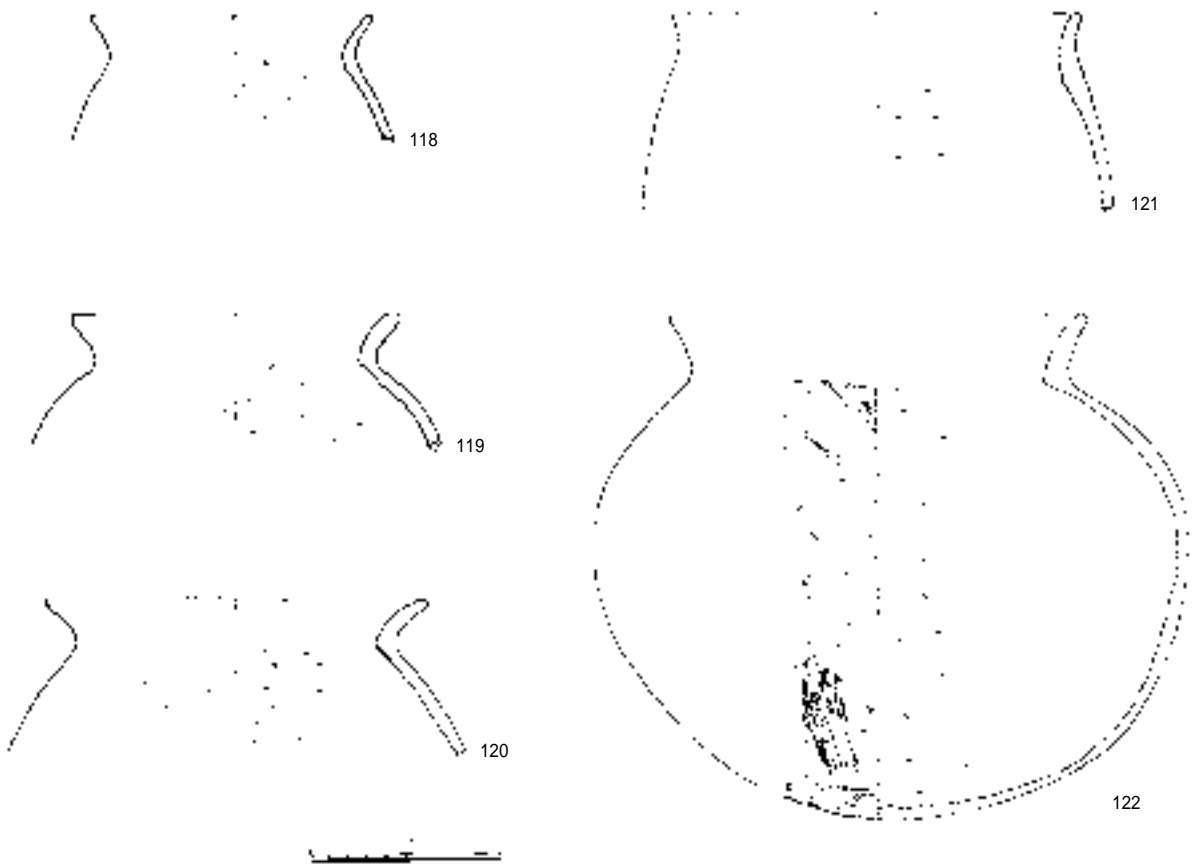
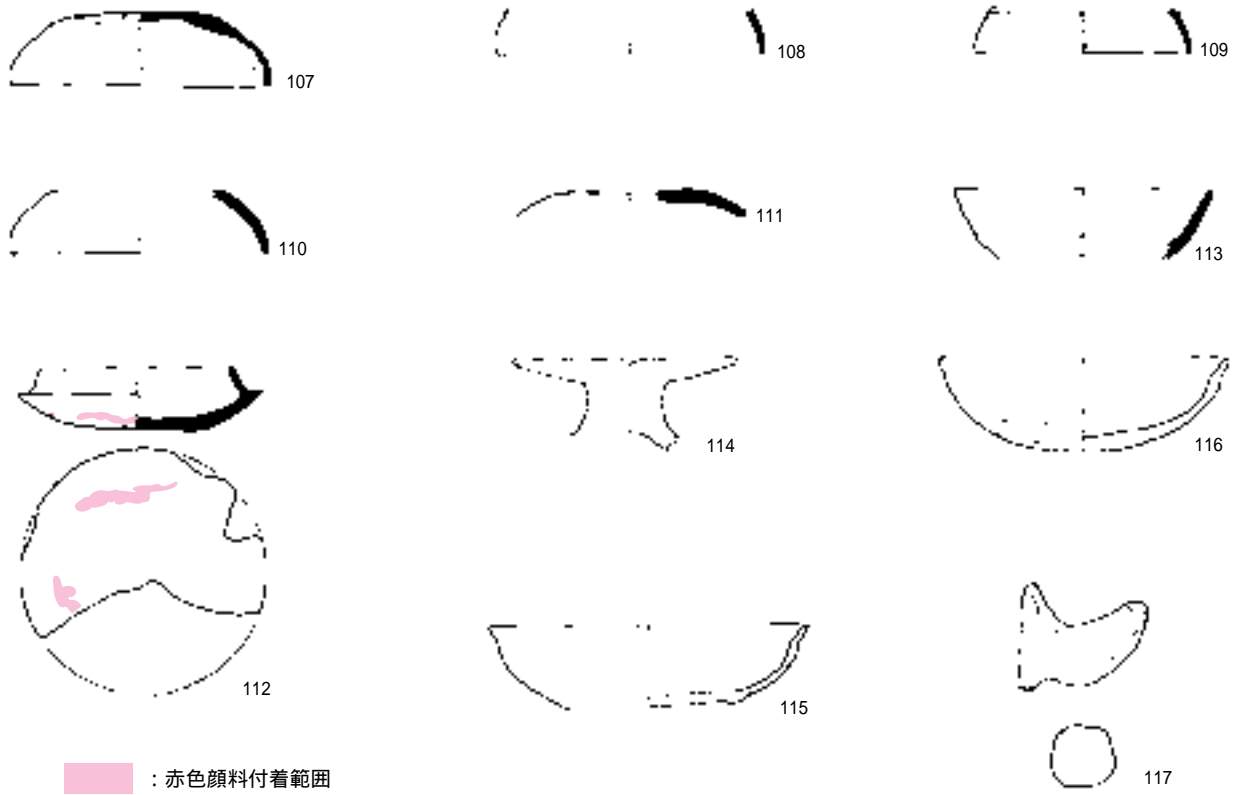


図36 竪穴住居 2(3)

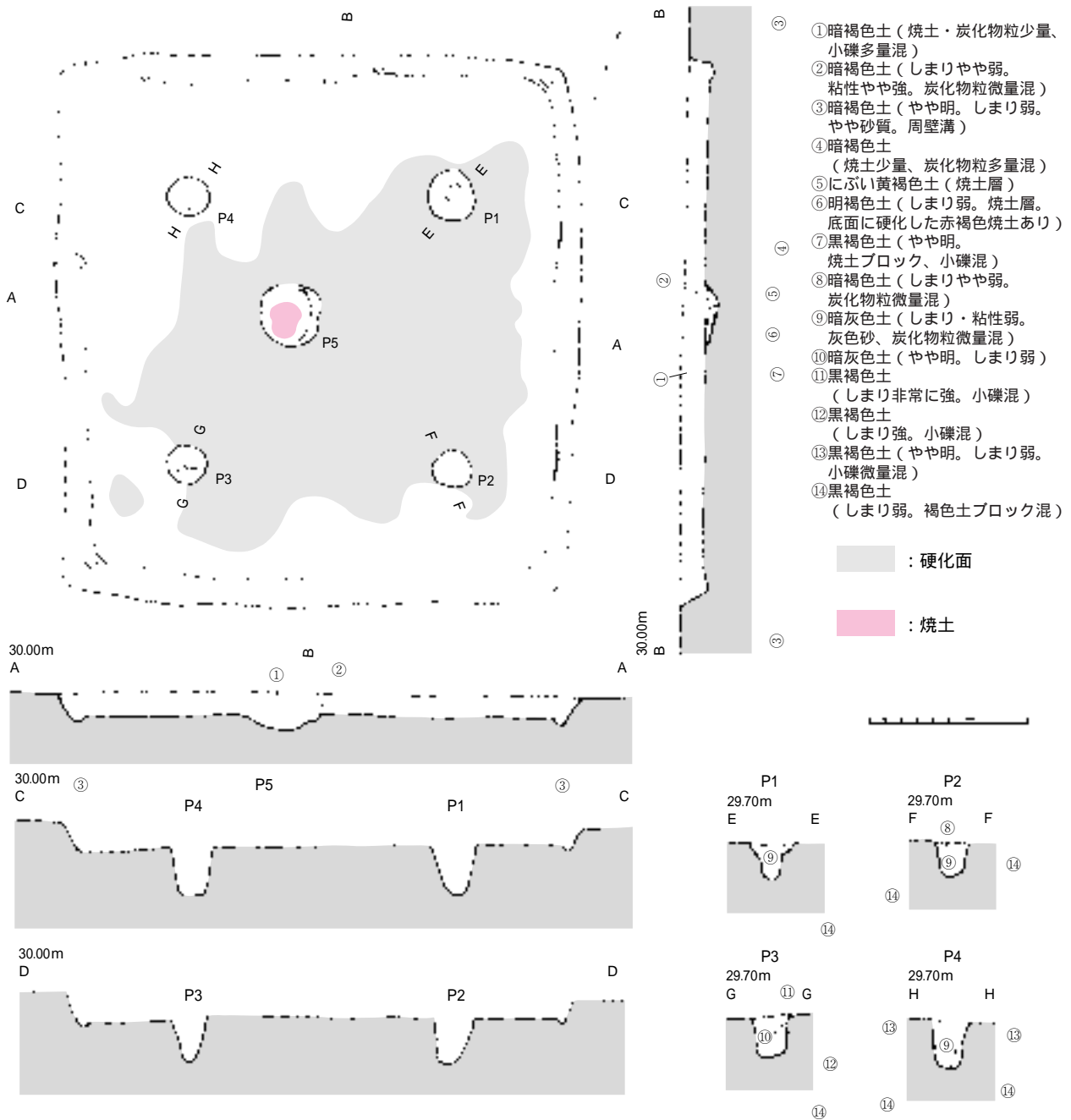


図37 竪穴住居3(1)

祀的な意味合いが強い遺物である（谷本1988・古川1995）。したがって、本住居では廃絶に際して儀礼的な行為が行われた可能性が指摘できるかもしれない。113は甕の口縁と思われる。

土師器は甕、高杯、碗、甑などが出土している。114は特異な器形で、平たい円盤状の受け部に脚がつく。受け部が器の形をなさないの器台とした。厚手のつくりで焼きが非常に良く、胎土の様子もほかの土師器と異なる。115は高杯の杯部。碗形で口縁内面端部は稜がついて外反する。脚部との接合面にケズリの痕跡が残る。116は碗で、口縁内面端部に段をもつ。117は甑の把手部分。118～122は甕。すべて単純口縁である。121は口縁がほぼ直立し、肩部をもたないので、長胴甕であろう。ほかは口縁が頸部で屈曲して外反し、口縁端部をすぼめて収め、なで肩の器形をなす。ほぼ完形の122は胴部の径が大きく幅広の球形をなす。

これらの出土遺物からこの竪穴住居は古墳時代後期末のものと考えられる。

（北）

竪穴住居3（図37～41、図版14～17・52～54・56、カラー図版1・2、表35～37・61）

<形態と構造>

E区南西隅、P10・11グリッドに位置する。北西隅部が調査地外に広がるが、平面形は方形を呈する竪穴住居である。掘り方上面での規模は長軸7m、短軸6.5m、床面では長軸6.3m、短軸5.8m、床面積は36.4㎡を測る。上面は削平を受けているが、検出面からの深さは25～35cmを測る。同時期の竪穴住居は5m前後のものが多いので、規模は大きな部類に入るであろう。

埋土は暗褐色土系の2層に分けられる。いずれの層とも自然堆積と考えられる。埋土中からは多くの遺物が出土しており、遺物からは大きな時期差は見られないことから、短期間に埋まったものと考えられる。

床面からはP1～5と周壁溝を検出した。P1～4は主柱穴で、P1は径66×59cm、深さ64.0cm、底面の標高28.64m、P2は径52×45cm、深さ55.7cm、底面の標高28.74m、P3は径51×47cm、深さ56.4cm、底面の標高28.76m、P4は径53×49cm、深さ62.9cm、底面の標高28.63mを測る。柱間は、P1 - P2が3.5m、P2 - P3が3.2m、P3 - P4が3.4m、P4 - P1が3.3mを測る。いずれも平面形は円形に近い形態で、土層断面からは柱痕もしくは抜き取り痕が確認できた。P5はいわゆる中央ピットにあたり、径76×72cm、深さ13.5cm、底面の標高29.16mの隅丸方形を呈し、東側が二段掘りになっている。5cm程の厚さの焼土層である⑤層が、④層にパッキングされるように堆積している。焼土がみられるため、P5は火処であったと思われる。周壁溝は幅20cm前後で、深さ3～6cm、北西部を除きほぼ全周している。

貼床は確認されなかったものの、主柱穴をむすんだ内側とそのやや外側では床面が硬化している範囲が確認された。硬化範囲は床面の標高がほぼ29.30mであるが、周溝の肩付近では標高が29.20mとなっており、中心から外に向けて床面のレベルは下がっている。この硬化範囲部分は、生活スペースとして踏み固められたものと考えられる。P3の⑪層も掘り方込め土が硬化したものである。

<遺物の出土状況>

①②層中からは多くの遺物が出土している。床面直上出土のもの以外の埋土中出土のものはポイントで取り上げた。埋土中出土遺物はきわめて量が多かったが、いずれも土器の部分的な破片で、個体数も多い。住居の埋没過程で、投棄されたか、流入したものであろう。

床面直上出土の遺物は須恵器を中心に、土師器甕、甑の把手、鉄鏝などがある。遺存状態がよく、須恵器はいずれもほぼ完形に復元でき、土師器甕も完形となった個体が1個体ある。原位置性の高いと思われる須恵器や完形に復元できた甕は床面の縁辺寄り、特に床の四隅で出土している。床の北東隅では有蓋高杯の蓋159と壺162が近接して出土した。159は裏向きで、162は正位であった。南東隅では彩色記号の施された杯身156が正位で出土したほか、半分に割れた有蓋高杯の蓋160の破片の一方が裏向きで出土している。南西隅付近では、160のもう一方の破片が裏向きで出土したほか、杯身158が伏せた状態で出土した。西壁際の中央付近では、有蓋高杯161の杯部のみが伏せた状態で出土している。脚部は直線距離で東に約33m離れたP23から出土したものが接合している。遺構間で接合が見られるので、両遺構の関係が密接であることが分かる。両者は同時期に廃絶された可能性が高く、その際に161を杯部と脚部に折り分けてそれぞれ廃棄した可能性が高い。P4の西側ではほぼ完形に復元できた土師器甕161がつぶれた状態で出土した。住居中央のP5の上面からは有

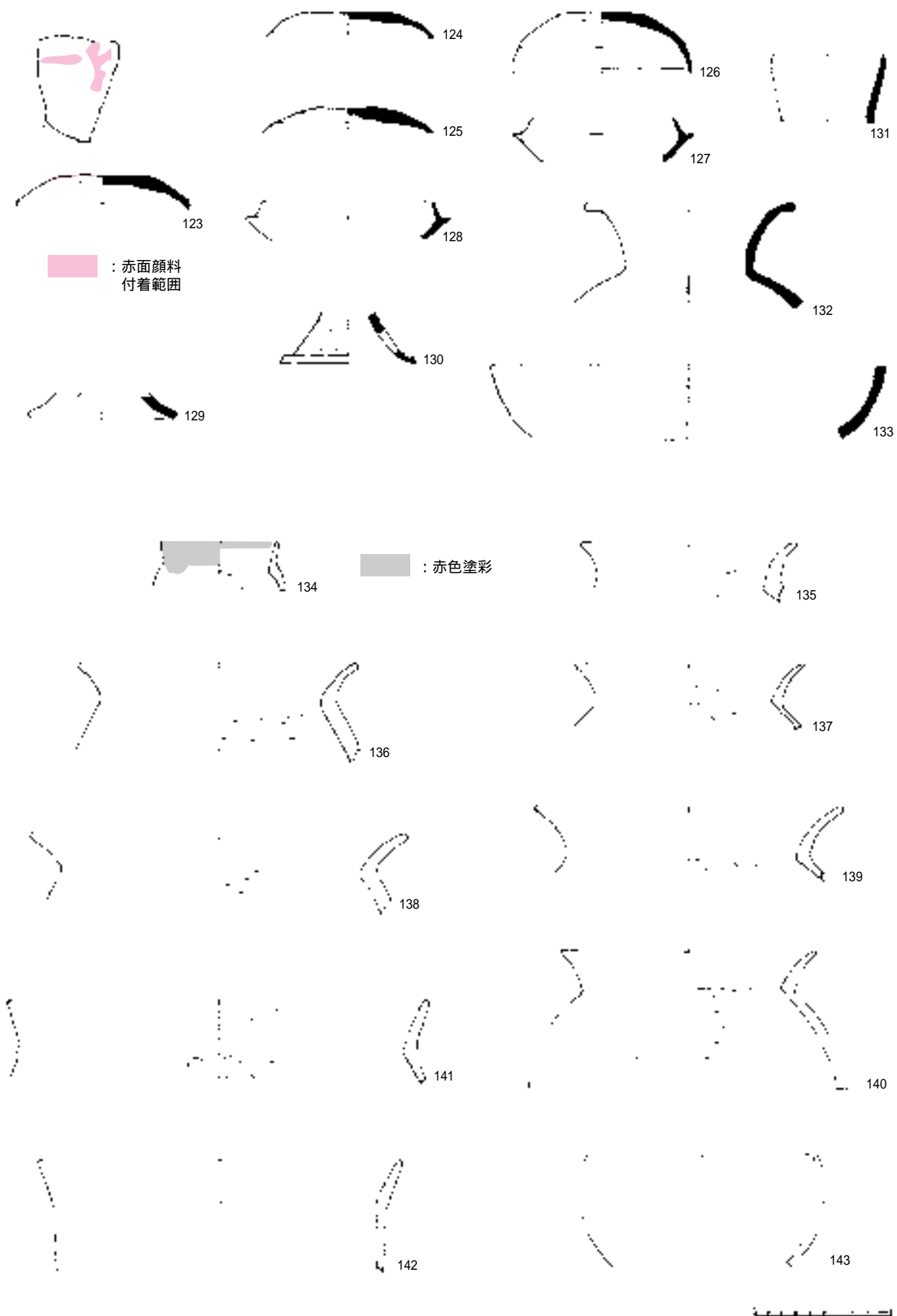


図38 竪穴住居3(2)上層出土遺物

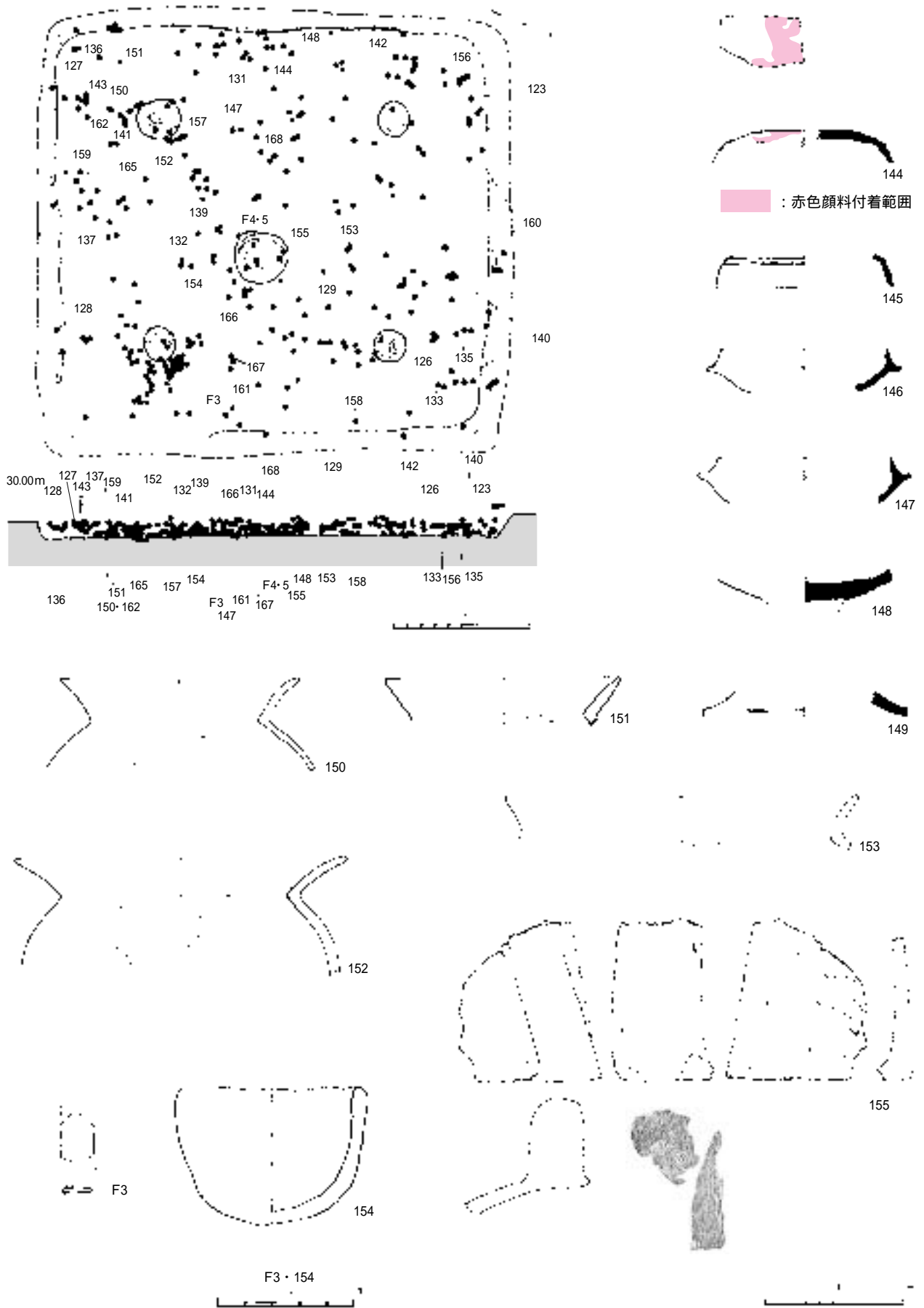


図39 竪穴住居3(3)中～下層出土遺物

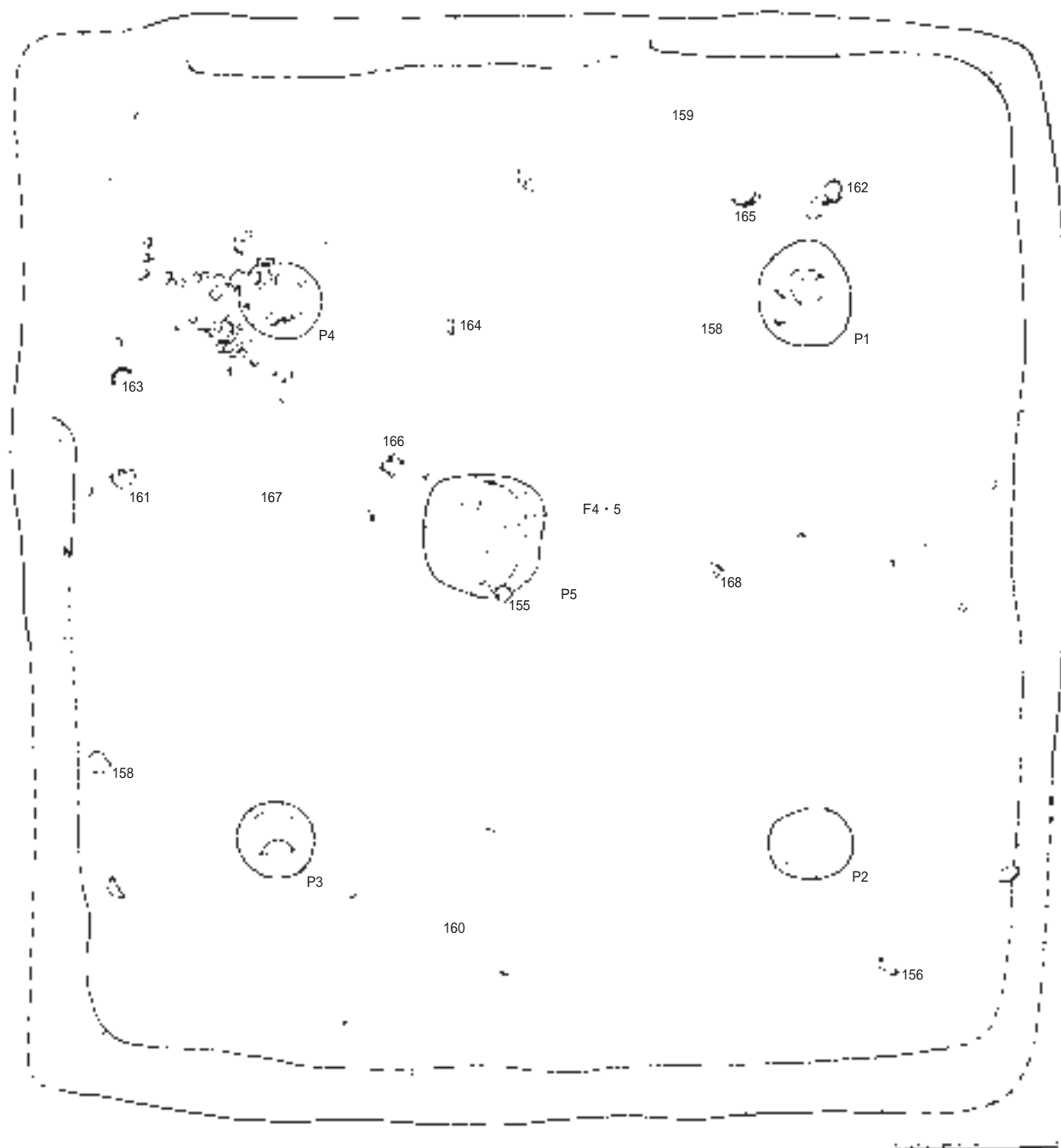


図40 竪穴住居3(4)

茎三角式鉄鏃（F4）と有茎柳葉式鉄鏃（F5）が2本まとまって出土している。出土した時点では両者は錆で固着していた。またP5の肩付近からはやや浮いてはいるものの、移動式竈の右基部が出土している。

原位置性の高いと考えられる遺物の出土状況からは、意図的な廃棄行為があった可能性が考えられる。遺構間での接合が見られた161は明らかに意図的な廃棄行動があったことを示しているほか、彩色記号を持つ156や、F4・F5の2本の平根式鉄鏃の出土も特異な状況であろう。彩色記号須恵器は古墳などに副葬・供献されるもので、集落内出土例はほとんど知られておらず（谷本1988・古川1995）、また平根式鉄鏃も集落内で出土することは一般的ではない。こうしたことから、住居の廃絶にともなってこれらの遺物を用いた廃絶祭祀が行われた可能性も考えられるだろう。

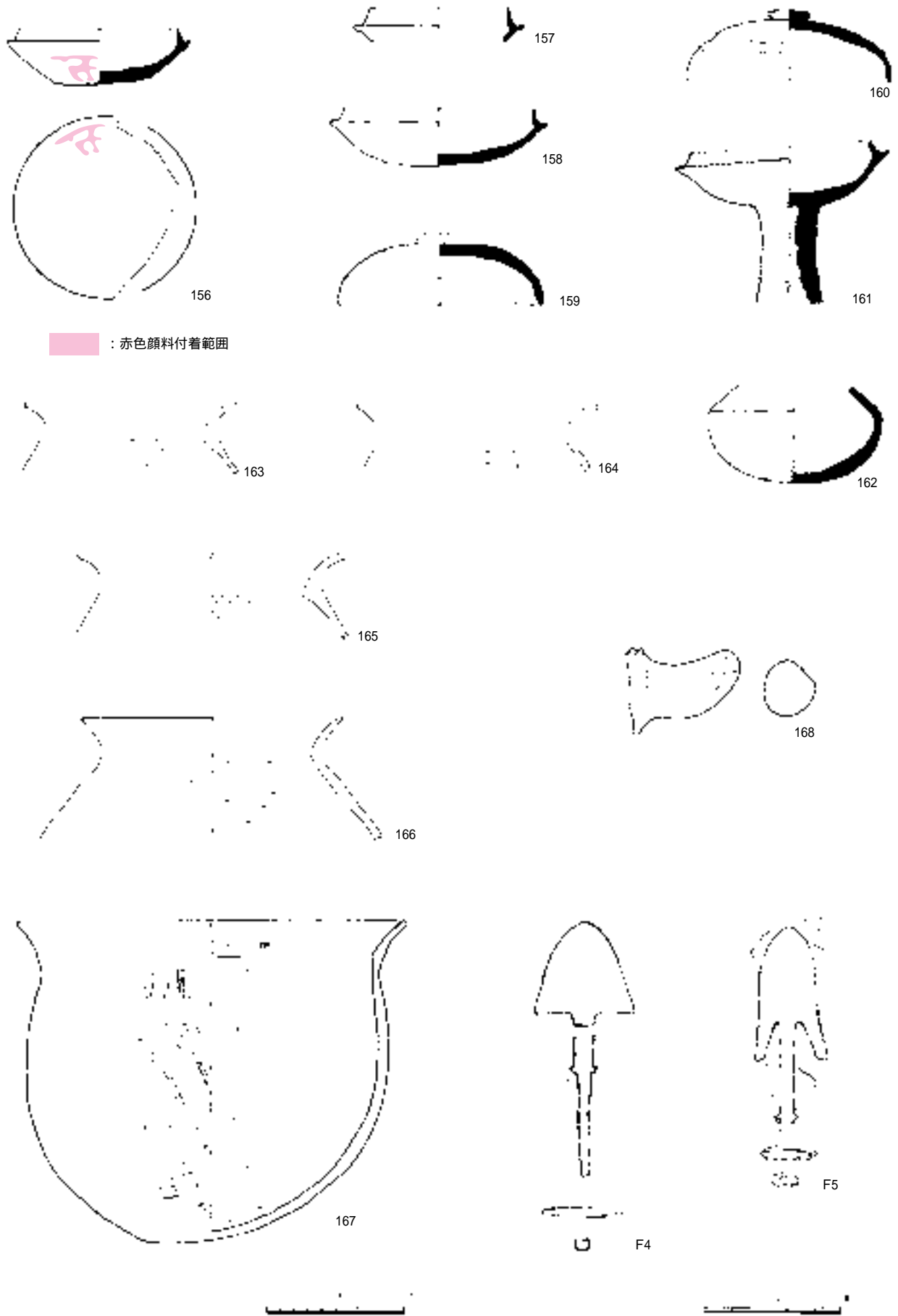


図41 竪穴住居3(5)床面直上出土遺物



図42 豎穴1(1)

< 出土遺物 >

埋土中からは多くの遺物が出土した。図
 化可能なものの大半は示している。床面直
 上出土のものは図化し得たものはすべて掲
 載した。

123～143は①層出土の土器である。123
 ～133は須恵器である。123～126は杯蓋。
 いずれも大谷分類のA 5型ないしはA 6型
 の特徴をもつ。123は彩色記号をもち、天
 井部に赤色顔料で「×」状の記号を施して
 いる。127・128は杯身。いずれも杯蓋と同
 一の型式に収まる。129・130は高杯脚部。
 131は瓶類か壺の口縁。132は壺。133は大
 型の高杯杯部か。外面にはカキメが施され

る。須恵器はいずれも大谷編年出雲4期、陶邑編年TK209型式併行期に位置づけられる。134～
 143は土師器である。134は小型の甕で口縁に赤色塗彩が見られる。135～142は甕でいずれも口縁端
 部をすぼめて収める単純口縁。135～140のように頸部が「く」字状に大きく屈曲するものと、
 141・142のように頸部がほとんど屈曲せず口縁が緩やかに外反するものがある。143は^{まり}埴である。

144～155・F3は②層出土の遺物である。145～149は須恵器。144・145は杯蓋。144は2本の明
 瞭な沈線が肩部に入り、天井部は全面がヘラケズリで処理されるので、大谷分類のA4型にあたる。
 なお、この個体の天井部には赤色顔料が付着している範囲が認められた。ただし、その範囲は明確
 な記号状をなさない。145には端部にわずかな段が見られる。天井部を欠くが、残存部位から判断
 すると大谷分類のA3a型にあたる可能性が高い。146・147は杯身。148は高杯杯部である。149は
 高杯脚部。これらの須恵器はおおよそ出雲4期、TK209型式併行期に比定される。150～154は土
 師器。150～153は甕で、150～152は頸部が大きく屈曲する。153は口縁が短く外反する。154は手づ
 ぐね土器。155は移動式甕の右前基部である。F3は薄板状の不明鉄片である。刀子か鉈の破片か。

156～167、F4・F5は床面直上出土の遺物である。156～162は須恵器。156～158は杯身。156
 は側面に赤色顔料で「干」状の彩色記号を施している。明瞭に見えるこの部分以外にもうっすらと
 赤色顔料の付着している部分が観察できる。この赤色顔料は蛍光X線分析の結果から、酸化鉄であ
 る可能性が考えられる(第6章第1節参照)。159・160は有蓋高杯の蓋。159はつまみ部が剥落して
 いる。胎土や色調から161とセットになる可能性がある。160はボタン状のつまみがつき、肩部にヘ
 ラによる弱いキザミが施される。161は有蓋高杯で、前述のように杯部が本遺構から、脚部がP23
 からの出土。脚部は折り取り後、さらに杯部との接合面側から打撃を受けて打ち欠かれている。
 162は壺(短頸壺?)と考えられる。これらの須恵器はいずれも出雲4期、TK209型式併行期のも
 のであろう。163～167は土師器甕。163～166は頸部が屈曲する。167は口縁が緩やかに外反するタ
 イプで、口径が大きく、幅広の器形をなす。F4・F5はともに平根式の鉄鏃。F4は有茎三角式
 でF5は有茎腸袂柳葉式、ともに関に棘状突起をもつ。

これらの出土遺物の時期からこの豎穴住居は古墳時代後期末のものと考えられる。(三木)

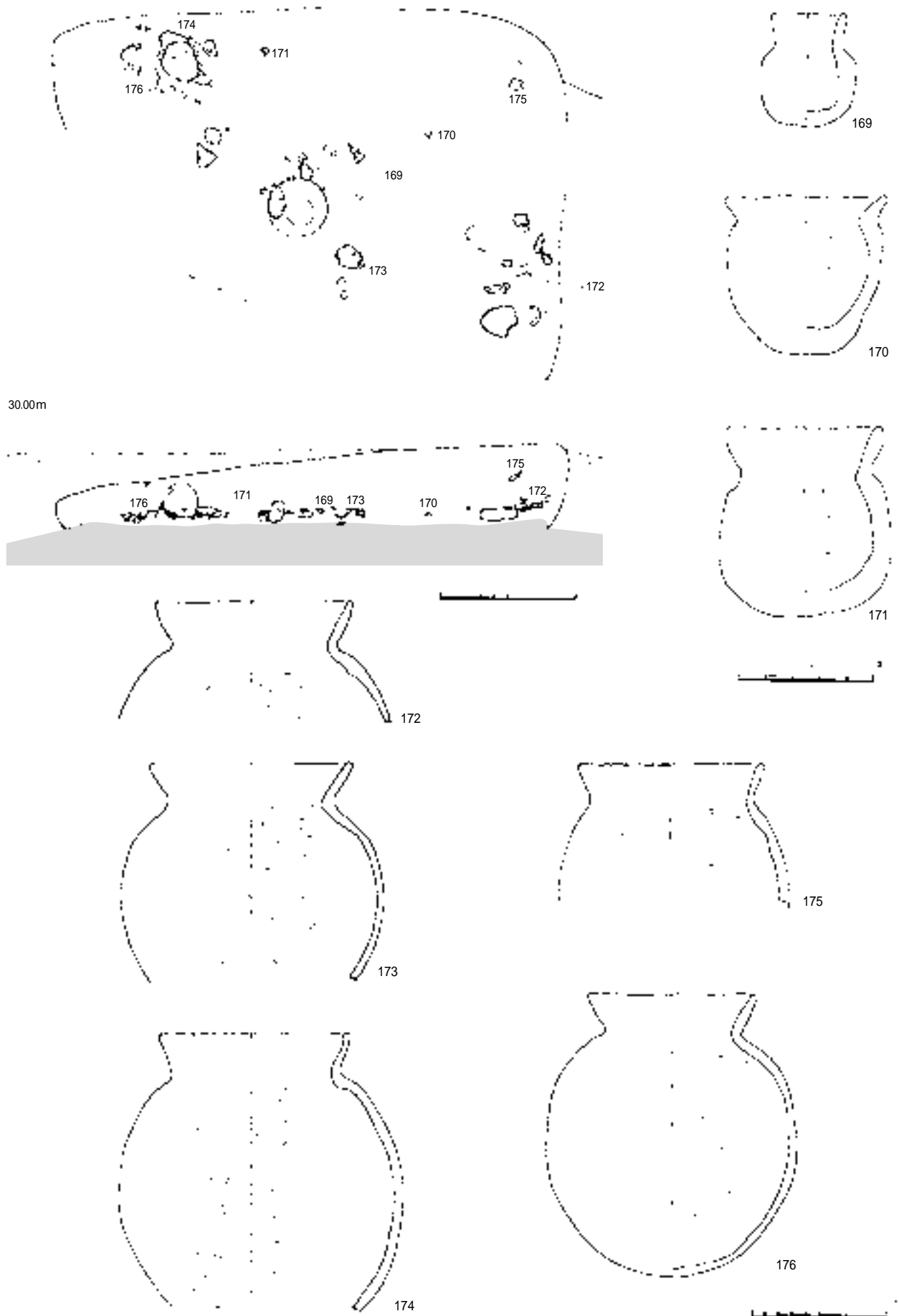


図43 竪穴1(2)

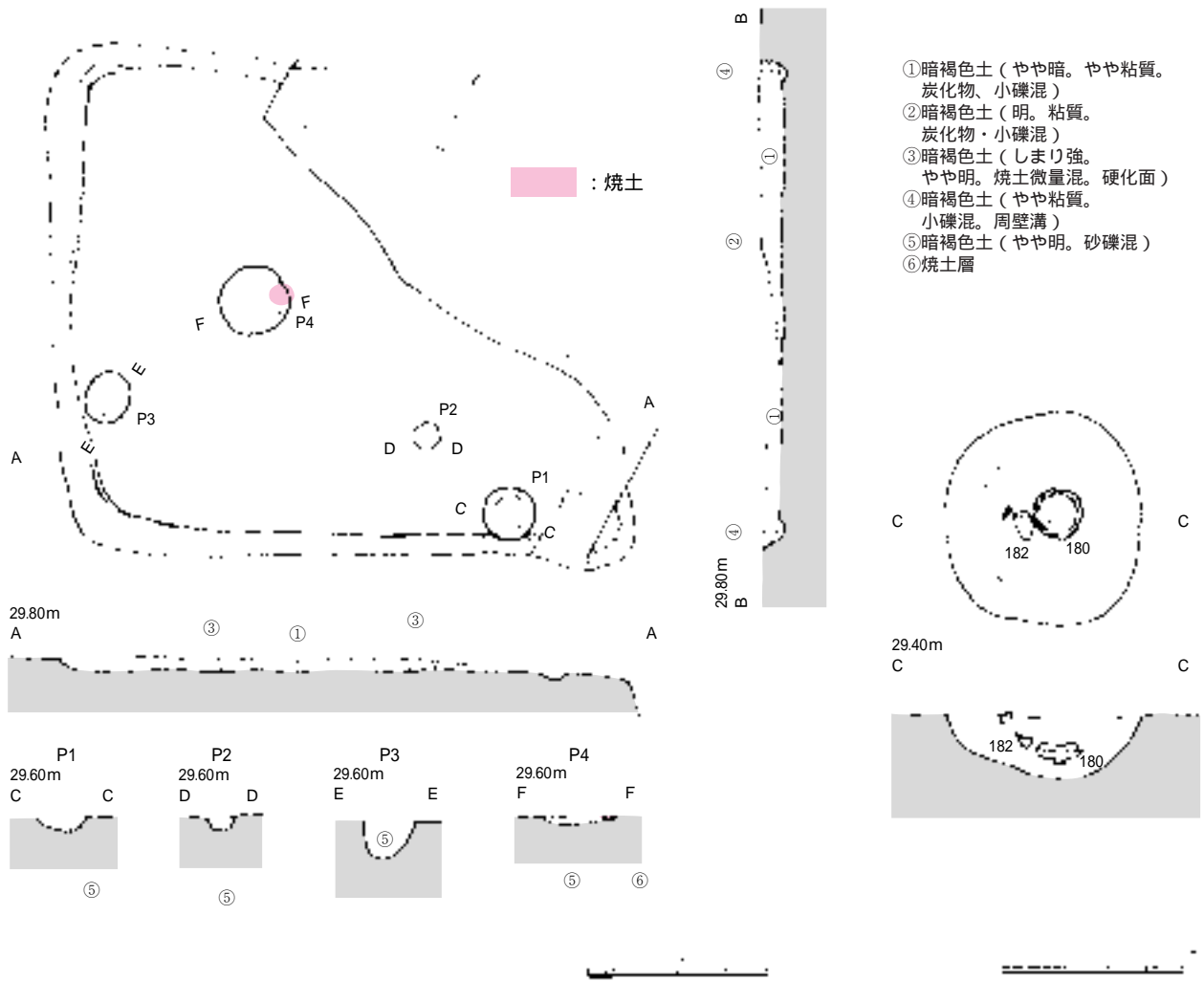


図44 竪穴2(1)

竪穴1 (図42・43、図版21・22・55・56、カラー図版2、表37)

<形態と構造>

竪穴住居状の掘り込みをもつが、床面に竪穴住居のように規則的に柱穴をもたず、上屋構造を推察するのに十分な情報を持たない遺構を竪穴とする。第1遺構面では2基が見ついている。

竪穴1はC区、J5グリッドに位置する。ちょうど圃場整備による段切りを受けた部分にあたったため、遺構は斜めに削られている。東を高く、西に向けて低く削られており、遺構の西側3分の1ほどは床面まで完全に削られている。平面形は方形で、残存している部分で長軸(南北)3.8m、短軸(東西)2.8mを測る。遺存状態の最もよかった東端部で検出面から床面まで深さ約50cmを測り、埋土には砂礫が多く含まれる黒褐色土が2層見られた。床面は地山削り出しで、残存部分の床面積は5.4㎡を測る。床面でピット1基確認した。深さは5cm程度と浅く、柱穴とは捉えられない。埋土は②層であった。ほかに床面施設は確認していない。

<遺物の出土状況>

ほぼ床面直上から土師器が出土している。特徴的なのは完形の手づくね土器(169~171)が3個体出土していることだろう。169が中央のピット付近で、170が南東よりで、171が東壁沿いでそれぞれ見ついている。ほかに甕が5個体出土した。このうち174と176は北東隅でまとまって見つ

っている。とくに174は大型の礫の下から見つかっている。この礫は意図的に遺構内に投棄されて土器を破壊したものである可能性もあるかもしれないが、ほかにこのような状況で出土した土器はないので人為性を積極的に評価できない。いずれにしても、174の甕は礫によって押しつぶされて床に密着していたため、原位置性が高いといえる。

本遺構では手づくね土器が出土したことから、祭祀的な行為が行われたことを想定できる。土器の出土状況を積極的に評価すれば、廃絶儀礼に関わるものであった可能性が指摘できるだろう。

< 出土遺物 >

出土遺物はすべて土師器である。169～171は手づくね土器。いずれも成形、調整が粗雑で、器面の凹凸が著しい。169は器高4.2cmと非常に小型で、口縁がほぼ直立し、高く伸びる。壺を模したものであろうか。170と171は甕を模したものである。170は口縁が短く外反し、胴部がほとんど張り出さず、細長い器形を呈す。171はこの遺構内で共伴する土師器甕とほぼ同じ形態を呈する。172～176は甕である。いずれも単純口縁で、口縁が「く」字状に屈曲してほぼ直線的に立ち上がる。端部はやや肥厚させて丸く収める。口縁部から頸部にかけては厚めでしっかりしたつくりをなす。外面のハケ目は条間が広く、深くはっきりと施されている。こうした特徴から、これらの甕は中期末のものであろう。

本遺構の時期は出土遺物から中期末のものと考えられる。

(北)

竪穴2 (図44～47、図版22～24・54～56・カラー図版2、表37・38・59・61)

< 形態と構造 >

D区北端、M9・10グリッドに位置する。北東部1/3は排土搬出の際に重機で破壊してしましたが、掘り方上面の規模が長軸6.2m、短軸5.6m、床面が長軸5.8m、短軸5.0m程度の長方形の竪穴になると想定できる。検出面からの深さは最も残りの良い北西部で25cm程度、残存床面積は21.3m²であるが、本来は28.9m²程度の規模になると想定される。同時期の竪穴の中では規模は大きい部類に入るであろう。

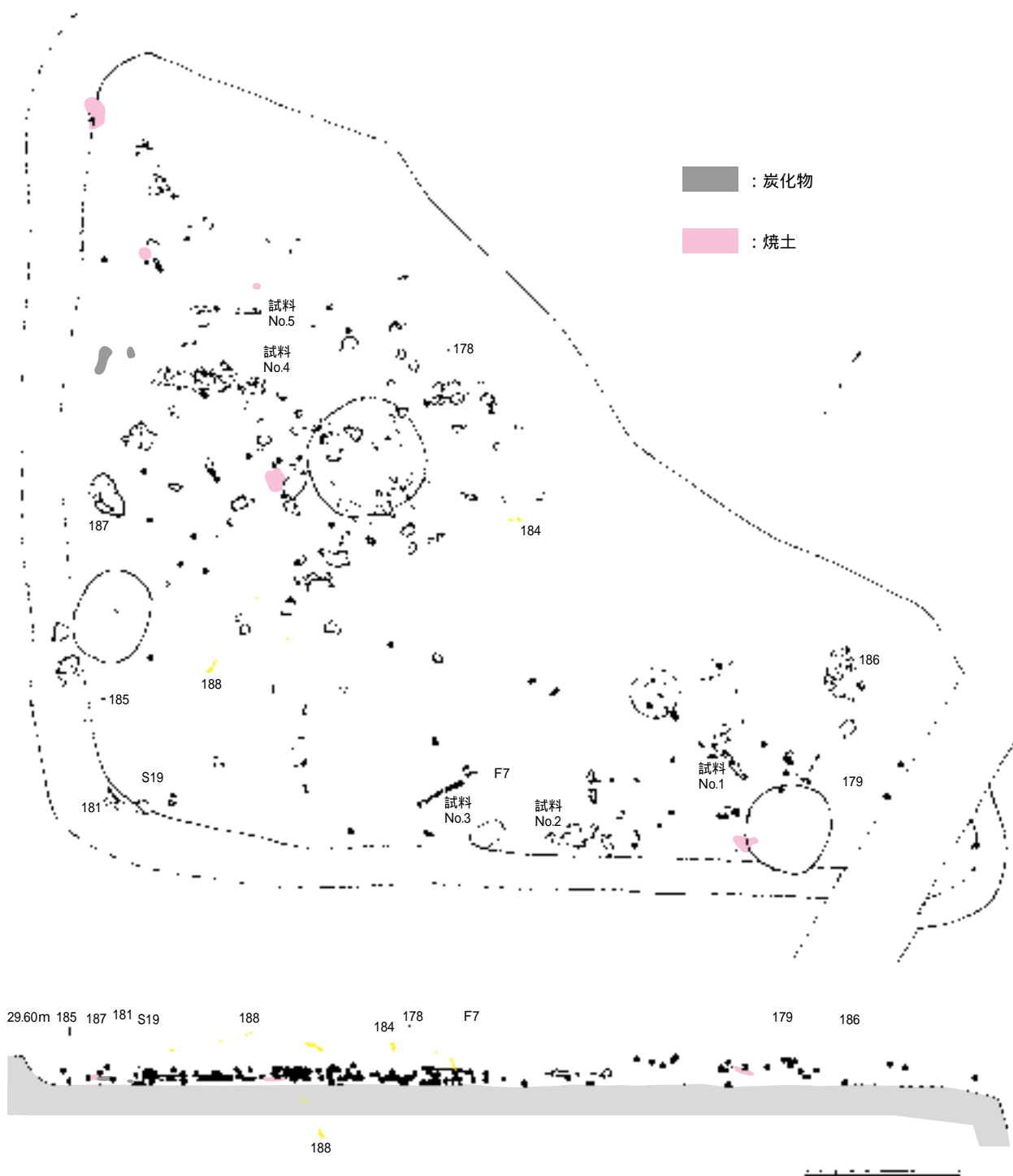
竪穴部埋土の残りは悪く、暗褐色系の2層が確認できた。①層は北側でしか見られない。

床面からはP1～P4と周壁溝を検出した。周壁溝は幅20～15cm、深さ2～6cmで一部検出できなかったもののほぼ全周していると考えられる。ピットは、P1が径55cm、深さ18cm、底面の標高29.17m、P2が径32cm、深さ17cm、底面の標高29.07m、P3が径60×48cm、深さ42cm、底面の標高28.76m、P4が径76cm、深さ11cm、底面の標高29.11m、を測る。埋土の一部に焼土層が確認できた。P3がやや深いものの、その他はいずれも浅く、配置からも主柱穴になるとは考えられにくい。周辺にも関連すると思われるピットが検出できなかったため、竪穴とした。

貼床は確認できなかったものの、竪穴住居2・3と同様に硬化した層を確認している。床面としている地山層は礫を多く含むため、平面での範囲は明確にはできなかったが、断面で確認している(③層)。

< 遺物の出土状況 >

埋土中からは多くの遺物が出土しており、いずれも床面からはわずかに浮いているが、ほぼ床面直上と考えてよいレベルでの出土である。平面的な分布は特に西半部分に集中がみられる。P4周辺からは移動式竈(188)の破片が散らばった状態で出土しており、その西側からは甕(187)が出



竪穴 2 内出土炭化材樹種同定結果

試料	樹種	試料	樹種
1	広葉樹	4	コナラ属アカガシ亜属
2	ケヤキ	5	ヌルデ近似種
3	ヌルデ近似種		

図45 竪穴 2(2)

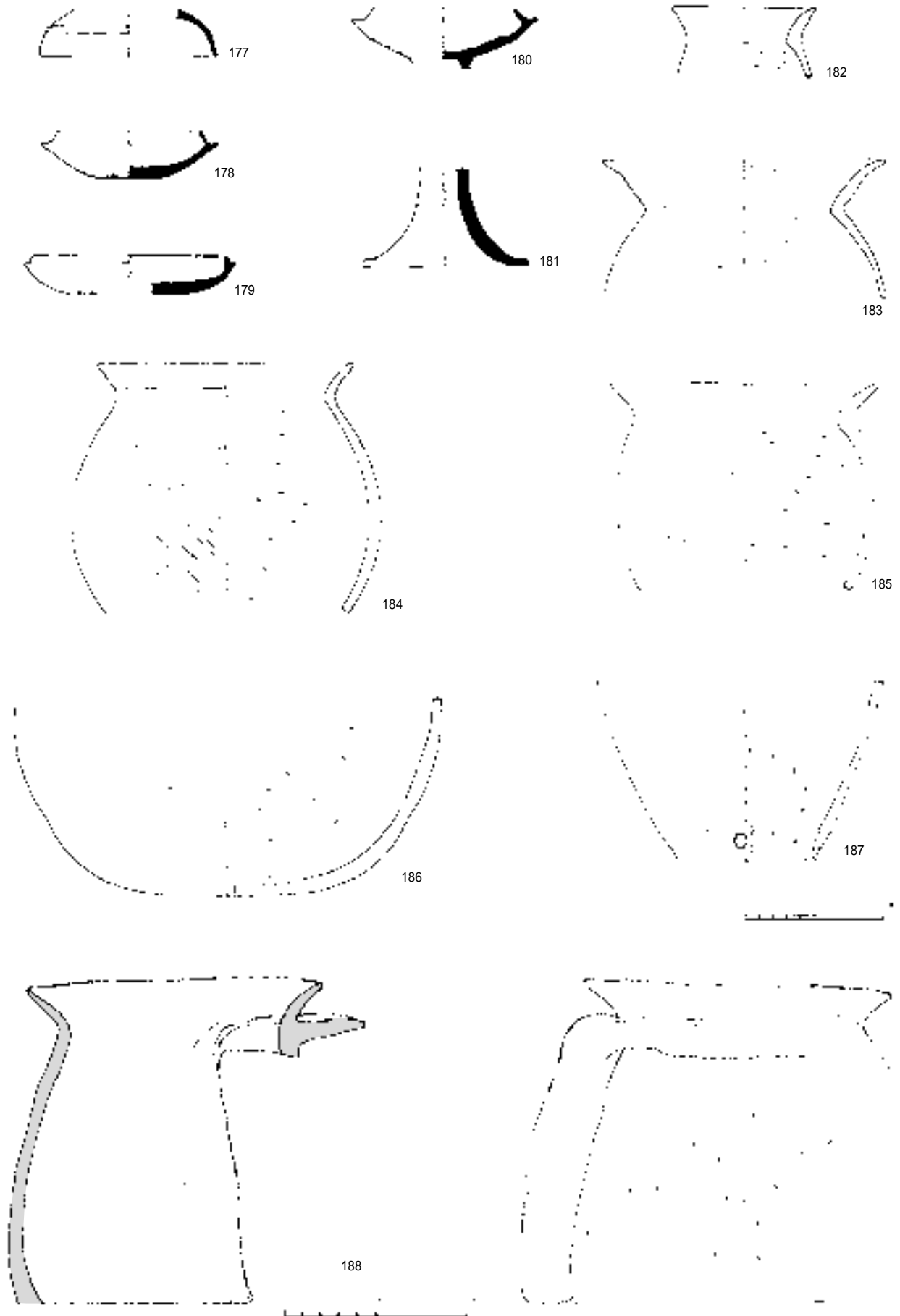


图46 豎穴2(3)

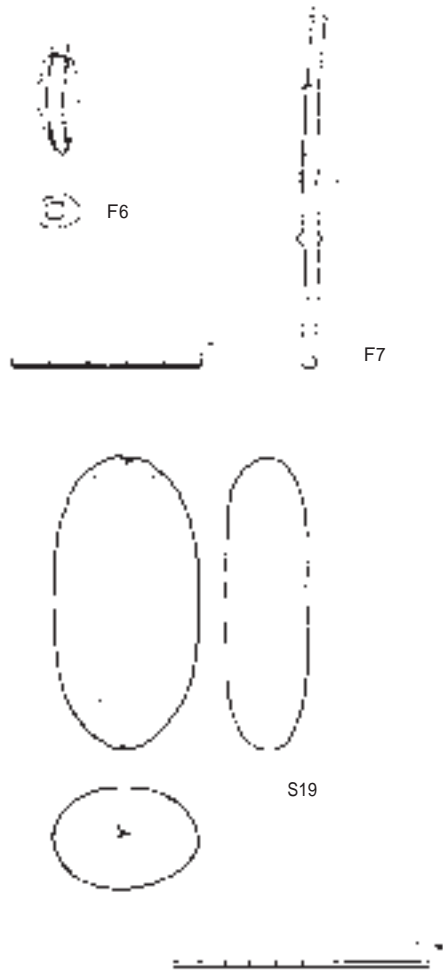


図47 竪穴2(4)

土している。P1からは高杯の杯部(180)が正位で出土している。

床面直上からは炭化材が、下層からは焼土や炭化物が検出されている。このことから竪穴2を構築する上での何らかの部材があり、焼失した可能性がある。短絡的に考えると、上屋構造の一部であると考えられるが、竪穴遺構には上屋を支持する柱穴が認められないことから、どのような構造になっていたのかは判明していない。そのため一概に上屋構造のものとは判断できないであろう。検出された炭化材試料のうち5点に関し、樹種同定を行った。その結果、3種類もしくはそれ以上の樹種が使用されていたことが判明した。このことから構築物の部位によって樹種を使い分けていた可能性が考えられるだろう(第6章第2節参照)。さらに試料1・3・5に関しては放射性炭素年代測定を行った。しかし1がやや近い年代値を示した測定結果が出ているものの、3・5は遺物などから見られる竪穴2の年代観とは合致しない(第6章第3節参照)。

<出土遺物>

177~181は須恵器である。177は杯蓋。肩部に2条の沈線を施し、明瞭な稜を作り出している。口縁内面端部にわずかに段をもつ。大谷分類のA3a型にあたる。178・179は杯身である。大谷分類のA5型前後に位置づけられるだろう。

180は有蓋高杯の杯部である。181は高杯の脚部である。長脚で、透かしは見られない。焼成は悪い。これらの須恵器はおおよそ出雲4期、TK209型式併行に位置づけられるだろう。182~188は土師器である。182~186は甕。182は小型の甕で、口縁がやや緩やかに外反し、肩部が張らない細身の器形をなす。184・185は頸部が「く」の字に屈曲するタイプで、胴部が球形をなす。186は鉢ないしは甕の胴部下半で、底部が平たく、鍋状の器形となる。187は甕。口縁側が広がる円筒形の器形をなす。底部の平面形は楕円形をなし、図の横方向が長軸となる。底部端付近には短軸方向に浅木孔として2方の円孔が器体内面側から棒状工具によって施されている。188は移動式の竈である。掛口は外反して甕状口縁を呈し、庇は付け庇、焚き口は立面形が台形に近い。F6・F7は鉄器。F6は鉄鏃の茎と思われる。F7も鉄鏃で、長頸鏃の頸部および茎部片。関に棘状突起がつく。S19は敲き石である。

これらの出土遺物の時期からこの竪穴は古墳時代後期末のものと考えられる。(三木)

掘立柱建物1(図48・49、図版17~19・56、カラー図版1、表38)

<形態と構造>

D区北半中央、M・N9グリッドに位置する。桁行5間×梁行4間で、東桁行が8.34m、西桁行が8.36m、北梁行が6.08m、南梁行が6.06mの建物である。主軸は真北から31度西に傾いている。

床面積は50.7m²を測り、掘立柱建物としては大型の部類に入る。

柱穴の径は60～98cm、検出面からの深さは57.3～86.0cm、底面レベルはP 3とP 18がやや深いものの、その他は標高29.80m付近でほぼ揃う。平面形は不整円形を呈するものがほとんどである。柱痕・抜き取り痕と思われる埋土がP 1～3・5～9・12・14～18で確認できた。柱痕・抜き取り痕の下底の径は8～24cm程度であるので、柱の太さはおおむね15～20cm程度であると想定できるであろう。P 14は柱痕が内側に寄り、掘り方が外に広がる形態を呈する。北東隅P 1は長軸が隅行方向を向いている長方形の掘り方を持つ。P 1のような掘り方の形態は古墳時代以降の大型の建物に多く見られる工法のひとつである。

柱間は桁行1.40m～1.88m、梁行1.45m～1.62mで、梁行の柱間のほうがやや狭くなっている。桁行、梁行ともに対向する柱間距離が近似する。桁行のP 2 - P 3、P 13 - P 14の対向する柱間は、他の桁行の柱間よりは幅が狭く、梁行の柱間距離に近い。

柱穴の埋土は、ほとんどに褐色土の覆土（①層）がみられる。⑤⑥層は形態からみて柱痕が抜き取り痕であろう。周りの埋土と比べしまりが弱く、⑤層は粘質が強い。掘り方は暗褐色が主で、やや砂質のことが多い。

束柱は検出されていない事から、側柱建物で、土間か平地床であったことが想定される。柱間距離から大壁形式の建物である可能性がある。

< 出土遺物 >

ほとんどの柱穴から遺物が出土しているが、細片ばかりであり、P 2、P 3、P 8、P 9、P 10、P 16、P 18から出土している8点が図化することができた。

189～193は須恵器である。189は短頸壺か。190は体部にキザミが施されている。長頸壺であろう。ともに色調は赤味をおびている。191はかえりがつく杯蓋で、陶邑編年のTK217型式にあたる。192は高杯脚部、193は杯もしくは壺の底部である。194～196は土師器甕で、いずれも頸部が「く」の字状に屈曲する単純口縁のものである。出土遺物はいずれも古墳時代後期末のもので、竪穴住居2・3、竪穴2のものよりも新しいものが含まれる。

5間×4間の建物の出現は古墳時代中期以降であり、類例も少ない。出土遺物の時期から考える少なくとも古墳時代後期末以降のものである。第1遺構面では、古墳時代以降中世になるまで、遺構や遺物が全く確認されていない。埋土から見て中世のものではないのは明らかなので、中世以前の下限である古墳時代後期末のもの可能性が最も高いと考えられる。ただし、出土遺物の時期から判断すると、古墳時代後期末のなかでも、竪穴住居2・3、竪穴2よりはやや新しい段階と考えられる。

(三木)

掘立柱建物2 (図50、図版19)

< 形態と構造 >

D区南端、P 8グリッドに位置する。調査地外に延びているため規模は不明であるが、桁行3間×梁行1間以上の掘立柱建物である。主軸は真北から66度東に傾く。

柱穴は不整円形を呈し、径はP 1が61×60cm、P 2が69×64cm、P 3が70×66cm、P 4は67×59cm、P 5が59×57cmを測る。検出面からの深さは37～61cmを測り、底面レベルは標高29.41～29.65mでややばらつきがある。P 3・4がほかの柱穴と比べ浅くなっている。P 1・2・4では

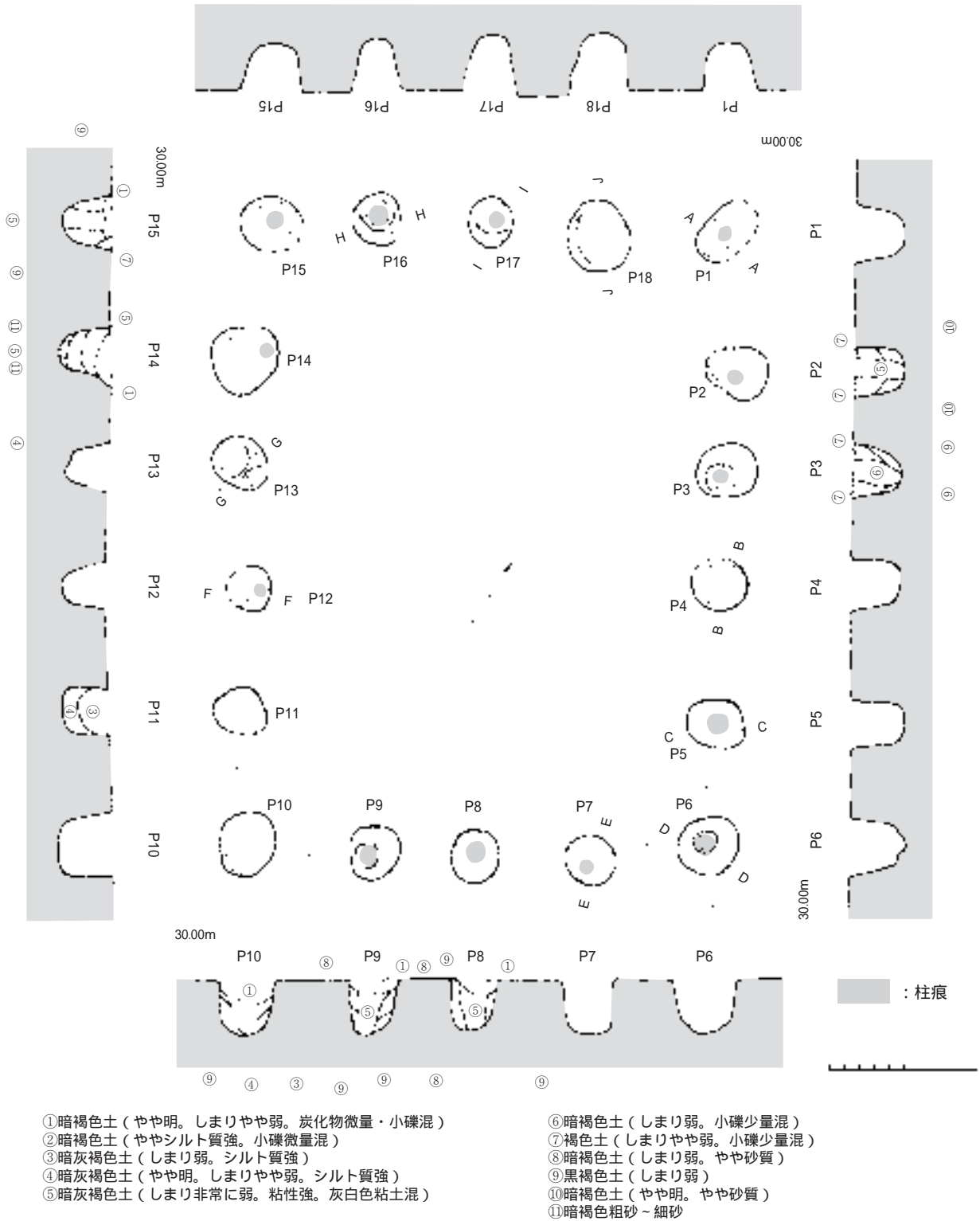


図48 掘立柱建物1(1)

底部に柱痕跡が見られた。柱痕跡の下底の径は11～18cmである。このことから、柱の太さは15cm前後になると考えている。P 4 上面からは礫が検出されており、底部からは礫に囲まれるような柱痕跡が平面上で確認できた。このことから、柱の脇に礫がこめられていた可能性がある。

柱間はP 1 - P 2 が1.50m、P 2 - P 3 が1.66m、P 3 - P 4 が1.50m、P 4 - P 5 が1.50mでP 2 - P 3 の柱間がやや広いものの、その他は同じ柱間距離である。

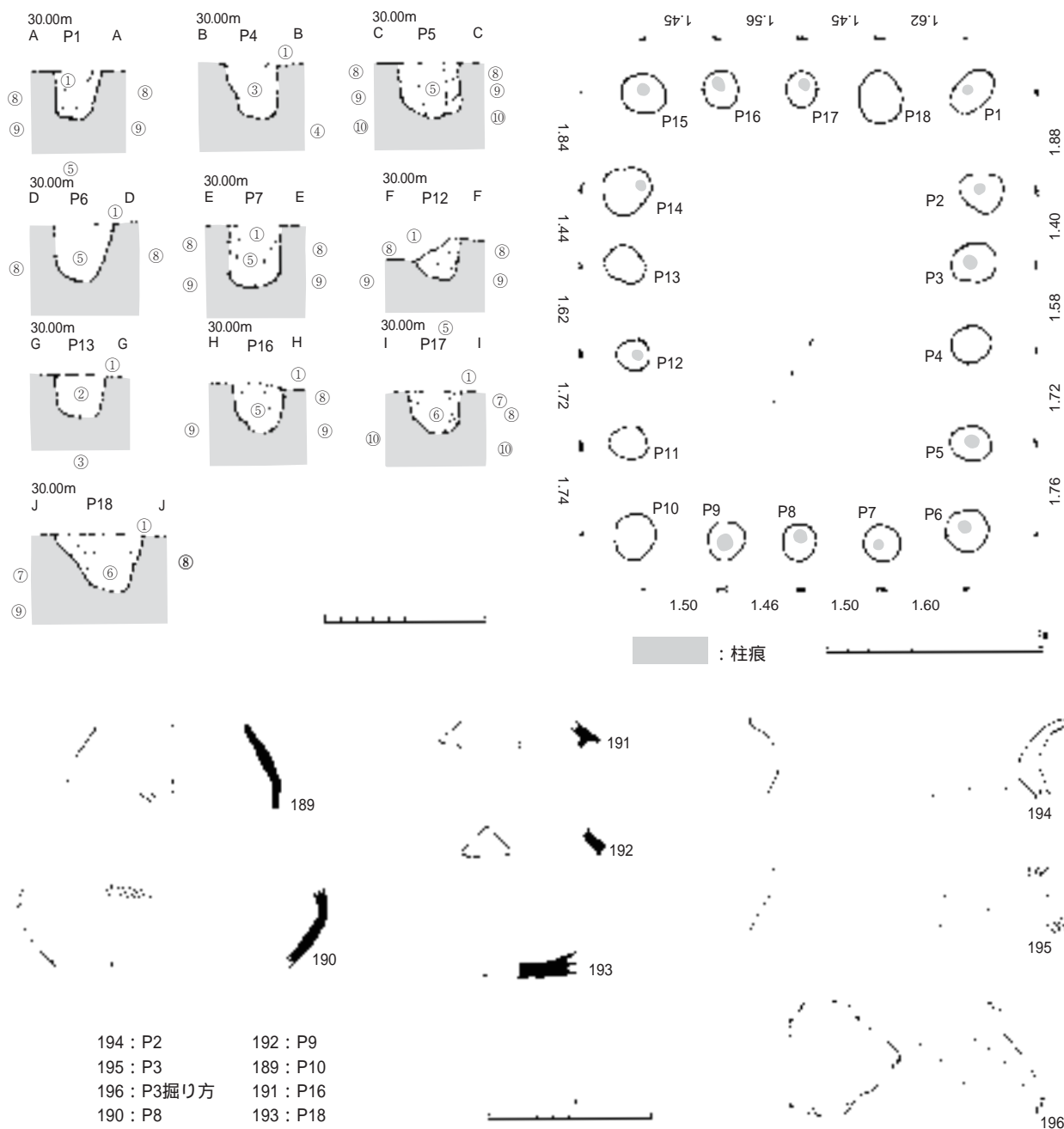


図49 掘立柱建物1(2)

柱穴の埋土はすべて黒色土の単層であり、断面で柱痕は確認できなかった。

遺物は出土していないが、埋土の色調から少なくとも中世までは下らず、第1遺構面では古墳時代以降中世になるまで遺構・遺物が確認できていないことから、古墳時代におさまる可能性が高いと考えられる。掘立柱建物1・3・4と軸方向が近い事などから、古墳時代後期末の新しい段階のものと考えている。(三木)

掘立柱建物3 (図51、図版56、表38)

<形態と構造>

D区西半、N・O10グリッドに位置する。東側は圃場整備にともなう暗渠に切られているため、正確な規模は不明だが、建物の北側と南側の二面に柱穴列を持つ、桁行3間×梁行2間以上の掘立

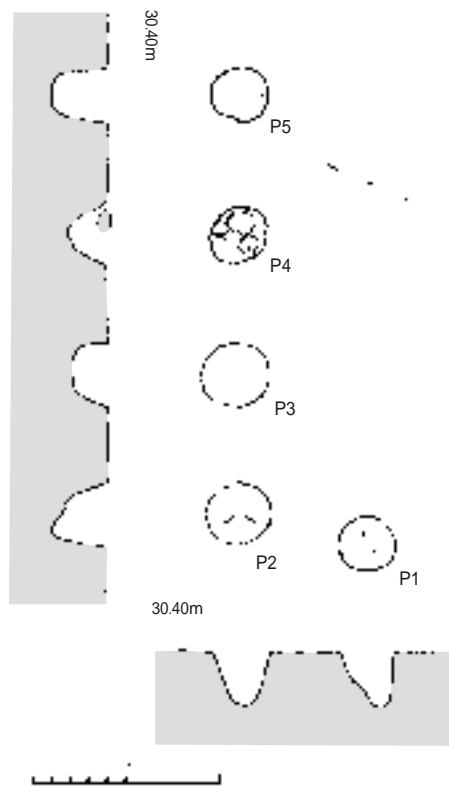


図50 掘立柱建物2

柱建物であると考えられる。主軸は真北から65度西に傾いている。P1とP13・14が竪穴住居2を切っている。北側の柱穴列がP1・11～13(A-A'ライン)、南側の柱穴列がP3・4(E-E'ライン)、P2・5～10・15～18に囲まれる範囲が建物の身舎と考えられる。平面形では、P5～10の梁行部分がやや出っ張った形態を呈している。ピットが重複するものや、近接しているものがあることから、建て替えが行われた可能性がある。

2つの柱穴列部分と考えられる柱穴の径は43～61cmで楕円形・不整円形を呈する。検出面からの深さは14～40cm、底面レベルはP12を除く北側列が標高29.20m付近で、P12と南側列は標高29.09mでほぼ揃っている。柱間は北側列で、P11 - P12が1.45m、P12 - P13が1.32m、P13 - P1が1.43mである。南側列はP3 - P4が1.50mである。北側列は身舎の北側柱列(B-B'ライン)との間隔が1.2m程度、南側列が身舎の南側柱列(D-D'ライン)との間隔が1.9m程度と

なっており、南側の列のほうがスペースが広がっている。北側列のほうが、スペースが狭く、柱穴も南側に比べると浅い事から、南側と北側とでは上屋の形態が違っていた可能性もある。この柱穴列は庇もしくは縁の可能性もある

身舎の柱穴は、径42～71cmで楕円形・不整円形を呈する。検出面からの深さは19～50cm、底面レベルは標高29.0～29.22mである。P9・P16以外は標高29.00m付近で揃う。P5～P10は柱穴が重複しており、添束の可能性もあるが、柱穴の規模がほぼ同じである事から、やや柱筋がそろわないものの、建て替えの可能性のほうが強いと考えている。P9・10の切り合い関係と柱間からP6・8・10からP5・7・9を柱穴にもつ掘立柱建物に建て替えられたと考えている。柱間はP6 - P8が1.23m、P8 - P10が1.50m、P5 - P7が1.44m、P7 - P9が1.50m、P10 - P18が1.58m、P9 - 18が1.70m、P18 - 15が1.42m、P15 - 2が1.67m、P6 - 17が1.35m、P17 - 16が1.40m、P5 - 17が1.40mである。土層断面で、P3～8に抜き取り痕と考えられる層を確認した。抜き取り痕下底の径は10～16cmであることから、柱の太さは15cm程度のものだと考えている。

図示はしていないが、P15とP16を結んだ中間付近、やや東よりにP34があり、底面レベルがほかのものに比べやや深い標高29.26mを測るものの、埋土が掘立柱建物3の柱穴と同じ暗褐色土を呈している事から、床板を支える床束である可能性がある。

<出土遺物>

柱穴内から遺物が出土しているが、いずれも細片ばかりのため、図化できたのはP2・3・8埋土中から出土している3点のみである。

197は須恵器杯蓋で、口縁端部はまるく仕上げられている。198は須恵器杯身で、立ち上がり部分が高く、内傾している。いずれも大谷分類のA6型に相当し、大谷編年の出雲4期、TK209型式

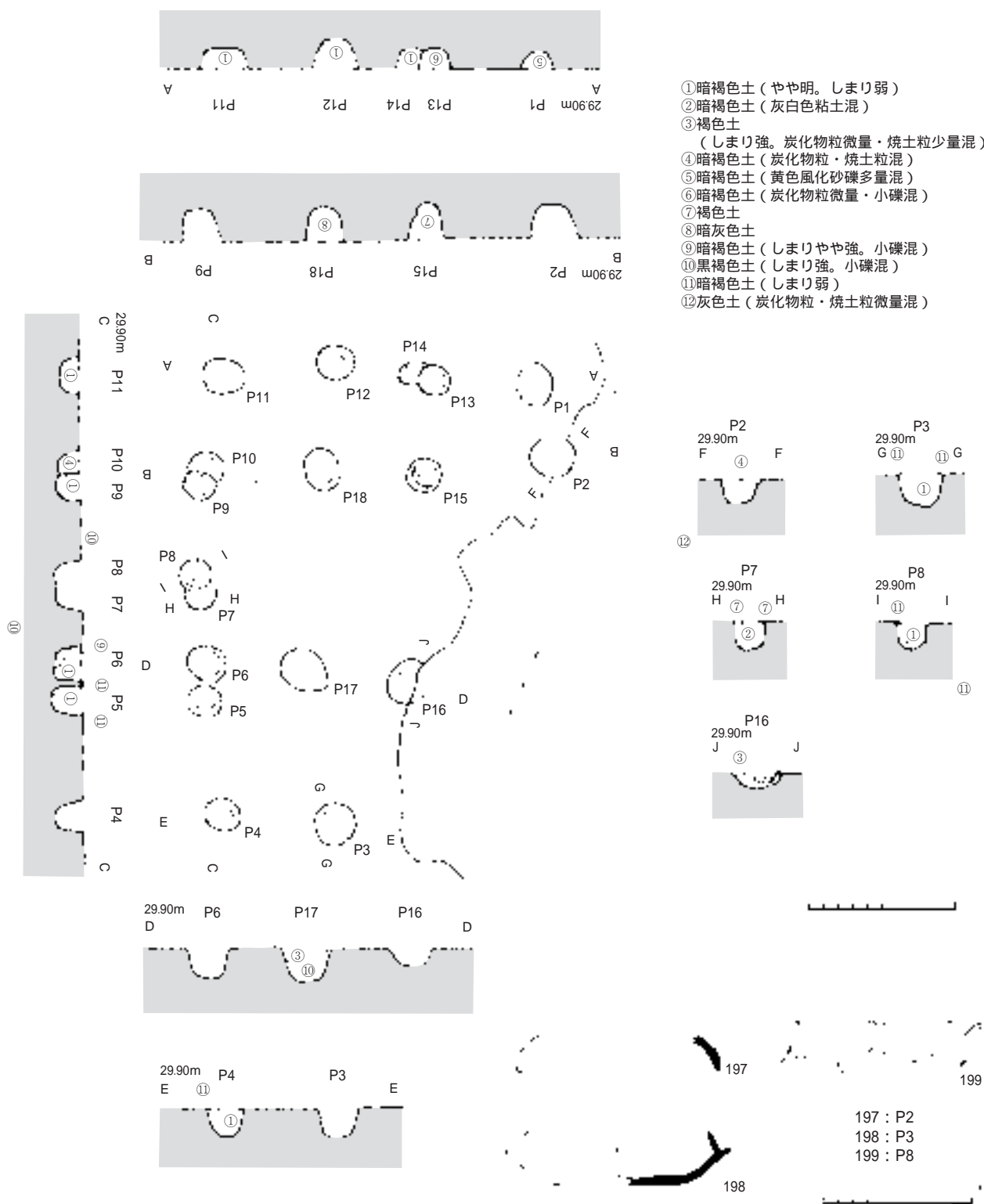


図51 掘立柱建物3

併行にあたる。199は土師器甕で、単純口縁の頸部が「く」の字状に屈曲するものである。

出土遺物の時期や、掘立柱建物1・2・4と軸方向が近似している事から、古墳時代後期末のもので、P1とP13・14が竪穴住居2を切っていることから竪穴住居2よりは新しい古墳時代後期末の新しい段階ものだと考えている。
 （三木）

掘立柱建物4（図52、図版20・56、表38）

<形態と構造>

D区西端、O10・11グリッドに位置する。調査地外に延びているため正確な規模は不明であるが、桁行3間×梁行2間以上の、三面ないしは四面の外周柱穴列を持つ掘立柱建物と想定できる。主軸は真北から28度西に傾いている。P1～5（A-A'ライン）を東側列、P5～7（B-B'ライン）を南側列、P1・9・10（C-C'ライン）を北側列と仮称する。少なくともこの3面に外周柱穴列があると考えられる。P8・11～20が建物の主体となる身舎を構成していたと考えられるが、筋は通っているものの柱穴が検出されなかった箇所もあり、平面形態は不明である。D-D'ラインとE-E'ラインの交点は建物の南東隅になるが、柱穴は検出できなかった。

外周柱穴列部分の柱穴の径は51～76cmで、不整形円形を呈しているものがほとんどだが、方形や菱形に近い形を呈するものもある。検出面からの深さは25.0～49.7cm、底面レベルは標高28.93～29.19mで、29.00m付近でほぼ揃う。柱間はP1-P2が1.68m、P2-P3が1.52m、P3-P4が1.50m、P5-P6が1.73m、P6-P7が1.83m、P9-P10が1.82m、P10-P1が1.65mである。対向する北側列と南側列の柱間距離は、ほぼ近似している。東側列はP1-P2間に比べて、P2-P3・P3-P4間がやや狭くなっており、P2～P4は身舎の東辺（D-D'ライン）の柱間に平行して位置している。この外周柱穴列は庇または縁の可能性はある。

身舎の柱穴は径63～87cmで不整形円形・隅丸方形を呈する。外周柱穴列の柱穴よりはやや大きいものが多い。検出面からの深さは25～47cm、底面レベルは標高28.96～29.16mで、29.00m付近でほぼ揃う。柱間はP11-P12が1.29m、P12-P13が1.30m、P13-P14が1.20m、P17-P18が1.04m、P18-P8が1.04m、P19-P20が1.30m、P20-P11が1.60mである。断面からP12・18・19以外で、柱痕もしくは抜き取り痕が確認できた。柱痕と考えられるものの下底は径が12～18cm程度なので、柱の太さは15cm前後であったと推測できる。P15は添束であると考えている。P16・17が重複していることから、建て替えが行われた可能性がある。

P1やP5のように外周柱穴列の隅に柱穴が存在することから、屋根の形態が、入母屋造もしくは寄棟造の可能性はある。掘立柱建物1～3と比べると、特殊な構造であり、建物の持つ性格も異なったものであったと考えられるだろう。

<出土遺物>

柱穴内から遺物が出土しているが、細片であるため、図化できたものは2点のみである。

200は須恵器高杯脚部で、透かし孔があり、脚端部は内傾する面をもつ。P8から出土している。201は土師器甕口縁部で、口縁は緩やかに外反して、頸部から下は肩部を持たない器形である。P13から出土している。いずれも時期を決定するには十分な情報を持たないが、おおむね古墳時代末期のものと考えられる。

出土遺物の時期と、掘立柱建物1～3と軸方向に近い点から、古墳時代後期末の新しい段階のものと考えている。 (三木)

土坑5（図53、図版24・57、表7・38）

A区東部、D1グリッドにおいて検出した。平面隅丸長方形を呈する土坑である。断面形は逆台形状で、底面には凹凸があり、基盤となっている層中に含まれる拳大の礫が数個露出していた。

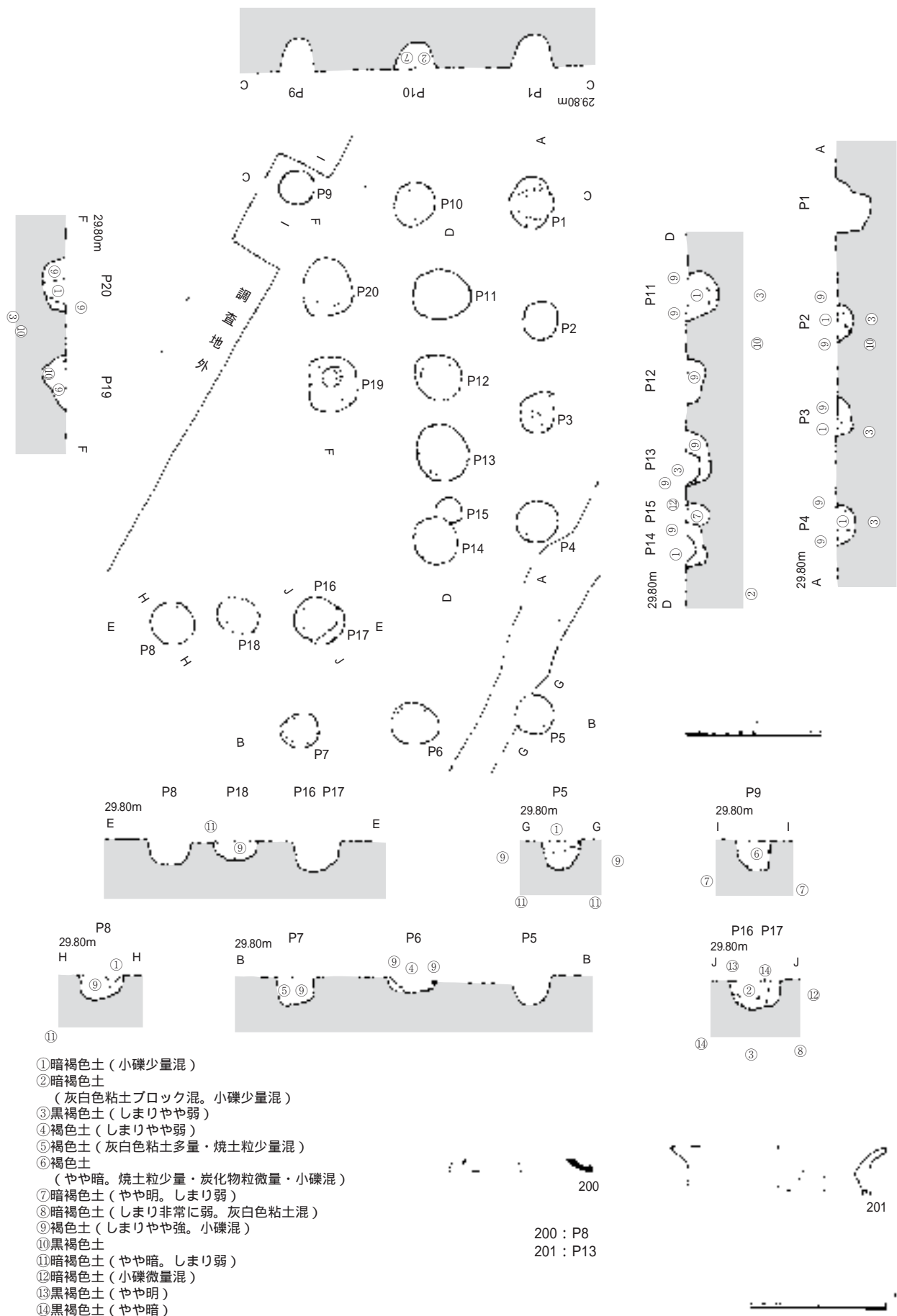


図52 掘立柱建物4

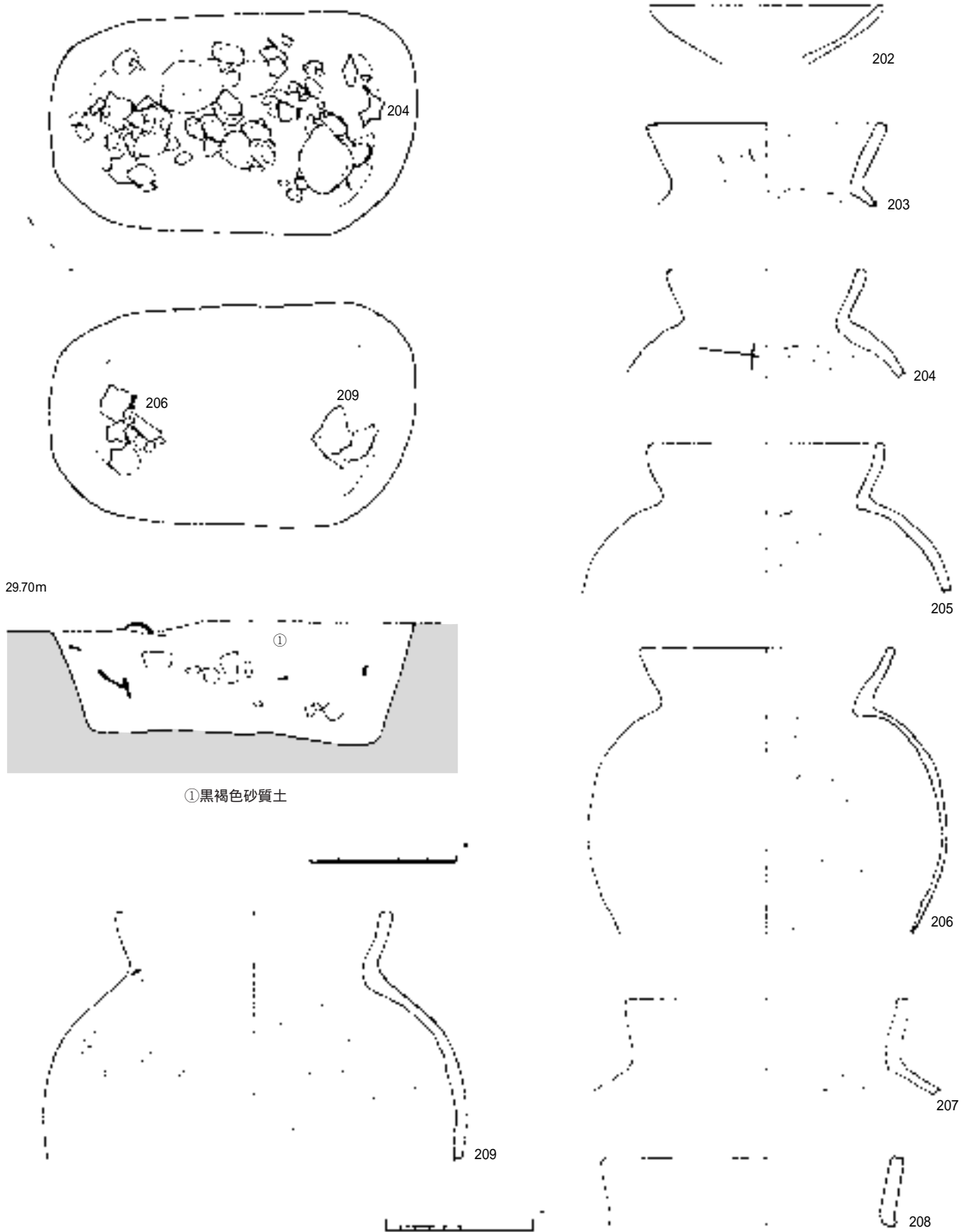


図53 土坑5

埋土は土壌化が著しい黒褐色砂質土1層である。底面と埋土中には多数の拳大から人頭大の垂角礫や円礫と土師器が混ざって出土した。出土した土師器に完形に復原できるものはなく、出土状況にも規則性は認められないことから、短期間の内に埋まった廃棄土坑と考えられる。出土遺物には、土師器の高杯(202)・甕(203)～(208)がある。甕は、頸部が「く」字状に屈曲し開く単純口縁

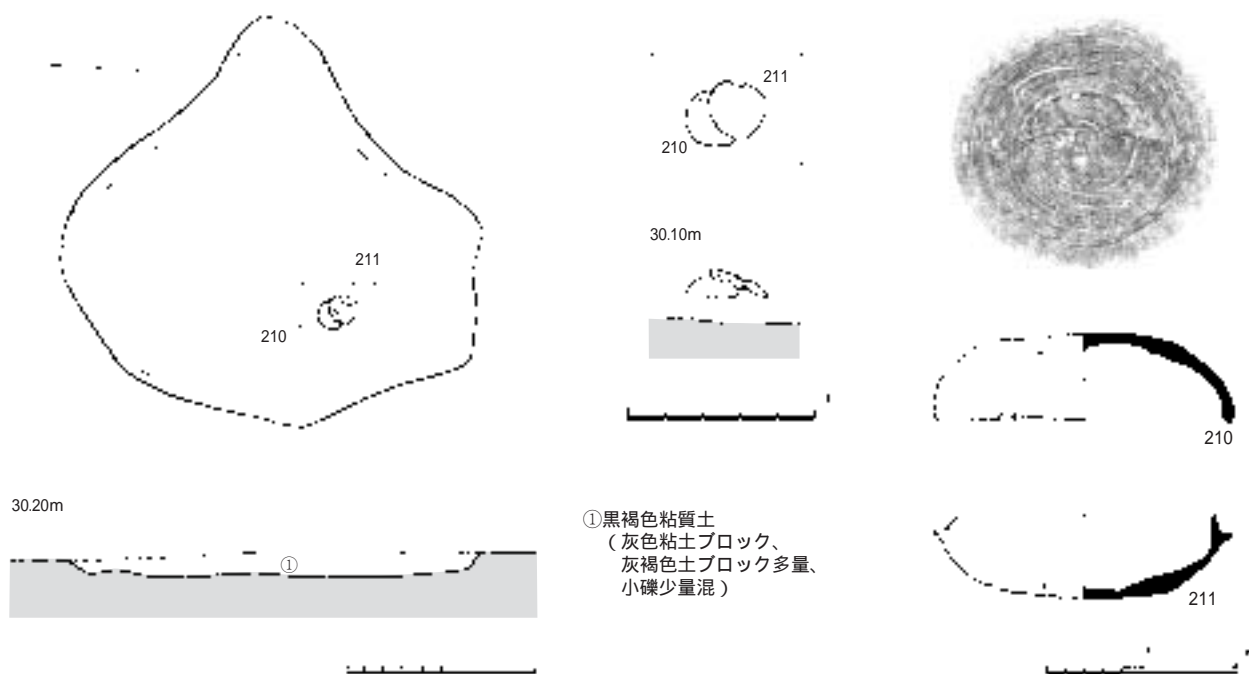


図54 土坑6

表7 土坑5～19計測表

土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)
土坑5	123×74	38	土坑10	(189)×66	9	土坑15	91×75	45
土坑6	222×215	14	土坑11	134×95	16	土坑16	95×59	12
土坑7	173×104	15	土坑12	74×65	9	土坑17	140×91	13
土坑8	88×81	37	土坑13	(103)×74	17	土坑18	305×255	28
土坑9	83×76	34	土坑14	80×60	34	土坑19	191×95	30

のもので占められる。209は頸部の器壁が厚く、内湾気味に立ち上がり、口縁端部は面をなす。204はこれと同様の頸部で、口縁部は直線的に開き、口縁端部をそのまま丸く収める。体部内面のへら削りは屈曲部まで及ばない。205はやや肩が張り、口縁部はわずかに内湾する。206は体部の器壁が薄い。肩部がやや張り、屈曲部の器壁は厚い。口縁部は器壁を減じながら、わずかに外反する。口縁端部は丸く収める。203は頸部屈曲部の器壁が薄い。口縁部は外傾し端部は面をなす。207・208は頸部から口縁部が直立するもので、口縁端部は面をなす。202は杯部が内湾気味に外傾する。杯部上位から口縁部は肥厚し、端部は丸く収める。イレギュラーな形態のものと思われる。これらの土器は古墳時代中期後葉から末にかけての様相を示す。よって、古墳時代中期後葉～末ごろの土坑と考えられる。(日置)

土坑6 (図54、図版25・58、表7・38)

B区東部、F3グリッドにおいて、層上面で検出した。平面不整形な土坑である。構築段階の原形をとどめていないと考えられる。埋土と基盤土の判別が非常に困難なものであった。須恵器の杯蓋(210)と杯身(211)が出土した。正位に置かれた須恵器の杯蓋の上に杯身が口縁部を下に被さった状況で出土した。須恵器が出土した高さが本来の床と考えられる。須恵器枕の可能性が考え

られるため、この遺構は土壌墓の可能性はある。

出土した杯蓋(210)は、焼成が甘く灰白色を呈し軟質である。口縁部外面を板状工具で斜め方向に浅くキザミをつける。杯身(211)も焼成が甘く軟質である。ともに出雲4期、陶邑編年TK209型式併行期のものである。このことから古墳時代後期末の遺構と考えられる。(日置)

土坑7(図55、図版25・58、表7・38)

E区、M7・M8グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.7m、短軸1mを測る。上面は削平されており本来の深さは不明だが、検出面からは15cm程度で、埋土は黒褐色土の単層であった。検出面で須恵器や土師器が面的にそろって出土している。

212は須恵器杯蓋である。口縁内面に浅い沈線を施している。外面天井部は最外周のみケズリを施し、中央部には一部にハケを施した後に回転ナデで調整されている。これらの特徴から大谷分類のA6型にあたり、大谷編年の出雲4期、陶邑編年TK209併行期にあたる。213は小型の壺と思わ

れる須恵器。214~216は土師器甕である。いずれも単純口縁である。214は口縁部が長く、「く」の字形に外反し、先端をすぼめて収める。頸部の屈曲はシャープで、内外面とも口縁と体部の境が明瞭である。215・216は短い口縁が緩く外反し、先端はすぼめて収める。肩部が発達せず、なで肩の器形となる。217は高杯の脚部で、内外ともミガキで調整されており、丁寧なつくりである。表面には内外面とも赤色顔料が塗彩されている。

出土遺物から古墳時代後期末

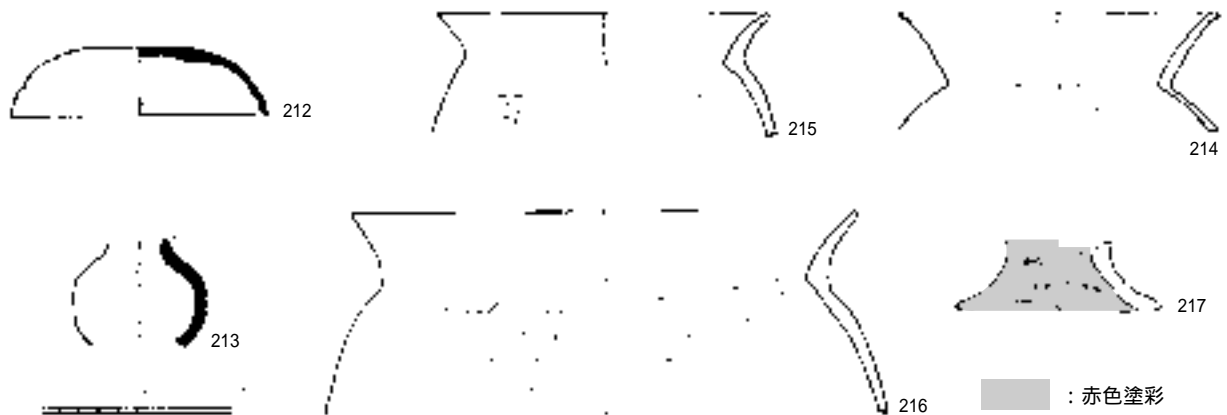
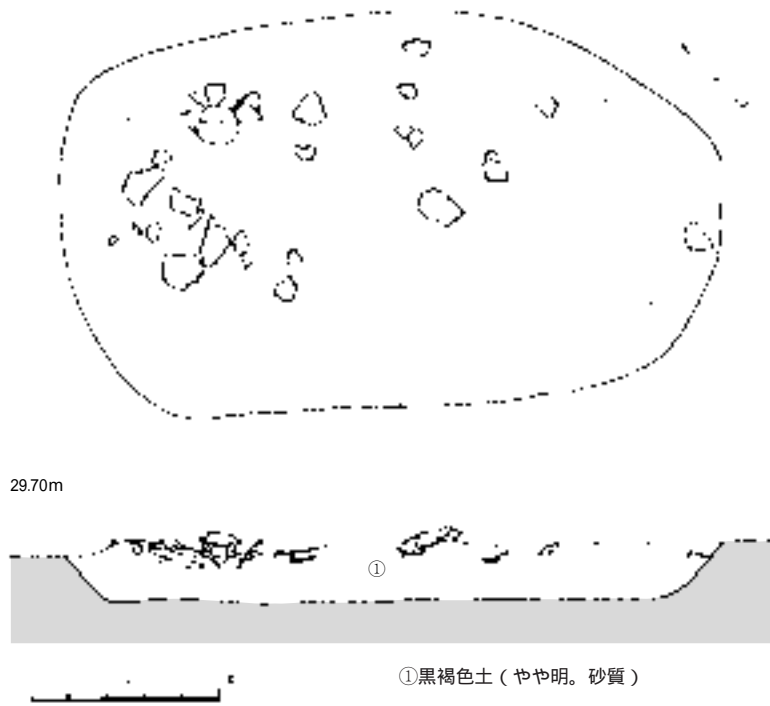


図55 土坑7

のものと考えられる。 (北)

土坑8・9

(図56、図版25・58、表7・38)

E区、P10グリッドに並んで位置する。ともに平面形は円形を呈し、径は0.8m、深さは約40cmを測る。埋土はいずれも共通し、上層に灰色土、下層に暗褐色土の自然堆積が見られる。形態、規模、埋土が共通し、関連性が強い。大型の柱穴の可能性が高く、建物を構成するものの一部である可能性がある。どちらからも須恵器の破片が出土した。土坑8出

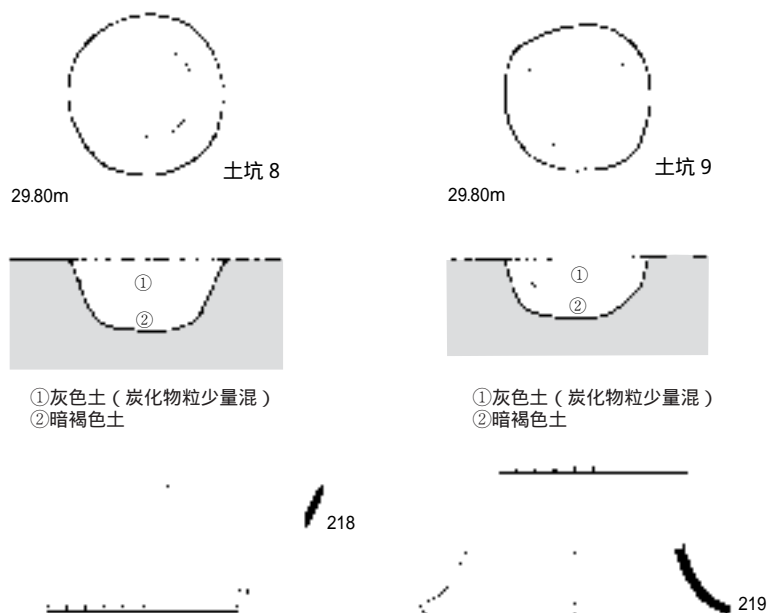


図56 土坑8・9

土の218は口縁部片。器種が判然としないが、破面付近で屈曲しているのでこのすぐ下に体部がつく器形になるだろう。非常に薄手のつくりである。土坑9の219は高杯の脚部片と思われる。破片のため透かしの有無が判断できない。径が大きく、脚は低くなりそうである。いずれも破片で時期を判断するのに十分ではないが、おそらく古墳時代後期末のものと思われる。したがって、これらの遺構の時期もそれ以降のものと思われ、全体の遺構の展開のあり方から考えると、古墳時代後期末の可能性が高いと考える。 (北)

土坑10 (図57、図版25、表7)

A区東部、C1グリッドにおいて、層上面で検出した。土坑の一部は調査地外に外れるが、平面長方形の浅い土坑であろう。底面にはピット状に窪む箇所がある。遺物は出土しなかった。土坑の機能は不明であるが、埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えている。 (日置)

土坑11 (図57、図版25、表7)

A区東部、C2グリッドにおいて、層上面で検出した。平面長楕円形の土坑である。底面には層中に含まれる角礫が露出する。遺物は出土しなかった。長軸をほぼ東西にとるが、土坑の機能は不明である。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えている。 (日置)

土坑12 (図57、図版25、表7)

A区東部、C3グリッドにおいて、層上面で検出した。平面やや不整な楕円形を呈する土坑である。ごく浅いもので3基のピットに切られている。遺物の出土はなく、機能は不明である。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えている。 (日置)

土坑13 (図57、図版25、表7)

A区東部、D3グリッドにおいて、層上面で検出した。土坑の一部は調査区外に外れる。ごく

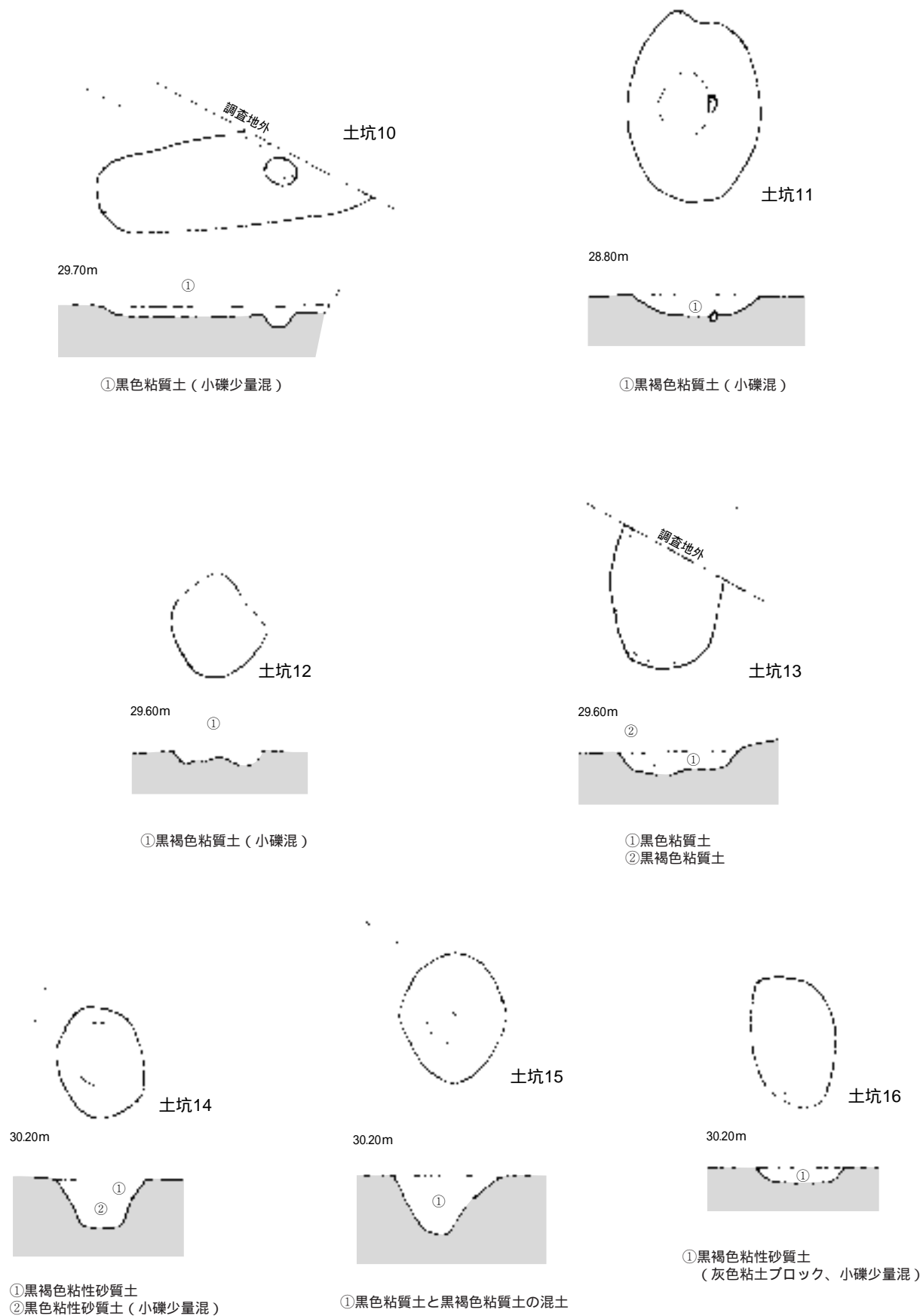


図57 土坑10～16

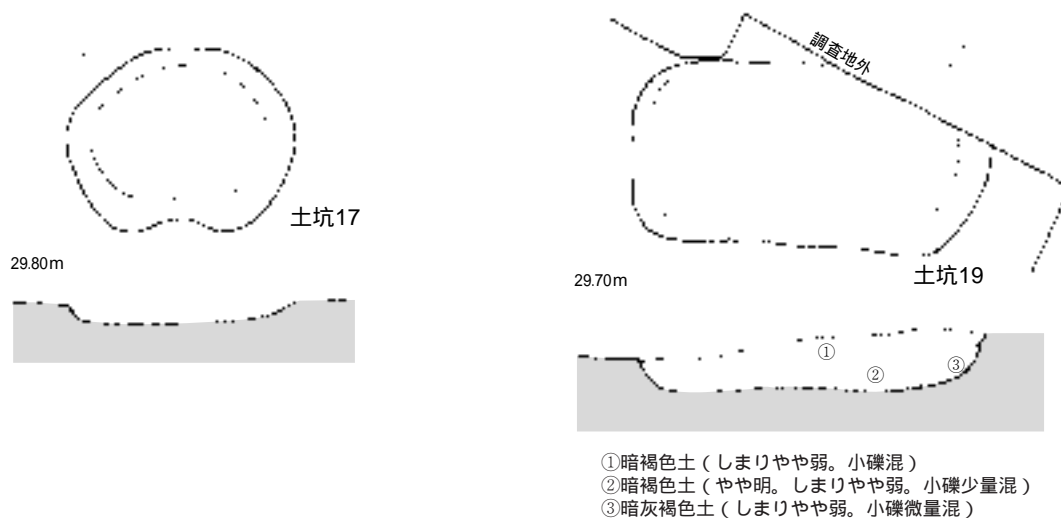
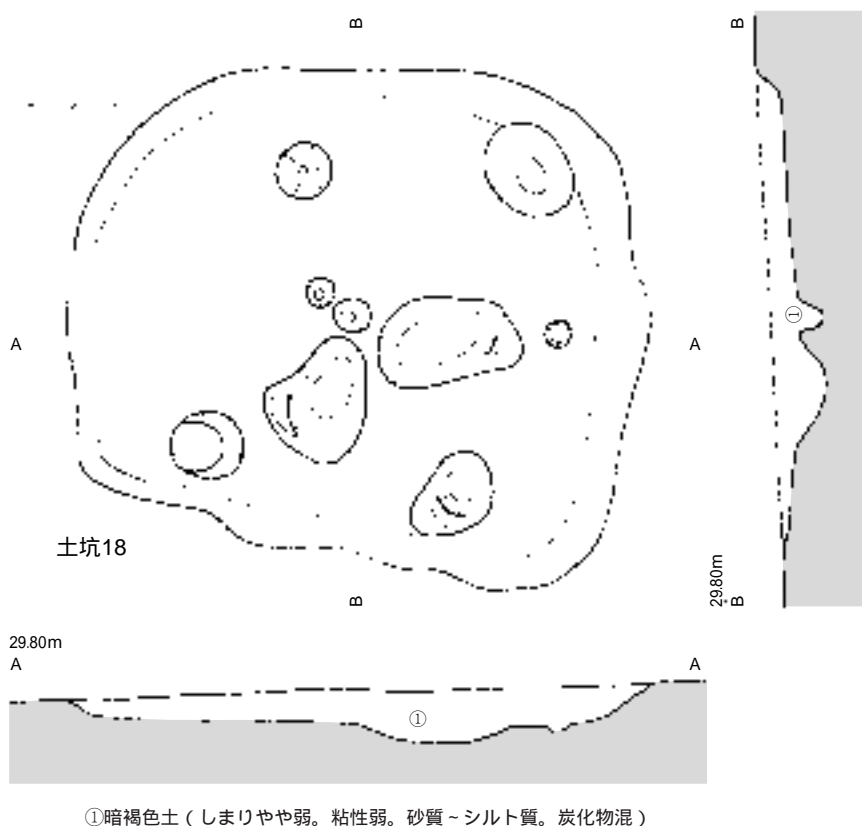


図58 土坑17～19

浅いもので重複している可能性がある。遺物は出土せず機能は不明であるが、埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えている。(日置)

土坑14(図57、図版26、表7)

B区東部、G3グリッドにおいて、層上面で検出した。平面楕円形の土坑である。埋土は2層に分けたが、後述する土坑15・土坑16の埋土と同様のもので自然堆積と考えられる。遺物は出土せ

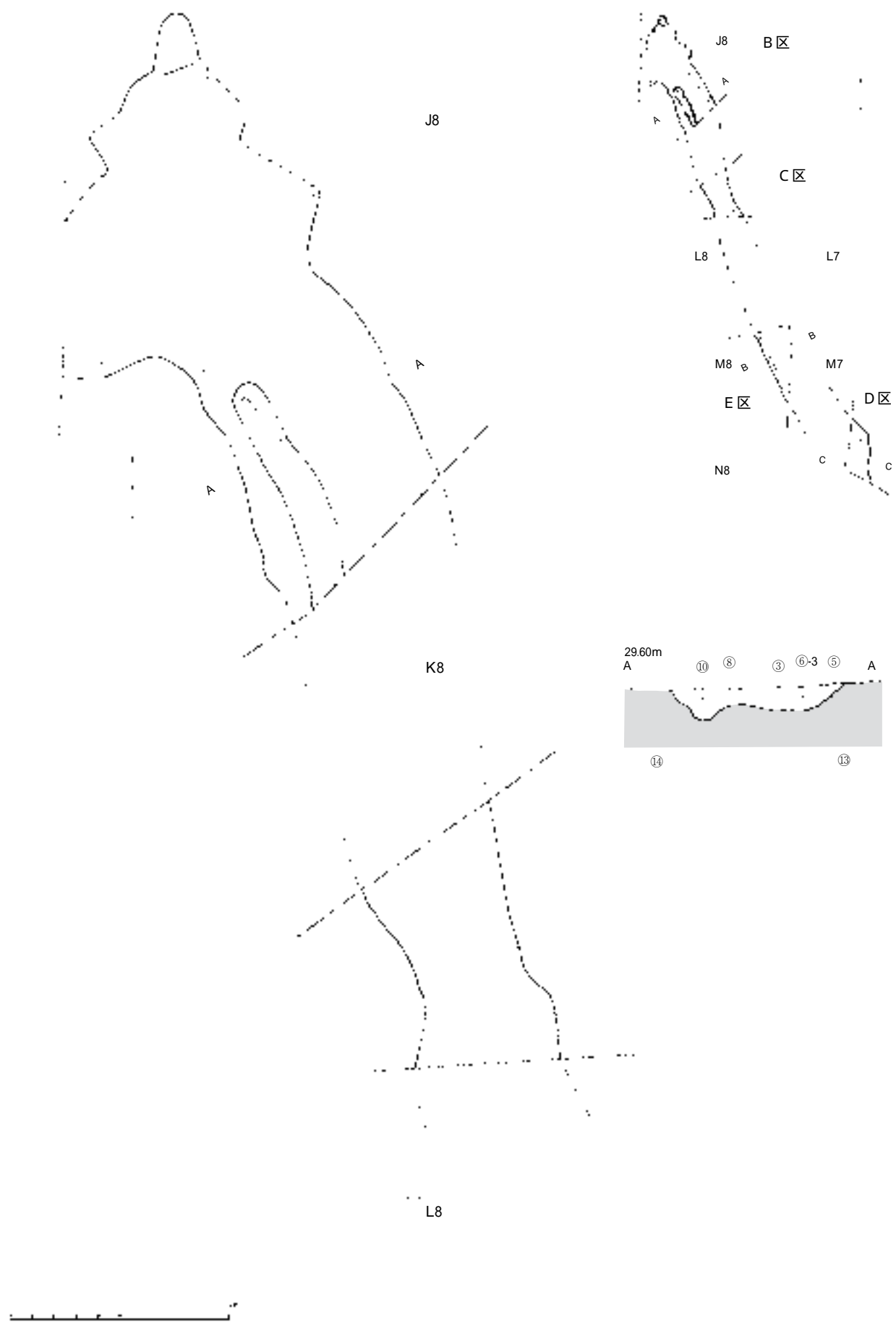


図59 溝1(1)

L8

L7

- ① 暗灰褐色砂礫混じりシルト（しまり弱。粘性強。小礫多く混）
- ② 暗灰褐色シルト（しまり弱。粘性強。小礫・小礫多く混）
- ③ 暗褐色砂礫混じり土（しまり弱。粘性非常に弱。砂質。小礫非常に多く混）
- ④ 褐灰色粗砂（しまり弱。粘性非常に弱。小礫非常に多く混）
- ⑤ 黒褐色砂礫混じり土（しまり弱。粘性非常に弱。砂質。小礫多く混）
- ⑥-1 暗灰褐色砂礫（小礫を中心に細砂、シルトで構成）
- ⑥-2 赤褐色砂礫（しまり弱。粘性弱。）
- ⑥-3 黄褐色砂礫（しまり弱。粘性非常に弱。小礫と砂で構成。鉄分沈着多くみられる）
- ⑦ 暗褐色シルト（しまり弱。粘性強。粗砂、小礫多く混）
- ⑧ 黒褐色砂礫混じり土（しまり弱。粘性やや強。砂質。）
- ⑨ 暗褐色シルト（しまり弱。粘性強。小礫少量混）
- ⑩ 暗褐色砂礫混じり土（しまり弱。粘性非常に弱。砂質。小礫を非常に多く混）
- ⑪ 褐色細砂、黒色シルトラミナ状堆積層（しまり非常に弱）
- ⑫ 褐色粗砂（しまり弱。粘性非常に弱）
- ⑬ 黒褐色砂礫混じり土（しまり弱。粘性非常に弱。砂質。小礫非常に多く混。鉄分沈着多くみられる）
- ⑭ 黒色砂礫混じり土（しまり弱。粘性やや強。砂質。小礫混）

M8

M7



図60 溝1(2)

ず、機能などは不明である。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考える。（日置）

土坑15（図57、図版26、表7）

B区東部、G3グリッドにおいて、層上面で検出した。擂鉢状を呈する土坑である。埋土は土坑14や土坑16と同様の1層で自然堆積と考えられる。遺物は出土せず、土坑の機能などは不明である。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考える。（日置）

土坑16（図57、図版26、表7）

B区東部、G3グリッドにおいて、層上面で検出した。平面はやや不整な長方形を呈する土坑である。ごく浅いもので、埋没状況は埋土1層からなり、前述の土坑14・土坑15と同様自然堆積と考えられる。遺物は出土せず、土坑の機能などは不明である。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考える。（日置）

土坑17（図58、図版26、表7）

E区、N7グリッドにおいて検出した。不整形な土坑である。底面から、握拳大の亜角礫が1個出土したが、ほかに遺物は出土しなかった。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えるが、機能などは不明である。（日置）

土坑18（図58、図版26、表7）

E区、N8、O8グリッドにおいて検出した。平面はやや不整な方形を呈する土坑である。底面は所々に深い窪みがあり平坦ではない。その窪みにも規則性は認められず、柱穴ではない。埋土は1層のみである。底面から浮いて土師器の細片が出土したが、図化できなかった。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えるが、機能などは不明である。（日置）

土坑19（図58、図版26、表7）

E区、M9グリッドにおいて検出した。北方隅の一部分は調査地外に外れる。ピットに切られる。平面隅丸長方形を呈する土坑と想定される。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。埋土の色調から古墳時代の遺構の可能性が高いと考えられるが、機能などは不明である。（日置）

溝1（図59～65、図版27・28・58～61、表38～41）

B区からD区にかけて、I8・J8・K7・L7・M7・M6・N6グリッドを中心に位置する。調査地内では端を確認しておらず、南側はD区から南南東にまっすぐに延びていると思われる。北側はI8・J8グリッドでわずかな立ち上がりが見られた。ただし、削平が著しく、この部分では深さがわずか3cm前後しか残っていないため、ここが溝の北端となるとは断定できない。むしろこのまま北側に延びていた可能性も十分あるだろう。その一方で、B区の西壁面でこの溝の断面が確認できているので、西に向かって屈曲して延びる可能性もある。こちらも極めて浅く、壁で10～20cmほど、壁にいたるまでの部分ではわずか2cm前後の深さしかない。したがって、これは溝の本体とはならず、部分的に溝の平面が広がっただけの可能性もある。いずれにしても、遺存状態

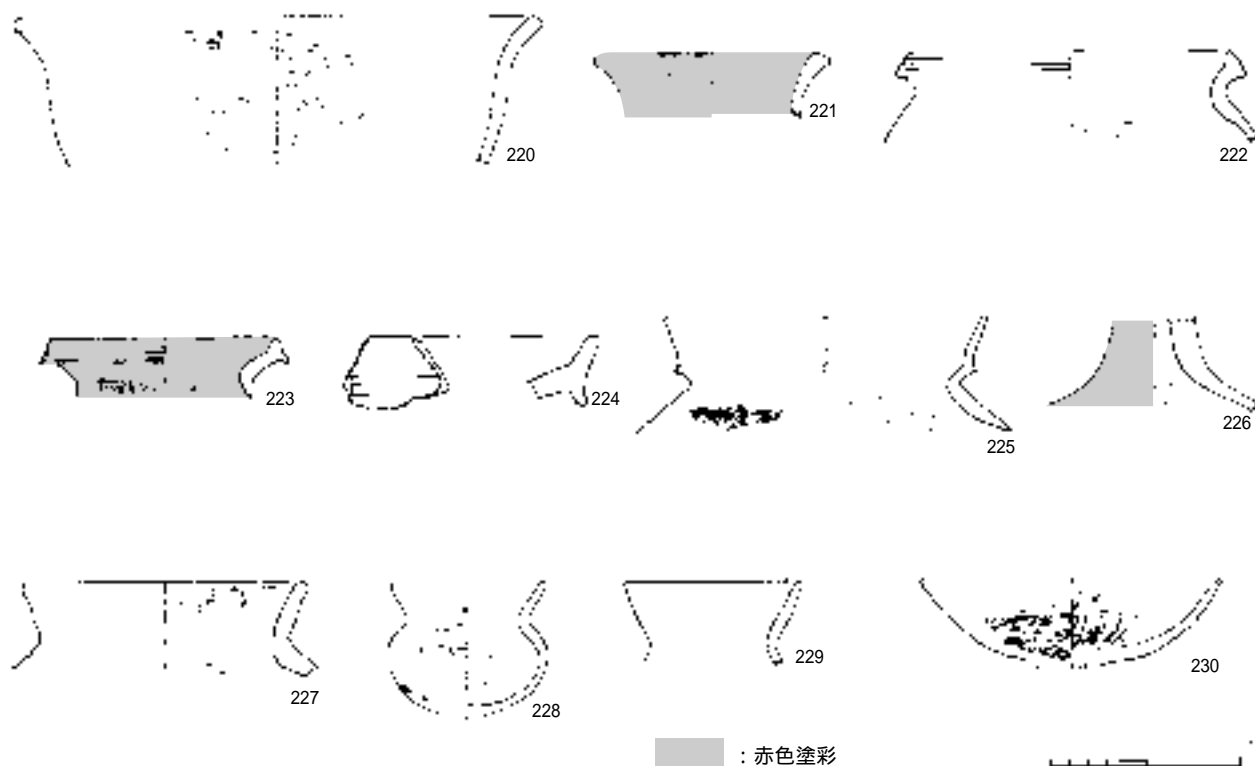


図61 溝1(3)上層出土遺物

が悪いので北側部分の拡がり方については判断できない。溝の規模は、調査地内の検出した部分で全長約47m、最大幅3.5m、最小幅1.9mを測る。深さは、B区の残りのよい部分で約60cm、E区は部分的に深くなるので最深部で約1m、D区で約45cmをそれぞれ測る。溝底面の標高は、B区で約28.5m、C区で約28.7m、E区の平坦な面をなす部分で28.8m、D区南端で29.2mとなり、南が高く、北が低くなる。したがって、溝は南南東から、北北西に向かって下っており、ちょうど地形の高低および傾斜軸に対応している。埋土は大きく2種類の堆積からなり、上層(①・②層)に土壌化の強い暗灰褐色のシルトベースの土層、下層(③層以下)に砂、砂礫、シルトの堆積層が複数見られた。B・C区は削平のため上層は残っていなかった。これらの層はいずれも水成堆積によって形成されたと見られ、特に下層は土壌化しない純粋な流水堆積層で、細かいラミナ状堆積を見せる層もあった。また、E区の底面は流水によって部分的に深く抉られていた。こうした点から、溝には水が流れていたようであるが、常時流水があったかどうかは不明である。人為的な掘削による溝、自然流路の両者の可能性が考えられるが、溝の形状や堆積からはいずれかは決定できない。

溝内からは弥生時代から古墳時代にかけての遺物が大量に出土した。上層、下層とも遺物が含まれていたが、下層出土のものが圧倒的に多い。流水によって砂礫とともに流れてきたものと思われ、ローリングを受けて摩滅したものも多い。上層からは弥生時代前期から古墳時代中期ごろにかけての土器が出土している。下層からは弥生時代後期から弥生時代末の時期幅に収まるものが中心に、弥生前期から古墳前期にかけての土器が出土している。遺物から考えると下層は古墳時代前期頃までに堆積し、上層は古墳時代中期以降に堆積したと思われる。下層堆積遺物から古墳時代前期以前がこの溝の形成時期と考えられる。なお、これらの遺物は上流から流れ込んできたものと思われるので、遺跡の南側に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡が存在する可能性がある。

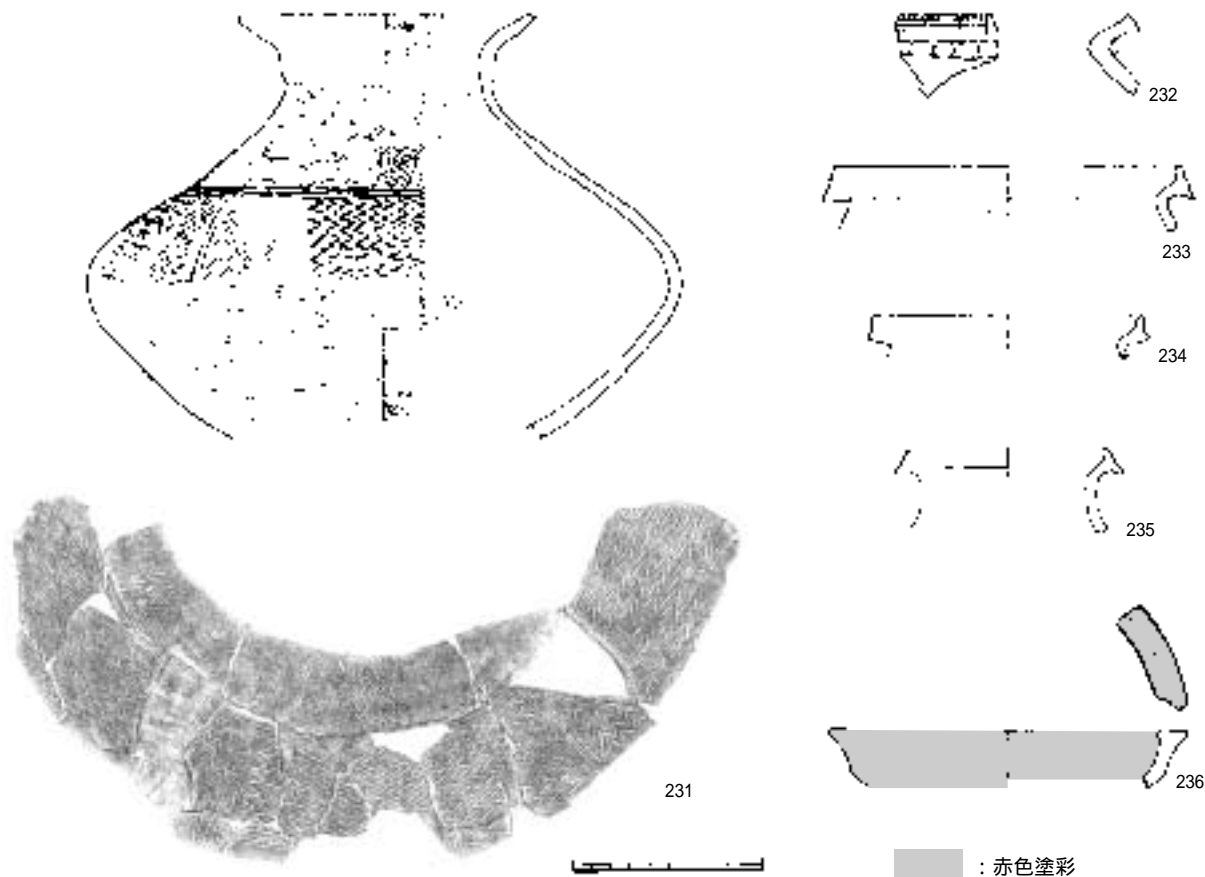


図62 溝1(4)下層出土遺物 [弥生時代前期・中期]

上層出土遺物は時期的にも量的にもまとまりに欠ける。220は弥生前期の鉢。内外面ともミガキで丁寧に仕上げられており、内面は黒色を呈する。221は弥生前期の壺の口縁部で、内外面ミガキで調整し赤色塗彩を施す。222～224は弥生後期の甕。225は弥生末の甕。230は高杯で弥生末～古墳初頭のもの。226～229は古墳時代中期の土器。226は高杯脚部。中期前葉頃のものか。227は単純口縁の甕で、中期後葉～末のもの。228・229は小型丸底壺で、いずれも中期前葉ごろのもの。

下層遺物は先述のように弥生後期から弥生末～古墳初頭がまとまって出土している。ほかに、これより古い時期のものもわずかに出土している。231は弥生前期中葉の壺。下層と上層両方から破片が出土している。口縁が屈曲して外反し、頸部に段を持つ。外面を丁寧に磨いて調整した後に、胴部上半を区画文とヘラ描き文で飾る。胴部上半にはヘラ描き沈線で幅広のものと狭いものの2種の区画が交互に4つずつ配され、幅広の区画には横方向の羽状文が、狭い区画には縦方向の羽状文がそれぞれ施されている。また、幅広の区画の中心付近上側の頸部には3列の縦の羽状文がそれぞれの区画上に4単位施されている。232～236は弥生中期のもの。232～234が甕、235は壺、236は高杯である。237～275は弥生後期のもの。237～265は甕である。型式上の特徴からは後期の前葉から後葉にかけての全期にわたる可能性がある。237～246は内傾する口縁帯をもち、上下端部が同程度に拡張するもの（濱田分類 類）、247～252は内傾する口縁部の上端が長く拡張するもの（濱田分類 類）であるが、あまり拡張していないものも多く、中期的な様相が残る。259・264・265には外面と内面の口縁部付近に赤色塗彩が見られる。253～259・262・263は口縁部が直立し上端が拡張するもの（濱田分類 類）。260・261・264・265は口縁部が外反し上端が長く拡張するもの（濱田

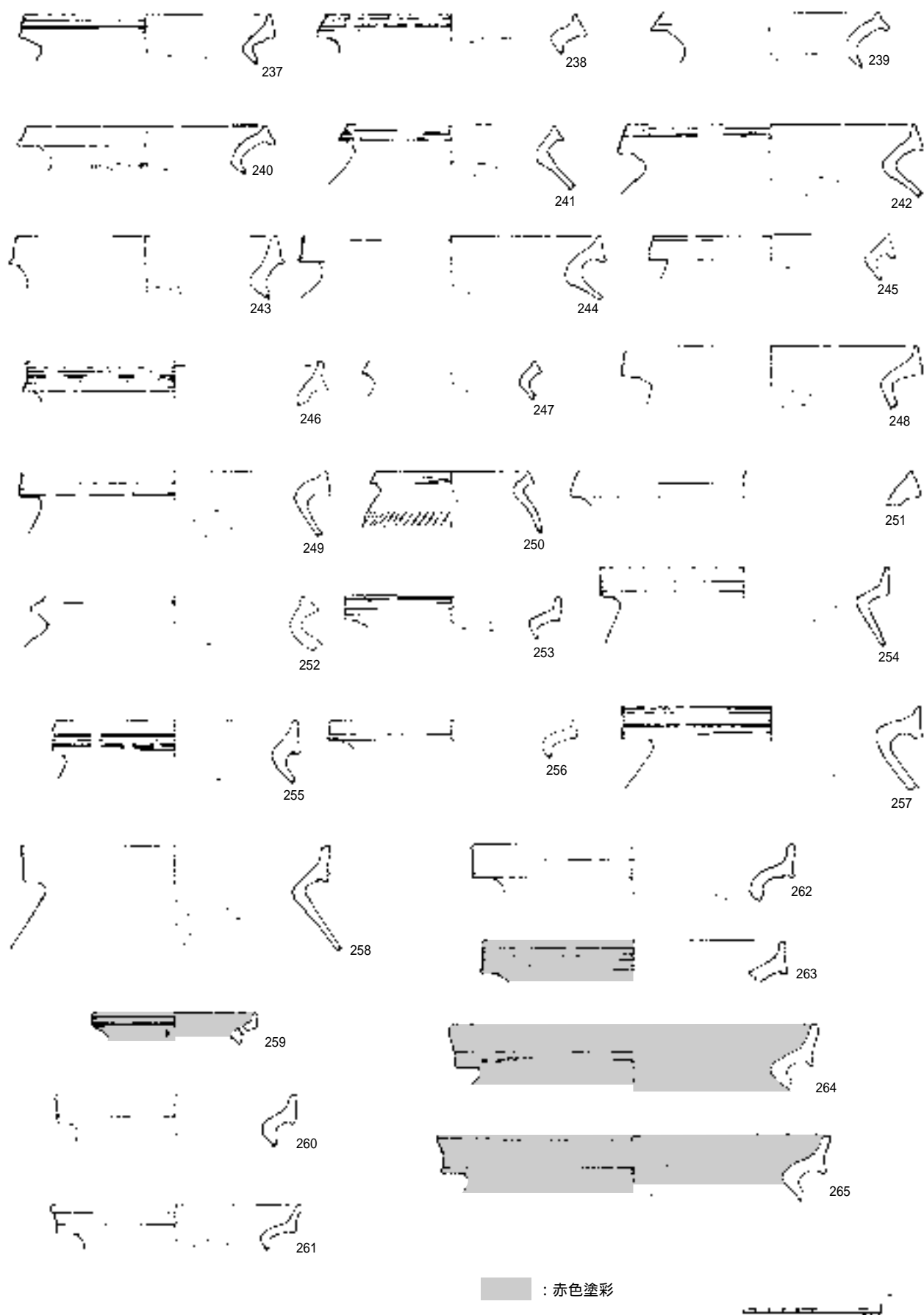


図63 溝1(5)下層出土遺物[弥生時代後期・1]

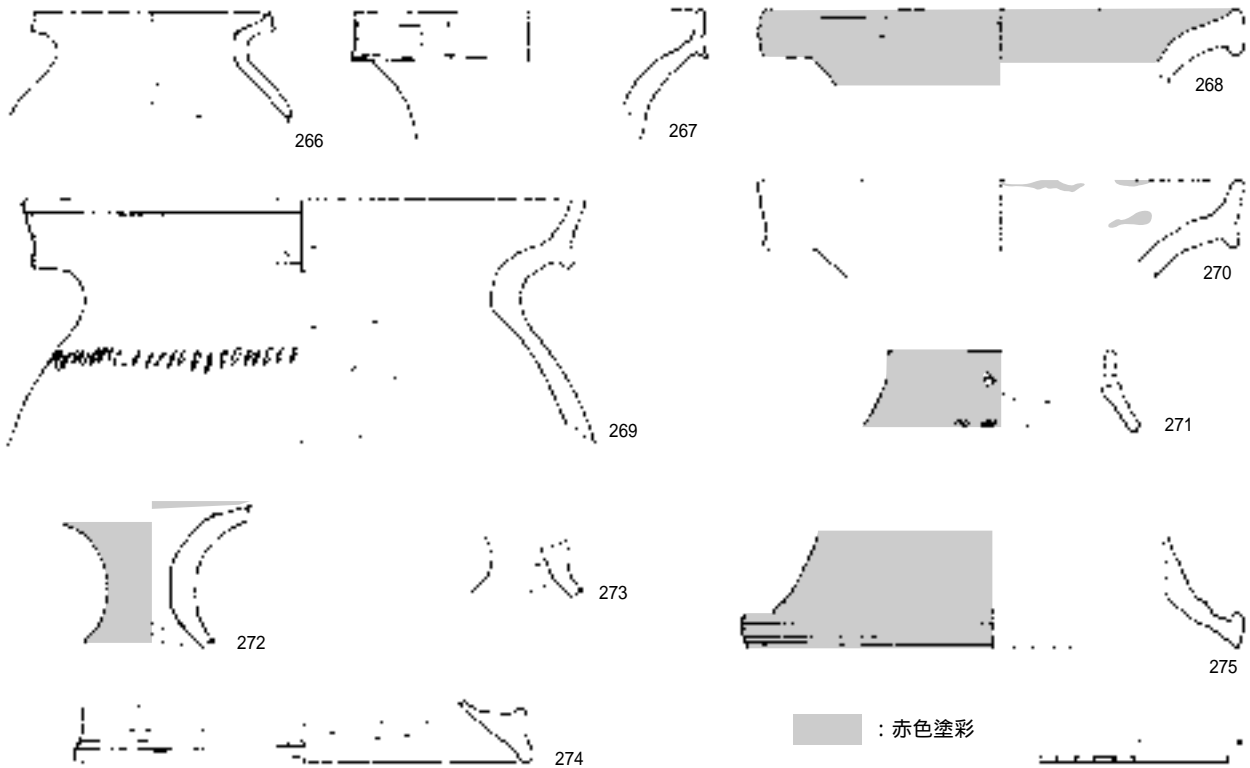


図64 溝1(6)下層出土遺物 [弥生時代後期-2]

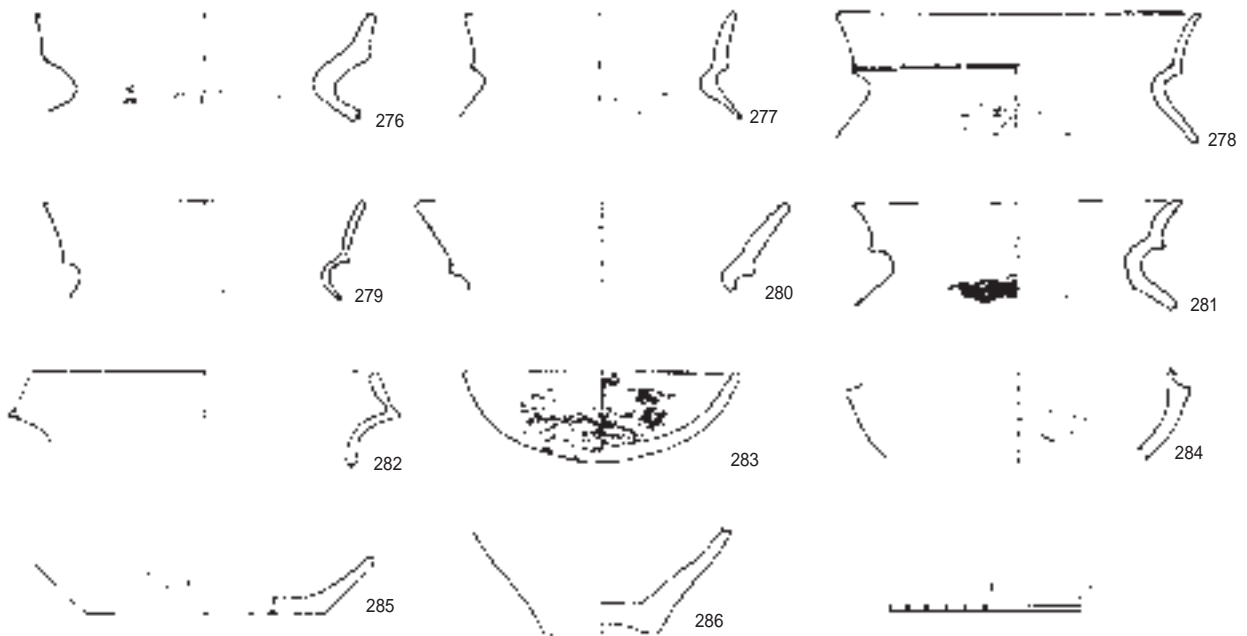


図65 溝1(7)下層出土遺物 [弥生時代末～古墳時代]

分類 類)。266～270は壺。271は無頸壺。272・273は高杯。274・275は高杯もしくは器台の脚部。276～281は弥生時代終末期の甕。282は古墳時代前期後葉ごろのものと思われる壺。283は古墳時代前期中葉～後葉ごろの鉢。284は受け部状の段を持つ碗形の器種で、高杯の杯部であろうか。これも古墳時代前期のものと思われる。285・286は甕ないしは壺の底部である。 (北)

ピット (図66・67・69、図版61、表28～30・41)

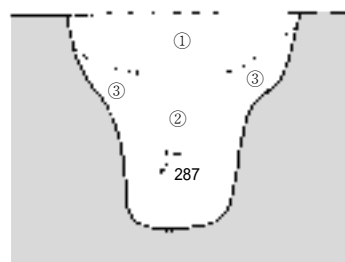
第1面では227基のピットを確認している。前述したように、そのうち35基が灰色の埋土を含む中世のもので、そのほかのものは大半が古墳時代のものであろう。分布はA区の東部、B区の中央、E区にまとまりがある。

P24はM8グリッドで検出したピットで、埋土は3層からなる。柱穴の可能性が高く、①層は流入土、②層は柱痕部分、③層は掘り方込め土であろう。②層から287が出土した。土師器の甕で、口縁がほぼ直立し、肩が極端ななで肩をなす。内面を細かい単位で非常に深く削る。特異な器形で、色調や胎土、焼成の状態も本遺跡出土のほかの土師器とは異なる。おそらく古墳時代後期ごろのものと思われる。

ほかに時期の判断できる遺物の出土したピットがいくつかある (P25～P34)。いずれも古墳時代の土器が出土している。P25のみA区東部に位置し、ほかのものはすべてE区に位置する。A区のP25から出土したのは295で、土師器の高杯か。厚ぼったいつくりで、外面はケズリ後ナデ、内面は丁寧にナデている。焼成や胎土の特徴なども考慮すると、古墳時代中期末のものと思われる。288～294は須恵器ですべてE区に分布するピット内出土。288～292は杯蓋。288は内面端部にわずかに段をつける。出雲4期、TK209型式併行のものであろう。289は肩部に明瞭な段と稜をもち、口縁端に段をつくる。TK208型式併行のものであろう。290は肩部に稜をもち、291は内面口縁端にわずかに段をつける。293は杯身で出雲4期、TK209型式併行ごろのもの。294は高杯脚部。三角形の透かしをもち、295～298は土師器の甕である。いずれも端部がすぼまる単純口縁の



29.40m



- ① 暗褐色土 (しまりやや弱。粘性やや強)
- ② 暗灰褐色土 (しまり弱。粘性強)
- ③ 暗褐色土 (しまり強。砂質)

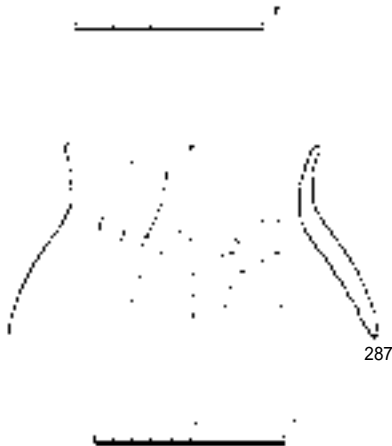
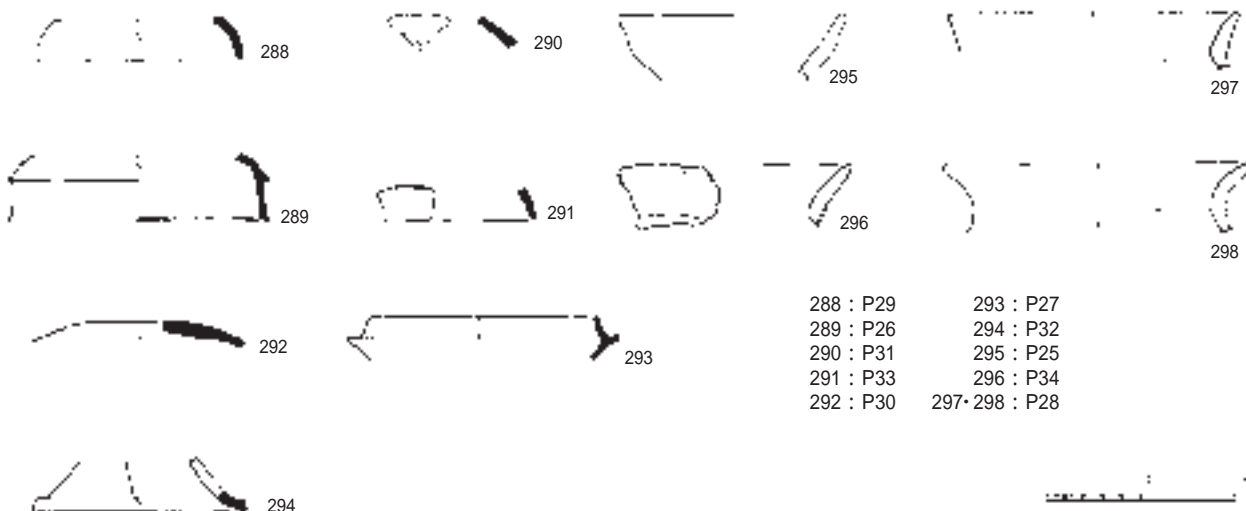


図66 第1遺構面ピットP24



- 288 : P29
- 289 : P26
- 290 : P31
- 291 : P33
- 292 : P30
- 293 : P27
- 294 : P32
- 295 : P25
- 296 : P34
- 297・298 : P28

図67 第1遺構面ピット出土遺物

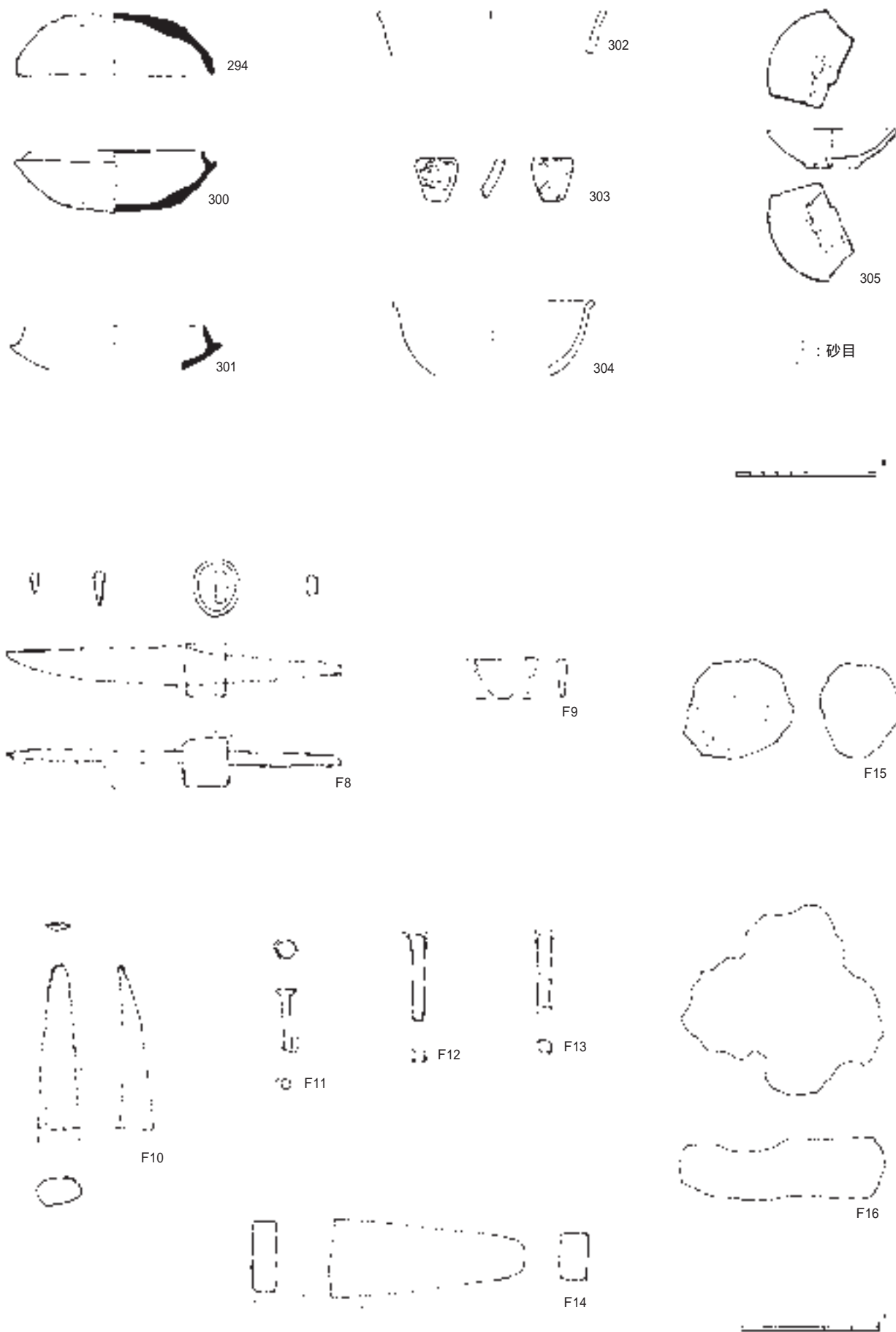


図68 第3調査地遺構外出土遺物

口縁部片で、後期末のものと考えられる。以上の出土遺物からみると、ピットの時期はA区のP25が中期末、E区のものP26を除き後期末ごろに比定できる。分布と時期の関係は、主要な遺構の分布のあり方とも一致する。ほかの遺物の出土していないピットの時期も、A区のもの中期末が多く、E区のもの後期末が多い可能性があるだろう。(北)

4. 第1遺構面遺構外出土遺物(図68、図版61、表41・61)

第1遺構面は表土直下の検出で、包含層をとまわらないが、表土・耕作土やその下面の鉄分の沈着層などから古墳時代と中近世の遺物が出土している。299～301は須恵器の杯。いずれも出雲4期、TK209型式併行のものであろう。302～304は青磁でいずれも碗。302は口縁の外反するタイプで、外面に文様をもつ。施釉が厚い。15世紀前半ごろのもの。303は内外面に文様をもつ。14世紀後半から15世紀前半ごろのもの。304は無文で口縁が外反する。胎土が悪く、釉に貫入が見られる。15世紀前半のもの。305は雑釉陶器の皿で、灰色の釉が施され、内面底面と底部に砂目が見られる。李氏朝鮮産で16世紀末～17世紀初頭のもの。F8～F16は鉄製品および製鉄関連遺物。F8・F9は刀子。F8には鉸具を残す。F10は鉋であろうか。F11～F13は釘。F14は板状不明鉄製品。F15・F16が鉄生産関連遺物。F15は塊状の羽口溶解物。全体に黒色ガラス化している。F16は碗形鍛冶滓。左側肩部に羽口先の溶解物がのる。鍛錬鍛冶滓であろうか。(北)

【参考文献】

- 谷本進1988「赤色顔料・漆記号を施した須恵器と鎮魂儀礼」『但馬考古学』第5集 但馬考古学研究会
 古川登1995「顔料あるいは塗料による彩色記号のある須恵器について」『岐阜史学』89 岐阜史学会
 宮本長二郎1991「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』 埋蔵文化財研究会

第5章 第3調査地の調査

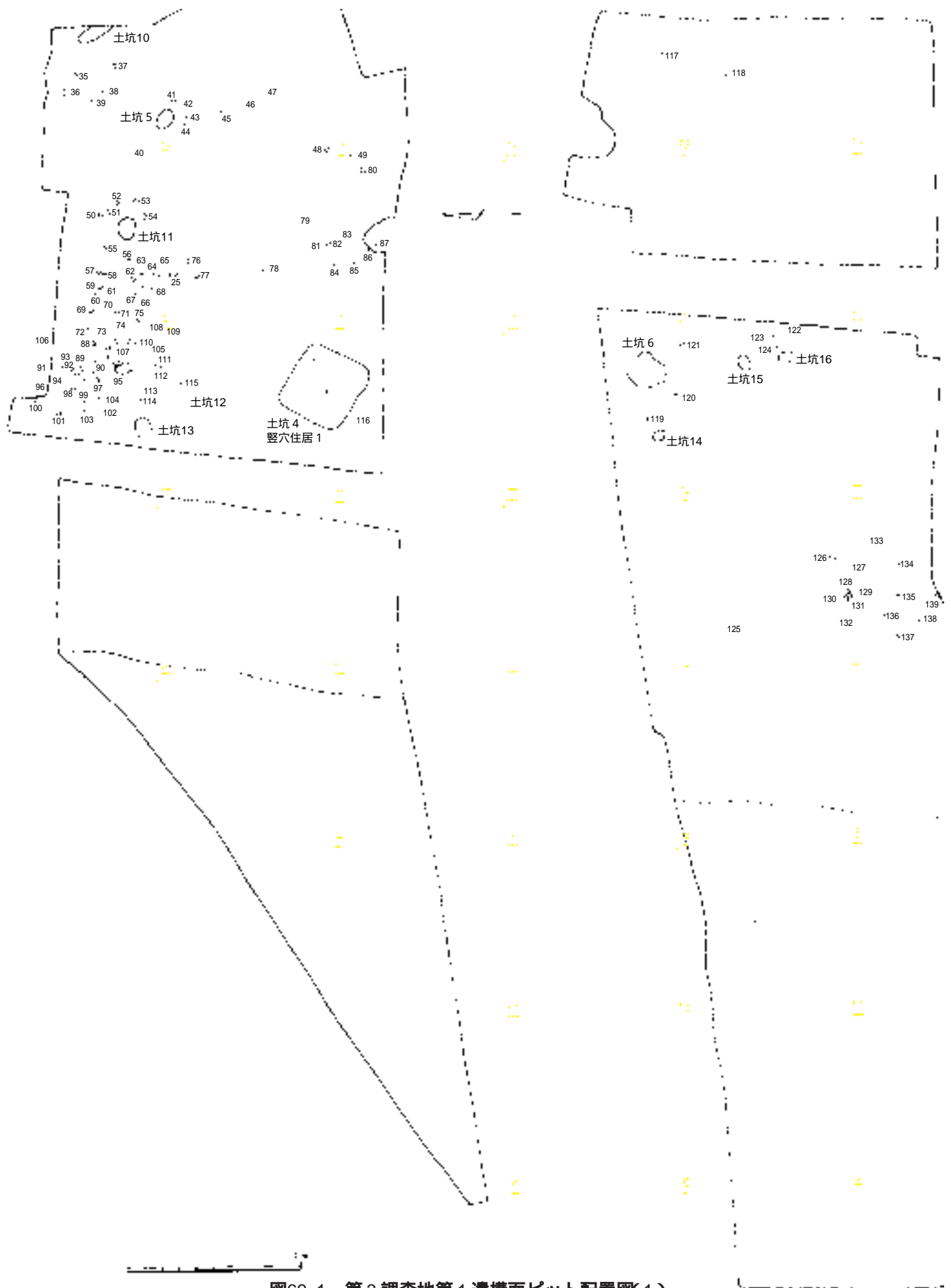


図69-1 第3調査地第1遺構面ピット配置図(1)

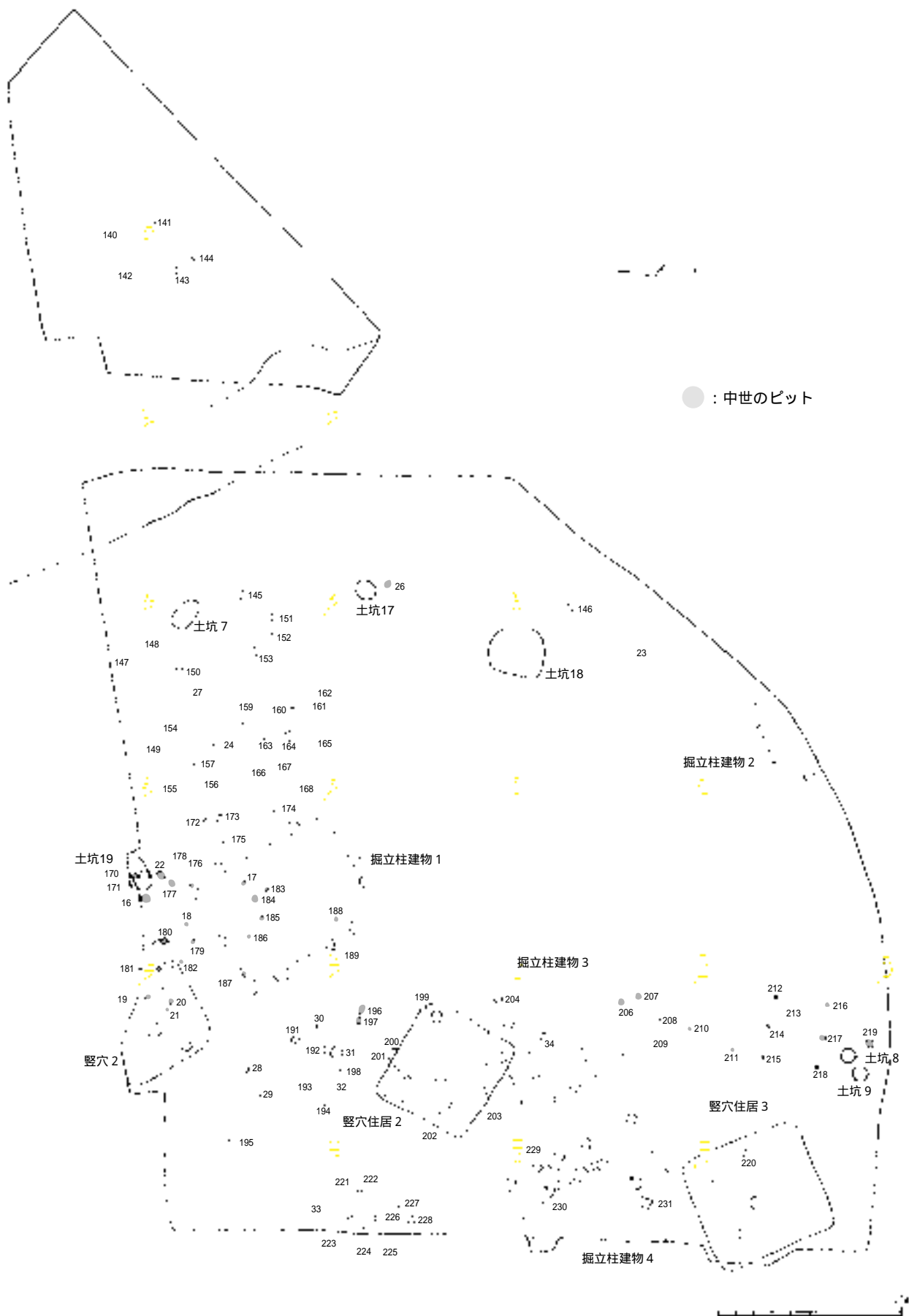


図69-2 第3調査地第1遺構面ピット配置図(2)

第4節 第2遺構面の調査

1. 概要

第2遺構面は縄文時代早期から弥生時代後期にかけての遺物を包含する層の掘り下げ後、層上面で検出した。層上面にも圃場整備時の地形改変が及ぶ部分がある。その影響はC区で大きく、南東部（J3・J4・J5・K3・K4・K5グリッド付近）では削平を受けているほか、6ライン付近は段切りを受けて大きく斜めにカットされている。そのほかの部分ではおおむね原地形はとどめている。丘陵が控える南東側が高く、名和川や東谷川の流れる北西側に向けて下る地形をなしている。微地形を見ると浅く緩い谷や微高地状の高まりが観察できるが、遺構の分布とはほとんど結びつかない。こうした微地形は層堆積時に形成されたものの可能性もある。

本遺構面は縄文時代から弥生時代にかけて形成されたと考えられる。検出した遺構のうち時期が判明したものには弥生時代中期および後期と縄文時代早期末～前期初頭および後期のものがある。弥生時代の遺構は竪穴住居、竪穴、土坑などで構成されており、充実した内容を見せるが、縄文時代の遺構は土坑が数基確認されたのみである。そのほか時期不明の遺構に多数の土坑やピットがある。検出した遺構の大半は確認できた掘り込みが浅く、遺存状態が悪い。基盤層となる層は砂質土であるため土壌化、流失が起こりやすく、層の堆積過程で遺構面の上面は大きく削れてしまったと考えられる。遺構自体が層堆積時に完全に崩壊してしまったことも考えられるだろう。また、同一面で検出した遺構も層堆積以前は時期によって違った掘り込み面をもっていた可能性もある。（北）

2. 弥生時代の調査

遺物が出土して、時期を確定できた弥生時代の遺構は、竪穴住居3棟、竪穴3基、土坑2基である。このうち、竪穴住居2棟（竪穴住居4・5）、竪穴3基（竪穴3～5）、土坑1基（土坑20）は中期のもので、竪穴住居1棟（竪穴住居6）、土坑1基（土坑21）が後期のものである。中期の遺構はいずれもE区に位置し、竪穴住居と竪穴はすべてE区東部に集まって分布している。また、出土遺物から判断する限りこれらの遺構はほぼ同時期と考えられる。こうしたことから、中期の遺構は、非常にまとまりのよい遺構群を形成しているといえる。後期の遺構は、竪穴住居6がC区東部に、土坑21がE区西部に位置し、平面的にはまとまりを見せない。ただし後述するように、両遺構からは特徴の近似したガラス小玉がそれぞれ出土しており、密接な関係をうかがわせている。（北）

表8 第3調査地内第2遺構面新旧遺構対照表

報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名
竪穴住居4	SI8	土坑22	SK31	土坑31	SK28	土坑40	SK6
竪穴住居5	SI5	土坑23	P.M7 5	土坑32	SK21	土坑41	SK5
竪穴住居6	SI14	土坑24	SD3	土坑33	SK19	土坑42	SK33
竪穴3	SI9	土坑25	SK27	土坑34	SK18	土坑43	SK59
竪穴4	SI10	土坑26	SK23	土坑35	SK10	土坑44	SK60
竪穴5	SI13	土坑27	SK25	土坑36	SK9	土坑45	SK64
土坑7	SK50	土坑28	SK30	土坑37	SK24	土坑46	SK66
土坑20	SK54	土坑29	SK22	土坑38	SK26	土坑47	SK61
土坑21	SK65	土坑30	SK29	土坑39	SK4		



图70 第3調査地第2遺構面遺構配置図

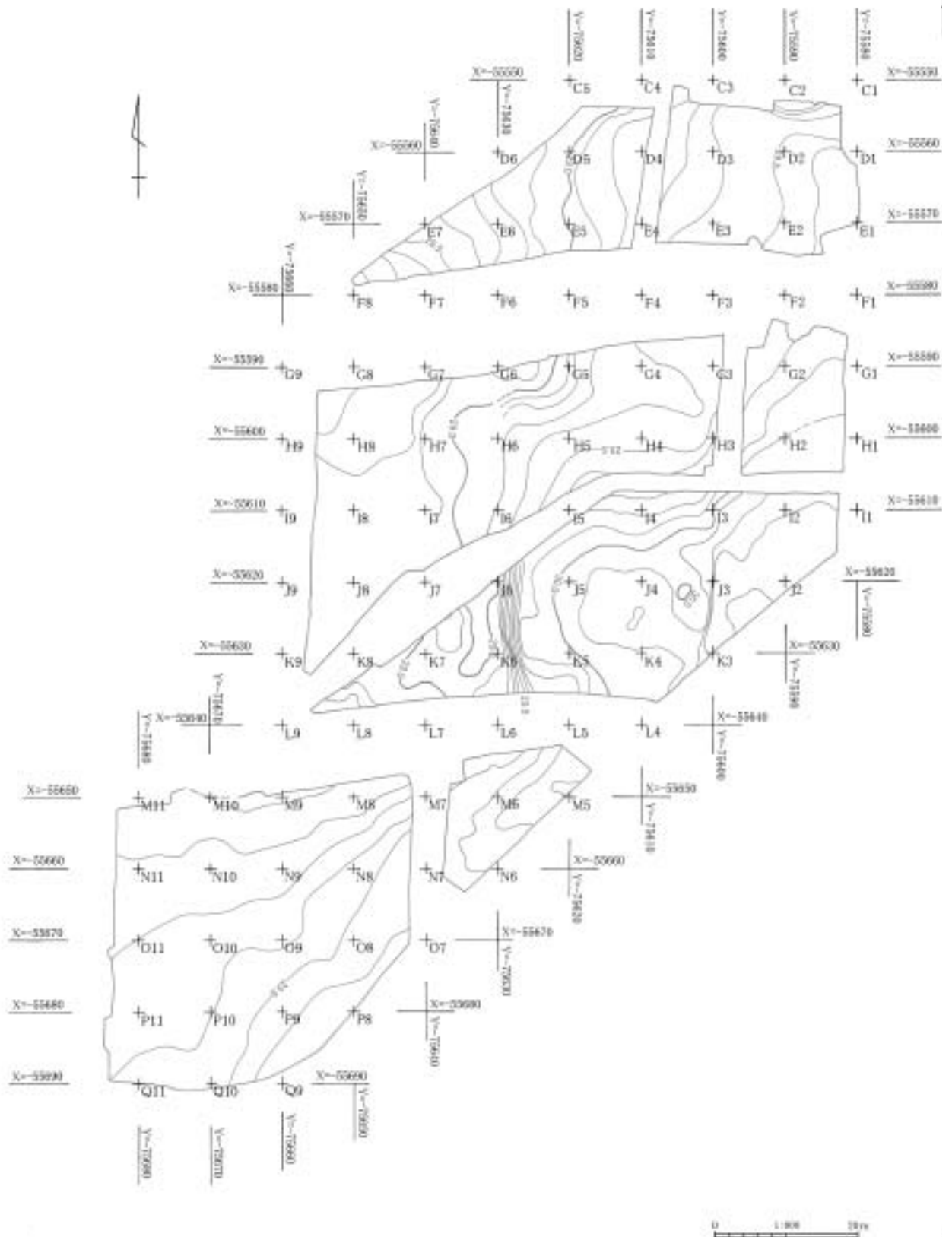


图71 第3調査地調査後地形測量図

第5章 第3調査地の調査

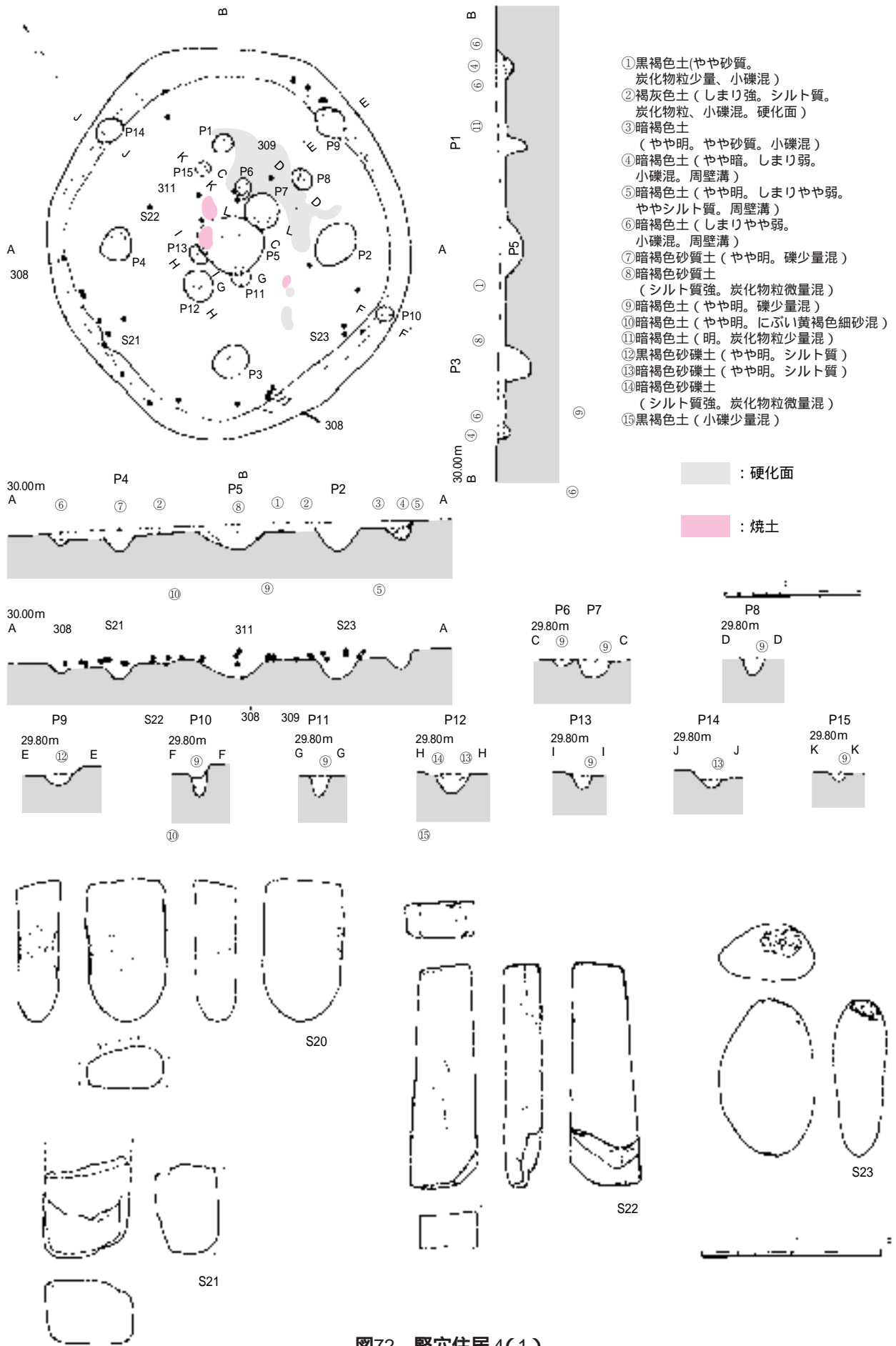


図72 竪穴住居4(1)

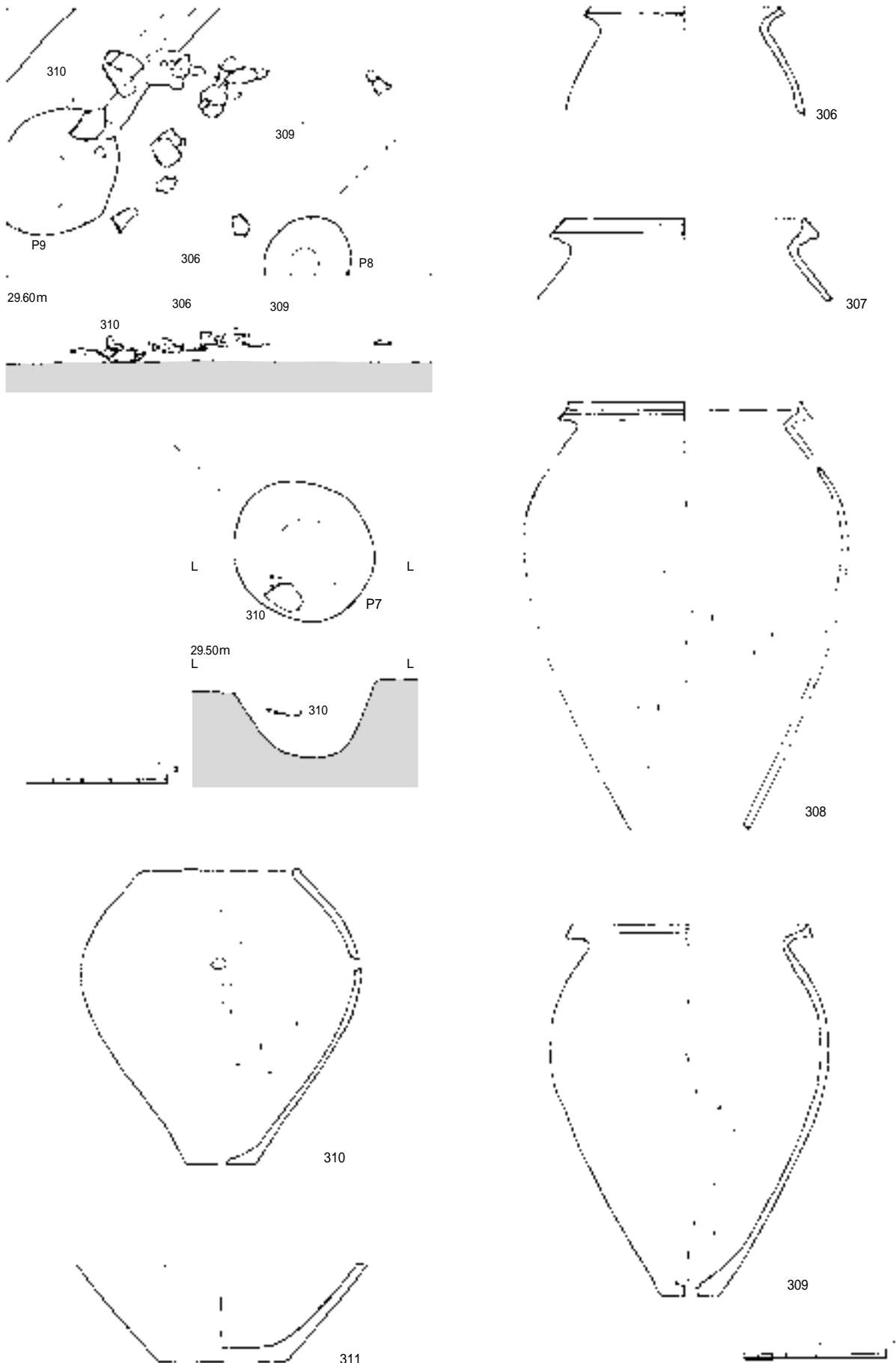


图73 竖穴住居4(2)

竪穴住居4（図72・73、図版33～36・62・63、表41・59）

<形態と構造>

E区東端、M・N7グリッドに位置する、平面形が円形を呈する竪穴住居である。検出面での規模は長軸5.8m、短軸5.4m、床面では長軸5.1m、短軸4.8m、床面積は17.9㎡を測る。検出面からの深さは10～13cmと浅く、埋土は黒褐色土の1層だけ確認できた。床面レベルは南東から北西に向かってやや下がっている。

床面からはP1～15と周壁溝を検出した。P1～4は主柱穴で、楕円形を呈しており、P1は径35×29cm、深さ37.6cm、底面の標高29.04m、P2は径62×55cm、深さ35.1cm、底面の標高29.07m、P3は径56×45cm、深さ43.1cm、底面の標高28.98m、P4は径51×42cm、深さ25.0cm、底面の標高29.12mを測る。柱間は、P1 - P2が2.3m、P2 - P3が2.4m、P3 - P4が2.5m、P4 - P1が2.1mを測る。P5はいわゆる中央ピットにあたり、径96×86cm、深さ26.9cm、底面の標高29.12mで楕円形を呈している。

P6は径33×23cm、深さ10.5cm、底面の標高29.31m、P7は径54×48cm、深さ22.7cm、底面の標高29.15m、P8は径34×29cm、深さ25.0cm、底面の標高29.17m、P9は径50×43cm、深さ10.9cm、底面の標高29.26m、P10は径36×23cm、深さ33.2cm、底面の標高29.02m、P11は径31×30cm、深さ29.5cm、底面の標高29.09m、P12は径51×42cm、深さ29.4cm、底面の標高29.05m、P13は径32×25cm、深さ23.4cm、底面の標高29.14m、P14は径43×33cm、深さ12.0cm、底面の標高29.17m、P15は径22×22cm、深さ12.3cm、底面の標高29.22mで円形または楕円形を呈している。ピットの埋土は暗褐色系で、全体的に浅く、柱痕・抜き取り痕は確認できなかった。中央ピット脇にある、P7とP12は補助柱穴と考えられる。周壁溝は幅14～35cm、深さは6～17cmほどで、全周している。

貼床は確認されなかったものの、一部に床面が硬化している範囲を確認できた。本来はこの範囲がさらに広がっていたと考えられる。埋土の断面でこの硬化面を確認している（②層）。この硬化面は生活する際に踏み固められたものだと考えられる。

<遺物出土状況>

出土した遺物は床面からわずかに浮くものがあるものの床面直上出土であると考えられる。南隅と北西で甕308が、北東部でまとまって甕306・309・310が出土している。309は底部に穿孔、310は胴部に穿孔され、頸部以上が切り取りされていることから、住居廃棄に伴う祭祀に使用された可能性が高い。310の破片が、補助柱穴と考えられるP7上層から出土している。

<出土遺物>

埋土中から出土した遺物で、図化可能なものはすべて掲載した。

S20は敲石で3面に敲打痕が残る。S21は磨石。S22は粘板岩製の定型砥石である。砥石目は極細で、全面が砥面として使用され、長軸方向の使用が顕著である。傷痕、擦痕もみられる。S23は敲石である。

306～310は甕である。306は口縁部に2条の凹線が施され、端部は上につまみ出されている。外面の調整は風化が著しくわからないが、内面はナデで調整されている。307は口縁部を肥厚させて拡張している。端面には4条の凹線が巡る。308は口縁端部を上方に拡張させ4条の凹線を巡らす。体部は上半を内外面ともハケで調整した後に、下半は外面ミガキ、内面ケズリで調整している。309は口縁の拡張は小さく、2条の凹線が巡る。外面は風化が著しいが、下半にミガキがわずかに

みられる。内面は上半ハケ、下半ケズリ後、ナデで仕上げられている。底部には焼成後に外側から穿孔されている。310はやや体部が張るタイプのものである。外面の調整は風化が著しく不明であるが、下半には煤が付着している。内面は上半ハケ目、下半ケズリで調整されている。頸部から上は切り取られており、胴部最大径部付近には外側から穿孔がされている。311は甕か壺の底部で、内外面ともに風化が著しい。外面はミガキ、内面は指押さえの跡がわずかに残るのみである。これらに遺物はすべて清水編年 - 1 ~ 2 様式に収まるものであろう。

これらの出土遺物からこの竪穴住居は弥生時代中期後葉のものと考えている。 (三木)

竪穴住居5 (図74・75、図版33・34・36・37、表41・42)

<形態と構造>

E区東端、N・O7グリッド、竪穴住居4の南に位置する、平面形が墮円形を呈する竪穴住居である。検出面での規模は長軸4.7m、短軸4.6m、床面では長軸・短軸共に4.1m、床面積は17.3m²を測る。検出面からの深さは10~15cmと浅く、埋土は黒褐色土の1層だけが確認できた。床面レベルは南東から北西に向かってやや下がっている。

床面からはP1~14と周壁溝を検出した。P1~4は主柱穴で、円形または楕円形を呈しており、P1は径28×25cm、深さ35.7cm、底面の標高29.15m、P2は径75×60cm、深さ37.0cm、底面の標高29.12mで西側に浅いテラスをもつ。P3は径36×36cm、深さ35.3cm、底面の標高29.09m、P4は径68×63cm、深さ27.4cm、底面の標高29.19mを測る。柱間は、P1 - P2が2.3m、P2 - P3が2.3m、P3 - P4が2.5m、P4 - P1が2.3mを測る。P5はいわゆる中央ピットにあたり、径100×84cm、深さ19.3cm、底面の標高29.30mで楕円形を呈しており、北西側に浅いテラスをもつ。P1~P4には柱痕および抜き取り痕は確認できなかった。

P6は径39×38cm、深さ37.4cm、底面の標高29.13m、P7は径57×40cm、深さ31.8cm、底面の標高29.18m、P8は径40×37cm、深さ43.3cm、底面の標高29.07m、P9は径45×35cm、深さ20.9cm、底面の標高29.27m、P10は径37×27cm、深さ29.9cm、底面の標高29.28m、P11は径40×33cm、深さ13.7cm、底面の標高29.37m、P12は径64×49cm、深さ35.2cm、底面の標高29.19m、P13は径29×24cm、深さ13.7cm、底面の標高29.33m、P14は径37×35cm、深さ11.7cm、底面の標高29.36mで円形または楕円形を呈している。ピットの埋土は暗褐色もしくは黒褐色で、P6、P7、P12には抜き取り痕が確認できた。中央ピット脇にあるP7とP9は、竪穴住居4と同様に補助柱穴と考えられる。周壁溝は幅16~20cm、深さは8~10cmほどで、全周している。

竪穴住居4と同様に、貼床は確認されなかったものの、一部に床面が硬化している範囲を確認でき、生活の場として踏み固められたものだと考えられる。

<遺物出土状況>

出土した遺物はほとんどが床面直上遺物であると考えられる。東側で出土した台付き壺318は南側から北側に向けて倒れこんだような状態で出土している。P2埋土中からは壺部の破片が出土している。倒れこんだときに流れ込んだものであるうか。他には埋土堆積時に流れ込んだと思われる土器小片が出土している。以上の事から台付き壺のみが住居廃絶時に置かれていた可能性があり、特殊な器種であることをあわせると、住居廃絶の際に祭祀が行われた可能性がある。

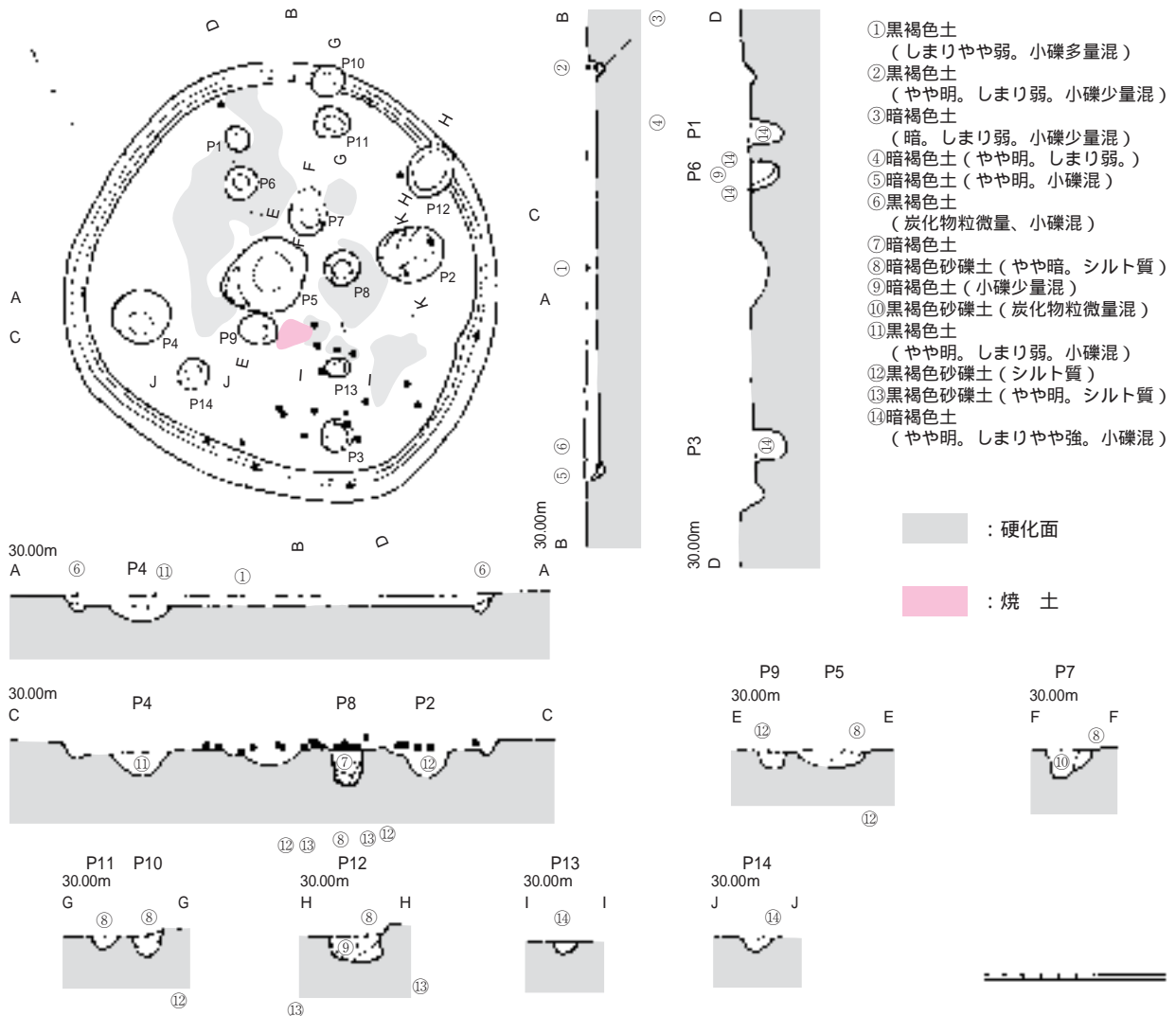


図74 竪穴住居5(1)

< 出土遺物 >

埋土中から出土した遺物で、図化可能なものはすべて掲載した。

312～316は埋土中出土で、312～314は口縁部が上下に拡張する甕、315・316は壺口縁端部である。312・314は口縁部に3条の、313は口縁部に4条の凹線を施す。いずれも清水編年 - 1～2 様式に収まるものであろう。315は1条の沈線とキザミが施されている。315は口縁部が水平に広がる壺であろうか、2条の沈線とともにキザミが施されている。315・316はその他の遺物よりやや時期が古い、様式の特徴をもつ事から、混入遺物の可能性が高い。317は中央ピット (P 5) 出土の甕である。口縁には3条の凹線が施された後ナデ調整され、端部は上につまみだされている。体部は内面外面ともに八ケで調整されている。いずれも清水編年 - 1 様式の範囲であろう。318は台付き壺で、甕と高杯脚部を組み合わせたような器形である。口縁上端部は内傾しており、端面には1条の凹線が施されている。頸部には指頭圧痕貼付突帯が巡り、体部は強く張っている。脚柱部には11条、脚裾部には9条、脚端部には3条の凹線文が巡り、脚部は大きく「八」の字状に広がっている。口縁部内側と脚裾部に一部赤色顔料が残存している。脚裾部から端部には二方の透かしがあるが、図示している一方は未貫通で、もう一方は方形で貫通している。外面の調整はやや風化しているものの、壺部は上半八ケ目、下半ミガキが、脚部には細かい八ケでの調整がみられる。内面は、

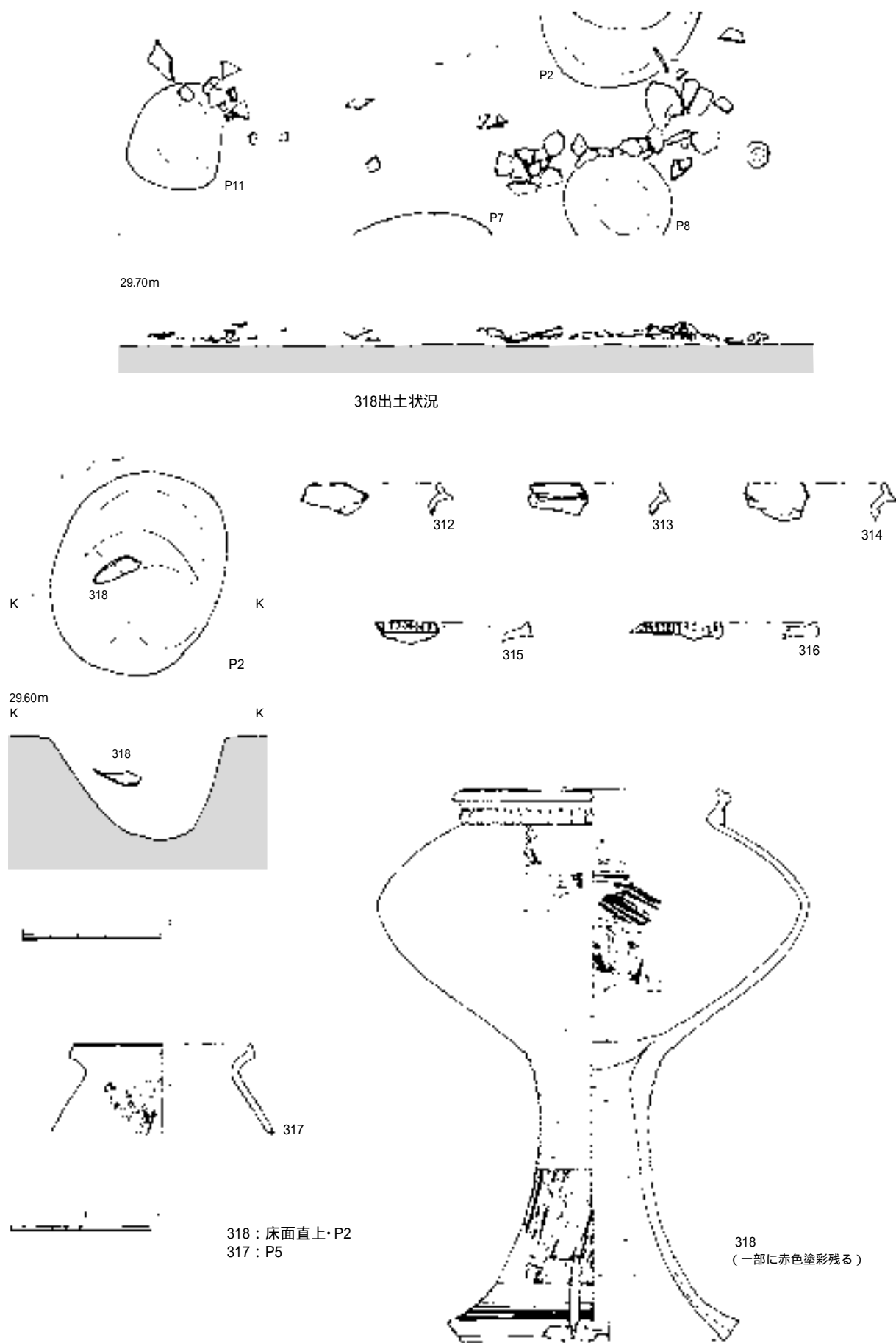


図75 竪穴住居5(2)

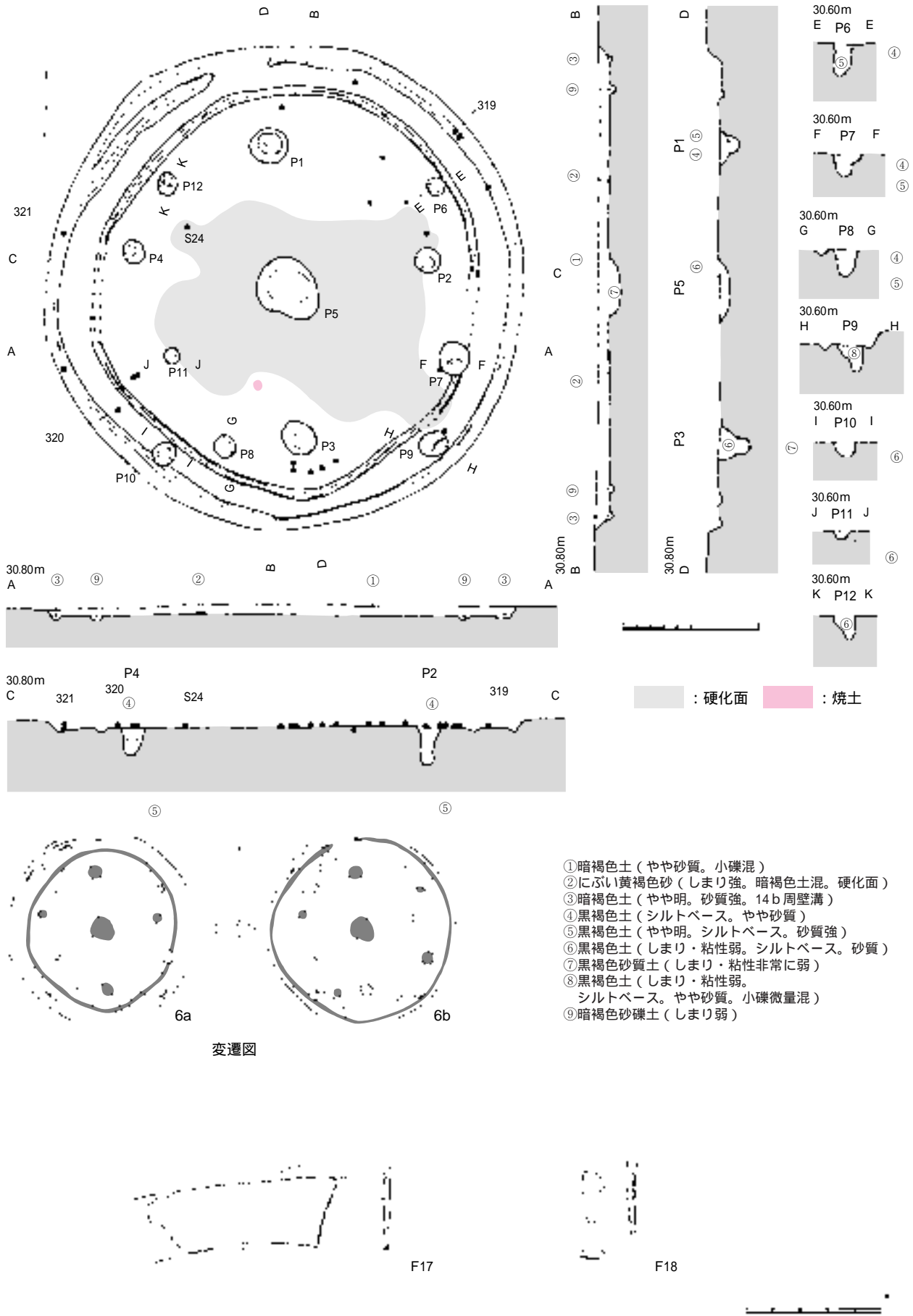


図76 竪穴住居6(1)

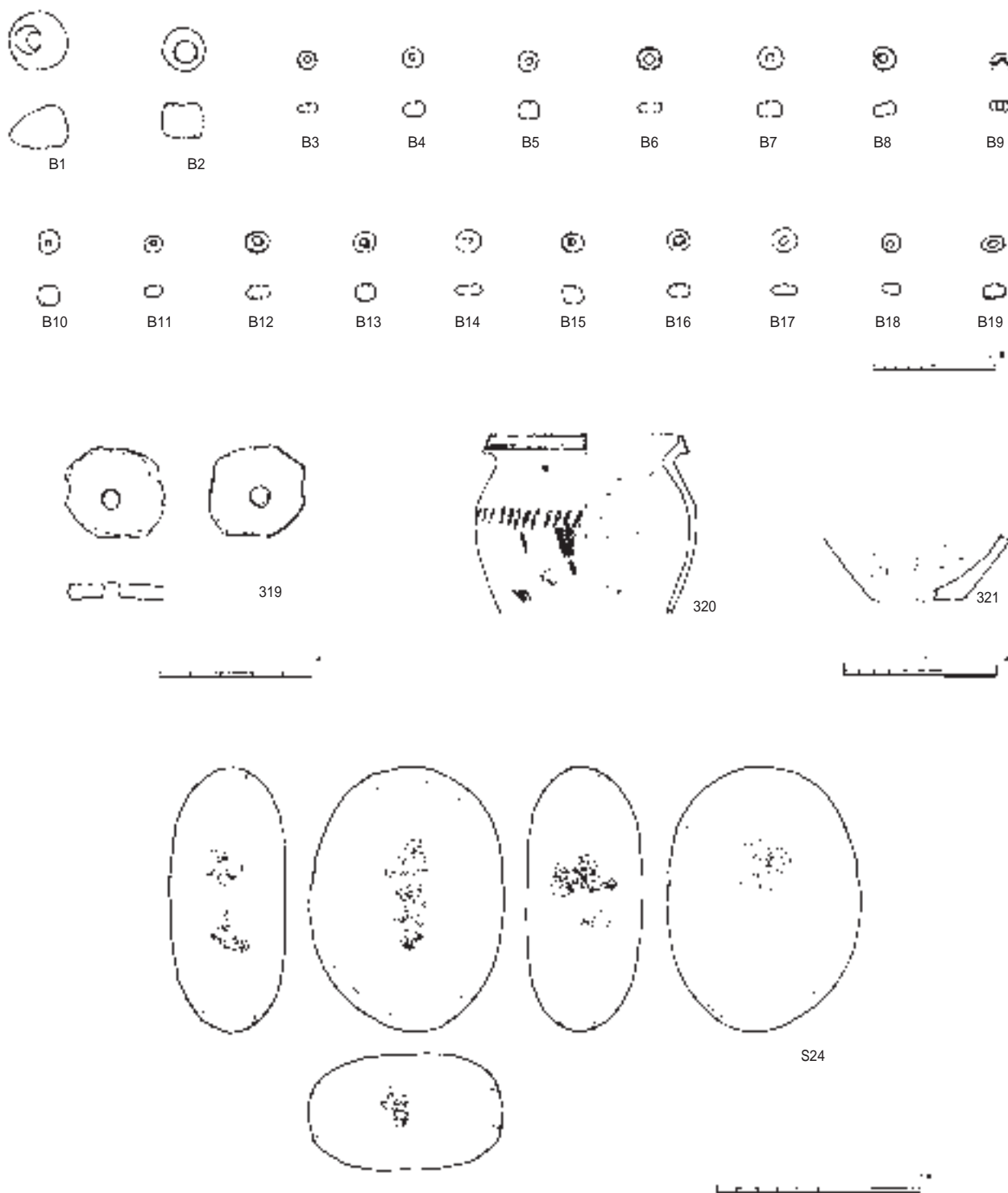


図77 竪穴住居6(2)

口縁はナデ、壺部は上半ハケ目、下半ハケ後ミガキで調整され、一部ナデ調整されており、脚部はケズリで調整されている。壺部と脚柱部は円盤充填法で接合されており、底面には脚部内面のケズリ調整に伴う工具痕が、円を描くようについている。

これらの出土遺物からこの竪穴住居は弥生時代中期後葉のものと考えている。竪穴住居4と竪穴住居5は形態等に共通点が多いことから、関連性が強いと考えられる。(三木)

竪穴住居6（図76・77・図版33・37・64、表42・58・59・61）

<形態と構造>

C区東端I1・2グリッドに位置する、平面形が円形を呈する竪穴住居である。床面検出時に外周とそのやや内側に2条の溝を検出し、内側の溝を切って支柱穴と思われるピットが掘り込まれていることから、拡張に伴う建て替えが行われたと考えられる。建て替え前を竪穴住居6a、建て替え後を竪穴住居6bとする。埋土は暗褐色土の1層のみ確認できた。

竪穴住居6aは、床面での規模が長軸6.8m、短軸6.4m、床面積は23.4㎡を測る。4本柱で中央ピットをもつ竪穴住居である。この時期の竪穴住居としてはやや規模が大きいものである。

P1～P4は支柱穴である。P1は径58×52cm、深さ40.6cm、底面の標高29.77mで2段掘りになっており、他の支柱穴よりはやや浅い。P2は径37cm、深さ62.9cm、底面の標高29.60m、P3は径54×48cm、深さ62.0cm、底面の標高29.57m、P4は径37×32cm、深さ60.8cm、底面の標高29.59mを測り、円形または楕円形を呈する。P5はいわゆる中央ピットにあたり、径100×87cm、深さ18.7cm、底面の標高30.03mを測り、不整円形を呈する。P1・P4・P5は拡張後も使用されたと考えられることから、検出時のプランが竪穴住居6aで機能していた当時の形態を保っているかは不明である。柱間は、P1 - P2が2.9m、P2 - P3が3.2m、P3 - P4が3.7m、P4 - P1が2.6mを測る。P4 - P1間が他の柱間より狭くなっている。各ピットの埋土は黒褐色土系で、P1～P4には建て替えの際に柱を抜いたためか柱痕は確認できなかった。周壁溝は、幅12～16cm、深さは6～8cmほどで、全周しており、暗褐色を呈する地山質の埋土が堆積していた。

竪穴住居6bは、竪穴住居6aの後に拡張建て替えされたものである。検出面での規模は長軸7.1m、短軸7.0m、床面での規模は長軸・短軸とも6.6mで、床面積は32.1㎡を測る。5本柱で中央ピットをもつ竪穴住居である。検出面からの深さは15～20cmと浅く、底面レベルは標高30.15～30.20mでほぼ揃う。竪穴住居6aよりもさらに大きく、竪穴住居としては大型のものである。

支柱穴はP1・P6・P7・P8・P4で、P1・P4と中央ピットであるP5は竪穴住居6aと共有している。P6は径28×26cm、深さ71.1cm、底面の標高29.52m、P7は径48×46cm、深さ45.2cm、底面の標高29.75m、2段掘りになっており、P8は径36×32cm、深さ45.2cm、底面の標高29.73mを測り、円形もしくは楕円形を呈する。柱間はP1 - P6が2.5m、P6 - P7が2.7m、P7 - P8が3.5m、P8 - P4が3.2m、P4 - P1が2.6mを測る。埋土は黒褐色土系である。その他、床面で検出したピットは、P9は径43×37cm、深さ40.4cm、底面の標高29.79m、P10は径36×33cm、深さ22.0cm、底面の標高29.94m、P11は径27×23cm、深さ13.2cm、底面の標高30.08m、P12は径34×29cm、深さ36.6cm、底面の標高29.81mを測り、不整円形を呈している。ピットの埋土は黒褐色土系の2層である。周壁溝は、幅16～23cm、深さは6～8cmほどで、北側の一部を除き全周しており、埋土は暗褐色土である。

貼床は確認されなかったものの、生活が営まれた際に踏み固められたと考えられる硬化範囲が確認できた。埋土断面の床面直上で、硬化面の一部と考えられる黄褐色砂層(②層)を確認しており、床面形成の際に入れられたものか、床面の補修の際に入れられたものと考えられる。南西部で焼土を少量検出している。床面からはやや浮いているので、生活面上での地床炉としての機能は考えがたい。しかし堆積層位は下層にあたりと考えられるので、この住居に伴うものの可能性がある。

< 遺物出土状況 >

遺物の出土は北東部と南側に多くみられるが、多くは包含層からの混入と考えられる縄文土器片がほとんどであった。埋土中からは石製小玉1点、ガラス小玉18点が出土している。出土位置は押えていないものの、出土地区(A - A'、B - B'ラインで区割り)ごとにみると北東区2点(内1点はP2埋土中出土)、南東区4点、南西区7点、北西区6点で、北西区のものはやや南よりで出土したものが多かった。この事から、玉の出土分布は住居の南側に偏っていることがわかる。これらの玉は竪穴住居6に伴うものだと考えている。319~321は出土位置から竪穴住居6bに伴うものであると考えられる。F17は南西壁際、P10の近隣で出土していることから、同様に竪穴住居6bに伴うものと考えられる。

< 出土遺物 >

出土した遺物で、混入遺物と思われるものを除き、図化できたものは全て掲載した。F17・18は鉄製品である。F17は鎌で、刃部は内湾し、先端が欠損している。F18は北東部床面直上出土で、薄い板状の鉄片である。F17と同一個体の可能性がある。

B1は緑色変成岩製と思われる小玉である。B2~B19はガラス小玉で、B2は他のものより大きい。色調はB3~B9がコバルトブルー、B2・B10~B19はスカイブルーを呈している。後述する土坑21内からもガラス小玉6点が出土しており、ガラス小玉全24点中、5点(内、竪穴住居6:3点、土坑21:2点)について成分分析を行った。その結果いずれも、弥生時代末期まで多く流通するカリガラスを素材としていることが判った(第6章第4節参照)。分析を行っていないその他のガラス小玉も同様にカリガラスが素材である可能性が高いであろう。鳥取県内で弥生時代後期に住居内からガラス小玉が出土する例はしばしば見られるが、一住居1、2点の出土が大半で、まとまった数が出土することはまれである。倉吉市沢べり遺跡第3次調査1号住居出土の14点が最多であったが(岡平2001)、竪穴住居6からは18点出土したため、県内においては最多出土例となった。

319は紡錘車で、土器片を転用したものである。320は甕で、やや立ち上がった口縁には3条の平行沈線が引かれている。外面は、体部上半はナデ、下半はハケ調整されており、胴部最大径部分にはハケ状の工具でキザミが施されている。下半部分には煤の付着が認められる。内面は頸部までケズリが上がってきており、口縁はナデで調整されている。清水編年 - 1様式に相当するものであろう。321は甕か壺の底部で、外面ミガキ、内面ケズリ調整が残る。S24は敲石である。

出土遺物の時期から弥生時代後期前葉の遺構と考えている。 (三木)

竪穴3 (図78、図版33・34・39・63、表42)

< 形態と構造 >

E区北東、M・N8グリッド、竪穴住居4の西側に位置する。平面形が不整円形を呈する竪穴である。検出面での規模は長軸4.4m、短軸4.3m、床面では長軸4.3m、短軸4.1m、床面積は13.4m²を測る。検出面からの深さは浅く6~8cmで、床面レベルは南東から北西に緩やかにレベルが下がっている。

埋土は黒褐色の1層だけ確認できた。断面では浅い周溝状のものを確認したが、平面では確認する事ができず、そのほかの床面施設も検出する事ができなかった。南東中央寄りにやや浮いてはい

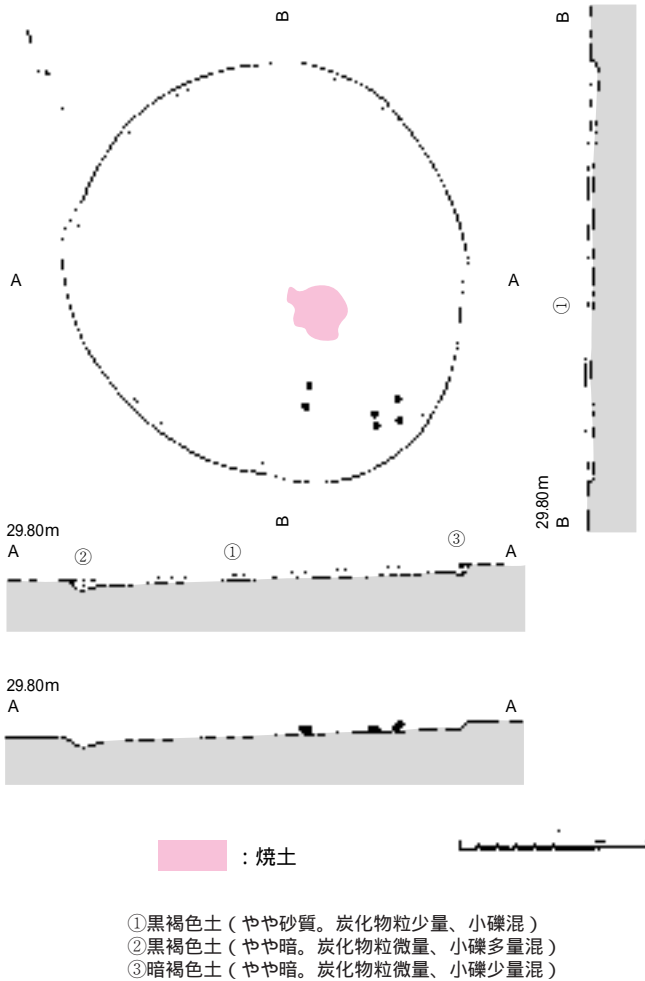


図78 竪穴3

るが、焼土を検出している。主柱穴がなく、周辺にも関連するピットが検出できなかった事から、明確な上屋構造は想定できないので竪穴住居と同じ機能を持っていたとは想定しにくい、何らかの人間活動が行われたスペースであつたであろうと考えている。

< 出土遺物 >

遺物は小片が少量出土している。図化可能なものはすべて掲載した。322は甕の口縁端部である。端面には3条の凹線が施され、端部は上下に拡張され、断面がT字状を呈している。清水編年 - 1 ~ 2 様式に相当するものであろう。323は平底の底部で、甕か壺のものであろう。

出土遺物からこの竪穴は弥生時代中期後葉のものと考えている。 (三木)

竪穴4

(図79、図版33・34・40・63・64、表42)

< 形態と構造 >

E区北東、M・N8グリッド、竪穴3の西側に位置する。平面形が墮円形を呈する竪穴である。検出面での規模は長軸4.2m、短軸3.3m、床面では長軸3.9m、短軸2.2m、床面積は9.6㎡を測る。検出面からの深さは浅く8cm程度で、底面の標高は29.20m

では揃う。

埋土は黒褐色の1層である。床面施設は検出する事ができなかったが、中央付近には竪穴住居と同様な硬化面の範囲を確認する事ができた。北東部にはやや浮いた状態で焼土を検出している。竪穴3同様、何らかの人間活動スペースとして機能していたのではないかと考えている。

< 遺物出土状況 >

西隅から甕325が出土している。床面からやや浮いてはいるものの、床面直上の遺物と捉えてもいいだろう。

< 出土遺物 >

遺物は図化可能なものはすべて掲載した。324・325は甕である。324は甕の口縁で、口縁端部が上方につまみあげられている。325は体部があまり張らないタイプの甕で、口縁部には2条の凹線が施されている。外面は頸部の下にハケが少し残るものの全体的にミガキで仕上げられている。内

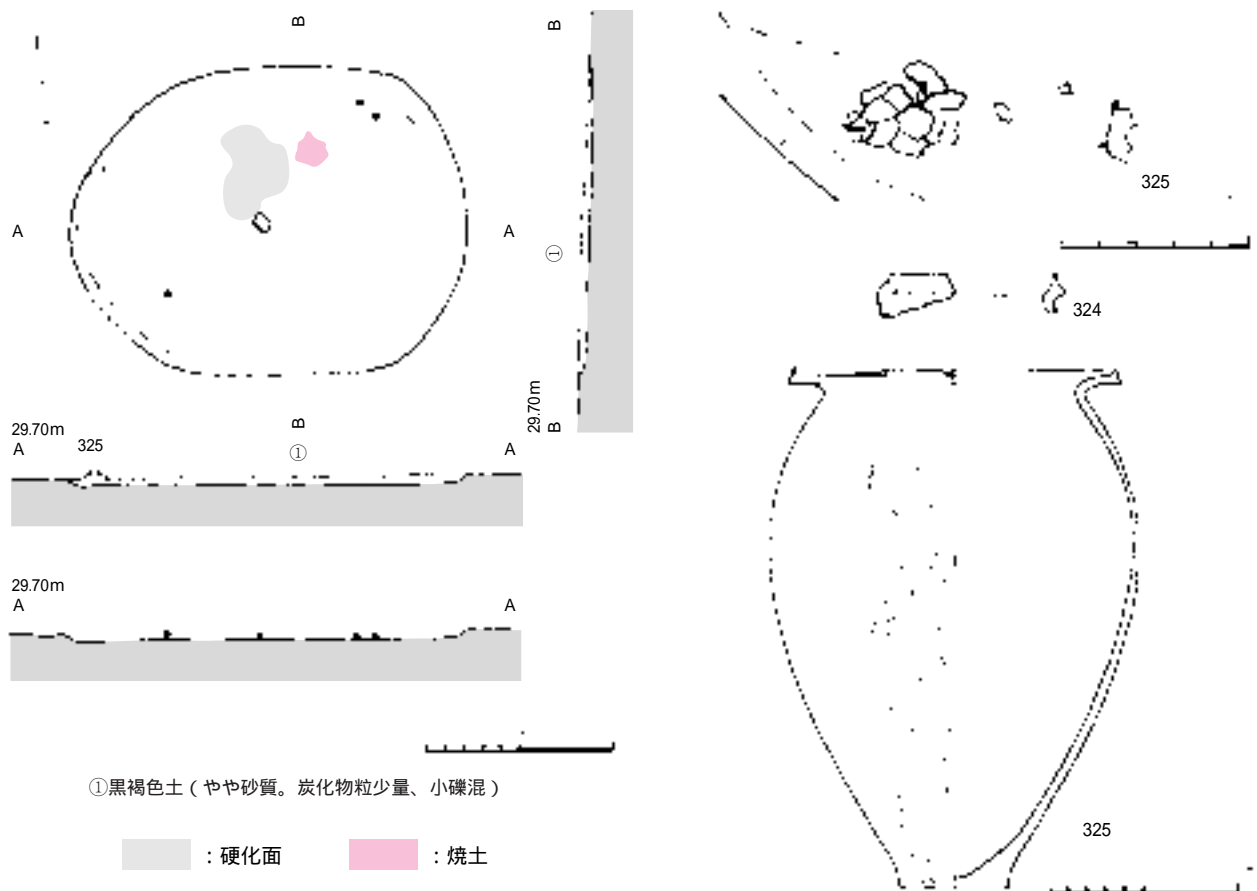


図79 竪穴4

面は上半がハケで調整されており、下半はケズリの後に丁寧にナデ消されている。いずれも清水編年 - 1 ~ 2 様式に収まるものである。

出土遺物からこの竪穴は弥生時代中期後葉のものと考えている。

(三木)

竪穴5 (図80・81、図版33・34・41・42・63・64、表42)

<形態と構造>

E区北端、M8・9グリッド、竪穴4の北側に位置する。遺構の1/3が調査地外に広がるため、正確な規模は不明だが、平面形が墮円形を呈する竪穴である。検出面での規模は長軸5.6m、短軸3.6m以上、床面では長軸4.5m、短軸3.3m以上、検出床面積は12.6㎡で、17.0㎡程度の床面積規模になると推測できる。検出面からの深さは20cm程度で、床面の標高は29.0mでほぼ揃う。

埋土は黒褐色系の3層で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

床面からはP1・P2と周壁溝を検出した。P1は径45×37cm、深さ31.2cm、底面の標高28.66m、P2は径48×43cm、深さ14.9cm、底面の標高28.85mで楕円形を呈し、共に黒褐色土の埋土である。周壁溝は幅12~18cm、深さ3.5~6.3cmで調査地内では南東の一部を除いて全周している。

床面では竪穴住居と同様な硬化面が確認されており、活動の場としての機能が考えられるだろう。先述の竪穴3・4と比べると規模がやや大きめであり、竪穴住居4・5とほぼ同規模であると想定できるため、竪穴3・4とは違った機能を持っていたのかもしれない。

<出土遺物>

遺物は床面直上出土のものではなく、①層上面で出土している。この事から、埋没過程に投棄され

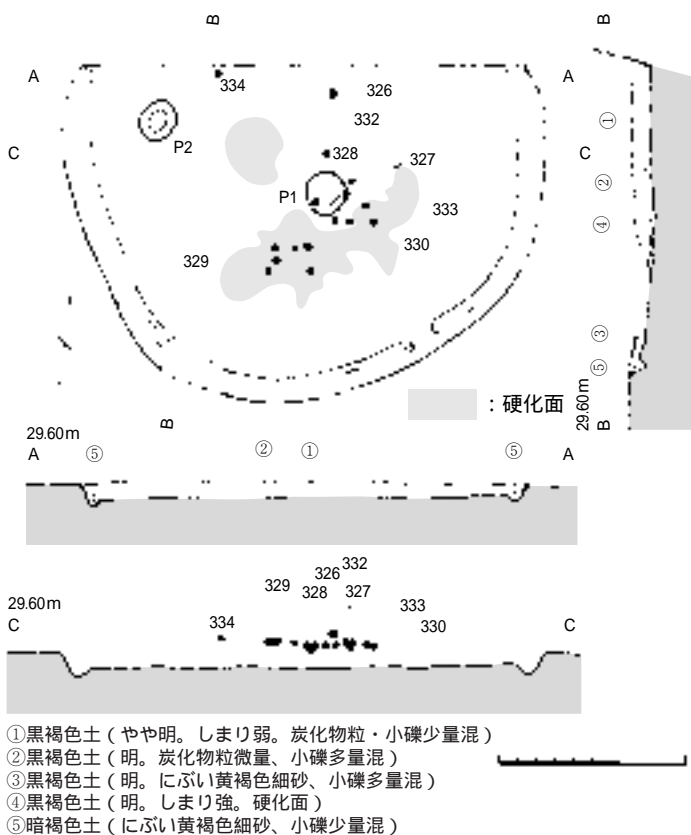


図80 竪穴5(1)

上げられ、体部はハケ後ナデで仕上げられている。肩部付近には指オサエの跡が多く見られる。328は壺の口縁である。口縁は上下に拡張され内傾している。端面には3～4条の凹線文の上から、貝殻腹縁で連続刺突文が施されている。頸部には断面三角形の貼付突帯が巡る。貼付突帯より上部はハケの後ナデられている。内面は風化が著しく不明瞭だが、ナデで仕上げられているのであろうか。329は甕で、上下に拡張され断面T字状の口縁に3条の浅い凹線が施されている。外面体部はハケで、内面は口縁ナデ、体部ハケ後ナデで調整されている。330～333は底部である。331～333は壺かやや体部の張るタイプの甕になるのであろうか。330は外面ハケ、内面ナデで仕上げられている。331は外面ハケ後ミガキ、内面はケズリ後ナデで丁寧に仕上げられている。332・333は共に外面ミガキ内面ケズリである。334は甕の体部下半である。外面の上半はハケ後下半ミガキで調整されており、煤の付着が認められる。内面は上半ハケ後下半ケズリで調整されている。底部の径はやや小さい。これらの遺物は清水編年 - 1～2 様式に収まるものであろう。

遺物の出土状況と時期からこの竪穴は弥生時代中期後葉以前のものと考えている。 (三木)

土坑20 (図82、図版64、表9・42)

E区西側、M10グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面は逆台形を呈する。検出面での規模は148×94cm、底径は128×72cm、検出面からの深さ19.2cmで底面の標高は29.20mを測る。埋土は暗褐色土の1層である。

遺物は検出面で出土しているが、ほとんどが同一個体の甕335のものであった。頸部から上は出土していない。体部は外面が上半細かいハケの後、下半のミガキが体部上半まで上がってきている。内面は上半ハケ、下半ケズリ、底部はナデで調整している。清水編年 - 3～ - 1 様式頃のもの

た可能性が高い。図化可能なものはすべて掲載した。326は竪穴住居5出土の318と同様、台付き壺になると考えられる。体部の下半から脚柱部の一部のみが残存する。体部は強く張り、最大径部分には3条の凹線が施されている。外面の調整は体部・脚部共に風化が著しく不明であるが、内面には細かいハケ目がみられる。脚柱部はケズリ調整され、体部と脚柱部は円盤充填法で接合されている。327は壺で、頸部には浅く、やや幅の広いヘラ描き沈線でシカとみられる線刻画が描かれている(第7章参照)。肩部に4条の凹線が施され、胴部最大径が下に位置し、ややずん胴な器形となる。外面の調整は、頸部は上半が細かいハケ目で、下半はナデ消されている。体部はハケで調整されている。内面は頸部が横方向のハケで仕

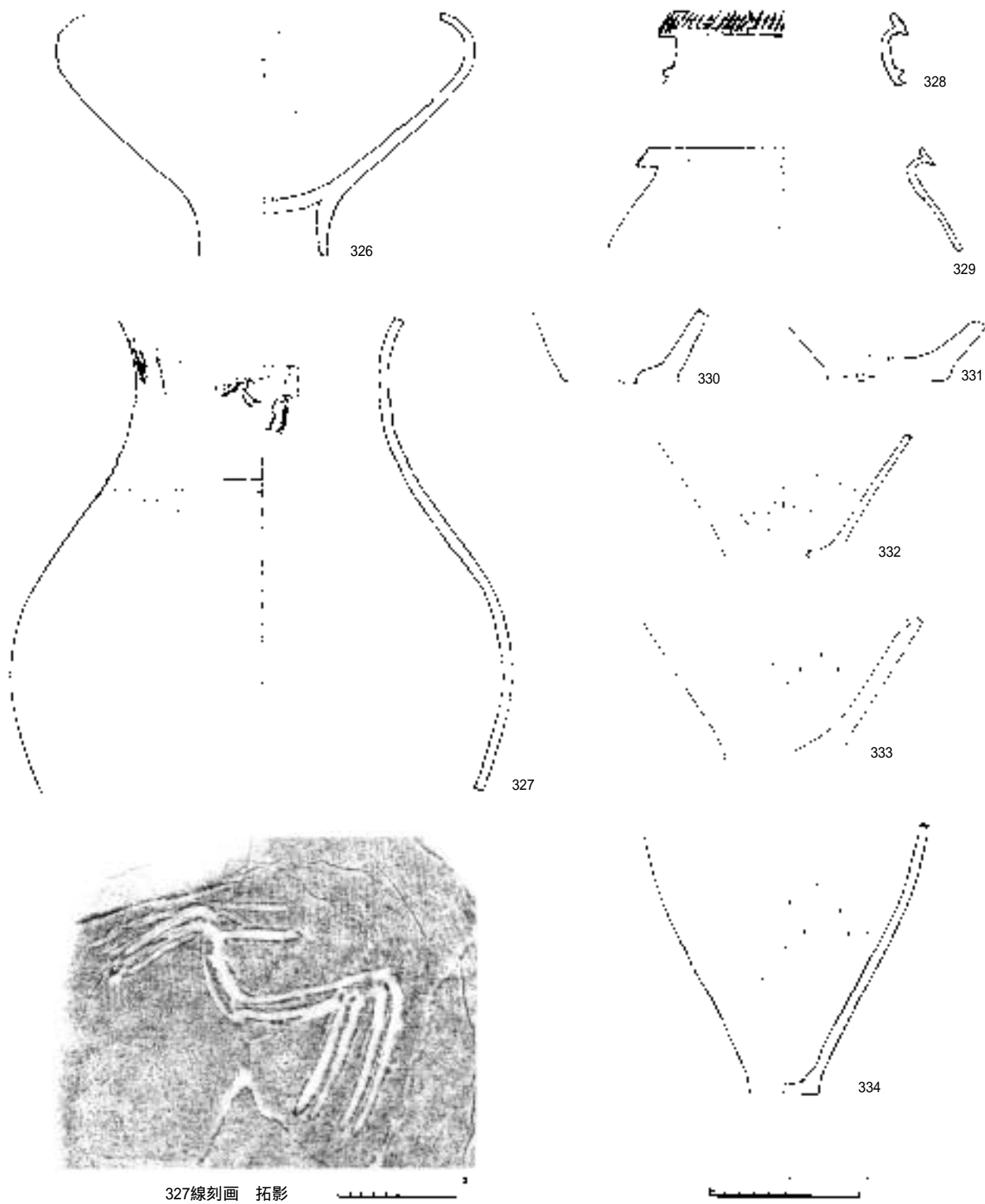


図81 竪穴5(2)

であろう。

出土遺物から弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。

(三木)

土坑21 (図82、図版44・64、表9・42・58)

E区西側、N10グリッドに位置する。平面形は不整形、断面は逆台形を呈する。東側にテラスをもつ。検出面での規模は160×122cm、底径は100×56cm、検出面からの最深は26.3cmで底面の標

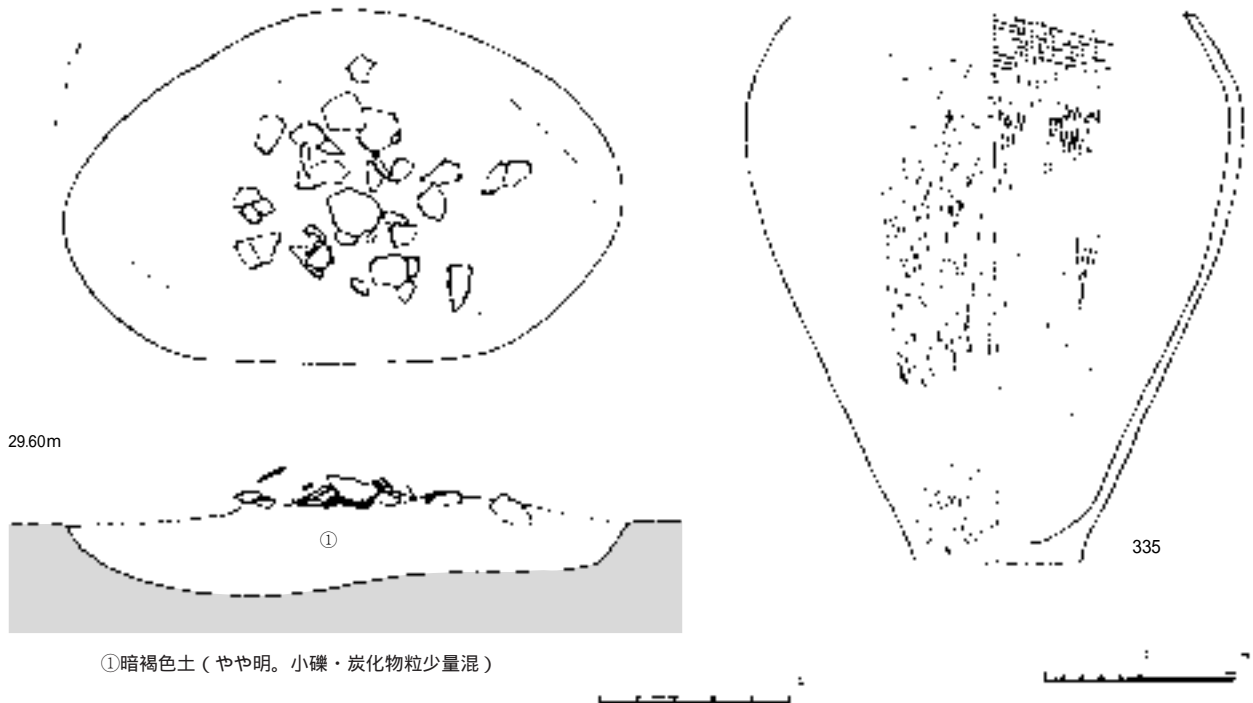


図82 土坑20

高は28.97mを測る。埋土は暗褐色土系の2層にわけられ、炭化物や焼土の含有がみられた。

遺物は埋土中から、土器が少量とガラス小玉6点が出土している。土器はいずれも小片で埋土内に混入したものの可能性がある。336は甕である。口縁には3条の平行沈線が施され、頸部の貼付突帯には刺突文が施された後、ナデられている。清水編年 - 2 様式に相当するものであろう。337は壺である。口縁部には4条以上の平行沈線が施され、頸部にはハケ調整後、凹線が施されている。凹線は螺旋状に頸部を回るものと思われ、この特徴から上東式土器の可能性はある。このことから吉備地方からの搬入品の可能性がある。清水編年 - 2 様式ごろのものであろうか。ガラス小玉は色調が大きく2色に分けられ、B20が濃紺のコバルトブルーの色調を呈している他は、淡青のスカイブルーの色調を呈している。大きさは最大径が0.29~0.42cm、厚さが0.15~0.38cmとばらつきがある。C区に位置する竪穴住居6からもガラス小玉が出土しており、何らかの関連性があった可能性がある。

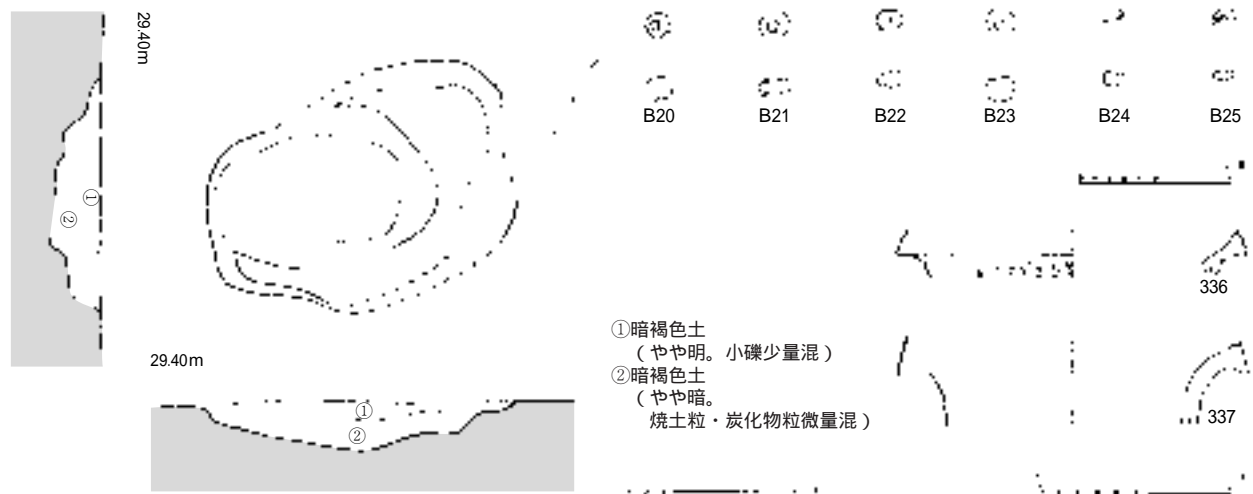


図83 土坑21

出土土器からは弥生時代後期の遺構と考えられるが、土器が厳密にこの遺構の時期を比定し得るとは断定できない。ガラス小玉が出土していることから、竪穴住居6と結びつきが強いと思われる、時期的にも竪穴住居6に近いものの可能性がある。(三木)

表9 土坑20～47計測表

土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)
土坑20	147×95	25	土坑30	114×100	17	土坑40	340×140	24
土坑21	164×130	28	土坑31	(98)×(38)	10	土坑41	197×100	18
土坑22	342×85	60	土坑32	82×65	14	土坑42	163×90	24
土坑23	150×136	9	土坑33	99×84	25	土坑43	160×81	18
土坑24	357×63	13	土坑34	79×59	14	土坑44	212×129	43
土坑25	142×72	100	土坑35	92×85	18	土坑45	104×102	22
土坑26	429×180	71	土坑36	142×62	19	土坑46	176×155	8
土坑27	119×62	27	土坑37	104×69	24	土坑47	117×98	30
土坑28	73×73	67	土坑38	106×84	14			
土坑29	82×(60)	65	土坑39	111×94	30			

3. 縄文時代の調査

縄文時代の遺物が出土した遺構のうち、良好な遺物出土状況をみせ、縄文時代に帰属する蓋然性が高いと判断できたものは土坑2基(土坑22・23)のみである。そのほか、出土遺物や遺構の形態から縄文時代に帰属する可能性があるものは土坑6基(土坑24～29)である。ただし、いずれも出土遺物は良好な出土状況でなく、包含層遺物の混入の可能性もある。このうち、土坑24～26は確実な時期決定は行えないが、遺物の出土量が多いことや、土器の遺存状態が良いことなどから、縄文時代に帰属する可能性がある。一方、土坑27・28は遺物の出土量が少なく縄文時代に帰属する蓋然性はかなり低い。また、土坑29は落し穴状の形態から判断しているのみで、時期の分かる良好な遺物を含んでいなかった。遺構の時期は、土坑22・23がともに早期末から前期初頭にかけてのもの、土坑24～26は出土遺物から単純に判断すると、土坑25・26が早期末～前期初頭のもので、土坑24が後期後葉のものである。(北)

土坑22(図84・85、図版42・69、表9・48・59)

A区、D1グリッドにおいて検出した。平面不整な隅丸長方形を呈した土坑である。横断面は逆台形を呈し、縦断面では掘り方の中央北辺がやや深くなっている。底面から壁面にかけて一部に基盤層中に含まれる握拳大の礫が露出する。埋土は黒褐色土1層からなるが、基盤土と近似し判別は困難なものであった。埋土中から遺構底面にかけてほぼ全域から縄文土器と石器が出土した。深鉢388の破片が東側でまとまって出土している。土坑が少し埋まった段階で投棄された可能性が高い。ほかに土器小片が多く出土しているが、埋土とともに流入したものが多だろう。

土坑内からは土器と石器が出土している。土器は338の同一個体片を中心に破片が222点出土している。内訳は、早期末～前期初頭の縄文地隆帯文土器が5点、早期末～前期初頭の条痕地隆帯文土器が209点(大半が388の同一個体片)、前期初頭の西川津式土器の口縁片が7点(体部は隆帯文土器と区分できない)、後期土器の底部が1点である。338は深鉢の体部である。体部内外面とも貝殻腹縁によって条痕が施される。粘土帯の積み上げ痕跡が明瞭に観察でき、内面の粘土帯接合部には指頭圧痕が残る。胎土には繊維が混入される。早期末～前期初頭のものであろう。339～342は条痕

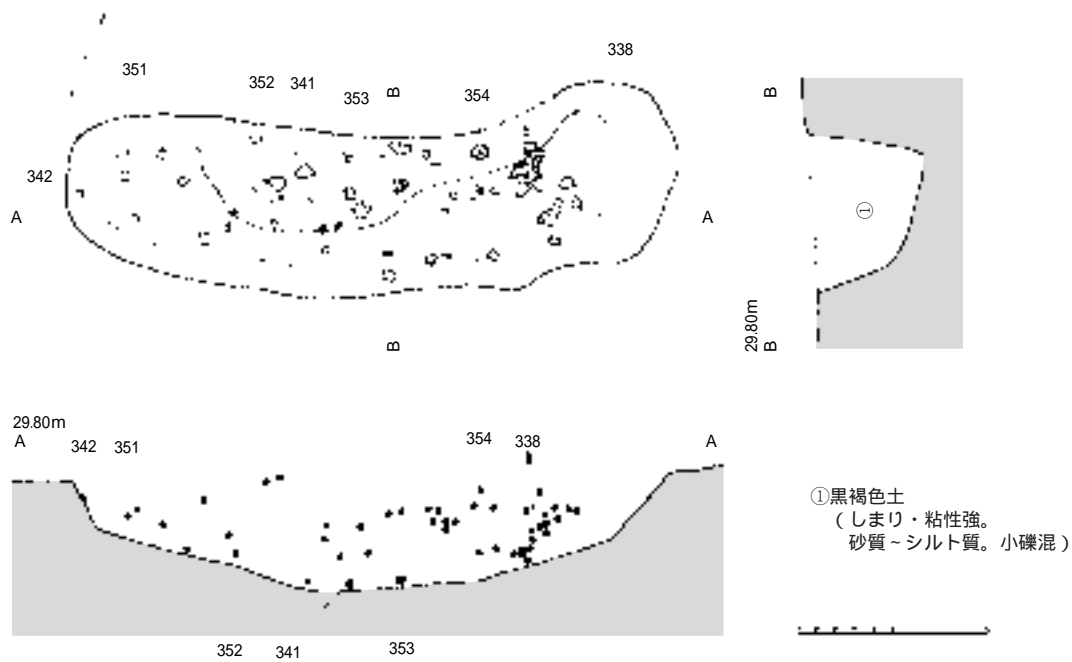


図84 土坑22(1)

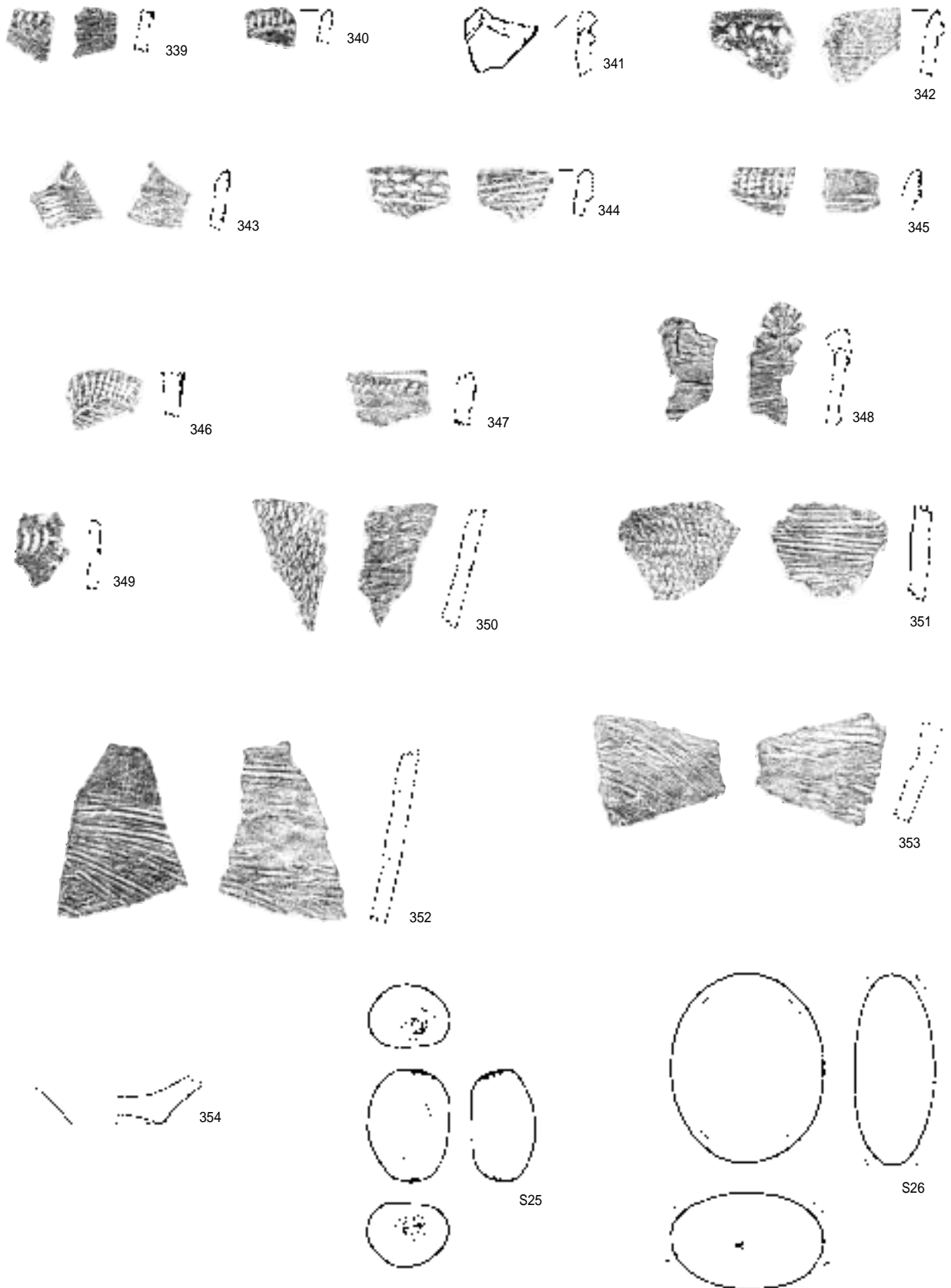


図85 土坑2(2)

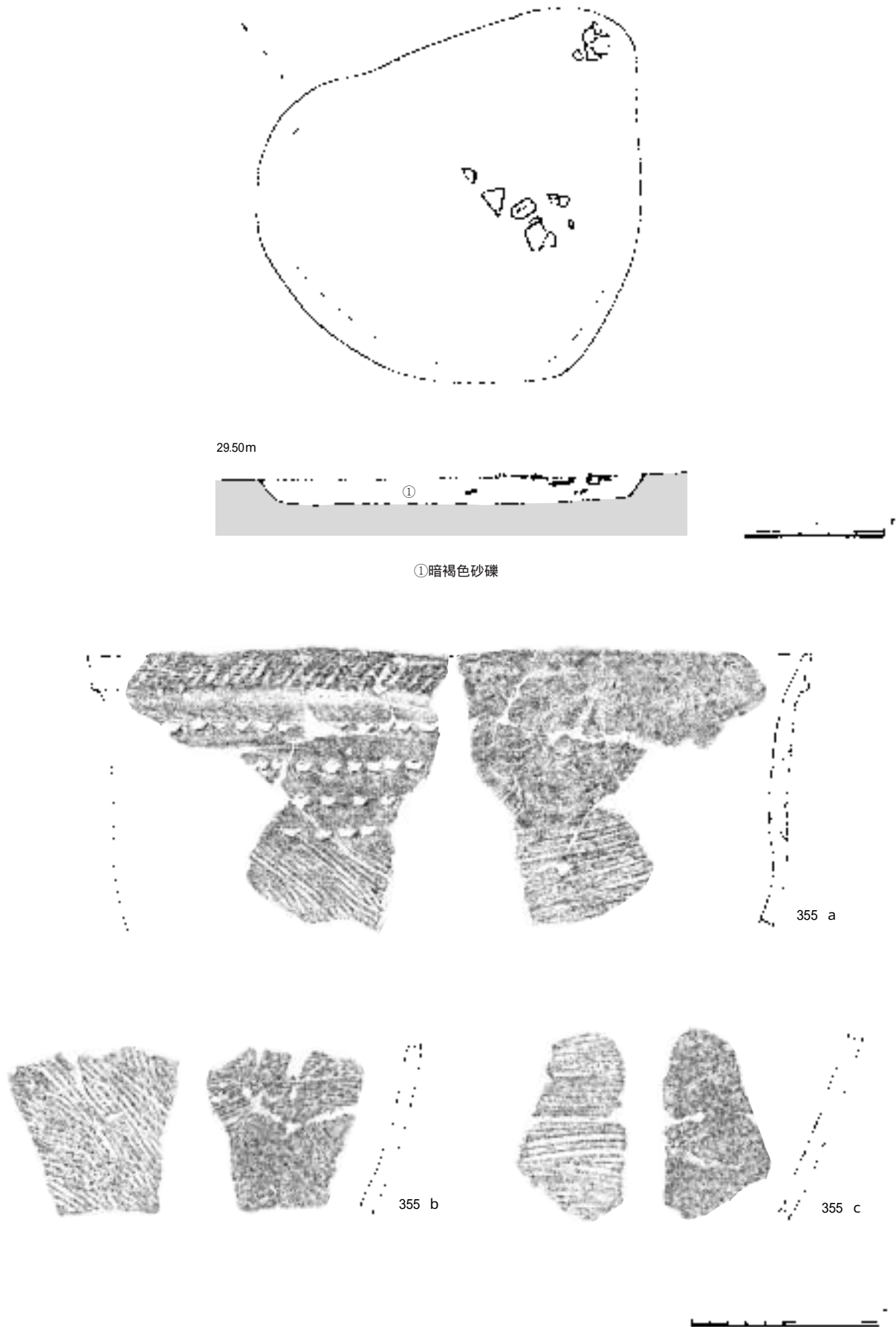


図86 土坑23

地文の隆帯文土器の口縁部片。340は波状口縁の波頂部片で無キザミの隆帯を口縁端に貼り付ける。343～345は西川津式A類の口縁部片である。343は口縁端に隆帯を付し内面を面取りして口縁端を尖らせる。隆帯下に縦方向の爪形刺突文列が施される。344は口縁端に幅広の隆帯をつけ、隆帯上に刺突文を施す。345は尖り気味の口縁端部に、幅広の低い隆帯を施す。隆帯には貝殻腹縁による刺突文を施す。346は体部片。幅広で低い隆帯がつく。貝殻腹縁による刺突を密に施す。347は体部片。繊維を含み、粘土帯は強く貼り付けられ隆帯をなさない。348は細い隆帯が付されることから西川津式B類と考えられる。口縁には突起がつく。349は貝殻腹縁による刺突文列が施される体部片。西川津式A類のもの。350・351は外面に縄文、内面に条痕を施す。早期末～前期初頭の隆帯文土器の体部である。352・353は同一個体で、内外とも貝殻条痕で調整される。早期末～前期初頭の隆帯文土器ないしは西川津式土器の体部である。354は後期土器の底部。これのみ他の土器とは時期が異なる。検出面近くでの出土であるため混入の可能性が高い。石器は88点出土した。内訳は楔形石器1点（黒曜石）剥片63点（黒曜石60、硬質安山岩3）碎片21（黒曜石）石核1（黒曜石）敲石2（粗粒安山岩）である。S25は敲石。S26は敲石と磨石の複合石器。

出土した土器から、この遺構は縄文時代早期末～前期初頭ごろのものと考えられる。（北・日置）

土坑23（図86、図版43・69、表9・48）

E区東部、M7グリッドに位置する。径約1.5mの平面不整形円形を呈す浅い土坑で、フラットな底面をなす。埋土は単層で層に類似する暗褐色砂質土である。土坑内からは同一個体の縄文土器片がまとまって出土した（出土状況を図化していないものもある）。大半が検出面付近で確認したが、土坑底面付近でも出土している。出土した土器片は72点で、すべて355の同一個体の破片と考えられる。遺存状態は非常に良好で、接合できなかつた破片も相当数ある。こうした状況から、この355はこの土坑に廃棄されたものである可能性が高いと考える。

出土遺物は355の深鉢形土器である。355aは口縁から胴部屈曲部にかけての破片、355b・cはaより下位に位置する破片で、bは胴部屈曲部より下半の破片、cはbよりもさらに下位に位置する破片である。胴部が屈曲する器形で、口縁端に二枚貝の貝殻腹縁によって連続刺突が施された肥厚帯をもち、胴部屈曲部上半には平面D字形の刺突文列が4列施される。外面調整は胴部下半を二枚貝条痕、上半をナデで行い、内面は板状工具かと思われる植物質の工具による条痕調整の後、胴部屈曲部を残し、ほかの部位にはナデを加えて仕上げている。こうした特徴から、この土器は前期初頭の西川津式A類にあたると考える。

出土遺物から、この遺構は縄文時代前期初頭のものであると考える。（北）

土坑24（図87、図版43・70、表9・48）

B区、G1グリッドにおいて検出した。この付近は、地面がやや高くなっており、南東の丘陵に向かって地形が徐々に立ち上がる部分である。長細い溝状を呈する土坑である。土坑の埋土は黒褐色土1層からなる。基盤土との判別が困難であったため、掘り込み面よりもかなり下で検出しているものと思われる。縄文土器が3点出土した（356～358）。いずれも浮いた状態であるが、358は遺存状態のよい大型の破片であったため、この土坑にともなう可能性がある。ほかには包含層の混入遺物であろう。356・357は早期末～前期初頭の隆帯文土器。358は凹線文土器。頸部に向けてすばま

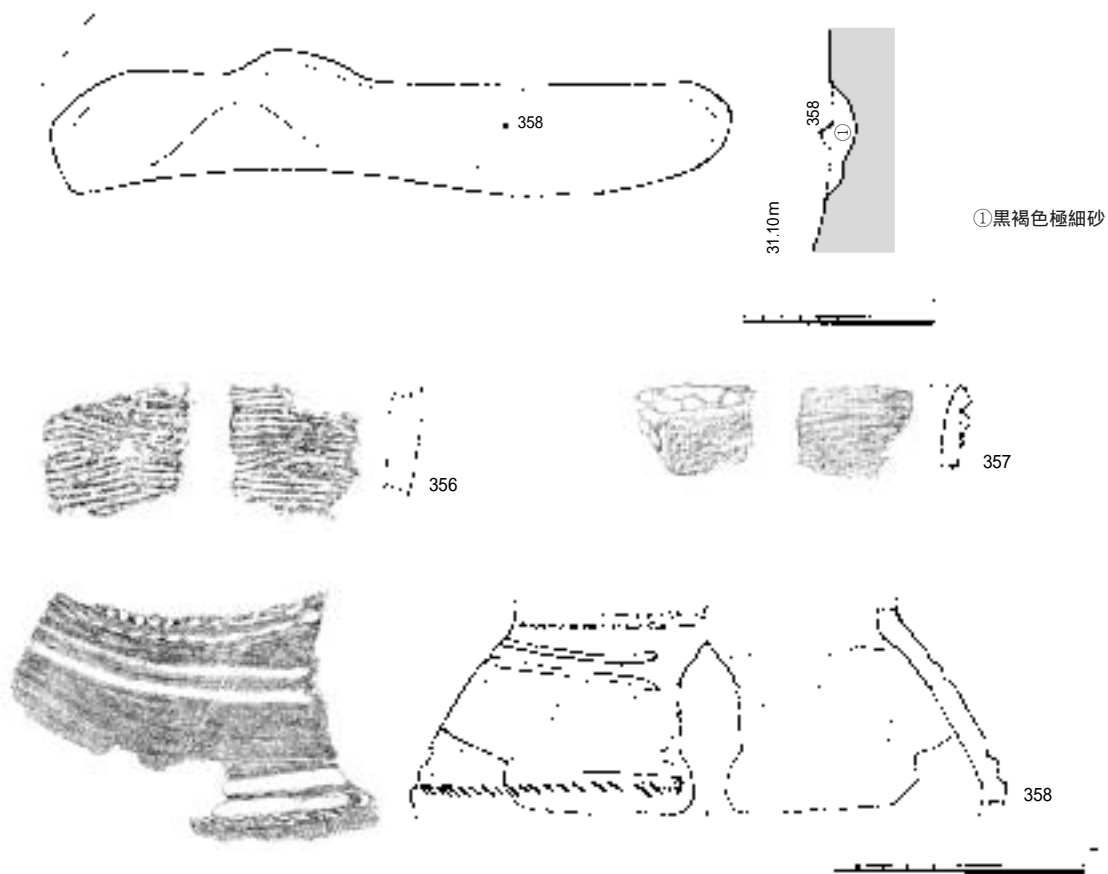


図87 土坑24

る器形をなす。注口土器ないしは壺形土器の可能性もある。頸部には刺突文列が2列施され、その下には凹線が2条横走する。胴部屈曲部には斜めのキザミが施され、その上に2状の凹線が施される。うち、1本の凹線は片端で途切れ、巻貝殻口部によるものかと思われる凹点をつけられる。内外面とも丁寧に磨かれている。元住吉山 式期のものであろう。

出土遺物からは縄文時代後期後葉の可能性はあるが、遺物は確実に時期を判定できる出土状況にない。(北・日置)

土坑25 (図88、図版43・70、表9・48・49・59)

B区、G3グリッドにおいて検出した。掘り方のほぼ中央がトレンチと重複するが、平面隅丸長方形、断面逆台形の土坑である。埋土は第2遺構面上に堆積していた層とほぼ同質で、層堆積時に自然堆積したようである。遺構内からは縄文土器片41点、石器5点が出土している。これらは埋土中に満遍なく含まれており、埋没中に流入した可能性が高い。出土土器は早期末～前期初頭のもののみに限られるため、埋没時期が限定できる可能性がある。359～362・364は隆帯文土器の口縁片。362は波状口縁波頂部で、垂下する隆帯が付される。その他は体部片。いずれも早期末～前期初頭の隆帯文土器の体部の可能性が高い。367・369が縄文地、他は条痕地のもの。石器は石鏃1点、剥片3点、碎片1点が出土している。すべて黒曜石製である。S27は凹基式の石鏃。

出土遺物が量的にも時期的にもまとまっていることから、これらが遺構の時期を示すものである可能性がある。確実な時期は決定できないが、縄文時代早期末～前期初頭ごろのもの可能性がある。(北・日置)

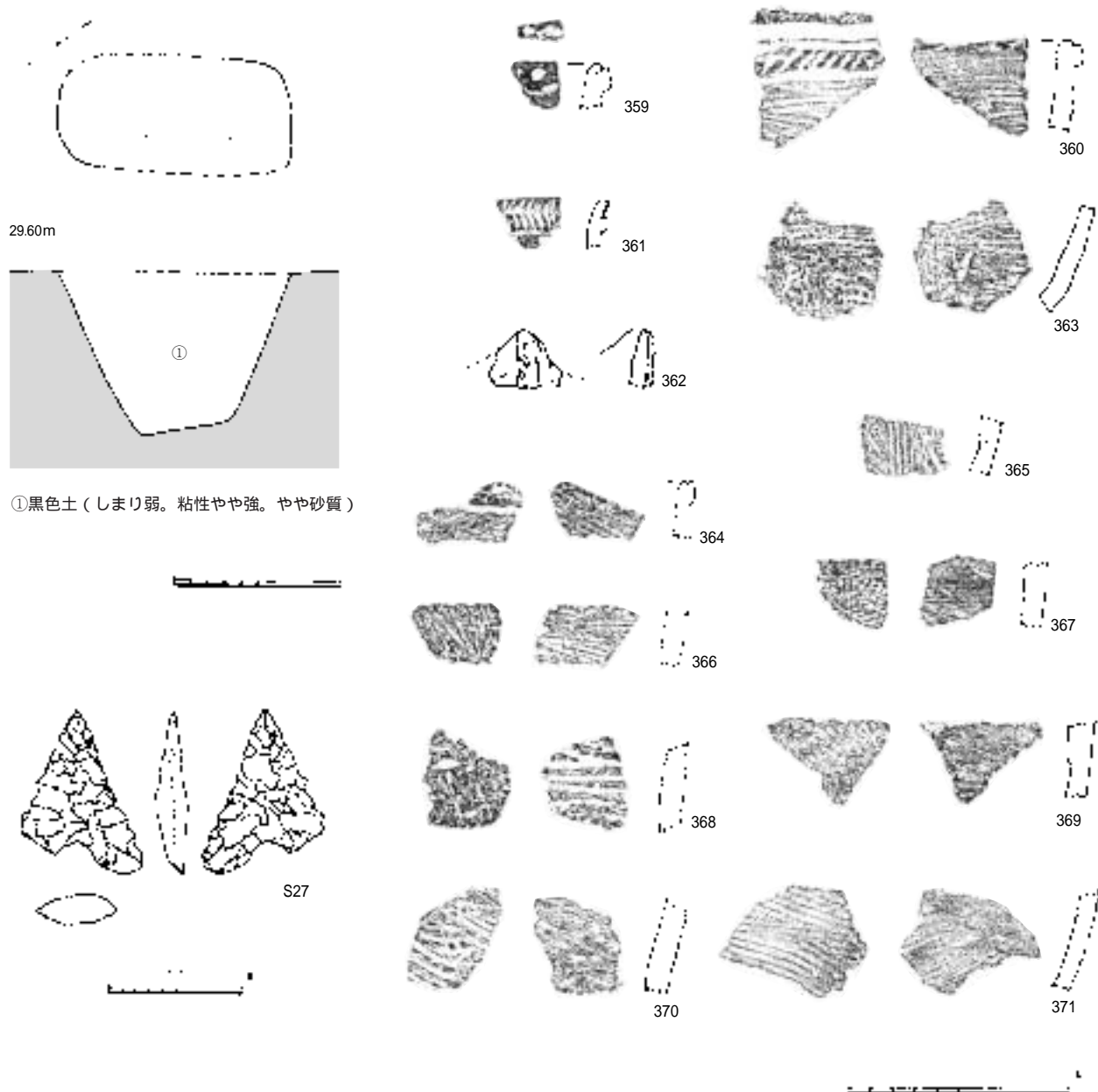


図88 土坑25

土坑26（図89、図版43・70、表9・49・59）

B区、F3からG3グリッドにまたがって検出した。不整な長楕円形の大型土坑。縦断面、横断面とも逆台形を呈する。底面の北東側には水が溜まっていた痕跡が残る。埋土は第2遺構面上に堆積していた層土とほぼ同質で、層堆積時に自然堆積したようである。遺構内からは土器片51点、土製品1点、石器24点が出土した。これらは埋土中に満遍なく含まれており、埋没中に流入した可能性が高い。出土土器は早期末～前期初頭ののものに限定されるため、埋没時期が限定できる可能性がある。出土土器はすべて隆帯文土器である。376は口縁片で、外面に縄文が施される。隆帯は見られないが、縄文地の隆帯文土器のバリエーションのひとつであろう。377は条痕地の隆帯文土器口縁片。372～375は内外とも条痕調整で、隆帯文土器の体部片と思われる。378は円盤状の土製品。胎土に繊維を混入する点で早期末～前期初頭の土器と共通性がある。石器の内訳は石鏃1点（硬質安山岩）、スクレイパー2点（黒曜石）、楔形石器2点（黒曜石）、使用痕のある剥片1点（黒

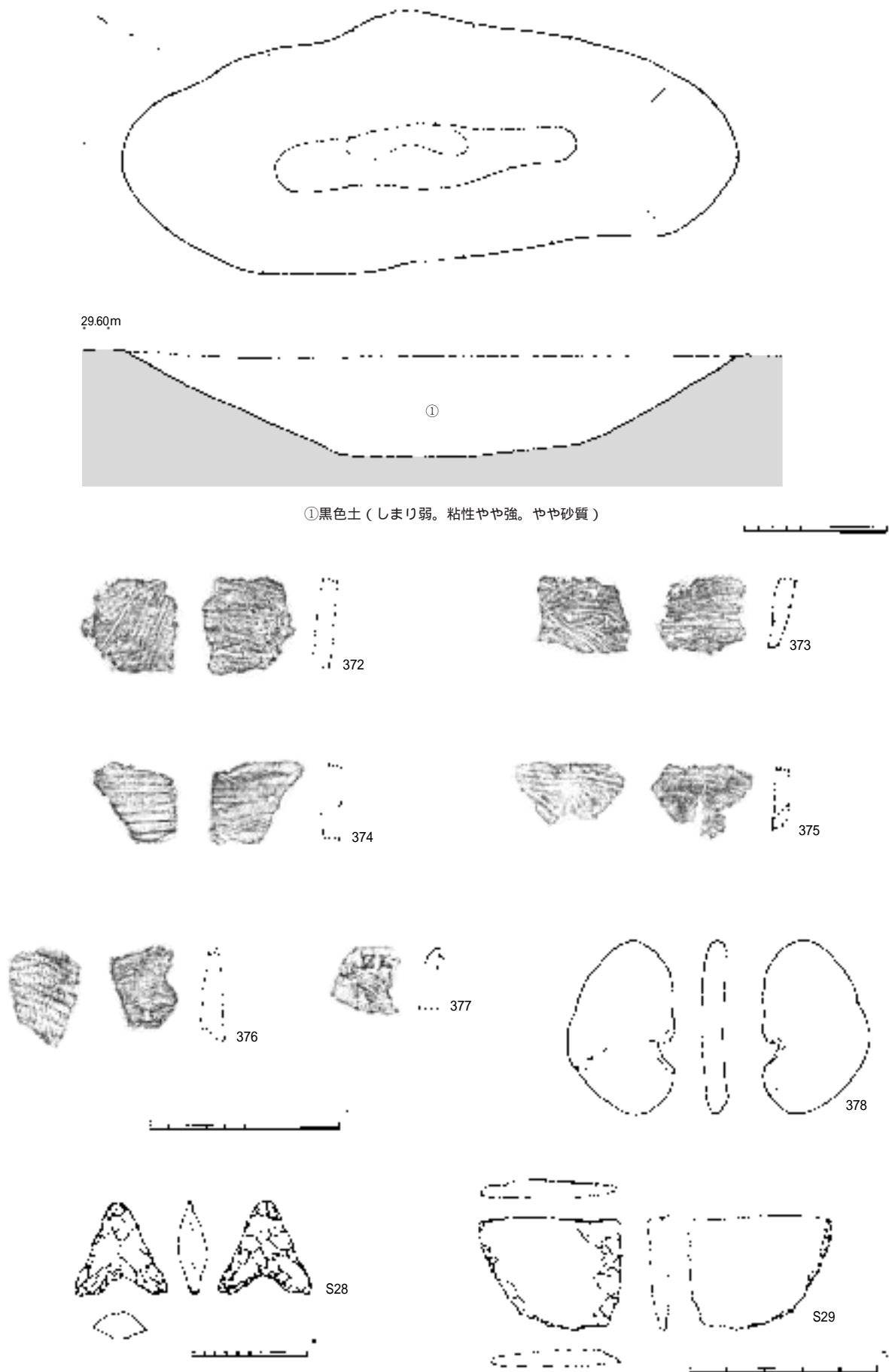


図89 土坑26

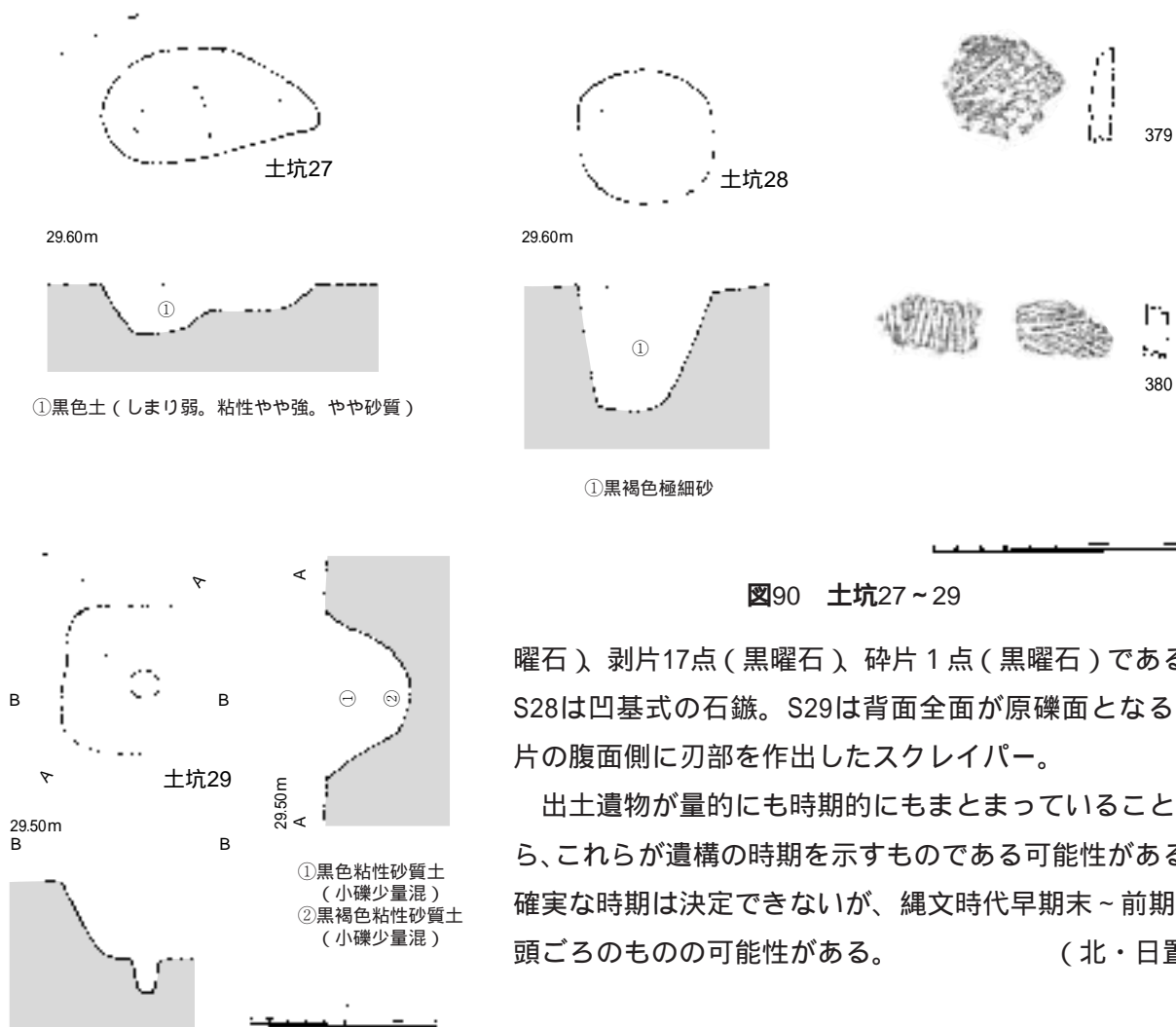


図90 土坑27～29

曜石) 剥片17点(黒曜石) 碎片1点(黒曜石)である。S28は凹基式の石鏃。S29は背面全面が原礫面となる剥片の腹面側に刃部を作出したスクレイパー。

出土遺物が量的にも時期的にもまとまっていることから、これらが遺構の時期を示すものである可能性がある。確実な時期は決定できないが、縄文時代早期末～前期初頭ごろのもの可能性がある。(北・日置)

土坑27 (図90、図版43・70、表9・49)

B区、G3グリッドにおいて検出した。平面やや不整な長楕円形を呈する土坑である。土坑のほぼ半分はテラスになっており、土坑の一端が下端となる。埋土は層堆積時に自然堆積したようである。縄文早期末～前期初頭の条痕文土器の細片が1点のみ出土した。埋没時の混入と思われる。(日置)

土坑28 (図90、図版43・70、表9・49)

A区、E1グリッドにおいて検出した。掘り方の一部はトレンチと重複する。平面やや不整な円形、断面は逆台形を呈する。底面は平坦であった。基盤層は握り拳大の礫を多量に含む部分に位置するが、埋土は第2遺構面上に堆積する層に近似する黒褐色の極細砂1層からなる。埋土のほぼ中位から縄文早期末～前期初頭の条痕文土器の細片が1点のみ出土した。埋没時の混入と思われる。(日置)

土坑29 (図90、図版43、表9)

A区、D4グリッドにおいて検出した。掘り方の大部分はトレンチと重複し、記録できなかった。トレンチ壁面の土層から、埋土は黒褐色土の粘度から2層に分けた。自然堆積である。トレンチの

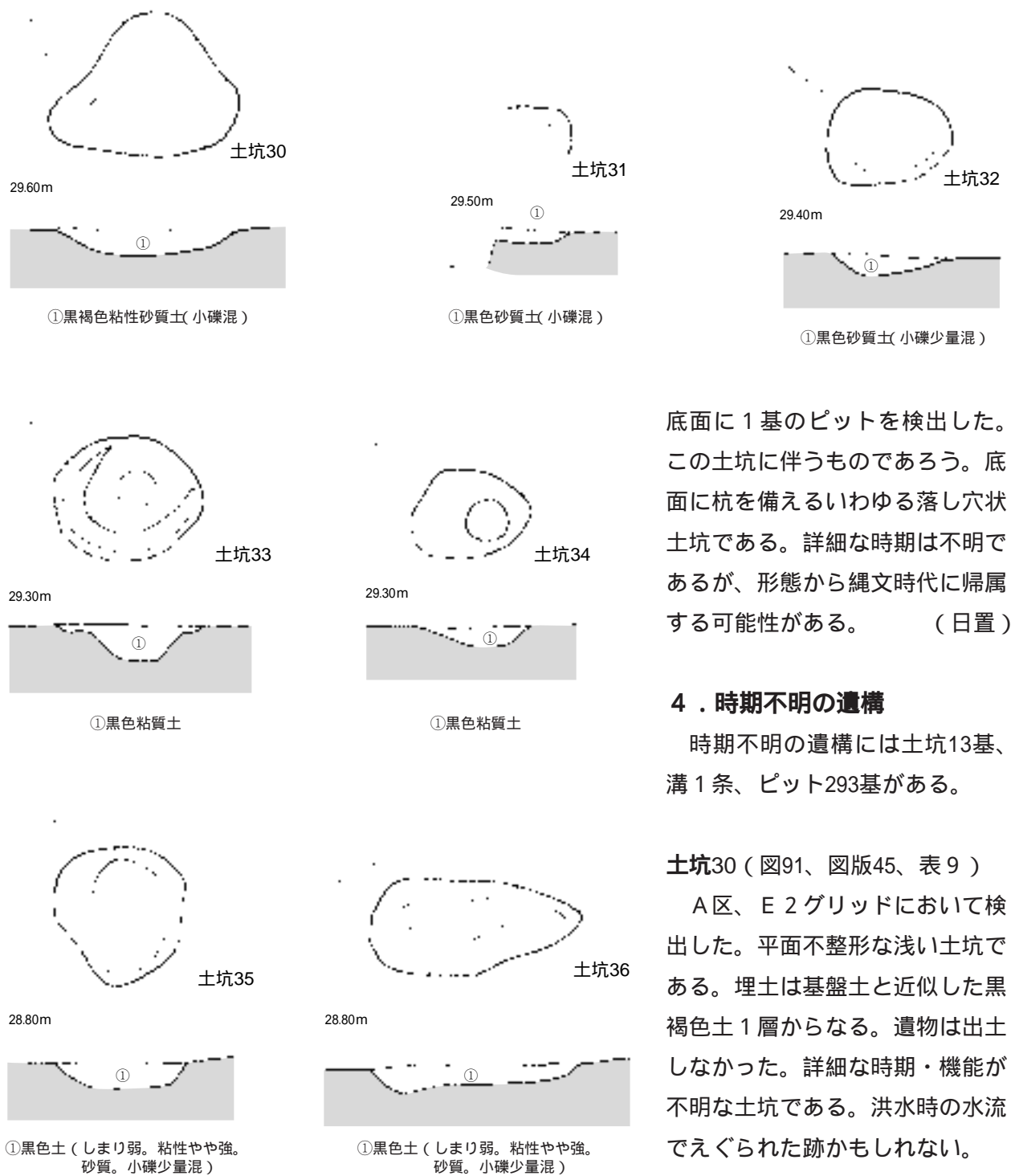


図91 土坑30～36

底面に1基のピットを検出した。この土坑に伴うものであろう。底面に杭を備えるいわゆる落し穴状土坑である。詳細な時期は不明であるが、形態から縄文時代に帰属する可能性がある。(日置)

4. 時期不明の遺構

時期不明の遺構には土坑13基、溝1条、ピット293基がある。

土坑30 (図91、図版45、表9)

A区、E2グリッドにおいて検出した。平面不整形な浅い土坑である。埋土は基盤土と近似した黒褐色土1層からなる。遺物は出土しなかった。詳細な時期・機能が不明な土坑である。洪水時の水流でえぐられた跡かもしれない。

(日置)

土坑31 (図91、図版45、表9)

A区、E2グリッドにおいて検出した。土坑の大部分がトレンチ

と重複し、全体形を記録できなかった。検出できた範囲では、ごく浅い土坑で、埋土は風化した安山岩細礫を含む黒色砂質土1層からなる。遺物は出土せず、詳細な時期や機能とも不明の土坑である。洪水時の水流でえぐられた跡かもしれない。(日置)

土坑32 (図91、図版45、表9)

A区、D4グリッドにおいて検出した。一部がトレンチと重複する。平面不整形な土坑である。埋土は黒色砂質土1層からなる。詳細な遺物は出土しなかった。時期・機能など不明な土坑である。
(日置)

土坑33 (図91、図版45、表9)

A区、D4グリッドにおいて検出した。土坑34と隣り合う。掘り方の西端がトレンチと重複する。平面円形を呈する、段掘りの土坑である。埋土は黒色砂質土1層からなり、遺物は出土しなかった。詳細な時期や機能とも不明の土坑である。
(日置)

土坑34 (図91、図版45、表9)

A区、D4グリッドにおいて検出した。土坑33と隣り合う。掘り方の西端がトレンチと重複する。平面不整な円形を呈する土坑である。土坑33と同様、埋土は黒色砂質土1層からなる。遺物は出土しなかった。詳細な時期や機能とも不明な土坑である。
(日置)

土坑35 (図91、図版45、表9)

A区、E6グリッドにおいて検出した。この付近はより地形が低くなり、黒色土の基盤層には細礫を多く含み、南東から北西へと砂礫層が帯状に露出する部分である。平面不整な土坑である。底面は平坦である。埋土は黒色土1層のみである。自然堆積であろう。遺物は出土せず、詳細な時期や機能は不明の土坑である。
(日置)

土坑36 (図91、図版45、表9)

A区、E6グリッドにおいて検出した。平面不整な土坑である。埋土は土坑35と同様、黒色土1層のみである。自然堆積であろう。遺物は出土しなかった。詳細な時期や機能は不明の土坑である。
(日置)

土坑37 (図92、図版45、表9)

B区、G3グリッドにおいて検出した。平面不整な楕円形を呈する浅い土坑である。埋土は黒色砂質土1層である。底面は基盤層に含まれる多量の細礫が露出する。遺物は出土しなかった。詳細な時期、機能などは不明な土坑であるが、洪水時に水流でえぐられた跡の可能性もある。
(日置)

土坑38 (図92、図版46、表9)

B区、G3グリッドにおいて検出した。平面隅丸三角形を呈する浅い土坑である。埋土は黒色砂質土1層であるが、第2遺構面上に堆積していた層と同様である。層堆積時に自然に埋没したものとおもわれる。遺物は出土しなかった。詳細な時期・機能など不明の土坑である。
(日置)

土坑39 (図92、図版46、表9)

B区、H6グリッドにおいて検出した。平面不整形な土坑である。埋土は黒色土層1層のみである。底面は層中に含まれる砂礫が露出する。遺物は出土しなかった。詳細な時期・機能など不明な土坑である。
(日置)

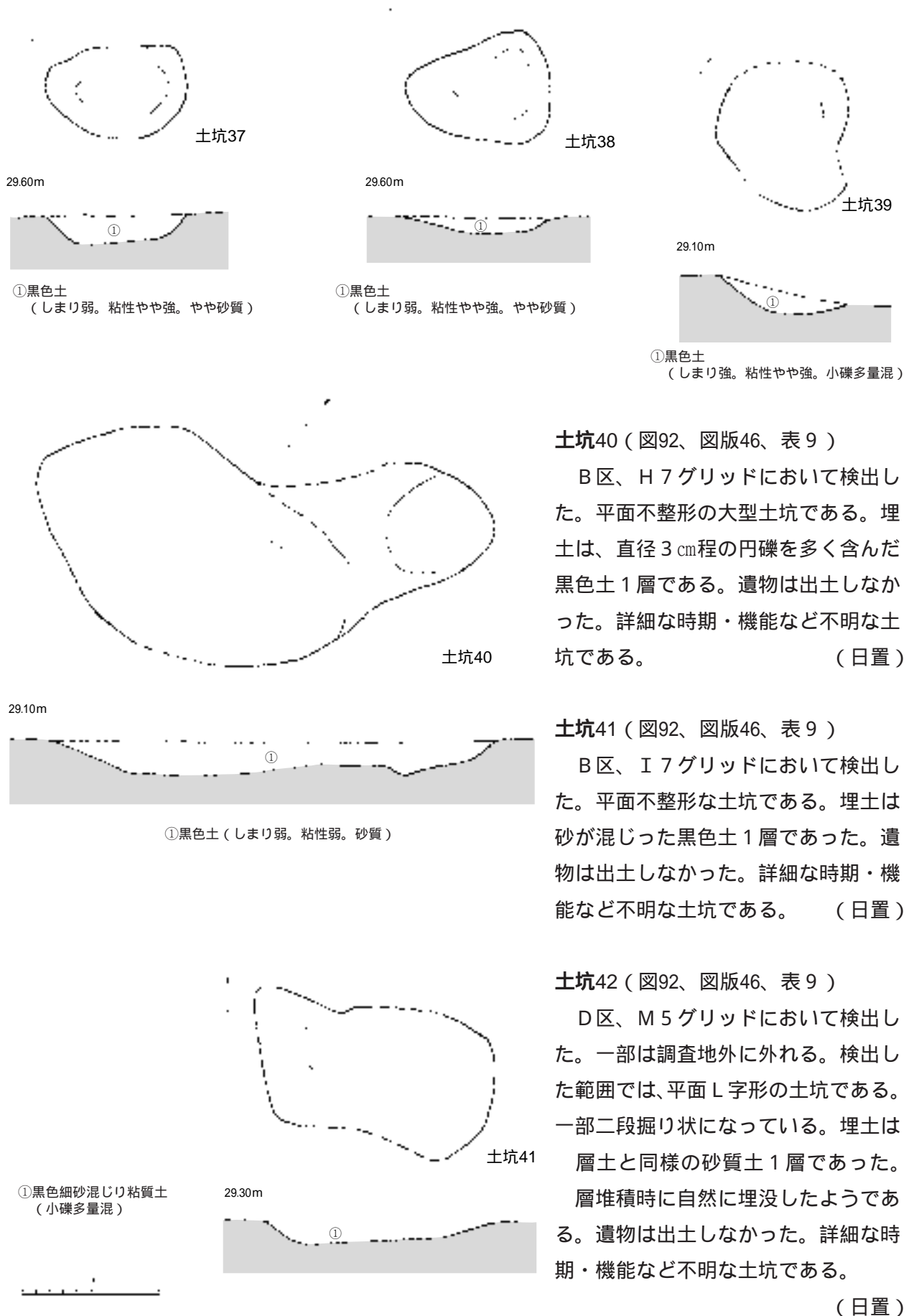


図92 土坑37～41

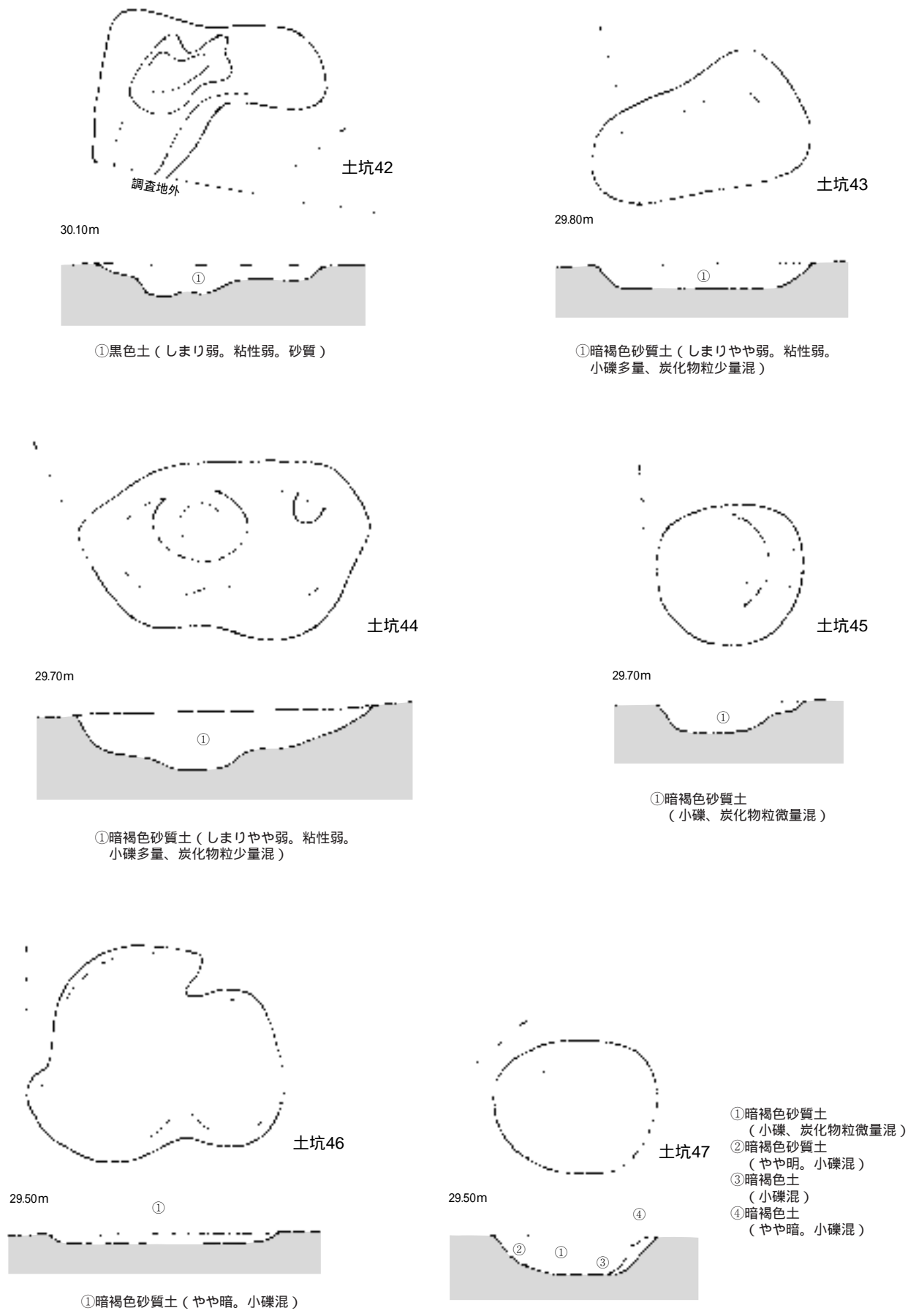


图93 土坑42~47

土坑43 (図93、図版46、表9)

E区東側、N7・8グリッド、竪穴住居5の西側に位置する。平面形が楕円形、断面は逆台形を呈する。遺物は出土しておらず、明確な時期は不明であるが、第2遺構面での検出である事から少なくとも弥生時代後期以前の遺構と考えられる。(三木)

土坑44 (図93、図版46、表9)

E区東側、N8グリッド、土坑43の西側に位置する。平面形が楕円形、断面は逆台形を呈する。底面には浅い掘り込みが2ヶ所確認できた。遺物は出土しておらず、土坑43と同様に弥生時代後期以前の遺構と考えられる。(三木)

土坑45 (図93、図版46、表9)

E区南東、O8グリッド、土坑44の南側に位置する。平面形が円形、断面は逆台形を呈する。東側には浅いテラスをもつ。遺物は土器細片が出土しているが、時期を判断できるものはなく、土坑43・44と同様に弥生時代後期以前の遺構と考えられる。(三木)

土坑46 (図93、図版46、表9)

E区北東、M8グリッド、竪穴3の北側に位置する。平面形が不整形、断面は逆台形を呈する浅い土坑である。遺物は土器細片が出土しているが、時期を判断できるものはなく、他の土坑と同様に弥生時代後期以前の遺構と考えられる。(三木)

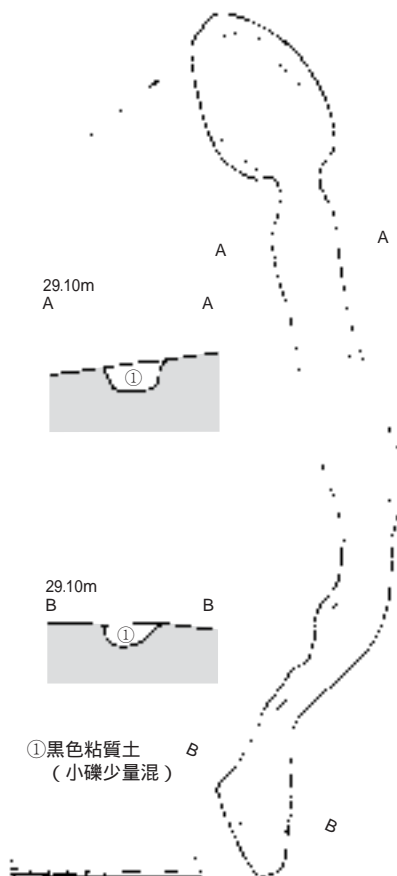


図94 溝2

土坑47 (図93、図版46、表9)

E区中央、N9グリッドに位置する。平面形が円形、断面は逆台形を呈し、暗褐色土系の4層から成る。堆積状況から掘り返された可能性がある。遺物は土器細片が出土しているが、時期を判断できるものはなく、他の土坑と同様に弥生時代後期以前の遺構と考えられる。(三木)

溝2 (図94、図版46)

B区、G6からG7グリッドにおいて検出した。平面不整形で、やや蛇行した溝状遺構である。南端部分に比べ、北端部分は広がっている。底面は一部で層中に含まれる砂礫が露出する箇所があった。埋土は黒色粘質土1層のみであるが、部分的に小礫を多く含み硬く締まった部分があった。流水の痕跡はなかった。遺物は出土しなかった。詳細な時期は不明である。(日置)

ピット (図95・96-1・96-2、図版70、表31~33・49)

第2遺構面では計293基のピットを検出した。分布は、A区は東半、B区は東半と西端、D区にまとまりが見られるが、全体的

に深さは浅い。第2遺構面を覆う包含層が、A区では東半には縄文時代の遺物が、西半には弥生時代の遺物が多く見られる事から、東半のピット群は縄文時代のピットである可能性が高く、西半のピットは弥生時代のピットである可能性が高い。B区東半でピットのまとまりが見られる箇所では、縄文時代の可能性のある土坑がいくつか検出されており、包含層にも同時期の遺物が特に多く含まれる事から、ピット群も同時期に属する可能性がある。B区西端では包含される遺物の量は少ないものの、比率は弥生時代の遺物が多く、これらのピット群は弥生時代に属する可能性がある。D区では遺物の出土数が極めて少ないため、時期を判断する素材にはかけている。

これらのピットの中で遺物が出土しているものも多くあるが、ほとんどは細片で図化できる遺物は少なかった。P232～P233はA区東半ピット群に含まれるものである。P232はD1グリッド、P233はD2グリッドの北側、P234はC3グリッドの南東部にそれぞれ位置する。381はP232出土の粗製深鉢の底部。胎土や色調、調整から縄文時代後期～晩期のものである可能性が高い。丸底のため、他の時期のもの可能性もある。382はP233出土の突帯文土器の深鉢で、口縁部に無刻目突帯を貼り付ける。383はP234出土の小型の深鉢である。外面は貝殻条痕の後ナデ調整されている。縄文時代早期末～前期初頭の所産であると考えられる。(三木)

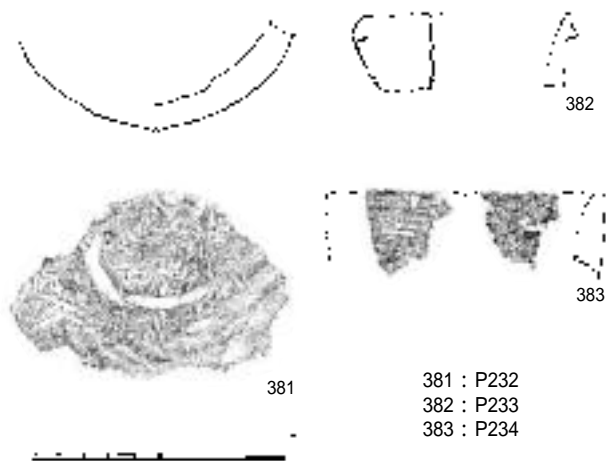


図95 第2遺構面ピット出土遺物

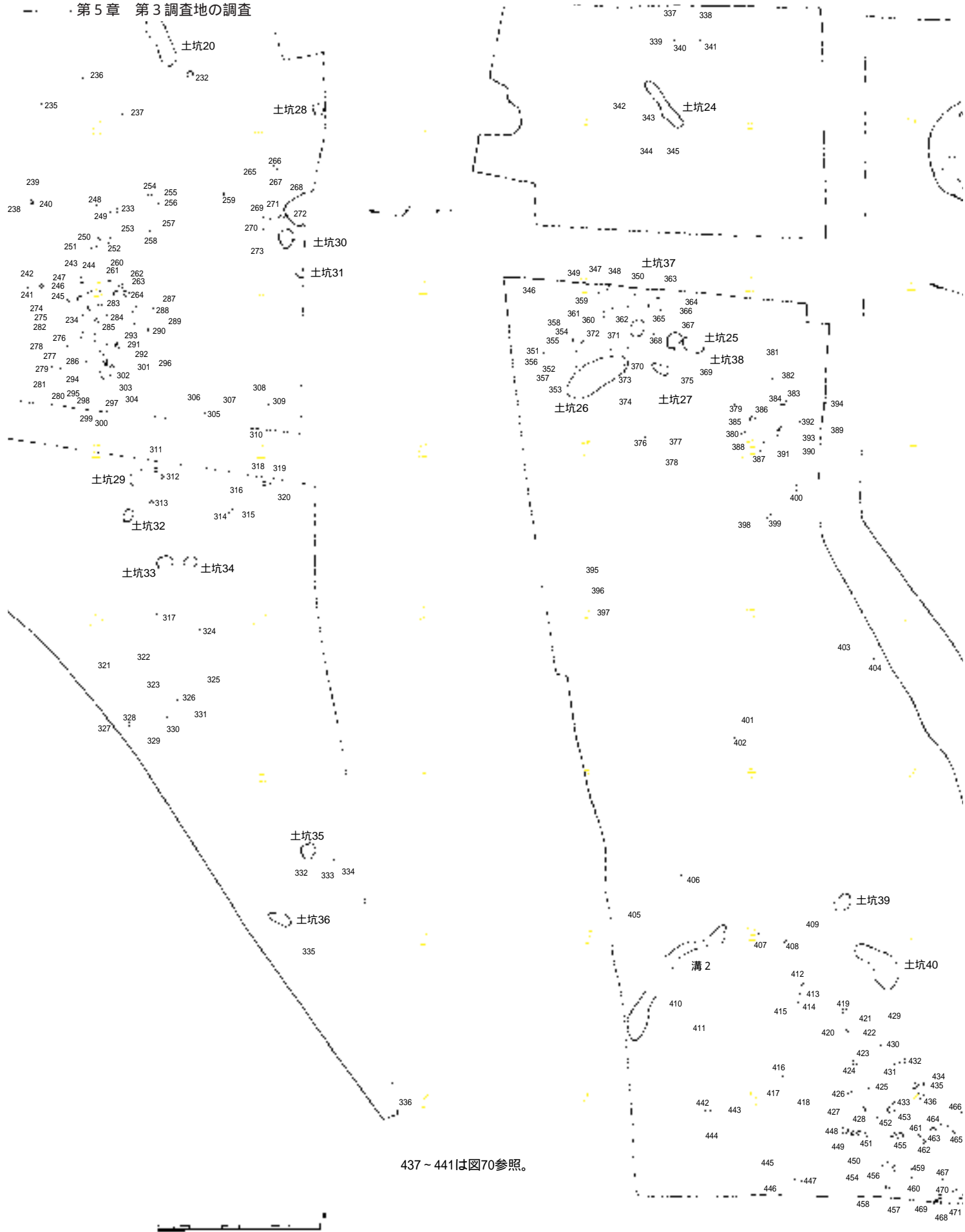
第5節 遺物包含層の調査

1. 概要

第1遺構面と第2遺構面の間に堆積する層には縄文時代早期から弥生時代後期にかけての遺物が大量に含まれていた。時期幅の広い遺物を含んでいるものの、遺物の時期による出土レベル差は見られず、層の上部から下部まで満遍なくすべての時期の遺物が見られた。このことから、層は二次堆積によって形成された遺物包含層で、包含される最新遺物から考えて弥生後期ごろに堆積したと推定できる。また、前述したように、第2遺構面の遺構は層堆積時に崩壊がおこっているため、それにともなって遺構内から流出した遺物も多数含まれていると思われる。

遺物は調査地全面から出土したが、出土量には粗密が見られる。B区の西半部やD区は全般に遺物出土量が少ない。ほかの地区ではいずれも多量の遺物の出土を見たが、中心となる出土遺物の時期に偏りがある。E区では弥生土器の出土量が極めて多い反面、縄文土器の出土量は少なかった。A・B・C区の東側では縄文土器や石器の出土量が非常に多く主体をなすが、弥生土器が出土していないわけではない。逆に、A・B・C区の西側では、弥生土器が主体になり、縄文土器や石器の出土量は非常に少ない。層は二次堆積層であるため遺物は原位置をまったくとどめていないが、こうした遺物分布の様相はある程度本来の遺物分布や遺構分布を反映していると思われる。包含さ

第5章 第3調査地の調査



437 ~ 441は図70参照。

図96.1 第3調査地第2遺構面ピット配置図(1)

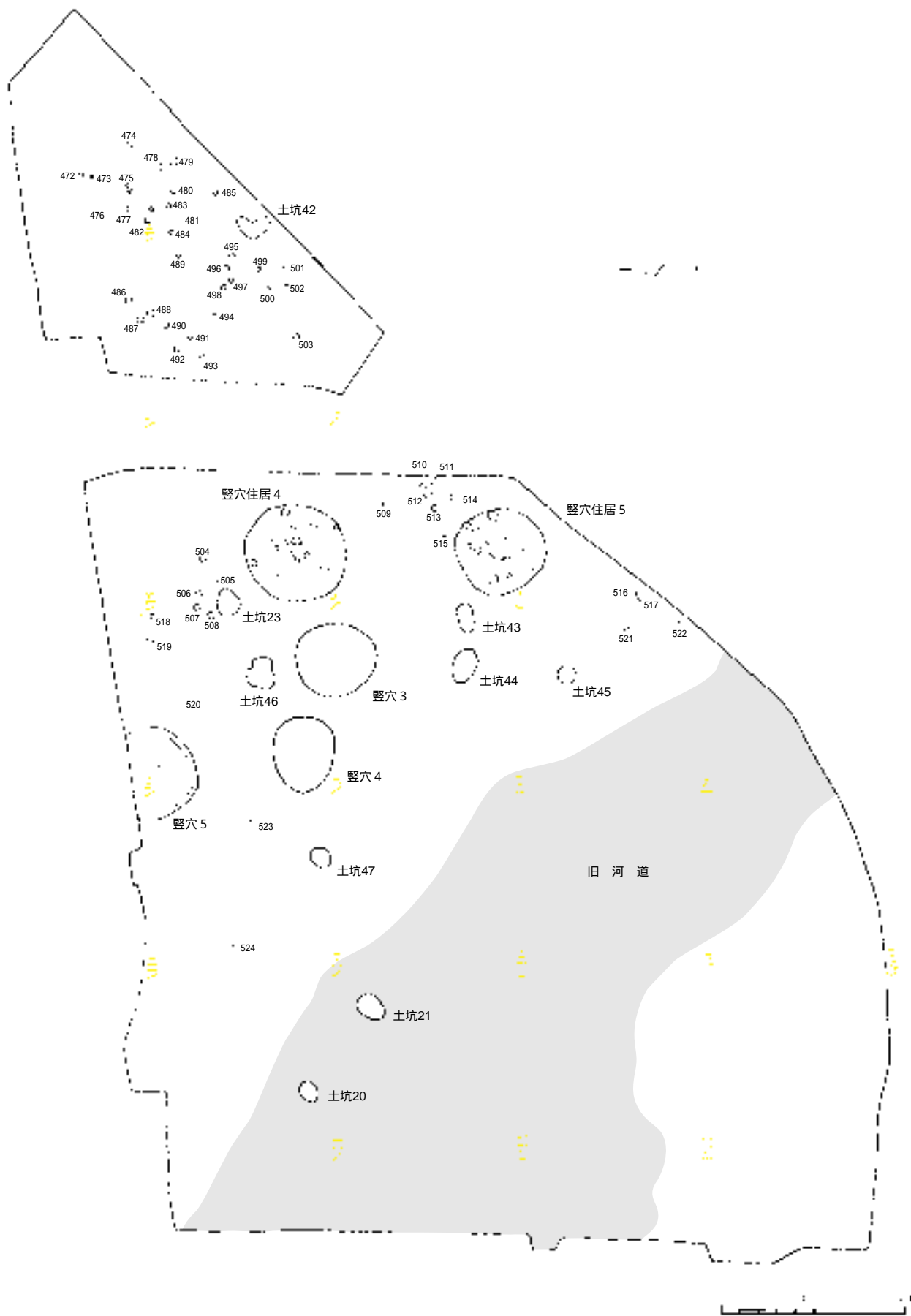


図96-2 第3調査地第2遺構面ピット配置図(2)

れていた遺物は、ほとんど摩滅しておらず、遺存状態が比較的よいことから、遺物の移動が比較的少なかったことが推定できる。 (北)

2. 弥生土器 (図97~104、図版65~68・カラー図版4、表42~46)

出土した弥生土器は前期から後期にわたる。出土した土器の器面は全体的に摩滅しておらず、遺存状態が良い。いずれの時期のものも甕が多数を占め、壺・鉢・高杯などは少数である。

前期 (図97、図版65、表42・43)

弥生時代前期の土器には甕・壺・鉢がある。甕は、口縁部が小さく「く」字状に外反して開く形態で、口縁端部の下半に刻目を施すものが古相を示す。385・387・388・391がこれにあたり、清水



図97 包含層出土弥生土器〔1〕前期〕

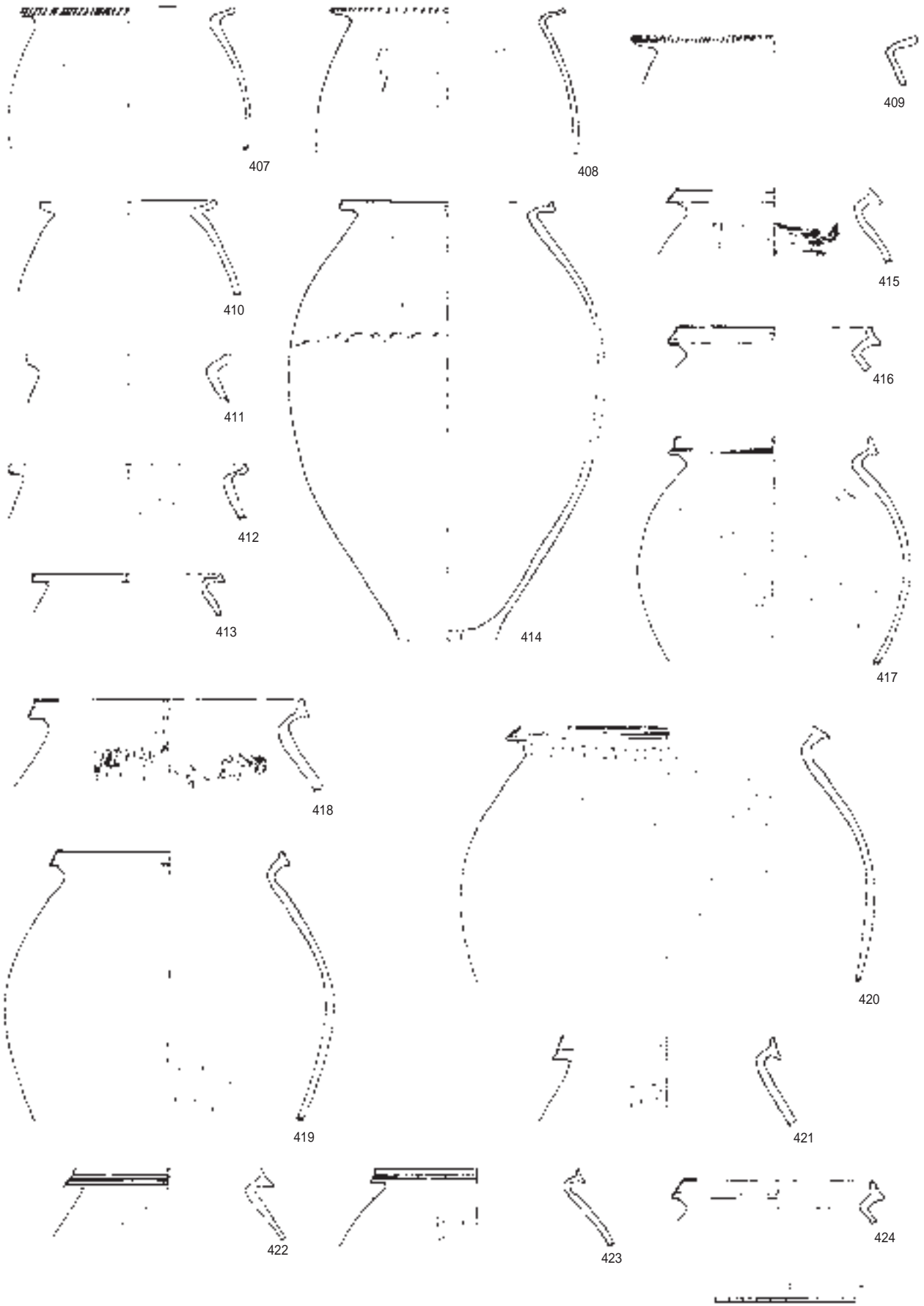


図98 包含層出土弥生土器〔2〕中期〕

編年での - 1 様式に相当する。395は口縁端部に刻目はなく、頸部に2条のヘラ描き沈線を巡らす。口縁端部はシャープで、これも同様式であろう。384・386・389は、口縁端部の刻目が端部全体に及ぶもので後出的である。これらは清水編年での - 2 様式に相当する。394・398・399などは口縁部の屈曲が小さく、口縁端部も丸くなり、頸部には多条のヘラ描き沈線を施す。これらと、393・396・397など沈線上と沈線間に刻目を施して装飾するものは後出的なもので、清水編年 - 3 様式に相当する。

400・401・404・405は壺である。いずれも口縁部が「く」字状に外反するものである。400は粘土帯の接合部が段をなして古相である。口縁部内面はヘラミガキの後にナデ調整する。口縁部外面はナデ、頸部の段の下に板ナデの痕跡がわずかに残る。清水編年 - 1 様式のものである。401は頸部にヘラ描き沈線を1条巡らせる。内外面とも横のヘラミガキを施す。404と405は同一個体である。404は口頸部が長く外反する。頸部にはヘラ描き沈線を4条巡らす。外面は横ナデ、頸部内面は縦ナデ、口縁部内面は横ナデ調整である。401と404・405は頸部を装飾するなど新しい要素をもち、清水編年 - 3 様式に相当する。

402・403・406は鉢である。402はやや外反する口縁で、頸部下に段をもつ。内外面ともナデ調整である。403はやや外反する口縁をもつ。外面はハケの後ヘラミガキを施す。口縁部外面には指頭圧痕を明瞭に残す。内面頸部以下はヘラミガキとヘラケズリの後ナデ。口縁部内面はナデ調整である。406は口縁部を逆「L」字形に折り曲げるもので、後出的である。内外面とも頸部以下はヘラミガキおよびナデ、口縁部は内外面ともナデ調整である。清水編年 - 2 様式に相当する。

中期 (図98～101、図版65～68、表43～45)

中期前葉の資料は見られない。中期中葉から中期末の遺物には、甕・壺・高杯がある。407～437は甕である。407～411は逆「L」字状に口縁部を屈折させ、端部が拡張しないものである。407は体部内面に指頭圧痕が良く残る。410・411は口縁部がやや角度をもって屈曲する。411は清水編年 - 1 様式に相当する。407～410は清水編年 - 2 様式に相当し、弥生時代中期中葉のものである。412～414は口縁端部を短く上方につまみ上げる。414は肩部下に貝殻腹縁による刺突文を巡らす。412～414は清水編年 - 1 様式に相当する。これらは弥生時代中期後葉のものである。415～437は口縁部が拡張し、複合口縁を呈するもので、口縁帯に凹線文を施す。415・419・420・422・423は、口縁帯の拡張が上下ともほぼ同じ程度のものである。416～418・424・428～430は、口縁帯の上端は大きく拡張し下端は拡張せず、断面が三角形状をする。417は口縁帯上端の拡張が際立つものである。420は、頸部に低い指頭圧痕貼付突帯を施すが、指で撫でつけた退化したものである。425～427は口縁帯の下端の器壁が薄く特徴的なものである。425は胴径の大きなもので、肩部下に一系列の刺突文を巡らせる。426は口縁帯の上下端に刻目を施す。431～436は口縁帯上端を外反させてつまみ上げたもので、内側に明瞭な稜をなす。431は口縁部が水平に開いてから上方へとつまみ出される。432は体部にハケ原体の小口で浅く刺突した羽状文を巡らせる。437は口縁部上端部を直上につまみ出すが、口縁帯には凹線文を施さない。これらの調整はいずれも、頸部から口縁部は内外面ともナデ、外面体部上半ハケメ、下半ヘラミガキ、内面体部上半をハケメ、下半ヘラケズリが基本である。433の体部内面には一部にヘラミガキを施す。419・420は清水編年での - 1 様式に相当する。415～418・421～428は清水編年の - 2 様式に相当し、弥生時代中期後葉のものである。429～437は清水編年での - 3 様式に相当し、弥生時代中期末のものである。

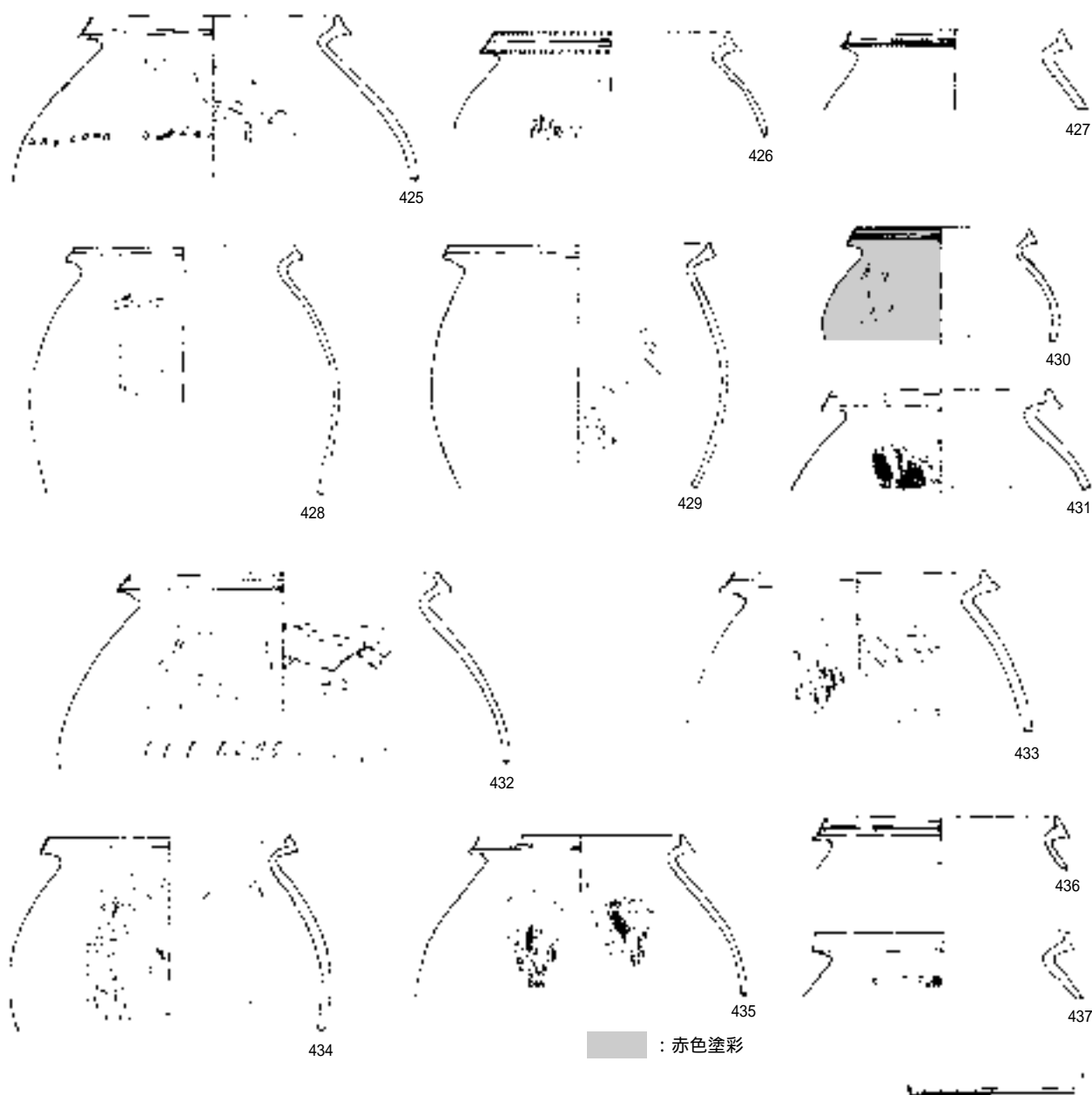


図99 包含層出土弥生土器〔3〕中期]

438～445は壺、447・448は無頸壺である。446は器種不明である。438は口頸部を大きく外反させるものである。口縁端部は上下端を拡張させる。口縁帯には2条の凹線を巡らせ、刻目を施す。頸部下には貼付突帯に刻目を入れる。調整は、口縁部内外面はナデ、頸部以下外面はハケメである。頸部内面はナデ、体部内面はハケメを施す。清水編年での - 2 様式に相当する。439は、頸部がやや短く、口縁部上下端を拡張させ、口縁帯には4条の凹線文を施す。頸部下には2条の凹線の間刻目を1列巡らせる。調整は、口縁部内外面はナデ、頸部以下外面はハケメである。頸部内面はナデ、体部内面はハケの後、一部にヘラミガキを施す。清水編年での - 3 様式に相当する。440は広口壺で、口縁部をやや下方に屈折させて、縁帯をなすものである。口縁帯には4条の凹線文を施す。清水編年での - 2 様式である。441は口縁部を大きく外反させ、開く広口壺である。口縁部断面は三角形状で、口縁帯には3条の凹線文を施す。頸部下には貼付突帯を2条もつ。調整は、口縁部内外面はナデ、頸部外面は縦方向のハケメである。頸部の下半は縦方向のナデ、頸部の上半

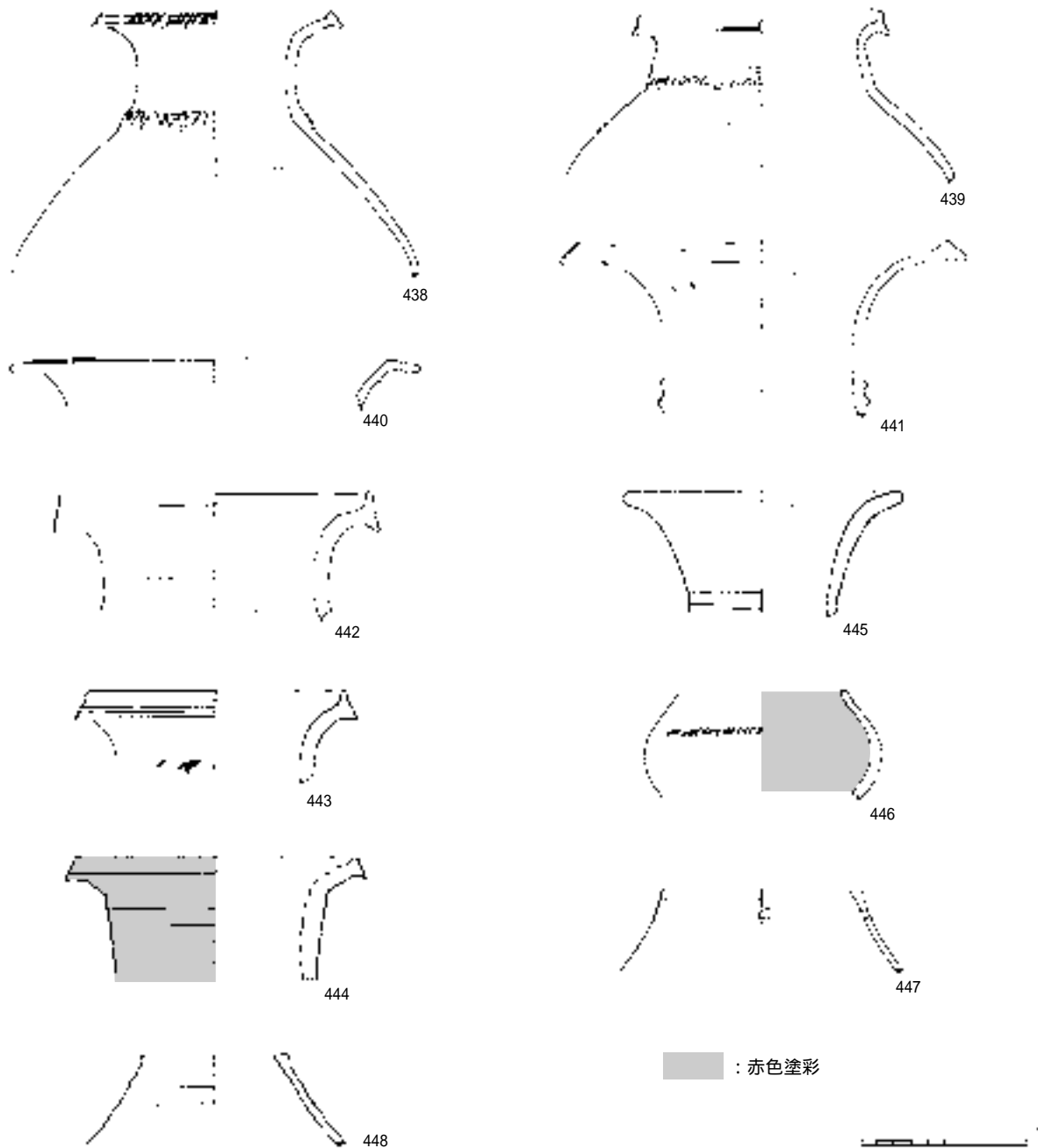


図100 包含層出土弥生土器〔4〕中期〕

はハケメである。清水編年での - 1 様式に相当する。442~445は長頸壺である。442は口縁部が上下に大きく拡張し、口縁帯は5条の凹線文を施した後ナデる。頸部には縦ハケ後、4条以上の凹線を施す。1本の原体を4周させて施した可能性がある。443も口縁部は上下端とも拡張し、口縁帯はやや内傾する。口縁帯には4条の凹線文を施す。頸部には刻目を施す。442・443は清水編年での - 3 様式に相当する。444は赤色塗彩するものであるが、器表面の摩滅が激しい。口縁部は直線的な頸部から外折し、口縁端部はわずかに拡張するが、上下端部とも欠損する。頸部は5条の凹線を施す。清水編年での - 3 様式のものと考え、 - 2 様式のものである可能性もある。447は口縁部下に穿孔がある。口縁部は5条の凹線を施し、その上からナデる。体部はハケメ、内面はヘラケズリの後ナデている。448は口縁部に3条の凹線を施しナデる。体部の調整はハケメ、内面は横ナデである。447・448は清水編年 - 2 様式に相当する。446は屈曲する体部片で、最大径部の

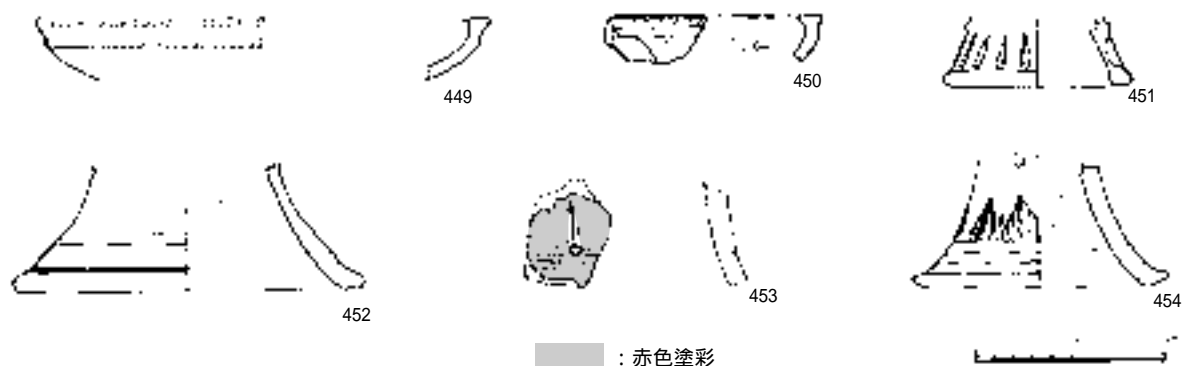


図101 包含層出土弥生土器〔5〕中期〕

上に刻目を巡らす。内外面ともヘラミガキ調整である。438は弥生時代中期中葉、それ以外の壺・無頸壺は弥生時代中期後葉のものである。

449～454は高杯である。449は、口縁部下に稜をもち、口縁端部を肥厚させ、上に面をなすものである。口縁部外面と口縁下の稜上には刻目を施す。稜上の刻目は小さく斜め気味に施す。調整は、口縁部外面は横ナデで、杯部外面と、口縁部内面から杯部内面は横方向のヘラミガキである。450は内湾した杯部で口縁部上に面をなし、内側にシャープな端部をもつものである。口縁端部外面には貝殻を刺突文を巡らし、その下に2条の凹線を施す。449・450はともに清水編年の - 3 様式に相当する。451は、脚端部上に1条の凹線を巡らす。その上から三角形の透かしをいれるが、未貫通である。透かしの上には段をもつ。清水編年の - 3 様式に相当する。452は残存部上位に1条、脚端部上に6条の凹線を施す。外面調整は縦方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリである。453も同様に凹線を施した後、透かしを入れるが、未貫通である。454は脚端部上に3条の凹線、その上にシャープな鋸歯文を施す。残存部の上端には円形とおもわれる穿孔がある。いずれも清水編年での 様式の範疇で、弥生時代中期後葉のものである。

後期（図102・103、図版66～68・カラー図版4、表45・46）

弥生時代後期の土器には、甕・壺・高杯などがある（図102・103）。大半を甕が占める。

甕はすべて複合口縁系のもの（455～472）である。いずれも口縁帯には平行線文を施す。455・457・463は口縁上下端部の拡張が短いものである。455は外反させた口縁部の上下端部を短くつまんだもので、口縁部内側に沈線状に溝が巡る。口縁帯には4条の平行線文を施す。肩部にはハケ原体による刻目を施す。455は口縁帯が直線的で濱田分類 A直類に相当する。457・463は口縁帯が外反するものである。463は内面のヘラケズリが頸部屈曲部まで及ぶ。頸部外面には刻目を施す。これらは濱田分類 A外類、清水編年 - 1 様式に相当する。456・458・459～462・472は口縁上下端ともやや長く拡張し、口縁帯がやや内傾する。濱田分類 B直類に相当する。456は遺存状態がわるいが、頸部内面は横ヘラミガキ、口縁部内面には貝殻腹縁による連続刺突文を施す。460～462・472は濱田分類 類に近い。これらは清水編年 V - 2 様式に相当する。464～466は口縁上端部が拡張し、口縁帯は内傾気味である。464は頸部が「く」字形に屈曲し、口縁帯は内傾する。シャープなつくりで器壁が薄い。465は口縁下端部が拡張しないもので、器壁が厚い。肩部には板状工具による刺突文を巡らす。濱田分類 B直類に相当する。465・466は清水編年 - 1 様式、464は - 2 様式のものである。467～471は口縁上端が大きく拡張し、口縁帯が直立する。その中でも467～469は口縁下端がわずかに下垂する。469は遺存状態がよい。口縁下端部の拡張は鈍く、口縁

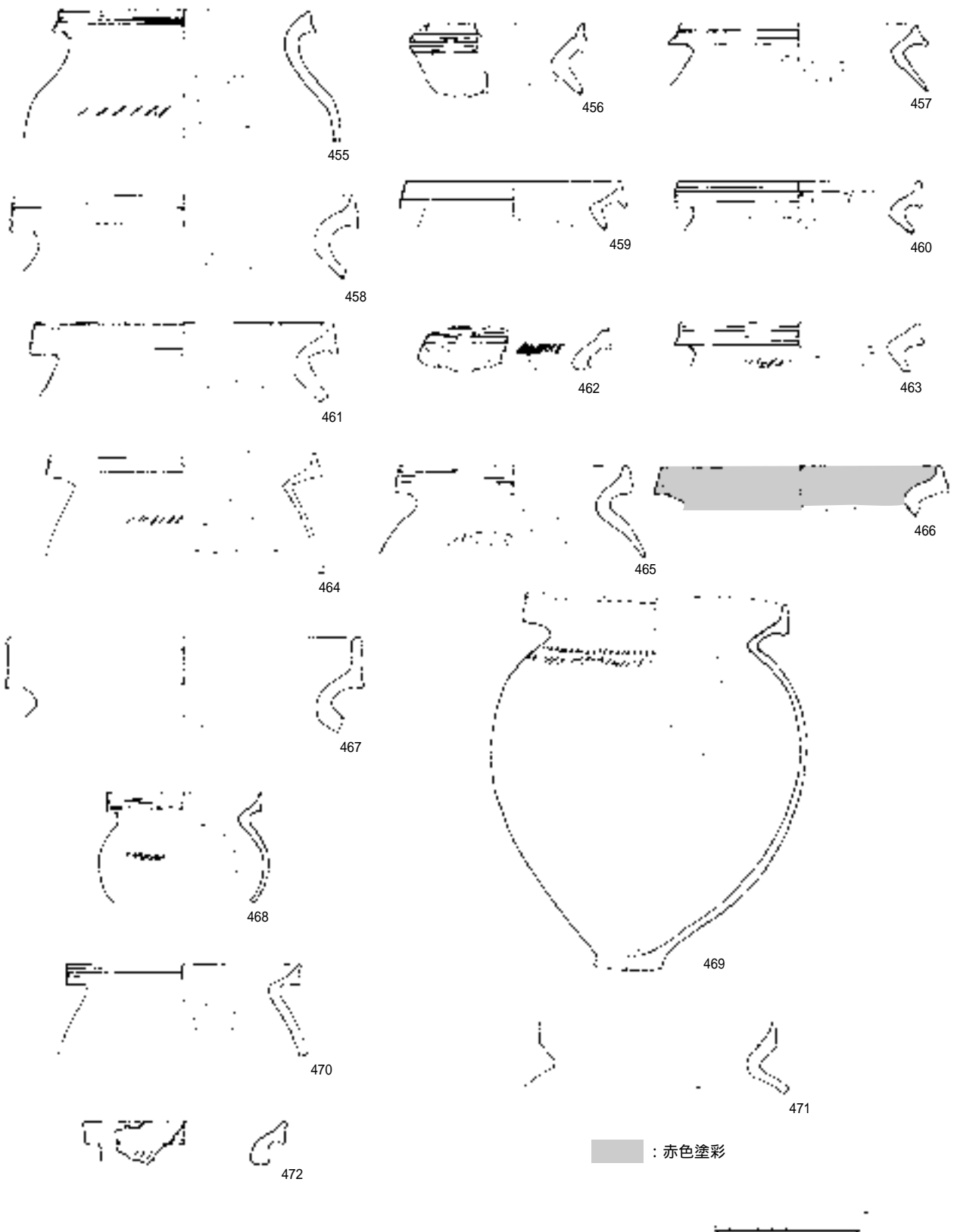


図102 包含層出土弥生土器〔6〕後期〕

帯は直立する。口縁帯には4条の平行線文、肩部には羽状文を施す。体部外面はハケメの後ナデている。これらは濱田分類の A 2 直類に相当する。470は口縁下端がほとんど拡張せず、水平につまみだし、口縁帯が外反する。濱田分類 B 外類に相当する。471は口縁下端が拡張せず、口縁帯

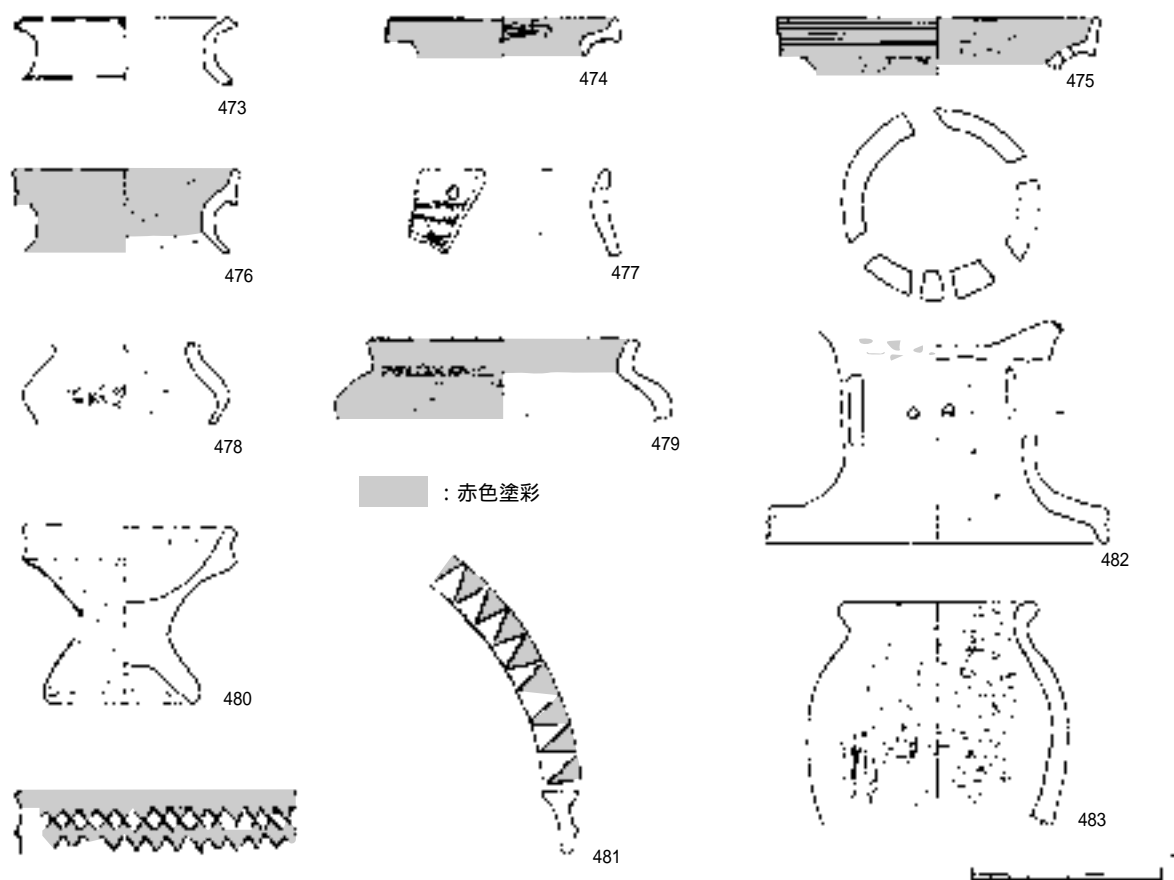


図103 包含層出土弥生土器〔7〕後期〕

は直立する。濱田分類 B直類に相当する。467～471は清水編年での - 2 様式に相当する。

473は外反してひろく単純口縁の壺で、口縁端部には2条の沈線を巡らす。474～476は複合口縁の壺である。いずれも口縁帯に平行線文を施し、赤色塗彩されている。474は、口縁部上下端部とも同程度拡張して、口縁帯が直線的である。濱田分類の A直類に相当する。口縁部内外面ともヘラミガキされる。475は、口縁上端部が大きく拡張し直立し、下端は拡張しない。口縁帯は直線的なもので、濱田分類での B直類に相当する。頸部上に穿孔がある。内外面とも著しくヘラミガキされる。476は、口縁上端が上方に大きく拡張して直立し、下端が短く拡張する。濱田分類の A直類に相当する。内面は、頸部屈曲部から口縁部までヘラミガキされる。473～476は清水編年での - 1 様式のものである。477は無頸壺である。口縁部下に穿孔、その下に8条の平行線文、その下に貝殻腹縁による刺突文を施す。内面はヘラケズリされ、口縁部内外面はナデ調整される。外面は赤色塗彩される。478は無頸壺か脚付長頸壺の体部であろう。479は壺で、胴部が大きく屈曲し、算盤玉状の扁平な器形となるようである。台付のもの可能性がある。頸部外面には波状文を施し、外面と口縁部内面には赤色塗彩する。外面頸部より下はハケメ調整、内面ヘラケズリは頸部屈曲部まで及ぶ。

480は変形の高杯であろう。杯部はナデによって短く外反する。杯部内面と外面脚部は緻密なヘラミガキ調整である。481は台付鉢ないしは大型高杯であろうか。内湾した口縁部で、口縁部は外側に粘土を貼り付け断面「T」字形とし、上端に平坦面をつくる。側面には突帯をつける。口縁上端面には山形文を深く鋭く線刻し、外面側を底辺とする三角形部分を赤色塗彩する。側面は突帯を挟んで、2列の斜格子文を線刻し、その線刻で囲われた菱形部分を残して赤色塗彩する。後期とし

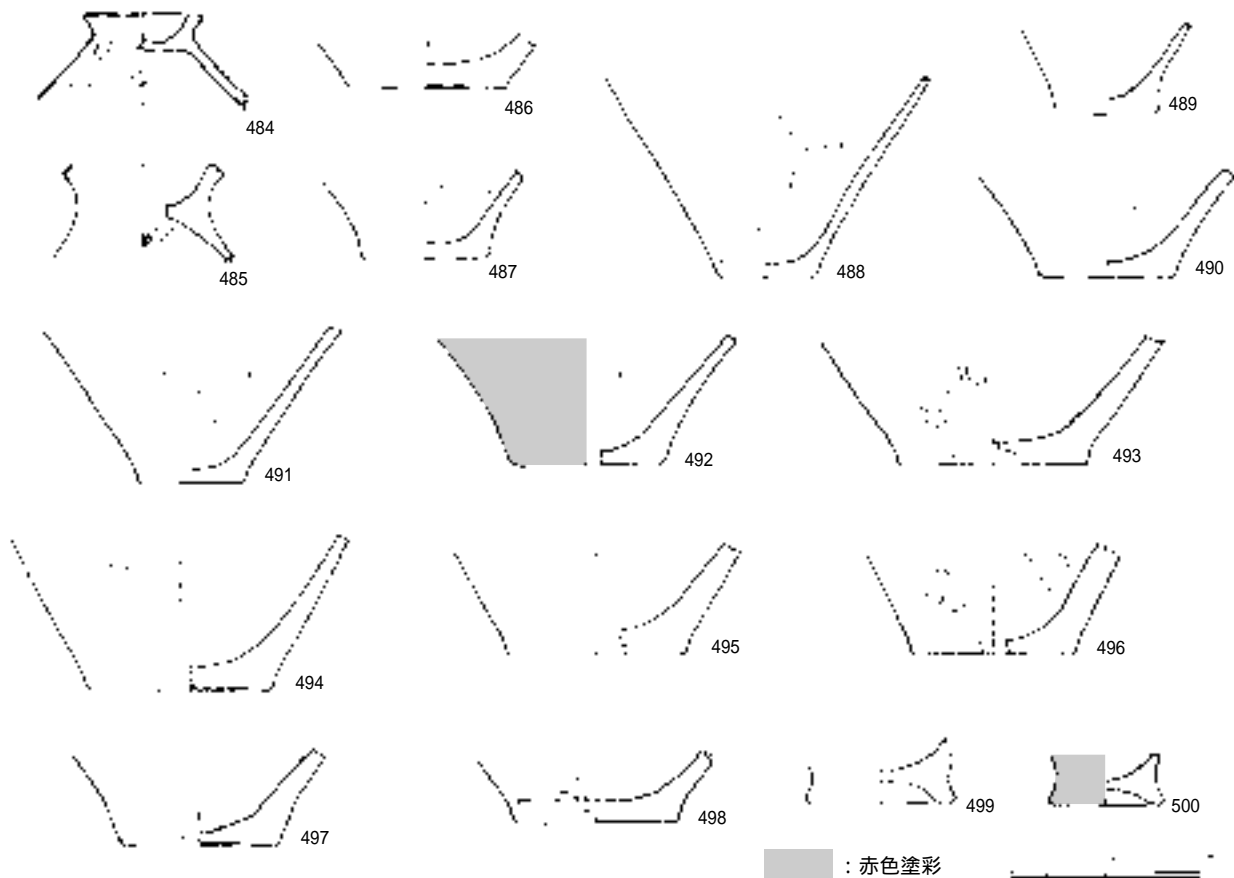


図104 包含層出土弥生土器〔8〕蓋・底部

たが、詳細な時期はわからない。482は台付壺の脚部であろう。器表面の遺存状態がわるい。筒部の4箇所に方形の透かしを貫通させ、さらに2つの円孔を並列させる。脚端部は3条の平行線文を巡らせる。清水編年での - 3 様式のものであろう。483は壺である。器表面の遺存状態はよい。器壁は厚く、短く外反させる口縁部で、端部はそのまま丸く収める。緻密なヘラミガキを内外面に施し、内面は黒色で光沢を帯びている。後期の可能性がある。

蓋・底部 (図104、図版68、表46)

484・485は蓋である。486～500は底部である。平底のもの486～498と高台状に上げ底とするもの499・500がある。486～493は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ調整である。494～498は外面ハケメ、内面ヘラケズリ、またはハケメ調整の平底である。 (日置)

3. 縄文土器 (図105～122、図版70～77、表10・49～56)

概要

包含層から出土した縄文土器は時期幅が大きく早期から晩期にわたる。最古の土器は早期中葉の押型文土器であるが、わずか1点のみの出土である。早期末から前期初頭にかけての土器が大量に出土しており、出土縄文土器の主体を成している。前期、中期の土器は出土量が少なく散発的な様相である。後期は、初頭から後葉まで比較的まとまって出土しており、特に中葉の資料が充実している。また、後期土器にともなうと考えられる粗製土器が大量に出土しているが、有文土器の中で最も出土量のまとまっている中葉に帰属するものが多いと考えている。晩期は前葉、中葉の資料をまったく欠くものの、突帯文土器がいくらか出土している。ただし、これには弥生時代に帰属する

表10 縄文土器出土数組成表

グリッド	C 1	C・D1	C 2	C・D2	C 4	D 1	D 2	D 3	D 4	D 5	D 6	E 1	E 2	E 3	E 4	E 5	E 6	E 7
押型文																		
早末～前初(縄文)	1	1	8			3	24	2		3			45	1		3	2	
早末～前初(条痕文)	7	3	176	1	2	36	99	18	4	6		15	141	26	3	17	1	
西川津式			2			1	3						2	1				
前期			1					1										
中期							1	1										
後期初頭					1					1								
後期前葉																		
後期中葉		5	44		3	4	6		1	1			6	7	1	6	1	3
後期後葉			2		1		1									1		
粗製土器	35	41	579		4	83	167	60	13	23	2	3	31	13	6	18	3	8
突帯文			2		1	1	1	2	1						2	1	1	1
計	43	50	814	1	12	128	302	84	19	34	2	18	225	48	12	46	8	12

グリッド	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	G 1	G1・2	G 2	G 3	G 4	G 5	H 1	H 2	H 3	H 4	H 5	H 7	H 8
押型文																		
早末～前初(縄文)	4		9	16		11	4	11	33		4	5	8	21	16			
早末～前初(条痕文)	27	25	71	29	1	140	28	196	406	75	33	25	56	384	157	6		
西川津式	1	1	1			2	1	1	4	1			1	4				
前期	1							1	2					2				
中期						2		1	9					1				
後期初頭																		
後期前葉			1			1	1								1			
後期中葉	3		3			8	4	2	33	8				12	4			
後期後葉				1					7	1	2		1	6	2			
粗製土器	13	3	19	13		23	51	30	254	70	40	6	36	118	71	1		2
突帯文				1			1	1			2			1	1			1
計	49	29	104	60	1	187	90	243	748	155	81	36	102	549	252	7	1	2

グリッド	I 1	I 2	I 3	I 4	J 6	J 8	L 7	L 8	M 7	M7・8	M 8	M 9	N 7	N 8	N 9	N11	O 7	O 8
押型文																		
早末～前初(縄文)	7	21	13	2														
早末～前初(条痕文)	35	106	69	14					1			3	1	2		1	1	
西川津式		3		1														
前期																		
中期	1			1														
後期初頭									1		1	1				1		
後期前葉						1												
後期中葉		4	1	1								1		1	1			
後期後葉		2	1														1	1
粗製土器	8	49	27	2					7		2	1	1			1	1	2
突帯文		1			1		1		5	1	3	5	2	1			2	4
計	51	186	111	21	1	1	1	1	13	1	1	10	7	6	2	3	5	7

グリッド	O10	O11	P 8	P10	P11	A区 一括	B区 一括	C区 一括	D区 一括	E区 一括	小計	土坑22	土坑23	土坑24	土坑25	土坑26	総計
押型文						1					1						1
早末～前初(縄文)						3	3	10			294	5			2	2	303
早末～前初(条痕文)			3			27	18	30		1	2526	209		2	38	49	2824
西川津式						2		1			33	7	72		1		113
前期						2	1				11						11
中期						1					18						18
後期初頭						1					7						7
後期前葉											5						5
後期中葉				1		2		1	1		179						179
後期後葉						2					32		1				33
粗製土器		1			1	24	9	21			1996	1					1997
突帯文	1		1		2	3		1		2	57						57
計	1	1	4	1	3	68	31	64	1	3	5159	222	72	3	41	51	5548

新相のものも多く含まれている。

出土量と分布

出土した土器片全点を時期ごとに分類してグリッド単位で計数し、出土量と分布の傾向を示した(表10、図105～107)。早期末～前期初頭としたものは、胎土に繊維を混入した縄文地ないしは条痕地の土器で、繊維混入の認められないものは粗製土器としてカウントしている可能性がある。また、前期初頭の西川津式としたものは施文などから明確に分離できたもののみをカウントしているため、早期末～前期初頭の条痕文としてカウントしたもののなかにも西川津式土器が含まれているだろう。後期の有文土器のうち、縄文のみを施文し、時期が判明するような特徴的な文様をもたないものは最も出土量のまとまっている後期中葉としてカウントしたが、後期初頭や前葉のものが含まれている可能性もある。粗製土器としてカウントした資料には、先の早期末～前期初頭の土器を含む

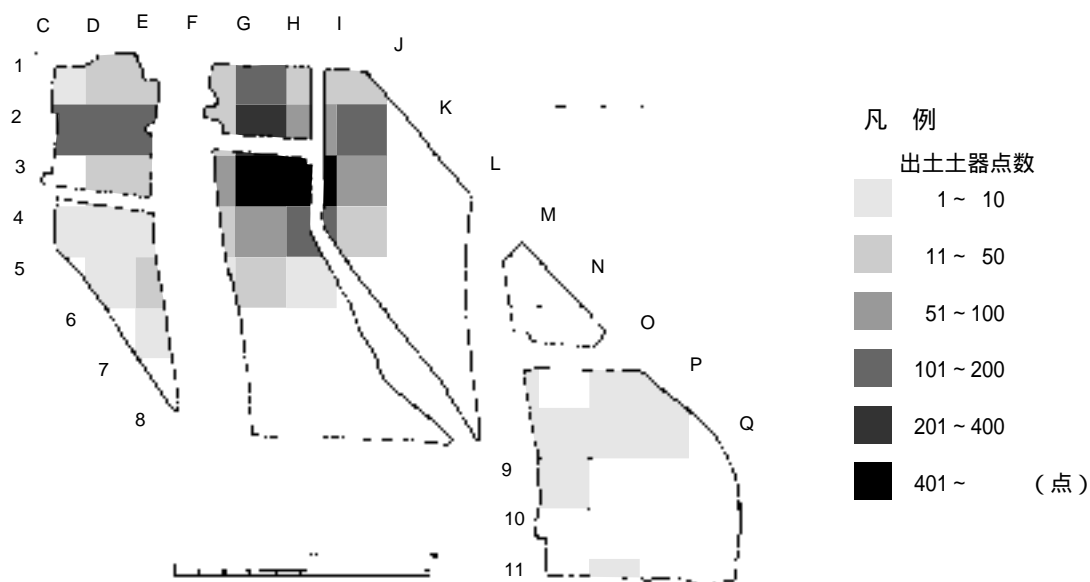


図105 縄文土器グリッド別出土量模式図〔1〕早期末～前期初頭土器〕



図106 縄文土器グリッド別出土量模式図〔2〕後期有文土器〕

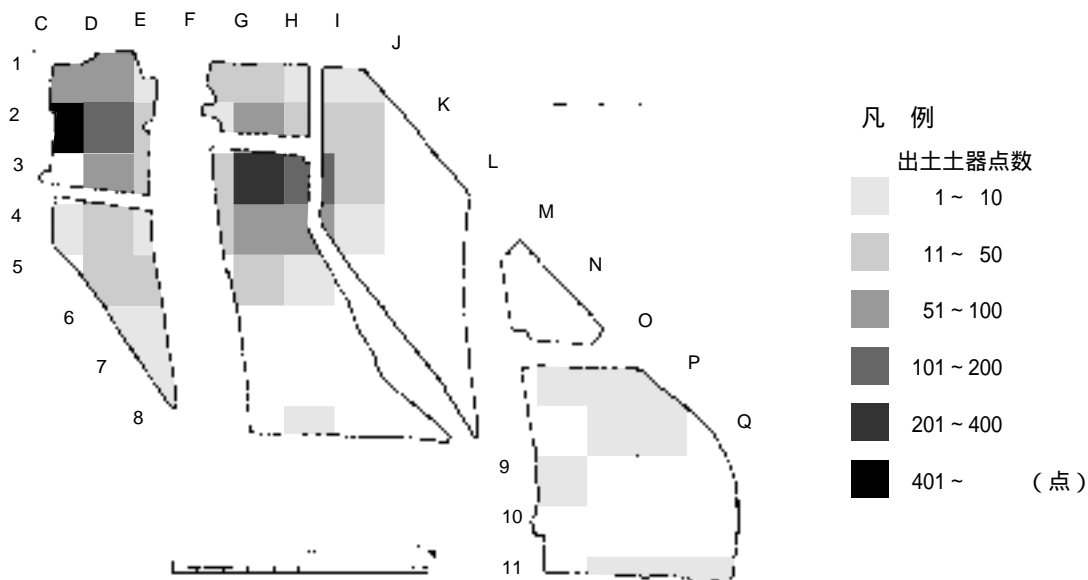


図107 縄文土器グリッド別出土量模式図〔3〕粗製土器〕

可能性があるほか、後期の有文土器の体部片や、突帯文土器の体部片も含んでいる可能性が極めて高いため、実際よりは数が大きくなっていると思われる。突帯文土器は口縁部片でしか判断できていないため、実際よりは少ない数となっているだろう。こうしたノイズがあるものの、傾向をつかむことはできるだろう。出土量は、早期末～前期初頭の土器が最も多く、縄文地、条痕地、西川津式すべてを合計すると3240点となり、縄文土器全体のほぼ6割を占める。次いで、粗製土器が多く、全体の36%を占めている。

グリッドごとの出土量から土器の平面的な分布を見てみると、A区東部、B区東部、C区北東部がいずれの時期とも分布の中心となっていることが分かる。これ以外の部分では出土量が極めて少ない。もう少し詳しく分布のあり方を見るために、出土量の多い早期末～前期初頭の土器、後期土器、粗製土器それぞれの出土量をグリッドごとで階級分けして表した分布模式図を示した（図105～107）。いずれも、一見すると類似した分布のあり方を示しており、C2グリッドを中心とする一帯と、G3・G4グリッドを中心とする一帯の2つの範囲で遺物の集中出土が見られる。後期土器と粗製土器の分布のあり方は非常に近似しており、このことから両者が共伴するものである可能性は高いといえよう。後期土器、粗製土器の分布と、早期末～前期初頭土器の分布を少し詳しく比較すると、分布傾向に違いがあることが分かる。最も大きな違いは、先の二つの遺物集中域で見られ、C2グリッドでは粗製土器が主体となるのに対し、G3・G4グリッドでは早期末～前期初頭土器が主体となっている。ほかのグリッドでも両者の出土量を比較していくと、早期末～前期初頭土器はG3・G4グリッドを中心にB区東部やC区北東部にまとまった遺物集中域があるほか、A区の東部でもまとまりをもち、一方の粗製土器はC2・D2グリッドに集中域をもつほか、G3・G4グリッドでもある程度まとまった量が出土していることが分かる。両者は完全に排他的な分布を示すわけではないが、いくつかのグリッドでは早期末～前期初頭土器が多量に出土しているにもかかわらず、粗製土器の出土量が少ない場合も見られる。こうしたことから、大まかな傾向として、早期末～前期初頭の土器と後期に帰属すると考えられる粗製土器は分布域が異なっていると言えるだろう。二次的な移動が大きいことを割り引いても、本来的に両者の遺物分布域が異なってい

た可能性が高い。後期中葉土器が集中する第2調査地も含め、遺跡内で活動の中心となった場が時期によって異なっていた可能性も考えうるだろう。

早期中葉（図108、図版71、表49）

押型文土器が1点のみ出土している。501は山形の押型文が施文された深鉢の底部付近の破片である。

早期末～前期初頭（図108～115、図版70～74、表49～53）

この時期に帰属すると考えられるものが本遺跡出土縄文土器の主体をなし、遺構内出土のものも含めると合計3240点出土している。早期末～前期初頭に帰属すると判断した資料は、その特徴から大きく二大別できる。胎土に繊維を混入していることを最も大きな特徴とし、地文に縄文や条痕文を施し、口縁を中心に隆帯を貼り付けて加飾するものを中心とする、いわゆる「福呂式」・「長山馬籠式」（小林2000）ないしは「長山式」（井上1991・1996）の土器群と、口縁部肥厚帯や細隆帯の貼り付けと刺突文や押し引き文の施文で特徴付けられる西川津式土器の二者である。繊維混入の隆帯文土器は縄文地のものと条痕地のものとを分類して報告するが、同一個体の土器に縄文、条痕両者が重ねて施される場合や、部位を違えて施される場合が多く見られるため、厳密に区分できていない可能性がある。後述するが、両者は、地文に違いは見られるものの、その他の多くの特徴が一致するため、基本的には同一の土器群として捉えたほうがよいと思われる。

< 隆帯文土器（縄文地） >

繊維混入の隆帯文土器のうち、縄文地のものは破片で303点出土している。しかし、これは単純に残された破片のうち縄文の観察できたものをカウントした数字なので、縄文地土器の同一個体片であっても条痕やナデが施されていた部位の破片はカウントできていない。したがって、実際はこれより破片数が多くなると思われる。これらは、いずれも外面に縄文を施文し、内面は条痕ないしはナデで調整する。大半が隆帯を口縁付近に貼り付けるが、隆帯をもたないものも含まれる。胎土にはいずれも繊維が含まれるが、混入量にはばらつきがあり、きわめて多く含むものも見られる一方で、ほとんど観察できないものもある。これらの破片の中から、口縁部片や、隆帯の残る破片を中心に掲載した（図108・109、502～529）。器種はすべて深鉢形土器と思われる。調整は、いずれも外面に縄文が施される。縄文はR L単節縄文が多数を占め、ほかにL Rのものや無節のものも少数見られる。撚りは緩いものが多く、節の大きさは大小まちまちである。大半は器面上に浅く施されている。内面の調整は、貝殻条痕や複数種の植物質工具によると思われる条痕が施されるほか、ナデで仕上げるものも多い。条痕工具は基本的には1個体に対しては1種類のものを使っているようだが、条痕後にナデを加えているものが非常に多く、現状ではナデしか観察できないものも条痕調整が行われていた場合があるだろう。隆帯は多くが口縁付近に平行隆帯として貼り付けられる。隆帯の貼り付け位置は、大半が口縁端か、端部からわずかに下がった位置である。ほかに、複数条の横走隆帯をもつ個体や、縦位の垂下隆帯となるものもあるほか、隆帯をもたないものも存在する。隆帯は外面に縄文を施文した後に貼り付けている。隆帯は強く押しつけて貼り付けられていないようで、断面形が丸型のものが多く、貼り付けの接点は小さく簡単に剥落してしまいそうなものがほとんどである。隆帯上には大半が様々な工具の刺突や押し引きでキザミを施している。キザミに使用される工具には、半裁竹管（状工具）、二枚貝の腹縁や背面、棒状や板状の工具などが見られる。また、同様の工具を用いて、口縁上端部にキザミを施すものも見られる。以下、特徴的な個体につ

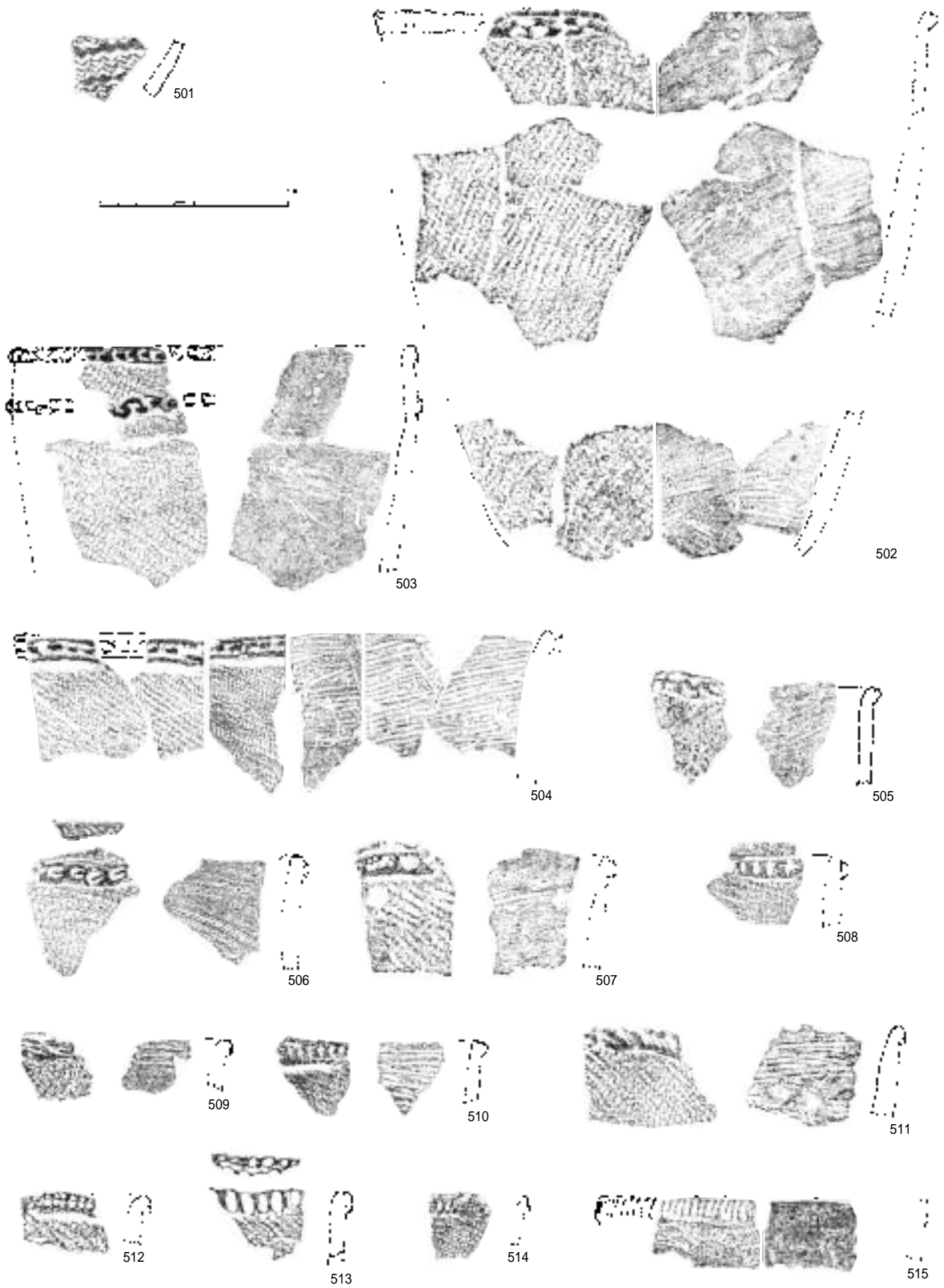


图108 包含層出土縄文土器〔1〕[早期末~前期初頭]

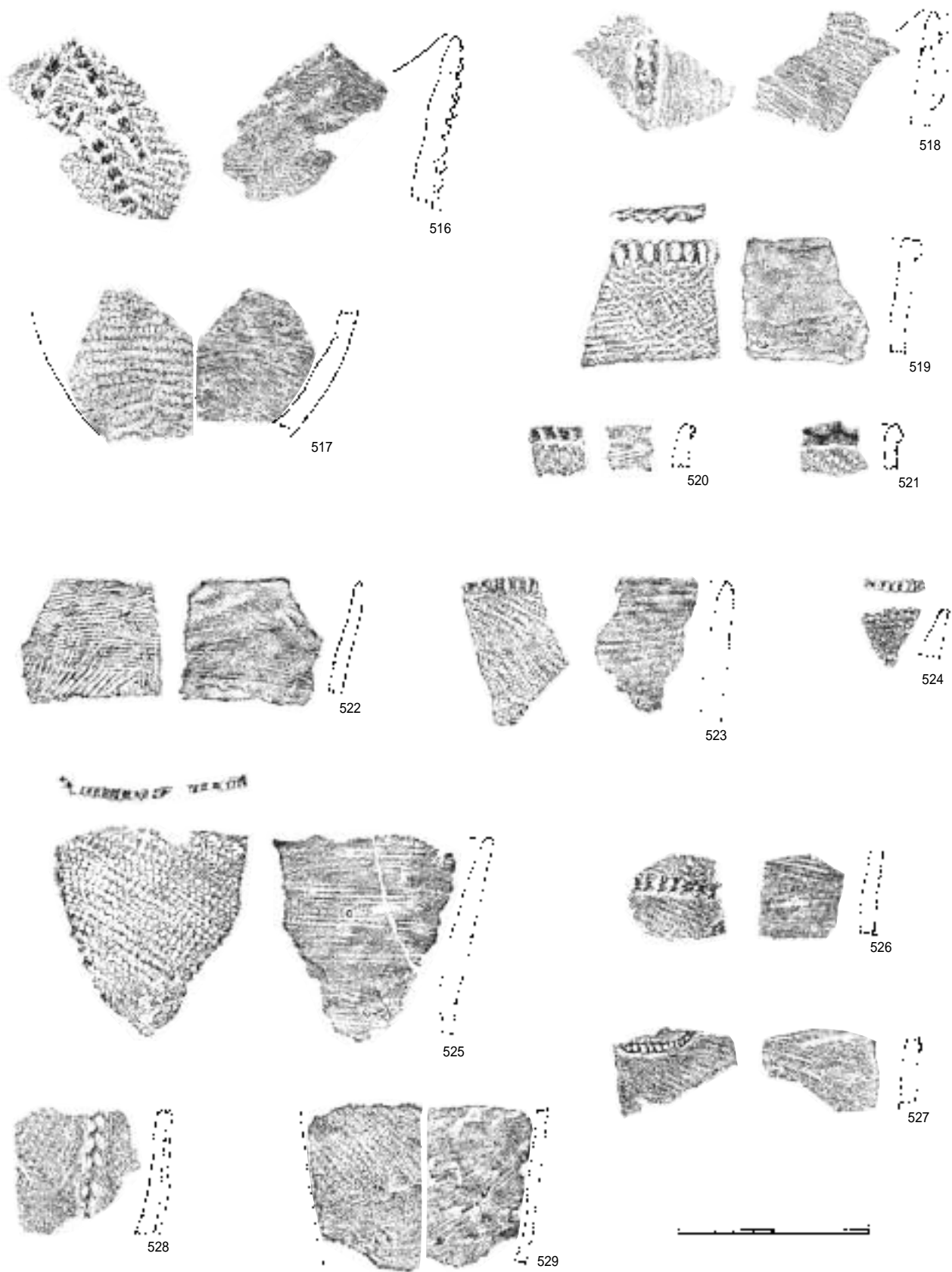


図109 包含層出土縄文土器〔2〕 早期末～前期初頭〕

いて記述を加える。502は図上復元ながら全体の器形を想定できるもの。底部に向けてすぼまる砲弾形を呈している。隆帯は粘土をひねりながら貼り付けている。503や504も口径が復元できている。503は502や504に比べれば小型で、2条の平行隆帯をもつ。504は縄文施文の隆帯文土器のなかでは、繊維の混入量が少なく、焼成が良好で、遺存状態もよかった。また、外面の縄文も深くしっかりと施されている。514は明らかに小型の器形となるもの。隆帯の貼り付け方や成形の仕方、キザミの施し方などが第2調査区出土の25の土器に極めて類似しており、これがそのまま小型化したかのような土器である。515は小型の深鉢で、隆帯が肥厚帯状に低く広く貼り付けられている。隆帯のあり方が異質であるが、繊維が混入されること、外面に縄文が施文されることから、この一群に含まれるものとして捉えた。516・517は同一個体と思われる。やや小型で、波状口縁をもち、波頂部から2つの山形隆帯が垂下する。518も波状口縁で、口縁に沿う隆帯と、波頂部から垂下する隆帯が見られる。522～525は隆帯をもたない口縁部片。522以外には口唇部にキザミが施される。526～529は胴部片。529は小型の深鉢である。608も縄文地の小型深鉢（図113）。

< 隆帯文土器（条痕地） >

条痕地のものは破片数にして2824点出土している。外面の調整が条痕によってなされる以外は、縄文地のものとほぼ同じ特徴をもつ。これらの破片の中から、口縁部片や、隆帯の残る破片を中心に掲載した（図110～114、530～621）。器種はすべて深鉢形土器である。調整は、貝殻条痕や複数種の植物質工具によると思われる条痕、ナデを内外に組み合わせて行う。条痕工具や調整は外面と内面で一致しない場合も多い。隆帯は多くが口縁付近に平行隆帯として貼り付けられる。隆帯は口縁端付近に貼り付けられるものが多いが、その位置は比較的バラエティーに富み、口縁端から下がった位置に貼り付けるもの、口縁端に貼り付けるもの、口唇上に乗せるように貼り付けるものなどが見られる。ほかに、縄文地のものと同じく、複数の横走隆帯をもつ個体や、垂下隆帯をもつものもあるほか、隆帯のないものもある。隆帯の断面形は縄文地のものに比せば多様性が高く、貼り付けの状態も、接点の小さいもののほかに、比較的しっかりと密着させているものも見られる。縄文地のものと同様に隆帯上にキザミを施すものが多く、キザミに使用される工具も縄文地のものと共通し、半裁竹管（状工具）、二枚貝の腹縁や背面、棒状や板状の工具などが見られる。また、口縁上端部にも同様の工具でキザミを施すものも見られる。530～552は隆帯の貼り付け位置が口縁端からわずかに下がるもの。530は口縁端付近の平行隆帯とそこから派生する垂下隆帯をもつ。538・550～552は小型深鉢。550は口縁端とその下に横走する平行隆帯をもつ。551は隆帯上と隆帯の上下に半裁竹管の刺突文列が施される。553～576は口縁端に隆帯を貼り付けるもの。553は小型深鉢。559はやや小型のもので、隆帯は粘土をひねりながら押圧して貼り付けている。554も同様の隆帯をもつ。570の隆帯は、粘土紐貼り付けの起点と終点の部分と思われ、粘土紐の両端部分を上下に重ねて収束させている。572も同様に粘土紐の端部が重なるが、一方がそのまま斜め方向に垂下していく。573・574は波状口縁で、口縁端に隆帯がつき、波頂部から垂下する隆帯がつく。575は平口縁で、口縁端に平行隆帯がつくほか、↑形に口縁から垂下する隆帯がある。577～581は口唇部に乗せるように隆帯を貼り付けているもの。いずれも隆帯の断面形は丸く、貼り付けの接点が極めて小さい。582～592・618は隆帯を口縁端にしっかりと密着させて貼り付けているもの。582は口径の復元ができた。隆帯貼り付け後に口縁端面にナデが加えられており、隆帯の継ぎ目が見られない。隆帯上は貝殻腹縁によるキザミ、外面には貝殻条痕が施され、顕著な円弧状をなす部分が見られる。

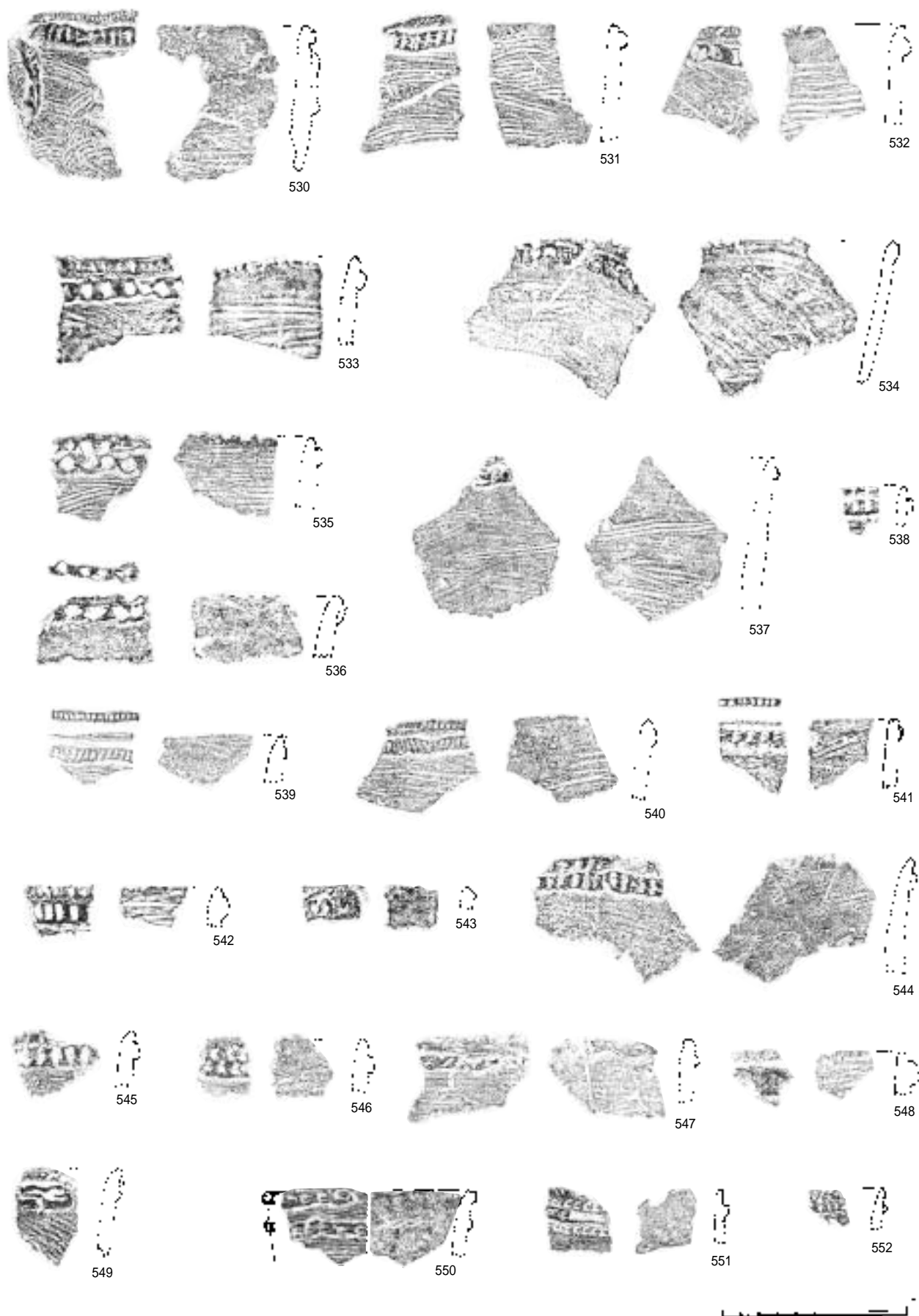


図110 包含層出土縄文土器(3)【早期末～前期初頭】

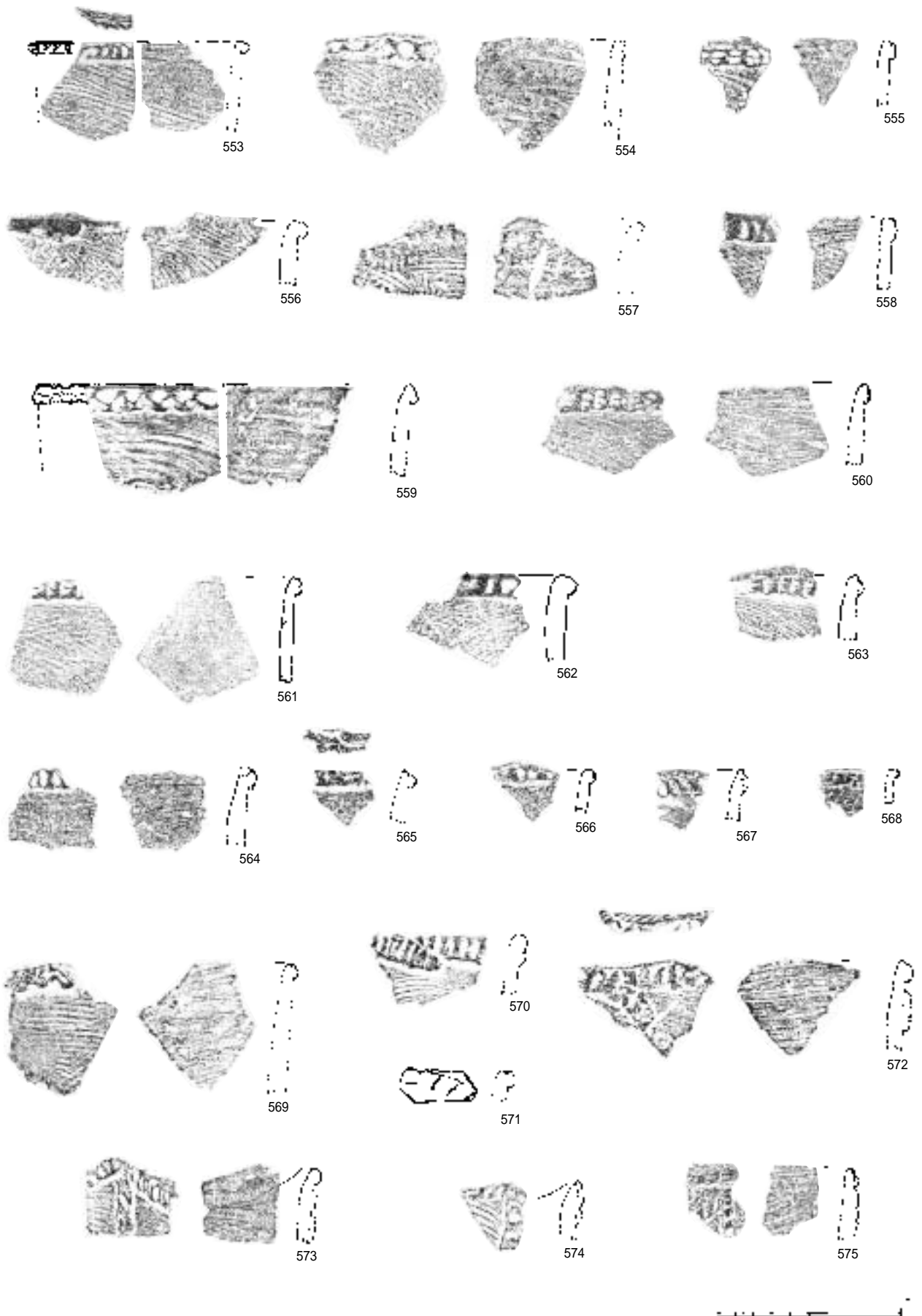


图111 包含層出土縄文土器〔4〕[早期末～前期初頭]

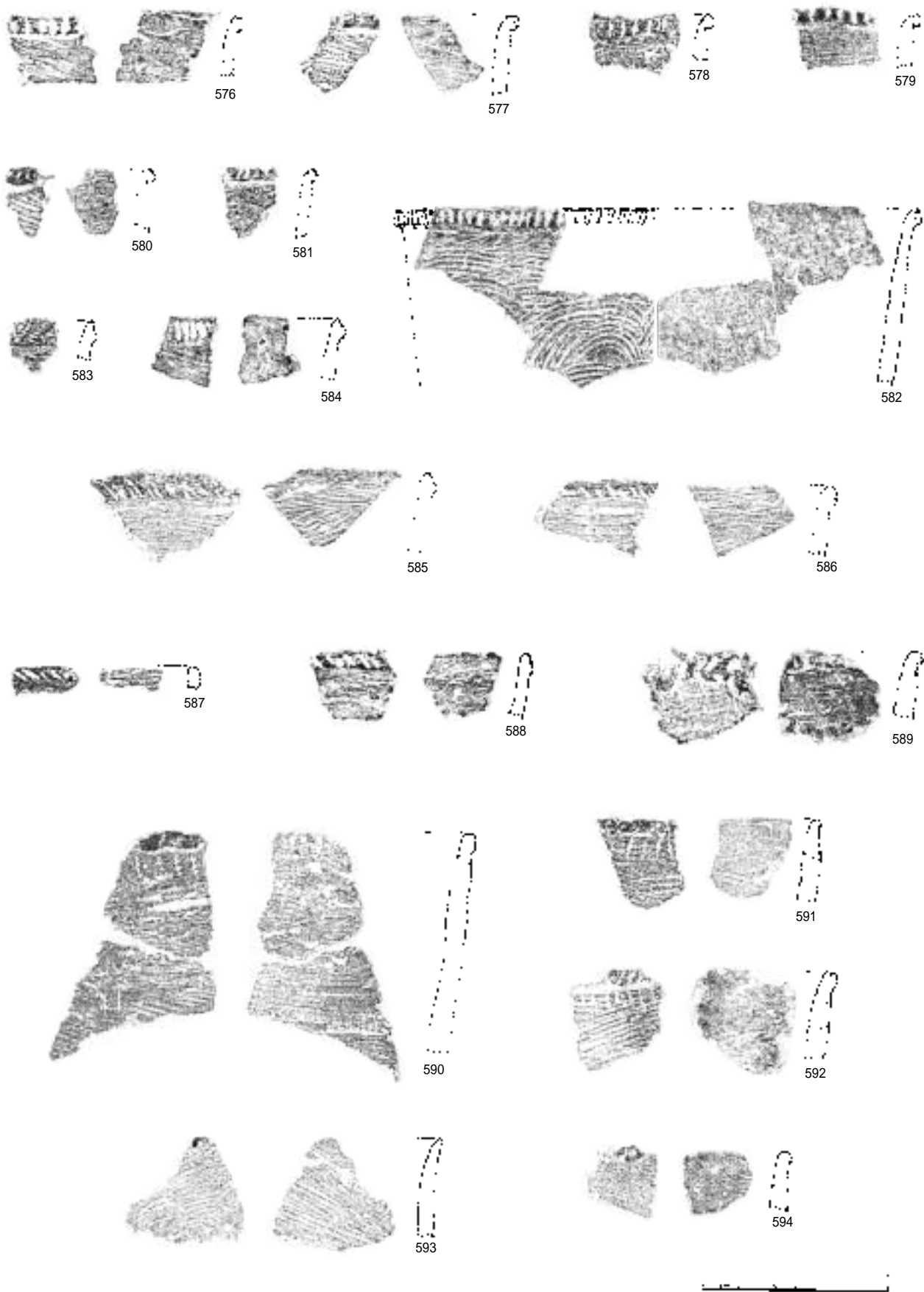


図112 包含層出土縄文土器〔5〕早期末～前期初頭〕

583・584は隆帯が断面三角形に整えられるもの。特に583は隆帯がやや幅広となるので、後述の西川津式の一群に含まれる可能性もある。585～592は隆帯が指でしっかりと押圧されて貼り付けられている。587は口縁上に積み上げるように粘土紐が貼り付けられ、隆帯状に突出しない。590～592はいずれも隆帯上から隆帯の下にかけて貝殻腹縁の連続刺突が施される。粘土接合のあり方が特殊で、いずれも口縁付近のみ外傾接合で積み上げている。593はきわめて細い隆帯が見られる。594も細い隆帯が貼り付けられる。595～609は口縁に隆帯をもたないもの。このうち、595～597には胴部に隆帯が見られる。595は無キザミの細い隆帯が不整方向につけられている。596は横走隆帯、597は斜位に垂下する隆帯がつく。いずれも口縁端にキザミが施される。598～609には隆帯が見られない。598～604は口縁端にキザミが施される。径復元のできた598は小型深鉢。605～609は口縁にキザミをもたないもの。607は口縁がやや外反する器形をなし、外面が全面ナデ、内面は植物質工具による条痕調整後ナデが施される。609は小型品で、外面に刺突文列をもつ。610～616・619～621は隆帯やキザミが施される胴部片。617は上端を欠くので胴部片か口縁片か判然としないが、口縁片618に隆帯の形態や施文が類似する。

<西川津式土器>

西川津式土器は破片数で、包含層中から33点、遺構内のものも含めて合計113点が出土した。前述のように、明確な特徴をもつ部位以外は条痕地の隆帯文土器と区別がつかないため、実際の破片数はこれよりもかなり多いものと思われる。622～627は西川津式A類。口縁部に肥厚帯を形成し、肥厚帯上や胴部に刺突文を施す。調整は条痕ないしはナデで、条痕工具は貝殻が主体となる。胎土に繊維を混入するものは少ない。622は粘土帯の貼り付けによる肥厚帯を形成しないが、口縁端より下がった位置に細く低い三角形の隆帯を貼り付けた後、口縁から隆帯にかけて貝殻腹縁(?)によるキザミを施す。この加飾の結果、口縁部にキザミの施された肥厚帯があるように見える。623は断面三角形の隆帯の上下に貝殻腹縁による連続刺突を施すもの。羽島下層 式に文様構成が類似する。625は肥厚帯上に縄文が施される。626は肥厚帯の中央に横走する沈線が入り、これを隔てて2列の貝殻腹縁刺突文列が施される。外面は貝殻と植物質工具を併用する条痕で、内面はナデで仕上げられる。胎土に繊維が多く混入されている。ほかの西川津式A類資料と異なる点が多いが、肥厚帯が形成されていることを重視してこれに含めておく。630～632は西川津式B類と思われるもの。630はキザミの施された細隆帯が複数条横走する。631は外面にR L縄文が施されているが、細隆帯をもつこと、胎土や焼成の状態が西川津式土器の一群に類似することからこれに含めた。ただし、縄文地の隆帯文土器のバリエーションである可能性も高い。632は屈曲する胴部片。屈曲部にキザミが施される。633～635はいずれも胎土や焼成、色調が類似する。細隆帯と押し引き文が施される点や、634・635は内傾することなどから、西川津式C類の可能性もある。

<その他の条痕文土器・底部>

636・637は条痕地文の胴部片。636は丸底の砲弾形を呈す。637は大型の深鉢になるとと思われる。638～644は早期末～前期初頭土器の底部。638は非常に小型の深鉢底部。尖底に近い丸底。639～644は底がやや平たくなる丸底。内外に条痕ないしはナデが見られる。644は底部から胴部にかけて、若干の立ち上がりを見せる。

前期(図116、図版74、表53・54)

西川津式土器を除いた、前期土器は少なく、羽島下層 式に属するものや、彦崎Z2式のものが

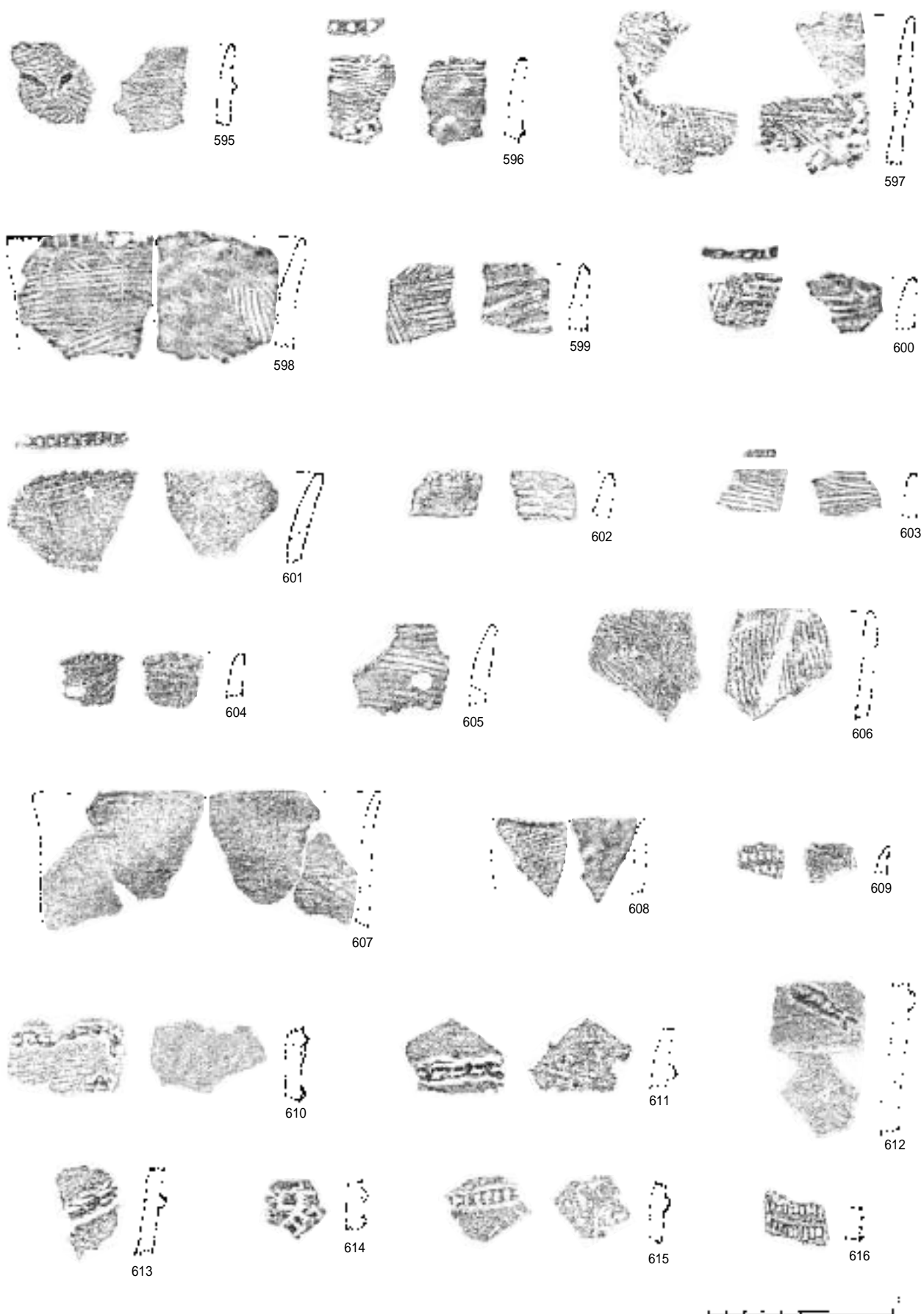


図113 包含層出土縄文土器〔6〕 早期末～前期初頭

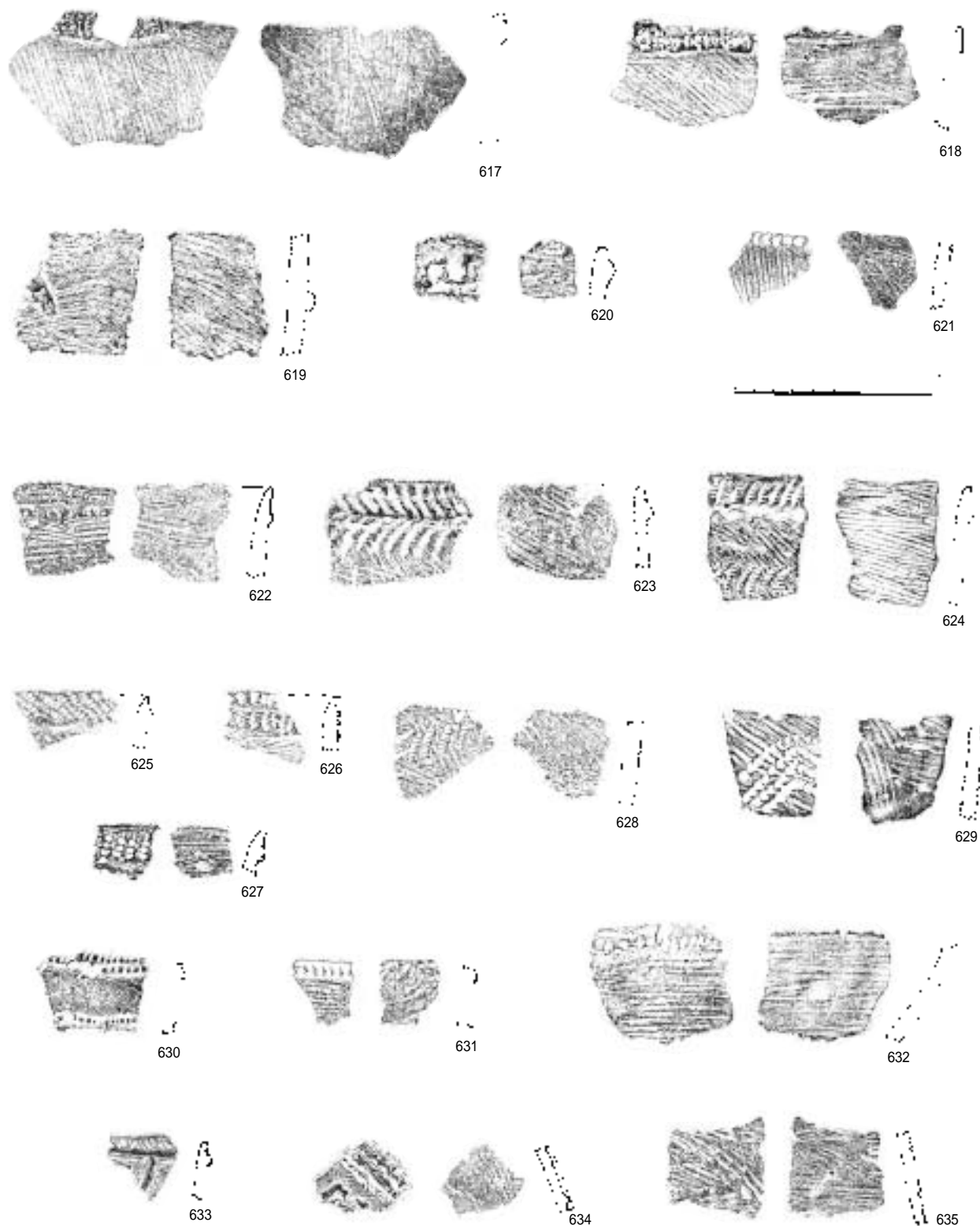


図114 包含層出土縄文土器〔7〕 早期末～前期初頭〕

わずかに見られるのみである。破片数は全部で11点である。645～647は断面三角形の突帯の上下に爪形文列を施した口縁部片、648も爪形文列の施される胴部片で、羽島下層 式と考えられる資料である。649・650は刺突文が施されるもので、型式不明のもの。649は貝殻背面で押し引き状の刺突文列が施される口縁部片。650は幅広の粘土帯を口縁に貼り付け、貝殻腹縁で刺突を施すもの。いずれも、西川津式に含まれる可能性がある。651は彦崎Z2式。

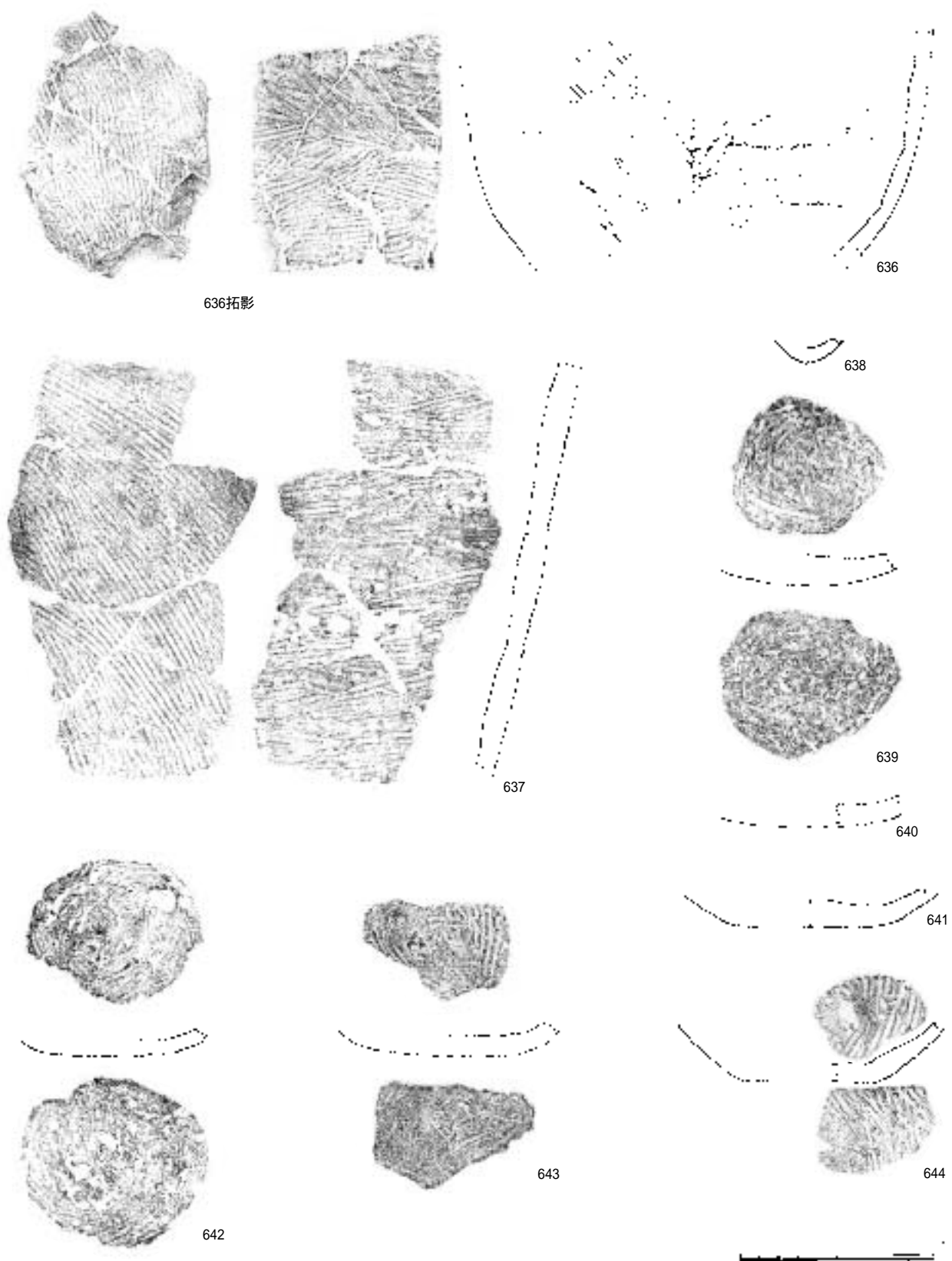


図115 包含層出土縄文土器(8)【早期末～前期初頭】

中期 (図116、図版74、表54)

中期土器は全部で18点の破片が出土した。652は縄文地で貼り付け口縁をもつ波子式土器。653は縄文地に沈線が施される船元式土器。654は撚糸文が施される平底の底部で、里木式にあたる。

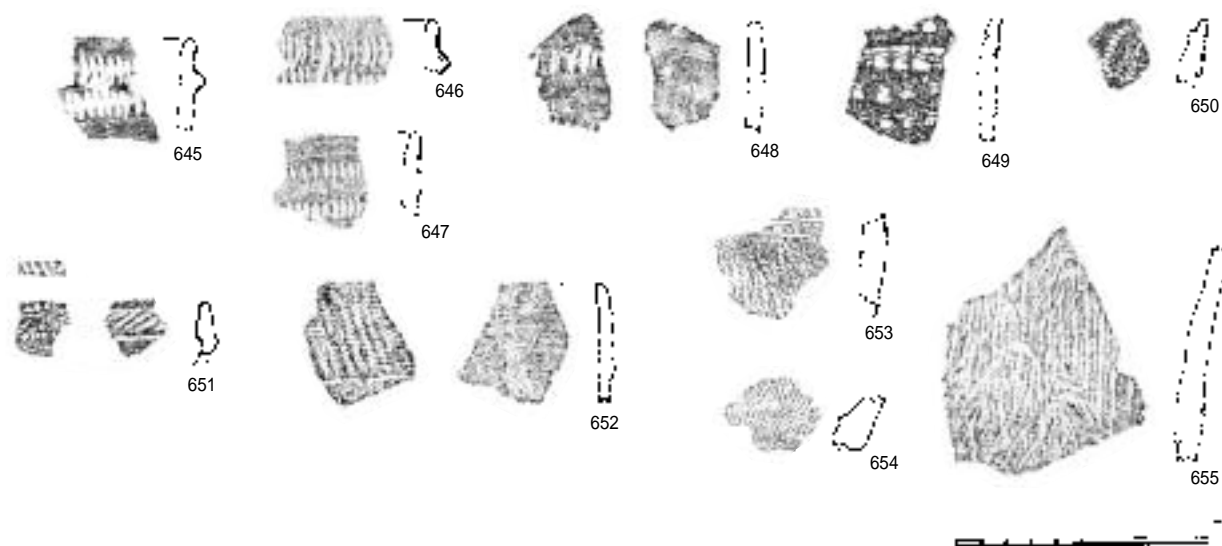


図116 包含層出土縄文土器〔9〕前期・中期〕

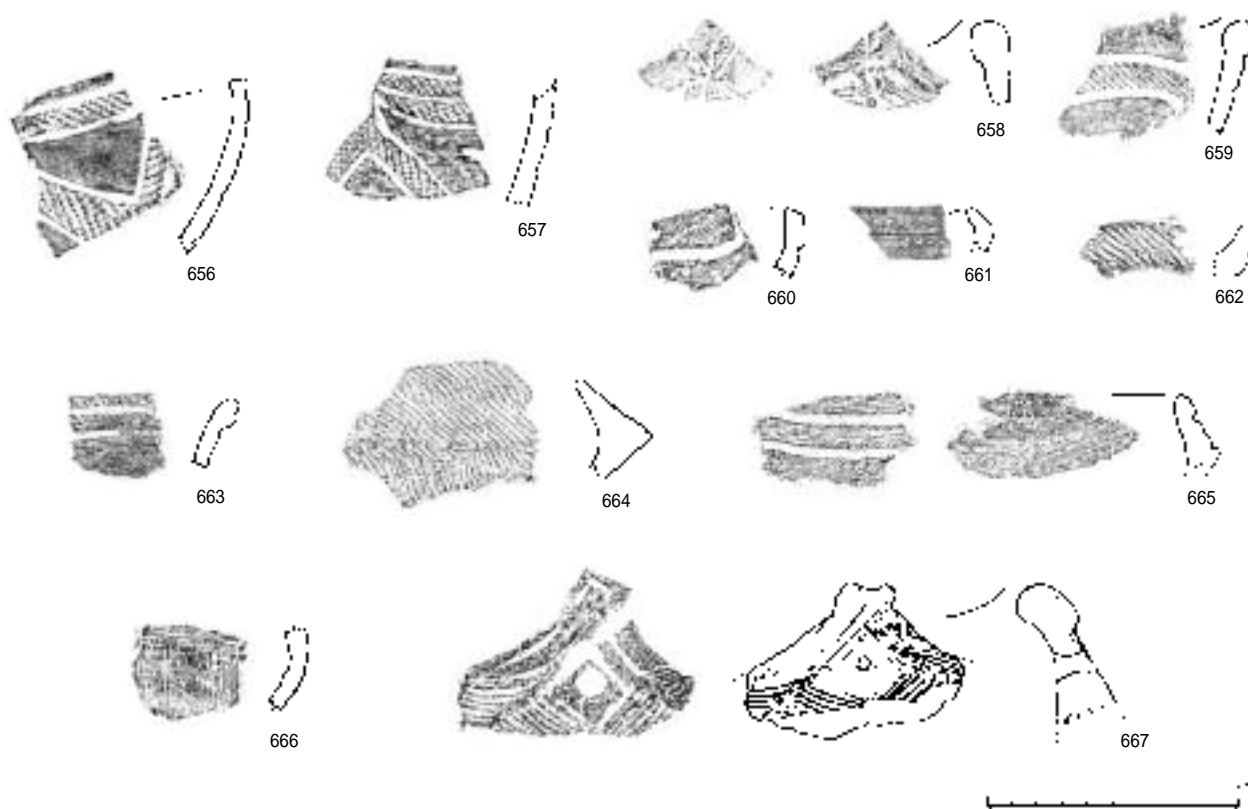


図117 包含層出土縄文土器〔10〕後期初頭～前葉〕

655は無節縄文が施されることから船元式 式と思われる。

後期初頭～前葉（図117、図版75、表54）

中津式または福田K2式に帰属すると思われる磨り消し縄文土器の破片は7点出土しており、すべて掲載した。656は浅鉢形土器。波状口縁をなし口縁端は面取りされる。657は横走る3本沈線の縄文帯と、そこから垂下する2本沈線の楕円文で飾られる。658は波状口縁の波頂部。659は波状口縁で端部は玉縁状を呈する。660は上端が面取りされる波状口縁。661は丁寧なミガキが施されている。破片下端に沈線が見られる。662は底部で、破片上端に横走る沈線が見られる。後期前葉

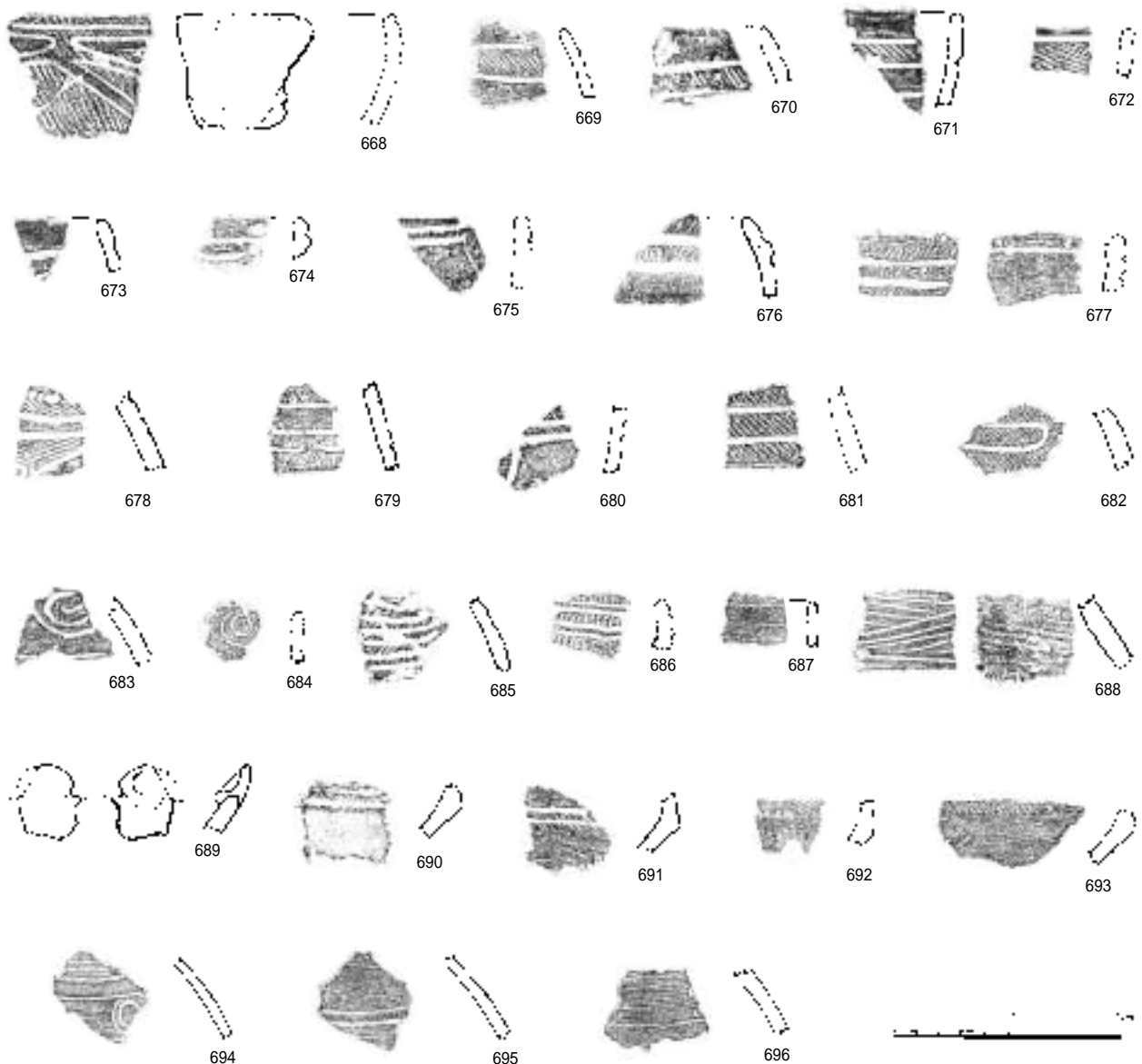


図118 包含層出土縄文土器〔11〕後期中葉〕

の縁帯文土器と思われるものは5点出土し、すべて掲載した。663は口縁端に肥厚帯を形成し、沈線と縄文を施すもの。664は内側に屈曲する口縁で、外面に無節縄文を施す。665も664と同様の器形となる口縁で、外面に沈線、内外に細密条痕が施される。666は条線が施される胴部片。667は口縁端に隆帯が貼り付けられる波状口縁の波頂部で、外面は縄文と沈線で加飾される。縁帯文系の土器と思われるが、非在地系の搬入土器の可能性もある。

後期中葉 (図118・119、図版75、表54・55)

後期中葉の土器は比較的まとまった量が出土しており、有文土器は破片数にして179点が出土している。このうち、いくらかは後期初頭や前葉のものが含まれていると思われるが、大勢に影響があるほどの割合ではないと思われる。出土した資料は、古相の四元式併行期ないしは「沖丈式」(千葉2001)の段階と、新相の彦崎K2式の段階の2時期に分けられる。厳密に両者を区別しきれない部分が多いが、古相の四元式併行期ないしは「沖丈式」の段階のものが中心になる。668～686は沈線と充填縄文で施文されるもの。明確なモチーフをもつ区画文を構成するものも多く見られる。縄文の撚りはR Lのものが多い。676には赤色顔料の付着が見られる。687は口縁端にキザミが施さ

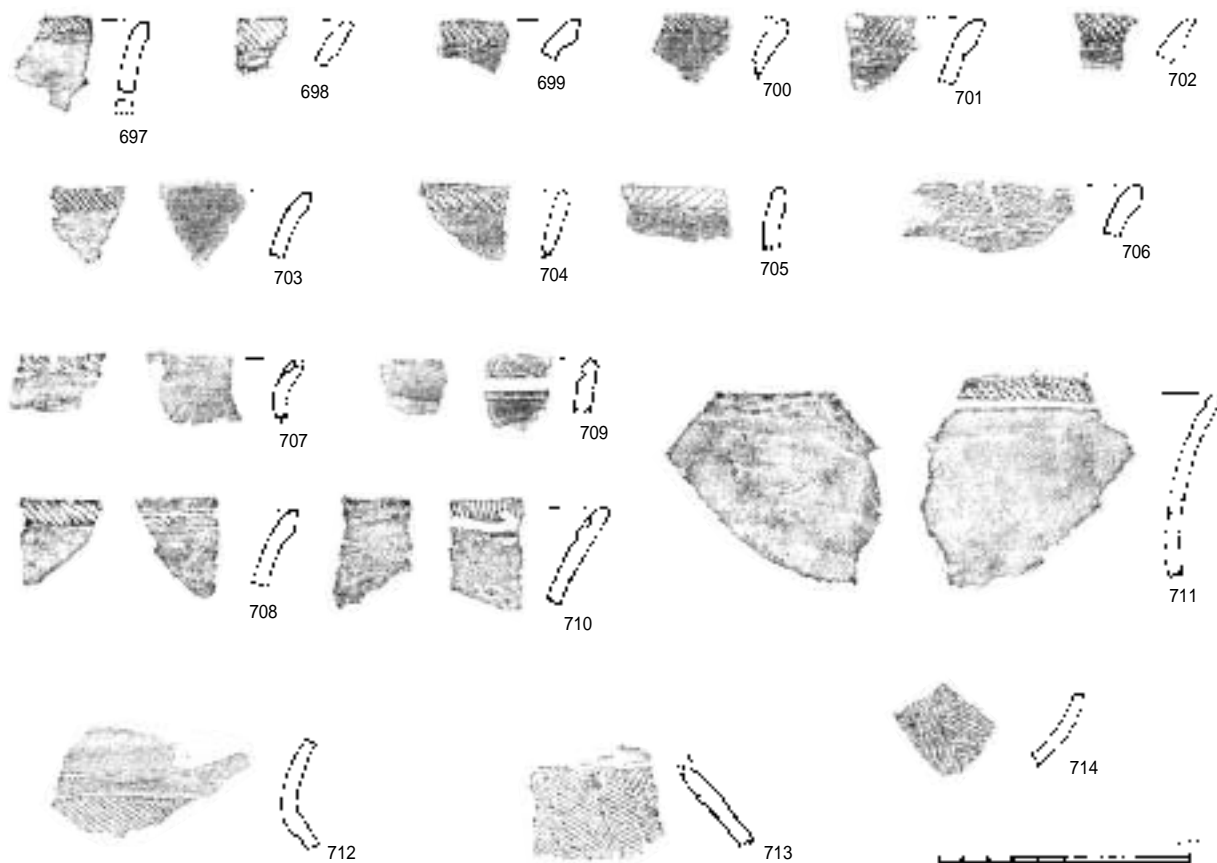


図119 包含層出土縄文土器〔12〕後期中葉〕

れ、口縁下には巻貝による擬縄文が施される。彦崎K 2 新段階のものであろう。688は外面に矢羽根状沈線が施される。これも彦崎K 2 式併行のものであろう。689は浅鉢形土器。689は渦巻形の突起がつけられた口縁部片。690～693は屈曲部の破片で、いずれも屈曲部に沈線や縄文が施文される。694～696は注口土器で、すべて同一個体の可能性が高い。丁寧なミガキで調整され、沈線で渦巻きや横走る多条線が施される。697～714は口縁端部と胴部に縄文を施すのみで、文様モチーフが構成されないもの。697～711は口縁部片。697～707は外面に縄文が施文される。口縁部が肥厚帯状に段をなすものと（697～703・706）、段をなさずに端部を丸く収まるもの（704・705・707）がある。前者が古相のもの可能性が高く、後者が新相のもの可能性が高い。707は内面にも刺突が施される。708～711は内面に沈線と縄文が施されるもの。708・709は口縁外面にも縄文が施されるが、710・711は外面は無文である。口縁部が肥厚帯状の段をなす708が古相のもの、ほかは新相のものであろう。712～714は胴部片。いずれも後期中葉以外のもの可能性もあるがここに一括しておく。712・713は頸部屈曲部を含む破片。713・714は羽状縄文が施されている。

後期後葉（図120、図版75・76、表55）

凹線文土器群を後期後葉とした。破片数にして包含層から32点、遺構内のものも含めると33点が出土している。715～721は口縁内面に横走る沈線を施し、沈線の上側に斜めのキザミを施すもの。口縁端部が面取りされ、断面が箱型になるものがほとんどである。720・721は外面に凹線が施されるが、ほかは無文である。これらはいわゆる「馬取式」にあたる土器である。722～726は外面に複数条の凹線を施すもの。722～724は口縁、725・726は体部。726は胴部屈曲部で、上半には凹線が施されるが、下半は無文である。727～729は口縁が屈曲して立ち上がる浅鉢。727は口縁端と屈曲

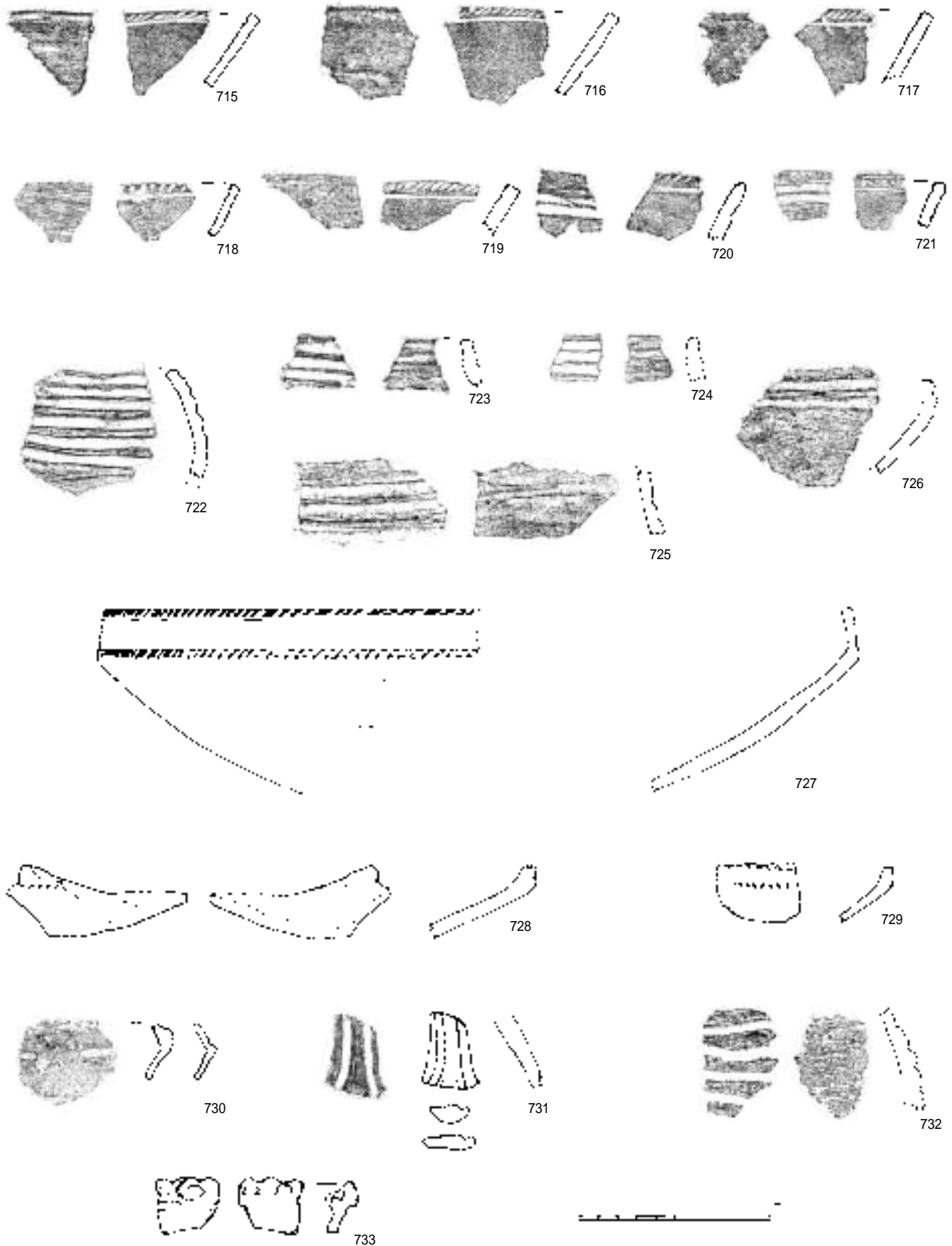


図120 包含層出土縄文土器〔13〕後期後葉ほか〕

部に斜めのキザミ文列が入り、その間に凹線が4条施される。内外面ともミガキが丁寧に施される精製品。728も727に類似した文様構成になるとと思われる。729は屈曲部とその上にキザミが施される。凹線が確認できていないので、中葉のものの可能性もある。730は注口土器の口縁部と思われる

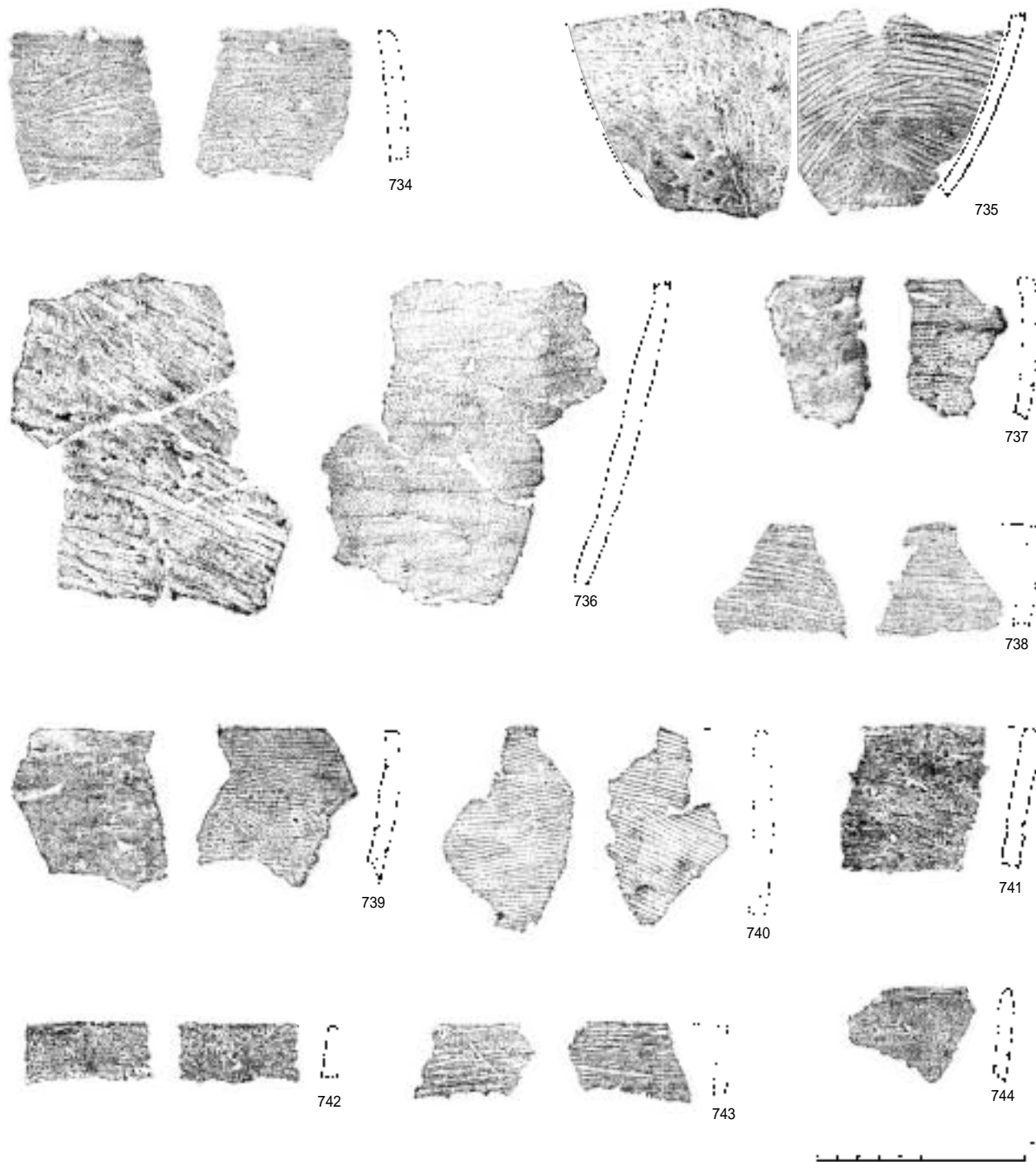


図121 包含層出土縄文土器〔14〕粗製土器〕

る。これらの凹線文土器はいずれも元住吉山 式期のもので、いわゆる「馬取式」の特徴を備えた土器群といえる。

時期不明のもの（図120、図版75・76、表55・56）

731は橋状把手と思われる破片。凹線と凹点が施される。胎土や焼成、色調は凹線文土器に近似するが、凹線文段階には橋状把手は一般的でないと思われるため、あるいは後期前葉のものであるうか。732は外面に非常に深い沈線を施すもの。沈線は押し引き状に深く削り取っているようである。外面はナデ、内面はケズリで調整される。後期中葉のものであるうか。733は径が小さい口縁で、壺形や注口形の器形をなす土器かと思われる。外面には渦巻形を粘土の貼り付けと沈線で表現

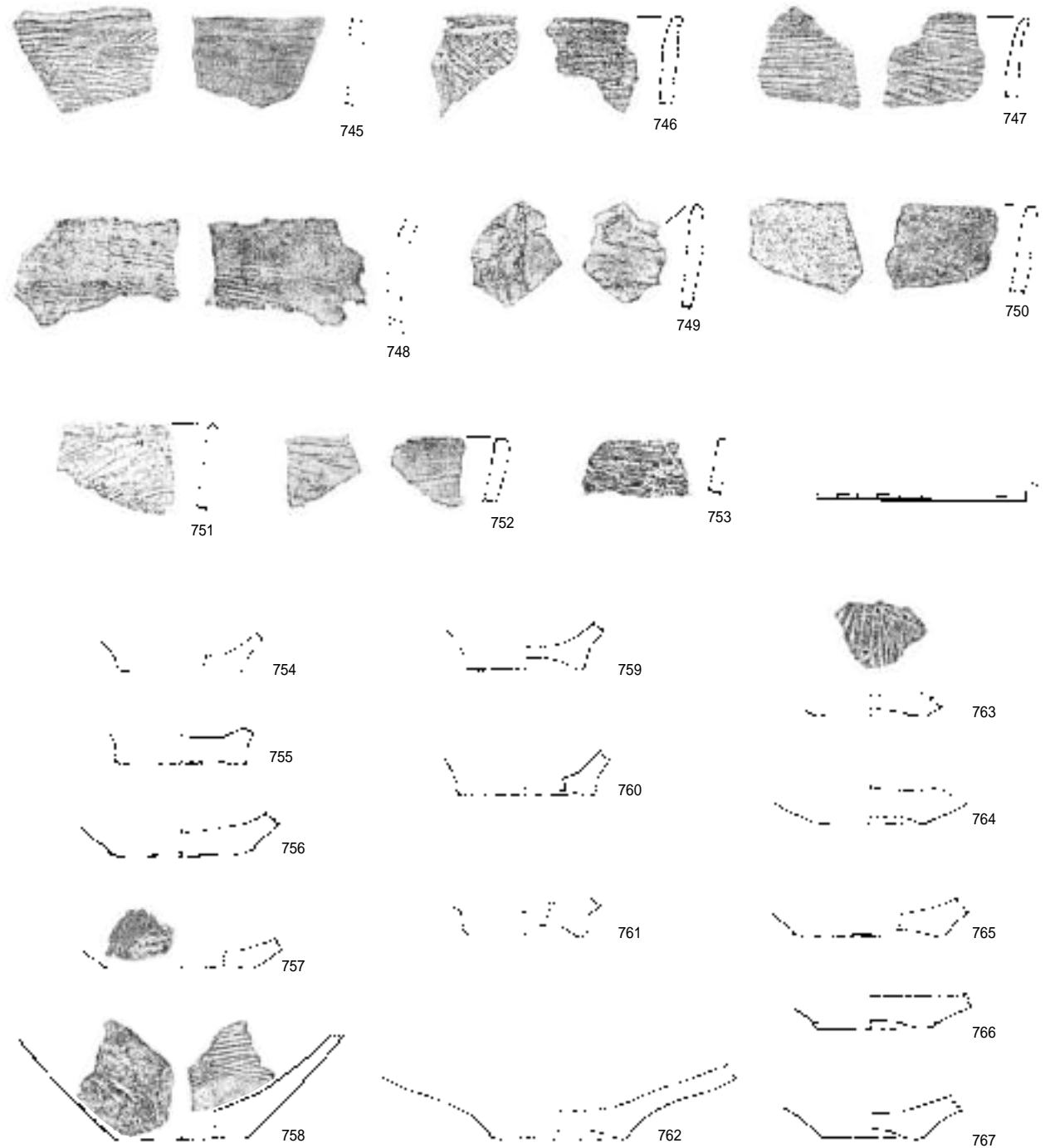


図122 包含層出土縄文土器〔15〕粗製土器・底部〕

する突起と円孔の入る瘤状突起がつくられ、内面にも円孔が施される。内外面ともナデで丁寧に調整される。

粗製土器・底部（図121・122、図版76・77、表56）

粗製土器として分類したものは合計1997点出土している。小片が多く、遺存状態の良好な個体は少なかった。そのうち、口縁部片や残りのよい体部片を掲載した（734～753）。調整は、条痕、ケズリ状調整、ナデ、ミガキなどが内外に組み合わせて施される。概して、内面のほうが平滑に仕上がる調整が選ばれることが多いようである。754～767は後期土器の底部である。754～758は平底、759～767は凹み底。

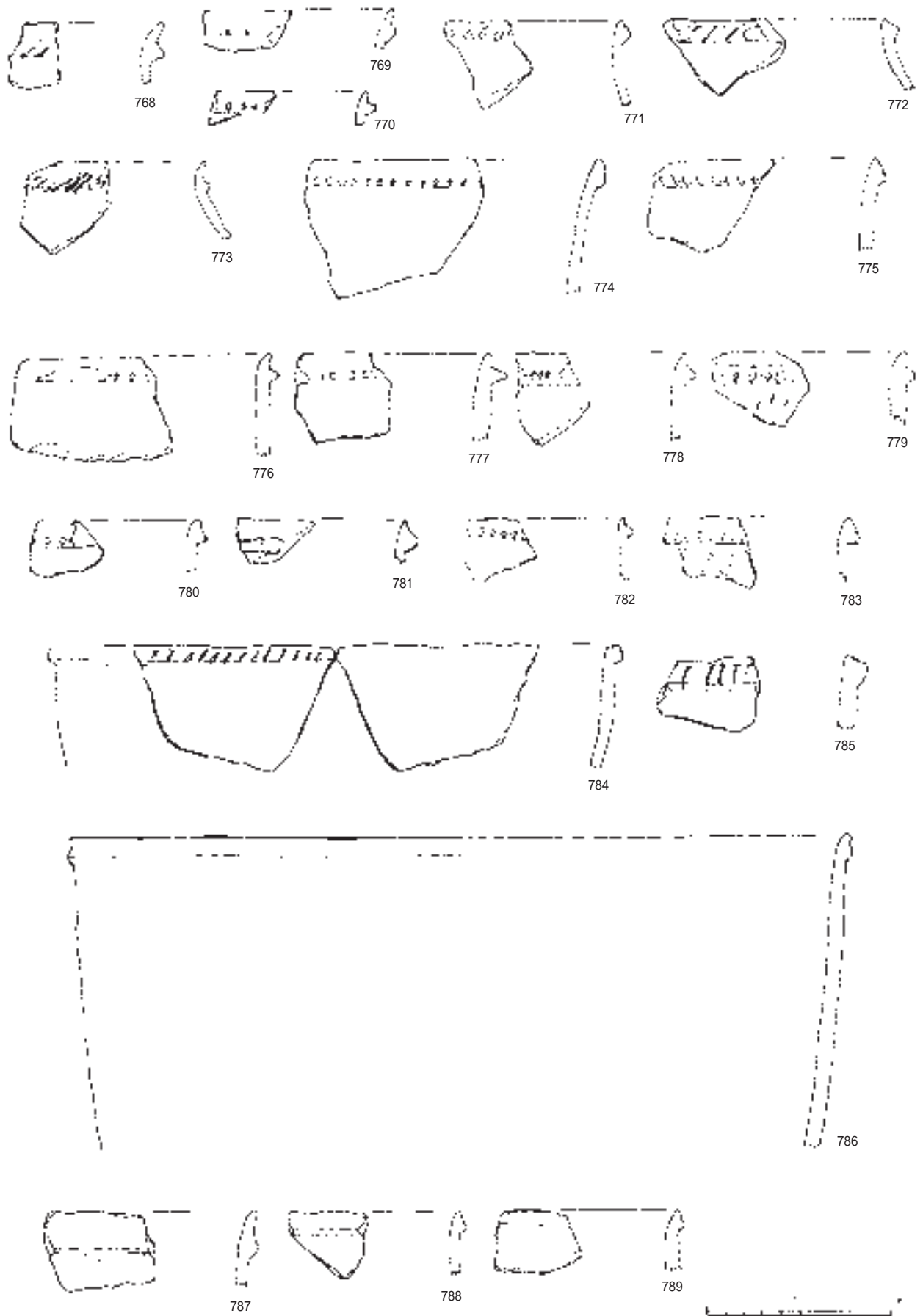


图123 包含層出土突帯文土器(1)

突帯文土器 (図123・124、図版78、表56・57)

突帯文土器は包含層から57点出土している。768～785は刻目突帯をもつ深鉢。768～772は屈曲形の深鉢で、突帯は口縁端部から下がった位置をめぐる。口縁は、768～771が外反し、772は内傾している。773は突帯より上方で口縁端部を外側に屈曲させており、器形からいわゆる浅鉢変容壺と思われるが、刻目突帯をめぐるため、深鉢変容壺の特徴も兼備していると捉えられる資料である。774・775は屈曲形の深鉢で、突帯が口縁端部に接してめぐる。口縁は緩やかに外反する。776～781は砲弾形の深鉢で、口縁部が突帯付近でわずかに外反する。このため一部屈曲形が含まれている可能性もある。突帯は口縁端より下がった位置をめぐる。779の外面には突帯にキザミを施す際についたと見られる線状の傷痕が見られる。781の突帯には棒状工具を下方から押圧してキザミがつけられる。782は砲弾形の深鉢で、突帯は口縁端部からわずかに下位をめぐる。783～785は砲弾形で、突帯は口縁端部に接してめぐる。783の外表面は突帯上のキザミの施文時に同時についたキザミが見られる。785は半裁竹管状の工具で非常に細かいキザミを施している。786～799は無刻目突帯文土器の深鉢で、器形はいずれも砲弾形である。786～790・793・794は口縁部が突帯付近でわずかに外反するもので、一部屈曲形の器形を含む可能性がある。突帯は口縁端部から下がった位置をめぐる。793・794は口縁端部が突帯の上で外反する。796～798は突帯が口縁端部から下がった位置をめぐる。797・798は口縁上端が面取りされている。791・792・795・799は突帯が口縁端部に接してめぐる。791はいわゆる垂れ下がりの突帯であるが、突帯の中央部を強くなでており、断面形は弧状を呈する。口縁端部が受け口状になっている。

これらは、口縁端の処理の仕方、刻目の形態、器面調整からみて、濱田編年の「突帯文 期(古)」

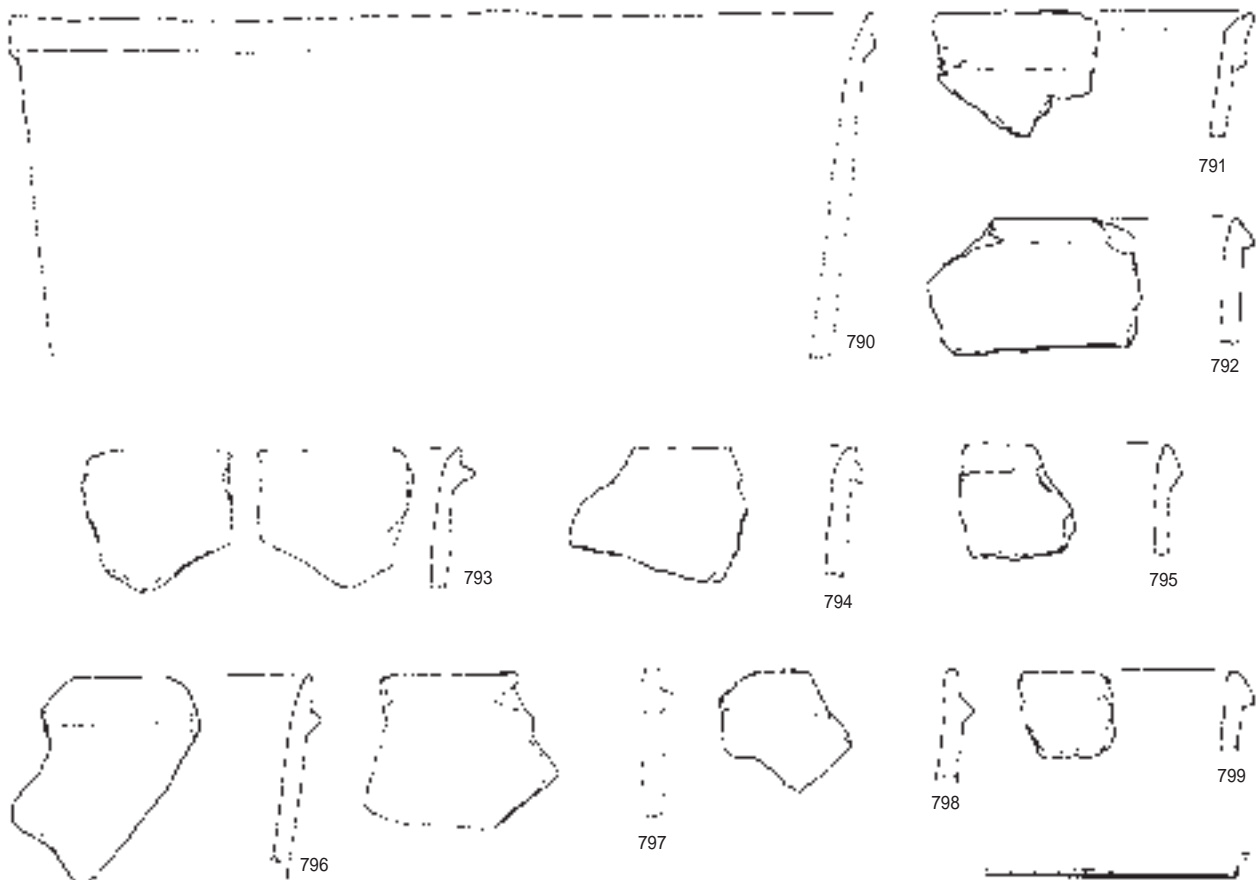


図124 包含層出土突帯文土器(2)

(濱田1999) から弥生前期中葉にかけてのものと思われる。

(北)

4. 石器 (図125～152、図版79、表11～13・59・60)

概要

石器は包含層から5885点、遺構内のものも含めると6010点出土している。縄文時代から弥生時代にかけてのものと思われる。後述するが、遺跡内での分布や石器の形態、石材構成から考えて、縄文時代に帰属するものが主体となると思われる。表に器種・石材別の組成を示した(表11)。器種の内訳は、剥片・碎片が5344点で全体の89%を占め、石核・ブランクが94点で約2%、残りが石器器種で約9%となる。石器器種は楔形石器が186点、石鏃が148点出土し、この2器種が組成上の主体となるほか、スクレイパーも多く57点が出土している。石材は黒曜石が主体で約93%を占め、ほかに硬質安山岩が約6%の割合を占めるほか、その他の石材が約1%ある。いくつかの資料で蛍光X線分析による石材産地推定を行ったところ、黒曜石は隠岐島久見産および隠岐島箕浦海岸産、硬質安山岩は香川産サヌカイトの可能性が高いとの結果が出ている(第6章第6節参照)。黒曜石のうち隠岐久見産とされたものの肉眼観察上の特徴は、漆黒色のもの、やや透明度の高い黒色のもの、やや青灰色がかかるもので、隠岐箕浦海岸産とされたものはやや白みがかかり表面が梨肌状を呈するものであった。分析していないほかの資料では、前者の特徴をもつものが圧倒的多数を占め、後者はわずしか見られない。肉眼観察による特徴差でしかないので確実ではないが、本遺跡の黒曜石は久見産が中心をなす可能性が高い。硬質安山岩は分析を行っていないものも含めて肉眼観察では違いは認められない。

分布

石器の分布の概要を表すために、グリッドごとに器種・石材別の組成を示した(表12・13)。遺構内出土の石器組成もあわせて掲載している。ただし、遺構内出土のものでも遺構に伴わないと判断したもの(第1遺構面の遺構内出土など包含層の巻上げや混入の可能性の高いもの)はそのグリッドの包含層の石器数に加算している。また、グリッドごとに出土量を階級分けして表した分布模式図も示している(図125～127)。これらを見ると、広い範囲に石器の分布が認められる。量的なまとまりをある程度もつのはA区、B区東部、C区北東部、E区である。なかでも、C2・D2・D3グリッドを中心とするA区東部と、G3・H3・I2グリッドを中心とするB区東部からC区

表11 石器石材別組成表

器種 石材	石鏃	石鏃未製品	スクレイパー	石匙	楔形石器	楔形石器削片	石剣	石鏃	加工痕ある剥片	使用痕ある剥片	剥片	碎片	石核	ブランク	原石	打製石斧	磨製石斧	石胞丁	不明磨製石器	石錘	敲石	磨石	砥石	計
黒曜石	109	14	52		169	6		1	50	36	2869	2206	68	22	1									5603
硬質安山岩	39	4	5	2	16	1	1	1	4		211	55	2			1								342
粗粒安山岩																2	1			31	10	3		47
頁岩											2					1			1					4
細粒花崗岩																		1					2	3
水晶					1									2										3
粘板岩																		1					1	2
瑪瑙											1				1									2
緑色片岩																	2							2
蛇紋岩																	1							1
ホルンフェルス																				1				1
計	148	18	57	2	186	7	1	2	54	36	3083	2261	70	24	2	4	4	2	1	32	10	3	3	6010

第5章 第3調査地の調査

表12 グリッド別石器組成表(1)

グリッド	石材	AH	AHBk	S	TS	PE	PESp	Pt	Dr	RF	UF	F1	Ch	Cr	Bk	RM	CAx	PAx	Si	PS	SW	HS	GS	WS	計	
C1	黒曜石					1				1		8													10	
	硬質安山岩								1																	1
C1・D1	黒曜石	2		1		2				3		31														39
	硬質安山岩											2														2
C2	黒曜石	3	1	6		11					4	154	143	3	2											327
	硬質安山岩	2		1								15	1	1												20
C4	黒曜石					1						9	5													15
C5	黒曜石					1																				1
D1	硬質安山岩										1	1	28	36												67
	黒曜石					2						4	5													9
D2	黒曜石	5	2	4		9				1	2	240	93													356
	硬質安山岩	3										15														18
D3	粗粒安山岩																					1				1
	黒曜石	3		4		1				1	2	57	15													83
D3・E3	硬質安山岩	3	1	1						2		7	1													15
	黒曜石	2		1		2				2	1	53	79	1												141
D3・E3	硬質安山岩	1										8	4													13
	緑色片岩																		1							1
D4	黒曜石					1						8	5													14
	ホルンフェルス																					1				1
D5	黒曜石			1								3	3									1				7
D6	黒曜石					2						7	1													10
D8	硬質安山岩											1														1
D8	粗粒安山岩																					1				1
E1	黒曜石			1	1							12	10													24
E2	黒曜石	6		2		6				2	1	147	118	3	2			1								287
	硬質安山岩	3				1						8	1					1					1	1		14
E2	粗粒安山岩																					1	1			2
	頁岩											1														1
E3	黒曜石	1										10	4													15
	硬質安山岩											1														1
E4	黒曜石					1						6	4													11
	粗粒安山岩																		1							1
E5	黒曜石	2		2							1	22	29	1												57
	硬質安山岩			2								4														6
E6	黒曜石	1										6	10													17
	黒曜石									1		14	1													16
E7	硬質安山岩					1						2														3
	粗粒安山岩																					1				1
F1	黒曜石								1			21	35													57
F2	黒曜石					2						2	3	2												9
F3	黒曜石	2	1			1						18	27	1									4			50
	粗粒安山岩																									4
F4	黒曜石					1						3														4
	硬質安山岩					1																	1			1
G1	粗粒安山岩																					1				1
	黒曜石	3				6				2	2	105	83	6	3											210
G1・G2	硬質安山岩											1														1
	黒曜石			1	1																					2
G2	黒曜石	2	1	1		1				1	1	48	44	6	1											106
	硬質安山岩											2														2
G2	粗粒安山岩																					5				5
	黒曜石	11	1	4		7	1			1	2	124	199	10	1											361
G3	硬質安山岩	3		1		1						11														16
	粗粒安山岩																		1				10	1	1	13
G4	黒曜石	1		1		2						56	21	4												85
	硬質安山岩					1						1														2
G4	粗粒安山岩																					2				2
	黒曜石	1										9	3										2			13
G8	黒曜石										1															1
H1	黒曜石									1		17	7													25
	硬質安山岩												1													1
H2	黒曜石		1			1						23		1												26
	硬質安山岩					1																				1
H3	黒曜石	7	2	3		7				3	5	205	132	10	3											377
	硬質安山岩	1										3														4
H4	粗粒安山岩																					2				2
	黒曜石	1				2					1	78	69	5	1											157
H4	硬質安山岩											5	1													6
	黒曜石	1		1		1						9	30													42
H5	硬質安山岩														1											1
	黒曜石											1														1
H7	黒曜石																									1
H8	黒曜石										1															2
I1	黒曜石	3				2				4		80	40	1												130
	硬質安山岩											4														4
I1・I2	黒曜石	1										9														10
	黒曜石	8		2		9				2	1	453	818		2											1295
I2	硬質安山岩	1										22	33													56
	黒曜石	2		1		6				2	1	71	13													96
I4	黒曜石			1		2						40														43
	黒曜石	1		1		2						5														9
J8	硬質安山岩	1										2														3
	黒曜石											1	2													3
L5	黒曜石																									1
L6	黒曜石					1																				1
L7	黒曜石	1										2	1	1												5
	硬質安山岩					1																				1
L7・L8	黒曜石											1														1
	硬質安山岩	1										1														2

表13 グリッド別石器組成表(2)

グリッド	石材	AH	AHBk	S	TS	PE	PESp	Pt	Dr	RF	UF	F1	Ch	Cr	Bk	RM	CAx	PAx	Si	PS	SW	HS	GS	WS	計	
L8	黒曜石											1													1	
	硬質安山岩	1																								1
L10	黒曜石											1														1
	水晶														1											1
M6	黒曜石					3					1	5	1													10
	硬質安山岩					1																				1
M7	黒曜石	3				3				3		55	4													68
	硬質安山岩	3			1	3						29														36
	瑪瑙											1														1
	粗粒安山岩																						1			1
M8	黒曜石	2				1	1					24		1									1			29
	硬質安山岩									1		3														4
	細粒花崗岩																			1					1	2
	粘板岩																			1						1
M8・M9	黒曜石	1										1														1
	硬質安山岩											1														1
M9	黒曜石	2				6					1	18														27
	硬質安山岩	2										1														3
	細粒花崗岩																							1		1
M10	水晶					1																				1
	黒曜石			1		2						9														12
	硬質安山岩											2														2
	頁岩																				1					1
	蛇紋岩																			1						1
M10・N10	黒曜石	1				2	1					2														6
	硬質安山岩	1										3														4
N6	黒曜石											1			1											2
	硬質安山岩	1		1							1	22														32
N7	瑪瑙											2														4
	黒曜石	3		2		4						16	1	2			1									28
	硬質安山岩	2				1						12														15
N8	緑色片岩																									1
	黒曜石	1				3						2							1							6
N9	硬質安山岩											1														1
	黒曜石	1		1		5				1		4														12
N10	硬質安山岩	1				1				1		3														6
	水晶															1										1
N11	黒曜石					1						2														3
	黒曜石	2				2						6	1	1												12
O7	硬質安山岩	1				3						1														5
	黒曜石	1				4				1		14				1										21
O8	硬質安山岩							1				2														3
	黒曜石											1														1
O9	黒曜石											5														5
	黒曜石											1														1
O10	頁岩											1														1
	黒曜石					1						4														5
O11	硬質安山岩							1				2														3
	粗粒安山岩																							1		1
	黒曜石											1	3													4
P8	黒曜石										1	3														4
P9	黒曜石											1	1	1												3
	硬質安山岩											1														1
P10	黒曜石	1				1	1				1	6														10
	黒曜石					2	1			1		10		1												15
P11	硬質安山岩	2				2						4	1										1			10
	粗粒安山岩																		1							1
Q10	黒曜石											1														1
	黒曜石	6	1	6		13				6	3	158	46	1	4	1			1							245
A区一括	硬質安山岩	1	1									12	6													20
	頁岩																			1						1
B区一括	黒曜石	3	1	1		7	1			3	2	80	35	3												136
	硬質安山岩	2										4	1													7
	粗粒安山岩																					1				1
C区一括	黒曜石	3		1		8				5		115	13	2									1			147
	硬質安山岩											1														1
D区一括	粗粒安山岩																						1			1
	黒曜石		1			1				1		18				1										22
E区一括	硬質安山岩	3										5														8
	粗粒安山岩																						1			1
堅穴住居4	黒曜石	1				1						3														5
	粗粒安山岩																						2	1		3
堅穴住居6	粘板岩																								1	1
	粗粒安山岩																								1	1
堅穴2	粗粒安山岩																									1
	黒曜石											60	21	1												83
土坑22	硬質安山岩					1						3														3
	粗粒安山岩																						2			2
土坑24	黒曜石											1														1
土坑25	黒曜石	1										3	1													5
土坑26	黒曜石				2		2				1	17	1													22
	硬質安山岩	1																								1
土坑28	黒曜石											1														1
計		148	18	57	2	186	7	1	2	54	36	3083	2261	70	24	2	4	4	2	1	32	10	3	3	6010	

凡例 器種略号

AH：石鏃 AHBk：石鏃未製品 S：スクレイパー TS：石匙 PE：楔形石器 PESp：楔形石器削片 Pt：石剣 Dr：石錐 RF：加工痕のある剥片 UF：使用痕のある剥片 F1：剥片 Ch：砕片 Cr：石核 Bk：ブランク RM：原石 CAx：打製石斧 PAx：磨製石斧 Si：石庖丁 PS：不明磨製石器 SW：石錘 HS：敲石 GS：磨石 WS：砥石

北東部にかけてが特に出土量が多く、大きく見て2箇所の石器の集中分布域がある(注:ただしI2グリッド出土石器のうち841点は竪穴住居6の検出・掘り下げ時の排土をフルイにかけて回収したものである。これらは遺構に流入した包含層遺物と判断して加算した。したがって、他のグリッドと回収率が大きく異なっているため単純にこの数字では比較できない。手掘りでの回収は510点である)。この分布の状況は、縄文土器の分布状況(表10、図105~107)と一致することから、2つの石器集中域の石器の大半は縄文時代のものと考えられ、特に土器の出土量のまとまる早期末~前期初頭や後期のものが中心となる可能性が高い。この二つの時期の土器分布と比較すると、石器分布のあり方は早期末~前期初頭土器の分布のあり方に近い。もちろん、早期末~前期初頭土器と後期土器および粗製土器は排他的な分布とはならないので明瞭には区別できないが、石器の出土量をグリッド単位で見えていくと、早期末~前期初頭土器の出土量にほぼ比例する場合が多い。E区は縄文土器の出土が極めて少ない一方で、弥

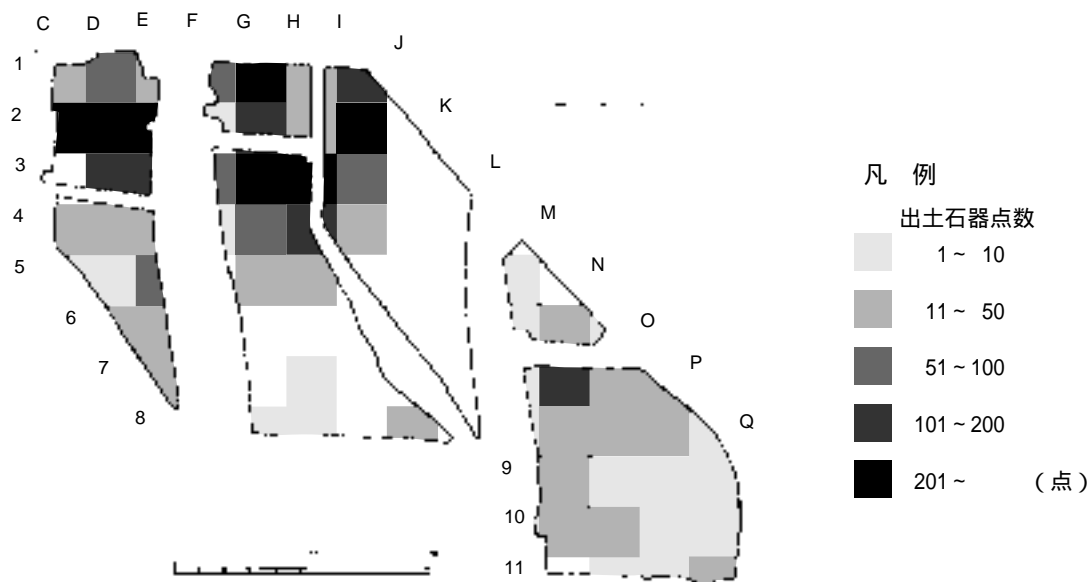


図125 石器グリッド別出土量模式図〔1〕出土石器全点〕

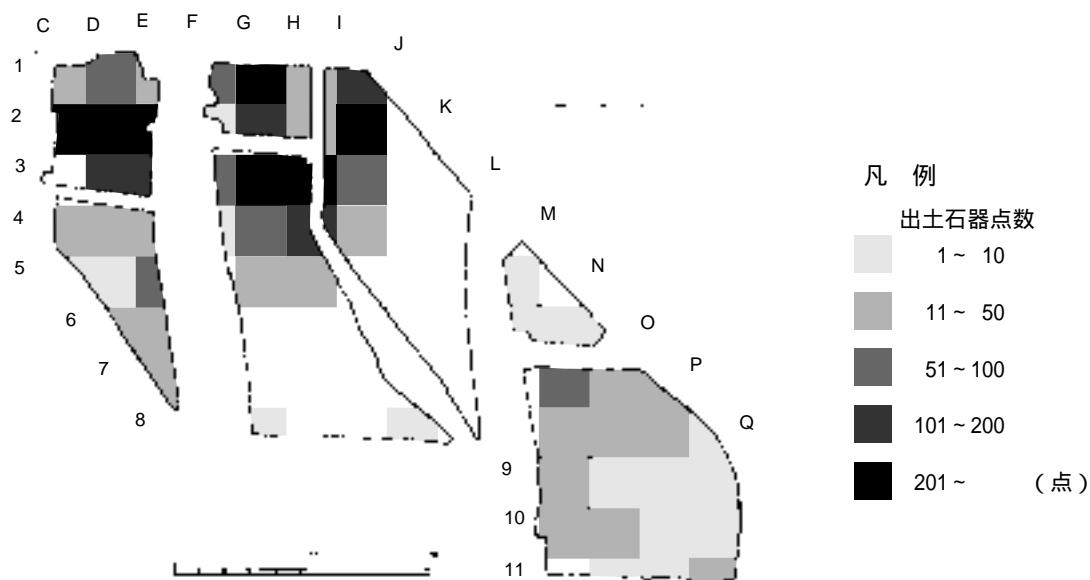


図126 石器グリッド別出土量模式図〔2〕黒曜石製石器〕

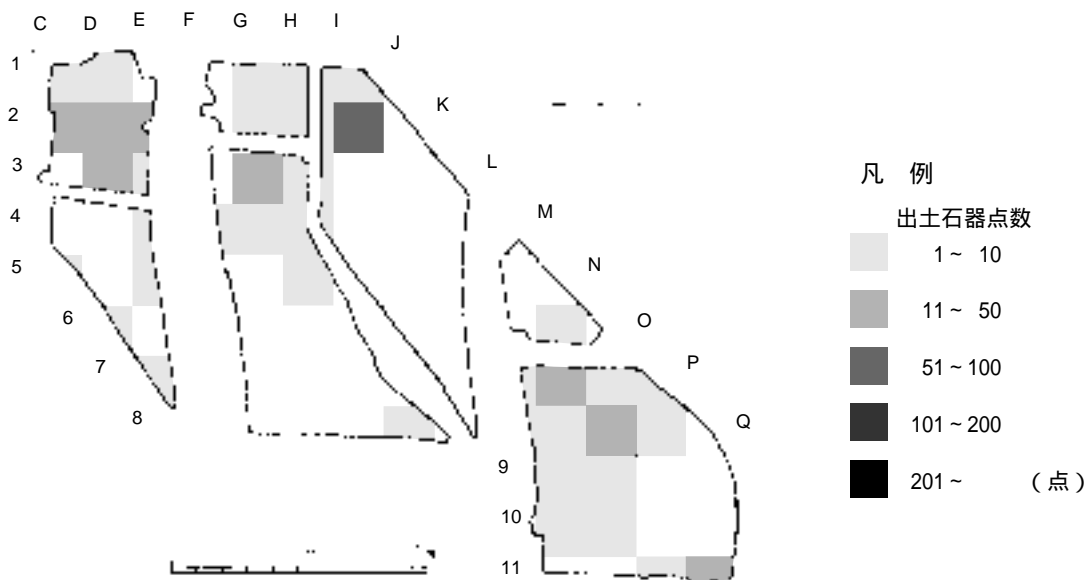


図127 石器グリッド別出土量模式図〔3〕安山岩製石器〕

生時代の遺構が集中し、包含層からも弥生土器が多量に出土していることから、石器も弥生時代に帰属するものが多い可能性が高い。また、E区は石器の絶対量が少ないにもかかわらず硬質安山岩が多く出土しており、E区出土石器全体の4分の1ほどが硬質安山岩で占められる。他の区域では黒曜石がほぼ同じ比率で主体を占め、硬質安山岩の分布も偏りは見られない。石器器種別の分布も、A・B・C区とD・E区で異なっており、後者では出土量に比して器種（石鏃・楔形石器）の比率が高い。石材構成や器種構成の差も帰属する時代の違いを反映している可能性が高いだろう。

石鏃（図128～133、表59）

全部で148点出土している。A～C区で108点、D・E区で40点出土しており、前述のように後者では全体の出土量に比べて組成率が高い。黒曜石製が109点、硬質安山岩製が39点で、石器全体の石材組成率に比して硬質安山岩の割合が高い。特に、D・E区では硬質安山岩製が多く、18点出土している（D・E区出土石鏃の45%が安山岩製。また、D・E区出土安山岩製石鏃が安山岩石鏃全体に占める割合は46%となる）。

118点を掲載した。S30～S113が黒曜石製である。平面形と基部形態で分類した。量的に主体をなすのは抉りの深い凹基式である。平基式や抉りの浅い凹基式はE区出土のものが目立つ。S30～S40は長さが短く平面形が正三角形に近い、平基式ないしはきわめて浅い凹基式のもの。すべてE区出土。S34～S40は長さが短く正三角形に近い、やや浅い凹基式のもの。E区出土が多く4点ある。S41～S43は幅広で抉りが極めて深いブーメラン形のもの。A・B区出土。S44～S58は長さがやや長く、抉りの深い凹基のもの。ほとんどがA～C区出土で、E区出土は3点のみである。S59～S61は深い凹基で、先端をすぼめて尖らせるもの。S62～S64は基部中央に部分的に深い抉りを入れるタイプ。S65～S69は長さが長く、浅い凹基のもの。E区のもの2点ある。S70～S78は長さが長く、やや浅い凹基のもの。S79～S94は長さが長く、抉りの深い凹基式。ほとんどがA～C区出土で、E区出土は3点のみ。S95～S101は細長い平面形をなすもので、抉りのやや浅いものと深いものがある。E区出土は1点のみ。S102～S104は木葉形の凸基式のもの。いずれも

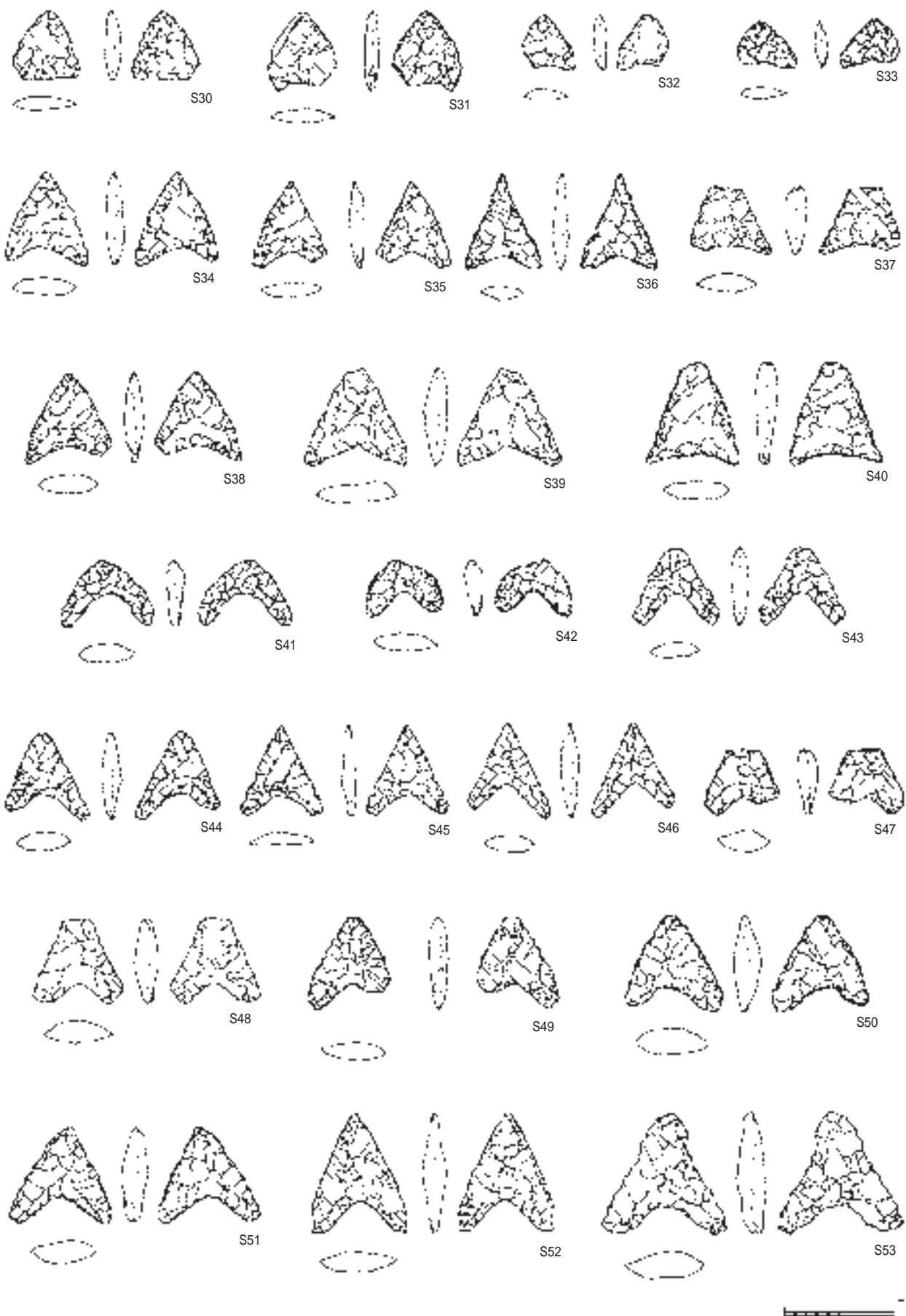


图128 包含層出土土器〔1〕石鏃

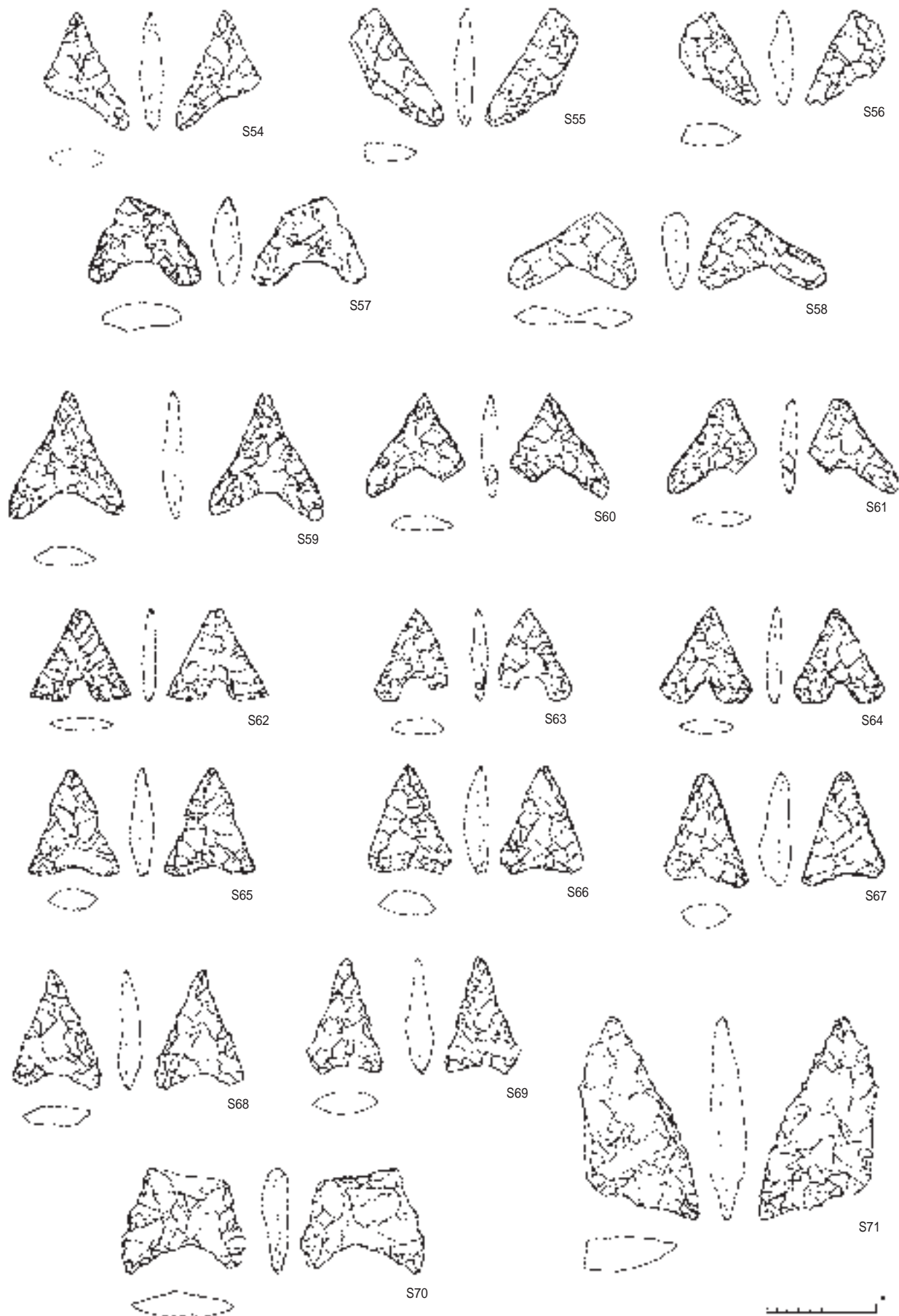


图129 包含層出土土器〔2〕石鏃

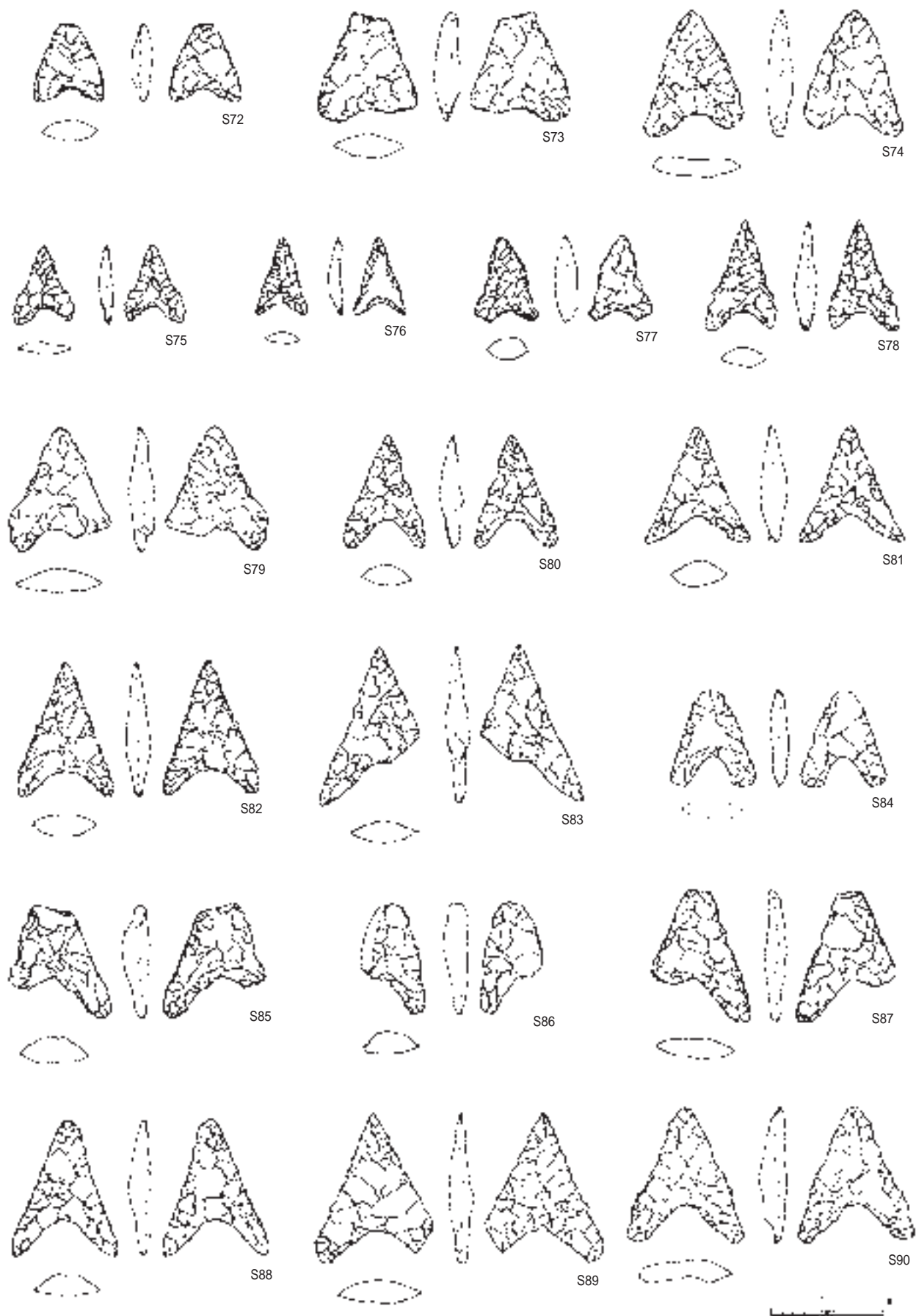


图130 包含層出土土器〔3〕石鏃

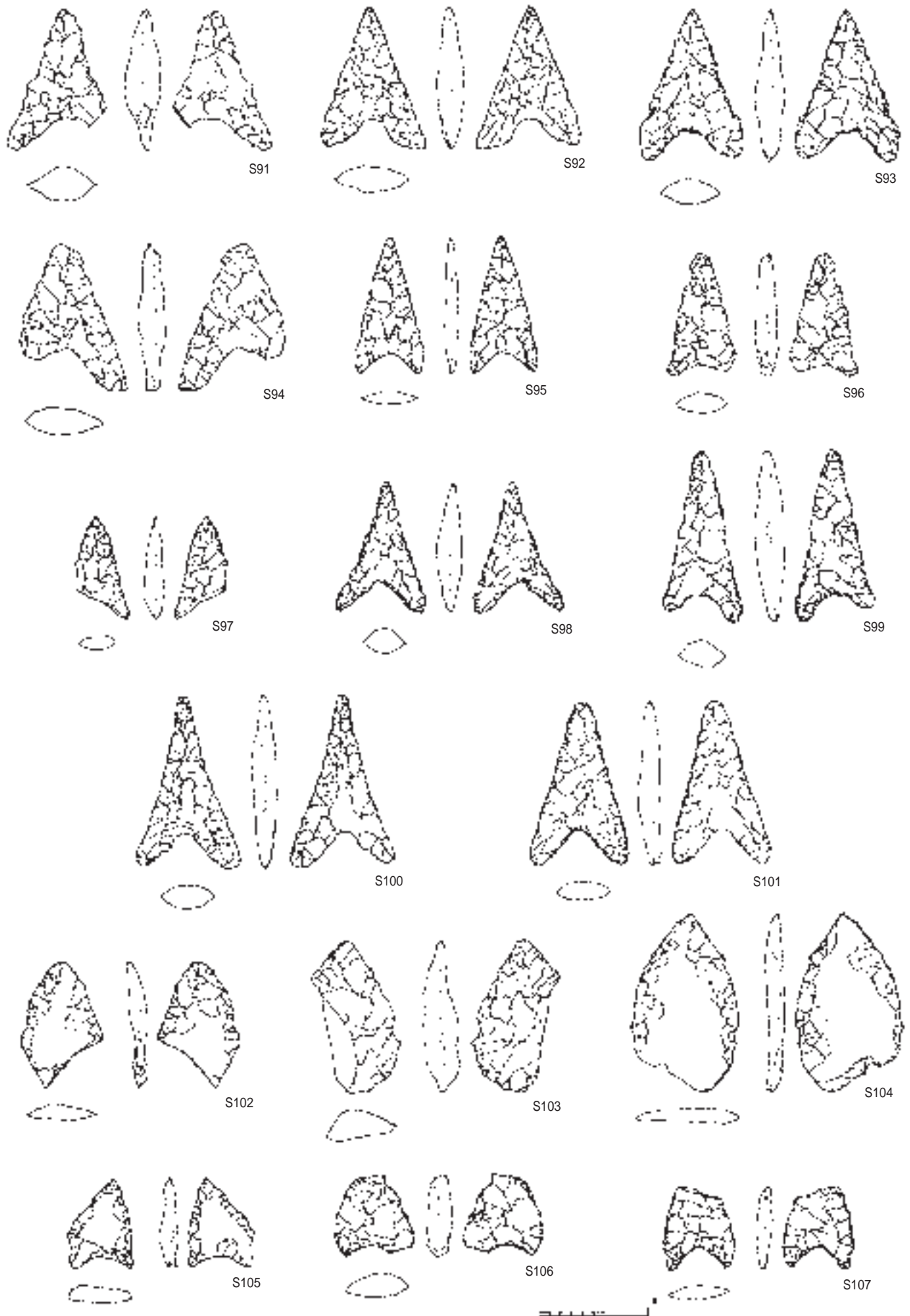


図131 包含層出土土器〔4〕石鏃

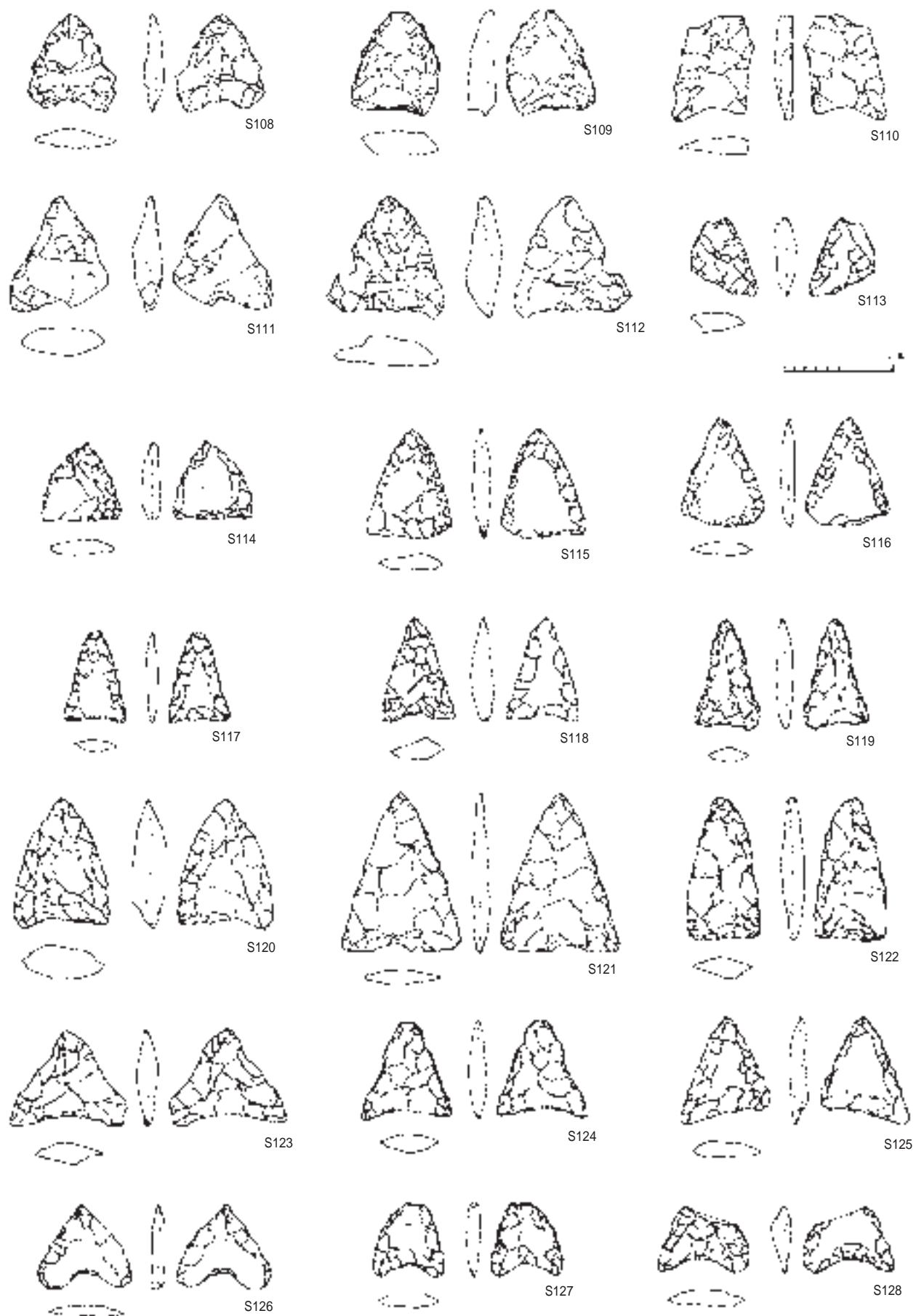


図132 包含層出土土器〔5〕石鏃

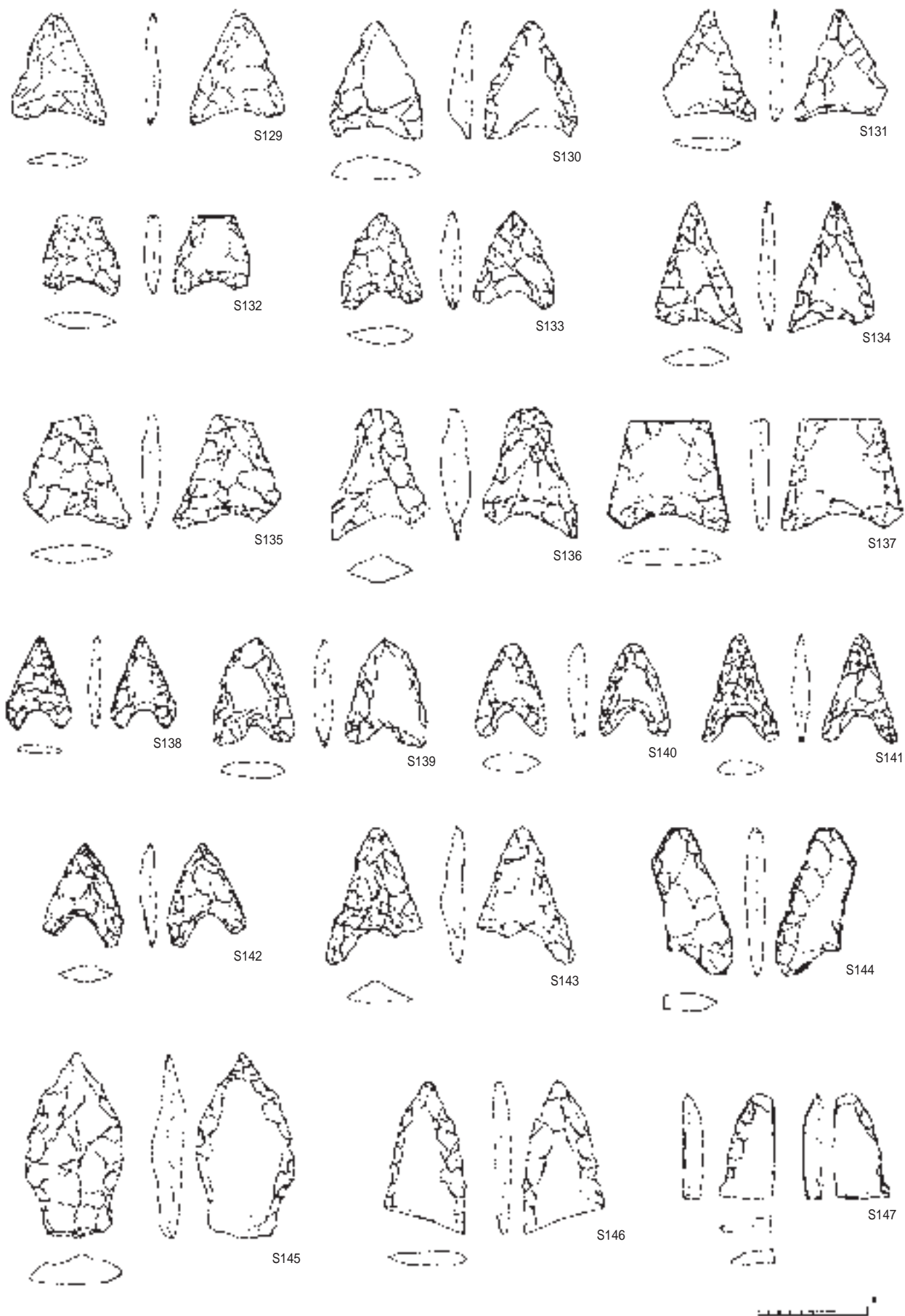


図133 包含層出土土器〔6〕石鏃

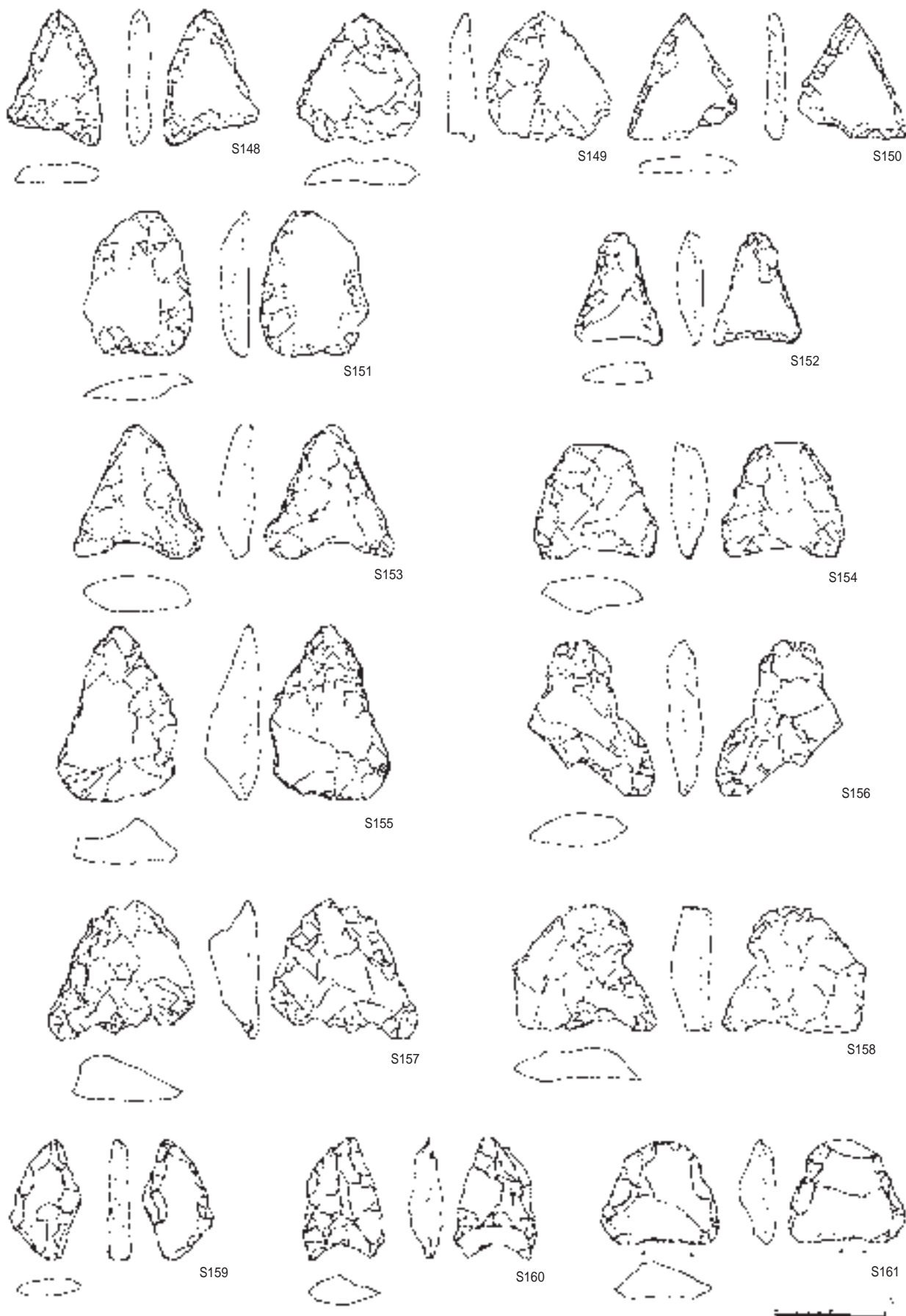


図134 包含層出土土器〔7〕石鏃未製品〕

A区出土。S105～S113は未製品の可能性があるものや欠損品である。

S114～S147が硬質安山岩製である。平基式や浅い凹基式が主体となる。前述のようにD・E区出土の割合が多い。特に平基式、浅い凹基式は大半がD・E区出土のものである。S114～S122は平基式のもの。6点がD・E区出土。S123～S137が浅い凹基式で、11点がD・E区出土。S138～S144は深い抉りの凹基式。いずれもA～C区出土。S145は有茎鏃ないしは木葉形鏃の未製品。S146・S147は欠損し形態不明。S147は先端が磨かれている。

石鏃未製品（図134、表59）

全部で18点出土している。黒曜石製が14点、硬質安山岩製が4点である。S148～S158が黒曜石製、S159～S161が安山岩製。調整が進行したものは素材形態が分からないが、薄手の剥片を素材として周辺から調整を加えるものが多い。S153は両極打撃痕がみられ、周縁もつぶれている。両極打法で調整を行ったか、楔形石器を素材としているかのいずれかと思われる。

スクレイパー・石匙（図135～137、表60）

スクレイパーは57点（黒曜石製52点、安山岩製5点）、石匙は2点（安山岩製）出土している。スクレイパーを22点、石匙を2点掲載した。S162～S180は黒曜石製スクレイパー。S162～S169は大型の剥片を素材とするもの。S168以外にはすべて原礫面の付着が見られる。S162は分厚い縦長剥片を素材とするもの。S163・S165は外面に原礫面を大きく残す横長剥片背面の打面側に刃部を作出する。S166・S167も横長剥片素材。S167は素材主剥離面に刃部を作出する。S168は素材両面に調整を加えて刃部を作出する。調整は素材主剥離面側が顕著である。S170は切断剥片を素材とする。刃部は素材主剥離面に作られる。S171は両面に調整を著しく加えて成形する。S172は打面が原礫面の剥片の腹面に細かい調整を加えたもの。S174～S178は小型の剥片を素材とする小型スクレイパー。主剥離面側に調整を加えて刃部を作るものが多い。S179・S180は楔形石器を素材としている。S181・S182は安山岩製の石匙。ともに剥片素材で、S181は調整が比較的奥まで入るが、S182は調整がほぼ周縁に限られる。S181は蛍光X線による石材産地推定を行っており、香川産サヌカイトの可能性が高いと判定された（第6章第6節参照）。S183～S185は安山岩製。いずれも剥片素材である。

楔形石器（図138～141、表60）

両極打撃痕の見られる石器を楔形石器として分類した。この中には、両極打法を用いて剥片作出を行う石核と、石器そのものに機能が付された可能性の強い狭義の楔形石器の二者が含まれている。いずれかを判定できない資料も多いので、ここでは一括して報告する。全部で186点出土している。石材は黒曜石が主体となり、黒曜石製が169点、硬質安山岩製が16点である。S186～S230は黒曜石製。S186～S193は大型で、剥離痕が大きいので石核として機能した可能性が強いと思われる。S194～S204も比較的大型で、やや大きい剥離痕もいくらかみられるので、石核として機能したのもあると思われるが、狭義の楔形石器とは厳密には区別できないものが多い。S205～S228は小型のもので、狭義の楔形石器の可能性が高いものである。周縁に著しい潰れをもつものが多く、側面に剪断面が見られるものも多い。使用方向の転移を行う例がほとんどである。S229は楔形石器削片。明確に楔形石器削片と分かるものをほかに6点カウントしたが、実際にはこれよりはるかに多いだろう。S230は側面が剥離して形成された鋭い縁辺を刃部として使用したもの。S231～S233は硬質安山岩製のもの。

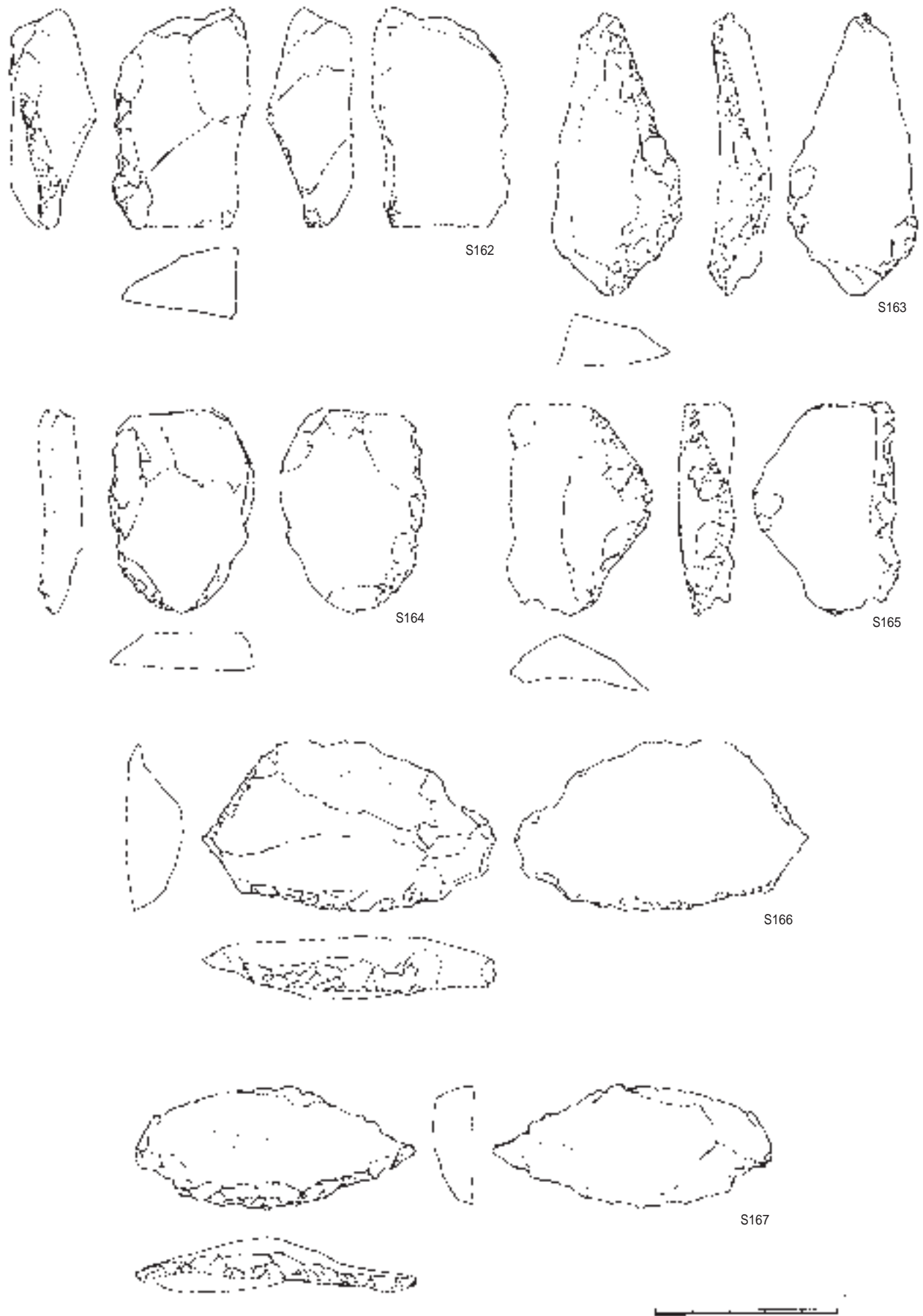


図135 包含層出土土器〔8〕スクレイパー〕



図136 包含層出土土器〔9〕スクレイパー]

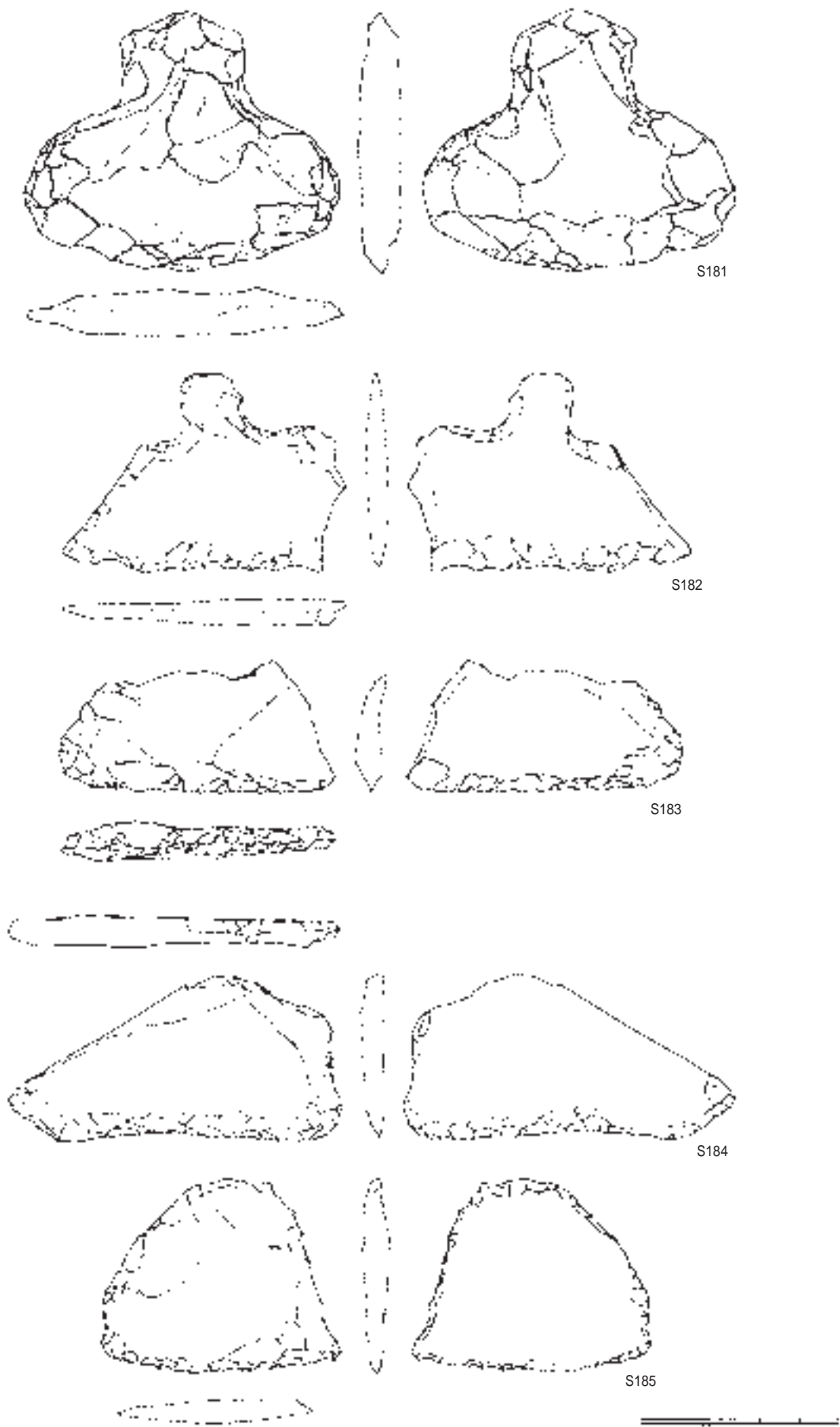


図137 包含層出土土器〔10〕スクレイパー〕

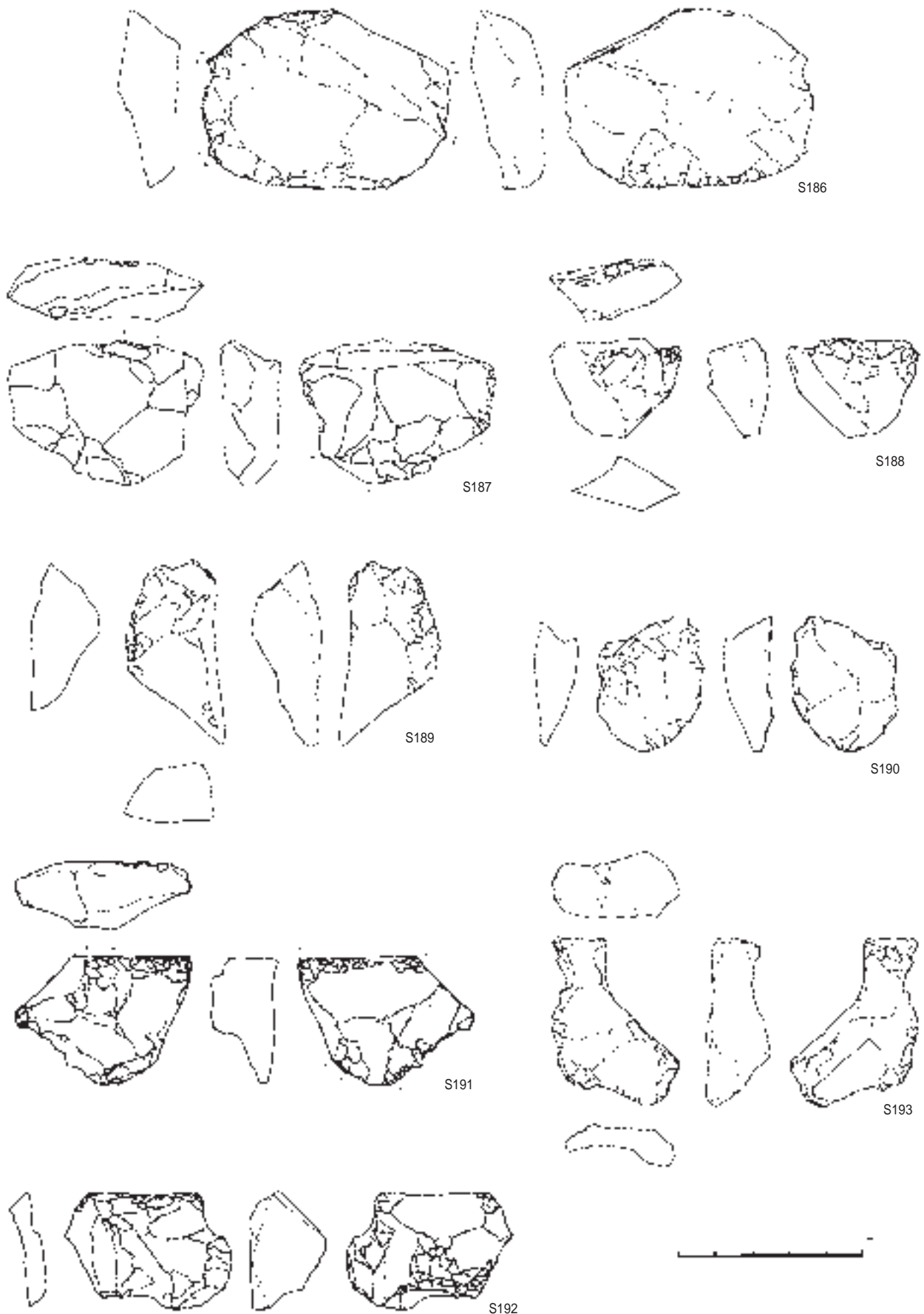


図138 包含層出土土器〔11〕楔形石器〕

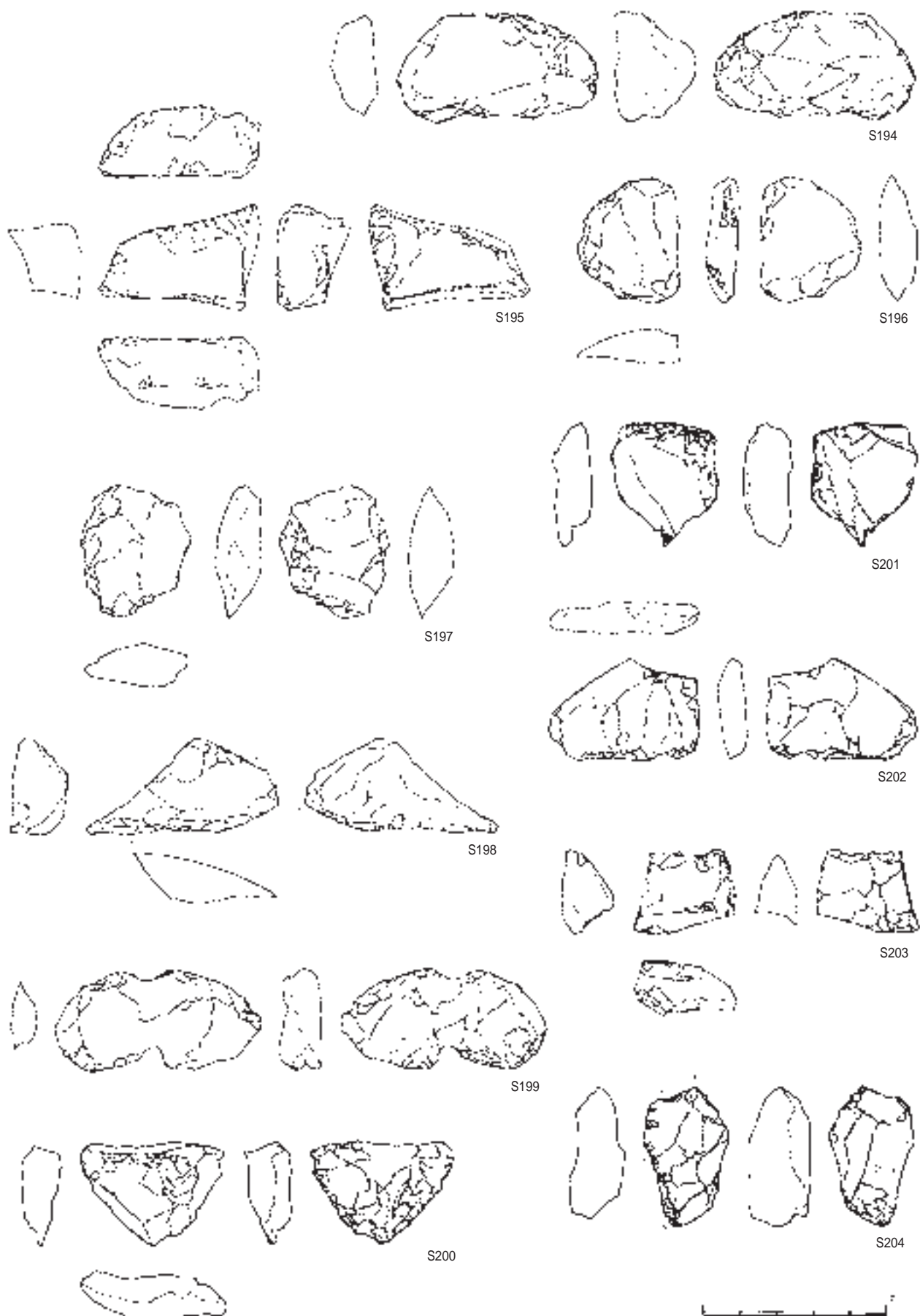


図139 包含層出土土器〔12〕楔形石器〕

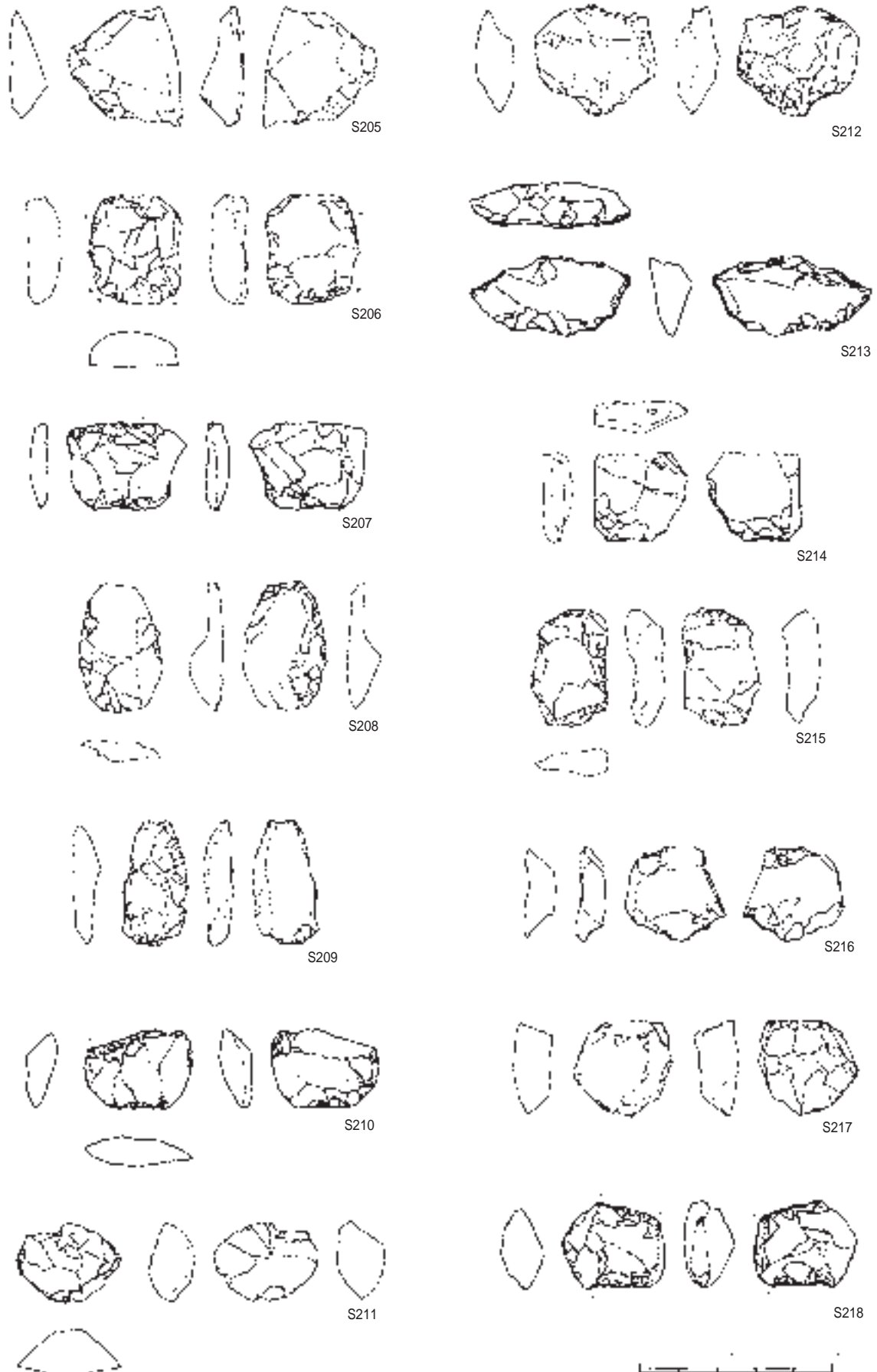


図140 包含層出土土器〔13〕楔形石器〕



図141 包含層出土土器〔14〕楔形石器〕

その他の器種 (図142、表60)

S 234は硬質安山岩製の局部磨製の石剣。弥生時代に属するものであろう。E区出土。剥片素材で、周縁を打剥して調整している。その後基部側を中心に研磨が加えられる。基端部は刃部状に面が作られている。蛍光X線による石材産地推定の結果、香川産サヌカイトと判定されている(第6章第6節参照)。S 235は安山岩製の石錐。S 236は黒曜石製の石錐で未製品の可能性もある。S 237は加工痕のある剥片。背面に大きく原礫面を残す大型の剥片に刃部状の調整をわずかに加えたもの。重さ144gで、黒曜石製石器のなかで最も重い。素材として利用するのに十分な大きさがある。S 238・S 239は縦長の石刃状剥片を素材とする、使用痕、加工痕のある剥片。S 239の素材剥片は比較的整った石核からの作出が考えられる。

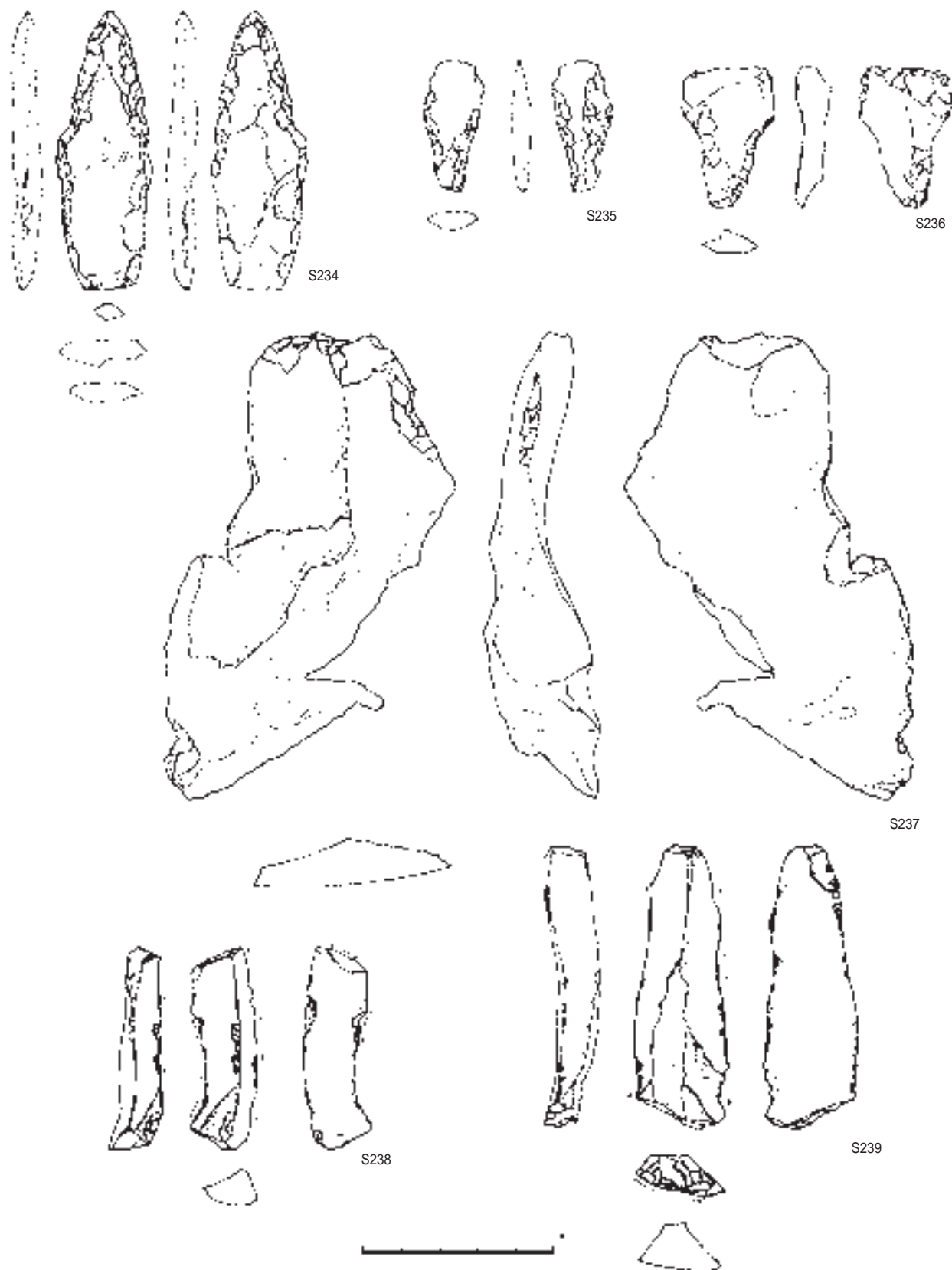


図142 包含層出土土器〔15〕その他の器種〕

石核（図143～図145、表60）

70点が出土している。68点が黒曜石、2点が硬質安山岩である。破片のものや小型のもの以外で、代表的な剥離技術が見られるものを16点掲載した。いずれも不定形な剥片を作出するもので、打面



图143 包含層出土土器〔16〕石核]

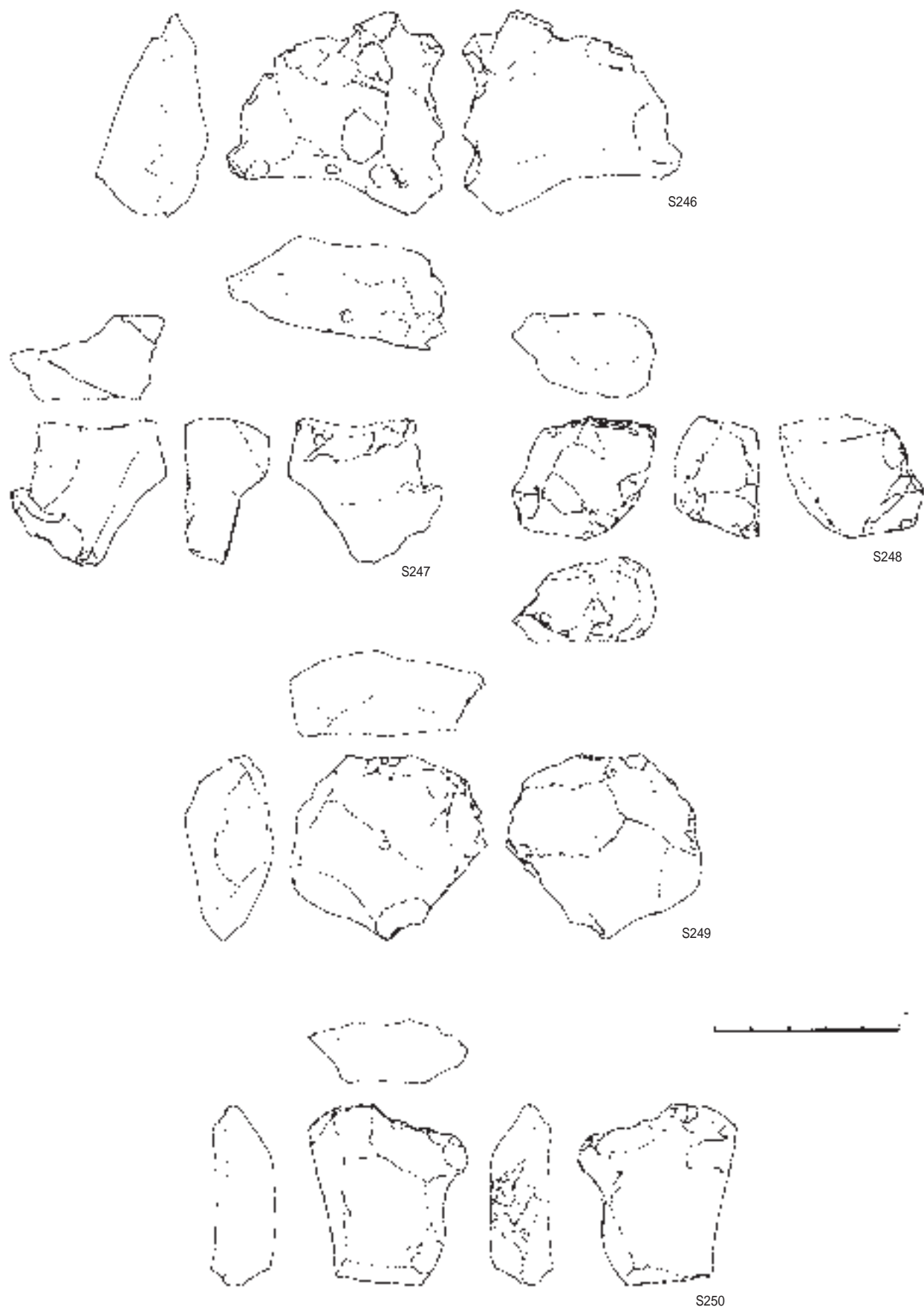


图144 包含層出土土器(17)石核]



图145 包含層出土土器〔18〕石核〕

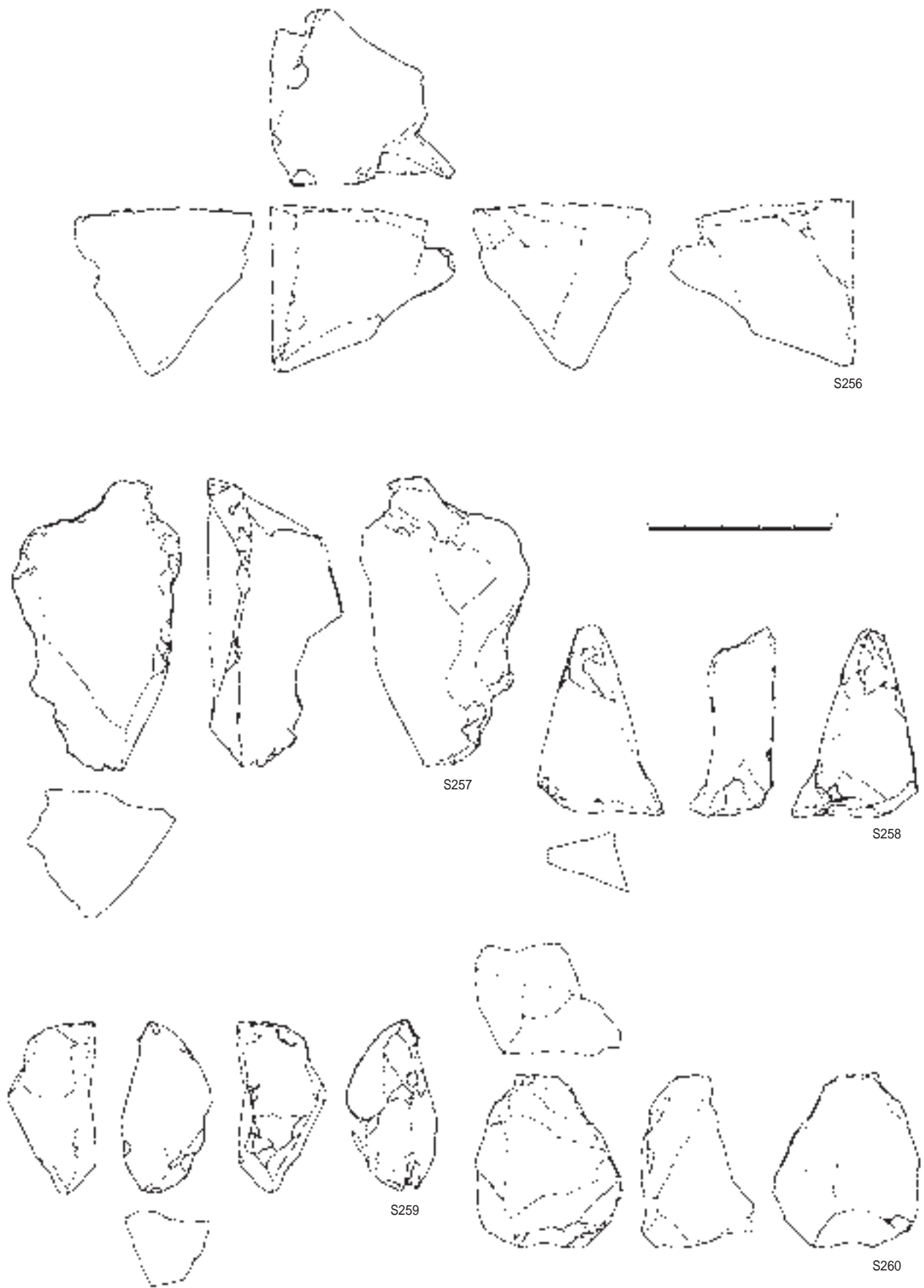


図146 包含層出土土器〔19〕ブランク

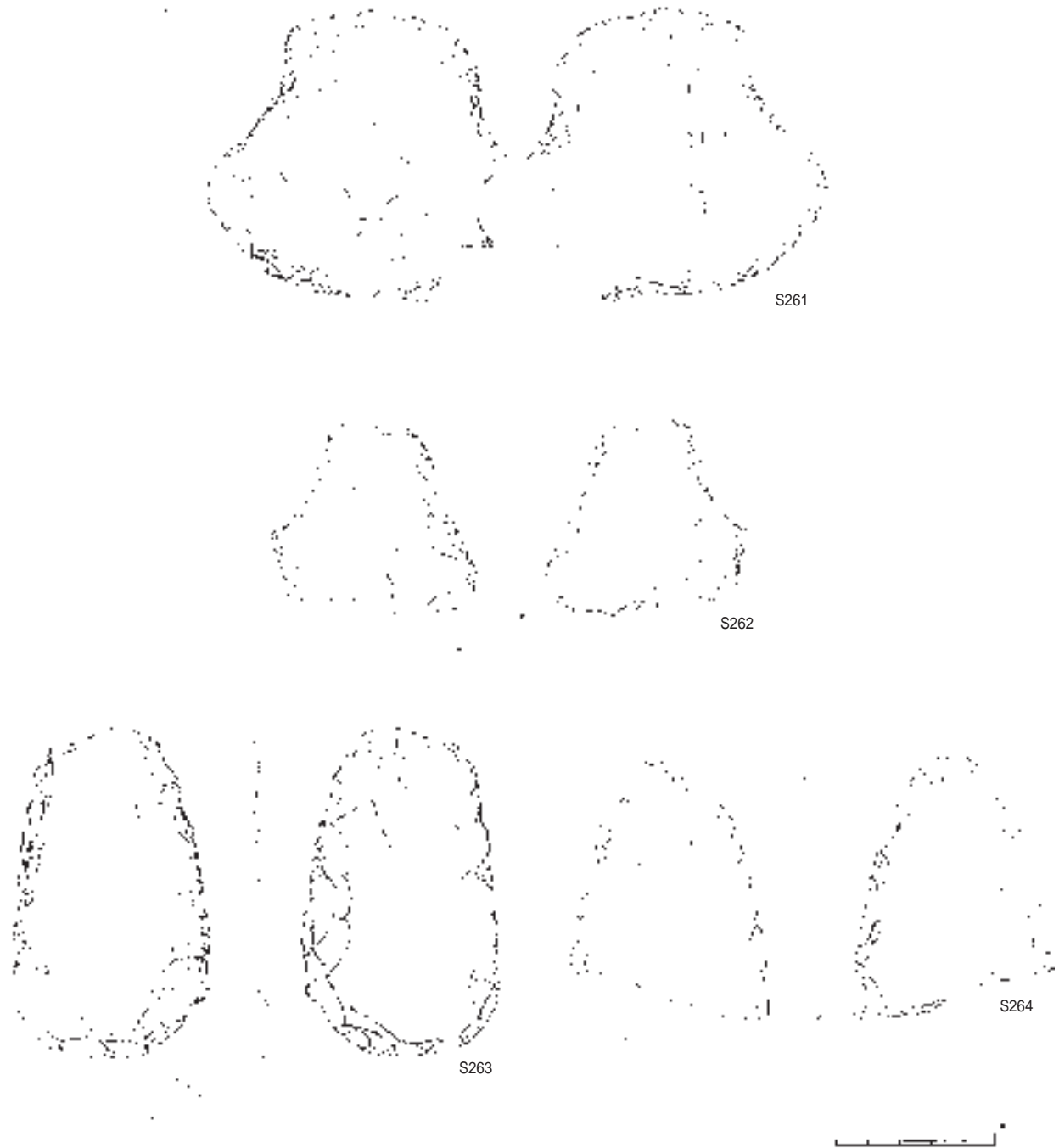


図147 包含層出土土器〔20〕打製石斧〕

転移や作業面転移を行うものが多い。S 240は分割礫からわずかに剥片を作出した段階で剥離が終了している。作業面以外には原礫面を残す。S 241は打面に潰れが著しく見られる。両極打撃が加えられていた可能性もある。S 242はほぼ原礫のままの状態から剥片剥離を始めたものと思われる。作出された剥片はさほど多くないようである。S 243は分割礫から1枚だけ剥片を作出したもの。S 244は一側縁を両面から打剥するもの。S 245は縦長剥片が連続して剥離される。S 246は周縁から数枚小型の剥片を剥離したもの。S 247は小口で縦長剥片が作出されている。S 248は打面転移を繰り返すサイコロ形のもの。S 249は表裏とも周縁から求心状に剥離がなされる。S 250は一側縁から2、3枚剥片が取られる。打面再生が行われている。S 251も一側縁から剥離がなされる。打面

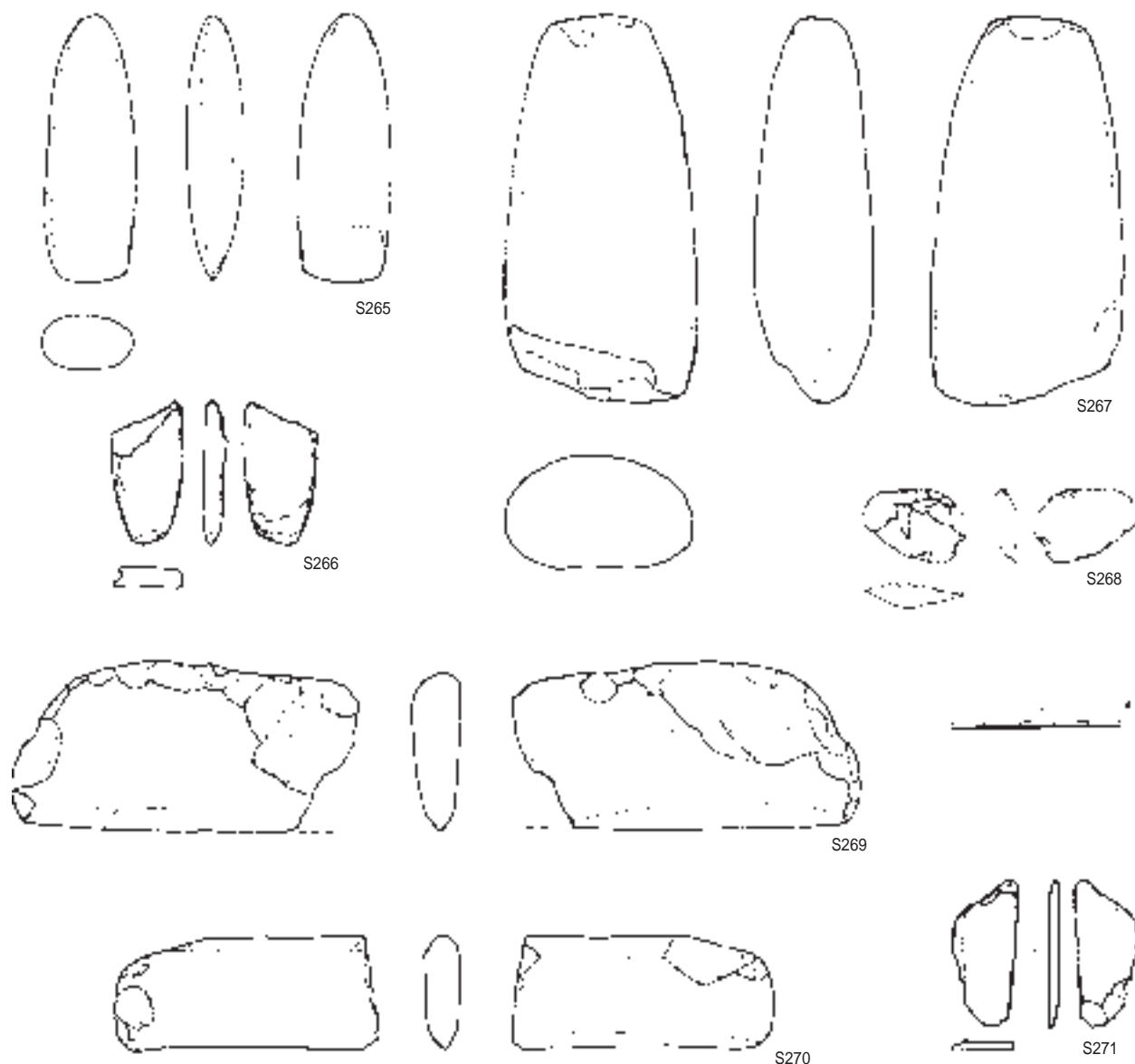


図148 包含層出土土器〔21〕磨製石器〕

と作業面のなす稜と下底面の稜に微細剥離痕が見られる。S 252・S 253はそれぞれ側面に1枚の剥離痕が残る。S 254は最終打面に打面調整が見られる。S 255は分割礫の一面で剥離がなされる。

ブランク (図146、表60)

24点出土している。黒曜石が22点、水晶が2点ある。S 256～S 259は黒曜石、S 260は水晶。

打製石斧 (図147、表60)

4点が出土。S 261は硬質安山岩製。S 262は黒色頁岩製。S 263・S 264は粗粒安山岩製である。

磨製石器 (図148、表60)

S 265は小型の両刃石斧で、緑色片岩製。刃部に線条痕と刃こぼれが見られる。S 267は緑色片岩製の太型蛤刃石斧。刃部が欠けている。S 266は小型の扁平両刃石斧で、蛇紋岩製。S 268は磨製石斧を打剥して生じた剥片。粗粒安山岩製。S 269・S 270は磨製石庖丁であろうか。紐孔や挟りは見られない。刃部が厚めである。背部に打剥を受けている。S 269が粘板岩製、S 270が細粒花崗岩製。S 271は磨製石器の破片で、器種不明のもの。黒色頁岩製である。

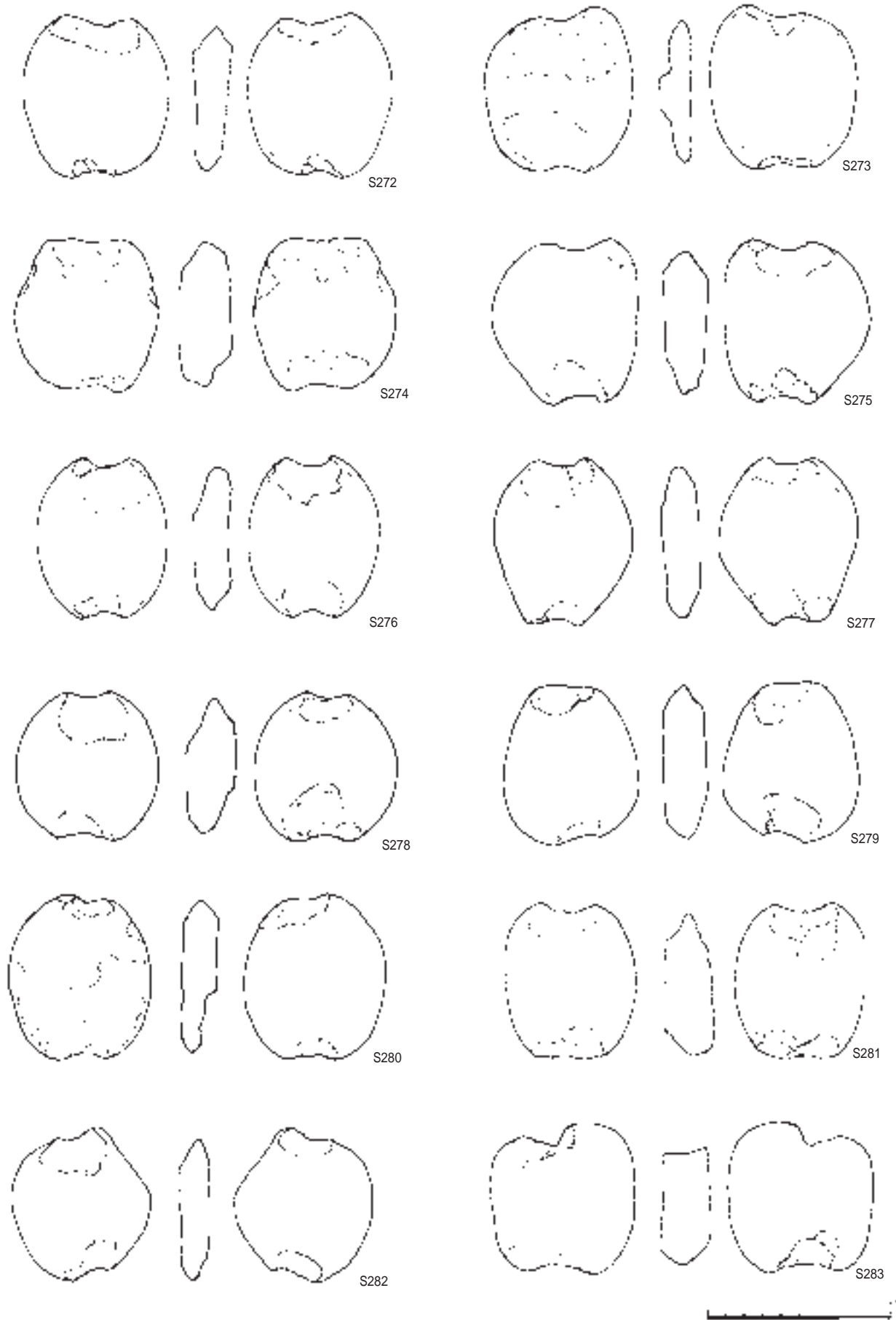


図149 包含層出土土器〔22〕石錘]

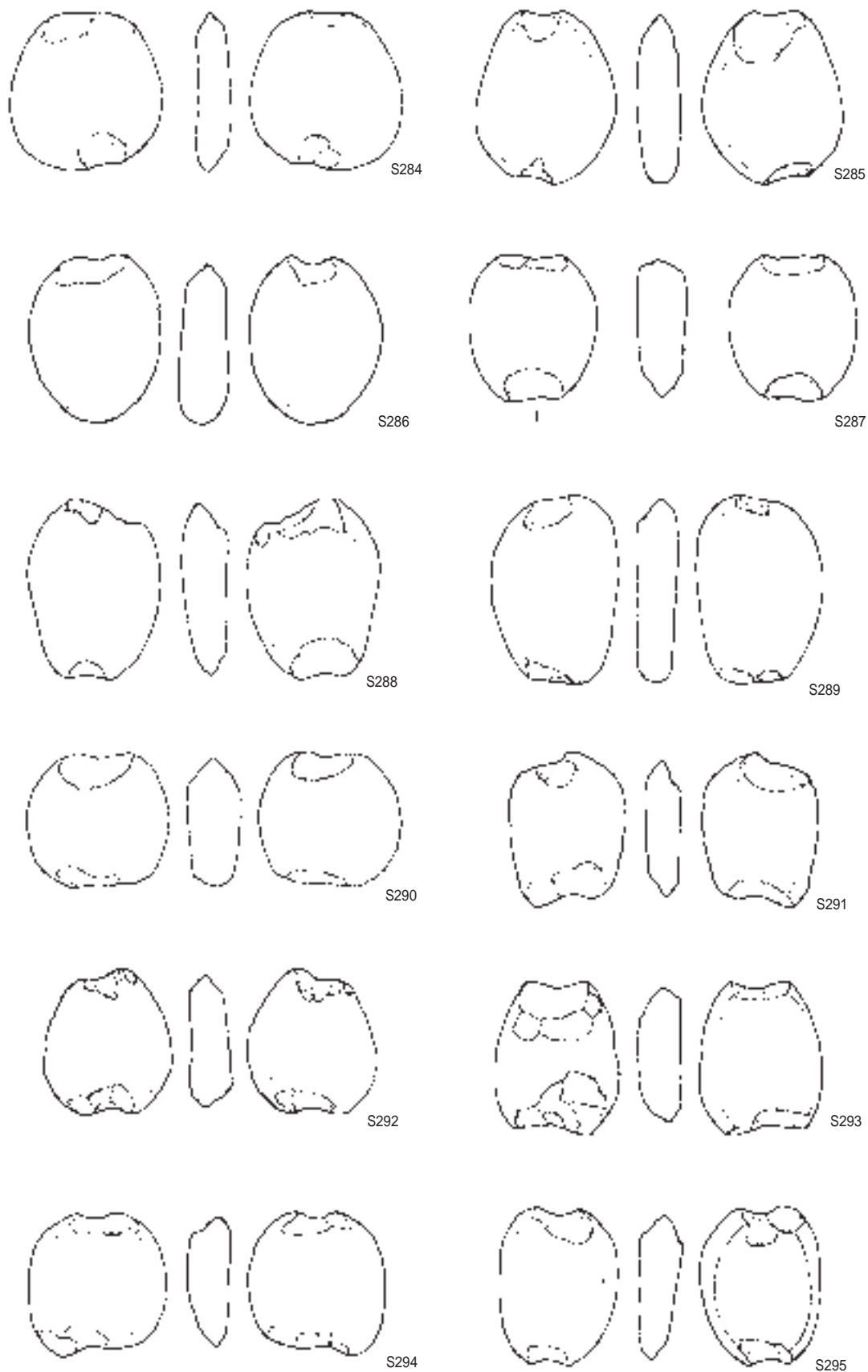


図150 包含層出土土器〔23〕石錘

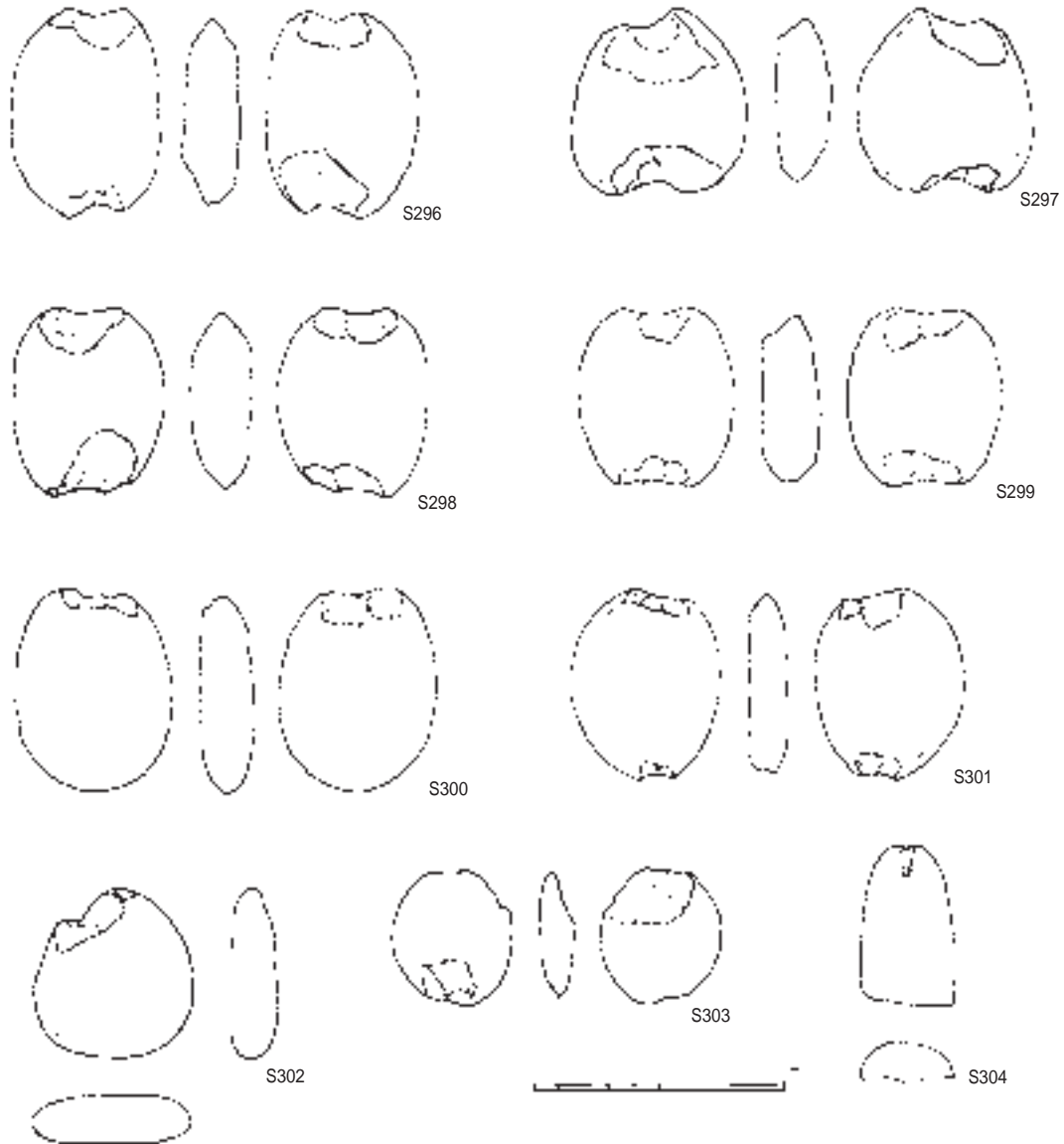


図151 包含層出土土器(24)【石錘】

石錘 (図149～151、表60)

32点出土した。うち、31点が打欠石錘 (S272～303) ですべて粗粒安山岩製、1点が切目石錘 (S304) でホルンフェルス製。G3グリッド周辺で多く出土している。

敲石・磨石・砥石 (図152、表60)

S305～S308は敲石。S307は磨り面が見られ、磨石との複合石器。S309～S310は磨石。敲石・磨石はすべて粗粒安山岩製。S311は細粒花崗岩製の砥石。全面が砥面となる。砥石目やや細。S312も細粒花崗岩製の砥石。砥面は1面で、砥石目は極細である。 (北)

【引用参考文献】

井上智博1991「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学研究』38-2 考古学研究会

井上智博1996「山陰西川津式土器の土器型式構造と恩原2遺跡土器群の占める位置」『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団

岡平拓也2001『沢べり遺跡第3次発掘調査報告書』倉吉市教育委員会

小林青樹2000「縄文時代早期末葉から前期前葉土器群に関する問題」『福呂遺跡1』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

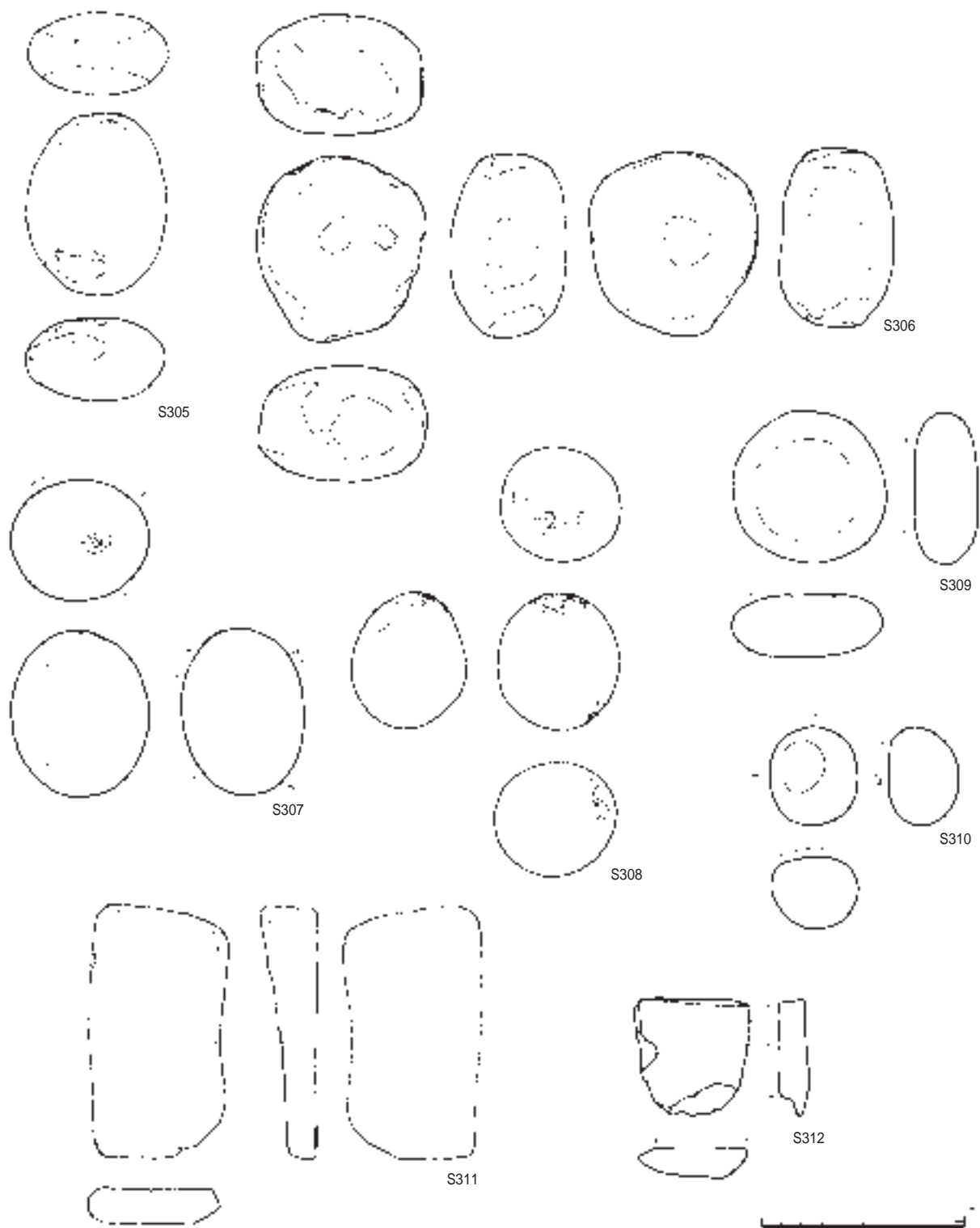


図152 包含層出土土器(25)【敲石・磨石・砥石】

千葉豊2001「沖丈遺跡出土縄文後期土器の編年的意義 - 崎ヶ鼻式と『権現山式』のあいだ - 」『沖丈遺跡』邑智町教育委員会

濱田竜彦1999「古市河原田遺跡出土の突帯文土器について」『古市遺跡群1』(財)鳥取県教育文化財団

柳浦俊一2000「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『島根考古学会誌』17 島根考古学会

第6章 特論

第1節 豎穴住居3出土須恵器杯身赤色部の顔料分析

藤根 久(パレオ・ラボ)

1. はじめに

名和飛田遺跡の調査では、外面に赤色塗彩されたような痕跡を示す須恵器杯身(掲載遺物番号:156)が出土した。ここでは、この赤色部の成分を調べるためにX線分析顕微鏡を用いた元素マッピング分析およびポイント分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、予めマイクロスコープを用いて写真撮影した(特論図版1)。

試料は、赤色痕跡が認められる部分41.984mm四方について元素マッピングを行った(特論図版2)。また、赤色部分4箇所と胎土1箇所についてポイント分析を行った。

測定は、(株)堀場製作所製XGT-5000Typeを用いた。元素マッピング分析は、X線導管径100 μ m、電圧50KV、測定時間は9,146秒である。

ポイント測定は、X線導管径100 μ m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。定量計算は、標準試料を用いないFP法(ファンダメンタルパラメータ法)で半定量分析を行った。

3. 結果および考察

元素マッピング分析を行った結果、赤色部分に対応して鉄や水銀などの輝度の高いマッピング像は得られなかった。

一方、主たる赤色部と胎土におけるポイント分析では、赤色部の鉄含有量(Fe_2O_3)が3.64~6.55%であり、胎土の鉄含有量が4.05%であった。なお、赤味が最も強い部分はポイントBであるが鉄含有量(Fe_2O_3)は6.55%と最も高い(特論図版2、表14)。ただし、赤色部におけるポイント分析においてすべてで鉄含有量が高い訳ではない。なお、その他赤色顔料に利用される水銀Hgあるいは鉛Pbなどの元素は検出されなかった。

以上のことから、元素マッピング分析では顕著に検出されなかった。なお、試料測定面は、大型試料であり測定に適した水平ではなくやや傾いた状態でセットしたため、口縁側に向かって強度がやや低い。このことが顔料に起因する元素の輝度が高くでない原因であることも考えられる。

胎土と比較して1~2%程度高いことから、使用した装置で検出できる限界以下であったことが考えられる。ただし、肉眼的に最も赤味の強い赤色部において鉄含有量が2%程度高いことから、この赤色部が鉄に起因するものと考えられる。

表14 蛍光X線分析によるポイント分析結果

No.	位置	MgO (%)	Al ₂ O ₃ (%)	SiO ₂ (%)	SO ₃ (%)	K ₂ O (%)	CaO (%)	TiO ₂ (%)	Cr ₂ O ₃ (%)	MnO (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	ZnO (%)	Rb ₂ O (%)	SrO (%)	Y ₂ O ₃ (%)	ZrO ₂ (%)	合計
A	赤色部	0.58	17.95	70.57	1.60	3.18	1.09	1.18	0.02	0.11	3.65	0.01	0.01	0.02	0.00	0.03	100.00
B		0.77	13.77	70.08	0.40	4.37	1.58	2.05	0.04	0.15	6.55	0.03	0.02	0.06	0.01	0.11	99.99
C		0.14	14.22	74.09	0.52	2.78	1.20	1.54	0.03	0.11	5.26	0.01	0.02	0.03	0.01	0.04	100.00
D	胎土表面	1.09	18.89	72.11	0.26	1.92	0.87	1.09	0.01	0.07	3.64	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02	100.01
E		0.71	13.80	74.21	0.37	2.91	2.05	1.67	0.01	0.12	4.05	0.01	0.01	0.04	0.01	0.05	100.02
	最大値	0.14	13.77	70.08	0.26	1.92	0.87	1.09	0.01	0.07	3.64	0.01	0.01	0.01	0.00	0.02	
	最小値	1.09	18.89	74.21	1.60	4.37	2.05	2.05	0.04	0.15	6.55	0.03	0.02	0.06	0.01	0.11	

第2節 名和飛田遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

名和飛田遺跡では、縄文時代早期から晩期にかけての土器・石器、弥生時代中期の竪穴住居跡や絵画土器、古墳時代後期末の竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の遺構・遺物が検出されている。このうち、古墳時代後期の竪穴2は焼失住居跡であり、住居構築材の一部と考えられる炭化材が出土している。

本報告では、竪穴2における住居構築材の木材利用を明らかにするために、出土した炭化材の樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、竪穴2から出土した炭化材5点（試料 1～5）である。

2. 分析方法

木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

炭化材は、いずれも小片であり、保存状態も悪かった。そのため、試料 1は、実体顕微鏡による観察で広葉樹であることは確認できたが、電子顕微鏡による観察が不可能であり、種類の同定には至らなかった。その他の4点は、いずれも広葉樹で3種類

樹種同定結果

遺構	時 期	試料	樹 種
竪穴2	古墳時代後期	1	広葉樹
		2	ケヤキ
		3	ヌルデ近似種
		4	コナラ属アカガシ亜属
		5	ヌルデ近似種

（コナラ属アカガシ亜属・ケヤキ・ヌルデ近似種）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

- ・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、1 - 2個幅で単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 - 15細胞高のものと合放射組織とがある。

- ・ケヤキ（*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino） ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性1 - 8細胞幅、1 - 50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

- ・ヌルデ近似種（cf. *Rhus javanica* L.） ウルシ科ウルシ属

試料はいずれも若年部分で、年輪界を欠く。早材部と晩材部とで道管径が大きく異なることから環孔材と判断される。孔圏部は6 - 7列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減し、

2 - 3個が複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1 - 5細胞幅、1 - 40細胞高。

若年部分であること、年輪界を欠くことなどから同定する上で重要な道管配列の特徴が把握できない。また、保存状態も悪く、小道管のらせん肥厚の有無等が観察できなかった。これらのことから、近似種とした。

4. 考察

竪穴2は床面が長方形を呈すると考えられるが、1 / 3が調査区外で確認されていない。炭化材は、住居の南東壁中央部付近の床面から3点（試料 1、2、3）住居南西壁の中央やや北寄の床面から2点（試料 4、5）がそれぞれ出土している。樹種は、南東壁の炭化材が種類不明の広葉樹、ケヤキ、ヌルデ近似種、南西壁の2点がアカガシ亜属とヌルデ近似種であった。この結果から、竪穴2では少なくとも3種類の木材が使用されていたことが推定される。

アカガシ亜属とケヤキは、重硬で強度が高く、ケヤキでは耐朽性も比較的高い（平井1979、1980）。一方、ヌルデは、広葉樹としては軽軟な部類に入るが、耐朽性が高いとされる（平井1981）。アカガシ亜属は、暖温帯常緑広葉樹林を構成する常緑広葉樹、ケヤキとヌルデは二次林等の落葉広葉樹林に生育する落葉広葉樹であり、とくにヌルデは林縁部等の陽地を好む。これらの材質を考慮すれば、アカガシ亜属とケヤキは強度を利用して主要な部位に利用したことが推定される。一方、ヌルデは耐朽性を利用したと考えられるが、軽軟であることからアカガシ亜属やケヤキとは異なる部位に使用された可能性がある。

本遺跡周辺地域では、古御堂新林遺跡で古墳時代前期初頭の住居構築材にクリ、スダジイ、クスノキ科が認められた例があるが、古墳時代後期の住居構築材を対象とした分析例はほとんどない。そのため、現時点では当該期の木材利用についての詳細は不明であり、今後の資料蓄積が課題である。

引用文献

- 平井 信二 1979 木の事典 第2巻 かなえ書房
 平井 信二 1980 木の事典 第4巻 かなえ書房
 平井 信二 1981 木の事典 第10巻 かなえ書房

第3節 名和飛田遺跡竪穴2 出土炭化材の放射性炭素年代測定

今回、名和飛田遺跡において、古墳時代後期末の遺構と考えられる竪穴2から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を、加速器分析研究所に依頼した。以下に報告結果を掲載する。なお、試料は第5章本文内掲載番号と一致する。

放射性炭素年代測定結果報告書

株式会社 加速器分析研究所

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。
- 2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出しています。

複数回（通常は4回）の測定値について²検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。

- 4) ¹³Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定される¹³Cの値を用いることもあります。

¹³C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものです。

$$^{14}\text{C} = [(^{14}\text{As} - ^{14}\text{AR}) / ^{14}\text{AR}] \times 1000 \quad (1)$$

$$^{13}\text{C} = [(^{13}\text{As} - ^{13}\text{APDB}) / ^{13}\text{APDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、¹⁴As：試料炭素の¹⁴C濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{試料}}$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_{\text{試料}}$

¹⁴AR：標準現代炭素の¹⁴C濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{R}}$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_{\text{R}}$

¹³Cは、質量分析計を用いて試料炭素の¹³C濃度（¹³As = ¹³C/¹²C）を測定し、PDB（白亜紀のペレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、IAAでは加速器により測定中に同時に¹³C/¹²Cも測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した¹³Cを用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、¹⁴Cは、試料炭素が¹³C = -25.0（‰）であるとしたときの¹⁴C濃度（¹⁴AN）に換算した上で計算した値です。（1）式の¹⁴C濃度を、¹³Cの測定値をもとに次式のように換算します。

$$^{14}\text{An} = ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + ^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{As} \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + ^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{As} \text{として} ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$^{14}\text{C} = [(^{14}\text{An} - ^{14}\text{AR}) / ^{14}\text{AR}] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない¹⁴Cに相当するBP年代値が比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

¹⁴C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern CARbon) がよく使われており、¹⁴Cとの関係は次のようになります。

$$^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = ^{14}\text{C} / 10 + 100 (\text{‰})$$

国際的な取り決めにより、この¹⁴CあるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional RAdioCARbon Age ; yrBP) が次のように計算されます。

$$\begin{aligned} T &= - 8033 \times \ln [(^{14}\text{C} / 1000) + 1] \\ &= - 8033 \times \ln (\text{pMC} / 100) \end{aligned}$$

Code No.	試料	BP年代およびの炭素同位体比
IAAA - 41202	試料採取場所：名和飛田遺跡 試料形態：炭化物 試料番号：試料 1	LibbyAge (yrBP) : 1,490 ± 40 ¹³ C (‰) (加速器) = - 28.27 ± 0.90 ¹⁴ C (‰) = - 168.9 ± 3.8 pMC (‰) = 83.11 ± 0.38
	(参考) ¹³ Cの補正無し	¹³ C (‰) = - 174.4 ± 3.5 pMC (‰) = 82.56 ± 0.35 Age (yrBP) : 1,540 ± 30
IAAA - 41203	試料採取場所：名和飛田遺跡 試料形態：炭化物 試料番号：試料 3	LibbyAge (yrBP) : 1,820 ± 40 ¹³ C (‰) (加速器) = - 27.78 ± 0.85 ¹⁴ C (‰) = - 203.1 ± 3.4 pMC (‰) = 79.69 ± 0.34
	(参考) ¹³ Cの補正無し	¹³ C (‰) = - 207.6 ± 3.1 pMC (‰) = 79.24 ± 0.31 Age (yrBP) : 1,870 ± 30
IAAA - 41204	試料採取場所：名和飛田遺跡 試料形態：炭化物 試料番号：試料 5	LibbyAge (yrBP) : 1,520 ± 30 ¹³ C (‰) (加速器) = - 26.92 ± 0.89 ¹⁴ C (‰) = - 172.1 ± 3.5 pMC (‰) = 82.79 ± 0.35
	(参考) ¹³ Cの補正無し	¹³ C (‰) = - 175.3 ± 3.1 pMC (‰) = 82.47 ± 0.31 Age (yrBP) : 1,550 ± 30

第4節 ガラス小玉の成分分析

藤根 久（パレオ・ラボ）

1. はじめに

名和飛田遺跡の調査では、土坑内あるいは住居跡からスカイブルーやコバルトブルーのガラス玉が数個検出された。ここでは、これらガラス小玉の材質についてX線分析顕微鏡を用いて成分分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、予めマイクロスコープを用いて写真撮影した（特論図版4・5）。試料は、スカイブルーを呈するガラス小玉3試料とコバルトブルーを呈するガラス小玉2試料の合計5試料である（表15）。

表15 成分分析を行ったガラス玉とその詳細

	種類	掲載 遺物番号	出土地区	遺 構	色 調	備 考
1	小玉	B 22	E 区 N10	土坑21	スカイブルー	特論図版 4 (1a ,1b)
2	小玉	B 2	C 区 I 2	竪穴住居 6 北西	スカイブルー	特論図版 4 (2a 2b)
3	小玉	B 10	C 区 I 2	竪穴住居 6 南西	スカイブルー	特論図版 4 (3a ,3b)
4	小玉	B 20	E 区 M10	土坑21	コバルトブルー	特論図版 5 (4a ,4b)
5	小玉	B 5	C 区 I 2	竪穴住居 6 北西	コバルトブルー	特論図版 5 (5a ,5b)

これら試料は、小容器にエチルアルコールを加えて超音波洗浄を行った後、両面テープで試料台に固定して非破壊で蛍光X線分析を行った。

測定は、(株)堀場製作所製XGT-5000Type を用いた。測定条件は、X線導管径10 μ m、電圧50KV、電流1mA、測定時間300secである。定量計算は、標準試料を用いないIFP法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。

3. 結果

蛍光X線分析による半定量分析結果を酸化物の形で表した（表16）。また、各ガラス玉の蛍光X線スペクトル図を特論図版6・7に示す。ガラス小玉は、スカイブルーを呈するガラス小玉とコバルトブルーを呈するガラス小玉とで明瞭に成分が分かれた。

スカイブルーを呈するガラス小玉（1～3）では、酸化銅CuOや酸化錫SnOあるいは酸化鉛PbOが特徴的に検出された。

一方、コバルトブルーを呈するガラス小玉（4・5）では、酸化カルシウムCaOや酸化マンガンMnOあるいは酸化鉄Fe₂O₃あるいは酸化バリウムBaOが特徴的に含まれていた。

全体的には、SiO₂が約79.41～82.38%、Al₂O₃が約1.51～4.31%、K₂Oが9.07～11.49%、CaOが0.25

～1.17%などであった。その他では酸化アンチモン Sb_2O_3 やなどが若干含まれていた。

4. 考察

ここでは、肥塚（1995）による古代ガラスの研究について概略を述べ、ガラス玉の化学組成について考察する。

1) ガラス研究

日本において、ガラスはほぼ紀元前2世紀頃から流通する。それ以降3世紀頃までに出現するガラスは例外的なものを除くと、鉛珪酸塩ガラスの鉛バリウムガラス(PbO-BaO-SiO_2 system)と鉛ガラス(PbO-SiO_2 system)、アルカリ珪酸塩ガラスのカリガラス($\text{K}_2\text{O-(Al}_2\text{O}_3\text{)-SiO}_2$ system)である。弥生時代から古墳時代へと移行する3世紀後半から4世紀にかけては、鉛珪酸塩ガラスの流通は途絶えて、代わって2種類のソーダ石灰ガラス($\text{Na}_2\text{O-CaO-SiO}_2$ systemと $\text{Na}_2\text{O-Al}_2\text{O}_3\text{-CaO-SiO}_2$ system)が多量に流通するようになる。一方、弥生時代から流通したカリガラスは出土量そのものが少なくなるが、その後も流通を続ける。しかし、6世紀後半から7世紀初頭にはカリガラスの流通は途絶え、代わって鉛ガラスが再び流通を始め、次第にソーダ石灰ガラスも衰退していくとされる。

2) 出土ガラス小玉の化学組成

ガラス遺物の表面は少なからず風化しており完全非破壊で分析しているため、製作当時の化学組成を示していないことが予想される。ガラス玉は風化すると、酸化カリウム(K_2O)や酸化ナトリウム(Na_2O)等が顕著に減少する傾向がある(肥塚 前出)。なお、ナトリウムNaは、感度が低いため測定は行っていない。

鉛バリウムガラスや鉛ガラスは、鉛が特徴的に多く含まれるが、スカイブルーを呈するガラス小玉では、全体的に酸化鉛(PbO)が1%前後と低く、またコバルトブルーを呈するガラス小玉も酸化バリウム(BaO)が0.1%前後と低いことから、いずれのガラス小玉もアルカリ珪酸塩ガラスに分類される。なお、ナトリウムを測定していないが、酸化カリウム(K_2O)が9.07～11.49%と多いことから、いずれもカリガラスと考える。

なお、スカイブルーを呈するガラス小玉は酸化銅の着色剤により明るいブルーを呈する。一方、コバルトブルーを呈するガラス小玉は、酸化マンガンや酸化鉄により暗い紫色に近い色を呈することが理解された。

引用文献

肥塚 隆保(1995)「古代ガラスの材質」. 古代に挑戦する自然科学、第9回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編、クバプロ、94～108p

表16 蛍光X線分析によるガラス玉の半定量分析結果

No.	種類	Al ₂ O ₃ (%)	SiO ₂ (%)	K ₂ O (%)	CaO (%)	TiO ₂ (%)	Cr ₂ O ₃ (%)	MnO (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	CuO (%)	ZnO (%)	Rb ₂ O (%)	SrO (%)	Y ₂ O ₃ (%)	ZrO ₂ (%)	SnO ₂ (%)	Sb ₂ O ₃ (%)	BaO (%)	PbO (%)	合計	分類
1	小玉	4.31	80.32	9.07	0.25	0.24	0.02	0.01	0.75	3.12	0.01	0.08	0.00	0.00	0.05	0.11	0.03	0.03	1.60	100.00	カリガラス
2	小玉	4.27	79.41	11.49	0.60	0.18	0.01	0.01	0.76	2.08	0.01	0.07	0.00	0.00	0.04	0.27	0.05	0.00	0.75	100.00	カリガラス
3	小玉	3.72	82.38	9.63	0.33	0.20	0.03	0.02	0.68	2.05	0.02	0.06	0.00	0.00	0.02	0.10	0.03	0.00	0.71	99.98	カリガラス
4	小玉	2.64	81.37	9.71	1.17	0.32	0.02	1.93	2.52	0.08	0.01	0.02	0.01	0.00	0.01	0.01	0.03	0.13	0.02	100.00	カリガラス
5	小玉	1.51	80.23	10.77	1.08	0.17	0.02	3.30	2.58	0.05	0.01	0.03	0.01	0.00	0.01	0.00	0.03	0.17	0.01	99.98	カリガラス
	最大値	1.51	79.41	9.07	0.25	0.17	0.01	0.01	0.68	0.05	0.01	0.02	0.00	0.00	0.01	0.00	0.03	0.00	0.01		
	最小値	4.31	82.38	11.49	1.17	0.32	0.03	3.30	2.58	3.12	0.02	0.08	0.01	0.00	0.05	0.27	0.05	0.17	1.60		

第5節 名和飛田遺跡出土土器の胎土分析

白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）

1. 分析の目的

名和飛田遺跡から出土した弥生時代中期、古墳時代中期末～後期の土器で時期が異なれば胎土がどうなるか検討した。また、弥生中期の土器では、門前上屋敷・茶畑第1・茶畑六反田の各遺跡と比較した。そして、古墳時代後期の土師器、須恵器、移動式竈と名和中畝遺跡の同時期の土器と比較し、胎土に差異があるかどうか調べた。

2. 分析方法

分析は、蛍光X線分析法と実体顕微鏡による胎土観察の二つの分析法で検討した。

蛍光X線分析法では、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、胎土中の成分（元素）量を調べた。測定した成分は、13元素でそのうちK（カリウム）、Ca（カルシウム）、Rb（ルビウム）、Sr（ストロンチウム）などの成分に顕著な違いがあることから、これらの成分を用いて、XY散布図を作成し検討した。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、胎土に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさ、含有量について調べた。

分析した土器は、表17に示した弥生時代15点、古墳時代46点の合計61点である。

3. 蛍光X線分析法による分析結果

図153 K - Ca、図154 Sr - Rbの散布図では、遺跡内での時期ごとで胎土に違いがあるかどうか検討した。その結果、弥生中期と古墳中期末～後期がある程度識別できた。また、古墳後期の須恵器は全体として広く散漫な分布であるが、特にCa量（0.5%以下）、Sr量（200ppm以下）が少ないところに分布するものが多かった。

図155 K - Ca、図156 Sr - Rbの散布図では、弥生中期の各遺跡との胎土比較を実施したところ、各遺跡とも、胎土差はなくほぼ同じ領域に分布した。

図157 K - Ca、図158 Sr - Rbの散布図では古墳後期の同様な遺物が出土している名和中畝遺跡と胎土を比較した。その結果、土師器（甕・移動式竈）は中畝の土師器と類似し、須恵器も同様であった。

4. 実体顕微鏡観察（肉眼観察）による結果

実体顕微鏡による肉眼観察では胎土に含まれる砂粒の岩石、鉱物の種類を同定した。観察倍率は10倍～30倍で随時観察した。

弥生中期の土器には3mm以下の石英、長石、0.5mm以下の角閃石と2mm以下の安山岩が少量含まれていた。また、古墳後期の土師器（甕）にも弥生と同様な砂粒が含まれていたが、弥生に比べ石英や安山岩の岩片が多く含まれていた。

5. まとめ

名和飛田遺跡出土土器の胎土分析(蛍光X線分析法・砂粒観察)を実施した結果、以下のことが指摘できよう。

遺跡内で時期ごとに胎土に違いがあるかどうかでは、弥生中期と古墳後期の分布域が異なる傾向にあった。また、砂粒観察では基本的な砂粒構成は変わらないが、古墳の土器に石英や安山岩の砂粒が多く含まれていた。この違いが分析値にもあらわれたことが推測される。

遺跡ごとにおける弥生中期の胎土比較では、今回比較した遺跡はいずれも胎土が異なるような遺跡はなかった。逆に非常に類似していた。砂粒観察でも同様の結果であった。

古墳後期の名和中畝との比較では、土師器・須恵器とも分布域がほぼ似ていた。ただ、飛田の須恵器に関しては、Ca量が0.5以下にほとんどがまとまり、それ以外は広く散漫な分布をするものがあった。このまとまる須恵器は、ほぼ同一の生産地からもたらされたのか。生産地試料の蓄積を行い検討する必要がある。

この分析の機会を与えていただいた、鳥取県埋蔵文化財センターの職員の方々には、いろいろご教示いただいた。末筆ではありますが記して感謝いたします。

第5節 名和飛田遺跡出土土器の胎土分析

表17 名和飛田遺跡出土土器分析値一覧表(%)ただし、Rb・Sr・Zrはppm

掲載番号	地区	遺構・層位	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	時代
5	第2調査地	Ⅲ層	須恵・高杯	65.65	0.91	19.32	6.20	0.08	2.08	0.63	3.16	1.57	0.12	200	201	356	古墳時代後期末
89	第3調査地A区	堅穴住居1	土師・甕	66.20	1.05	19.98	5.05	0.10	2.06	1.32	2.06	1.82	0.12	239	423	324	古墳時代中期末
90	第3調査地A区	堅穴住居1	土師・甕	65.58	0.98	19.83	5.12	0.06	1.88	1.84	2.35	1.95	0.22	259	538	256	古墳時代中期末
91	第3調査地A区	堅穴住居1	土師・甕	63.56	1.04	20.87	7.24	0.09	2.11	0.77	2.25	1.82	0.05	274	271	304	古墳時代中期末
92	第3調査地A区	堅穴住居1	土師・甕	65.20	1.04	20.64	5.05	0.05	2.03	1.08	2.84	1.73	0.10	199	348	318	古墳時代中期末
99	第3調査地A区	土坑4	土師・甕	62.67	0.97	21.55	6.82	0.10	2.11	0.78	3.18	1.51	0.13	197	270	286	古墳時代中期末
107	第3調査地E区	堅穴住居2	須恵・杯蓋	68.56	1.04	19.30	4.00	0.04	1.98	0.86	2.46	1.44	0.13	182	310	367	古墳時代後期末
112	第3調査地E区	堅穴住居2	須恵・杯身	69.00	0.96	18.59	4.33	0.04	1.99	0.38	2.18	2.14	0.15	227	123	340	古墳時代後期末
116	第3調査地E区	堅穴住居2	土師・甕	65.98	1.04	20.03	4.53	0.06	1.92	1.62	2.61	1.96	0.05	239	484	312	古墳時代後期末
118	第3調査地E区	堅穴住居2	土師・甕	64.13	1.08	21.22	4.63	0.03	1.98	1.58	2.96	2.02	0.16	208	505	320	古墳時代後期末
119	第3調査地E区	堅穴住居2	土師・甕	64.92	1.00	21.24	4.17	0.04	1.93	1.79	2.57	1.97	0.15	215	524	272	古墳時代後期末
120	第3調査地E区	堅穴住居2	土師・甕	66.03	1.01	20.04	4.70	0.06	1.98	1.62	2.26	1.98	0.11	245	482	292	古墳時代後期末
122	第3調査地E区	堅穴住居2	土師・甕	63.75	1.14	21.57	4.65	0.05	2.13	1.81	2.68	1.88	0.12	182	570	318	古墳時代後期末
123	第3調査地E区	堅穴住居3	須恵・杯蓋	68.02	1.18	19.07	5.49	0.06	2.06	0.42	1.93	1.51	0.08	170	138	403	古墳時代後期末
125	第3調査地E区	堅穴住居3	須恵・杯蓋	66.99	1.15	19.30	5.55	0.07	1.92	0.40	2.43	1.73	0.15	237	145	404	古墳時代後期末
126	第3調査地E区	堅穴住居3	須恵・杯蓋	64.48	1.37	19.97	7.93	0.08	1.89	0.35	2.24	1.42	0.07	156	148	474	古墳時代後期末
128	第3調査地E区	堅穴住居3	須恵・杯身	67.34	1.33	19.76	5.35	0.06	1.94	0.32	2.20	1.43	0.07	191	124	435	古墳時代後期末
132	第3調査地E区	堅穴住居3	須恵・壺	67.97	1.29	17.76	6.14	0.08	2.09	0.46	2.24	1.67	0.12	211	171	463	古墳時代後期末
133	第3調査地E区	堅穴住居3	須恵・高杯	69.60	0.94	18.04	4.08	0.05	1.85	1.10	2.38	1.60	0.14	242	323	371	古墳時代後期末
142	第3調査地E区	堅穴住居3	土師・長胴甕	64.37	1.17	21.21	4.69	0.04	1.88	1.47	2.96	1.93	0.09	143	478	306	古墳時代後期末
143	第3調査地E区	堅穴住居3	土師・鉢?	66.45	1.03	18.88	4.86	0.07	2.01	1.69	2.61	1.99	0.18	213	492	301	古墳時代後期末
146	第3調査地E区	堅穴住居3	須恵・杯身	71.48	0.93	17.31	3.91	0.04	1.77	0.39	1.61	2.14	0.14	229	131	373	古墳時代後期末
147	第3調査地E区	堅穴住居3	須恵・杯身	70.53	1.07	17.01	4.60	0.05	1.86	0.55	2.00	1.93	0.13	234	162	412	古墳時代後期末
150	第3調査地E区	堅穴住居3	土師・甕	61.90	2.07	21.05	8.24	0.09	1.98	0.82	1.48	1.95	0.18	160	186	548	古墳時代後期末
155	第3調査地E区	堅穴住居3	甕	65.99	1.00	19.57	4.96	0.06	1.94	1.45	2.58	1.99	0.10	211	465	308	古墳時代後期末
158	第3調査地E区	堅穴住居3	須恵・杯身	67.65	1.62	20.77	5.00	0.07	1.81	0.74	1.04	0.97	0.13	130	171	466	古墳時代後期末
159	第3調査地E区	堅穴住居3	須恵・杯蓋	65.91	0.99	20.26	5.62	0.07	1.98	0.56	2.23	1.94	0.12	238	215	303	古墳時代後期末
161	第3調査地E区	堅穴住居3 P23	須恵・有蓋高杯	63.25	0.89	20.70	5.02	0.05	2.71	0.48	4.86	1.72	0.10	198	157	267	古墳時代後期末
162	第3調査地E区	堅穴住居3	須恵・甕or壺	64.53	1.02	20.45	7.28	0.09	2.19	0.43	1.99	1.64	0.10	204	151	354	古墳時代後期末
163	第3調査地E区	堅穴住居3	土師・甕	66.73	1.01	19.17	4.99	0.08	2.00	1.48	2.03	2.11	0.13	208	452	280	古墳時代後期末
166	第3調査地E区	堅穴住居3	土師・甕	64.97	0.91	20.57	4.68	0.05	2.05	1.81	2.56	1.93	0.25	243	529	272	古墳時代後期末
167	第3調査地E区	堅穴住居3	土師・甕	66.47	1.00	19.45	4.50	0.05	2.02	1.57	2.56	1.96	0.17	261	501	283	古墳時代後期末
172	第3調査地C区	堅穴1	土師・甕	65.28	0.95	20.80	4.89	0.04	1.94	1.44	2.56	1.77	0.11	171	485	287	古墳時代後期末
173	第3調査地C区	堅穴1	土師・甕	64.42	0.96	20.11	4.95	0.04	2.20	1.72	3.19	2.13	0.07	206	542	287	古墳時代後期末
174	第3調査地C区	堅穴1	土師・甕	65.42	1.03	20.95	4.92	0.06	2.10	1.12	2.20	1.79	0.14	194	358	328	古墳時代後期末
176	第3調査地C区	堅穴1	土師・甕	65.87	1.13	20.85	5.02	0.06	2.05	1.03	2.01	1.66	0.13	183	311	292	古墳時代後期末
177	第3調査地E区	堅穴2	須恵・杯蓋	66.27	1.49	19.26	5.79	0.07	2.16	0.35	2.92	1.41	0.11	179	142	493	古墳時代後期末
178	第3調査地E区	堅穴2北西	須恵・杯身	66.23	1.05	19.05	3.10	0.04	2.63	0.40	5.72	1.49	0.13	150	152	332	古墳時代後期末
179	第3調査地E区	堅穴2	須恵・杯身	66.65	1.06	21.49	4.02	0.05	1.90	0.75	2.58	1.17	0.15	128	255	397	古墳時代後期末
181	第3調査地E区	堅穴2	須恵・高杯	64.47	1.25	22.50	5.34	0.05	2.10	0.33	2.50	1.15	0.12	127	121	429	古墳時代後期末
183	第3調査地E区	堅穴2	土師・甕	63.66	0.99	19.87	5.95	0.07	2.08	1.11	3.60	2.16	0.23	186	381	515	古墳時代後期末
184	第3調査地E区	堅穴2	土師・甕	65.89	0.86	19.43	4.41	0.06	2.18	1.62	3.08	2.05	0.14	245	487	275	古墳時代後期末
185	第3調査地E区	堅穴2北西	土師・甕	65.05	0.93	22.80	3.98	0.05	1.97	1.26	1.71	1.68	0.38	184	391	299	古墳時代後期末
186	第3調査地E区	堅穴2南東	土師・甕	65.73	1.07	19.44	5.10	0.06	1.97	1.30	3.10	1.91	0.13	226	414	281	古墳時代後期末
187	第3調査地E区	堅穴2	土師・甕	65.83	1.17	20.98	5.36	0.06	1.86	0.89	1.90	1.71	0.06	205	267	354	古墳時代後期末
188	第3調査地E区	堅穴2	甕	64.95	1.09	21.58	4.79	0.05	1.89	1.70	1.65	1.92	0.12	198	532	320	古墳時代後期末
308	第3調査地E区	堅穴住居4	弥生・甕	66.58	0.76	21.00	4.96	0.06	1.85	0.83	2.20	1.16	0.42	120	278	261	弥生時代中期
309	第3調査地E区	堅穴住居4	弥生・甕	63.66	1.01	23.66	4.04	0.05	2.17	0.47	2.62	2.01	0.11	244	151	285	弥生時代中期
310	第3調査地E区	堅穴住居4	弥生・甕	65.50	1.14	21.11	4.49	0.06	2.00	1.35	2.56	1.36	0.29	140	376	287	弥生時代中期
318	第3調査地E区	堅穴住居5	弥生・台付壺	65.73	0.99	19.52	5.53	0.07	1.99	0.87	2.80	1.93	0.26	247	301	328	弥生時代中期
325	第3調査地E区	堅穴4	弥生・甕	66.89	0.94	21.03	4.40	0.11	1.90	0.62	2.36	1.53	0.07	176	164	287	弥生時代中期
326	第3調査地E区	堅穴5	弥生・甕	68.35	1.01	19.34	3.39	0.04	1.86	1.04	2.87	1.73	0.16	177	345	377	弥生時代中期
327	第3調査地E区	堅穴5	弥生・壺	60.72	1.16	22.23	9.73	0.12	1.80	0.92	1.55	1.00	0.56	108	287	313	弥生時代中期
328	第3調査地E区	堅穴5	弥生・甕	65.40	1.03	22.32	4.30	0.03	1.77	0.47	2.59	1.69	0.21	143	169	321	弥生時代中期
334	第3調査地E区	堅穴5	弥生・甕	63.65	0.95	24.06	3.85	0.07	2.01	1.12	2.62	1.35	0.18	139	335	305	弥生時代中期
414	第3調査地A区	黒色土	弥生・甕	63.99	0.96	23.19	4.63	0.04	2.01	0.54	2.68	1.71	0.07	228	163	296	弥生時代中期
417	第3調査地E区	包含層	弥生・甕	59.68	1.08	24.41	7.64	0.09	2.16	0.75	2.88	0.97	0.10	105	240	325	弥生時代中期
420	第3調査地E区	包含層	弥生・甕	64.23	0.97	24.37	3.55	0.06	1.95	0.87	2.52	1.14	0.11	159	306	323	弥生時代中期
430	第3調査地E区	包含層	弥生・甕	61.41	1.00	23.93	6.50	0.07	1.96	0.68	2.88	1.28	0.14	165	265	340	弥生時代中期
439	第3調査地E区	包含層	弥生・甕	62.89	0.98	24.32	4.31	0.05	1.97	1.00	2.85	1.27	0.22	118	294	312	弥生時代中期
441	第3調査地E区	包含層	弥生・甕	64.61	0.91	21.78	5.72	0.10	1.89	0.52	2.38	1.71	0.13	241	156	311	弥生時代中期

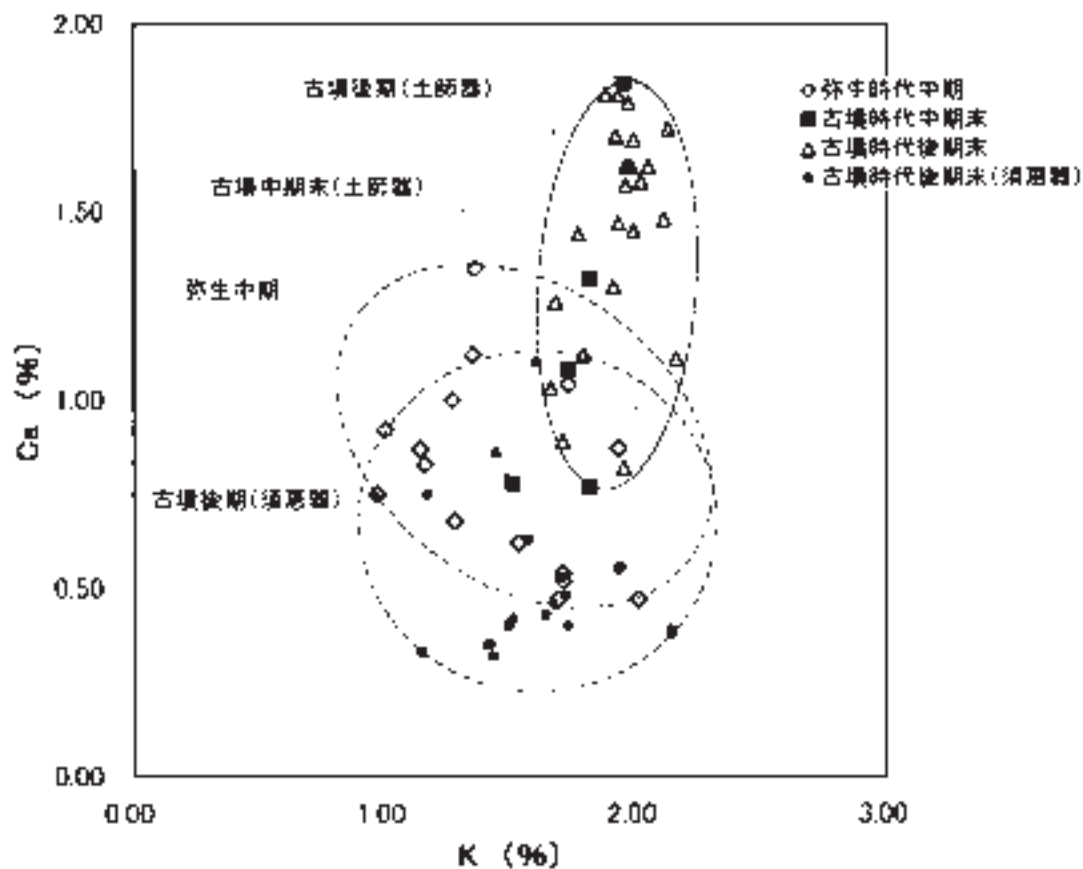


図153 遺跡内での時期別による胎土比較(K-Ca)

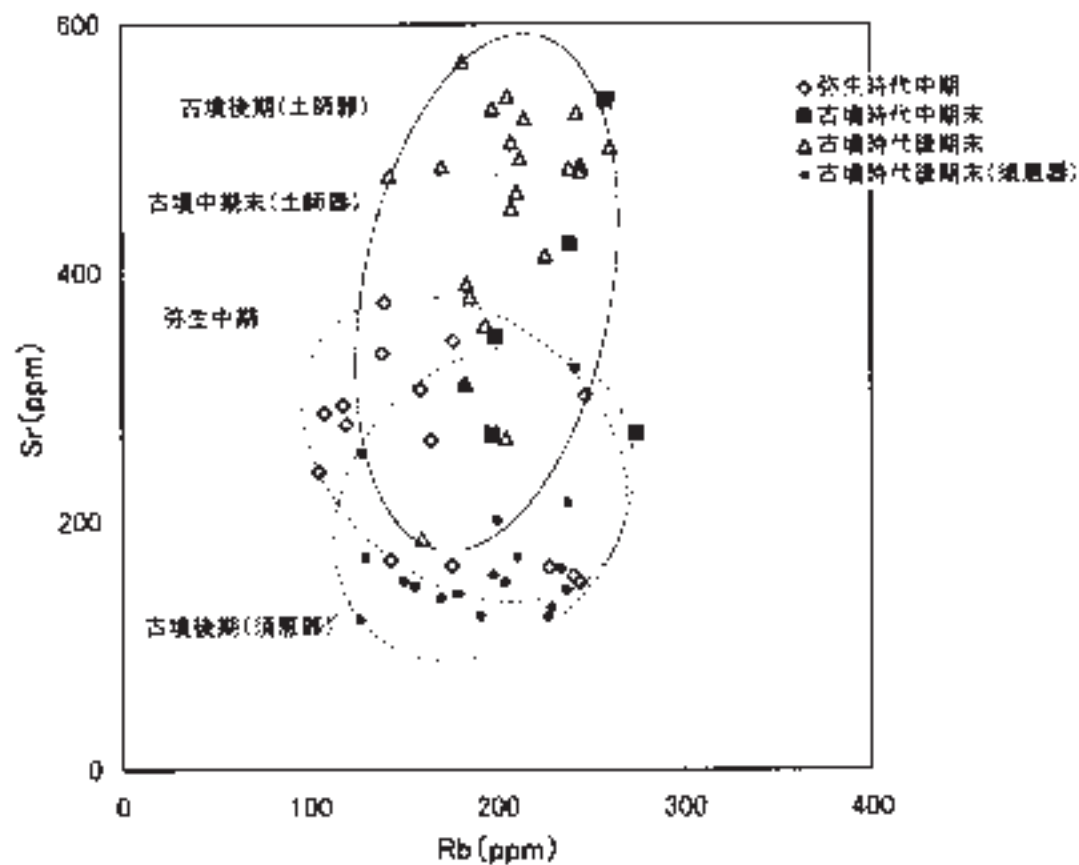


図154 遺跡内での時期別による胎土比較(Rb-Sr)

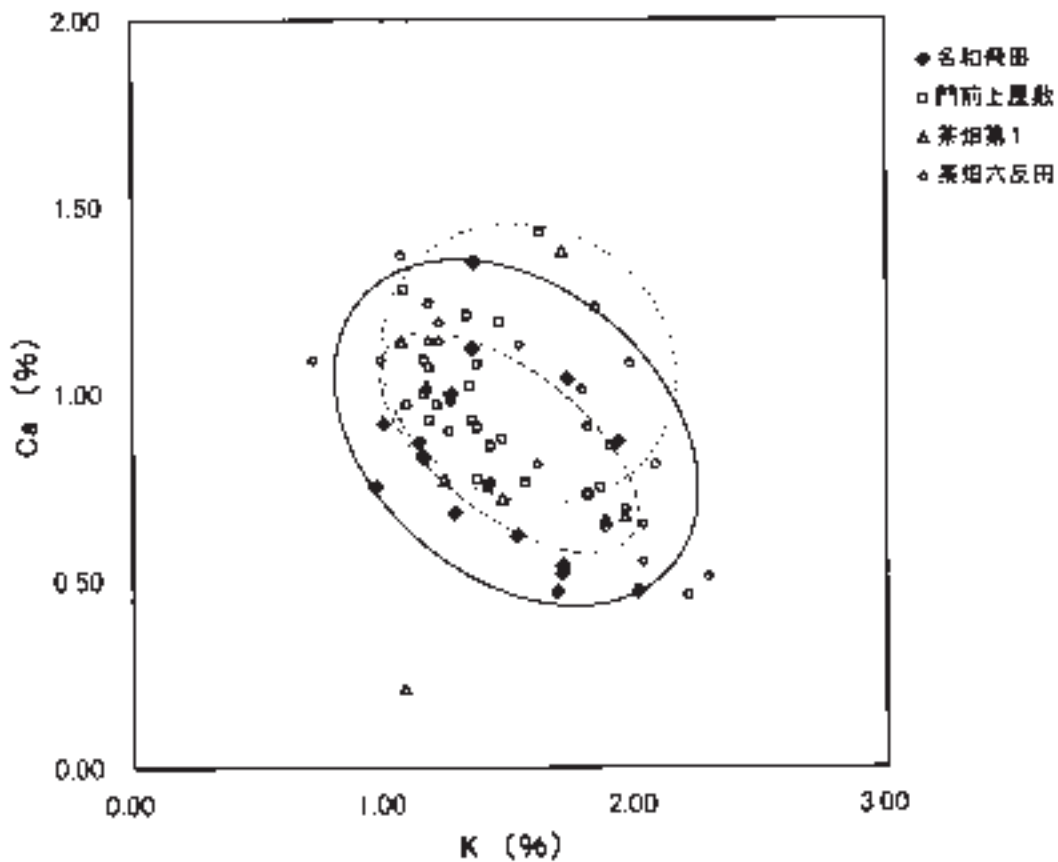


図155 弥生中期の各遺跡における胎土比較(K-Ca)

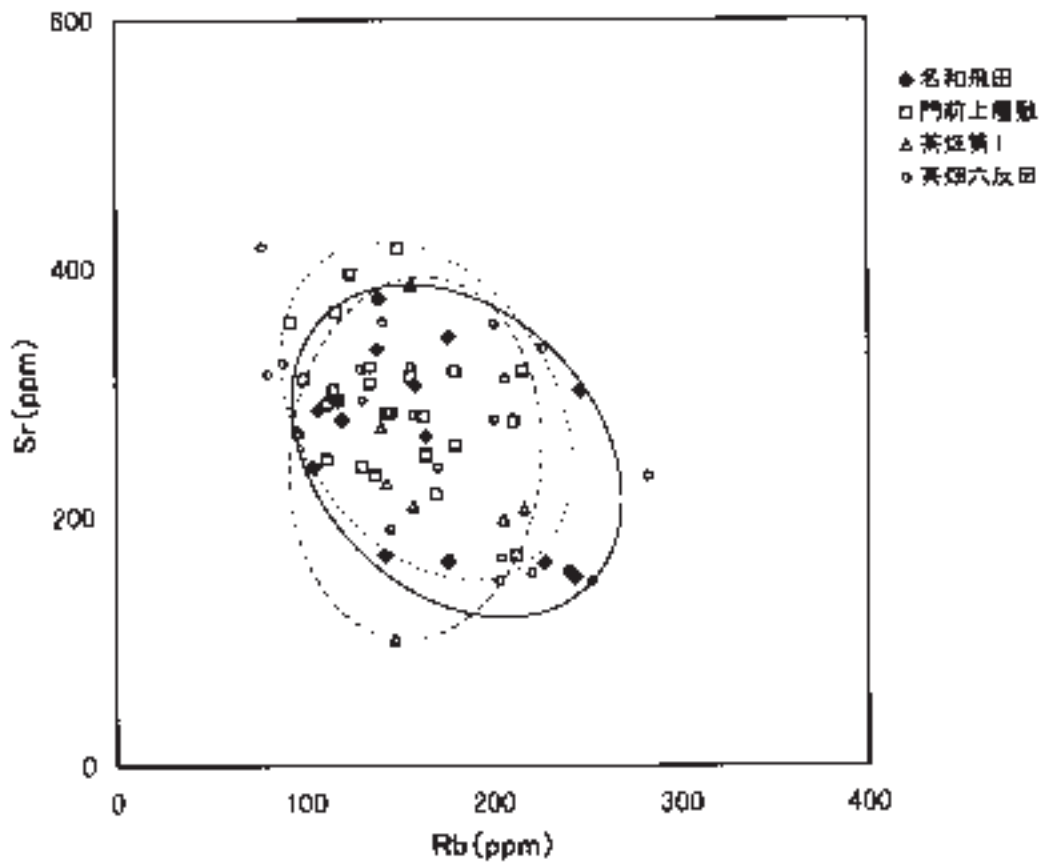


図156 弥生中期の各遺跡における胎土比較(Rb-Sr)

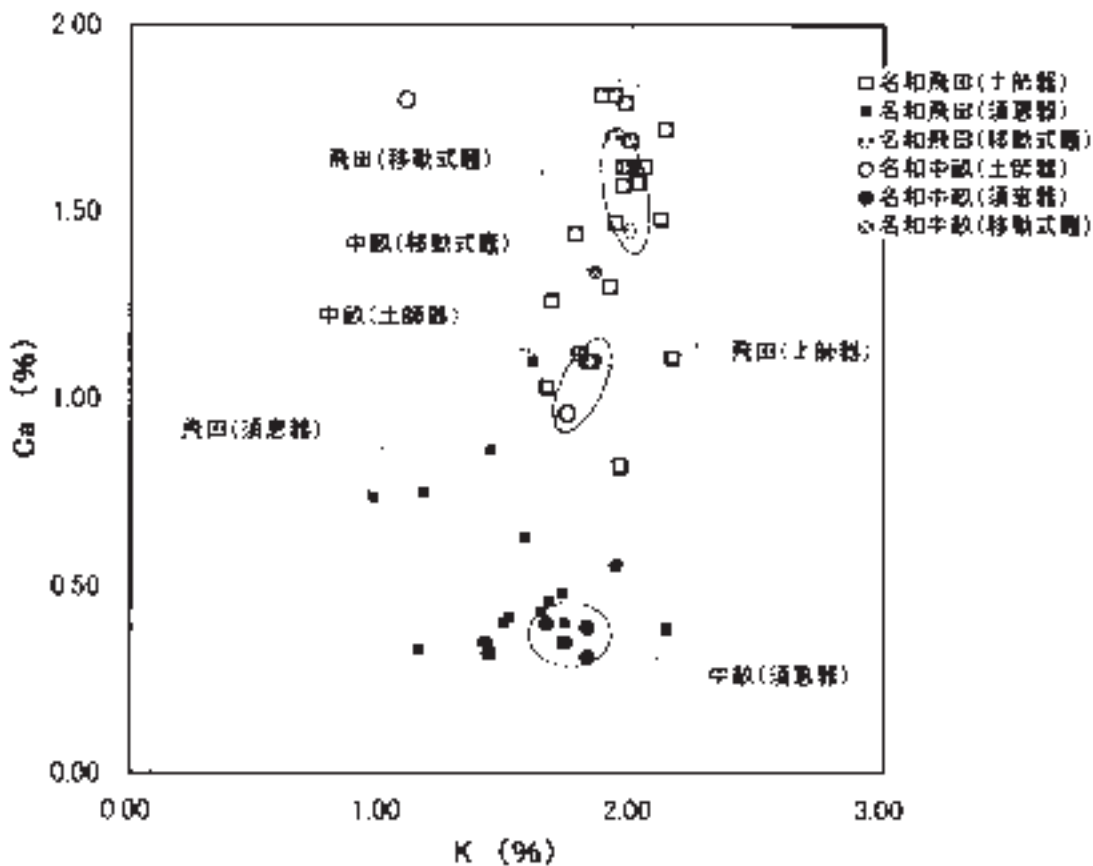


図157 古墳後期の器種・焼成別胎土の比較(K-Ca)

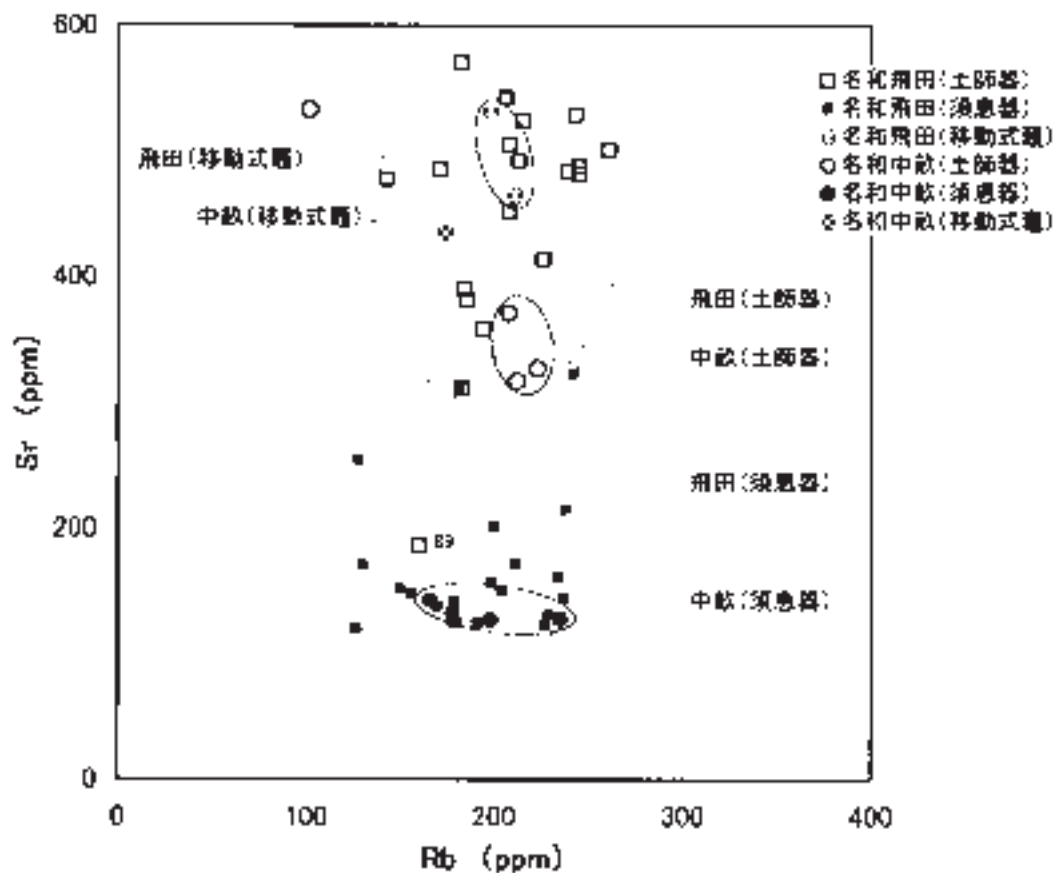


図158 古墳後期の器種・焼成別胎土の比較(Rb-Sr)

第6節 石器石材の原産地推定

藤根 久（パレオ・ラボ）

1. はじめに

名和飛田遺跡の調査では、黒曜石製剥片、ガラス質安山岩製の打製石剣や石匙あるいは剥片が出土した。ここでは、これら石器について蛍光X線分析計を用いて黒曜石あるいはガラス質安山岩の原産地の検討を行った。

2. 試料と方法

試料は、黒曜石製石器5試料とガラス質安山岩製石器5試料である（表18）。試料と方法は、黒曜石製石器とガラス質安山岩製石に分けて述べる。

[黒曜石製石器]

試料は、精製水で超音波洗浄した後、メラミンフォーム製のスポンジに精製水を少量含ませて試料表面に付着する土壌等の汚れを除去した。

表18 分析した黒曜石製・ガラス質安山岩製石器

	種類	掲載 遺物番号	取上	出土地区 遺構	層位	備考
1	加工痕のある剥片	S 237	456	B区G3	層	黒曜石
2	剥片		636 1	A区土坑22	埋土中	黒曜石
3	剥片		467	B区G2	層	黒曜石
4	剥片		273 1	A区C2	層	黒曜石
5	剥片		643	A区土坑22	埋土中	黒曜石
6	打製石剣 (局部磨製)	S 234	1497	E区O8	層	ガラス質安山岩
7	石匙	S 181	1986	C区H2	層	ガラス質安山岩
8	剥片		636 2	A区土坑22	埋土中	ガラス質安山岩
9	剥片		636 3	A区土坑22	埋土中	ガラス質安山岩
10	剥片		273 2	A区C2	層	ガラス質安山岩

ガラス質安山岩製石器試料は、精製水で超音波洗浄して、比較的平坦な面（あるいは凸面）を選んで測定面とした。なお、試料 6と 7は、エアブラシにより風化層を一部除去して測定した。

測定に用いた蛍光X線分析計は、セイコー電子工業(株)製の卓上型蛍光X線分析計SEA-2001Lである。X線管球はロジウム(Rh)、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、電圧50KV、測定時間300秒、照射径10mm、電流自動設定、測定室真空である。

測定した元素は、主成分元素のカリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)と微量元素のルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素である。各元素は、定量計算は行わずX線強度(cps)のみ測定した。

黒曜石の産地推定は、望月(1999)が示した蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定の判別図法と同様の方法を用いた。すなわち、主成分元素のカリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)と微量元素のルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)

の合計7元素を蛍光X線分析で測定し、各元素のX線強度(cps)から以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb分率= $Rb \times 100 / (Rb + Sr + Y + Zr)$ 2) Sr分率= $Sr \times 100 / (Rb + Sr + Y + Zr)$
3) $Mn \times 100 / Fe$ 4) $\log(Fe/K)$

これら指標値を用いた2種類の判別図(横軸Rb分率 - 縦軸 $Mn \times 100 / Fe$ の判別図と横軸Sr分率 - 縦軸 $\log(Fe/K)$ の判別図)を作成し、日本各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定するものである。判別図に用いる黒曜石原産地及び判別群名称は表19に示す。判別群名称は望月(2002)を参考にした。

[ガラス質安山岩製石器]

ガラス質安山岩の原産地推定は、望月・堤(1996)などが示した蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定の判別図法と同様の方法を用いた。判別図を作成するために測定した原石試料は、奈良県・大阪府境の二上山周辺3ヶ所(二上山北側谷、二上山太子谷、春日山みかん畑)、四国の国分台周辺9カ所(国分台下みかん畑、自衛隊演習場横、高産霊神社、神谷神社、雌山、雄山、城山南側、城山北側、金山)から採取したサヌカイトである。下呂石は、岐阜県下呂市湯ヶ峰林道で採取したガラス質流紋岩である。また、(財)鳥取県埋蔵文化財センターから提供していただいた青谷2試料と東郷町麻畑1試料のガラス質安山岩も測定した。

3. 結果および考察

表19に、黒曜石製石器およびガラス質安山岩製石器について蛍光X線分析を行った各元素のX線強度(cps)と計算による指標値を示す。

[黒曜石製石器]

図159には主な黒曜石原石をプロットした判別図を示す。各判別群で重複している箇所があるため各判別群を楕円で示す。

図159の左図では、試料 1、 3、 4、 5は隠岐久見崎群域に、試料 2は隠岐箕浦海岸群域にそれぞれプロットされた。一方、図159の右図では、青森県深浦八森山群と重複して隠岐産黒曜石が分布するが、4がこの領域の下方に位置し、3がさらに下方の北海道白滝黒曜の沢群に近い位置にプロットされた。

両者の判別図から、試料 2が隠岐箕浦海岸群、その他の4試料が隠岐久見崎群と推定される。なお、指標値から検討した結果、九州産黒曜石の可能性は低い(沼津工業高等専門学校望月明彦氏の私信による)。

[ガラス質安山岩製石器]

図160には主なガラス質安山岩原石(サヌカイトおよび下呂石を含む)をプロットした判別図を示す。各判別群で重複している箇所があるため各判別群を楕円で示す。

図160の上図では、試料は、二上山周辺および四国の国分台周辺のサヌカイトの多くが集中する領域のやや上方にプロットされた。なお、提供していただいた青谷あるいは麻畑のガラス質安山岩

は左方にプロットされた。一方、図160の下図では、城山系あるいはその左方および金山域の上方にプロットされた。なお、提供していただいた青谷あるいは麻畑のガラス質安山岩は、青谷が二上山系（二上山＋春日山）の上方に、麻畑が高産霊神社2群の上方にそれぞれプロットされた。

両者の判別図から、城山系や金山などの四国産サヌカイトの可能性が高い。なお、図160の上図において四国の国分台周辺のサヌカイト領域からやや外れることから、未知四国産サヌカイトあるいは他地域ガラス質安山岩の可能性も否定できない。

4. おわりに

ここでは、黒曜石製あるいはガラス質安山岩製の石器について、蛍光X線分析による原産地推定について検討した。その結果、黒曜石製石器は隠岐産であることが分かった。一方、ガラス質安山岩製石器については、四国サヌカイトの可能性高いことが分かったが、完全に一致しなかったことから、今後原石調査を行う必要がある。なお、黒曜石については沼津工業高等専門学校望月明彦氏に原石の提供および助言を頂きました。ここに感謝の意を表します。

引用文献

望月昭彦・堤 隆（1996）黒曜石の産地推定による南関東の細石刃文化の研究（ ）、日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集、112-113.

望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定、埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2 上和田城山遺跡篇、大和市教育委員会、172-179p.

望月明彦（2002）茅野市馬捨場遺跡出土黒曜石製石器の産地推定、長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書58、広域営農団地農道整備事業八ヶ岳地区埋蔵文化財発掘調査報告書 茅野市内、馬捨場遺跡、長野県埋蔵文化財センター、149-158p.

No.	遺物名	石質	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log (Fe/K)	原産地推定
1	石器	黒曜石	30.244	4.056	148.651	13.681	0.000	5.469	30.096	27.781	2.729	0.000	0.692	隠岐久見崎群
2	剥片	黒曜石	35.789	4.071	162.287	11.897	0.000	4.646	37.499	22.014	2.509	0.000	0.657	隠岐箕浦海岸群
3	剥片	黒曜石	43.798	2.875	125.624	12.518	0.000	5.249	26.207	28.467	2.288	0.000	0.458	隠岐久見崎群
4	剥片	黒曜石	30.212	3.830	134.586	13.220	0.000	5.223	27.320	28.888	2.845	0.000	0.649	隠岐久見崎群
5	剥片	黒曜石	25.760	3.315	129.886	11.935	0.096	5.359	26.632	27.112	2.552	0.218	0.703	隠岐久見崎群
6	打製石剣 (局部磨製)	ガラス質安山岩	14.759	7.129	297.682	5.327	13.921	1.846	16.140	14.307	2.395	37.388	1.305	(四国産サヌカイト)
7	石匙	ガラス質安山岩	14.065	7.134	314.465	4.825	15.554	1.831	15.667	12.739	2.269	41.064	1.349	(四国産サヌカイト)
8	剥片	ガラス質安山岩	17.353	8.066	319.420	5.789	16.888	2.510	19.373	12.991	2.525	37.899	1.265	(四国産サヌカイト)
9	剥片	ガラス質安山岩	18.830	8.662	359.601	5.724	19.118	2.587	21.758	11.637	2.409	38.868	1.281	(四国産サヌカイト)
10	剥片	ガラス質安山岩	16.258	6.593	286.685	4.813	16.248	2.228	18.022	11.651	2.300	39.331	1.246	(四国産サヌカイト)

表19 黒曜石製・ガラス質安山岩製石器の測定結果と原産地推定

表20 黒曜石原産地の判別群名称(望月、2002を参考)

都道府県	エリア	判別群	記号	原石採取地
北海道	白滝	八号沢群	STHG	
		黒曜の沢群	STKY	
	赤井川	曲川群	AIMK	
青森	木造	出来島群	KDDK	出来島
	深浦	八森山群	HUHM	岡崎浜
秋田	男鹿	金ヶ崎群	OGKS	金ヶ崎温泉、脇本海岸
		脇本群	OGWM	脇本海岸
岩手	北上川	北上折居2群	KKO2	北上川
山形	羽黒	月山群	HGGS	月山荘前
新潟	新津	金津群	NTKT	金津
	新発田	板山群	SBIY	板山牧場
	佐渡	真光寺群	SDSK	真光寺山
		金井二ツ坂群	SDKH	二ツ坂
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK	湯ノ倉
	色麻	根岸群	SMNG	根岸
	仙台	秋保1群	SDA1	土蔵
		秋保2群	SDA2	土蔵
	塩釜	塩釜群	SGSG	塩釜
栃木	高原山	甘湯沢群	THAY	甘湯沢
		七尋沢群	THNH	七尋沢、宮川、枝持沢
長野	和田(WD)	鷹山群	WDTY	鷹山、東餅屋
		小深沢群	WDKB	小深沢
		土屋橋西群	WDTN	土屋橋西
	和田(WO)	ぶどう沢群	WOBD	ぶどう沢
		牧ヶ沢群	WOMS	牧ヶ沢下
		高松沢群	WOTM	高松沢
	諏訪	星ヶ台群	SWHD	星ヶ台、星ヶ塔
蓼科	冷山群	TSTY	冷山、麦草峠、麦草峠東	
神奈川	箱根	芦ノ湯群	HNAY	芦ノ湯
		畑宿群	HNHJ	畑宿
		鍛冶屋群	HNKJ	鍛冶屋
静岡	天城	上多賀群	HNKT	上多賀
		柏峠群	AGKT	柏峠
東京	神津島	恩馳島群	KZOB	恩馳島
		砂糠崎群	KZSN	砂糠崎
山陰	隠岐	久見崎群	OKHH	久見崎
		箕浦海岸群	OKMK	箕浦海岸
			OKKH	岸浜
九州	大分	姫島	OOHM	姫島

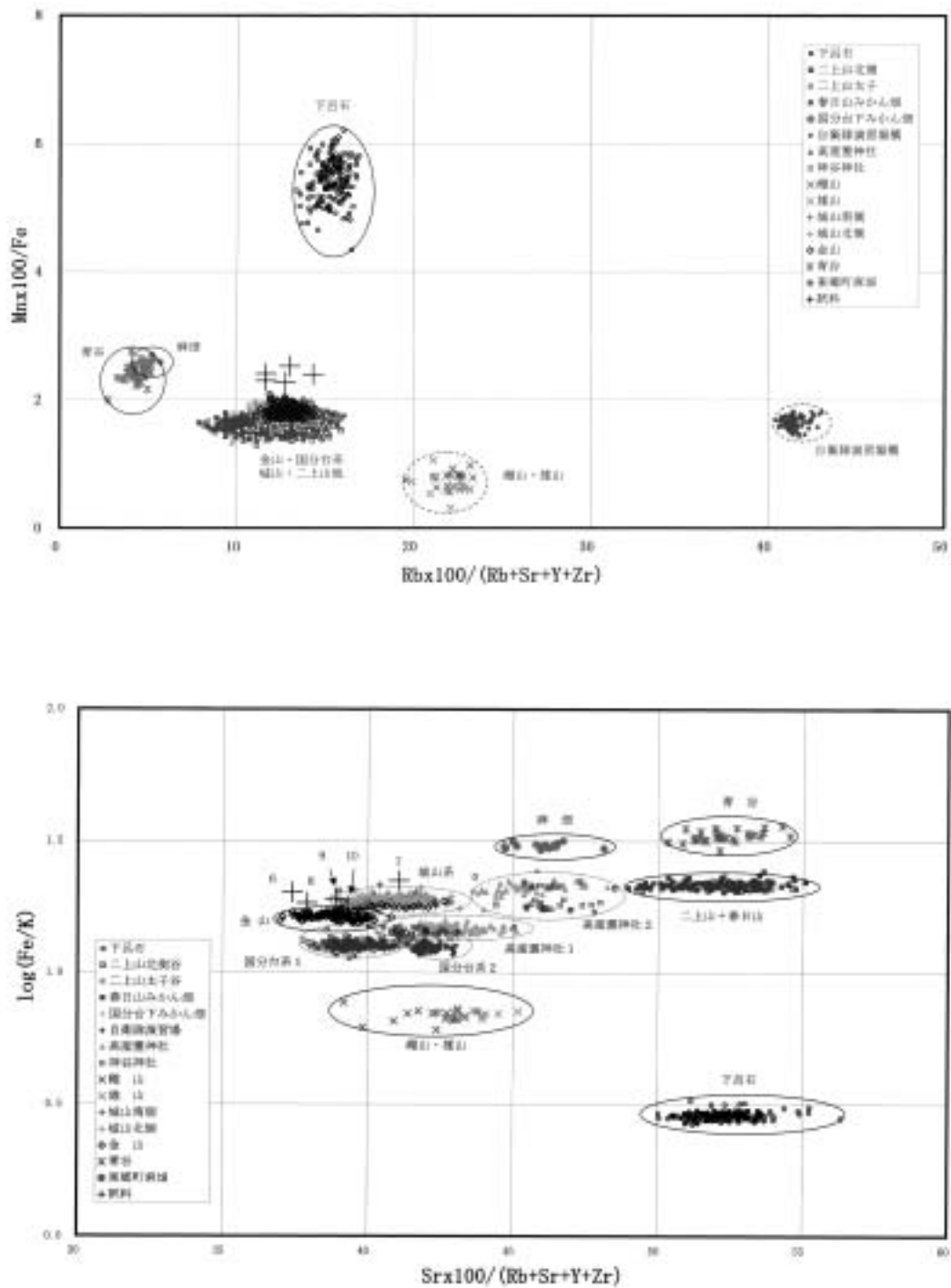


図160 サヌカイト・ガラス質安山岩の産地判別図（試料は+で示す）

第7節 縄文時代早期末・前期初頭の土器と石器について

本調査では多量の縄文時代遺物の出土を見た。大半が包含層出土のため資料的な制約があるものの、その量と質は周辺地域の中では群を抜いている。本節では、これらの遺物のうち最も充実した内容をもつ早期末～前期初頭の土器と、極めて多量の出土を見た石器類について検討し、関連遺跡との比較を行うことで、縄文時代早期末～前期初頭における名和飛田遺跡の特質を考えてみたい。

早期末・前期初頭土器の編年的位置

1. 名和飛田遺跡出土隆帯文土器群の様相

本調査で出土した早期末～前期初頭土器は、繊維混入の隆帯文土器群と、これに後続する西川津式土器がある。ここでは、資料の充実している前者について検討を行う。これらの隆帯文土器の特徴は先にふれた通りであるが、今一度その概要を示す。1. 胎土に繊維を混入することを基本とする。2. 口縁に隆帯を貼り付ける。口縁以外にも横走隆帯をもつものや、垂下隆帯をもつものもある。隆帯上には様々な工具の刺突や押し引きでキザミを施す。隆帯のないものも一定量存在する。3. 外面に縄文を施すものと、条痕を施すものの二者がある。内面はいずれも条痕ないしはナデで調整される。4. 器形はやや尖底気味の砲弾型を呈す。口縁は平口縁のものが多いが、波状口縁をなすものも一定量見られる。底部は丸底をなす。器種は深鉢のみで器形にもバラエティーが見られないものの、大きさには大小の別がある。以上の特徴をもつ土器群は井上智博氏に従えば「長山式」(井上1991・1996)に、小林青樹氏に従えば、縄文地のもののは「福呂式」、条痕地のものは「長山馬籠式」に当てはまると思われる(小林2000)(注1)。現在、これらの繊維混入の隆帯文土器は小林氏設定の2型式で捉える認識が一般化しつつあるようである(高橋2004、柳浦2001、矢野2002など)。しかし、報告でも触れたように両者は地文にこそ違いがあるものの、その他の特徴は極めて共通性が高く、型式として分離しうるか検討の余地が大きく残っていると思われる。したがって、まずは名和飛田遺跡出土資料から隆帯文土器の実態を捉え直してみたい。

口縁・隆帯形態の分類と型式変化の方向性(図161)

口縁形態と口縁への隆帯の貼り付けのあり方が編年上の指標となることは早くから指摘され、型式学的な検討の結果、隆帯文土器から西川津式A類への連続的な変化が明らかにされている(中原1989、井上1991・1996)。こうした成果を踏まえて、名和飛田遺跡出土資料を、隆帯の形態と貼り付けのあり方および口縁部の形態から、次の8類に分類した(図161)。



図161 口縁・隆帯形態の分類

A類：口縁端より下位に隆帯をもつもの。隆帯は断面丸形で、貼り付け面が小さいものが多い。

B類：口縁端に隆帯をもつもの。隆帯の形態からさらに3類に細分した。

B 1類：隆帯の断面形が丸みを帯び、貼り付け面が小さい。

B 2類：隆帯を口唇上に乗せるように貼り付ける。断面丸形で、貼り付け面が極めて小さい。

B 3類：隆帯がしっかりと押圧されて貼り付けられる。低くつぶれた隆帯となる。

C類：隆帯が口縁端部と一体化しているもの。隆帯貼り付け後に口縁端面と隆帯下端にナデが加えられており、隆帯の継ぎ目が見られない。隆帯外面にもナデを加え、面を形成するものもある。

D類：口縁端に幅広の隆帯を貼り付けて密着させ、口縁部肥厚帯とするもの。

E類：口縁端に隆帯を貼り付けた後に、口縁の面取りを行って、断面形を三角形に仕上げるもの。

F類：口縁部隆帯をもたないもの。隆帯文成立以前の無文口縁の系譜を引くものか、口縁部隆帯が省略された装飾度の低いものと考えられ、基本的に型式上の新旧は想定しない。

従来から想定されている隆帯の口縁部との一体化傾向という型式変化の方向性に準拠すれば（中原1989、井上1991）、A類 B類 C類 D・E類となるだろう。D類やE類は隆帯が肥厚帯へと変化し、西川津式A類で普遍的に見られる口縁形態と同じものとなっているので、これらが型式学的に新相を示すものと捉えうる。C類は口縁との一体化が明確に意識され、隆帯外面をナデ調整で面取りするものも見られることから、D・E類への連続性を追えるだろう。問題となるのはA類とB類が型式学的な前後関係を示すかどうかである。B類にはいくつかのバリエーションが認められるので、このなかから連続的な変化が起こっていると思われる。例えば、B 3類は隆帯の形態がB 1・2類と明らかに異なり、口縁との一体化も進んでいる。これがC類などに直接連続するかどうかは別にしても、型式学的に後出のもの可能性がある。他方、B 1・2類は隆帯の断面形や接面の状態がA類と共通する。また、A類の隆帯の位置は端部から比較的遠いものからB類に近いものまで幅があるので、貼り付けは臨機的に行われているようである。したがって、A類とB 1類との区別もさほど明確に意識されていなかったと思われる。両者は基本的には同一段階の土器で、隆帯の貼り付け位置に多様性があったと考えられるので、A類 B類という型式変化は考えない。以上を整理すると、A・B 1・B 2類 B 3類 C類 D・E類となる。この型式学的な変化の方向性が妥当かどうか、またこれが編年の指標となりうるかは、口縁・隆帯形態以外の特徴の分析とあわせて後に検討する。

隆帯文土器群の構成要素（表21）

隆帯文土器群はすでに述べたように地文や調整、口縁・隆帯形態や、隆帯上のキザミなどの土器を構成する諸要素に多様性が見られる。そこで本遺跡出土土器群に見られる諸属性を整理して、隆帯文土器の諸要素とその構成のされ方について分析を行う。特に、縄文地のものと条痕地のものを異なった型式として分離しうるかを検討の主眼とする（注2）。

まず土器器面に施された地文や調整の構成から見てみよう（表21-1）。外面の地文が縄文のものと条痕のものとの比率は、前者が30%、後者が70%となり、条痕地が主体となる。縄文原体はR L単節縄文が主体となるほか、L R単節縄文も一定量見られ、1点のみ無節縄文（ℓ）が存在する。条痕は内外面とも貝殻条痕が中心になるものの、植物質工具による条痕も多く見られ、施文方法にバラエティーが見られる。内外面で条痕工具が異なる個体も多く見られる。外面地文が縄文か条痕かに関わらず、内面調整には同じものが見られ、その構成の比率もほぼ同じである。

続いて先に分類した口縁・隆帯形態と外面調整の相関関係について見てみる（表21-2）。地文の

表21 名和飛田遺跡出土隆帯文土器の属性構成

1 器面調整							2 調整と口縁形態												
内面調整							口縁・隆帯の形態												
外面調整		貝殻条痕	植物条痕	条痕	工具ナデ	ナデ	計	外面調整		A	B1	B2	B3	C	D	E	F	計	
	RL縄文	7	2	1	2	13	25		RL縄文	4	8	3				1	4	4	24
	LR縄文	1	2	2		6	11		LR縄文	1	4							2	7
	無節縄文		1				1		無節縄文									1	1
	貝殻条痕	25	12	3	1	20	61		貝殻条痕	8	15		2	2		1	9	37	
	植物条痕	2	8	2	2	5	19		植物条痕	2	5	2	2	3			1	15	
	条痕	1	1			7	9		条痕	2	3	1		1				7	
	ナデ	6	4	1	3	24	38		ナデ	8	8	1	1	1		2	5	26	
	縄文合計	8	5	3	2	19	37		縄文合計	5	12	3				1	4	7	32
	条痕合計	28	21	5	3	32	89		条痕合計	12	23	3	4	6		1	10	59	
計	42	30	9	8	75	164	計	25	43	7	5	7	1	7	22	117			

3 調整と隆帯上キザミ							4 口縁形態と隆帯上キザミ														
隆帯上キザミ							口縁・隆帯の形態														
外面調整		半裁竹管	貝殻腹縁	貝殻圧痕	ヘラ	棒	装飾押圧	なし	計	隆帯上キザミ		A	B1	B2	B3	C	D	E	計		
	RL縄文	3	6	3	4	3	2		21		半裁竹管	8(4)	6(1)								14(5)
	LR縄文	2		1			2		5		貝殻腹縁	6(6)	12(3)	5	3	2	1	2		31(9)	
	貝殻条痕	1	17	3	5	1	2	4	33		貝殻圧痕	5(4)	4	1						10(4)	
	植物条痕	3	5	2	5		1	1	17		ヘラ	4(4)	6	1		4		4		19(4)	
	条痕	3	4	2		1		1	11		棒	2(1)	6(3)							8(4)	
	ナデ	7	6		6	3	1	2	25		装飾押圧		6							6	
	縄文合計	5	6	4	4	3	4		26		なし		3		2	1				6	
	条痕合計	7	26	7	10	2	3	6	61		計	25(19)	43(7)	7	5	7	1	6		94(26)	
	計	19	38	11	20	8	8	8	112												

* それぞれ図化したもののみ計数。遺存部位によって観察できる属性が異なるため、母数はすべて異なっている。

違いに関わらず、口縁・隆帯形態はB 1類が主体となり、次いでA類が多い。縄文地、条痕地とも、A類とB 1類の構成率がほぼ同じになる点は重要であろう。B 2類は縄文地、条痕地とも見られるが、B 3類、C類は条痕地しか見られない。D・E類は条痕地であれば基本的に西川津式A類として認識できるものであるが、これに縄文地のものが見られる点が注目される(注3)。隆帯をもたないF類は縄文地、条痕地ともに一定量存在する。このように、地文の違いと口縁・隆帯形態が相関するものはB 3・C・D・E類で、ほかは縄文地、条痕地とも、ほぼ同じ比率で構成されていることが指摘できる。

次に、隆帯上に施されるキザミ(押圧による加飾も含む)と他の属性との対応関係を見てみる(表21-3・4)。キザミには多くのバラエティーが見られるが、縄文地、条痕地とも同様のキザミが施されている。実際に個々の資料を見ていくと全く同じ加飾が行われているものが多数見られる。貝殻条痕地文のものは貝殻でキザミを施すものが非常に多い。一つの工具で複数の作業をこなそうとするのは製作形態としてはごく普通のあり方だろう。むしろ、他の工具で加飾を行うものが一定量見られることこそ、キザミの多様性をよく示しているとも捉えられる。なお、縄文地でも貝殻で加飾するものが最も多いので、キザミ工具は地文に関わらず貝殻を比較的多用する傾向にあったと言える。

口縁・隆帯形態とキザミの関係を見ると、A類とB 1類のキザミのパターンが共通することが注目される。また、この2類型には隆帯上だけでなく、口縁上端、口唇部にもキザミが施される点でも共通性が高い。これら以外の類型ではキザミのバリエーションがきわめて少なくなり、B 3・C・D・E類は装飾効果の低い貝殻腹縁やヘラによる線状のキザミのみしか見られない。

本遺跡の隆帯文土器の属性構成からは、縄文地、条痕地のものとも地文以外の属性は非常に共通性が高いことが確認される。したがって、縄文と条痕の違いも多様なあり方を示す器面調整のバリ

エーションと捉えることも可能ではないだろうか。これらの隆帯文土器群は、多様な要素が複合的に組み合わせられて成り立つひとつの構造体を成しており、これを複数の型式に分離するのは不可能と考える。

以上の分析から、小林氏設定の「福呂 式」は井上氏設定の「長山式」のバリエーションの中で理解したほうがよいと考えられる。そもそも「福呂 式」設定の基準資料となる福呂遺跡の土器は実質わずか3個体のみと資料的な制約が大きい。また、小林氏も触れているように「福呂 式」とされたものは非常に不安定で、「福呂 式」と西川津式土器が混在したものでしかない可能性が高く、氏の言う「長山馬籠式」を示す内容ではない。したがって、これと「福呂 式」を層位的関係と捉えて時期差を認定するのは困難と思われる。また、「福呂 式」認定の最大の基準は縄文地文主体という点にあるだろう。しかし、小林氏が「福呂 式」の前段階に「島大構内1次調査式」として型式設定した島根大学構内遺跡1次・11次調査（会下編1997・2002）出土の繊維土器群に条痕地のものが縄文地のものとほぼ同量含まれていることを考えると、隆帯文土器群成立段階からすでに縄文地文と条痕地文が量的に拮抗する構成をなしていた可能性が高い。したがって、必ずしも縄文地文の隆帯文土器を積極的に別型式として分離する必要はないと考えられる。

隆帯文土器の編年

以上の検討によって、これらの隆帯文土器群を複数の土器型式に分離して捉えることは不可能と考えたが、一土器型式内で時期的な段階差を認識できる可能性は残されている。もちろん地文ではこれを認識できない。指標となりうるのは先に検討した口縁・隆帯形態であろう。変化の方向性はA・B1・B2類 B3類 C類 D・E類と捉えたが、その他の属性の構成のされ方もこれを支持する。外面地文と口縁形態の対応で重要なのは、B3・C類に条痕地文のみしか存在しない点であろう。わずかに見られるD・E類は縄文地のみが存在する（注4）。両類型は肥厚帯状を呈すことから、かなり新しい段階まで縄文地が少数残ると評価しておく。このことから外面縄文地文の継続期間は長いと思われ、隆帯文土器の展開期間の全時期を通じて条痕文と共存する可能性が高い。キザミのあり方は、A・B1類とそれ以外で大きく異なる。B3・C・D・E類では、キザミ工具の集約化とキザミ形態の簡素化が見られる。これも型式学的な変化を示しているものと評価できよう。

以上のことから、A・B1・B2類が型式学的に古相を示し、B3・C・D・E類が新相を示すと考えられるので、これを基準に相対的な時期差が認識できるだろう。古相を示す一群を古段階、新相を示す一群を新段階とする。ただし、現状ではこれを裏付ける一括資料は皆無であるので、今後さらに検討が必要となろう。

2. 隆帯文土器群の土器型式構造

関連遺跡との比較

名和飛田遺跡出土資料で確認できた隆帯文土器群の様相を他遺跡と比較し、その異同を見て行く。隆帯文土器群がまとまって出土している遺跡は少なく、ここでは福呂遺跡（野崎編2000）と長山馬籠遺跡（益田ほか1989）の2遺跡を比較対象とする。福呂遺跡は「福呂 群」の遺構内およびA地点遺物集中地点の土器を、長山馬籠遺跡は「Z 群」・「Z 群」の隆帯文土器を分析資料とする。外面地文と口縁・隆帯形態の構成率を遺跡ごとに示し、概要を把握してみる（図162）。福呂 群は、外面縄文地が圧倒的主体を占める（口縁を含む個体は全て縄文地）。名和飛田遺跡の地文は条痕が主体となる。新段階のB3・C・D・E類を除くと、若干縄文地の組成率が上がり、縄文地：条痕地

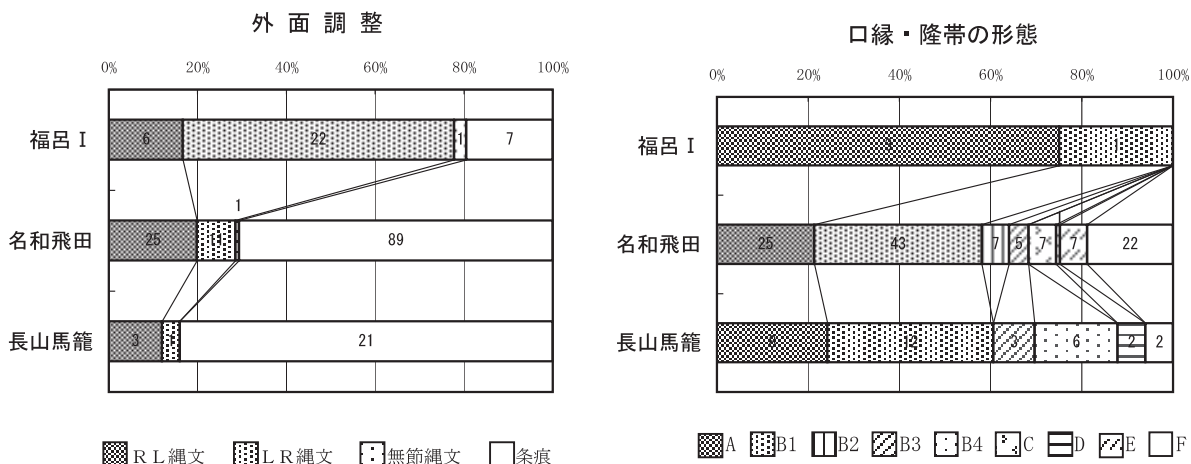


図162 隆帯文土器の特徴の比較

が1：2の割合となる。長山馬籠遺跡では縄文地のものが2割以下と少ない。ただし、A・B1類のみに限ると3割近くが縄文地となる。これらを比較すると福呂群の縄文地の割合が突出している点が注目される。縄文原体は福呂群ではLR単節縄文が主体となるが、名和飛田遺跡ではRL単節縄文のほうが多い。撚り方向は異なるが、福呂群、名和飛田遺跡とも縄文の節が大きく、撚りがやや緩く粗雑な印象を受ける点や、器面上に浅く施されるものが多い点で類似性が高い(注5)。

続いて口縁・隆帯形態の組成を見てみよう。福呂群では口縁部資料が少なく、組成を把握するのに十分でないが、A類とB1類で構成されることを確認できる。名和飛田遺跡、長山馬籠遺跡でもA類とB1類が主体となる。組成率は両遺跡ともB1類がやや多い。長山馬籠遺跡でB4類としたものは報告書中で「A2c類」と分類されたもので、名和飛田遺跡類型のB3類に貼り付けのあり方が近いので、新段階のものと考えられる。これを含め、長山馬籠遺跡では新段階のものが一定量構成されている。3遺跡ともA類とB1類が構成の主体となる点で共通する。そのほか、隆帯上キザミの形態は3遺跡ともほぼ共通し、各遺跡ともバラエティーに富む。口縁上端のキザミは福呂群では全ての資料に、長山馬籠遺跡でもA類の半数ほどに見られる。

隆帯文土器群の構造

3遺跡の各要素には共通性が高い部分が多い。しかし、名和飛田遺跡、長山馬籠遺跡と福呂群の差も見られる。口縁・隆帯形態から見ると、名和飛田遺跡、長山馬籠遺跡には新段階のものが少量ながら含まれているのに対し、福呂群は古段階のもののみで構成される。したがって、両遺跡は継続期間に差があったことが分かる。重要なのは、地文の構成に違いがみられることであろう。地文の大きな差は、名和飛田遺跡、長山馬籠遺跡の資料を古段階のもののみに限っても歴然と存在している。この違いを説明するには、遺跡のあり方自体を考える必要があるだろう。福呂遺跡と名和飛田遺跡や長山馬籠遺跡のあり方を比較した場合、最も重視すべき差は遺跡規模にある。名和飛田遺跡や長山馬籠遺跡は、出土遺物量などから推測して、規模が大きく、拠点的な遺跡と考えられるだろう(表23参照)。したがって、名和飛田遺跡や長山馬籠遺跡の土器群の地文のバリエーションは遺跡の拠点性と連動した現象の可能性がある。逆に、出土遺物の少ない福呂遺跡は非拠点的な小規模遺跡として捉えられる。このことが、地文が縄文に限られ、単相的な様相を示す要因となるのではないだろうか。

遺跡に残された遺物群は、社会集団が潜在的に保有する物質文化の構造が部分的に表出したもの

でしかない。その構造のどの程度の部分が発現し、またそれがどのような表現型をとるかは遺跡の置かれた文脈によって大きく異なる。限定的な文脈に置かれた遺跡では物質文化も限定的にしか表出しえない。すでに確認してきたように、隆帯文土器群は多様な要素が組み合わさって成立している。その要素の多くの部分が土器群に実体化して見られるのは、定着性が高く、幅広い活動が継続的に行われた拠点居住地においてであろう。それに対して、キャンプサイト的な小規模居住地では土器群の複合性の発現度は低くなると考えられる。

名和飛田遺跡出土石器群の石器製作技術と製作形態

1. 名和飛田遺跡出土石器群の石器製作技術

名和飛田遺跡では6000点を超える石器が出土した(表11~13)。特に黒曜石製石器やその製作に関わる残滓類が大量に含まれており、黒曜石を用いた石器製作のあり方を探る好資料といえる。しかし、これらの石器は縄文時代早期から弥生時代までの物が含まれていると思われ、厳密な帰属時期を決定できない。しかし、報告で示したように、第3調査地A・B・C区はほとんどが縄文時代に帰属するものと思われ、さらに、1. 出土土器の大半が早期末~前期初頭のものであること、2. 石器と早期末~前期初頭土器の分布傾向が似たあり方を示すこと、3. 石鏃の形態組成が早期~前期的であること(注6)、4. 石器に占める黒曜石の組成率が高いこと(注7)の4点からその多くが早期末~前期初頭に帰属するものと考えている。ここでは、A・B・C区出土石器の大半は早期末~前期初頭に帰属するものという前提で、これらを対象として石器製作のあり方を検討する。

礫石器類を除く打製石器製作には、黒曜石を中心に用いるほか、硬質安山岩が一定量見られ、わずかに頁岩も見られる(表22)。なお、蛍光X線分析によると、黒曜石は隠岐産(久見主体)、硬質安山岩はサヌカイトと見られ四国産との推定結果が得られている(第

表22 第3調査地A・B・C区出土石器組成表

器種 石材	石鏃	石鏃未製品	スクレイパー	石匙	楔形石器	楔形石器削片	石鏃	加工痕ある剥片	使用痕ある剥片	剥片	砕片	石核	ブランク	原石(小型)	計
黒曜石	83	13	48		123	2	1	43	30	2629	2197	61	19	1	5250
硬質安山岩	21	4	4	1	5		1	2		139	54	2			233
頁岩										1					1
計	104	17	52	1	128	2	2	45	30	2769	2251	63	19	1	5484

6章第6節参照)。ここでは量的に圧倒的主体を占め、製作の内容を把握できる黒曜石製石器の製作形態を検討する。

まず、石器製作技術を製作過程の順に見てみよう。剥片剥離技術には一定の規則性は見られない。石核は打面転移を頻繁に行うものが多く、定型的な剥片は作出されない。また、両極打法がしばしば剥片剥離に用いられる。楔形石器のなかには明らかに剥片剥離を目的とした石核として機能したものが含まれている。こうして得られた不定形剥片を器種に合わせて選択し、二次調整を行うようである。素材剥片は器種の大きさに見合いさえすればよかったようで、素材の用い方は非常に臨機的ないしは便宜的である。素材剥片剥離技術に明確な規格性がなく、素材獲得から器種製作にいたるまで連続的な計画性が見られないことから、組織立った石器製作体系を保有していないと言える。

以上の製作工程を石材消費過程に従って整理すると以下ようになる(図163)。まず、原石を粗割りし、分割礫を割り出す。あるいは原石を石核にして直接大型の素材剥片を作出する。本遺跡では、原石自体の出土がなく、大型の石核なども見られないので、基本的にはこの作業は行われてい

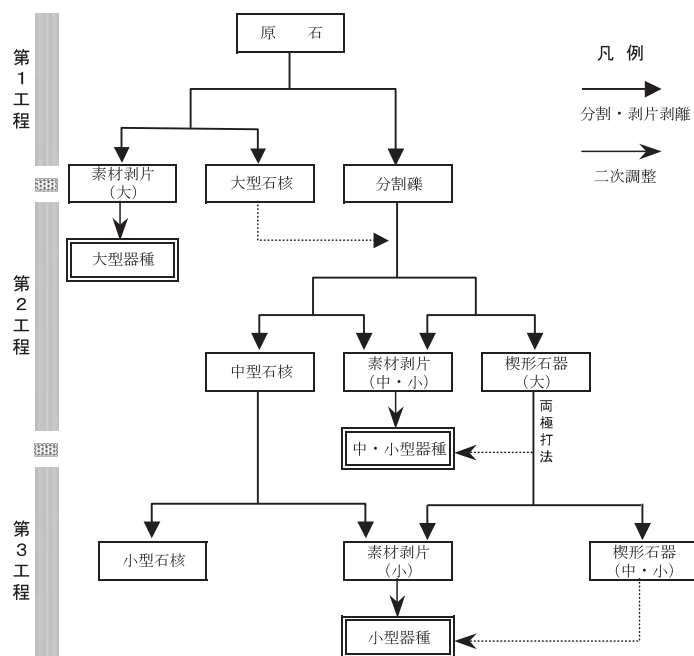


図163 石器製作工程模式図

なかったと思われる。続いて、これらの原材をもとに剥片剥離が行われる。この結果、中・小型の素材剥片が得られ、二次調整を加えて中型・小型スクレイパーや石鏃、楔形石器などが製作される。本遺跡ではこの段階を示す資料が多く残されている。分割礫が比較的多く出土しているので、この状態で遺跡内に搬入し、打ち割りを開始したと考えられる。また、大型の素材剥片の搬入も見られるので、多数出土している大型スクレイパーのある程度の部分は遺跡内で素材に二次調整を加えて製品とした可能性がある。さらに石材消費が進むと、石核や楔形石器は小型化し、石鏃などの小型器種の素材剥片しか作出し得なくなる。以上を

3つの工程段階として整理した(図163)(注8)。本遺跡では分割礫、大型素材剥片の形態で原材が搬入されて石器製作が行われているので、第2工程以降の製作過程が追える。

2. 早期末～前期初頭の石器製作形態

ここでは、周辺の早期末～前期初頭遺跡の製作形態を瞥見し、当該期の遺跡での石器製作形態の現れ方や石材の流通消費過程について予察する。また、これとあわせて、先の隆帯文土器の発現構造の仮説の前提となる遺跡間格差の存在を検証してみよう。

鳥取県中部から島根県宍道湖周辺にかけて所在する早期末～前期初頭(「島大学構内1次調査式」～西川津式)の主な遺跡を分析対象として取り上げた(表23)。いずれの遺跡とも、利用石材は隠岐産と考えられる黒曜石が圧倒的主体を占めており、基本的には名和飛田遺跡で推定した黒曜石製石器の製作技術と同じ過程を経て石器が製作されていたものと推定される。各遺跡の石器数を見て

表23 早期末～前期初頭遺跡の石器数と製作形態

遺跡名	石器数(礫石器以外)				主要器種点数			黒曜石組成率	遺跡内で行われる石器製作工程段階*	早期末～前期初頭の土器型式と土器点数*
	総数	器種	石核・原形	剥片・碎片	石鏃	スクレイパー	楔形石器			
西川津 (海崎地区・V区)	1309以上	216	10以上	1083以上	80	130	6	99%	第1工程以降?	西川津式主体:大量(前後の型式少量含む)
名和飛田 (A・B・C区)	5484	381	83	5020	104	53	128	96%	第2工程以降	長山式～西川津式:3155点
長山馬籠	10261	452	80	9729	120	3	6	94%	第2工程以降	長山式～西川津式:約2400点
富繁渡り上り	2000以上	?	?	約2000	約20	約20	?	器種で100%(他もほぼ全て)	第2工程以降?	島大1次式～西川津式 大量
下山南通	323	31	6	286	30	0	0	89%	第3工程	菱根式～西川津式:868点(+501点?)
目久美 (前期初頭層)	? (273*)	70	1	? (202*)	19	15	3	器種で87%	第3工程?	西川津式:約500点
島大構内橋縄手地区 1次・11次(5～8層)	40	9	8	23	1	4	0	98%	製作痕跡薄い(第3工程?)	島大1次式～西川津式 :266点
福呂 (未報告含む)	16	6	2	8	0	1	0	81%	製作痕跡薄い	長山式～西川津式 :約200点

*目久美遺跡の石器総数は出土遺物分布図から計数し、そこから礫石器類の数を引いたもの。したがって、正確な出土総数とは限らない。
 *工程段階は遺跡内で主体となると想定した段階を示した。他の工程が客体的に行われている場合もある。正確な内容を把握できない遺跡が多いためあくまで概念的な想定。
 *土器型式は早期末～前期初頭ののもののみ抽出した。土器数はこの時期幅に含まれる土器の破片数のみを計数している。太字のものが主体となる型式を示す。

みると、遺跡間で出土数の大きな格差が見られる。西川津遺跡（岩橋2001、内田1989）名和飛田遺跡、長山馬籠遺跡、富繁渡り上り遺跡（岩田1996）では千点単位の石器数が出土しているのに対し、下山南通遺跡（中原ほか1986）と目久美遺跡前期初頭層（小原1986）では2～3百点台、島根大学構内遺跡橋縄手地区5～8層や福呂遺跡ではわずかに数十点台の出土しか見られない。

石器組成の内容を詳しく見ると、出土点数の多い遺跡では石核やブランク類が多数出土しており、盛んな石器製作が行われていたことが分かる。剥片・碎片類は出土点数の多い遺跡で当然大量に見られるが、その他の遺跡にも一定量存在する。したがって、石器数が少ない遺跡でも、石器製作自体は行われていたことが分かる。ただし、出土量の格差からその内容が大きく異なっていたことは容易に想像できよう。実際、遺跡内で行われた石器製作がどのような内容であったのか、先に名和飛田遺跡出土資料から想定した石器製作の工程段階を適用して、遺跡内での製作形態を推定してみる。

名和飛田遺跡では第2工程以降の石器製作が行われている。西川津遺跡や長山馬籠遺跡、富繁渡り上り遺跡は、名和飛田遺跡と同等の出土量があり、石核などの組成も大きく変わらないので、石器製作の内容もほぼ同等と考えられる。西川津遺跡 区からは、帰属時期は不明ながら黒曜石原石が出土している。このことから、部分的に第1工程も行われていた可能性がある。ただし、製作が全て原石から開始されたにとしては石核・ブランク数や剥片・碎片数が少ないので（ 区）大半は第2工程以降の作業を中心としていたと考えておこう。また、西川津遺跡では大型のスクレイパーの出土数が非常に多い。これは、潤沢な素材供給の下にあったことを端的に示しているだろう。長山馬籠遺跡では比較的大きな石核が2点出土しているので、第2工程以降の作業を認められる。富繁渡り上り遺跡も第2工程以降の作業が行われていた可能性が高いだろう。下山南通遺跡や目久美遺跡は出土数が少ないものの、一定量の残滓類が見られ、石核も確認できる。しかし、その量や石

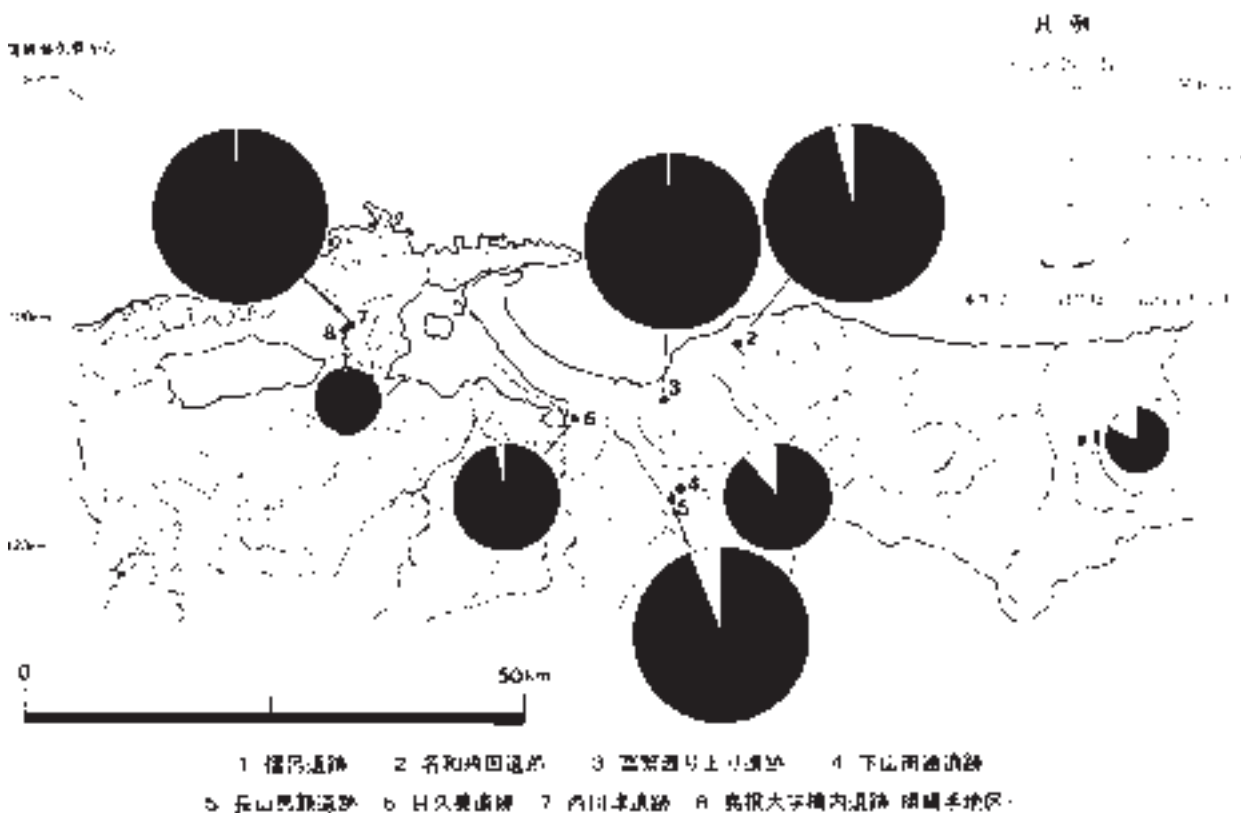


図164 石器製作の遺跡間格差

核の大きさからは、行われた作業はほぼ第3工程に限定されていたと思われる。島根大学構内遺跡橋縄手地区や福呂遺跡は極めて出土数が少なく、第3工程に相当する作業がわずかに行われていた程度であろう。

以上のように、遺跡間で行われる製作工程の内容が異なることが分かった。遺跡によって石器製作形態が異なり、大きな遺跡間格差が見られる(図164)。したがって、集中的な石器製作が行われ、製作の拠点となる遺跡が存在する一方、部分的な石器製作工程しか発現しない遺跡があるといえよう。遺跡の分布と石器量や石器製作工程の発現形態をあわせて見てみると、必ずしも黒曜石の入手に有利な沿岸部に大規模遺跡があるわけではないことが分かる。沿岸部でも石器出土量の少ない遺跡も見られる一方で、長山馬籠遺跡のように内陸部に大規模遺跡が見られる。また、至近距離にある遺跡でも石器製作形態が大きく異なる場合がある(図164)。こうしたことから、石器製作にみられる遺跡間格差は、居住形態の差と対応した可能性が高いだろう。土器の出土点数と石器製作の多寡が対応していることもこれを裏付ける。こうしたことから、石器製作は居住の継続性や定着性の高い拠点遺跡で集中的に行っていたと考えられる。拠点製作遺跡とそれ以外の遺跡の間には、石器製作・石材消費の連鎖が想定されるだろう。居住の拠点性と対応して石器製作形態が異なると考えるので、集団間で石材や石器が交換・交易されるのではなく、集団の居住形態のなかに製作・消費の連鎖が組み込まれていたと考えられる。拠点的な居住地で石器製作の大部分を行った後に、派生的な居住地にある程度の石材を持ち出し、そこでの活動の際に必要なに応じて部分的な石器製作を行う。この行動の繰り返しであったと考えている。もっとも、第1工程がはっきりと見られる遺跡がないことから、拠点遺跡がどのように素材を入手していたのかは明らかではない。石材流通のあり方にはなお不明点が多いものの、早期末～前期初頭に黒曜石の大量流入のピークが見られ、石材流通上の画期をなすことと(稲田1992)、石器製作の拠点化や、居住の定着性や継続性の高まりは連動した現象であった可能性が高い。

遺跡内での石器製作のあり方も重要な問題であるが、遺跡内で実際どのように石器製作が行われていたかを知る手がかりは非常に少ない。そうしたなかで、長山馬籠遺跡の例は重要であろう。ここで検出された2基の竪穴状遺構内からは、一括性の高い大量の石器が出土している。しかも、遺構ごとに石器製作の内容に差が見られ、一方で素材剥片剥離を行い、もう一方で調整作業を行って石器器種を仕上げていたと推定されている(瀧川1989)。集中的、集約的に特定の工程を行っていたと評価できよう(井上1992)。長山馬籠遺跡のあり方はある程度のまとまった期間のうちに特定の場所で集中的に石器製作が行われていた状況を示している。ほかの大規模遺跡でも、原材を入手して一連の製作工程を行っていく過程において、石材消費過程の運用管理や石器製作の集約化は自ずと必要となるだろう。一方の小規模遺跡はその製作の大半は必要に応じて便宜的、臨機的に行われるものであった可能性が高い。このように、拠点遺跡と非拠点遺跡では、単に石器製作量や発現する工程段階に格差があっただけでなく、遺跡における石器製作のあり方自体が異なっていたと思われる。

まとめと予察 - 早期末～前期初頭の歴史的位罫について -

土器と石器の検討から、縄文時代早期末～前期初頭には、遺跡のあり方に格差が見られ、特定遺跡の拠点化が起こっていると考えた。そして、このような拠点遺跡を定着性や継続性の高い集落と評価した。名和飛田遺跡もこうした拠点集落であった可能性が高い。これらの拠点遺跡では遺跡

内の活動に多様性と集約性が見られ、その内容が遺跡に残される土器や石器のあり方に現れている。このように、居住形態を反映して遺跡間格差が著しく顕在化するのが早期末～前期初頭の特徴といえるだろう。さらに言えば、こうした現象からは前代よりも定住化が進行した可能性が考えられる。定住化の問題と関連させつつ、早期末～前期初頭の歴史的特質についての予察をいくらか行い、まとめたい。

定住化の進行と前期的土器群の成立

隆帯文土器群は多様な要素を統合してひとつの土器群に構成する複合性をもち、その複合性の発現の仕方が遺跡の定着性によって異なると考えた。こうしたあり方は後続する西川津式土器の「複合構造」の遺跡での現れ方（井上1991・1996）に一見類似する。しかし、西川津式土器の複合構造のように系列差を含んで成立しているものと、隆帯文土器群の構造は大きく異なる。隆帯文土器群の構造性とは個別の要素の組み合わせでしかなく、西川津式土器などに比べると製作技術上の諸要素に留まっているとも言える。また、西川津式土器は器形の多様化や装飾性の高まりが著しく見られる。それまでの土器群と根本的に違った構造をもち、これを生み出した社会は定住化が進んでいたと想定するのに十分な内容をもつ。隆帯文土器群は、器種は深鉢に限られ、器形にも大きな違いはない。あくまで早期的土器の流れの中に位置し、それを逸脱しないと言える。西川津式土器の出現はこれを崩壊させ、前期的土器群を成立させる。その過程に立ち会った隆帯文土器群が、部分的ではあっても、西川津式土器に先駆けて複雑性や複合性を兼ね備えていたことを評価しなければならない。なぜならば、こうした複雑性や複合性を発現させた居住形態の定着性の高まりこそが、前期的土器群の成立と展開を準備したと考えられるからである。また、こうした土器変化に大きく関わったと考えられる異系統土器の流入と複合化（小林2000）も、居住の定着性の高さ結びつく現象と考えられる。このように、早期末から前期初頭かけての土器変化は定住化の進行と密接に結びついたものであったと言えよう。

定住化と労働形態

石器製作のあり方は、具体的な居住形態を明らかにする上で非常に重要な知見を与えてくれる。拠点居住地では石器製作が集中的に行われていたと考えたが、石器製作というひとつの部門のみならず、その他の労働にも集約化が見られたに違いない。拠点居住地での定住性の高さは労働の集約性を生み出す契機となる。逆に、拠点居住地での定住性は集約的な労働なしでは維持できないとも言える。こうしたあり方が、いつから始まったのか、前後の時期を含め検討しなければならないが、少なくとも早期末～前期初頭には定住化が一定まで到達したと思われる。また、この時期には低湿地をはじめとする平野部へと遺跡が進出し、多面性指向の資源利用が著しく進展したと考えられる。こうした生業活動の多角化と拠点集落での労働の集約化はこの時期の経済構造の根幹をなすものであろう。こうした経済構造は定住化によって生じ、同時に、定住化を進展させる原動力となったと考えられるだろう。

（北 浩明）

本稿をなすにあたり、次の方々には資料の実見の便宜を図っていただいたほか、様々なご教示をいただいた。山本悦世氏・野崎貴博氏・光本順氏（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）、岩田文章氏（淀江町教育委員会）、稲田陽介氏（島根県埋蔵文化財センター）。特に稲田氏からは資料に関して多くの教示を受けたほか、筆者のつたない議論に付き合っていた。未筆ながら記して感謝いたします。

第6章 特論

注1) : ただし、この理解が小林氏の意図に沿ったものであるかは、氏の記述を読む限りでは判然としない部分がある。小林氏は遺跡出土土器群単位で型式を設定しているため、長山馬籠遺跡出土の縄文地隆帯文土器も「長山馬籠式」と捉えている。これに従えば本遺跡出土土器群も同様に、縄文地も含めて「長山馬籠式」の範疇で捉えうるのかもしれない。他遺跡で「福呂式」の型式認定がなされていないので福呂遺跡出土のわずかな土器のみから型式内容を理解するしかないが、これらと本遺跡出土縄文地隆帯文土器の特徴は極めて近いと判断した。

注2) : 分析資料は報告中に図示した隆帯文土器のみである(図12・85・87~89・95・108~114)。これらは確実に隆帯文土器と認定でき、分析対象に西川津式などが含まれることはない。また、口縁部片は出土した資料のほとんどを図示しているので、資料上のバイアスは考えなくてよいと思われる。

注3) : これを敷衍すれば、この口縁形態の条痕地のものをすべて西川津式とは捉えられないということになる。

注4) : D・E類の条痕地隆帯文土器は西川津式とした可能性が高いので、ここでは縄文地しか抽出できていない。

注5) : 節が整った長方形でかなり深く施文される点で他のものと雰囲気異なるLR単節縄文が両遺跡で見られるが(福呂: 図12-1、名和飛田: 図109-516・517)、これもよく類似している。

注6) : 早期~前期には深い抉りの凹基式が主体となることが明らかにされている(会下2002、濱1999)。

注7) : 早期末~前期初頭に黒曜石搬入量のピークがあることが指摘されており、当該期には遺跡での石材構成が圧倒的に黒曜石に偏ることが確認されている(稲田1992、会下2002、竹広2000・2003、濱1999)。

注8) : ただし、本遺跡出土の石器群は体系的な石器製作工程をもたないため、ここで設定した工程段階は石材消費の段階を整理するための便宜的なものに留まり、実体的な内容もたない。

【引用参考文献】

- 稲田孝司1992「狩りと採集に生きた人々」稲田・八木編『新版古代の日本』第4巻 中国・四国 角川書店
- 井上智博1991「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学研究』38-2 考古学研究会
- 井上智博1992「縄文時代における石器の集中製作について」『大阪文化財研究』3 大阪文化財センター
- 井上智博1996「山陰西川津式土器の土器型式構造と恩原2遺跡土器群の占める位置」『恩原2遺跡』 恩原遺跡発掘調査団
- 岩田文章1996「鳥取県淀江町・富繁渡り上り遺跡」『第7回中四国縄文研究会発表資料』 中四国縄文研究会
- 岩橋孝典2001『西川津遺跡』 鳥根県教育委員会
- 内田律雄1987『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書(海崎地区)』 鳥根県教育委員会
- 会下和宏編1997『鳥根大学構内遺跡第1次調査(橋縄手地区1)』 鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター
- 会下和宏編2002『鳥根大学構内遺跡第11次調査(橋縄手地区2)』 鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター
- 会下和宏2002「山陰地域における縄文~弥生時代の打製石鏃について」『鳥根大学構内遺跡第11次調査(橋縄手地区)2』 鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター
- 小林青樹2000「縄文時代早期末葉から前期前葉土器群に関する問題」『福呂遺跡1』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 小原貴樹1986『目久美遺跡』 米子市教育委員会
- 高橋信武2004「西川津式土器と轟式土器の関係」『山下秀樹氏追悼考古論集』 山下秀樹氏追悼論文集刊行会
- 瀧川友子1989「石器について」『長山馬籠遺跡』 溝口町教育委員会
- 竹広文明2000「山陰における石器石材利用をめぐる二、三の問題」『鳥根考古学会誌』第17集 鳥根考古学会
- 竹広文明2003『サヌカイトと先史社会』 溪水社
- 中原斉1989「長山馬籠遺跡出土早・前期縄文土器の編年的位置づけ」『長山馬籠遺跡』 溝口町教育委員会
- 中原斉編1986『下山南通遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書21 (財)鳥取県教育文化財団
- 野崎貴博編2000『福呂遺跡1』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 濱隆造1999「米子平野周辺における縄文時代の石器利用について」『古市遺跡群 古市カハラケ田遺跡・古市河原田遺跡』 鳥取県教育文化財団調査報告書59 (財)鳥取県教育文化財団
- 益田晃・中原斉・瀧川友子1989『長山馬籠遺跡』 溝口町教育委員会
- 柳浦俊一2001「山陰地方における縄文前期土器の地域編年」『鳥根考古学会誌』第18集 鳥根考古学会
- 矢野健一2002「中国地方における縄文時代早期末前期初頭の土器編年」『環瀬戸内海の考古学-平井勝氏追悼論文集-』上巻 古代吉備研究会

第8節 名和飛田遺跡出土の彩色記号をもつ須恵器について

1. はじめに

今回、名和飛田遺跡では古墳時代後期の竪穴住居2・3から計4点の、赤色顔料で「彩色記号」^{さいしききごう}を施している須恵器が出土した。これまでの研究では、「朱書記号」・「漆書記号」(谷本1995)、「朱記号」(北野1994)と呼称され、兵庫県北部の古墳と、大阪府南部・河内地域の製鉄関連遺跡においてまとまった出土数が報告されている。ここでは谷本氏の用語を採用し、漆書きのものと朱書きのものを総括して「彩色記号」と称し、漆を使っているものを「漆書き」、漆以外の赤色顔料を使用しているものを広義の意味を持って「朱書き」と定義したい。

彩色記号をもつ須恵器の最初の報告は、島根県隠岐島の東笠根1号古墳の例(勝部1980)である。その後、兵庫県北部の古墳、大阪府の^{おおがた}大県遺跡で報告されてきた。近年では、福井県・滋賀県・三重県でも彩色記号をもつ須恵器の報告がされ、分布範囲が広がってきている。鳥取県内では県内最西部に位置する米子市の^{せきしよ}石州府古墳群と、中部の^{ゆりはま}湯梨浜町長瀬高浜遺跡での2遺跡のみが知られているのみである。今回報告する名和飛田遺跡は鳥取県の西部でも中部に近い場所で、但馬地域の古墳と石州府古墳群との間の希薄な出土例を埋めるものである。また、彩色記号とヘラ記号の関連性を指摘する意見もあるが、ヘラ記号は焼成前につけられているものがほとんどで、一般的には窯もしくは製造者の印として認識されている。一方、彩色記号は消費地に渡ってからつけられている可能性が高い事から、ヘラ記号とは別のものと考えたほうがいいであろう(北野1994)。

2. 地域の様相

現在報告されている彩色記号をもつ土器が出土している遺跡は、名和飛田遺跡を入れると38遺跡である()(図165、表24)。これらの遺跡は分布や時期、漆書きか朱書きかの違いによって大別できる(谷本1995)。ここでは下記のように地域をA～D、時期を～の段階に大別してみた。

地域	段階
A. 日本海側(鳥取県・島根県・ 兵庫県北部・京都府北部)	. 6世紀前葉～6世紀後葉 . 6世紀末～7世紀前葉
B. 近畿西(兵庫県南部)	. 7世紀後葉以降
C. 近畿(大阪府南東部・奈良県・滋賀県)	
D. その他(福井県・三重県)	

地域ごとの特徴は、A地域とB地域北部には漆書きのものが多く、他の地域には朱書きしか見られないことである。段階ごとの特徴として、段階は鉄生産遺跡もしくはごく少数の古墳が含まれ、朱書きのものしか存在していない。段階には古墳が多くを占め、段階の遺跡の多くは、首里長の館と想定されている遺構が検出されている遺跡や、律令的祭祀色の濃い木製祭祀具などが出土している遺跡であるという点を指摘できるであろう。以下に、各地域ごとの様相を簡単にまとめてみる。

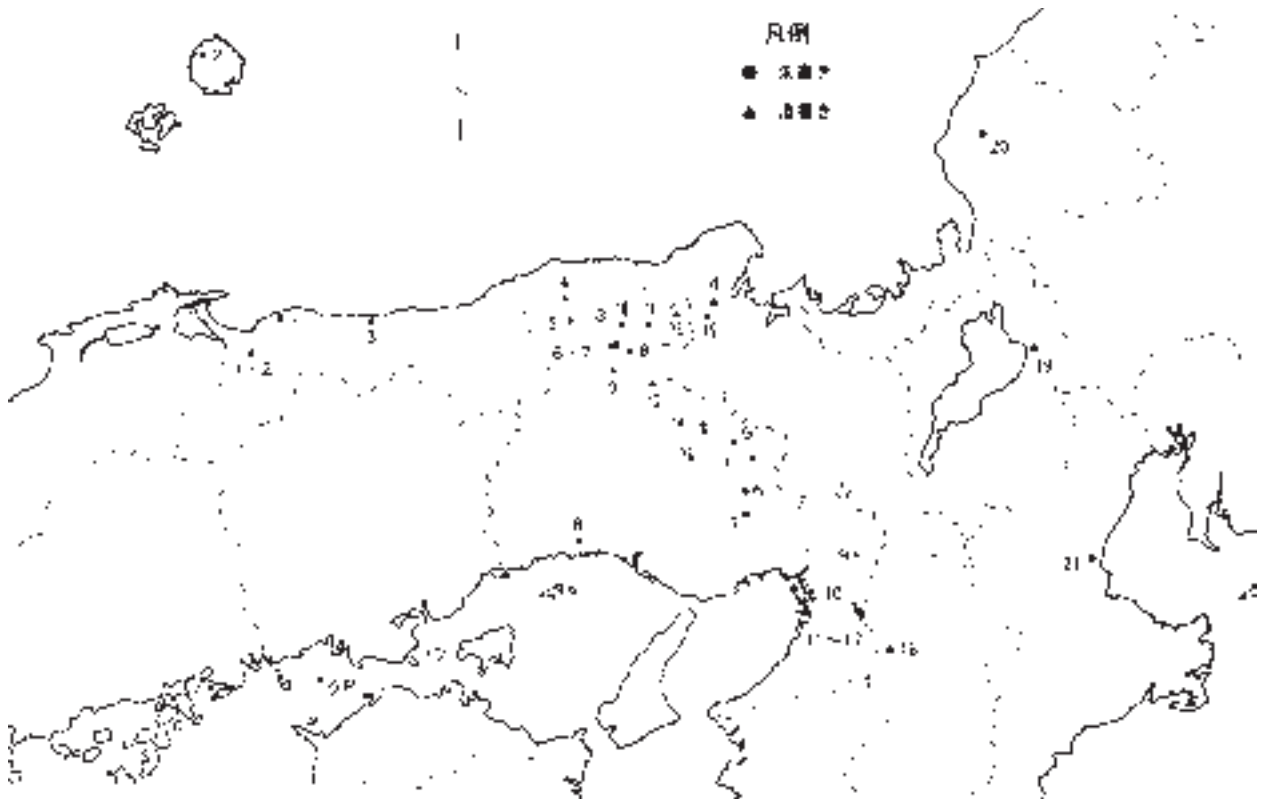


図165 彩色記号土器出土遺跡分布図

A地域では、段階のものは小山4号墳1基のみで、段階に属する但馬地方を中心とする古墳と、段階の遺跡がほとんどである。段階に属する古墳は、B～D地域の4基を含め、計5基だけであり、地域的にはまとまりを持たないが、全て朱記号である。但馬地方の古墳である文堂古墳は、段階に属するもので、多くの彩色記号を持つ須恵器のほかに金銅製の馬具や大刀などの副葬品が出土していることで知られている。このことからこの地域での首長墓であると考えられている。但馬地方から距離を置いて西に位置する鳥取県米子市の石州府古墳群からは、計51個という多量な彩色記号をもつ須恵器が出土している。特にこれらが出土しているのは、古墳群の中でも規模が大きいものや、馬具などの高い階層性を示す副葬品をもつものが多い。以上の事から、ごく限られた階層の人物のみの葬送儀礼で使われていた事が考えられるだろう。しかし、なかには東家ノ上3号墳のような小規模な古墳もいくつか含まれる事から、被葬者の階層には大きく関係しないという見解もある(谷本1988)。段階の遺跡が但馬地方に多いのも特徴である。但馬地方とその周辺地域は、律令時代に入ると漆を貢納するようになる。この地域で漆書きが多いのは漆が入手しやすかったからかもしれない。

B地域では、段階の古墳2基と、段階の古墳1基、残りは段階に属する遺跡である。古墳から出土のものは朱書き、その他のものは漆書きである。古墳と集落遺跡の割合も、朱書きと漆書きの割合もほぼ同率である。段階に属する箱塚4号墳は、箱塚古墳群の盟主墳であり、A地域と同様の特徴を示す。箱塚4号墳と墓山古墳は彩色記号をもつ須恵器を伴う古墳としては古相になるため、後述のC地域との関連も考えられるだろう。

C地域では、～各段階が存在し、A地域とはやや異なった様相を示している。段階に属する大阪府柏原市の大泉遺跡は、現在のところ彩色記号土器出土遺跡の中では最古になるものである。

表24 彩色記号土器出土遺跡一覧

朱書き	遺跡名	遺跡の性格	段階	地域	所在地
1	名和飛田遺跡	集落	Ⅱ (6c末)	A	鳥取県西伯郡名和町名和字飛田
2	東笠根1号墳	古墳	Ⅱ (6c末)	A	島根県隠岐島後の五箇村北方
3	小山4号墳	古墳	Ⅰ (6c前)	A	兵庫県養父市八鹿町小山字東家の上
4	入谷古墳群	古墳	Ⅱ (6c後)	A	京都府与謝郡加悦町字明石小字入谷
5	箱塚古墳群 4号墳	古墳	Ⅰ (6c中)	B	兵庫県篠山市西紀町小坂字箱塚
6	前ノ谷古墳	古墳	Ⅱ (6c末)	B	兵庫県三田市青野字前ノ谷
7	墓山古墳	古墳	Ⅰ (6c前)	B	兵庫県三田市横山町1545
8	丁・柳ヶ瀬遺跡	集落	Ⅲ (8c前)	B	兵庫県姫路市勝原区丁
9	讃良郡糸里遺跡	集落	Ⅱ (6c末)	C	大阪府寝屋川市出雲町
10	志紀遺跡	集落	Ⅱ (6c末)	C	大阪府八尾市志紀町
11	船橋遺跡	表採	Ⅱ (6c末)	C	大阪府柏原市古町、大正
12	平尾山古墳群 平野・大県支群90-3次調査	古墳	Ⅰ (6c前)	C	大阪府柏原市平野、大県、太平寺
13	大県遺跡	集落	Ⅰ (6c前～後)	C	大阪府柏原市大県、平野
14	大県南遺跡84-3次調査	集落	Ⅱ (6c後)	C	大阪府柏原市大県4丁目
15	太平寺遺跡	集落	Ⅱ (7c前)	C	大阪府柏原市太平寺
16	高井田遺跡89-3次調査区	集落	Ⅱ (7c前)	C	大阪府柏原市安堂町、高井田
17	高井田横穴 90-2次調査 第4支群44号墳	古墳	Ⅱ (6c後)	C	大阪府柏原市高井田
18	寺口忍海古墳群	古墳	Ⅱ (7c前)	C	奈良県葛城市新庄町平岡
19	大戊亥遺跡	集落	Ⅱ (6c末)	C	滋賀県長浜市大戊亥町
20	小羽山八号墳	古墳	Ⅰ (6c前)	D	福井県丹生郡清水町小羽
21	小屋城1号墳	古墳	Ⅱ (7c前)	D	三重県安芸郡安濃町南神山

漆書き	遺跡名	遺跡の性格	段階	地域	所在地
①	石州府古墳寺處支群	古墳	Ⅱ (6c末～7c前)	A	鳥取県米子市石州府字寺處
②	石州府第4遺跡	集落	Ⅲ (7c後)	A	鳥取県米子市石州府
③	長瀬高浜遺跡	古墳	Ⅱ (7c前)	A	鳥取県東伯郡湯梨浜町長瀬字高浜
④	知見1号墳	古墳	Ⅲ (7c後)	A	兵庫県美方郡村岡町長瀬字知見
⑤	文堂古墳	古墳	Ⅱ (7c前)	A	兵庫県美方郡村岡町寺河内
⑥	西家ノ上2号墳	古墳	Ⅱ (7c初)	A	兵庫県養父市八鹿町小山西家の上
⑦	東家ノ上3号墳	古墳	Ⅱ (7c中)	A	兵庫県養父市八鹿町小山東家の上
⑧	穴ヶ谷西11号墳	古墳	Ⅱ (7c前)	A	兵庫県養父市養父町大藪字穴ヶ谷
⑨	森地区の古墳	古墳	Ⅱ (7c前)	A	兵庫県養父市養父町森
⑩	深田遺跡(※緑釉陶器)	集落	Ⅲ (9c～10c)	A	兵庫県城崎郡日高町水上・松岡
⑪	砂入遺跡	集落	Ⅲ (9c前)	A	兵庫県出石郡出石町袴狹持アミ
⑫	畑山遺跡	表採	Ⅲ (7c後)	A	兵庫県出石郡但東町畑山
⑬	三保土戸遺跡	表採	Ⅲ (8c中)	A	兵庫県朝来郡山東町三保字土戸
⑭	七日市遺跡	集落	Ⅲ (8c中)	A	兵庫県水上郡春日町七日市
⑮	滝岡田古墳	古墳	Ⅱ (6c末)	A	京都府与謝郡加悦町字滝小字岡田
⑯	山垣遺跡	集落	Ⅲ (7c後)	B	兵庫県丹波市春日町棚原字山垣
⑰	下小西坪遺跡	集落	Ⅲ (8c)	B	兵庫県篠山市篠山町西浜谷字下小西坪

この遺跡は製鉄遺跡であり、韓式土器とされる土器の出土から、製鉄技術をもった渡来系氏族の集落と考えられている。同時期に属す、平尾山古墳群は、大県遺跡とは近接しており、副葬品の中に鉄滓が含まれる事から、関連が強いと考えられている。段階に属する奈良県葛城市の寺口忍海古墳群では多種多様な副葬品が出土していることで知られる。そのため、副葬品の組成は、被葬者の出自や職掌を反映していると考えられている。彩色記号をもつ須恵器が出土している古墳では鉄滓を伴うことから、鉄生産に関わりのある人物のものだと考えられている。大県遺跡から距離的にも近い事もあり、ここでの彩色記号をもつ須恵器は大県遺跡と同様の性格を持っているとも考えられるだろう。この地域では朱書きのものしか見つかっていない。

D地域には主な出土分布域から外れる、福井県小羽山古墳と三重県小屋城古墳の2遺跡をまとめ

た。共に朱書きである。この地域の中では他に出土例がない事から、彩色記号が施されている須恵器が集中して出土しているA～C地域との交流があったとも考えられる。また、福井県の小羽山古墳は 段階に属する事から、早くから他地域との交流があったとも考えられるだろう。

3 . 名和飛田遺跡出土例

今回名和飛田遺跡で出土した彩色記号をもつ須恵器は、竪穴住居2から杯身1点(112)、竪穴住居3からは杯蓋2点(123・144)・杯身1点(156)の計4点が出土している。いずれも出雲編年4期、TK209型式併行で、6世紀末のものであるので、上記分類ではA地域 段階に分類できる。

竪穴住居2出土の112は床面直上の粘土の上から検出されている。この竪穴住居は上面が大きく削平されているため、出土遺物は原位置を保っていない可能性がある。この粘土が構築材の一部のものだとすると、解体してからこの土器が廃棄された可能性がある。

竪穴住居3出土のものは杯蓋123が上層から、杯蓋144が下層から、杯身156は床面直上から正位で出土している。中央ピット上面からは、平根式の鉄鏝2本が出土している。鉄鏝が竪穴住居から出土するのは一般的ではなく、彩色記号をもつ須恵器とともに、古墳の副葬品として見られる組み合わせである。杯身156については、赤色顔料の分析を行い、酸化第二鉄(Fe₂O₃)という結果を得た(第6章第1節参照)。いわゆるベンガラであろう。他の3点も同様にベンガラと考えられる。

竪穴住居2・3は出土遺物から、ほぼ同時期に存在していた可能性があり、廃絶の形態も類似する事から、同時期もしくはほとんど時間差をおかずに廃絶が行われたと考えられる。

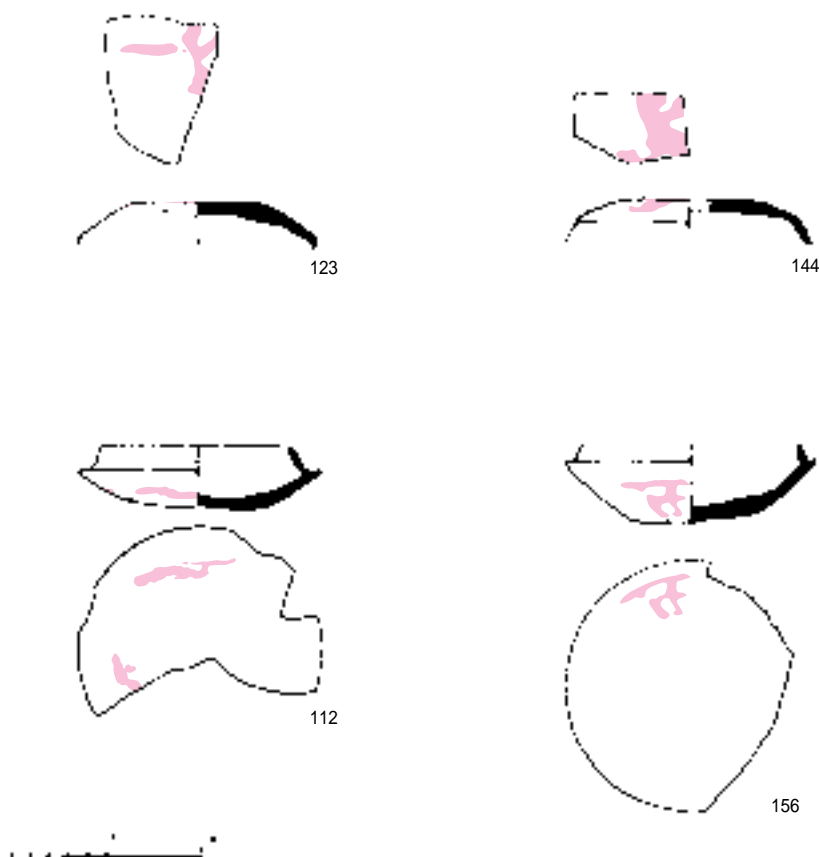


図166 名和飛田遺跡出土彩色記号須恵器

他遺跡でみられる彩色記号土器の性格と遺物の出土状況から、名和飛田遺跡の竪穴住居2・3では廃絶の際に祭祀が行われたと考えている。また、竪穴住居3は鉄鏝を伴うことから、竪穴住居の廃絶祭祀としても特異性を見ることができであろう。彩色記号土器出土38遺跡中には、竪穴住居内からの出土例はなく、先に述べたような、A地域・段階の特徴にもあてはまらないことから、名和飛田遺跡では、住居廃絶の際に行われたまつりの形態を考える上で興味深い事例を得る事ができた。

4. まとめ

6世紀前半の彩色を持つ須恵器が見られる古相の遺跡では、大阪府の大泉遺跡がある。この遺跡では渡来系氏族により鉄生産が早くから行われていた事が推定されている。このことから、製鉄との結びつきが考えられるだろう(北野1994)。

6世紀～7世紀は各地に鉄・鉄器生産が急速に広まり、定着していく。そして、各地域の有力氏族が鉄を掌握していくと考えられている。そのため、製鉄技術と共に彩色記号を記すことも周辺地域に伝播した可能性も考えられるであろう。名和飛田遺跡の周辺では同時期の製鉄遺跡はまだ見つかっていないが、周辺には鉄滓などの製鉄関連遺物が出土している遺跡も多く、周辺に当該期の製鉄遺跡の存在を十分に考えることができるであろう。今後、製鉄遺跡が確認できれば、名和飛田遺跡での彩色記号須恵器の位置づけを再検討できる可能性もあるだろう。しかし、製鉄技術が伝播した地域でも、彩色記号をもつ土器が見つかっていない地域が多くあり、それらを短絡的に結び付けてしまうのは、拙速かもしれない。

鳥取県内の、同時期の集落内での祭祀は、倉吉市の谷畑遺跡が有名である。ここからは多量の土製模造品やミニチュア土器が出土している。このような土製品などが、生活の場における祭祀に使用される事が多いものだと考えるならば、名和飛田遺跡のような例は、集落内で行われた祭祀としては特異なものといえるであろう。竪穴住居自体も大型である事から、竪穴住居そのものの性格も考えなければいけないであろう。

古墳時代末期以降、西日本では竪穴住居の規模は縮小されていき、7世紀後半～8世紀には、掘立柱建物が住居の主流を占めるようになる。このような住居形態の変化が進むなか、名和飛田遺跡では大型の竪穴住居が建てられている。また、ほとんど時間差をおかず、大型のものや、特異な形態をもつ掘立柱建物が建てられている。この事から、このような形態の掘立柱建物をいち早く導入するだけの階層の居住集団の存在が考えられ、当地域での中核となる集落であった可能性が指摘できるであろう。

これまで述べてきたように、彩色記号をもつ須恵器は、階層性の高い古墳から出土していることが多い。名和飛田遺跡でも竪穴住居や掘立柱建物の規模・形態から、階層性の高い居住集団の存在が考えられるという点からも、これらの古墳と類似性をみることができであろう。このように、階層性の高さからも名和飛田遺跡の事例は古墳祭祀的な性格が強いものだと考えられるだろう。名和飛田遺跡が製鉄遺跡には関連しないことを考えると、出土した彩色記号をもつ須恵器も古墳から出土しているものと同じような性格をもつものだと考えたい。古墳時代末期の集落と古墳の関わりをうかがえる事のできる名和飛田遺跡での祭祀のあり方は、この時代のまつりの形態を考える上で興味深い事例となった。

(三木雅子)

第6章 特論

<引用参考文献>

- 岡崎 正雄編 1993『箱塚古墳群 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XX)』兵庫県文化財調査報告書第127冊 兵庫県教育委員会
- 柏原市教育委員会 1985『大県・大県南遺跡 - 下水道管渠埋設工事に伴う - 』柏原市文化財概報1984 -
- 柏原市教育委員会 1988『大県遺跡 - 堅下小学校屋内運動場に伴う - 』柏原市文化財概報1988 -
- 勝部 昭 1980「+印のある土器」『古代学研究』94
- 北野 重 1990「記号を持つ土器の意義について」『柏原市歴史資料館報創刊号』
- 北野 重 1994「朱記号を持つ須恵器」『韓式系土器研究』
- 小原 貴樹ほか 1989『石州府古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会・石州府古墳群発掘調査団
- 谷本 進 1985「漆記号を施した須恵器について」『但馬考古』第2集
- 谷本 進 1995「朱記号と漆記号の展開」『但馬考古』第9集
- 谷本 進 1988「赤色顔料・漆記号を施した須恵器と鎮魂儀礼」『但馬考古』第5集
- 谷本 進編 1992『西家の上古墳群』兵庫県八鹿町文化財調査報告書第10集 八鹿町教育委員会
- 鳥取県教育文化財団 1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』鳥取県教育文化財団報告書12
- 古川 登 1995「顔色あるいは塗料による彩色記号のある須恵器について」『岐阜史学89号』1995
- 吉識 雅仁ほか 1991『深田遺跡・カナゲ田遺跡 - 日高バイパス建設に伴う但馬国府推定地内発掘調査報告書 - 』兵庫県文化財調査報告第99冊 兵庫県教育委員会

2005年2月段階のもの。谷本・北野・古川の各参考文献を集約、さらに追加したものの総数。

なお松江市袋尻3号横穴墓において、蓋杯に「×」状の赤色顔料がついたものが報告されている。

松江市筆ノ尾横穴墓群にも事例がある。これらを入れると40遺跡になる。

第9節 大型建物をもつ古墳時代後期の名和飛田集落について

今回の発掘調査で検出した遺構群からは、当地域における住居形態の変化・特殊な構造の掘立柱建物が存在するなど、これまで当地域では認められなかった資料を得たが、それらは多くの問題を含んでおり、検出した遺構群のあり方だけでは、不明な点も多い。そこで、先学の諸研究を踏まえ、周辺地域での調査例との比較を通し、古墳時代後期の名和飛田集落の素描を試みたい。

1. 検出した遺構群について

検出した竪穴住居は、周辺遺跡の古墳時代後期の一般的な住居と形態では大差ない。床面積は竪穴住居2が29.5㎡、住居3が36.4㎡である。本遺跡周辺遺跡の後期の住居には、名和中畝遺跡住居4（床面積16.6㎡）、門前第2遺跡菖蒲田地区住居10a（7.2㎡）・住居10c（39.4㎡）・住居11（23.9㎡）、茶畑第1遺跡住居18（21.2㎡）、古御堂笹尾山遺跡住居14基（住居34が9.0㎡で最小。住居19が40.5㎡で最大。平均21.4㎡）などがある。これらと比較すると、床面積を指標とした規模では、本遺跡の住居2棟は大型といえる。掘立柱建物1は本調査地では唯一全容がわかる建物跡である。軸はやや振るが南北棟の建物で、現況ではほぼ水平に見えるが、微地形では等高線に対し直交して建つ。前述のように、掘立柱建物1は梁行4間、桁行5間、床面積50.7㎡の規模である。規模では大型建物といえる。伯耆では由良遺跡の掘立柱建物2や同5などが、近い遺構で同等の規模を有する（原田1978）。掘立柱建物3は、身舎の梁行2間桁行3間以上の規模で、両桁行に柱穴列が伴う。掘立柱建物4は、後世の削平と調査地外に外れるため、全容は不明であるが、検出部分の柱配置から、梁行3間、桁行3間以上の規模を有する身舎に外周柱穴列を伴う建物である（第5章第3節pp. 64～65参照）。外周柱穴列は庇の他、縁束や軒支柱である可能性もあり、そのいずれであるか断定することは難しい。

2. 住居の変遷について

古墳時代後期の遺構群は少数で、調査地のごく狭い範囲に集中して検出された。同時期の遺構群は調査地外にも広がると考えられる。そのため、今回の調査地から集落の全容を知ることはできない。しかしながら、建物の方位はほぼ揃い、その配置も同時性を示唆する。竪穴住居2は掘立柱建物3に切られている。また、竪穴住居3は上屋構造を想定すると、隣接する掘立柱建物4とは同時併存しない。これらの遺構の出土遺物は、いずれも陶器編年TK209併行期（6世紀末から7世紀初頭）の須恵器を含む。これらの遺物に時期差を読み取るのは難しいが、掘立柱建物1からは同TK217型式併行期の須恵器が出土した。上記住居2と建物3との切り合い関係から、古墳時代後期のTK209併行期の内に、名和飛田集落内で竪穴住居から掘立柱建物に変わるものが現れ、続く同TK217型式併行期（7世紀第1四半期頃）には、竪穴住居は検出されておらず、掘立柱建物が主流となると理解できる。西伯耆においても住居形態の移行時期を把握できる好資料を得られたことになる。一般的に、集落における住居は、古墳時代の後期に、竪穴住居から掘立柱建物に移行すると考えられている。さらに掘立柱建物の構築に際しては、伝統的な竪穴住居とは異なる建築部材や建築技術を要することから、住居形態の移行は、政治的にも経済的にも優れた単位集団や集落に限

って始まったとされ、その時期差は単位集団・集落間の格差の表れとして理解されている（小笠原1979、山田1981など）

山陰地方では、島根県安来平野・松江平野で古墳時代集落の調査件数が多く、集落の検討も進展している。その好例には、島根県安来市山ノ神遺跡・目廻遺跡・徳見津遺跡・五反田遺跡・石田遺跡・渋山東遺跡などがある。山ノ神遺跡・目廻遺跡・徳見津遺跡・五反田遺跡は、鉄を生産していた集団の集落である。これらの遺跡は丘陵と谷を挟んで隣接し、集落の移動が把握できる遺跡群である。ここでは、6世紀第四半期（陶器編年TK43型式～TK209型式併行期）に、竪穴住居と掘立柱建物が見られるが、それから徐々に移行が進行し、7世紀第2四半期（飛鳥期）の集落では、掘立柱建物が住居の主流となっていたと復元されている（椿1998）。石田遺跡では大谷編年の出雲5期の段階に、竪穴住居が廃され掘立柱建物のみで構成される集落へ転換したようである（池淵1998）。渋山池遺跡では、出雲4期の段階に、斜面で加工段を伴う掘立柱建物による集落構成がみられ、その移行はやや早かったようである（椿・林1997）。名和飛田遺跡周辺での移行時期を比較できる資料はまだ認められず、今後の調査の進展を待たなければならないが、島根県東部での移行時期とほぼ同時期に進行したといえる。

3. 外周柱穴列を伴う掘立柱建物4について

古墳時代から古代の大型掘立柱建物に関する研究には、宮本長二郎氏（宮本1991）や梅本康弘氏（梅本1997）をはじめ多数ある。外周柱穴列を備える建物を、四面庇付建物として注目した研究には、山本忠尚氏（山本2004）、青柳泰介氏（青柳2003）らの研究がある。これらを参照し、掘立柱建物4に若干の考察を加えたい。掘立柱建物4の外周柱穴列について、検出状況から得られた諸特徴を若干補足すると、

現況ではほぼ平坦な箇所に見えるが、微地形では等高線に平行した東西棟である。

身舎の柱穴に比べ、外周する柱穴はやや小型で浅いものが多い。

外周する柱穴は、身舎のほぼ柱間に位置する。

身舎の南東隅に当る箇所には柱がない。

攪乱内も完掘し精査したが、東面のP4 - P5間には、柱およびその痕跡は見出せなかった。ここに柱がなく柱間が広がった可能性もある。

身舎の柱間距離は梁行が平均1.26m、桁行が平均1.22mであるのに対し、外周柱穴列の出は南面が1.6m、東面が1.36m、北面が1.32mである。外周柱穴列を庇とすれば、いずれも広庇といえる。

同様に、外周柱穴列を庇とするならば、南庇の出は、ほかの庇に比べ広い。

などがあげられる。諸氏の研究から、外周柱穴列を有する建物の類例は表25と図167の通りである。外周柱穴列の出に差があることは、庇と軒支柱やさしかけ庇、あるいは縁などの構造的な差によるのかもしれない。南面柱穴列の出が広いことは、掘立柱建物3と同じ傾向といえる。また、青柳氏の研究では、古墳時代後期の四面庇付建物は、古墳時代中期までのものは平面プラン正方形のものが主流で、古墳時代後期には平面プラン長方形のものが大多数を占めるようである。本遺跡の掘立柱建物4は、残存部分で床面積を求めると最小値でも57.7m²前後と求められる。当然、身舎が長方形プランであったとすれば、これ以上となろう。掘立柱建物4も大型建物の範疇に含められるだろ

う。四面庇付掘立柱建物を有する古墳時代の集落で、その構造が把握できる例では、奈良県御所市の南郷遺跡群、群馬県三ツ寺 遺跡など多数ある。山陰地方では兵庫県山形町柿坪遺跡がある。また、集落構造や遺構の全容は不明ながら、外周柱穴列を伴う建物を有する遺跡には、京都府精華町森垣外遺跡や島根県出雲市三田谷1遺跡などが近い。

< 柿坪遺跡 > 柿坪遺跡は古墳時代但馬最大の集落である。遺跡は与布土川によって形成され段丘化した扇状地に立地する。居住域は東西約340mの範囲に遺構群が広がる。遺構群は、ほぼ古墳時代初頭から7世紀末のものである。検出された遺構には竪穴住居約120棟・掘立柱建物34棟からなる。居住域内は溝や自然流路によって、東・中・西区に区画され、四面庇付建物を含む主要建物群は東区に位置する。主要建物群は、四面庇付建物・孫庇を備えた四面庇付建物・屋内棟持柱を備えた側柱建物で構成される。調査者は、居館や祭殿など大型掘立柱建物群からなる祭場域を形成して

表25 大型四面庇付掘立柱建物の諸例（青柳2003に一部改）

	遺跡名	府県名	遺構名	時期	形式	柱間数		規模 (m)		面積 (㎡)	位置	備考	文献
						庇	身舎	庇	身舎				
1	中海道	京都府	S B32110	前期	A-1	4×4	2×2	8.6×7.7	5.3×5.0	66.22	集落縁辺部		1
2	中溝・深町	群馬県	1号掘立柱建物	前期	A-1	4×4	2×2	8×8	4.8×4.5	64	集落縁辺①		2
3	城之越	三重県	A地区S B1	中期	A-1	5×4	2×2	13.6×12.0	8.4×6.2	163.2	集落縁辺②	前身建物SB1, あり	3
4	城之越	三重県	A地区S B2	中期	A-1	4×4	2×2	11.3×10.3	5.8×5.0	116.39	集落縁辺②		3
5	城之越	三重県	B地区S B1	中期	A-1	5×4	2×2	12.5×11.6	7.5×6.8	145	集落縁辺②		4
6	城之越	三重県	B地区S B2	中期	A-1	5×4	2×2	13.7×12.5	8.2×7.1	171.25	集落縁辺②		4
7	南郷安田	奈良県	S B01	中期	A-1	4×4	2×2	12.5×11.5	7×7	263.5	集落縁辺②	孫庇?、6×6、17×15.5m	5
8	和邇	奈良県	掘立柱建物01	中期	A-1	6×6	2×2	13.3×12.9	8.1×7.7	171.57	集落縁辺③		6
9	柿坪	兵庫県	S B5	中期	B	6×6	3×2	15.4×13.1	9.4×8.7	201.74	居館?		7
10	柿坪	兵庫県	S B19	中期	B	5×4	3×2	10.7×10.3	5.6×5.4	110.21	居館?	孫庇	7
11	三ツ寺 I	群馬県	1号掘立柱建物	中期	A-2	8×8	3×3	13.7×11.78	10.1×8.42	189	居館		8
12	原之城	群馬県	第3号掘立柱建物	後期	A-2	7×5	2×2?	10.5×8.9	7×5?	93.45	居館	切り合い関係あり	9
13	原之城	群馬県	第4号掘立柱建物	後期	A-1	5×4?	2×2?	8.0×8.0?	6.1×5.4?	64?	居館		9
14	上之宮	奈良県	S B06	後期	B	6×5	4×3	13.6×11.4	9.35×6.5	155.04	居館	屋内棟持ち柱、S B07に切られる	10
15	上之宮	奈良県	S B07	後期	B	7×6	5×4	12.85×11.1	8.95×7.1	142.64	居館	屋内棟持ち柱	10
16	中山	奈良県	S B01	後期	B	7×6	5×3	22.5×18.5	19×14	416.25	集落縁辺部	孫庇、屋内棟持柱	10
17	平尾山	奈良県	第I区掘立柱建物	後期	B	6×5	4×3	12.93×10.44	8.35×5.88	134.99	集落縁辺③		11

※1 形式は、青柳分類による。以下の通りである。

A-1類=身舎の柱間間数が各辺同数のもので、正方形プランのもの

A-2類=身舎の柱間間数が各辺同数のもので、長方形プランのもの

B類=身舎の柱間間数が各辺同数にならないもの。

※3 位置の細分類は青柳分類により、以下の通りである。

①居館近接型、②導水施設近接型、③古墳近接型

文献

- 1 (財)向日市埋蔵文化財センターほか 「中海道遺跡-第32次発掘調査概要-」 『向日市埋蔵文化財調査報告書』第44集 1997年
- 2 群馬県新田町教育委員会 『新田東部遺跡群』 1995年
- 3 上野市教育委員会ほか 「城之越遺跡(2次)発掘調査報告」 『上野市文化財調査報告』51 1998年
- 4 三重県埋蔵文化財センター 「城之越遺跡」 『三重県埋蔵文化財調査報告99-3』 1992年
- 5 奈良県立橿原考古学研究所 「井戸遺跡・南郷安田遺跡」 『奈良県遺跡調査概報1995年度』 1996年
- 6 奈良県立橿原考古学研究所 「和邇遺跡第14・15次調査」 『奈良県遺跡調査概報2002年度』 2003年
- 7 兵庫県埋蔵文化財調査事務所 「柿坪遺跡」 『平成11年度 年報』 2000年
- 8 群馬県教育委員会ほか 「三ツ寺 I 遺跡」 『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集 1988年
- 9 伊勢崎市教育委員会 『原之城遺跡発掘調査報告書』 1988年
- 10 桜井市教育委員会 『阿部丘陵遺跡群』 1989年
- 11 埋蔵文化財天理教調査団 「平尾山遺跡発掘調査報告書調査報告-1984.4~1984.7調査-」 『考古学調査研究中間報告』15 1989年

いたと想定している。また、近隣に所在する和田山町茶すり山古墳は、径86mの円墳である。近畿地方でも最大規模の墳丘で、豊富な遺物を出土した古墳時代中期の古墳である。柿坪遺跡の大型建物群とほぼ同時期のもので、両者の関係が注目される（吉識ほか2000・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2004）。

＜三田谷 遺跡＞ 建物の全容と詳細な時期が不明であるが、島根県出雲市三田谷 遺跡のS B 16も同様の建物である。三田谷遺跡は、神部川が出雲平野に流れ出る辺りの丘陵地帯とその谷間に立地する。遺構の中心は側柱建物と倉庫と考えられる総柱建物である。建物群は4つの単位集団が抽出でき、6世紀後半以降、7世紀以降、7世紀末以降の3時期の変遷が復元されている。S B 16自体の時期は不明確であるが、その位置などから7世紀代の建物群に含まれ、谷の奥に位置する。S B 16を含む建物群と重複するように、下の時期の湧水坑や墨書土器・斎串などの祭祀具が出土している。調査者は、その開始時期は不明ながら、この谷の奥が湧水を用いた祭祀場であり、S B 16が神殿であったと想定している。S B 16の規模は、外周柱穴列の梁行は4間、桁行1間以上、身舎の梁行3間、桁行は調査地外に外れるため不明である。外周柱穴列と身舎の柱とは対応しない。調査者はこの外周柱穴列を縁束である可能性も示している（熱田編2000）。

このような諸例で四面庇付建物を含む外周柱穴列を伴う建物は、濠や柵で囲繞され、導水施設や祭祀遺構を伴う例が多い。そのため、一般の側柱建物や倉庫と考えられる総柱建物よりも格が高い建物であると評価されている。山本氏らの研究により梁行3間四面庇付き建物は、後の官衙や宮における正殿に用いられたことが説かれている（山本2004）。換言すれば、四面に外周柱穴列を伴う大型建物をもつ集落は、それをもたない一般の集落に比べ、格差を有する有力な集落であるといえる。以上のことを踏まえ、本例をみると、今回の調査では、濠や柵などの囲繞施設や、掘立柱建物4に伴う祭祀遺物や、祭祀遺構を見出せず、祭事・政事を行う空間の存在は見出せない。祭殿であると評価するには、今後の調査の進展を待たなければならない。同様に、本遺跡の掘立柱建物4は、今調査地においては、辰巳氏が説くような諸条件（注1）を満たしておらず、豪族居館とは断定できない。しかしながら、掘立柱建物4は、山陰地方での同時期の集落遺跡をみると、その規模・構造には明らかに格差が認められる。豪族層の屋敷であった可能性は高い。

4．古墳時代後期における名和飛田遺跡周辺の景観について

最後に名和飛田遺跡周辺の古墳時代後期の景観を考えたい。本遺跡の広がりを見ると、本遺跡の北方、東谷川右岸には坪田遺跡がある。平成11年度名和町教育委員会調査地では、花粉分析の結果から、古墳時代後期に確実に水田耕作が行われていたとされる（影山2002）。東谷川沿いの現坪田集落付近には水田が広がっていたと考えられる。また、名和飛田遺跡の掘立柱建物4を、豪族層の住居や祭殿と評価することが許されるならば、諸研究（注2）にあるように、この大型建物とそれを有する集落に相関する古墳の存在が推測される。しかしながら、本遺跡周辺では、古墳時代中期のハンボ塚古墳以降には、首長墳と評価できるような古墳はいまだ見出されていない。古墳の発掘調査例は少なく、既往の石室調査例（山陰考古学研究集会1996）を見た限りでも、古墳時代後期に突出した石室規模や構造の古墳は見出せない。地理的に近いという点であげるならば、坪田遺跡西方の台地上縁辺部に坪田古墳群がある。発掘調査は行われておらず、詳細はわからないが、分布調査から、残存直径5mから26mの円墳7基が地形に沿って並ぶ。その分布と墳丘のあり方から、

古墳時代後期の古墳群と想定されている。径約26mの第6号墳が、名和町域で最大の墳丘であり（名和町誌編纂委員会1978）、注目できようか。また西側の門前丘陵の先端部にも古墳がいくつか散在する（富長編1981）。このような周辺の古墳のあり方をみると、名和飛田遺跡に居住した集団を豪族層と認めても、それほど大きな豪族ではなかったようにもみえる。

今回の報告では、より広い地域間の同時期の集落と比較検討することはできなかった。旧汗入郡域での首長と集落の系譜を検討することは資料が少ない現状では難しい。今後の課題としたい。

（日置 智）

検出した遺構群の評価に際して、兵庫県芦屋市教育委員会の森岡秀人氏に、多くのご教示を賜りました。末筆ではありますが、深く感謝いたします。

注¹ 辰巳氏は、「広大な方形の屋敷地が、濠と柵で圍繞され、（中略）、一方が首長によるマツリゴト（祭事・政事）の空間であり、他方が、首長と一族の居住や倉庫・工房など、首長としての日常的な営みの空間と認識される（中略）屋敷地の二分構造を、それぞれ「ハレの空間」と「ケの空間」と呼称し、とりわけ前者を明確に指摘される屋敷地こそを、いわゆる豪族居館と認識すべきである。」と説かれる。（辰巳1990・2003など）

注² 阿部義平1991「豪族居館研究と課題」『季刊考古学36 特集古代の豪族居館』雄山閣所収など

【引用・参考文献】

青柳泰介2003「大型四面庇付き掘立柱建物について」『同志社大学考古学シリーズ 考古学に学ぶ（ ）考古学研究室開設五十周年記念』同志社大学考古学シリーズ刊行会

熱田貴保編2000『三田谷 遺跡（vol. 2）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 建設省中国地方建設局 出雲工事事務所・島根県教育委員会

池淵俊一編1998『石田遺跡 - 一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書15 - 』島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所

梅本康広1997「考察 - 遺構・遺物の評価と問題点」『中海道遺跡 - 第32次発掘調査概要 - 向日市埋蔵文化財調査報告書第44集』財団法人向日市埋蔵文化財センター

小笠原好彦1979「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』第25巻第4号 考古学研究会

影山和雅2002『坪田遺跡発掘調査報告書』一般県道旧奈和西坪線地方特定道路整備事業による県道付替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 名和町文化財調査報告書第29集 名和町教育委員会

小池 寛・松尾史子2000『森垣外遺跡第3次』京都府遺跡調査概報第91冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

辰巳和弘2003「古墳時代の居館と大型建物」『日本考古学協会2003年滋賀大会資料集』日本考古学協会2003年滋賀大会実行委員会

椿 真治1998『山ノ神遺跡 五反田遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書16 島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所

椿 真治・林 健亮編1997『洪山池遺跡・原ノ前遺跡』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区 島根県教育委員会

富長源一郎編1981「荒田遺跡」『名和遺跡群発掘調査報告書』名和町教育委員会

中原 斉1996「伯耆西部の横穴式石室」『第24回山陰考古学研究集会 山陰の横穴式石室 - 地域性と編年の再検討 - 』山陰考古学研究集会

第6章 特論

名和町誌編纂委員会1978『名和町誌』

西川徹ほか編2004『茶畑遺跡群 茶畑第1遺跡・押平尾無遺跡・古御堂笹尾山遺跡・古御堂新林遺跡』鳥取県教育文化財団
調査報告書93 財団法人鳥取県教育文化財団

原田雅彦他編1978『由良遺跡発掘調査報告書 県立由良育英高等学校敷地造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査』鳥取県
東伯郡大栄町教育委員会

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2004『兵庫県埋蔵文化財情報 ひょうごの遺跡』52号

松井和幸ほか1986『大宮遺跡発掘調査報告書 兼代地区』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第51集 財団法人広島県
埋蔵文化財センター

宮本長二郎1991「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会

山中敏史編2003『古代の官衙遺跡 遺構編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

山本忠尚2004「祭殿から内裏正殿へ（上）- 梁間三間四面庇付建物の意義 -」『古代文化』56 - 5 財団法人古代学協会

山本忠尚2004「祭殿から内裏正殿へ（下）- 梁間三間四面庇付建物の意義 -」『古代文化』56 - 6 財団法人古代学協会

芳賀章内編1991「特集 古代の豪族居館」『季刊考古学』第36号雄山閣

吉識雅仁ほか2000「柿坪遺跡」『平成11年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

第7章 まとめ

調査の結果、名和飛田遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明した(表26)。ここでは、時代を追って調査の成果をまとめる。

1. 縄文時代

遺構は土坑がわずかに見られる程度であったが、遺物の出土量は極めて多い。最古の土器は押型文土器で、わずか1点の出土ながら早期中葉段階にはすでに遺跡地周辺で人間活動が開始されていたことを示している。なお、名和川を隔ててすぐ西側の丘陵上に位置する門前第2遺跡菖蒲田地区から、黄島式期の配石群が検出されている(中森・浜田・湯川2005)。名和飛田遺跡との関連が考えられるとともに、ある程度定着性の高い集団が周辺地域に居住していたことを示しているだろう。

早期末～前期初頭になると、極めて活発な遺跡利用が見られる。3000点を超える早期末～前期初頭の土器片が出土したほか、6000点以上出土した石器も大半がこの時期のものと思われる。遺物が大量に出土しただけでなく、数は少ないながらも遺構が検出されたことも重要だろう。これらの遺構がさらに調査地外に広がることも考えられる。周辺にはこの時期の遺物の見られる遺跡は少なく、出土遺物量も名和飛田遺跡には遠く及ばない。遺物量から考えて、名和飛田遺跡が拠点的な居住地としての位置を占めていたと考えられる(第6章第7節参照)。

前期前葉から後期前葉にかけて、遺跡の利用はきわめて低調となる。しかし、わずかながらも遺物が見られるので、遺跡周辺での活動が途絶えてしまったわけではない。名和川を隔てて対岸に位置する門前上屋敷遺跡では中期と後期前葉の土坑や土器が、また、門前第2遺跡菖蒲田地区では後期初頭の土器と土坑が見つかったが、ともに拠点的な居住を示すほどの内容ではない。名和飛田遺跡から名和川を約1.2km下ったところに、後期初頭の竪穴住居が検出された南川遺跡が存在するので、名和飛田遺跡や門前第2遺跡などはこうした拠点居住地から派生した遺跡の可能性が考えられる。

後期中葉には再び遺跡利用が活発となる。第3調査地だけでなく第2調査地でもかなりの遺物出土量を見たので、東谷川寄りにも活動域が広がっていたと思われる。調査範囲内では遺構は見つからないが、遺物量から考えて比較的拠点性の高い居住地として利用されていた可能性がある。後期後葉にもまとまった量の遺物が見られる。

晩期は前葉、中葉の遺物を全く欠いている。後葉には、突帯文土器の出土が見られ、遺跡利用は弥生時代前期へと継続していく。(北)

表26 名和飛田遺跡周辺集落消長表

	縄文時代					弥生時代			古墳時代			古代	中世		近世		
	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	前期	中期	後期		前期	後期	前期	後期	
名和飛田遺跡	■	■	■	■	■												
門前上屋敷遺跡																	
門前第2遺跡																	
名和中畝遺跡																	

■ 遺物のみ ■ 遺構少 ■ 遺構多

2. 弥生時代

弥生時代は前期から終末期までほぼ全時期の遺物が確認されており、継続的な遺跡利用があったことがうかがえる。竪穴住居などがつくられ、集落が形成されるのは中期後葉と後期前葉である。

中期後葉

中期後葉には竪穴住居2棟、竪穴3基のほか土坑などが見られる。竪穴住居4と竪穴住居5は、含まれる土器が同時期のものであること、住居の柱配置が同一で構造上に類似性が高いこと、隣接して造られることなどから、同一集団による居住が考えられる。ともに土器を使用した住居廃絶行為があったと推察されるのも興味深い点であろう。竪穴5は竪穴住居と規模があまり変わらないことや、周壁溝が見つかったことから住居として機能した可能性がある。それ以外の竪穴は住居としての機能は考えがたい。遺構群は調査地外にさらに広がっていた可能性があるため、集落構造の全容把握には今後の調査を待たねばならないが、現状では、一つの単位集団によって居住された小規模な集落が形成されていたと評価しておこう。

中期の遺構からは特徴的な遺物がいくつか出土している。竪穴住居5出土の台付壺(318)は特異な器種である。完全に在地の土器製作技術によって作られているが、その器種の成立自体は在地の土器伝統に求められない可能性もあろう。廃絶儀礼に使用されたと考えられる出土状況とあわせて特殊なあり方を見せている。また、竪穴5検出面付近で出土した絵画土器(327)も重要であろう。壺の頸部に線刻画が描かれており、絵画のモチーフはシカと考えられる。線刻画は先端があまりとがらないへら状の工具で浅く描かれている。刻線の切り合い関係や粘土の動きから、角頭首・体部脚(前脚 後脚?)の順に描いたと考えられる(図168)。絵画土器は鳥取県内で6例目となり、貴重な発見となった(表27)。県内の資料には、名和飛田遺跡のほかにシカのモチーフが描かれたものが2例見られるが、他地域の絵画土器のモチーフに比べてシカの出現率が低い。類例が少ない現状では不明な点が多いが、今後資料が蓄積されれば、絵画のモチーフの地域的特色が指摘できるかもしれない(辻1999)。

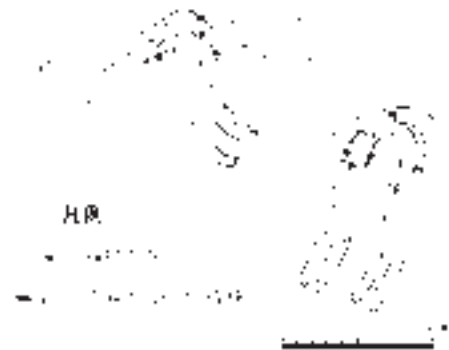


図168 線刻絵画

表27 鳥取県内出土絵画土器一覧

遺跡名	所在地	絵のモチーフ	土器の種類と個数	時期
名和飛田遺跡	西伯郡名和町	シカ	壺 1個体	中期後葉
茶畑山道遺跡	西伯郡名和町	魚(イルカ?)、船(?)	大型壺・広口壺 3個体	中期中葉
妻木晩田遺跡	西伯郡大山町	羽根飾りをつけた人物、船(?)	壺?	中期後葉?
稲吉角田遺跡	西伯郡淀江町	シカ・樹木と銅鐸(?)・二つの建物・船と船をこぐ人物	大型壺 1個体	中期後葉
日吉塚古墳	西伯郡淀江町	羽飾りをつけ武器・盾を持つ二人の戦士	大型壺 1個体	中期後葉
青谷上寺地遺跡	鳥取市	シカ、サメ、人物、記号様の意匠など	壺・甕 22個体(記号文含む)	中期後葉～後期

弥生時代中期後葉の集落は周辺にも多く展開している。川向いの門前上屋敷遺跡では4棟の竪穴住居や土坑などが見つかり、名和飛田遺跡と同様に一単位集団の居住による小集落が形成されていたと考えられている(森本編2005)。両遺跡は隣接して展開することから、強い関連性がうかがわれる。また、茶畑第1遺跡や茶畑山道遺跡、茶畑六反田遺跡など、蛇の川両岸に展開する集落は周辺地域の拠点となるような存在であったろう。

後期前葉

後期前葉には竪穴住居が1棟造られる。建て替えにともなう拡張を一度行っている。拡張後の径は約7mで、比較的規模の大きな住居である。第3調査地C区の東端部付近で検出されており、さらに南側や東側に後期の遺構が展開していた可能性がある。包含層や南東方向から流下してくる溝1から多くの後期土器が出土したことから、さらに集落が広がっていたことが推測されよう。住居内からはガラス小玉が18点、石製小玉が1点出土した。住居内から出土する例自体は数多く見られるものの、出土数が非常に多い点で特筆されよう。後期前葉の集落は名和町域では数が少なく、押平尾無遺跡や東高田遺跡にわずかな数の竪穴住居が見られる程度である。(北)

3. 古墳時代

中期末

第3調査地A区において、古墳時代中期末の竪穴住居1棟、竪穴1基、廃棄土坑などを検出した。古墳時代中期の遺構と遺物は、第2調査地と第3調査地A区の北東部に集中する。本遺跡の北方、東谷川右岸に所在する坪田遺跡では、明確な遺構は確認されていないが、古墳時代中期から後期にかけての遺物が散布している(岡野編2002、影山2002)。本調査地の東側の谷や、北方の坪田遺跡との間に古墳時代中期の遺構群が広がっている可能性も考えられる。

後期末

第3調査地E区において、竪穴住居2棟、竪穴1基、掘立柱建物4棟を検出した。これらの竪穴住居は、周辺遺跡の古墳時代後期末の一般的な住居と形態上は大差ないが、規模では大型といえる。

掘立柱建物1は本調査地では唯一全容がわかる大型建物である。掘立柱建物3は両桁側に柱穴列をもつ。掘立柱建物4は、梁行3間、桁行3間以上の規模を有する身舎に、三面ないしは四面に外周柱穴列がともなう。他地域の類例や先行研究によると、豪族の屋敷や祭殿のような、格上の建物に用いられた構造と評価できよう(第6章第9節参照)。

古墳時代後期末の遺構群は調査地のごく狭い範囲に集中し、まとまりをもった集落をなしているといえる。ただし、遺構群は調査地外にさらに広がっていたと考えられるので、集落の全容は不明である。竪穴住居、竪穴はいずれもTK209型式併行期のものである。掘立柱建物は時期を確実に限定できる状況にないものの、配置関係や建物の軸がいずれもほぼ揃うことから同時存在の可能性もある。竪穴住居2と掘立柱建物3との切り合い関係や、掘立柱建物1で陶器編年TK217型式の須恵器が出土したことから、TK209型式併行期の内に、名和飛田集落内で竪穴住居が廃絶され、続くTK217型式併行期以降には掘立柱建物が築かれたと考えられる。竪穴住居から掘立柱建物への移り変わりを一遺跡内で追うことができる。名和飛田遺跡での移行時期と比較できる資料は、周辺では見られず、今後の調査の進展を待たなければならない。古墳時代後期末の集落は、検出した掘立柱建物4などを積極的に評価するならば、一般の集落ではなく、特定階層にある集団の居住域であった可能性がある。

竪穴住居2・3、竪穴2からは、多量の遺物が出土した。竪穴住居2・3、竪穴2出土の土器類は、当地域における古墳時代後期末の土師器編年研究にとって、良好な一括資料になるだろう。また、住居3や竪穴2からは甑と移動式竈が出土している。山陰地方では、島根県安来平野や松江周辺での調査例から、一般に6世紀後半から7世紀にかけて移動式竈が普及することが明らかにされ

ており、住居内での煮沸・炊飯形態の画期と考えられている（岩橋2003）。名和中畝遺跡の竪穴住居（加藤編2004）と共に、古墳時代後期の当地域での炊飯・煮沸具のあり方の一端を示す好資料を得られた。また、両住居から出土した彩色記号を施した須恵器や、竪穴住居3での有茎三角式鉄鏃・有茎腸挟柳葉式鉄鏃、ミニチュアの手づくね土器などは竪穴住居廃絶時に祭祀が行われたことを窺わせる遺物である。これらの遺物の住居からの出土は一般的ではない。周辺遺跡には見られない住居廃絶祭祀の一端をうかがえる貴重な資料が得られた（第6章第8節参照）。 （日置）

4．中世

第3調査地からはピットが35基検出されている。これらは建物を構成する配置をとらないため、性格は不明である。このうち7基からは、平安時代末～鎌倉時代のものと思われる土師皿や鉄刀、鉄滓などが出土している。意図的にピット内に埋納した可能性が高く、地鎮などの祭祀的行為が行われた可能性がある。調査地内からは建物が検出されず、中世の名和飛田遺跡の利用がどのようなものであったのかは不明である。対岸の門前上屋敷遺跡では区画溝や柵列などが検出され、屋敷地が形成されていた可能性が指摘されている（森本編2005）。本遺跡はこの門前上屋敷遺跡と密接な関連をもつものであった可能性が極めて高い。 （北）

今回の調査によって、本遺跡では、極めて長い期間にわたって、ほぼ絶え間なく人間活動が行われてきたことが明らかになった。縄文時代には拠点的な居住地として利用された時期があり、弥生時代、古墳時代には集落が形成されている。このように、名和飛田遺跡における遺跡利用の継続性の高さを明らかにしえたことも重要であろう。こうした遺跡の継続性は遺跡の立地と深くかかわっていた可能性があるだろう。遺跡は中規模河川の名和川と小河川の東谷川の合流地点に位置する。丘陵とその開析谷で構成される地形の多い周辺地域の中では、沖積地が発達したまねな地域と言える。縄文時代にはこうした地形が内水面漁労の最適地となっただろう。弥生時代以降には、この沖積地が農耕活動に適した場所となったことは想像に難くない。名和川下流域の土地利用の歴史を考える上でも、重要な成果が得られた。

以上のように重要な調査成果が多く得られたにもかかわらず、本報告ではそれを十分に評価し、提示することができなかった。調査報告者の力量と努力の不足を恥じる次第である。

最後になりましたが、発掘調査や整理作業に従事していただいた作業員や整理作業員の皆さん、発掘調査に協力して下さった地元の皆さんに深く感謝いたします。 （北・三木・日置）

【引用参考文献】

- 岩橋孝典2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号 鳥根県古代文化センター
岡野雅則編2002『坪田遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書79 （財）鳥取県教育文化財団
影山和雅2002『坪田遺跡発掘調査報告書』名和町文化財調査報告書第29集 名和町教育委員会
加藤裕一編2005『名和中畝遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書103 （財）鳥取県教育文化財団
辻信広1999『茶畑山道遺跡』名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
中森祥・浜田真人・湯川善一2005『門前第2遺跡（菖蒲田地区）』鳥取県教育文化財団調査報告書106 （財）鳥取県教育文化財団
森本倫弘編2005『門前上屋敷遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書105 （財）鳥取県教育文化財団

表28 第1遺構面ピット計測表(1)

P No.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色	P No.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色
1	43×28	38	30.06	暗灰褐色土	50	30×26	27	29.30	黒色粘質土
2	37×27	41	29.83	暗灰褐色土	51	27×23	21	29.37	黒色粘質土
3	23×19	27	29.98	暗灰褐色土	52	22×21	24	29.36	黒色粘質土
4	23×20	22	30.03	暗灰褐色土	53	32×27	24	29.38	黒色粘質土
5	40×34	48	29.79	暗灰褐色土	54	31×30	25	29.34	黒色粘質土
6	24×18	37	29.89	暗灰褐色土	55	24×21	34	29.21	黒色粘質土
7	24×20	44	29.82	暗灰褐色土	56	24×18	20	29.36	黒色粘質土
8	20×17	23	30.04	暗灰褐色土	57	25×23	16	29.35	黒色粘質土
9	16×11	27	30.00	暗灰褐色土	58	22×19	13	29.39	黒色粘質土
10	33×21	14	29.99	灰色粘質土	59	33×31	27	29.24	黒色粘質土
11	30×29	35	29.83	灰色粘質土	60	35×(30)	21	29.31	黒色粘質土
12	36×33	15	30.03	灰色粘質土	61	33×27	18	29.33	黒色粘質土
13	30×22	6	29.88	灰色粘質土	62	25×24	22	29.33	黒色粘質土
14	50×31	22	28.90	黒褐色土	63	35×26	26	29.31	不明
15	35×32	28	29.15	黒褐色土	64	24×21	18	29.39	黒色粘質土
16	(46)×40	87	28.51	灰色土	65	30×18	24	29.33	黒色粘質土
17	20×(18)	46	29.09	灰色土	66	27×25	20	29.37	黒色粘質土
18	(26)×24	29	28.81	灰色土	67	31×(24)	21	29.34	不明
19	29×(28)	34	28.88	灰色土	68	29×(28)	34	29.25	不明
20	29×26	42	28.97	灰色土	69	30×(28)	25	29.23	不明
21	18×16	19	29.15	灰色土	70	33×30	13	29.34	黒色粘質土
22	(42)×39	24	28.84	灰色土	71	28×26	27	29.22	黒色粘質土
23	60×43	11	29.90	暗褐色土	72	44×36	33	29.12	黒色粘質土
24	63×54	58	28.90	暗灰褐色土	73	26×24	22	29.25	黒色粘質土
25	48×41	43	29.14	黒色粘質土	74	32×27	16	29.29	黒色粘質土
26	50×34	13	29.71	灰色土	75	32×29	18	29.33	不明
27	40×38	31	29.12	暗褐色土	76	29×27	20	29.38	黒色粘質土
28	54×49	54	28.91	暗灰褐色土	77	31×29	24	29.33	黒色粘質土
29	(24)×22	36	29.06	暗灰褐色土	78	37×31	12	29.47	極暗褐色粘性砂質土
30	(30)×28	37	29.06	暗灰褐色土	79	30×28	26	29.37	黒色粘質土
31	(70)×63	37	29.05	灰褐色土	80	36×32	18	29.45	不明
32	29×(28)	19	29.19	褐色土	81	17×15	16	29.45	黒色粘質土
33	36×35	9	29.26	暗褐色土	82	23×18	17	29.43	黒色粘質土
34	24×21	20	29.32	極暗褐色粘性砂質土	83	17×15	13	29.47	黒色粘質土
35	50×42	24	29.26	灰色土	84	23×(20)	25	29.37	黒褐色粘性砂質土
36	39×35	15	29.36	極暗褐色粘性砂質土	85	20×(18)	19	29.46	黒褐色粘性砂質土
37	24×21	11	29.42	極暗褐色粘性砂質土	86	27×20	10	29.54	不明
38	26×25	29	29.26	極暗褐色粘性砂質土	87	22×19	7	29.58	不明
39	33×30	28	29.26	極暗褐色粘性砂質土	88	29×25	33	29.09	不明
40	25×22	6	29.53	不明	89	34×31	30	29.05	黒色粘質土
41	29×28	23	29.34	極暗褐色砂質土	90	27×24	15	29.22	黒色粘質土
42	24×23	11	29.49	極暗褐色砂質土	91	29×26	43	28.90	黒色粘質土
43	18×16	9	29.50	不明	92	23×16	16	29.19	黒色粘質土
44	25×23	12	29.48	不明	93	32×22	27	29.08	黒色粘質土
45	30×25	24	29.40	暗褐色粘質土	94	19×10	10	29.26	黒色粘質土
46	39×37	25	29.40	暗褐色粘質土	95	23×13	16	29.18	不明
47	49×39	18	29.47	暗褐色粘質土	96	27×19	33	29.02	不明
48	25×22	24	29.36	不明	97	32×28	32	29.02	不明
49	28×22	15	29.48	不明	98	27×24	28	29.05	黒色粘質土

表29 第1遺構面ピット計測表(2)

P No.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色
99	25×16	25	29.08	不明
100	30×(28)	21	28.97	黒色粘質土
101	33×24	24	29.01	不明
102	23×21	28	29.05	不明
103	34×29	32	29.04	黒色粘質土
104	39×31	20	29.15	黒色粘質土
105	36×32	33	29.01	黒色粘質土
106	37×34	30	29.05	不明
107	30×23	18	29.19	黒色粘質土
108	35×27	19	29.20	不明
109	35×31	15	29.27	黒色粘質土
110	27×25	12	29.31	黒褐色粘性砂質土
111	36×35	22	29.19	不明
112	41×39	41	29.01	黒褐色粘性砂質土
113	45×42	32	29.02	黒色粘質土
114	37×31	28	29.05	黒色粘質土
115	30×28	31	29.10	不明
116	33×26	36	29.25	不明
117	(38)×36	31	29.80	暗褐色土
118	50×30	50	29.63	暗褐色土
119	38×32	25	29.72	黒色粘質土
120	40×(30)	28	29.71	黒色粘質土
121	32×26	13	29.86	黒褐色粘質土
122	39×(38)	24	29.81	黒色粘質土
123	40×37	17	29.86	黒褐色粘質土
124	34×32	19	29.82	黒褐色粘質土
125	26×22	22	29.43	黒褐色粘質土
126	30×25	20	29.73	黒褐色粘質土
127	48×40	57	29.39	黒褐色粘質土
128	26×19	66	29.59	黒褐色粘質土
129	25×16	52	29.77	黒褐色粘質土
130	26×24	29	30.01	黒褐色粘質土
131	30×22	26	29.69	黒褐色粘質土
132	33×28	31	29.95	黒褐色粘質土
133	47×39	8	29.92	黒色粘質土
134	36×33	36	29.62	黒褐色粘質土
135	32×30	30	29.67	黒色粘質土
136	27×22	25	30.06	黒褐色粘質土
137	29×18	31	29.99	黒褐色粘質土
138	22×19	27	30.10	黒褐色粘質土
139	26×(24)	21	30.15	黒褐色粘質土
140	32×30	11	29.80	黒褐色粘質土
141	43×34	19	29.77	黒色土
142	28×27	17	29.51	黒色土
143	38×29	21	29.68	黒色土
144	29×28	28	29.63	黒色土
145	50×49	41	29.08	暗灰褐色土
146	42×37	12	29.82	暗褐色土
147	(54)×44	48	28.96	暗褐色土
148	58×(49)	47	28.94	暗灰褐色土
149	50×46	65	28.77	暗灰褐色土
150	49×46	44	28.99	暗褐色土
151	38×(34)	41	29.11	暗灰褐色土
152	45×38	21	29.31	黒
153	51×48	37	29.15	暗灰褐色土
154	42×38	53	28.89	暗灰褐色土
155	(40)×38	67	28.73	暗褐色土
156	73×68	33	29.25	暗褐色土
157	(40)×37	60	28.84	暗灰褐色土
158	欠番			
159	67×55	54	28.94	暗褐色土
160	38×27	9	29.54	不明
161	46×44	20	29.30	暗褐色土
162	48×42	22	29.28	暗灰褐色土
163	49×44	47	29.01	暗灰褐色土
164	60×56	30	29.19	暗褐色土
165	56×50	31	29.21	暗褐色土
166	(40)×36	17	29.30	暗灰褐色土
167	(32)×30	45	29.03	暗灰褐色土
168	38×(36)	53	28.95	暗灰褐色土
169	欠番			
170	29×27	47	28.99	灰色土
171	63×59	48	28.98	暗灰褐色土
172	52×(48)	77	28.72	暗灰褐色土
173	42×37	18	29.40	暗褐色土
174	41×38	9	29.52	暗褐色土
175	(40)×36	40	29.12	暗灰褐色土
176	(41)×35	30	29.17	灰色土
177	35×32	59	28.84	灰色土
178	22×20	58	28.84	灰色土
179	30×21	15	28.97	灰色土
180	34×32	39	28.98	灰色土
181	28×26	30	29.02	灰色土
182	33×28	43	28.97	灰色土
183	21×(18)	11	29.41	黄灰色土
184	43×36	44	29.12	灰色土
185	26×(24)	21	29.34	灰色土
186	19×18	10	29.11	灰色土
187	19×18	9	29.21	灰色土
188	25×19	34	29.14	灰色土
189	52×(40)	34	28.80	黒褐色土
190	欠番			
191	49×48	29	29.24	暗褐色土
192	43×(41)	45	28.96	暗褐色土
193	45×38	15	29.22	暗灰褐色土
194	45×42	21	29.16	褐色土
195	50×43	35	28.80	暗灰褐色土
196	45×34	31	29.13	黄灰色土

表30 第1遺構面ピット計測表(3)

P No.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色
197	30×29	29	29.14	灰色土
198	28×(26)	35	29.04	暗灰褐色土
199	38×36	27	29.17	暗灰褐色土
200	28×27	10	29.42	黒色土
201	29×27	11	29.39	黒色土
202	52×45	16	29.12	不明
203	50×46	7	29.42	暗褐色土
204	50×47	17	29.12	暗褐色土
205	欠番			
206	40×32	13	29.35	灰色土
207	41×40	19	29.29	灰色土
208	31×27	41	29.07	褐色土
209	30×29	13	29.35	褐色土
210	26×21	20	29.29	灰色土
211	25×23	8	29.41	黄灰色土
212	17×15	9	29.37	黄灰色土
213	34×30	14	29.33	暗褐色土
214	24×21	20	29.27	黄灰色土

P No.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色
215	23×20	18	29.29	黄灰色土
216	24×(21)	10	29.38	黄灰色土
217	36×29	24	29.24	黄灰色土
218	20×18	16	29.30	黄灰色土
219	56×41	38	29.11	灰色土
220	41×32	19	29.36	暗褐色土
221	58×57	46	28.81	暗褐色土
222	44×42	52	28.78	暗灰色土
223	49×47	20	29.31	暗褐色土
224	70×65	61	28.82	暗褐色土
225	28×26	42	28.83	暗灰色土
226	46×40	53	28.75	暗灰色土
227	38×34	26	29.08	暗灰色土
228	42×40	16	23.36	灰色土
229	69×62	15	29.30	暗褐色土
230	(65)×(60)	(42)	29.00	暗褐色土
231	35×31	31	29.17	暗褐色土

表31 第2遺構面ピット計測表(1)

P No.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色
232	43×37	15	29.47	黒褐色土
233	28×25	32	29.14	黒褐色土
234	37×31	31	29.02	黒褐色土
235	30×25	16	29.29	黒褐色土
236	30×27	12	29.40	黒褐色土
237	30×27	17	29.36	黒褐色土
238	33×27	17	29.31	黒褐色土
239	26×20	14	29.34	黒褐色土
240	30×24	14	29.34	黒褐色土
241	25×20	11	29.31	黒褐色土
242	25×18	10	29.33	黒褐色土
243	27×23	27	29.13	黒褐色土
244	25×21	33	29.03	黒褐色土
245	20×18	9	29.28	黒褐色土
246	25×21	10	29.27	黒褐色土
247	23×21	12	29.25	黒褐色土
248	29×25	9	29.38	黒褐色土
249	28×27	14	29.33	黒褐色土
250	29×25	23	29.19	黒褐色土
251	36×31	35	29.09	黒褐色土
252	26×(23)	17	29.24	黒褐色土
253	13×12	11	29.32	黒褐色土
254	23×16	19	29.26	黒褐色土
255	19×18	24	29.21	黒褐色土
256	19×15	11	29.24	黒褐色土
257	32×24	27	29.04	黒褐色土

P No.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色
258	23×20	18	29.16	黒褐色土
259	28×25	15	29.33	黒褐色土
260	30×26	23	29.08	黒褐色土
261	22×20	21	29.12	黒褐色土
262	31×29	24	29.07	黒褐色土
263	40×27	38	28.90	黒褐色土
264	41×28	27	28.96	黒褐色土
265	37×24	15	29.32	黒褐色土
266	38×27	13	29.35	黒褐色土
267	35×32	17	29.32	黒褐色土
268	24×18	17	29.29	黒褐色土
269	28×18	14	29.31	黒褐色土
269	30×28	15	29.28	黒褐色土
270	23×15	7	29.35	黒褐色土
271	25×23	8	29.35	黒褐色土
272	29×22	23	29.20	黒褐色土
274	22×21	16	29.23	黒褐色土
275	20×17	11	29.27	黒褐色土
276	76×44	27	28.98	黒褐色土
277	22×18	12	29.09	黒褐色土
278	31×29	32	28.95	黒褐色土
279	31×27	25	29.03	黒褐色土
280	41×33	33	28.93	黒褐色土
281	33×31	18	29.07	黒褐色土
282	28×23	11	29.20	黒褐色土
283	36×29	43	28.87	黒褐色土

表32 第2遺構面ピット計測表(2)

P No.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色	P No.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色
284	53×46	50	28.80	黒褐色土	380	25×23	15	29.31	黒色土
285	31×23	8	29.20	黒褐色土	381	23×22	18	29.27	黒色土
286	47×28	18	29.04	黒褐色土	382	49×26	14	29.37	黒色土
287	45×32	31	28.95	黒褐色土	383	25×21	9	29.49	黒色土
288	45×31	27	28.86	黒褐色土	384	23×22	10	29.46	黒色土
289	33×24	27	28.98	黒褐色土	385	23×20	9	29.39	黒色土
290	22×18	18	28.99	黒褐色土	386	38×28	7	29.43	黒色土
291	31×26	21	29.04	黒褐色土	387	32×25	11	29.34	黒色土
292	23×16	13	29.10	黒褐色土	388	41×34	16	29.30	黒色土
293	25×15	23	28.99	黒褐色土	389	43×32	36	29.19	黒色土
294	17×14	10	29.11	黒褐色土	390	53×28	30	29.26	黒色土
295	19×17	16	29.05	黒褐色土	391	26×22	26	29.33	黒色土
296	38×30	35	28.87	黒褐色土	392	23×19	15	29.45	黒色土
297	14×13	10	29.11	黒褐色土	393	29×26	10	29.53	黒色土
298	25×22	30	28.91	黒褐色土	394	29×25	13	29.49	黒色土
299	33×23	7	29.13	黒褐色土	395	29×27	12	29.21	不明
300	17×13	17	29.01	黒褐色土	396	18×17	13	29.10	不明
301	28×24	7	29.14	黒褐色土	397	22×19	13	29.04	不明
302	58×36	10	29.10	黒褐色土	398	35×30	12	29.38	黒色土
303	27×26	11	29.09	黒褐色土	399	25×21	31	29.23	黒色土
304	22×17	13	29.05	黒褐色土	400	42×34	22	29.38	黒色土
305	(38)×31	19	29.11	黒褐色土	401	34×26	10	29.25	黒色土
306	27×22	16	29.15	黒褐色土	402	53×37	11	29.24	黒色土
307	27×25	19	29.14	黒褐色土	403	23×20	20	29.24	黒色土
308	35×32	18	29.19	黒褐色土	404	21×20	16	29.20	黒色土
309	28×25	23	29.15	黒褐色土	405	45×34	33	28.54	黒色土(砂質)
310	50×(32)	12	29.23	黒褐色土	406	31×29	16	28.85	黒色土(砂質)
311	27×20	14	29.05	不明	407	42×41	40	28.55	黒色土(砂質)
312	25×18	13	29.05	不明	408	41×35	41	28.53	黒色土(砂質)
313	28×24	18	29.01	不明	409	30×29	30	28.64	黒色土(砂質)
314	35×32	26	28.91	不明	410	48×46	16	28.55	黒色土(砂質)
315	35×29	16	29.01	不明	411	42×40	13	28.61	黒色土(砂質)
316	26×25	21	28.96	不明	412	28×27	22	28.61	黒色土(砂質)
317	28×26	6	29.02	不明	413	27×25	24	28.58	黒色土(砂質)
318	30×20	23	28.94	不明	414	31×25	13	28.66	黒色土(砂質)
319	18×17	20	28.96	不明	415	33×32	13	28.65	黒色土(砂質)
320	33×22	28	28.88	不明	416	25×20	38	28.35	黒色土(砂質)
321	29×20	26	28.66	黒色砂質土	417	33×29	14	28.61	黒色土(砂質)
322	26×(24)	19	28.66	不明	418	40×38	27	28.48	黒色土(砂質)
323	29×27	24	28.67	不明	419	31×29	32	28.67	黒色土(砂質)
324	29×20	15	28.97	不明	420	(82)×42	13	28.85	黒色土(砂質)
325	47×42	16	28.80	黒色砂質土	421	29×25	13	28.87	黒色土(砂質)
326	20×19	16	28.76	黒色土	422	26×21	27	28.73	黒色土(砂質)
327	40×(30)	23	28.56	黒色砂質土	423	30×25	22	28.78	黒色土(砂質)
375	28×23	14	29.24	黒色土	424	35×21	15	28.81	黒色土(砂質)
376	33×28	38	29.04	黒色土	425	41×38	40	28.58	黒色土(砂質)
377	32×26	22	29.20	黒色土	426	40×26	28	28.66	黒色土(砂質)
378	25×22	16	29.28	黒色土	427	(36)×29	36	28.58	黒色土(砂質)
379	23×20	16	29.29	黒色土	428	59×52	33	28.61	黒色土(砂質)

表33 第2遺構面ピット計測表(3)

P No.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色	P No.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色
429	31×29	10	28.90	黒色土(砂質)	477	30×27	36	29.43	黒色土
430	26×23	27	28.75	黒色土(砂質)	478	(71)×52	20	29.82	不明
431	31×25	23	28.78	黒色土(砂質)	479	58×50	25	29.78	不明
432	22×19	13	28.87	黒色土(砂質)	480	34×(33)	16	29.83	不明
433	31×24	31	28.74	黒色土(砂質)	481	27×25	15	29.67	黒色土
434	41×34	39	28.68	黒色土(砂質)	482	30×28	21	29.58	黒色土
435	36×26	20	28.85	黒色土(砂質)	483	22×19	10	29.72	黒色土
436	39×31	45	28.59	黒色土(砂質)	484	28×26	32	29.49	黒色土
437	32×31	21	28.79	黒色土(砂質)	485	38×27	20	29.73	不明
438	26×20	14	29.01	黒色土(砂質)	486	39×35	60	29.07	黒色土
439	43×35	19	28.97	黒色土(砂質)	487	37×34	44	29.21	黒色土
440	36×27	31	28.86	黒色土(砂質)	488	46×42	60	29.07	黒色土
441	26×19	27	28.86	黒色土(砂質)	489	33×30	31	29.47	黒色土
442	39×28	20	28.52	黒色土(砂質)	489	31×28	30	29.35	黒色土
443	36×28	16	28.60	黒色土(砂質)	490	30×28	30	29.37	黒色土
444	52×35	13	28.57	黒色土(砂質)	491	32×29	35	29.31	黒色土
445	45×39	13	28.60	黒色土(砂質)	492	39×25	34	29.29	黒色土
446	40×33	32	28.52	黒色土(砂質)	494	28×26	16	29.54	黒色土
447	62×51	19	28.61	黒色土(砂質)	495	36×34	47	29.34	黒色土
448	42×37	39	28.53	黒色土(砂質)	496	36×31	22	29.58	黒色土
449	28×23	31	28.60	黒色土(砂質)	497	30×27	27	29.50	黒色土
450	17×14	9	28.81	黒色土(砂質)	498	41×39	32	29.41	黒色土
451	29×24	31	28.63	黒色土(砂質)	499	31×29	27	29.52	黒色土
452	37×31	53	28.39	黒色土(砂質)	500	37×33	29	29.50	黒色土
453	50×39	21	28.82	黒色土(砂質)	501	28×26	14	29.70	不明
454	35×31	28	28.69	黒色土(砂質)	502	30×25	15	29.72	不明
455	49×41	25	28.71	黒色土(砂質)	503	40×35	22	29.50	黒色土
456	31×22	13	28.76	黒色土(砂質)	504	34×30	23	29.14	暗褐色砂質土
457	24×18	24	28.69	黒色土(砂質)	505	40×34	57	29.28	暗褐色砂質土
458	34×25	22	28.62	黒色土(砂質)	506	37×33	27	29.50	暗褐色土
459	26×21	15	28.79	黒色土(砂質)	507	38×36	26	29.48	暗褐色砂質土
460	49×33	25	28.68	黒色土(砂質)	508	43×38	15	29.11	暗褐色砂質土
461	19×17	22	28.75	黒色土(砂質)	509	40×30	26	29.31	暗褐色砂礫
462	38×25	29	28.66	黒色土(砂質)	510	40×(35)	39	29.20	暗褐色砂礫
463	32×30	24	28.75	黒色土(砂質)	511	34×28	26	29.30	暗褐色砂礫
464	48×43	51	28.54	黒色土(砂質)	512	58×47	26	29.31	暗褐色砂礫
465	28×25	19	28.84	黒色土(砂質)	513	38×37	36	29.22	暗褐色砂礫
466	27×20	27	28.82	黒色土(砂質)	514	54×50	36	29.23	暗褐色砂礫
467	17×13	9	28.81	黒色土(砂質)	515	40×38	43	29.16	暗褐色砂礫
468	17×11	13	28.75	黒色土(砂質)	516	33×30	20	29.46	暗褐色土
469	30×14	13	28.75	黒色土(砂質)	517	26×20	20	29.46	暗褐色土
470	31×27	14	28.78	黒色土(砂質)	518	39×37	27	29.35	暗褐色砂質土
471	23×16	18	28.65	黒色土(砂質)	519	58×51	17	28.98	暗褐色砂質土
472	33×28	25	29.50	黒色土	520	34×(33)	15	28.97	暗褐色砂質土
473	27×23	32	29.45	黒色土	521	31×26	37	29.26	暗褐色砂質土
474	49×(34)	29	29.69	不明	522	24×21	27	29.44	暗褐色土
475	19×18	26	28.58	黒色土	523	36×34	27	29.41	暗褐色土
476	25×23	22	29.61	黒色土	524	35×(33)	91	28.27	暗褐色砂

表34 弥生土器・土師器・須恵器観察表(1)

掲載番号	図	層位・地区	器種	法量 (cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
1	11	第2調査地④層	須恵器 杯蓋	-	-	1.7	ナデ	上部：ケズリ 下部：ナデ	外：暗青灰色 内：青灰色	
2	11	第2調査地 暗渠内	須恵器 杯身	12.0	-	3.0	ナデ	ナデ	青灰色	
3	11	第2調査地④層	須恵器 壺頸部	-	-	4.7	ナデ	ナデ	外：青灰色 内：灰色	
4	11	第2調査地④層	須恵器 蓋	-	28.0	3.6	ナデ(→一部ハケ状調整)	口縁：ナデ 体部：カキメ	外：青灰色～灰白色 内：青灰色	
5	11	第2調査地④層	須恵器 高杯	-	14.2	20.7	ナデ	杯部：ナデ、回転ヘ ラケズリ→ナデ 脚部：カキメ	灰色	外面脚基部から杯部 に一部自然釉
6	11	第2調査地④層上面	土師器 甕	20.0	-	5.3	ナデ	ナデ	浅黄橙色	口縁下部にスス付着
7	11	第2調査地④層	土師器 甕	22.7	-	4.9	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	浅黄橙色	
8	11	第2調査地④層上面	土師器 甕	21.4	-	5.0	口縁～頸部：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	にぶい黄橙色	
9	11	第2調査地④層	土師器 甕	18.8	-	6.6	口縁～頸部：ナデ 体部：ケズリ	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	浅黄橙色	
10	11	第2調査地④層	土師器 甕	18.6	-	4.9	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	にぶい黄橙色	
11	11	第2調査地④層	土師器 甕	13.2	-	3.7	ナデ	ナデ、受け口状口縁 突出部の上に沈線	にぶい黄橙色～灰色	
12	11	第2調査地④層	土師器 甕	15.4	-	7.5	口縁：ハケ→ナデ 肩部：ケズリ→ナデ 肩部以下：ケズリ	口縁～肩部：ナデ 肩部以下：ハケ	浅黄橙色	
13	11	第2調査地④層	土師器 甕	17.6	-	5.4	口縁：(ヨコハケ→) ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	にぶい橙色	
14	11	第2調査地④層	土師器 甕	16.0	-	5.2	口縁：(ハケ→)ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	浅黄橙色	
15	11	第2調査地④層上	土師器 甕	13.6	-	4.7	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	外：にぶい黄橙色 内：浅黄橙色	
16	11	第2調査地④層	土師器 甕	12.8	-	5.3	口縁：ハケ→端部ナ デ 体部：ケズリ	タテハケ→口縁端部 ナデ	浅黄橙～黒～橙色	
17	11	第2調査地④層上面	土師器 甕	16.0	-	3.8	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	浅黄橙色	
18	11	第2調査地④層	土師器 甕	14.0	-	2.4	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	にぶい橙色	外面スス付着
19	11	第2調査地④層上面	土師器 高杯	22.4	-	7.6	ヨコハケ→ナデ	ナデ	にぶい黄橙色～橙色	
20	11	第2調査地④層	土師器 高杯	19.2	-	5.0	ナデ(ヨコ方向中心) →一部ミガキ	ナデ(ヨコ方向中心) →一部ミガキ	にぶい黄橙色～にぶ い黄褐色	
21	11	第2調査地	土師器 低脚杯	-	5.9	4.5	ナデ	ナデ	橙色	
22	11	第2調査地④層	土師器 低脚杯	-	6.9	1.6	端部：ナデ 筒部：ケズリ	ナデ	にぶい橙色	
23	11	第2調査地④層	土師器 杯身	13.8	-	3.8	ナデ	ハケ	浅黄橙色	風化著しい
24	11	第2調査地④層	土師器 杯身	13.1	-	2.5	ナデ	ナデ	橙色	
80	26	E区 P16	土師器 皿	8.8	6.8	1.2	ナデ(逆「の」の字)	ナデ 底部：糸切り痕	外：橙～浅黄橙色 内：橙～明赤褐色	風化著しい
81	26	E区 P16	土師器 杯	-	7.0	1.9	ナデ	ナデ	にぶい橙～褐灰色	
82	27	E区 P17	土師器 皿	7.8	6.2	1.4	ナデ(逆「の」の字)	ナデ 底部：回転糸切り	にぶい黄橙色	
83	27	E区 P18	土師器 皿	8.0	6.1	1.3	ナデ(逆「の」の字)	ナデ 底部：回転糸切り	浅黄橙色	
84	27	E区 P19	土師器 皿	8.2	6.5	1.5	ナデ	ナデ 底部：回転糸切り	にぶい褐色	
85	28	E区 P20	土師器 皿	8.6	6.1	1.4	ナデ	ナデ 底部：回転糸切り	外：灰白色～褐灰色 内：にぶい黄橙～褐 灰色	
86	28	E区 P21	土師器 皿	7.7	6.6	1.9	ナデ(逆「の」の字)	ナデ 底部：回転糸切り	橙～にぶい黄橙色	
87	28	E区 P22	土師器 皿	8.8	6.0	1.8	ナデ	底部：回転糸切り 体部：ナデ	橙色	
88	31	A区 竪穴住居1	土師器 甕	12.7	-	8.5	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	
89	31	A区 竪穴住居1	土師器 甕	15.3	-	8.3	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	黒褐色	
90	31	A区 竪穴住居1	土師器 甕	12.7	-	20.7	口縁：ハケ 体部：ケズリ	口縁：ハケ→ナデ 体部：ハケ	外：にぶい黄橙色 内：にぶい褐色	
91	31	A区 竪穴住居1床直	土師器 甕	12.6	-	16.1	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	にぶい赤褐色	

表35 弥生土器・土師器・須恵器観察表(2)

掲載 番号	図	層位・地区	器種	法量 (cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
92	31	A区 竪穴住居1	土師器 甕	16.6	-	21.7	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	にぶい褐色	外面炭化物付着
93	31	A区 竪穴住居1	土師器 高杯	22.1	-	11.0	ハケ→ミガキ	ハケ 口縁端：ナデ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	
94	31	A区 竪穴住居1	土師器 高杯	-	10.2	6.0	ナデ	筒部：ミガキ 脚部：ナデ	にぶい橙色	
95	33	A区 土坑4	土師器 甕	14.5	-	4.2	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	にぶい黄褐色	
96	33	A区 土坑4	土師器 甕	15.4	-	4.0	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	にぶい黄褐色	
97	33	A区 土坑4	土師器 甕	13.7	-	3.0	ナデ	ナデ	外：橙色 内：にぶい橙色	
98	33	A区 土坑4	土師器 甕	14.6	-	5.0	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	橙色	外面炭化物付着
99	33	A区 土坑4	土師器 甕	28.9	-	17.1	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	外：明赤褐～にぶい 橙色 内：橙色	外面スス付着
100	33	A区 土坑4	土師器 甕	16.4	-	18.7	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	
101	33	A区 土坑4	土師器 高杯	10.9	-	4.1	ナデ	ナデ	赤色	内外面赤彩
102	33	A区 土坑4	土師器 高杯	17.7	-	4.1	ナデ	ナデ	外：にぶい黄褐色 内：灰褐色	
103	33	A区 土坑4	土師器 高杯	15.8	10.3	13.4	杯部：ナデ 脚部：ケズリ、ハケ	ハケ 口縁端、脚端：ナデ	にぶい黄褐色	
104	33	A区 土坑4	土師器 高杯	16.4	-	10.9	杯部：ハケ→ミガキ 脚部：ナデ、ケズリ	ハケ→ミガキ	橙色	
105	33	A区 土坑4	土師器 高杯	-	10.1	6.0	筒部：ケズリ 脚端：ナデ	筒部：ミガキ 脚端：ナデ	にぶい橙色	
106	33	A区 土坑4	土師器 甕	16.9	-	10.1	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ→ナデ	にぶい黄褐色	
107	36	E区 竪穴住居2	須恵器 杯蓋	13.7	-	4.0	ナデ	回転ヘラケズリ ナデ	外：灰黄色 内：浅黄色	口縁部一部打ち欠き か
108	36	E区 竪穴住居2	須恵器 杯蓋	14.0	-	2.4	ナデ	ナデ	灰色	
109	36	E区 竪穴住居2	須恵器 杯蓋	11.4	-	2.5	ナデ	ナデ	灰色	
110	36	E区 竪穴住居2	須恵器 杯蓋	13.6	-	3.7	ナデ	ナデ	灰色	
111	36	E区 竪穴 住居2P8	須恵器 杯蓋	-	-	1.3	ナデ	回転ヘラケズリ ナデ	灰色	
112	36	E区 竪穴住居2	須恵器 杯身	10.1	-	3.4	ナデ	回転ヘラケズリ ナデ	灰色	彩色記号あり
113	36	E区 竪穴住居2	須恵器 甕	13.6	-	3.8	ナデ	ナデ	灰白色	
114	36	E区 竪穴住居2	土師器 器台	11.8	-	4.3	ナデ	受部：ナデ 脚部：ケズリ→ナデ	にぶい黄褐色	
115	36	E区 竪穴住居2	土師器 高杯	16.6	-	4.3	ナデ/ミガキ	ケズリ→ナデ/ハケ	黄褐色	
116	36	E区 竪穴住居2	土師器 碗	-	15.5	5.0	ナデ	底部：手持ちケズリ →ナデ	にぶい黄褐色	
117	36	E区 竪穴住居2	土師器 甕把手	-	-	-	ケズリ	把手部：ナデ 体部：ハケ→ナデ	にぶい黄褐色	最大厚3.4cm
118	36	E区 竪穴住居2	土師器 甕	14.8	-	6.8	口縁：ハケ→ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ→ナデ	にぶい黄褐色	
119	36	E区 竪穴住居2	土師器 甕	17.2	-	7.0	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	にぶい黄褐色	外面スス付着
120	36	E区 竪穴住居2	土師器 甕	20.0	-	8.2	口縁：ハケ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	にぶい黄褐色	
121	36	E区 竪穴住居2	土師器 甕	21.6	-	10.5	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	にぶい黄褐色	
122	36	E区 竪穴住居2	土師器 甕	21.8	-	26.9	口縁：ハケ→ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ→ナデ	外：浅黄褐色～明黄 褐色 内：にぶい黄褐色	
123	38	E区 竪穴住居3	須恵器 杯蓋	-	-	2.7	ナデ	天井部：外周ヘラケ ズリ1周、中央は不 整方向ナデ 他：ナ デ、肩部に沈線	青灰色	彩色記号あり
124	38	E区 竪穴住居3	須恵器 杯蓋	-	-	2.1	ナデ→天井部不整方 向ナデ	天井部：回転ヘラケ ズリ2周→ナデ 天 井中央ヘラ切り→ナ デ 体部：ナデ	外：青灰色 内：青灰色～灰褐色	
125	38	E区 竪穴住居3 上層	須恵器 杯蓋	-	-	1.9	ナデ→天井部不整方 向ナデ	天井部：回転ヘラケ ズリ4周、中央部へ ラ切り 他：ナデ 肩付近：浅い沈線	淡い青灰色	

表36 弥生土器・土師器・須恵器観察表(3)

掲載 番号	図	層位・地区	器種	法量 (cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
126	38	E区 竪穴住居3 上層	須恵器 杯蓋	13.0	-	4.5	ナデ 口縁部に浅い沈線	天井中央：ナデ、周 辺回転ヘラケズリ 他：ナデ 肩に沈線 1条	灰黄色	
127	38	E区 竪穴住居3	須恵器 杯身	10.4	-	3.2	ナデ	ナデ	青灰色	
128	38	E区 竪穴住居3 上層	須恵器 杯身	12.6	-	2.9	ナデ	ナデ	外：青灰色 内：にぶい黄橙	
129	38	E区 竪穴住居3	須恵器 高杯	-	10.5	1.9	ナデ	ナデ	青灰色	
130	38	E区 竪穴住居3	須恵器 高杯	-	9.8	3.9	ナデ	ナデ	青灰色	
131	38	E区 竪穴住居3 上層	須恵器 直口長頸壺 か瓶類	8.0	-	5.05	ナデ	ナデ	外：灰～一部青黒色 内：青灰色	
132	38	E区 竪穴住居3	須恵器 壺	15.1	-	7.4	口縁：ナデ 体部：同心円当て具痕	口縁：ナデ 肩部：カキメ	青灰色	
133	38	E区 竪穴 住居3 下層	須恵器 高杯	28.8	-	4.9	ナデ	カキメ	青灰色	
134	38	E区 竪穴 住居3 上層	土師器 壺	8.5	-	3.6	口縁：ナデ→一部ミ ガキ 体部：ケズリ	ナデ→一部ミガキ	外：にぶい橙～橙色 内：にぶい橙色	赤彩
135	38	E区 竪穴 住居3 上層	土師器 甕	15.8	-	3.5	口縁：ハケ→ナデ 体部：ケズリ	ナデ	橙色	
136	38	E区 竪穴 住居3 上層	土師器 甕	20.3	-	7.4	口縁～頸部：ナデ 体部：ケズリ→ナデ	口縁：ナデ 体部：(ハケ→)ナデ	外：にぶい橙色 内：橙色	
137	38	E区 竪穴 住居3 上層	土師器 甕	16.8	-	4.6	口縁：ハケ→ナデ 体部：ケズリ→ナデ	口縁：(ハケ→)ナデ 体部：ハケ→ナデ	にぶい黄橙色	
138	38	E区 竪穴 住居3 上層	土師器 甕	27.3	-	5.9	口縁：ハケ→ナデ 体部：ケズリ→ナデ	口縁：ナデ 体部：ハケ→ナデ	にぶい黄橙色	
139	38	E区 竪穴 住居3 上層	土師器 甕	22.5	-	5.0	口縁：丁寧なナデ 体部：ケズリ→ナデ	口縁：丁寧なナデ 体部：ハケ	にぶい黄橙色	
140	38	E区 竪穴 住居3 上層	土師器 甕	18.6	-	10.4	口縁：ハケ→ナデ 体部：ケズリ→ナデ	口縁：ナデ 体部：ハケ→一部ナデ	にぶい黄橙色	
141	38	E区 竪穴住居3 上層	土師器 甕	30.6	-	-	口縁：ハケ(→ナデ) 体部：ケズリ(→ナ デ)	口縁：(ハケ→)ナデ 体部：ハケ(→ナデ)	外：にぶい黄橙色 内：黄橙色	
142	38	E区 竪穴住居3 上層	土師器 長胴甕	26.4	-	8.3	口縁：ハケ→ナデ 体部：(ケズリ→)ナ デ	ハケ→ナデ	外：にぶい橙～灰黄 色 内：浅黄橙色	
143	38	E区 竪穴 住居3 上層	土師器 埴(まり)	17.0	-	8.4	丁寧なナデ	口縁付近：ナデ 体部ハケ→ナデ	にぶい橙色	
144	39	E区 竪穴住居3 下層 P1上	須恵器 杯蓋	10.6	-	2.5	ナデ	天井部：回転ヘラケ ズリ 他：ナデ 肩部：2条の沈線	青灰色	彩色記号あり
145	39	E区 竪穴 住居3 下層	須恵器 杯蓋	12.9	-	2.4	ナデ	ナデ 肩部に2条の沈 線 口縁端にキザミ	外：暗青灰色 内：青灰色	
146	39	E区 竪穴 住居3 下層	須恵器 杯身	12.2	-	3.1	ナデ	ナデ	青灰色	外面に自然釉・融着
147	39	E区 竪穴住居3	須恵器 杯身	12.6	-	3.4	ナデ	ナデ	青灰色	
148	39	E区 竪穴 住居3 下層	須恵器 高杯	-	-	2.15	ナデ 底部：不整方向ナデ	ナデ	外：淡青灰色 内：灰色	
149	39	E区 竪穴 住居3 下層	須恵器 高杯	-	14.8	1.8	ナデ	ナデ	外：オリーブ灰色 内：灰色	
150	39	E区 竪穴 住居3 下層	土師器 甕	17.4	-	6.6	口縁：丁寧なナデ 体部：ケズリ(整)→ ナデ	口縁：丁寧なナデ 体部：ハケ(細)→ナ デ	外：にぶい黄橙色 内：にぶい褐色	
151	39	E区 竪穴 住居3 下層	土師器 甕	17.0	-	3.5	口縁：丁寧なナデ 体部：ケズリ	ナデ	にぶい黄橙色	
152	39	E区 竪穴 住居3 下層	土師器 甕	24.0	-	8.5	口縁：ナデ 体部：ケズリ→ナデ	口縁：ナデ 体部：ハケ→ナデ	にぶい黄橙色	
153	39	E区 竪穴 住居3 下層	土師器 甕	25.5	-	3.6	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	にぶい褐色	
154	39	E区 竪穴 住居3 下層	手捏土器	6.6	-	5.0	ナデ 底部ユビオサエ	(底部ユビオサエ→) 丁寧なナデ	にぶい黄橙色	
155	39	E区 竪穴 住居3 下層	移動式竈	-	-	-	ケズリ	ハケ、ナデ	にぶい橙色	
156	41	E区 竪穴 住居3 床直	須恵器 杯身	11.5	-	4.1	ナデ	ナデ	外：青灰色 内：灰色	彩色記号あり
157	41	E区 竪穴 住居3 床直	須恵器 杯身	10.2	-	2.5	ナデ	ナデ	青灰色	
158	41	E区 竪穴住居3 床直	須恵器 杯身	13.9	-	4.2	ナデ→底部不整方向 ナデ	底部：ヘラオコシ→不 整方向ナデ 他：ナデ	青灰色	

表37 弥生土器・土師器・須恵器観察表(4)

掲載 番号	図	層位・地区	器種	法量 (cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
159	41	E区 堅穴住居3 床直	須恵器 杯蓋	14.9	-	4.4	回転ヘラケズリ→ナ デ	ナデ	青灰色	つまみ部分剥離、161 とセットか?
160	41	E区 堅穴住居3 床直	須恵器 杯蓋	14.8	-	5.3	ナデ→天井部不整方 向ナデ	天井部: 回転ヘラケ ズリ→ナデ 肩部~ 口縁: ナデ 肩に浅 い沈線と、刺突文	外: 灰~暗灰色 内: 灰色	
161	41	E区 堅穴住居3 床直	須恵器 有蓋高杯	13.1	-	11.8	杯部: ナデ 脚筒部: ナデ(シボリ 目有)	杯部: ナデ 回転ヘラケズリ→ナ デ 脚筒部: ナデ	外: 青灰色~暗青灰 色 内: 青灰色	脚部折り取り→脚部 打ち欠き
162	41	E区 堅穴 住居3 床直	須恵器 短頸壺	-	-	7.3	ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ	外: 灰~青灰色 内: 青灰色	
163	41	E区 堅穴 住居3 床直	土師器 甕	15.2	-	5.2	口縁: 丁寧なナデ 体部: ケズリ→ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙色	
164	41	E区 堅穴 住居3 床直	土師器 甕	17.3	-	4.8	口縁: ナデ? 体部: ケズリ	ナデ	外: にぶい黄橙色 内: 浅黄橙色	風化著しい
165	41	E区 堅穴住居3 床直	土師器 甕	19.4	-	6.1	口縁: ナデ 体部: ケズリ→一部 ナデ	口縁: 丁寧なナデ 体部: (ハケ?)→丁 寧なナデ	にぶい橙色	
166	41	E区 堅穴住居3 床直	土師器 甕	18.9	-	8.9	口縁: ナデ 体部: ケズリ(→ナ デ)	口縁: (ハケ→)ナデ 体部: ハケ→ナデ	外: にぶい橙~橙色 内: にぶい黄橙色	
167	41	E区 堅穴 住居3 床直	土師器 甕	28.0	-	23.5	口縁: ハケ→ナデ 体部: ケズリ→ナデ	口縁: ナデ 体部: ハケ(→ナデ)	外: 黒褐色 内: にぶい黄橙	外面スス附着
168	41	E区 堅穴 住居3 床直	土師器 甕 甑把手				ナデ	ナデ	浅黄橙色	
169	43	C区 堅穴 1	土師器 手捏土器 壺	2.7	-	4.2	ナデ、ユビオサエ	ナデ、ユビオサエ	にぶい黄橙色	ミニチュア土器
170	43	C区 堅穴 1	土師器 手捏土器 甕	5.9	-	5.9	口縁: ナデ 体部: ケズリ	ナデ、ユビオサエ	にぶい黄橙色	ミニチュア土器
171	43	C区 堅穴 1	土師器 手捏土器 甕	5.6	-	7.1	口縁: ナデ 体部: ケズリ	ナデ、ユビオサエ	にぶい黄橙色	ミニチュア土器
172	43	C区 堅穴 1	土師器 甕	14.6	-	9.0	口縁: ナデ、端部下 に浅い沈線 体部: ケズリ→頸付近ナデ	口縁: ナデ 体部: ハケ	外: にぶい黄褐色 内: にぶい黄色	
173	43	C区 堅穴 1	土師器 甕	13.4	-	16.5	口縁: ナデ 体部: ケズリ	口縁: ナデ 体部: ハケ	外: にぶい黄褐色 内: 橙色	
174	43	C区 堅穴 1	土師器 甕	14.0	-	20.9	口縁: ナデ 体部: ケズリ	口縁: ナデ 体部: ハケ	外: 明黄褐色~にぶ い黄褐色 内: 明黄褐色	
175	43	C区 堅穴 1	土師器 甕	13.8	-	10.8	口縁: ナデ 体部: ケズリ→頸部 付近ナデ	口縁: ナデ 体部: ハケ	橙~黒色	外面スス附着
176	43	C区 堅穴 1	土師器 甕	12.4	-	21.1	口縁~頸部: ナデ 体部: ケズリ	口縁: ヨコナデ 体部: ハケ→ナデ	外: にぶい黄褐色 内: 暗灰黄~黒褐色	外面スス附着
177	46	E区 堅穴 2	須恵器 杯蓋	12.6	-	3.4	ナデ 肩部に2条の沈線	ナデ 口縁端部: 沈 線→ナデ	灰色	
178	46	E区 堅穴 2	須恵器 杯身	10.2	-	3.4	底部: 不整方向ナデ 他: ナデ	底部: 回転ヘラケズ リ3~4周 中央: ヘラオコシ後ナデ 他: ナデ	灰色	
179	46	E区 堅穴 2	須恵器 杯身	14.0	-	2.8	底部: 不整方向ナデ 他: ナデ	上半: ナデ 下半: (底部手持ケズ リ→)不整方向ナデ	灰色	
180	46	E区 堅穴 2P1	須恵器 高杯杯部	10.5	-	4.5	ナデ	ナデ	外: 青灰色 内: 暗青灰色	
181	46	E区 堅穴 2	須恵器 高杯脚部	-	12.2	7.2	ナデ 筒部シボリ目有	ナデ 筒部に数条の沈線	灰橙色	
182	46	E区 堅穴 2P1	土師器 甕	10.0	-	5.0	口縁: 丁寧なナデ 体部: ケズリ→ナデ	丁寧なナデ	黄褐色	
183	46	E区 堅穴 2	土師器 甕	20.0	-	10.2	口縁: ハケ→ナデ 体部: ケズリ→ナデ	口縁: 丁寧なナデ 体部: ハケ(→ナデ)	明橙色	
184	46	E区 堅穴 2	土師器 甕	18.2	-	18.5	口縁: (ハケ→)ナデ 体部: ケズリ→ナデ	口縁~頸部: ナデ、浅 いヘラ沈線 体部: ハケ→ナデ	外: 橙色 内: 灰~橙色(黒斑あ り)	
185	46	E区 堅穴 2	土師器 甕	19.0	-	15.3	ヨコハケ→ナデ	口縁~頸部: ナデ胴 部: ハケ、肩部ナデ	外: 赤褐色 内: 灰~赤褐色	
186	46	E区 堅穴 2 床直	土師器 底部	-	-	14.5	ケズリ→ナデ	底部: ナデ 体部: 不整方向ハケ →粗雑なナデ	外: 灰橙褐色 内: にぶい橙色	外面スス附着
187	46	E区 堅穴 2	土師器 甕	-	10.0	13.1	ケズリ→丁寧なナデ	タテハケ(→ナデ) 底部に2方向の円孔	赤褐色	底部楕円形 外面スス附着

表38 弥生土器・土師器・須恵器観察表(5)

掲載 番号	図	層位・地区	器種	法量(cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
188	46	E区 竪穴2	移動式竈	33.5		36.0	(下→上への)ケズリ	ケズリ→ハケ	橙色～灰色	
189	49	E区 掘立 柱建物1P10	土師器 短頸壺か	-	-	5.3	ナデ	ナデ	外：灰褐色 内：にぶい橙色	
190	49	E区 掘立 柱建物1P8	土師器 長頸壺か	-	-	4.6	ナデ	ナデ 破片最上部にキザミ	外：褐灰色 内：にぶい橙色	
191	49	E区 掘立 柱建物1P16	須恵器 蓋	9.4	-	1.7	ナデ	ナデ	灰色	掘り方出土
192	49	E区 掘立 柱建物1P9	須恵器 高杯脚部	-	-	1.8	ナデ	ナデ	灰色	
193	49	E区 掘立 柱建物1P18	土師器 壺底部か	-	-	4.0	ナデ、ハケ調整	ヘラケズリ	灰色	
194	49	E区 掘立 柱建物1P2	土師器 甕	20.0	-	4.7	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	外：褐灰色 内：にぶい黄褐色	掘り方出土
195	49	E区 掘立 柱建物1P3	土師器 甕	-	-	4.0	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ	にぶい黄褐色	
196	49	E区 掘立 柱建物1P3	土師器 甕	-	-	6.1	口縁：ナデか 体部：ケズリ	風化のため不明	にぶい黄褐色	掘り方出土
197	51	E区 掘立 柱建物3P2	須恵器 杯蓋	-	13.7	2.5	ナデ	口縁～肩部：ナデ 肩～天井部：ケズリ →ナデ	外：灰～灰オリーブ 色 内：灰色	
198	51	E区 掘立 柱建物3P3	須恵器 杯身	12.4	-	3.6	ナデ 底部不整方向ナデ	口縁～体部：ナデ 底部：ケズリ2周・中 央ヘラ切り→回転・不 整方向ナデ	灰色	
199	51	E区 掘立 柱建物3P8	土師器 甕	18.0	-	2.8	口縁：ヨコハケ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 頸部： タテハケ→ナデ	にぶい黄褐色	
200	52	E区 掘立 柱建物4P8	須恵器 高杯脚部	-	10.8	1.0	ナデ	ナデ	褐灰色	
201	52	E区 掘立 柱建物4P13	土師器 甕	16.0	-	3.6	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	
202	53	A区 土坑5	土師器 高杯	16.0		4.1	ナデ	ナデ	外：にぶい黄褐色 内：橙色	
203	53	A区 土坑5	土師器 甕	15.0		5.8	口縁：ハケ→ナデ 体部：ケズリ→ナデ	口縁端部：ナデ 口縁～体部：ハケ→ ナデ	にぶい黄褐色	
204	53	A区 土坑5	土師器 甕	12.8		7.6	口縁：ナデ 体部：ケズリ→ナデ	ナデ、	橙色	ヘラ記号か
205	53	A区 土坑5	土師器 甕	15.7		10.2	口縁：ナデ 体部：ケズリ→ナデ	ナデ	にぶい橙色	外面炭化物付着
206	53	A区 土坑5	土師器 甕	17.2		19.6	口縁：ナデ 体部：ケズリ→ナデ	口縁：ナデ 体部：ハケ	橙色	外面スス付着
207	53	A区 土坑5	土師器 甕	18.2		6.7	口縁：ナデ 体部：ケズリ→ナデ	ナデ	橙色	
208	53	A区 土坑5	土師器 甕	18.8		4.9	口縁：ナデ 体部：ケズリ→ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	外面スス付着
209	53	A区 土坑5	土師器 甕	18.8		17.2	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	外：にぶい黄橙～橙 色 内：橙～にぶい 橙～黒色	
210	54	B区 土坑6	須恵器 杯蓋	15.8	-	4.8	ナデ	天井部：ヘラ切り後 ナデ、回転ヘラケズ リ3周 他：ナデ、口 縁端部に浅いキザミ	外：淡青灰～青灰色 内：青灰色	天井部にヘラ記号
211	54	B区 土坑6	須恵器 杯身	13.6	-	4.6	ナデ→底部不整方向 ナデ	底部：ヘラ切り 周 囲：回転ヘラケズリ3 周 他：ナデ	淡青灰色	
212	55	E区 土坑7	須恵器 杯蓋	13.6	-	3.7	天井部：不整方向ナ デ 体部：ナデ	天井部：回転ヘラケ ズリ1周→ナデ 天井 中央：一部ハケ→ナ デ 体部：ナデ	灰色	
213	55	E区 土坑7	須恵器 小型壺	3.2	-	5.7	ナデ	ナデ→不整方向ナデ	外：褐灰色 内：灰白色	
214	55	E区 土坑7	土師器 甕	16.4	-	6.4	体部ケズリ	不明	外：橙 内：にぶい黄褐色	風化著しい
215	55	E区 土坑7	土師器 甕	17.4		6.5	口縁：ナデ 体部：ケズリ→ナデ	口縁：ナデ 体部：ハケ→ナデ	外：浅黄褐色～浅橙 色 内：浅黄褐色	
216	55	E区 土坑7	土師器 甕	26.8	-	10.8	口縁：ハケ→ナデ 体部：ケズリ→ナデ	口縁：ナデ 体部：ハケ→ナデ	にぶい黄褐色	
217	55	E区 土坑7	土師器 高杯脚部	-	9.6	3.8	ナデ→一部ミガキ	ミガキ(→ナデ)	赤色	内外面赤彩
218	56	E区 土坑8	須恵器 甕か	16.6	-	2.4	丁寧なナデ	丁寧なナデ	黄灰色	
219	56	E区 土坑9	須恵器 高杯脚部	-	16.6	4.4	ナデ	ナデ	褐灰色	

表39 弥生土器・土師器・須恵器観察表(6)

掲載番号	図	層位・地区	器種	法量(cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
220	61	E区 溝1 上層	弥生土器 鉢	27.2	-	8.0	口縁端部：ナデ 口縁：タテハケ 体部：ミガキ	口縁：ナデ 体部：ミガキ	外：にぶい橙～橙～ 褐灰～黒色 内：黒色	内面黒色
221	61	E区 溝1 上層	弥生土器 壺	11.2	-	3.5	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色	内外面赤彩
222	61	E区 溝1 上層	弥生土器 甗	17.0	-	4.8	口縁～頸部：ナデ 体部：ケズリ	口縁：3条の平行沈 線 頸部：ナデ	にぶい黄橙色	
223	61	E区 溝1 上層	弥生土器 壺	11.9	-	3.2	口縁：ナデ 頸部：ケズリ→ナデ	口縁：3条の凹線 頸部：ハケ→ナデ	外：にぶい褐～にぶ い黄橙色 内：にぶい黄橙色	内外面赤彩
224	61	E区 溝1 上層	弥生土器 甗	-	-	3.8	ナデ	7条の平行沈線	にぶい黄橙～灰黄褐 色	
225	61	E区 溝1 上層	土師器 甗	16.9	-	6.2	口縁～頸部屈曲部： ナデ 体部：ケズリ	ナデ 頸部：波状文	浅黄橙～橙色	
226	61	E区 溝1 上層	弥生土器 高杯脚部	-	-	5.1	ケズリ	ミガキ	にぶい黄橙～褐灰色	内外面赤彩
227	61	E区 溝1 上層	土師器 甗	14.7	-	5.1	口縁：ヨコハケ→ナ デ 体部：ケズリ	ナデ	外：にぶい橙～にぶ い褐色 内：にぶい 黄橙～にぶい褐色	
228	61	D区 溝1 上層	土師器 小型丸底壺	7.9	-	7.3	口縁：ナデ 体部：ケズリ→ナデ	口縁：ナデ 肩～胴 部：ハケ(→ナデ) 底部：ナデ	にぶい黄橙色	
229	61	D区 溝1 上層	土師器 壺	9.2	-	4.5	ナデ	口縁：ナデ 体部：ハケ	にぶい黄橙～灰黄褐 色	
230	61	E区 溝1 上層	土師器 高杯	15.8	-	4.7	ハケ→ナデ→ミガキ	ハケ→ナデ	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙～に ぶい橙～褐灰色	
231	62	E区 溝1 下層	弥生土器 壺	15.4	-	22.7	口縁：ミガキ 体部：ハケ	口縁：ナデ 体部上 半：ミガキ→沈線で 区画し縦横の羽状文 体部下半：ミガキ	外：にぶい黄橙～明 赤褐～褐～黒褐色 内：にぶい黄橙～灰 褐～黒褐色	
232	61	E区 溝1 下層	弥生土器 甗	-	-	4.4	ナデ	口縁：キザミ 頸部：指頭圧痕貼付 突帯、ナデ	外：浅黄～灰黄色 内：浅黄～灰黄～明 褐色	
233	61	B区 溝1 下層	弥生土器 甗	18.4	-	3.7	ナデ	口縁：2条の凹線 頸部：ハケ	外：にぶい橙色 内：浅黄褐色	
234	61	B区 溝1 下層	弥生土器 甗	14.1	-	2.3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	
235	61	B区 溝1 下層	弥生土器 甗	10.6	-	4.5	ナデ	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ	浅黄褐色	
236	61	B区 溝1 下層	弥生土器 高杯	19.0	-	3.1	ナデ	口縁上面：1条の凹 線 体部：ナデ	浅黄褐色	内外面赤彩
237	63	D区 溝1 ⑥-1層	弥生土器 甗	17.7	-	3.7	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：5条の平行沈 線 頸部：ナデ	外：橙～褐灰色 内：橙色	
238	63	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甗	18.0	-	2.9	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：5条の平行沈 線 頸部：ナデ	外：橙色 内：明黄褐色	
239	63	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甗	15.5	-	4.0	口縁～頸部上半：ナ デ 頸部下：ケズリ	口縁：2条の凹線 頸部：ナデ	にぶい黄橙～褐灰色	
240	63	E区 溝1 ⑩層	弥生土器 甗	17.1	-	3.6	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：2条の凹線 頸部上半：ナデ 頸部下：ハケ	にぶい黄橙～灰黄色	
241	63	B区 溝1 下層	弥生土器 甗	14.9	-	4.8	口縁：ナデ 頸部：板ナデ 体部：ケズリ	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ 体部：ハケ	にぶい橙色	
242	63	C区 溝1 下層	弥生土器 甗	20.6	-	5.4	口縁：ナデ 頸部屈曲部：ハケ 体部：ケズリ	口縁：6条の平行沈線 →ナデ 頸部～体部：ナデ	にぶい黄褐色	
243	63	B区 溝1 ⑥-3層	弥生土器 甗	18.8	-	4.6	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：4条の凹線 頸部：ケズリ→ナデ	外：橙色 内：明赤褐色	
244	63	B区 溝1 下層	弥生土器 甗	21.2	-	4.7	口縁：ナデ 頸部屈 曲部：ケズリ→ナデ 頸部下：ケズリ	口縁：5条の平行沈 線 頸部：ハケ	にぶい黄褐色	
245	63	B区 溝1 下層	甗	16.8	-	3.3	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ	にぶい黄褐色	
246	63	E区 溝1 ⑥-3層	弥生土器 甗	20.6	-	3.5	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：7条の平行沈 線→ナデ 頸部：ナデ	外：橙～灰褐色 内：橙色	
247	63	B区 溝1 下層	弥生土器 甗	11.9	-	2.9	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	ナデ	にぶい黄褐色	炭化物付着
248	63	B区 溝1 下層	弥生土器 甗	21.0	-	4.7	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：4条の凹線 頸部：ナデ	にぶい黄褐色	
249	63	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甗	22.0	-	4.8	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：4条の平行沈 線 頸部：ナデ	外：にぶい黄褐色 内：同上色～橙色	
250	63	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甗	11.0	-	4.4	口縁：ナデ 頸部から体部：ケズ リ→ナデ	口縁：2条の凹線 頸部：ナデ 肩部： ハケ原体での刺突文	にぶい黄褐色	

表40 弥生土器・土師器・須恵器観察表(7)

掲載 番号	図	層位・地区	器種	法量(cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
251	63	B区 溝1 ⑩層	弥生土器 甕	24.0	-	2.6	ナデ	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ	にぶい黄橙色	
252	63	B区 溝1 下層	弥生土器 甕	18.6	-	4.0	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：凹線3条 頸：ナデ 肩：ハケ	外：にぶい黄橙色 内：橙色	
253	63	E区 溝1 ⑥-1層	弥生土器 甕	15.5	-	3.1	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：4条の平行沈 線 頸部：ナデ	にぶい黄橙～にぶい 赤褐色	
254	63	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	20.6	-	5.8	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：5条の凹線 頸部：ナデ	外：褐灰～にぶい黄 橙色 内：橙色	
255	63	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	17.4	-	4.7	口縁：ナデ 頸部：ケズリ→ナデ	口縁：3条の平行沈 線 頸部：ナデ	外：褐灰～にぶい黄 橙色 内：にぶい黄橙色	
256	63	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	17.6	-	2.8	口縁：ナデ 頸部：ケズリ→ナデ	口縁：8条の平行沈 線 頸部以下：ナデ	外：浅黄橙色 内：褐灰色	
257	63	E区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	21.4	-	6.2	口縁：ナデ 頸部以下：ケズリ	口縁：8条の平行沈 線 頸部以下：ナデ	にぶい黄橙色	
258	63	B区 溝1 下層	弥生土器 甕	21.9	-	7.8	口縁：ナデ 頸部以下：ケズリ	口縁：5条の凹線 頸部：ナデ 体部：ハケ	外：明黄褐色 内：にぶい黄橙色	
259	63	E区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	11.6	-	2.4	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：4条の平行沈 線 頸部：ナデ	にぶい黄橙色	内外面赤彩 頸部に穿孔有
260	63	B区 溝1 ⑩層	弥生土器 壺	17.2	-	3.8	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：4条の凹線 頸部：ハケ	橙色	
261	63	E区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	17.8	-	3.3	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：5条の平行沈 線 頸部：ナデ	にぶい黄橙色	
262	63	C区 溝1 下層	弥生土器 甕	-	-	4.3	口縁：ナデ 頸部屈 曲部：(ハケ)ナデ 体部：ケズリ	口縁：5条の平行沈 線 →ナデ 頸部：ナデ	にぶい橙～褐色	
263	63	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	21.6	-	3.1	ナデ	口縁：6条の平行沈 線	外：黄灰色 内：暗灰黄色	外面赤彩
264	63	B区 溝1 下層	弥生土器 甕	26.0	-	4.8	口縁：ナデ 頸部：ケズリ	口縁：7条の平行沈 線 頸部：ナデ	にぶい黄橙色	内外面赤彩
265	63	B区 溝1 下層	弥生土器 甕	27.9	-	4.9	口縁：ミガキ 頸部：ケズリ	口縁：7条の平行沈 線 頸部：ミガキ	にぶい黄橙色	内外面赤彩
266	64	E区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	12.5	-	5.9	口縁～頸部：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 頸～体 部：ハケ→ナデ	外：灰白～浅黄橙～ 黒色 内：にぶい黄橙色	
267	64	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	18.6	-	6.8	ナデ	口縁：7条の平行沈 線 頸部上半：ナデ 頸部下半：ハケ	橙色	
268	64	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	18.0	-	4.1	ナデ	口縁：5条の平行沈 線 頸部：ナデ	橙色	
269	64	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	29.1	-	13.0	口縁：ナデ 体部：ケズリ→板ナ デ	口縁：平行沈線 頸 部以下：(ハケ)→ ナデ 肩：刺突文	外：浅黄橙色 内：にぶい橙色	
270	64	B区 溝1 下層	弥生土器 壺	25.6	-	5.1	口縁：ナデ 頸部：ケズリ→ナデ	口縁：7条の平行沈 線 頸部：ナデ	浅黄橙色	
271	64	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 無頸壺	11.6	-	4.5	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ、穿孔 肩部：貝殻腹縁での 刺突文	外：明赤褐色 内：にぶい橙色	外面赤彩
272	64	B区 溝1 下層	弥生土器 高杯脚筒部	-	-	7.7	しぼり、ケズリ	ナデ	にぶい黄橙色	外面赤彩
273	64	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 脚筒部	-	-	3.2	ケズリ	ミガキ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	
274	64	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 脚部	24.0	-	3.4	ケズリ 端部：ナデ	脚縁帯：6条の平行 沈線	明黄褐色	
275	64	E区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 器台脚部	-	26.0	6.2	ナデ	脚部：ナデ 脚縁帯：5条の平行 沈線	外：灰黄褐色 内：にぶい橙～灰黄 褐色	外面赤彩
276	65	E区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	17.7	-	5.8	口縁～頸部上半：ナ デ 頸部下半：ケズリ	口縁～頸部上半：ナ デ 頸部下半：ハケ	外：浅黄橙～にぶい 黄橙色 内：浅黄橙～橙色	
277	65	B区 溝1 下層	弥生土器 甕	14.1	-	5.7	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁～頸部：ナデ	にぶい黄橙色	
278	65	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	19.1	-	7.1	口縁～頸屈曲部：ナ デ 頸部下：ケズリ	口縁：ナデ 頸部以下：ハケ	にぶい黄橙色	
279	65	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	16.9	-	5.2	口縁～頸屈曲部：ナ デ 頸部下：ケズリ	ナデ	外：灰黄色 内：暗灰黄色	
280	65	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕	19.6	-	4.8	ナデ	ナデ	橙色	
281	65	B区 溝1 下層	弥生土器 甕	17.0	-	5.8	口縁～頸部屈曲部： ナデ 頸部屈曲部以 下：ケズリ	口縁～頸部：ナデ 肩部：波状文	橙色	
282	65	C区 溝1 下層	土師器 壺	18.2	-	5.0	ナデ	口縁：ナデ 頸部：ハケ→ナデ	にぶい黄橙～明黄褐 色	
283	65	C区 溝1 下層	土師器 鉢	14.4	-	4.9	ハケ(目が細い)	底部：ケズリ 他：ハケ(目が細い)	橙～にぶい橙色	

表41 弥生土器・土師器・須恵器観察表(8)

掲載 番号	図	層位・地区	器種	法量(cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
284	65	B区 溝1 下層	土師器 高杯杯部	-	-	5.0	屈曲部：ナデ 杯部：ハケ	ナデ	外：明黄褐色 内：にぶい黄橙色	
285	65	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕か壺底部	12.6	-	2.6	ケズリ→ナデ	立ち上がり部：ミガキ 底部：ミガキ→ ナデ	外：にぶい黄色 内：黒褐～にぶい橙 色	
286	65	B区 溝1 ⑥-2層	弥生土器 甕か壺底部	-	5.4	5.6	ナデ	ナデ	外：にぶい黄橙色 内：浅黄色	
287	66	E区 P. 24	土師器 甕	13.0	-	10.2	口縁：ナデ 頸部：ハケ→ナデ 体部：深いケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	赤褐色	
288	67	E区 P. 29	須恵器 杯蓋	11.0	-	2.3	ナデ	ナデ	灰色	
289	67	E区 P. 26	須恵器 杯蓋	-	13.7	3.2	ナデ、(口縁端に段形 成→ナデ)	ナデ、(肩部付近に段 形成)	灰色	
290	67	E区 P. 31	須恵器 杯蓋	-	-	2.3	ナデ	ナデ	灰色	
291	67	E区 010 P. 33	須恵器 杯蓋	-	-	1.5	ナデ	ナデ	灰色	
292	67	E区 P. 30 1層	須恵器 杯蓋	-	-	1.3	ナデ	天井部：ケズリ(残存 部で3周、丁寧) 体部：ナデ	灰色	
293	67	E区 P. 27	須恵器 杯身	12.2	-	2.3	ナデ	ナデ	灰色	
294	67	E区 P. 32	須恵器 高杯脚部	-	11.4	2.9	ナデ	ナデ	灰色	
295	67	A区 P25	土師器 高杯	12.2	-	3.6	ケズリ、ナデ	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙色	
296	67	E区 P. 34	土師器 甕	-	-	2.5	ハケ	ハケ→ナデ	橙褐色	
297	67	E区 P. 28	土師器 甕	15.4	-	3.1	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	外：にぶい褐～黒褐 色 内：にぶい黄褐 ～褐灰～黒褐色	
298	67	E区 P. 28	土師器 甕	16.4	-	3.7	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	外：橙～灰黄褐色 内：明黄褐色	
299	68	B区 F4	須恵器 杯蓋	7.2	-	4.5	天井部：不定方向ナ デ 口縁：ナデ	天井部：回転ヘラケ ズリ3周口縁：ナデ	灰白色	天井内面にあて具痕
300	68	B区 F4	須恵器 杯身	12.6	-	4.5	底部：不定方向ナデ 口縁：ナデ	口縁～体部上半：ナ デ 底部立ち上が り：回転ヘラケズリ 底部：ヘラ切り後、 不定方向ナデ	灰白色	
301	68	E区 08	須恵器 杯身	12.8	-	3.1	ナデ	ナデ	褐灰色	
302	68	B区	青磁 碗	-	-	-	-	-	施釉部分：暗灰緑色	文様不明
303	68	E区 P10	青磁 碗	16.2	-	3.2	-	-	施釉部分：灰オー ブ 露体部：灰白	文様不明
304	68	E区 P9	青磁 碗	14.4	-	5.4	-	-	灰色	
305	68	E区 東	李朝陶器 皿	9.6	3.8	2.8	ナデ	ナデ 底部：ヘラ切り	内外施釉 灰色	内外底部に砂目あり 雑釉陶器
306	73	E区 竪穴住居4	弥生土器 甕	13.3	-	7.7	ナデ	不明 口縁：2条の凹線	橙色	風化著しい
307	73	E区 竪穴住居4	弥生土器 甕	16.8	-	5.8	頸部以上：ナデ 頸部～肩部：ハケ	口縁：4条の凹線 体部：ハケ	にぶい橙色	
308	73	E区 竪穴住居4	弥生土器 甕	16.3	30.7	-	口縁：ナデ 肩部：ハケ 胸部：ケズリ	口縁：4条の凹線 頸部：ナデ 胸部：ハケ→ミガキ	外：淡黄褐色 内：明赤褐色	スス付着
309	73	E区 竪穴住居4	弥生土器 甕	16.6	4.1	26.4	下半：ケズリ→ナデ 上半：(ハケ→)ナデ	口縁：2条の平行沈 線 風化著しく不明 下半：部分的にミガキ	灰黄褐色	焼成後、底部に外面 (底)から穿孔
310	73	E区 竪穴住居4	弥生土器 甕	-	-	18.4	下半：ケズリ 上半：ハケ→ナデ	風化著しく不明	灰褐色	胴部に穿孔、口縁部 切り取り
311	73	E区 竪穴住居4	弥生土器 底部	-	9.0	7.0	底部：指頭圧痕 他：不明	ミガキ	外：橙色 内：にぶい橙色	風化著しい
312	75	E区 竪穴住居5	弥生土器 甕口縁部	-	-	2.3	ナデ	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ	浅黄褐色	
313	75	E区 竪穴住居5	弥生土器 甕口縁部	-	-	2.1	ナデ	口縁：4条の凹線 頸部：ナデ	橙色	
314	75	E区 竪穴住居5	弥生土器 甕口縁部	-	-	2.8	ナデ	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ	橙色	
315	75	E区 竪穴住居5	弥生土器 壺口縁部	-	-	1.6	ナデ	口縁：キザミ	橙色	
316	75	E区 竪穴住居5	弥生土器 壺口縁部	19.2	-	1.8	ナデ	口縁：ナデ、口縁帯 にキザミ	外：にぶい黄褐色 内：明赤褐色	

表42 弥生土器・土師器・須恵器観察表(9)

掲載 番号	図	層位・地区	器種	法量(cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
317	75	E区 堅穴住居5 中央ピット	弥生土器 甕	12.6	-	6.5	口縁：ナデ 体部：ハケ	口縁：ナデ→3条の 凹線(→ナデ) 体部：ハケ	外：灰黄褐～黒褐色 内：灰黄褐～褐灰色	
318	75	E区 堅穴住居5	弥生土器 台付壺	18.3	18.9	40.2	口縁：ナデ 体部上半：ハケ 体部下半：ミガキ 筒部：ケズリ 脚端：ナデ	頸部：貼り付け突帯 体部上半：ハケ 体部下半：ミガキ 筒部付け根、脚～脚 端部に凹線	にぶい黄橙色～にぶ い黄褐色～灰色	赤彩痕跡
319	77	C区 堅穴住居6	紡錘車(土 器片転用)	最大長3.4 3.2	最大幅 0.5		(ハケ)→ナデ	ミガキ	外：にぶい赤褐色 内：にぶい黄褐色	重量0.5g
320	77	C区 堅穴住居6	弥生土器 甕	12.4	-	11.8	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ→3条の平 行沈線→ナデ 頸 部：ナデ 体部：ハ ケ→ナデ肩部：ハケ 工具によるキザミ	外：浅黄橙～灰褐～ 灰黄褐色 内：にぶい黄橙～橙 色	
321	77	C区 堅穴住居6	弥生土器 甕底部	-	5.8	4.4	ミガキ	ケズリ	外：にぶい褐～褐灰 色内：にぶい黄褐色	
322	78	E区 堅穴3	弥生土器 甕	12.0	-	2.1	ナデ	口縁：3条の凹線	橙色	
323	78	E区 堅穴3	弥生土器 底部	-	9.7	1.1	ナデ	ナデ	橙色	
324	79	E区 堅穴4	弥生土器 甕	-	-	2.1	ナデ、ハケ	ナデ	にぶい橙色	
325	79	E区 堅穴4	弥生土器 甕	17.2	5.8	27.6	ナデ、ハケ	口縁：凹線、ナデ 体部：ハケ、ミガキ	灰暗褐色	
326	81	E区 堅穴5	弥生土器 台付壺	-	-	16.5	体部：ハケ 脚部：ケズリ	最大径部：3条の凹 線	にぶい橙色	円盤充填
327	81	E区 堅穴5	弥生土器 壺	-	-	32.2	頸部：ヨコハケ 体部：ハケ→ナデ	頸部：凹線 頸部上 半：ハケ 同下半： ナデ 体部：ハケ	外：褐～黒褐色 内：褐色	頸部に線刻画
328	81	E区 堅穴5	弥生土器 壺	15.0	-	4.9	ナデ?	口縁：凹線→貝殻腹 縁の連続刺突 頸部 に貼り付け突帯	橙色	風化著しい
329	81	E区 堅穴5中層	弥生土器 甕	18.4	-	7.0	口縁：ナデ 体部：ハケ→ナデ	口縁：ナデ→3条凹 線 体部：ハケ	外：暗褐色 内：灰黄褐色	
330	81	E区 堅穴5	弥生土器 底部	-	8.1	4.6	ナデ	ハケ	灰橙色	
331	81	E区 堅穴5	弥生土器 底部	-	7.6	3.6	ケズリ→ナデ	ハケ→ミガキ	外：にぶい橙色 内：灰色	
332	81	E区 堅穴5上層	弥生土器 底部	-	7.3	7.6	ケズリ	ミガキ	灰黄褐色	
333	81	E区 堅穴5	弥生土器 底部	-	8.0	9.3	ケズリ	ミガキ	外：明褐色 内：灰色	
334	81	E区 堅穴5	弥生土器 甕	-	4.7	16.0	タテハケ→下半ケズ リ	タテハケ→下半ミガ キ	外：橙色 内：灰色	スス付着
335	82	E区 土坑20	弥生土器 甕	-	8.6	29.2	上半：粗いハケ 下半：ケズリ 底部：ナデ	上半：細かいハケ 下半：ミガキ	外：にぶい褐～暗赤 褐色 内：にぶい褐色	
336	83	E区 土坑21	弥生土器 甕	8.8	-	2.4	ナデ	口縁：3条の凹線 頸部：貼り付け突帯	外：にぶい黄褐色 内：にぶい褐色	
337	83	E区 土坑21	弥生土器 壺	17.8	-	4.4	(ハケ→)ナデ	口縁：4条以上の凹線 頸部：ハケ→ナデ凹線	にぶい黄褐色	
384	97	E区 包含層(上)	弥生土器 甕	-	-	5.0	ハケ	口縁：ケズリ→ナデ 体部：ヨコハケ→ナデ 口縁端部にキザミ	にぶい橙色	
385	97	E区 包含層(中)	弥生土器 甕	-	-	4.2	口縁：ナデ 他：ハケ	ハケ 口縁端部：キザミ	橙色	
386	97	E区 包含層	弥生土器 甕	-	-	2.0	ナデ、ケズリ	ミガキ、ナデ 口縁端部：キザミ	外：にぶい黄褐色 内：橙色	
387	97	B区 北壁 トレンチ	弥生土器 甕	-	-	2.6	ナデ	口縁端部：キザミ	にぶい黄褐色	
388	97	B区 包含層	弥生土器 甕	-	-	6.2	ハケ→ナデ	口縁端部：キザミ 他：ハケ	外：にぶい橙色 内：橙色	
389	97	B区 包含層	弥生土器 甕	-	-	5.4	口縁：ハケ→ナデ 体部：ナデ	口縁端部：キザミ 他：ハケ	外：橙色 内：橙色～明赤褐色	
390	97	E区 包含層(上)	弥生土器 甕	21.6	-	4.3	ナデ	ナデ 口縁にキザ ミ、頸部下に沈線	外：赤褐色 内：橙色	
391	97	B区 トレンチ内	弥生土器 甕	-	-	4.8	ナデ	ハケ→ナデ 口縁端部：キザミ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙色	
392	97	E区	弥生土器 甕	23.0	-	4.1	ナデ	ナデ 口縁端部にキ ザミ 頸部に沈線1 条、その下に部分的 な瓜形キザミ	外：淡橙色 内：橙色	
393	97	E区 包含層	弥生土器 甕	-	-	5.5	ナデ	ナデ 口縁端部にキ ザミ、頸部に沈線と キザミ	橙色	

表43 弥生土器・土師器・須恵器観察表(10)

掲載 番号	図	層位・地区	器種	法量 (cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
394	97	A区 包含層	弥生土器 甕	30.0	-	8.6	ハケ→ナデ	口縁～頸部：ナデ 口縁端部にキザミ、 頸部に2条の沈線	外：灰黄色 内：にぶい黄橙～灰 黄褐色	
395	97	E区 包含層	弥生土器 甕	28.4	-	4.5	(ハケ→) ナデ	ナデ？ 頸部：2条の沈線	橙色	風化著しい
396	97	E区 包含層	弥生土器 甕	-	-	7.1	ナデ	ナデ 口縁端部にキ ザミ 頸部に2条の沈 線、沈線間にキザミ	外：にぶい橙色 内：橙色	
397	97	A区 包含層	弥生土器 甕	28.2	-	5.0	ナデ	口縁下端にキザミ 頸部に3条の沈線、 沈線間に連続刺突文	外：浅黄橙～橙色 内：浅黄褐色	
398	97	E区 包含層	弥生土器 甕	-	-	4.7	ハケ→口縁ナデ	ナデ 口縁下端にキ ザミ 頸部に4条以 上の沈線	外：褐灰色 内：にぶい黄褐色	
399	97	A区 包含層	弥生土器 甕	-	-	7.6	ナデ	口縁：キザミ 体部：ハケ 頸部に3 条の沈線帯2周	にぶい黄褐色	
400	97	E区 包含 層(中～下)	弥生土器 壺	-	-	4.4	ナデ、ミガキ	口縁：ナデ 頸部：ハケ	橙色	
401	97	E区 包含層(下)	弥生土器 壺	-	-	3.8	ミガキ	ミガキ、頸部に1条 の沈線	橙色	
402	97	E区 包含層(上)	弥生土器 鉢	-	-	10.0	ナデ	ナデ	橙色	
403	97	E区 包含層(中)	弥生土器 鉢	-	-	9.5	口縁～頸部：ナデ 体部：ミガキ、ナデ	口縁～頸部：ナデ 頸部に指頭圧痕	橙色	
404	97	A区 I層	弥生土器 壺	13.8	-	5.0	口縁：ナデ 頸部：タテナデ	ナデ 頸部に4条の凹線	灰褐～黒褐色	
405	97	A区 I層	壺底部	-	7.0	4.7	ナデ	ミガキ	外：にぶい橙～褐灰 色 内：暗赤褐色	
406	98	E区包含層 (中～下)	弥生土器 鉢	12.6	-	6.8	口縁：ナデ 体部：ナデ、ミガキ	口縁：ナデ 体部：ナデ、ミガキ	にぶい黄褐色	
407	98	E区 包含層 (上～中部)	弥生土器 甕	15.0	-	10.6	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ→ナデ	口縁～頸部：ナデ 口縁にキザミ 体部：ハケ	外：茶褐色 内：赤褐色	
408	98	E区 包含層(上)	弥生土器 甕	16.6	-	10.6	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	口縁端部：キザミ 口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	橙色	
409	98	B区 I層	弥生土器 甕	20.4	-	3.7	ナデ	口縁：ナデ、端部キ ザミ 頸部下：ハケ	外：黒色 内：にぶい黄褐色	外面スス附着
410	98	B区 I層	弥生土器 甕	12.7	-	7.0	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ→ナデ	にぶい黄褐色	外面スス附着
411	98	E区 包含 層(下半)	弥生土器 甕	14.5	-	3.5	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	にぶい黄褐色	
412	98	E区 包含層(下)	弥生土器 甕	15.6	-	4.0	口縁部：ナデ 肩部：ケズリ	口縁：ナデ 体部：ハケ	外：にぶい黄褐色 内：明黄褐色	
413	98	A区	弥生土器 甕	13.5	-	3.0	ナデ	口縁：1条の凹線 頸部：ナデ 体部：ハケ	にぶい黄橙～褐灰色	
414	98	A区 下段北壁ト レンテ	弥生土器 甕	15.2	7.2	31.8	口縁～頸部：ナデ 体部上半：ハケ→ナ デ 同下半：ケズリ	口縁：凹線1条 頸 部：ナデ 体部上： ハケ 同下：ミガキ	にぶい橙色	
415	98	E区 包含層	弥生土器 甕	14.0	-	5.5	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ 体部：ハケ	黄灰～褐灰～灰黄色	
416	98	E区 包含層	弥生土器 甕	13.9	-	3.2	ナデ	口縁：3条の凹線→ ナデ 頸部：ナデ 体部：ハケ→ナデ	外：橙～にぶい黄褐 色 内：橙～灰黄褐 色	
417	98	E区 包含層(上)	弥生土器 甕	13.4	-	16.7	口縁～頸部：ナデ 体部上部：ハケ 肩部以下：ケズリ	口縁：4条の凹線 頸部：ナデ 体部上 半：ハケ 体部下 半：ハケ→ミガキ	橙色	外面スス附着
418	98	E区 包含層	弥生土器 甕	19.4	-	6.8	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ→一部ミ ガキ	口縁：3条の平行沈 線(→ナデ) 頸部： ナデ 体部：ハケ	外：にぶい橙～灰黄 褐色 内：橙～灰黄 褐～黒褐色	
419	98	B区 I層落ち込 み部	弥生土器 甕	16.3	-	19.6	口縁～頸部：ナデ 体部上半：ハケ 体部下半：ケズリ	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ 体部：ハケ→ミガキ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙色	
420	98	E区 包含層(中)	弥生土器 甕	21.0	-	18.6	口縁：ナデ 体部：ハケ、一部ミガ キ	口縁：3条の凹線 頸部：貼付突帯(板に よる刺突)→ナデ 体部上半：ハケ体部 体部下半：ミガキ	外：暗灰褐～黒色 内：にぶい橙～黒色	外面スス附着
421	98	E区 包含層(下)	弥生土器 甕	15.4	-	6.5	口縁～頸部：ナデ 体部：(ハケ→)ナデ	口縁：4条の凹線 頸部：ナデ 体部：ハケ	外：にぶい橙色 内：橙色	

表44 弥生土器・土師器・須恵器観察表(11)

掲載番号	図	層位・地区	器種	法量 (cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
422	98	E区 包含層(中)	弥生土器 甕	13.3	-	5.2	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ→ナデ	口縁：4条の凹線 頸部：ナデ 体部：ハケ→ナデ	明赤褐色	
423	98	E区 包含層(下)	弥生土器 甕	14.8	-	5.8	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	口縁：3条の凹線 体部：ハケ	外：浅黄橙色 内：橙色	
424	98	E区 包含層	弥生土器 甕	13.8	-	3.1	ナデ、屈曲部にハケ 残る	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ	赤褐～灰褐色	
425	99	E区 包含層	弥生土器 甕	15.0	-	10.2	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	口縁：凹線4条 頸 部：ナデ 体部：ハ ケ 肩：連続刺突文	にぶい黄橙色	
426	99	E区 包含層(下)	弥生土器 甕	14.2	-	6.5	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	口縁帯上下端：キザ ミ、凹線4条 頸部：ナデ 体部：ハケ	にぶい橙色	
427	99	E区 包含層(中～ 下)	弥生土器 甕	12.9	-	4.9	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ→ナデ	口縁：4条の凹線 頸部：ナデ 体部：ハケ→ナデ	にぶい褐色	
428	99	B区 西壁トレン チ	弥生土器 甕	13.4	-	15.3	口縁～頸部：ナデ 体部上半：ハケ→ナ デ 体部下半：ケズ リ→ナデ	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ 体部上 半：ハケ 体部下 半：ハケ→ミガキ	にぶい黄橙色	
429	99	B区 下段南北ト レンチ	弥生土器 甕	16.0	-	15.1	口縁：ナデ 体部：ハケ	口縁：2条の凹線 頸部：ナデ 体部：ハケ	にぶい黄橙色	外面スス付着
430	99	E区 包含層(上)	弥生土器 甕	10.6	-	7.0	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ 体部：ハケ	明橙色	外面赤彩、スス付着
431	99	E区 包含層(上)	弥生土器 甕	13.3	-	6.2	口縁～頸部：ナデ 体部上半：ハケ 体部下半：ケズリ	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ 体部： ハケ、浅い羽状文	外：にぶい黄橙色 内：褐色	
432	99	B区 包含層	弥生土器 甕	18.8	-	11.3	口縁～頸部：ナデ 体部上半：ハケ 体部下半：ケズリ	口縁：4条の凹線→ ナデ 頸部：ナデ 体部：ハケ	外：にぶい黄褐～明 褐色 内：橙～灰黄褐色	
433	99	E区 包含層	弥生土器 甕	15.2	-	10.0	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	口縁：3条の凹線 頸部：ナデ 体部：ハケ	外：橙～にぶい褐～ 褐灰色 内：橙～にぶい褐色	
434	99	E区 包含層(下)	弥生土器 甕	14.4	-	12.0	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ→下半ミ ガキ	口縁：2条の凹線 頸部：ナデ 体部： ハケ 下半ミガキ	灰褐色	
435	99	E区 包含層	弥生土器 甕	12.4	-	9.5	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ→一部ミ ガキ	口縁：3条の凹線(→ ナデ) 頸部：ナデ 体部：ハケ	外：にぶい黄橙～褐 色 内：にぶい橙～ にぶい黄橙～褐色	
436	99	B区 包含層	弥生土器 甕	14.0	-	3.3	ナデ	口縁：4条の凹線 頸部：ナデ 肩部：ハケ	外：明赤褐色～にぶ い黄橙色 内：明赤褐色	
437	99	E区 包含層	弥生土器 甕	15.2	-	4.2	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ→ナデ	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	外：にぶい橙～褐灰 色 内：にぶい橙～ 褐灰～にぶい黄橙色	
438	100	A区 南壁 トレンチ 包含層	弥生土器 壺	13.8	-	15.9	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ	口縁：2条の凹線→キ ザミ 頸部：ハケ、 頸部付け根に低い突 帯を貼付けキザミ	にぶい黄橙色	
439	100	E区 南北トレン チ北端 包含層	弥生土器 壺	14.0	-	10.0	口縁～頸部：ナデ 体部：ハケ→ナデ	口縁：4条の凹線 頸部～体部：ハケ 頸 部付近に凹線2条と その間にキザミ	にぶい橙色	
440	100	E区 包含層(下)	弥生土器 壺	21.0	-	3.1	ハケ→ナデ	口縁帯：4条の凹線 口縁：ナデ 頸部：ハケ	にぶい橙色	
441	100	E区 包含層(中)	弥生土器 壺	22.2	-	10.6	口縁：ヨコナデ(一部 ハケ→ナデ) 頸部： タテの粗いナデ	口縁帯：凹線3条 口縁：ナデ 頸部： ハケ、貼付突帯	橙～赤褐色	
442	100	E区 包含層(下)	弥生土器 壺	16.6	-	7.8	口縁上端：ナデ 頸屈曲部周辺：ハケ 頸部：ナデ、残存部 最下部にケズリ	口縁：5条の平行沈 線→ナデ 頸部：ハケ(→ナデ) →凹線	外：橙色 内：にぶい橙色	凹線は1本の工具で 4周して施した可能 性高い
443	100	E区 包含層(下)	弥生土器 壺	15.6	-	5.7	ナデ	口縁：4条の凹線 頸部：上半ナデ、下 半ハケ、ナデとハケ の境にキザミ	にぶい橙色	
444	100	E区 包含層(上)	弥生土器 壺	16.8	-	7.4	風化のため調整不明	口縁：2条以上の凹 線、風化で調整不明	橙色	外面赤彩
445	100	A区 I層	弥生土器 壺	16.4	-	7.3	ナデ→ミガキ	ナデ 頸部に4条(以 上)の沈線	橙色	

表45 弥生土器・土師器・須恵器観察表(12)

掲載 番号	図	層位・地区	器種	法量 (cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
446	100	E区 包含層(中)	弥生土器 器種不明	-	-	6.7	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	明褐色	内外赤彩
447	100	E区 包含層	弥生土器 無頸壺	10.6	-	5.0	ナデ	口縁～頸部：5条の 凹線→ナデ 口縁下 に穿孔 体部：ハケ	外：橙色～灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	
448	100	E区 包含層(下)	弥生土器 無頸壺	6.2	-	5.5	ナデ	口縁：3条の凹線→ ナデ 体部：ハケ	外：灰黒色 内：灰褐色	
449	101	A区 包含層	弥生土器 高杯	23.7	-	3.3	ナデ、ミガキ	口縁端部、口縁下突 帯上にキザミ 杯部：ミガキ	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	
450	101	E区 包含層	弥生土器 高杯	-	-	2.4	口縁：ナデ 体部：ミガキ	口縁部上面：ナデ 口縁：ナデ→端部に 貝殻刺突文、口縁下 に2条の凹線 体部：ミガキ	外：にぶい褐～灰褐 色 内：灰黄褐～にぶい 黄橙色	
451	101	B区 包含層	弥生土器 高杯脚部	-	8.3	3.7	ナデ	ナデ 突帯と脚端部 との間に、平面三角 形の透かし、未貫通	にぶい黄橙色	
452	101	E区 遺構外	弥生土器 脚部	-	18.0	6.6	ケズリ	ハケ 残存部上部に 1条、および脚端に 6条の凹線	にぶい黄橙色	
453	101	E区 包含層(中)	弥生土器 器台	-	-	4.6	ハケ→ナデ	ハケ→ミガキ 凹 線、透かし未貫通	外：にぶい赤褐色 内：にぶい黄橙色	外面赤彩
454	101	E区 重機掘削中	弥生土器 高杯脚部	-	10.8	6.9	ケズリ→ナデ	ナデ 円形の透か し、シャープな刻線 の鋸歯文、下部に3条 の凹線	外：橙色 内：にぶい赤褐色	
455	102	E区 包含層(下)	弥生土器 甕	17.0	-	9.3	口縁～頸部：ナデ 体部：ケズリ	口縁～頸部：ナデ 口縁に4条の平行沈 線 体部：ハケ→ナ デ 肩部にキザミ	橙色	
456	102	E区 包含 層(下半)	弥生土器 甕	-	-	4.7	口縁～頸部屈曲部： ナデ 体部：ケズリ	口縁：6条の平行沈 線 頸部：ナデ	外：橙色 内：にぶい橙色	
457	102	B区 トレンチ	弥生土器 甕	16.5	-	4.7	口縁：ナデ 頸部： ハケ 体部：ケズリ	口縁：3条の平行沈 線文 体部：ハケ	橙色	
458	102	E区	弥生土器 甕	23.6	-	5.3	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：6条の平行沈 線 頸部：ナデ	にぶい黄褐色	
459	102	A区 I層	弥生土器 甕	16.0	-	3.2	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：4条の凹線 頸部：ナデ	浅黄橙～にぶい褐色 (暗褐色)	
460	102	E区	弥生土器 甕	17.0	-	3.8	口縁：ハケ→ナデ 頸部屈曲部上半：ナ デ 体部：ケズリ	口縁：4条の平行沈 線→ナデ 体部：ハケ	外：にぶい橙色～黒 褐色 内：にぶい橙色	
461	102	E区 包含層(中)	弥生土器 甕	20.6	-	5.6	口縁～頸部屈曲部： ナデ 体部：ケズリ	口縁：5条の平行沈 線 頸部：ナデ	浅黄橙～にぶい褐色	
462	102	E区 包含層(上)	弥生土器 甕	-	-	3.6	口縁：ナデ→貝殻腹 縁による連続刺突文 頸部屈曲部：ミガキ 体部：ケズリ	口縁：6条(以上)の 平行沈線 頸部：ナデ	浅黄褐色	
463	102	E区 包含層(中)	弥生土器 甕	19.2	-	3.4	口縁：ナデ 頸部：ケズリ→ナデ	口縁：4条の平行沈 線→ナデ 頸部：ナデ、キザミ	にぶい黄橙～灰黄褐 色	
464	102	E区 包含層(下)	弥生土器 甕	18.4	-	8.6	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：4条の平行沈 線 頸部：ナデ 体部：ハケ	にぶい橙色～灰褐色	スス付着
465	102	E区 包含層	弥生土器 甕	16.0	-	6.2	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：5条の平行沈 線 頸部以下：ナデ 肩に工具による刺突	外：褐灰色 内：にぶい黄褐色	
466	102	E区 暗渠内	弥生土器 甕	19.2	-	3.6	口縁～頸部屈曲部： ナデ 体部：ケズリ	口縁：6条の平行沈 線 頸部：ナデ	にぶい黄橙～褐灰色	内外赤彩
467	102	E区	弥生土器 甕	24.2	-	5.8	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：7条の凹線 頸部：ナデ	橙色	
468	102	E区	弥生土器 甕	10.4	-	7.8	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：4条の平行沈 線 肩部：キザミ	外：赤褐色 内：灰褐色	風化著しい
469	102	E区 包含層(下)	弥生土器 甕	18.0	4.8	26.1	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：平行沈線4条 →ナデ 肩：羽状文 体部：ハケ→ナデ	にぶい橙色	
470	102	E区 攪乱内	弥生土器 甕	16.4	-	6.5	口縁～頸部：ナデ 体部：ケズリ	口縁：4条の凹線 頸部：ナデ 体部：ハケ	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	
471	102	E区 包含層(中)	弥生土器 甕	16.2	-	4.7	口縁：ナデ 頸部以下：ケズリ	口縁：4条の凹線 頸部：ナデ	外：にぶい黄褐色 内：明黄褐色	
472	102	B区	弥生土器 甕	14.2	-	3.1	口縁：ナデ 頸部：ケズリ→ナデ	口縁：3条の平行沈 線 頸部：連続刺突文	にぶい黄褐色	

表46 弥生土器・土師器・須恵器観察表(13)

掲載 番号	図	層位・地区	器種	法量 (cm)			調整		色調	備考
				口径	底径	器高	内面	外面		
473	103	B区 トレンチ内	弥生土器 壺	10.8		3.8	ナデ	口縁帯：凹線2条 頸部基部：平行沈線 2条 ナデ	外：にぶい黄橙～褐 灰 内：明褐色	
474	103	E区 包含 層(中～下)	弥生土器 壺	11.8	-	2.0	口縁：ミガキ 頸部：ナデ	口縁：平行沈線→ナ デ 頸部：ナデ	赤色	内外全面に厚い赤彩
475	103	E区	弥生土器 壺	17.0	-	2.8	ミガキ	ミガキ 口縁部に6条 の平行沈線	赤褐色	内外赤彩 頸部に穿孔有
476	103	E区	弥生土器 壺	11.6	-	4.6	口縁～頸部：ミガキ 体部：ケズリ	口縁：4条の平行沈 線→ミガキ	外：橙色 内：明赤褐色	内外赤彩 風化著し い
477	103	E区 包含層(中)	弥生土器 無頸壺	-	-	4.5	口縁：ナデ 体部：ケズリ	ナデ 肩部：8条の 平行沈線と貝殻腹縁 による連続刺突	外：明赤褐色 内：橙色	平行線文上に穿孔 外面赤彩
478	103	A区 包含層	弥生土器 無頸壺か脚 付長頸壺	-	-	4.3	ケズリ	ナデ 屈曲部：貝殻腹縁刺 突による羽状文	外：橙色 内：浅黄橙色	
479	103	E区	弥生土器 壺	13.2		4.3	口縁：ナデ 体部：ケズリ	口縁：ナデ 頸部： 波状文 体部：ハケ	外：赤褐色 内：にぶい橙色	内外面赤彩、外面ス ス付着
480	103	E区 包含層	弥生土器 高杯	11.3	6.9	9.5	杯部：ナデ→ミガキ 脚内：(ケズリ→)ナ デ	ナデ→ミガキ	にぶい橙色	
481	103	E区 遺構外	弥生土器 大型台付 鉢?	26.0	-	3.5	ナデ	ナデ 口縁端部：貼り付け 拡張 口縁部上端面、外面 に線刻文	外：橙色 内：橙色～褐色	口縁上端面に鋸歯 文、外側を底辺とす る三角形を赤彩。外 面は突帯をはさんで 斜格子文の文様帯を 2列。線刻で囲われ た菱形部分を残し、 他の部分を赤彩。
482	103	E区 包含層(上)	弥生土器 台付壺脚部	-	17.4	11.4	ケズリ	風化著しく不明 脚端部：3条の平行 沈線	にぶい橙～灰色	不均等な四方に平面 方形の透かしと一方 に2つ並ぶ円形の透 かし 外面赤彩
483	103	A区 I層	弥生土器 壺	9.8	-	12.0	横方向のミガキ	口縁端：ミガキ 口縁下～頸屈曲部： ナデ 肩：ミガキ 胴上半：ハケ 胴下：ミガキ	外：明褐色 内：黒色	
484	104	E区 包含層	弥生土器 蓋	-	-	4.5	ナデ、ハケ	ハケ→ナデ	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	
485	104	E区	弥生土器 蓋	-	-	5.0	つまみ部：ナデ 体部：ハケ	つまみ部：ナデ 体部：ハケ	灰褐色	つまみ径7.0cm
486	104	A区 I層	弥生土器 底部	-	8.3	2.3	ナデ	ミガキ	外：にぶい橙色 内：灰色	
487	104	B区 トレンチ内	弥生土器 底部	-	6.8	4.8	ケズリ	ミガキ	にぶい黄褐～黒褐色	
488	104	E区 包含層(中)	弥生土器 底部	-	5.0	10.6	ケズリ→ナデ	ミガキ	外：にぶい褐色 内：黒褐～灰褐色	外面スス付着
489	104	B区 包含層	弥生土器 底部	-	5.3	4.8	ケズリ	ミガキ	外：褐灰色 内：灰黄色	内外面スス付着
490	104	E区 包含層	弥生土器 底部	-	7.2	5.8	ケズリ	ミガキ	外：にぶい橙～黒色 内：灰黄褐色	
491	104	E区 包含層(上)	弥生土器 底部	-	5.4	8.2	ケズリ	ミガキ	黒褐色	
492	104	E区	弥生土器 底部	-	8.0	6.7	ケズリ	ミガキ	にぶい黄褐色	外面赤彩
493	104	E区 包含層(中)	弥生土器 底部	-	10.0	6.8	風化著しい ハケ?	ハケ→ナデ	外：橙～褐灰色 内：橙色	
494	104	E区 包含層	弥生土器 底部	-	9.7	8.1	ナデ	ハケ	橙色	
495	104	A区 I層(上)	弥生土器 底部	-	9.5	5.5	ナデ	ハケ→ナデ	外：橙色 内：にぶい灰褐色	
496	104	E区 包含層(中)	弥生土器 底部	-	8.6	6.0	ハケ→ナデ	ハケ	外：灰褐色 内：橙～にぶい褐色	
497	104	A区 I層	弥生土器 底部	-	8.4	4.8	ナデ	ハケ→ナデ	外：にぶい橙～褐色 内：浅黄橙～黒褐色	
498	104	A区	弥生土器 底部	-	8.8	3.8	ハケ→ナデ	ハケ	外：橙～にぶい黄橙 色 内：にぶい橙色	
499	104	E区	弥生土器 底脚部	-	7.3	3.6	ナデ	ナデ	にぶい橙色	
500	104	E区 包含層(上)	弥生土器 底脚部	-	5.8	2.8	ナデ	ナデ	外：赤色 内：橙色 脚部内：にぶい褐～ 灰黄褐色	

表47 縄文土器観察表(1)

掲載 番号	図	出土 位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調
25	12	2調査地	深鉢	23.1	-	隆帯を口縁からわずかに下った位置に貼付。隆帯～口縁を一体としてキザミ	RL縄文→一部ナデ	貝殻条痕→ナデ	やや粗、繊維含む、雲母多く含む	黒褐色
26	12	2調査地	深鉢	-	-	口縁端に肥厚帯上の隆帯。隆帯上に貝殻腹縁(?)によるキザミ	RL縄文	ナデ	密、繊維含む	暗褐色
27	12	2調査地	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。隆帯上に貝殻腹縁によるキザミ	条痕→ナデ	ナデ	密、繊維含む、雲母多く含む	褐色
28	12	2調査地	深鉢	-	-		RL縄文	RL縄文	密、繊維含む	暗褐色
29	12	2調査地	深鉢	-	-	口縁端に肥厚帯状の隆帯。隆帯上、隆帯下に貝殻腹縁によるキザミ	ナデ	ナデ	密	橙褐色
30	12	2調査地	深鉢	-	-	口縁端に幅広で低い隆帯。隆帯上に貝殻腹縁によるキザミ。隆帯下に貝殻腹縁による刺突文列	ナデ	条痕→ナデ	密	褐色
31	12	2調査地	深鉢	-	-	外面に細い隆帯。隆帯上にキザミ。内面口縁端にRL縄文	RL縄文	ナデ	密	暗褐色
32	12	2調査地	深鉢	-	-	口縁端下にキザミ。内面口縁端にRL縄文	RL縄文	ナデ	密	浅黄色
33	12	2調査地	深鉢	-	-	外面に爪形文列	RL縄文	ナデ	やや粗	にぶい黄色
34	12	2調査地	深鉢	-	-		外面上端・RL縄文	ナデ	密	褐色
35	12	2調査地	深鉢	-	-		RL縄文	ナデ	密	暗褐色
36	12	2調査地	深鉢	-	-		RL縄文	ナデ	粗	にぶい黄色
37	12	2調査地	深鉢	-	-		無節縄文	ナデ	密	にぶい黄褐色
38	13	2調査地	深鉢	-	-	RL縄文→(ミガキ)→沈線で区画文	ミガキ(単位あり)	ミガキ(単位あり)	密	黒褐色
39	13	2調査地	深鉢	-	-	RL縄文→(ナデ)→沈線	ナデ	ナデ	密	黒褐色
40	13	2調査地	深鉢	-	-	LR縄文→沈線	ミガキ(単位あり)	ミガキ(単位あり)	密	黄褐色
41	13	2調査地	浅鉢?	-	-	RL縄文→口縁に刺突、口縁下に沈線	ミガキ	ミガキ	密	にぶい黄褐色
42	13	2調査地	浅鉢?	-	-	RL縄文→沈線で方形区画文	ナデ	ミガキ	密	にぶい黄褐色
43	13	2調査地	深鉢?	-	-	沈線	ミガキ	ミガキ	密	黄灰色
44	13	2調査地	浅鉢	16.0	-	沈線→LR縄文	ナデ	ナデ	密	黒褐色
45	13	2調査地	深鉢	-	-	横走沈線→LR縄文	不明	ナデ	密	暗褐色
46	13	2調査地	深鉢	-	-	沈線→LR縄文	ナデ	ナデ	密	褐色
47	13	2調査地	深鉢	-	-	無節縄文(L)→浅い沈線	不明	ナデ	密	褐色
48	13	2調査地	浅鉢	-	-	4条の沈線と沈線内刺突	ナデ	ミガキ(単位あり)、口縁ナデ	密	にぶい褐色
49	13	2調査地	深鉢	-	-	4条の沈線と沈線内刺突	ナデ	ミガキ	密	褐色
50	13	2調査地	浅鉢	-	-	沈線、沈線内刺突	ナデ	ケズリ状(?)→ナデ	密	黒赤褐色
51	13	2調査地	?	-	-	結節縄文、沈線・沈線内刺突	ミガキ	ナデ	密	にぶい褐色
52	13	2調査地	?	-	-	結節縄文	ナデ	ナデ	密	灰黄褐色
53	13	2調査地	深鉢?	-	-	結節縄文 LR縄文	ナデ?	ナデ→ミガキ	密	灰黄褐～ 褐灰色
54	13	2調査地	深鉢	-	-	胴部結節縄文(LR)。頸部横走沈線	ナデ→一部ミガキ	ナデ	やや粗	にぶい褐色
55	13	2調査地	注口土器	-	-	注口付け根を沈線内刺突のある沈線で囲う。注口部に向かって細かい沈線	ミガキ	ナデ	密	赤褐色
56	13	2調査地	注口土器?	-	-	結節縄文。LR縄文	ミガキ	ナデ	密	灰褐色
57	13	2調査地	深鉢	-	-	異方向縄文(RL)	ナデ	ナデ・ミガキ(単位あり)	密	褐色
58	13	2調査地	深鉢	-	-		無節縄文(L)	ナデ	密	黒褐色
59	14	2調査地	深鉢	35.4	-		丁寧なナデ	ミガキ(単位あり)	密	にぶい黄褐色
60	14	2調査地	粗製深鉢	38.1	-		ケズリ状→粗いナデ	ナデ	密	にぶい黄色
61	14	2調査地	粗製深鉢	22.5	-		ケズリ状→一部粗いナデ	(ハケメ状条痕→) ナデ	密	にぶい褐色
62	14	2調査地	粗製深鉢	35.0	-		粗いナデ	ナデ	やや密	暗褐色
63	14	2調査地	粗製深鉢	-	-		ケズリ状→ナデ	丁寧なナデ	密	にぶい褐色
64	14	2調査地	粗製鉢	-	4.4		細密条痕→底部付近ナデ	貝殻条痕→ナデ	やや密	浅黄褐色
65	14	2調査地	粗製深鉢	-	-		ケズリ状→ナデ	丁寧なナデ	密	黒褐色
66	14	2調査地	粗製深鉢	-	-		粗いナデ	ナデ	やや密	灰黄褐色
67	14	2調査地	粗製深鉢	-	-		粗いナデ	丁寧なナデ	粗	にぶい黄褐色
68	14	2調査地	粗製深鉢	-	-		ケズリ状→粗いナデ	ナデ	密	にぶい褐色
69	14	2調査地	粗製深鉢	-	-		ケズリ状	ナデ	密	にぶい黄褐色

表48 縄文土器観察表(2)

掲載 番号	図	出土 位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調
70	14	2調査地	粗製深鉢	-	-		粗いナデ→一部ミ ガキ	ナデ	密	にぶい黄 褐色
71	14	2調査地	粗製深鉢	-	-		粗いナデ	ナデ	密	にぶい黄 褐色
72	14	2調査地	粗製深鉢	-	-		ナデ	ヨコ方向ケズリ	密	浅黄橙色
73	14	2調査地	粗製深鉢	-	-		ミガキ	ナデ	密	にぶい黄 褐色
74	14	2調査地	底部	-	11.2		ナデ	ナデ	密	にぶい黄 褐色
75	14	2調査地	底部	-	6.6		ナデ	ナデ	密	褐色
76	14	2調査地	底部	-	8.7		ナデ	ナデ	密	浅黄褐色
77	14	2調査地	底部	-	7.2		ナデ	ナデ	密	褐灰色
78	14	2調査地	底部	-	6.4		ナデ	ナデ	密	にぶい黄 褐色
79	14	2調査地	底部	-	4.3		ナデ	ナデ	密	にぶい黄 褐色
338	84	土坑22	底部	-	-		貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	やや密、繊維 含む	にぶい黄 褐色
339	85	土坑22	深鉢	-	-	口縁端付近(?)に低目の隆帯。隆帯上断面U 字形のキザミ	ナデ	貝殻条痕→ナデ	やや密、繊維 多く含む	にぶい黄 褐色
340	85	土坑22	深鉢	-	-	口縁端に低い隆帯。隆帯上平面方形、断面 箱形のキザミ	ナデ	ナデ	密、雲母多く 含む	にぶい褐 色
341	85	土坑22	深鉢	-	-	波状口縁の口縁端に断面三角形の隆帯	貝殻条痕→ナデ	ナデ	密、雲母多く 含む	にぶい褐 色
342	85	土坑22	深鉢	-	-	口縁下に細目の隆帯。隆帯上(下半)を半裁 竹管の押しきでキザミ。隆帯の下にも同じ キザミ。口縁端に浅いキザミ	ナデ	ナデ	やや密、繊維 含む	にぶい黄 褐色
343	85	土坑22	深鉢	-	-	口縁端に低い隆帯。隆帯上断面V字のキザ ミ、口縁付近からやや斜に垂下する縦位の 爪形文列	貝殻条痕→ナデ	ナデ	密	暗褐色
344	85	土坑22	深鉢	-	-	口縁端に幅広の隆帯。隆帯上に平面形米粒 形の刺突文列2列	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	密	灰褐色
345	85	土坑22	深鉢	-	-	口縁端に断面三角形の幅広の隆帯。隆帯上 貝殻腹縁の密な刺突によるキザミ	ナデ	ナデ	密	にぶい黄 褐色
346	85	土坑22	深鉢	-	-	幅広で低目の隆帯。隆帯上貝殻腹縁の密な 刺突によるキザミ	貝殻条痕→ナデ	ナデ	密、繊維含 む、雲母多く 含む	にぶい橙 色
347	85	土坑22	深鉢	-	-	粘土帯で貼付けた低い肥厚部。強くなでつ けられて隆帯をなさない。その上に貝殻背 面押圧による浅いキザミ	ナデ	ナデ	やや密、繊維 多く含む	黒褐色
348	85	土坑22	深鉢	-	-	口縁に上面形円形の突起。そこからわずかに 垂下する細隆帯と横走る2条以上の細隆 帯	条痕→ナデ	貝殻条痕	密	黒褐色
349	85	土坑22	深鉢	-	-	貝殻腹縁による刺突文列	ナデ	ナデ	密、雲母多く 含む	にぶい橙 色
350	85	土坑22	深鉢	-	-		LR縄文擦り戻し	(条痕)→ナデ	やや粗、繊維 多く含む	灰黄褐～ 黒褐色
351	85	土坑22	深鉢	-	-		RL縄文	貝殻条痕	やや密、繊維 多く含む、雲 母含む	灰褐～に ぶい褐色
352	85	土坑22	深鉢	-	-		貝殻条痕→一部ナ デ	貝殻条痕→一部ナ デ	密、繊維含 む、雲母含む	にぶい黄 橙～褐灰 色
353	85	土坑22	深鉢	-	-		貝殻条痕	貝殻条痕	密、繊維含 む、雲母含む	灰黄褐～ 黒褐色
354	85	土坑22	底部	-	-		粗いナデ、底部に ミガキ	ナデ	密	にぶい橙 色
355	86	土坑23	深鉢	38.4	-	口縁端に肥厚帯状隆帯。隆帯上に貝殻腹縁 によるキザミ。口縁帯と胴部屈曲部の間に 平行する半円形の刺突文列が4列	貝殻条痕→屈曲部 以上ナデ	植物質条痕→口縁・ 底部ナデ	密	灰褐～褐 色
356	87	土坑24	深鉢	-	-		貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	やや密、繊維 含む	にぶい黄 褐色
357	87	土坑24	深鉢	-	-	口縁端部に横走る隆帯。隆帯は上下から 交互に押圧され断面三角形を呈する。口縁 から垂下する隆帯も貼付。形態は口縁のも のと同じ	ナデ	貝殻条痕→ナデ→ 口縁付近板状工具 でナデ	やや粗、繊維 多く含む	にぶい黄 褐色
358	87	土坑24	注口? 壺形?	-	-	横走る凹線2条2単位。うち1本の凹線端 に巻貝殻口圧痕。頸部屈曲部に2列の刺突 文列。胴部屈曲部に斜めのキザミ列。	ミガキ	ミガキ	密	灰色
359	88	土坑25	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。隆帯上、口縁上端に先の 尖った棒状工具で円形の刺突を施す	ナデ	ナデ	やや粗、繊維 多く含む	暗灰黄色
360	88	土坑25	深鉢	-	-	口縁端部よりわずかに下に横走る隆帯。 隆帯上に貝殻腹縁による深い斜位のキザ ミ。口縁上端面にも浅いキザミ(工具不明)	条痕→ナデ	条痕→ナデ	やや密、繊維 多く含む	灰黄色

表49 縄文土器観察表(3)

掲載番号	図	出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調
361	88	土坑25	深鉢	-	-	口縁から下がった位置に隆帯貼付。口縁から隆帯にかけて爪形の刺突によるキザミ(口縁と隆帯を一体のものとして施文)。口縁端から口縁部文様帯がめぐると効果。	ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	オリーブ褐色
362	88	土坑25	深鉢	-	-	波状口縁頂部から垂下する隆帯上に棒状工具の刺突・押し引き	ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	暗灰黄色
363	88	土坑25	深鉢	-	-		貝殻条痕→粗いナデ	貝殻条痕→ナデ	やや粗、繊維多く含む	明黄褐色
364	88	土坑25	深鉢	-	-		条痕→ナデ	条痕→ナデ	やや粗、繊維多く含む	黒褐色
365	88	土坑25	深鉢	-	-		貝殻条痕→ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	にぶい黄褐色
366	88	土坑25	深鉢	-	-		貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	やや粗、繊維多く含む	明黄褐色
367	88	土坑25	深鉢	-	-		LR縄文→ナデ	ナデ	やや密、繊維含む	にぶい黄褐色
368	88	土坑25	深鉢	-	-		ナデ	条痕。間隔広く深い。櫛歯状の工具によるものか?	やや粗、繊維含む	暗褐色
369	88	土坑25	深鉢	-	-		LR縄文→ナデ	貝殻条痕→ナデ	やや粗、繊維多く含む	黒褐色
370	88	土坑25	深鉢	-	-		貝殻条痕	ナデ(擦痕あり)	やや粗、繊維含む	にぶい黄褐色
371	88	土坑25	深鉢	-	-		貝殻条痕→ナデ	条痕(ハケメ状)→ナデ	やや粗、繊維多く含む	明黄褐色
372	89	土坑26	深鉢	-	-		ナデ(擦痕あり)	貝殻条痕→ナデ	密	にぶい橙色
373	89	土坑26	深鉢	-	-		貝殻条痕	植物質条痕	密	にぶい黄褐色
374	89	土坑26	深鉢	-	-		貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	密	にぶい黄褐色
375	89	土坑26	深鉢	-	-		貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	やや粗	灰黄褐色
376	89	土坑26	深鉢	-	-		RL縄文	ナデ	やや密	黄褐色
377	89	土坑26	深鉢	-	-	口縁に横走隆帯。隆帯上に竹管状の刺突	ナデ	ナデ	密、繊維含む	橙色
378	89	土坑26	土製品	長さ9.2cm、幅5.6cm、厚さ1.2cm、重量61g			ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	暗灰色
379	90	土坑27	深鉢	-	-		ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	褐灰色
380	90	土坑28	深鉢	-	-		貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ(擦痕あり)	密	にぶい褐色
381	95	P232	底部	-	-		粗いナデ	ナデ	密	にぶい黄褐色
382	95	P233	深鉢	-	-	口縁端より下に無キザミ突帯	ナデ	ナデ	密	にぶい黄褐色
383	95	P234	小型深鉢	10.9	-		貝殻条痕→ナデ	ナデ	密	にぶい黒褐色
501	108	A区	深鉢	-	-	山形押型文	ナデ	ナデ	密	にぶい黄褐色
502	108	B区	深鉢	28.5	-	口縁端に隆帯。交互に上下から押圧して貼付	LR縄文	上半:ナデ 下半:植物質条痕→ナデ	密、繊維含む	黄褐~暗褐色
503	108	B区	深鉢	21.0	-	口縁端に1条、下方にもう1条の隆帯。隆帯上半は半裁竹管(状)の工具で深く刺突(押し引く)。隆帯幅をはみだすキザミもみられる	RL縄文	ナデ	やや密、繊維多く含む	暗灰黄~黒褐色
504	108	C区	深鉢	27.4	-	口縁端に隆帯。隆帯上半に半裁竹管による深いキザミ	RL縄文(隆帯剥落部にも)	貝殻条痕	密、繊維多く含む	にぶい黄色
505	108	G3	深鉢	-	-	口縁端部に隆帯。隆帯は上下方向から交互に押圧。断面三角形	LR縄文→ナデ	ナデ	やや粗、繊維多く含む	にぶい黄褐色
506	108	F3	深鉢	-	-	口縁に隆帯。口縁と平行しない。隆帯上半に半裁竹管の押し引きによるキザミ	RL縄文	条痕→ナデ	密、繊維少量含む	にぶい褐色
507	108	G1	深鉢	-	-	口縁に断面丸形の隆帯。隆帯上半に貝殻腹縁(背面側)押し引きによるキザミ	RL縄文	軟質植物工具ナデ(擦痕条痕あり)	やや粗、繊維多く含む	黒褐色
508	108	B区	深鉢	-	-	口縁に隆帯。隆帯上半に断面U字形のキザミ	RL縄文	ナデ	やや密、繊維含む	灰黄色
509	108	E2	深鉢	-	-	口縁端に断面丸形の隆帯。隆帯上半に半裁竹管状工具でキザミ	LR縄文(粗雑)	条痕→ナデ	密	灰黄褐色
510	108	E2	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。隆帯上半(口縁上端側)に貝殻腹縁の押し引き	RL縄文	植物質条痕(条溝・条間同幅)	密	にぶい橙色
511	108	E2	深鉢	-	-	口縁端に断面丸形の隆帯。隆帯上半断面V字の細いキザミ	RL縄文	貝殻条痕→ナデ	密、繊維含む	にぶい黄褐色
512	108	G2	深鉢	-	-	口縁端に分厚い隆帯。隆帯上半に二枚貝(?)による押し引き→2列の角押文状を呈す	RL縄文→ナデ	ナデ	密	黒色
513	108	D2	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。隆帯上半と口縁上端を棒状工具で押し引きしてキザミ。補修孔あり	RL縄文	丁寧なナデ	密	灰黄褐色
514	108	D2	小型深鉢	-	-	口縁端に断面三角形の隆帯。ヘラ状工具を斜めに押しあてて細いタテのキザミ→隆帯中央に横走沈線	RL縄文	ナデ	やや密、繊維含む	にぶい赤褐~黒褐色

表50 縄文土器観察表(4)

掲載番号	図	出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調
515	108	I3	深鉢	17.0	-	口縁端に低い隆帯。肥厚帯状。隆帯上に爪形のキザミ	RL縄文→ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	暗褐色
516	109	I3	深鉢	-	-	波状口縁波頂部片。頂部を起点に複合山形文形に垂下する隆帯。隆帯上半裁竹管でキザミ。口唇部上端に貝殻腹縁でキザミ	LR縄文(深く明瞭)	ナデ	やや粗、繊維多く含む	褐色
517	109	H4	深鉢	-	-		LR縄文(深く明瞭)	植物質工具ナデ→ナデ	やや粗、繊維多く含む	にぶい赤褐色
518	109	G2	深鉢	-	-	波状口縁波頂部に口縁隆帯(剥落)と垂下する隆帯。隆帯上に平面形U字形の浅いキザミ	条痕(原体不明)→ナデ	条痕(貝殻?)→ナデ	やや密、繊維多く含む	橙色
519	109	D2	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。隆帯上棒状工具の押圧でキザミ。口縁上端に斜位に浅く細いキザミ	RL縄文→一部貝殻条痕	丁寧なナデ	やや密、繊維含む	灰褐色
520	109	H3	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。隆帯上に貝殻背面の押圧でキザミ。外面擦糸圧痕文	ナデ→擦糸圧痕	貝殻条痕/ナデ	密	にぶい黄褐色
521	109	G2	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。上下から交互に押圧を加えて貼付け	RL縄文	ナデ	やや密、繊維含む	にぶい黄褐色
522	109	D2	深鉢	-	-	外面に無節縄文(L)	無節縄文(L)	植物質条痕(ハケメ状)	密	明赤褐～赤褐色
523	109	G1	深鉢	-	-	口唇部(上端も)に断面V字のシャープなキザミ	RL縄文	貝殻条痕(?)→丁寧なナデ	密	にぶい黄褐色
524	109	A区	深鉢	-	-	口縁上端にキザミ(貝殻腹縁か?)	条痕(貝殻?)→RL縄文→ナデ	ナデ	やや粗、繊維少量含む	にぶい橙色
525	109	F3	深鉢	-	-	口縁端部にキザミ	RL縄文	貝殻条痕→ナデ	密、繊維を含む	にぶい褐色
526	109	C区	深鉢	-	-	横走する隆帯、それと接続すると思われる斜位の隆帯。隆帯上に貝殻腹縁によるキザミ。隆帯の上側にキザミ列	RL縄文→一部貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	やや密、繊維多く含む	褐灰～にぶい橙色
527	109	G3	深鉢	-	-	弧状の細い隆帯、隆帯上に貝殻腹縁によるキザミ。口縁隆帯と接続するものか	RL縄文→ナデ	植物質工具ナデ(擦痕あり)	やや密、繊維含む	にぶい黄褐色
528	109	B区	深鉢	-	-	垂下隆帯。左右から棒状工具で押圧される	LR縄文	ナデ	密	にぶい黄褐色
529	109	B区	小型深鉢	-	-		RL縄文→ナデ	植物質条痕→ナデ	やや密、繊維多く含む	灰黄褐色
530	110	H4	深鉢	-	-	口縁に1条の隆帯とおそらくそこから派生する垂下隆帯。隆帯上に貝殻腹縁(?)によるキザミ。口縁上端にも浅いキザミ	貝殻条痕(一部円弧状をなす)	植物質条痕/ナデ	やや粗、繊維多く含む	にぶい橙～褐灰色
531	110	H3	深鉢	-	-	口縁に断面丸形の隆帯。隆帯上に貝殻腹縁による刺突。口縁上端にも貝殻腹縁による浅いキザミ	貝殻条痕	貝殻条痕	密	橙色
532	110	G1	深鉢	-	-	口縁に隆帯。隆帯上に断面V字形の幅広のキザミ(ヘラ状工具によるものか?)。口縁端部にも細いキザミ	植物質条痕(条溝広く浅い条間狭)	貝殻条痕→口縁ナデ	やや粗、繊維多く含む	灰褐色
533	110	G2	深鉢	-	-	口縁下に断面丸形の隆帯。隆帯上断面レ字形の幅広のキザミ(ヘラ状工具を斜めに押圧したものか)	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→口縁ナデ	密	黒褐色
534	110	B区	深鉢	-	-	口縁端に沿って低い隆帯。途中から口縁から斜下方に垂下。隆帯上に貝殻腹縁による刺突	条痕(貝殻?)→ナデ	軟質の植物質工具ナデ	やや粗、繊維をわずかに含む	黒褐色
535	110	H3	深鉢	-	-	口縁に隆帯。隆帯上に棒状工具の押圧による幅広のキザミ。口縁端にも同様のキザミ	貝殻条痕	貝殻条痕	やや粗、繊維含む	褐灰色
536	110	G3	深鉢	-	-	口縁下に隆帯。隆帯上と口縁上端にヘラ状工具による深い刺突	ナデ	ナデ	密、繊維含む	灰褐色
537	110	G1	深鉢	-	-	口縁に断面丸形の隆帯。隆帯上半裁竹管状の工具による刺突	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	やや粗、繊維多く含む	黒褐色
538	110	B区	深鉢	-	-	断面丸形のやや細目の隆帯。隆帯上に竹管状(?)の工具のキザミ。口縁端にもキザミ	条痕→ナデ	条痕→ナデ	密、繊維含む	にぶい橙色
539	110	H3	深鉢	-	-	口縁下に断面方形の低い隆帯。隆帯上に上下2列の角押文状の押圧(上下で一組の工具。貝殻を利用したものか?)による浅いキザミ。口縁上端にも同じキザミ(1列)	条痕(貝殻?)	ナデ	やや密、繊維含む	黒褐色
540	110	B区	深鉢	-	-	口縁に断面方形の隆帯。口縁上端に貝殻背面の押圧によるキザミ。隆帯上にも貝殻背面の押圧ないシタテ方向の貝殻条痕を施す→この押圧によって隆帯が低い箱形をなす	貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	密	にぶい褐色
541	110	E5	深鉢	-	-	口縁下に隆帯。隆帯上貝殻背面押圧によるキザミ。口縁上端面に円形のキザミ	条痕→ナデ	ナデ、植物質条痕	密、繊維含む	にぶい黄褐色
542	110	G2	深鉢	-	-	口縁下に隆帯。隆帯上にキザミ(ヘラ状工具によるものか?)。口縁上端に細く深いキザミ	残存部ではナデ	貝殻条痕/ナデ	やや粗、繊維含む	黒褐色
543	110	H3	深鉢	-	-	口縁部に隆帯。隆帯上・口縁上端にキザミ	ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	黒褐色
544	110	H3	深鉢	-	-	口縁に隆帯。口縁端から隆帯にかけて貝殻腹縁でキザミ	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	やや粗、繊維多く含む	暗褐色
545	110	G3	深鉢	-	-	口縁に隆帯。口縁端から隆帯上にかけて貝殻腹縁背面側の押圧でキザミ	条痕(原体不明)→ナデ	ナデ	密	明橙色
546	110	G3	深鉢	-	-	口縁下に隆帯。隆帯上と隆帯上側に半裁竹管状工具でキザミ	ナデ	植物質工具ナデ(擦痕あり)	密	暗褐色

表51 縄文土器観察表(5)

掲載番号	図	出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調
547	110	H2	深鉢	-	-	口縁下に細い隆帯。隆帯上に貝殻腹縁によるキザミ	植物質ナデ	植物質工具ナデ	密	にぶい黄橙色
548	110	G3	小型深鉢	-	-	口縁に太い隆帯。隆帯加飾なし	不明(残存部ナデ)	植物質条痕	やや粗、繊維含む	橙色
549	110	E3	深鉢	-	-	口縁下に断面丸形の隆帯。隆帯上半裁竹管状工具の押しきりで深いキザミ	貝殻条痕→ナデ→RL縄文	ナデ	やや密、繊維含む	黒褐色
550	110	I2	小型深鉢	10.8	-	口縁端とその下に2条の隆帯。隆帯上小型の半裁竹管状工具でキザミ	植物質条痕(棒状工具を束ねたものか?)	ナデ	密	にぶい黄褐色
551	110	G1	深鉢	-	-	1条の隆帯。隆帯上とその上下に1条ずつ半裁竹管状工具でキザミ。口縁端にも細いキザミ	ナデ	ナデ	密	灰黄褐色
552	110	E2	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の細目の隆帯。口縁端から隆帯上にかけて貝殻腹縁で刺突	ナデ	ナデ	密	橙色
553	111	H3	深鉢	10.8	-	口縁端に隆帯。隆帯上貝殻腹縁でキザミ。口縁上端面具殻背面押圧によるキザミ(条痕状)→上端に面形成	貝殻条痕	貝殻条痕→植物質工具	やや粗、繊維多く含む	黒褐色
554	111	G2	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。隆帯を指(?)で押し、凹凸をなす隆帯を形成	条痕(貝殻?)→ナデ	軟質植物質工具ナデ	密	にぶい黄褐色
555	111	G4	深鉢	-	-	口縁端部に隆帯。隆帯上に貝殻背面の押し引きによるキザミ	貝殻条痕→ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	にぶい黄褐色
556	111	F4	深鉢	-	-	口縁端に断面丸形の隆帯。接合面小さい	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	密	にぶい黄褐色
557	111	G4	深鉢	-	-	口縁に断面三角形の隆帯。主に下からの押圧で貼付	貝殻条痕	植物質条痕	やや粗、繊維多く含む	褐色
558	111	H3	深鉢	-	-	口縁端に隆帯、隆帯上に貝殻腹縁の刺突によるキザミ	貝殻条痕→ナデ	植物質条痕	やや密、繊維含む	にぶい黄褐色
559	111	G2	深鉢	20.0	-	口縁端に隆帯。上下から交互に押圧	貝殻条痕(→一部ナデ)	ナデ	やや密、繊維含む	黄褐色
560	111	G3	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。隆帯上貝殻背面の押圧でキザミ	植物質条痕(条溝狭く浅い・条間広い)	植物質工具ナデ(外面と同一工具か?)	やや密、繊維含む	黒褐色
561	111	H3	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。隆帯上に貝殻背面の押し引きによるキザミ	条痕(棒状工具?)→ナデ	ナデ	やや密、繊維含む	褐色
562	111	G3	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。隆帯上に横断面V字のキザミ	貝殻条痕→ナデ	ナデ	密、繊維含む	にぶい黄褐色
563	111	G1	深鉢	-	-	口縁に隆帯。隆帯上に貝殻腹縁を斜に刺突・押ししたキザミ	貝殻条痕	ナデ	やや密、繊維多く含む	にぶい褐色
564	111	G3	深鉢	-	-	口縁に隆帯。隆帯上に横断面V～U字のキザミ	(条痕?)ナデ	植物質条痕→ナデ	やや粗、繊維多く含む	にぶい黄褐色
565	111	C2	深鉢	-	-	口縁端付近に隆帯。隆帯に半裁竹管状工具の押しきりでキザミ。口縁上端に浅いキザミ	ナデ	ナデ	やや粗、繊維多く含む	暗褐色
566	111	G3	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。隆帯上に平面D字形の刺突	ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	にぶい黄褐色
567	111	G1・G2	深鉢	-	-	口縁に隆帯。隆帯上に貝殻腹縁による深いキザミ	ナデ	ナデ	密	にぶい黄褐色
568	111	E2	深鉢	-	-	口縁端に断面丸形の細い隆帯。隆帯上と隆帯下に貝殻腹縁で浅いキザミ	貝殻条痕→ナデ	ナデ	やや密、繊維少量含む	にぶい赤褐色
569	111	D2	深鉢	-	-	口縁端に断面丸形隆帯。口縁上端から隆帯上部にかけて断面V字の細いキザミ	貝殻条痕(一部円弧状)	植物質工具ナデ(擦痕・条痕あり)	密、繊維含む	暗赤褐色
570	111	E2	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。粘土紐を一周させて閉じる際に一本に接合せず、下側にずらして貼付け。隆帯上貝殻腹縁によるキザミ	貝殻条痕	ナデ	密、繊維含む	黒褐色
571	111	G2	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。斜下方に垂下。隆帯上横断面V字の深いキザミ	ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	にぶい黄褐色
572	111	G2	深鉢	-	-	口縁端に隆帯。粘土紐を口縁に沿って一周させても束束させず、方側の粘土紐を斜め下方に垂下させて貼付け。隆帯上貝殻腹縁で深いキザミ。口縁上端に浅いキザミ	植物質条痕	植物質条痕	やや密、繊維含む	にぶい黄褐色
573	111	C2	深鉢	-	-	波状口縁に沿って口縁端に隆帯と波頂部から垂下する隆帯。隆帯上に細いキザミを密に入れる	条痕(貝殻か?)→ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	暗褐色
574	111	E2	深鉢	-	-	波状口縁。口縁端に沿う隆帯と波頂部から垂下する隆帯。隆帯上に貝殻腹縁の押しきり状刺突	貝殻条痕	ナデ	密、繊維含む	暗褐色
575	111	C区	深鉢	-	-	口縁下に隆帯。そこから垂直方向と斜位に垂下する隆帯。隆帯上に貝殻腹縁によるキザミ	(貝殻条痕)→ナデ	貝殻条痕→ナデ	密、繊維含む	にぶい黄褐色
576	112	B区	深鉢	-	-	口縁端部に隆帯。隆帯上に浅く広い断面V字のキザミ	軟質植物質工具(茎を束ねたものか?)ナデ	条痕(植物質?)→ナデ	やや粗、繊維多く含む	黒褐色
577	112	A区	深鉢	-	-	口縁端に断面丸形隆帯。隆帯上貝殻背面押圧によるキザミ	RL縄文	ナデ→植物質工具ナデ	やや密、繊維多く含む	にぶい黄褐色
578	112	D2	深鉢	-	-	口唇部上につみ上げるように断面丸形の隆帯貼付。隆帯上に貝殻腹縁(?)による細く深いキザミ	条痕→ナデ	ナデ	密、繊維含む	にぶい黄褐色～褐色
579	112	G1	深鉢	-	-	口縁端に断面丸形の隆帯貼付。貝殻腹縁(?)によるキザミ	植物質条痕/ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	にぶい黄褐色

表52 縄文土器観察表(6)

掲載番号	図	出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調
580	112	G2	深鉢	-	-	口唇部の上につみあげるように断面円形の隆帯を貼付。接合面は極めて小さい。隆帯上に貝殻腹縁(?)によるキザミ	植物質条痕→ナデ	ナデ	やや粗、繊維多く含む	にぶい黄褐色
581	112	H4	深鉢	-	-	口唇部の上につみあげるように断面円形の隆帯を貼付。接合面は極めて小さい。隆帯上に貝殻腹縁(?)によるキザミ	(条痕→)ナデ	ナデ	やや密、繊維多く含む	暗褐色
582	112	H4	深鉢	27.6	-	口縁端にしっかりと隆帯貼付。隆帯上貝殻腹縁によるキザミ	貝殻条痕(円弧状をなす)	ナデ(縦方向のナデ凹みが残る)	密、繊維多く含む、雲母多く含む	褐灰色
583	112	A区	深鉢	-	-	口縁端に断面三角形のやや低い隆帯。隆帯上に貝殻腹縁でキザミ	ナデ	ナデ	密	にぶい赤褐色
584	112	F1	深鉢	-	-	口縁端に断面三角形の隆帯。隆帯上に貝殻腹縁刺突による深いキザミ	条痕(貝殻?)→ナデ	ナデ	密	黒褐色
585	112	H3	深鉢	-	-	口縁端にやや幅広く低目の隆帯。隆帯上に横断面V字形の深いキザミ	植物質条痕	植物質条痕(ハケメ状)	やや粗、繊維多く含む	暗褐色
586	112	H3	深鉢	-	-	口縁端にやや幅広く低目の隆帯。隆帯上に横断面V字形の深いキザミ	植物質条痕	植物質条痕(ハケメ状)	やや粗、繊維多く含む	暗褐色
587	112	H3	深鉢	-	-	口縁に粘土紐をつみあげて貼り付け。口縁端に深いキザミ	ナデ	ナデ	やや密、繊維含む	橙色
588	112	H3	深鉢	-	-	口縁端に肥厚帯状の低目の隆帯。断面V字の細いキザミを施す	植物質条痕→ナデ	植物質条痕	密、繊維含む	黒褐色
589	112	G3	深鉢	-	-	口縁端に大めの隆帯。隆帯の上下から側面を半裁竹管状工具でキザミ。外面条痕調整後、擦糸圧痕	植物質条痕(溝浅、間狭)	ナデ	密	浅黄色
590	112	I3	深鉢	-	-	口縁端に低い隆帯。隆帯上から隆帯下側にかけて貝殻腹縁による浅いキザミ	粗雑な植物質条痕(棒状のものを束ねた工具)	貝殻条痕→ナデ	粗、繊維多く含む、繊維多く含む	灰黄色
591	112	H2	深鉢	-	-	口縁端に低い隆帯。隆帯上から隆帯下側にかけて貝殻腹縁によるキザミ	貝殻条痕	(貝殻条痕→)ナデ	密	褐色
592	112	I3	深鉢	-	-	口縁端に低い隆帯。隆帯上から隆帯下側にかけて貝殻腹縁によるキザミ	貝殻条痕	植物質条痕(ハケメ状)→ナデ	密	灰褐色
593	112	H3	深鉢	-	-	口縁端にわずかに微隆起線文状の盛り上がり	植物質条痕	植物質条痕	やや粗、繊維含む	灰褐色
594	112	H4	深鉢	-	-	細く低い隆帯を口縁端に貼付。隆帯上押圧	ナデ(擦痕あり)	ナデ	やや密、繊維含む	黒褐色
595	113	C2	深鉢	-	-	斜位の細く低い隆帯部分貼り付け。口縁端にキザミ	貝殻条痕	植物質条痕(植物茎?)	やや密	褐色
596	113	G3	深鉢	-	-	低い隆帯を破片最下部に貼付け。隆帯上に半裁竹管を口縁平行方向に刺突してキザミ。上端に刺突	半裁竹管の平行沈線を何度も施し条痕状に整える→一部ナデ	一部半裁竹管による条痕→ナデ	やや密	にぶい黄褐色
597	113	A区	深鉢	-	-	斜に垂下する隆帯を貼付。隆帯上、口縁にキザミ	貝殻条痕	粗いナデ	密	明橙色
598	113	F1	小型深鉢	15.8	-	口縁端外面側に細いキザミ	貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	密、繊維含む	黒褐色
599	113	C2	深鉢	-	-	口縁端外面に細いキザミ	貝殻条痕	植物質工具ナデ(一部ハケメ状条痕)	やや密、繊維含む	にぶい黄褐色
600	113	F6	深鉢	-	-	口縁上端に貝殻背面の押圧によるキザミ。外面条痕調整後LR縄文	植物質条痕(条間狭、粗雑)→一部LR縄文	条痕(植物質工具?条間広)→ナデ	やや粗、繊維含む	黒褐色
601	113	F1	深鉢	-	-	口縁上端に貝殻腹縁によるキザミ	条痕(貝殻)→ナデ	ナデ	密	にぶい黄褐色
602	113	D2	深鉢	-	-	口縁端に断面V字の細いキザミ	(条痕→)ナデ	貝殻条痕→ナデ	密、繊維少量含む	にぶい黄褐色
603	113	H3	深鉢	-	-	口縁上端に貝殻背面の押圧による浅いキザミ	貝殻条痕	条痕(貝殻・植物質工具併用)	やや密、繊維多く含む	褐灰色
604	113	G3	深鉢	-	-	口縁端に浅いキザミ	ナデ	ナデ	密	にぶい黄褐色
605	113	E2	深鉢	-	-	外側から補修孔を穿孔	貝殻条痕(→ナデ)	ナデ	やや密	にぶい黄褐色
606	113	G4	小型深鉢	-	-		貝殻条痕→一部ナデ	貝殻条痕→一部ナデ	やや粗、繊維多く含む	にぶい黄褐色
607	113	E区	小型深鉢	18.3	-		(条痕→)ナデ	(条痕→)ナデ	密	褐灰色
608	113	B区	小型深鉢	8.2	-		LR縄文→ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	黒褐色
609	113	I2	小型深鉢	-	-	口縁部に半裁竹管状の工具による刺突文2列	ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	黒褐色
610	113	G1	深鉢	-	-	横走する隆帯2条と垂下する隆帯。隆帯上に半裁竹管状工具によるキザミ	条痕→ナデ	ナデ	やや粗、繊維含む	にぶい黄褐色
611	113	C2	深鉢	-	-	横走する断面丸形の隆帯。隆帯上に半裁竹管状工具の押し引きによるキザミ	条痕(原体不明)→ナデ	(条痕→)ナデ	やや粗、繊維多く含む	黒褐色
612	113	G3	深鉢	-	-	斜めに垂下する隆帯上に貝殻背面の押圧によるキザミ	条痕(原体不明)→ナデ	ナデ	やや粗、繊維多く含む	明橙色
613	113	C2	深鉢	-	-	斜位の隆帯。隆帯上に半裁竹管による押し引きでキザミ	ナデ	ナデ	やや粗、繊維多く含む	灰黄褐色
614	113	A区	深鉢	-	-	水平方向の隆帯とそれに接続して斜方向に走る隆帯、隆帯上半裁竹管の押し引きによるキザミ	(ナデ)	ナデ	やや粗、繊維含む	褐色

表53 縄文土器観察表(7)

掲載番号	図	出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調
615	113	H3	深鉢	-	-	横走する隆帯。隆帯上に貝殻腹縁(背面側押圧)によるキザミ	ナデ?	ナデ?	やや粗、繊維含む	褐灰色
616	113	F4	深鉢	-	-	2条の細めの隆帯。隆帯上に貝殻腹縁によるキザミ	ナデ	植物質工具ナデ→ナデ	やや密、繊維含む	にぶい黄褐色
617	114	I3	深鉢	-	-	横走する低目の隆帯。隆帯上に貝殻腹縁による密なキザミ	貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	密、繊維多く含む	褐色
618	114	B区	深鉢	-	-	口縁端部に低い隆帯。貝殻腹縁で密にキザミ。口縁部肥厚帯状の外観を呈す	貝殻条痕(→ナデ)	貝殻条痕→ナデ	やや密、繊維多く含む	灰黄褐色
619	114	G1	深鉢	-	-	垂下する隆帯(隆帯上キザミの有無不明)	条痕(条間・条溝やや幅狭。条溝深い。植物質?)	植物質工具ナデ(比較的平滑)	やや粗、繊維含む	灰褐色
620	114	E2	深鉢	-	-	隆帯は粘土紐つまみひねり貼付	ナデ	植物質条痕(溝・間同幅)	密	暗褐色
621	114	H3	深鉢	-	-	破片上端に貝殻腹縁による刺突(押し引き状)	貝殻条痕	植物質工具ナデ(擦痕あり)	やや粗、繊維多く含む	にぶい黄褐色
622	114	G1・G2	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の細く低い隆帯、口縁端から隆帯にかけてキザミ(貝殻腹縁?)→口縁部肥厚帯様の文様帯をなす	貝殻条痕	貝殻条痕→一部ナデ	密	にぶい黄褐色
623	114	G2	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の隆帯貼付。隆帯をはさんで上下2列の貝殻腹縁の連続刺突	貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	密	にぶい黄褐色
624	114	E2	深鉢	-	-	口縁部に肥厚帯。肥厚帯上と破片最下部に貝殻腹縁刺突文列	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕	密、雲母多く含む	明赤褐色
625	114	G3	深鉢	-	-	口縁端に低く幅広の隆帯。隆帯上にRL縄文。隆帯下にも続くか?	不明(ナデ?)	ナデ	やや粗、繊維含む	にぶい黄褐色
626	114	B区	深鉢	-	-	口縁端に低く幅広の隆帯。隆帯上に2列の貝殻腹縁刺突文。口縁部肥厚帯文状を呈する	条痕(貝殻・植物質併用)	ナデ	やや粗、繊維多く含む	黒褐色
627	114	E2	深鉢	-	-	口縁端に低い隆帯。隆帯上に貝殻腹縁の押し引き状刺突によるキザミ	不明	条痕→ナデ	密	にぶい黄褐色
628	114	G1	深鉢	-	-	貝殻腹縁による刺突	貝殻条痕→ナデ	ナデ	密	褐色
629	114	B区	深鉢	-	-	D字形の刺突文。山形を複合させる文様を構成	貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	密	にぶい橙色
630	114	F2	深鉢	-	-	横走する断面半円形の細い隆帯が2条。隆帯上と口縁端部に小型の半裁竹管状工具でキザミ	ナデ	ナデ	密	にぶい橙色
631	114	G4	深鉢	-	-	細い隆帯。隆帯上半裁竹管の刺突でキザミ	RL縄文	ナデ	やや密、繊維含む	にぶい黄褐色
632	114	A区	深鉢	-	-	屈曲部にキザミ	貝殻条痕	貝殻条痕	密	外: 灰褐色 内: 褐色
633	114	G3	深鉢	-	-	口縁下に横走する細い隆帯とそれに接続して垂下する細い隆帯。口縁に細い格子状キザミ列	ナデ	ナデ	密	にぶい黄橙~黒色
634	114	G3	深鉢	-	-	区画文状の隆帯。隆帯に沿って半裁竹管による押し引き	ナデ	ナデ	密	にぶい黄橙~黒色
635	114	F3	深鉢	-	-	半裁竹管による押し引き文	植物質条痕	植物質条痕→ナデ	密	にぶい黄橙~黒色
636	115	C2	深鉢	24.0	-		貝殻条痕→一部ナデ	下半部: 貝殻条痕 上半部: 植物質工具ナデ(擦痕・条痕あり)	やや密、繊維少量含む	褐色
637	115	I3・H3	深鉢	-	-		貝殻条痕	上半: 貝殻条痕→ナデ 下半: 植物質条痕(複数の原体使用)→一部貝殻条痕	密、繊維含む	にぶい橙色
638	115	I2	深鉢底部	-	-		ナデ	ナデ	やや密	灰褐色
639	115	I1	深鉢底部	-	-		(条痕)→ナデ	(条痕)→ナデ	密、繊維含む、雲母多く含む	にぶい橙~褐灰色
640	115	G3	深鉢底部	-	-		ナデ	ナデ	粗、繊維多く含む	黒褐色
641	115	A区	深鉢底部	-	-		ナデ	ナデ	やや粗	にぶい黄褐色
642	115	H3	深鉢底部	-	-		条痕(貝殻?)→ナデ	条痕→ナデ	やや粗、繊維多く含む	黒褐色
643	115	H4	深鉢底部	-	6.6		貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	やや粗、繊維多く含む	にぶい褐色
644	115	A区	深鉢底部	-	-		貝殻条痕→一部ナデ	貝殻条痕→一部ナデ	密	にぶい黄褐色
645	116	B区	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の隆帯。その上下に爪形刺突列	ナデ	ナデ	密	灰褐色
646	116	G3	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の隆帯。その上下に爪形刺突列	ナデ	ナデ	密	にぶい褐色
647	116	H3	深鉢	-	-	口縁下に隆帯(剥落)。その上下に爪形刺突文列	ナデ	ナデ	密	にぶい褐色
648	116	F1	深鉢	-	-	爪形文列	ナデ	ナデ	密	赤褐色

表54 縄文土器観察表(8)

掲載 番号	図	出土 位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調
649	116	E2	深鉢	-	-	口縁端下に幅1cmほどの凹線。貝殻背面の押しきによる刺突文列	ナデ	ナデ	やや密	にぶい黄褐色
650	116	A区	深鉢	-	-	口縁に粘土帯貼付。貝殻腹縁でキザミ		ナデ	密	にぶい橙～灰褐色
651	116	C2	深鉢	-	-	内面に隆帯。隆帯上、外面にLR縄文。口縁上端にキザミ	LR縄文	ナデ	密	にぶい黄褐色
652	116	C2	深鉢	-	-	口縁部に幅広の粘土帯。低い肥厚帯をなす	RL縄文	植物質工具ナデ(かすれたハケメ状)	やや密	にぶい黄褐色
653	116	G3	深鉢	-	-	2条の平行沈線(竹管文)	ナデ→LR縄文(縦回転)	ナデ	密	にぶい黄色
654	116	G1	深鉢底部	-	-		撚糸文	ナデ	密	にぶい黄褐色
655	116	A区	深鉢	-	-		無節縄文(L)	ナデ	密	黒褐色
656	117	E区	浅鉢	-	-	RL縄文→2本沈線で区画文→沈線間を残して磨消	ミガキ	ミガキ	密	にぶい橙色
657	117	A区	深鉢	-	-	波状口縁に沿う3本の浅い沈線と波頂部から垂下する2本沈線で描かれた楕円文(?)→沈線間にRL縄文	ミガキ	ミガキ	密	にぶい黄褐色
658	117	C4	深鉢	-	-	波状口縁波頂部。突出部の両側と口縁下に沈線。沈線で区画された部分(突出部とその下の区画)にLR縄文	ミガキ	条痕、ナデ	密	にぶい黄褐色
659	117	N11	?	-	-	2条の沈線と沈線間にRL縄文	ミガキ	ミガキ	密	にぶい橙色
660	117	E区	?	12.6	-	口縁下に口縁に沿う深い沈線、口縁、沈線間にLR縄文	ミガキ?(風化著しい)	ミガキ	密	にぶい黄褐色
661	117	D5	浅鉢	-	-	破片最下部に沈線、波状口縁	ミガキ	ミガキ	密	にぶい褐色
662	117	E区	底部	-	-	破片上端に横走する沈線	RL縄文 底部:ミガキ	ミガキ	密	にぶい橙色
663	117	H4	深鉢	-	-	口縁端肥厚帯にRL縄文→横走する1条の沈線。肥厚帯下にも沈線	ミガキ	ミガキ	密	橙色
664	117	G1・G2	深鉢	-	-		無節縄文(R)	ナデ	密	にぶい橙色
665	117	G1	深鉢	-	-	外面2条の沈線。一部LR縄文	細密条痕	細密条痕	密	明黄褐色
666	117	B区	深鉢	-	-	細い条線	ナデ	ナデ	密	橙色
667	117	B区	深鉢	-	-	波頂部の突起部。口縁に沿って隆帯、頂部裏にも回る。多条の沈線。沈線内片側に刺突。一部RL縄文	ナデ?	ナデ	密	にぶい黄褐色
668	118	E5	浅鉢	-	-	沈線→沈線区画内にRL縄文	ミガキ	ミガキ	密	にぶい黄褐色
669	118	G4	深鉢?	-	-	2本の沈線間に充填縄文(RL)	ナデ	ナデ	密	にぶい黄褐色
670	118	G3	深鉢?	-	-	2条の沈線間に充填縄文(RL)	風化のため不明	風化のため不明	密	橙色
671	118	H3	?	-	-	横走する複数の沈線。最上部の沈線間にLR縄文充填	ミガキ	ミガキ	密	灰黄褐色
672	118	B区	?	-	-	口縁下に1条の沈線。沈線下LR縄文(異方向回転)	口縁ミガキ	ミガキ	密	橙色
673	118	G4	深鉢?	-	-	擬縄文→沈線	ナデ、ミガキ	ミガキ	密	にぶい黄褐色
674	118	G1	深鉢?	-	-	口縁に深い沈線	ナデ	ナデ	密	浅黄褐色
675	118	A区	深鉢?	-	-	2条の深い沈線。口縁平行部分から派生して下方にのびる。逆J字?沈線間にLR縄文	ナデ/ミガキ	ナデ/ミガキ	密	にぶい黄褐色
676	118	G4	深鉢?	-	-	2条の太く深い沈線。口縁部沈線間充填縄文(LR)	ナデ	ナデ	密	にぶい黄褐色
677	118	B区	深鉢	-	-	口縁上端に沈線。外面口縁部に3条以上の沈線→LR縄文	LR縄文	ナデ	密	にぶい黄褐色
678	118	E7	深鉢	-	-	浅い沈線。沈線区画内にRL縄文。最の上の横走沈線内に円形の深い刺突	ナデ	ナデ	密	にぶい黄褐色
679	118	E5	深鉢	-	-	横走する沈線と沈線間にLR縄文。下段の縄文帯内に上弦の連弧文(沈刻)	ミガキ	不明	密	明赤褐色
680	118	G3	深鉢	-	-	横走する沈線とそれから派生して弧を描きながら垂下する沈線。沈線間にRL縄文	ミガキ	ミガキ	密	にぶい黄褐色
681	118	E2	深鉢	-	-	横走する沈線と沈線間にRL縄文	RL縄文	ナデ	密	にぶい黄褐色
682	118	C2	深鉢	-	-	RL縄文→沈線	RL縄文	ナデ	密	淡黄色
683	118	A区	深鉢	-	-	浅い沈線で渦巻文。沈線間にLR縄文。破片下端に横走沈線	ミガキ	ナデ	密	にぶい黄褐色
684	118	B区	?	-	-	沈線で渦巻文。沈線間に一部LR縄文	ナデ	ナデ	密	にぶい黄褐色
685	118	B区	深鉢	-	-	多条の沈線→LR縄文	ナデ	ナデ	密	明赤褐色
686	118	G1	深鉢	-	-	2条×2の平行沈線(半裁竹管?)。沈線間に米粒形の小さな刺突(擬縄文?)	ナデ	ナデ	密	にぶい橙色
687	118	C2	?	-	-	口縁端に浅いきざみ。その下に浅い沈線。下に無文部をはさんで巻貝貝殻回転による擬縄文	ミガキ	ミガキ	密	黒褐色
688	118	C2	?	-	-	矢羽根状沈線	丁寧なナデ	条痕(貝殻?)→ナデ	密	褐灰色

表55 縄文土器観察表(9)

掲載番号	図	出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調
689	118	G1	浅鉢	-	-	口縁に突起。内面に粘土紐で渦巻き文	ナデ/ミガキ	ナデ	密	にぶい橙色
690	118	D2	浅鉢	-	-	屈曲部に2条の沈線。沈線間にRL縄文	ナデ(?)	ナデ(?)	密	浅黄橙色
691	118	C2	浅鉢	-	-	屈曲部に2条の平行沈線。沈線付近にRL縄文	ナデ	ナデ	密	浅黄橙色
692	118	G4	浅鉢	-	-	屈曲部に浅いきざみ。その上方に浅い沈線と沈線内刺突。さらに上方にLR縄文	屈曲部上:ミガキ 屈曲部下:ナデ	ナデ	密	にぶい黄橙色
693	118	G1・G2	浅鉢	-	-	屈曲部にRL縄文。縄文部に赤彩	ミガキ	ミガキ	密	にぶい黄橙色
694	118	H3	注口土器?	-	-	横走する沈線と、沈線による渦巻き文	ミガキ	ナデ	密	浅黄色
695	118	G3	注口土器?	-	-	外面に浅い沈線と細かい条線	ミガキ	ナデ	密	灰色
696	118	H3	注口土器?	-	-	細かい条線	ミガキ	ナデ	密	黄灰色
697	119	C2	深鉢	-	-	口縁端外面の肥厚部にRL縄文。補修孔	ミガキ	ミガキ	密	灰黄褐色
698	119	G3	深鉢	-	-	口縁端外面の肥厚部にRL縄文	ナデ?	ナデ?	密	橙色
699	119	G3	深鉢	-	-	口縁端外面の肥厚部にRL縄文	ナデ	ナデ	やや密	橙へにぶい黄橙色
700	119	C2	深鉢	-	-	口縁端外面にRL縄文	ナデ	ナデ	密	にぶい黄橙色
701	119	A区	深鉢	-	-	口縁端外面の肥厚部にLR縄文	ナデ	ナデ	密	にぶい橙色
702	119	C2	深鉢	-	-	口縁端外面にRL縄文	ナデ	ナデ	密	にぶい黄橙へ褐灰
703	119	C2	深鉢	-	-	口縁端外面の肥厚部にRL縄文	ミガキ	ミガキ	密	にぶい橙色
704	119	C2	深鉢	-	-	口縁端外面にRL縄文	ナデ	ミガキ	密	灰黄褐色
705	119	G4	小型鉢	-	-	口縁端外面にLR縄文	ミガキ	ミガキ	密	橙色
706	119	G1・G2	深鉢	-	-	口縁端外面の肥厚部に無節縄文(L)	ミガキ	ミガキ	密	にぶい褐色
707	119	G3	深鉢	-	-	口縁端外面にRL縄文。口縁に低い突出部をもち、内面に円形の刺突	ナデ	ナデ	密	にぶい橙色
708	119	F1	深鉢	-	-	口縁端外面肥厚部にRL縄文。内面に2条の平行沈線。沈線間は縄文ナデ消し	ナデ	ナデ	密	黒褐色
709	119	A区	深鉢	-	-	口縁内面に沈線。沈線の上から口縁上端にかけてLR縄文	ナデ	ナデ	密	にぶい黄橙へ褐灰色
710	119	D区	深鉢	-	-	口縁内面に沈線。口縁端へ沈線間にLR縄文	ナデ	ナデ	やや密、雲母多く含む	にぶい褐色
711	119	H3	深鉢	-	-	口縁内部に沈線。口縁端へ沈線間にRL縄文	ナデ/ミガキ	丁寧なナデ	密	灰黄褐色
712	119	G3	深鉢	-	-		頭部:ミガキ 肩部:RL縄文	ミガキ	密	にぶい橙色
713	119	C2	深鉢	-	-	肩部羽状縄文。屈曲部に沈線	ナデ	ナデ	密	にぶい黄橙
714	119	G3	深鉢	-	-	外面赤彩	羽状縄文	丁寧なナデ	密	にぶい黄橙色
715	120	H3	深鉢or浅鉢	-	-	口縁内面に沈線。沈線上の口縁端に浅いきざみ	ミガキ	ミガキ	密	灰黄褐色
716	120	H3	深鉢or浅鉢	-	-	口縁内面に沈線。沈線上の口縁端に浅いきざみ	ミガキ	ミガキ	密	にぶい橙色
717	120	H3	深鉢or浅鉢	-	-	口縁内面に沈線。沈線上の口縁端に浅いきざみ	ミガキ	ミガキ	密	黒褐色
718	120	B区	浅鉢	-	-	口縁内面に沈線。沈線上の口縁端に浅いきざみ	ミガキ	ミガキ	密	暗褐へ橙色
719	120	H3	深鉢or浅鉢	-	-	口縁内面に沈線。沈線上の口縁端に浅いきざみ	ミガキ	ミガキ	密	にぶい黄橙灰色
720	120	H3	深鉢?	-	-	外面に粗い凹線。口縁内面に浅い沈線と端部にキザミ	ナデ	ナデ	密	橙色
721	120	B区	深鉢?	-	-	外面に二条の凹線。口縁内面に沈線と端部にキザミ	ナデ	ナデ	密	にぶい黄色
722	120	C2	浅鉢?	-	-	外面に平行する粗雑な凹線	ミガキ	ナデ/ミガキ	密	にぶい黄橙色
723	120	B区	深鉢or浅鉢	-	-	外面に平行する凹線	ミガキ	ナデ→ミガキ	密	赤褐色
724	120	H3	深鉢or浅鉢	-	-	外面に平行する凹線	ナデ	植物質工具ナデ→ナデ	密	明暗褐色
725	120	D2	深鉢or浅鉢	-	-	外面に平行する凹線	ミガキ	ミガキ	密	
726	120	C2	深鉢or浅鉢	-	-	外面に平行する凹線	ミガキ	ナデ	密	
727	120	G3	浅鉢	39.0	-	口縁端と屈曲部に斜めキザミ。その間に4条の凹線	ミガキ	ミガキ	密	黒へ灰黄色
728	120	G3	浅鉢	-	-	屈曲部にキザミ。その上に凹線	ミガキ	ミガキ	密	にぶい黄橙色
729	120	G4	浅鉢	-	-	屈曲部に浅いきざみ。その上に連続刺突	ナデ(丁寧)	ナデ	密	にぶい黄褐色
730	120	07	注口土器?	-	-	口縁に輪状の粘土を貼付けた突起部。口縁屈曲部上に沈線	ナデ	ナデ	密	にぶい黄橙色
731	120	I2	橋状把手	-	-	縁部に沿って凹線。把手付け根部に凹点	ミガキ	ナデ、ミガキ	密	灰黄へ灰色
732	120	C4	深鉢?	-	-	削りとったような深く太い沈線がやや蛇行しながら平行して横走する	ナデ	ケズリ状調整	密	赤褐色

表56 縄文土器観察表(10)

掲載 番号	図	出土 位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調
733	120	F3	?	-	-	外面に粘土の貼付と沈線による渦巻文。その横に円形刺突のある瘤状突起。内面にも円形刺突。	ナデ	ナデ	密	にぶい黄 橙色
734	121	G3	粗製深鉢	-	-		工具ナデ→丁寧な ナデ	植物質工具による 粗いナデ(擦痕・条 痕あり)	密	浅黄色
735	121	B区	粗製深鉢	-	-		植物質条痕→粗い ナデ	貝殻条痕→ナデ	密	にぶい橙 ～橙色
736	121	B区	粗製深鉢	-	-		ケズリ状	ナデ	密	明黄褐色
737	121	G3	粗製深鉢	-	-		ナデ	条痕(条溝広・条間 狭・植物質工具 か?)	密	灰黄色
738	121	H3	粗製深鉢	-	-		条痕(植物質?)	条痕→丁寧なナデ	密	橙色
739	121	F4	粗製深鉢	-	-		丁寧なナデ	条痕(ハケ目状)	密	にぶい黄 橙色
740	121	D3	粗製深鉢	-	-		貝殻条痕	貝殻条痕	密	にぶい黄 褐色
741	121	C2	粗製深鉢	-	-		ケズリ状→粗いナ デ	ナデ	密	浅黄褐色
742	121	A区	粗製深鉢	-	-		粗いナデ	粗いナデ	密	暗褐色
743	121	C2	粗製深鉢	-	-		条痕(貝殻?)	条痕(貝殻?)	密	にぶい黄 橙色
744	121	C2	粗製深鉢	-	-		ナデ	ナデ	密	浅黄褐色
745	122	G3	粗製深鉢	-	-		貝殻条痕	ミガキ	密	にぶい黄 橙色
746	122	A区	粗製深鉢	-	-		植物質工具による 粗いナデ(条痕・擦 痕あり)	植物質工具ナデ	密	灰褐色
747	122	H3	粗製深鉢	-	-		条痕(条溝広い)	条痕(条溝広い)	密	橙色
748	122	D3	粗製深鉢	-	-		貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	密	浅黄色
749	122	E5	粗製深鉢?	-	-	微隆起線状の粘土の盛り上がり波頂部から垂下する	ミガキ	ミガキ	密	灰褐色
750	122	G3	粗製深鉢	-	-		粗いナデ	丁寧なナデ	密	にぶい黄 橙色
751	122	C2	粗製深鉢	-	-		軽いケズリ状	丁寧なナデ	密	にぶい黄 橙色
752	122	D2	粗製深鉢	-	-		ミガキ	ナデ→ミガキ	密	灰黄褐色
753	122	C2	粗製深鉢	-	-		ケズリ状→粗いナ デ	丁寧で平滑なナデ	密	にぶい橙 色
754	122	C2	底部	-	6.0		ナデ。底部ミガキ	ナデ	密	黄褐色
755	122	H4	底部	-	6.2		ナデ	ナデ	密	にぶい黄 橙色
756	122	H3	底部	-	7.0		ナデ	ナデ	密	橙色
757	122	G3	底部	-	7.0	底部に網代圧痕	ミガキ	ナデ	密	にぶい黄 色
758	122	D2	底部	-	6.3		ミガキ	貝殻条痕、底部ナ デ	密	にぶい黄 橙色
759	122	F1	底部	-	5.4		ナデ、底部ミガキ	ナデ	密	赤橙色
760	122	G3	底部	-	6.4		ナデ	ナデ	やや密	にぶい黄 褐色
761	122	G3	底部	-	5.8		ナデ	ナデ	やや密	にぶい黄 褐色
762	122	H2	底部	-	6.6		ミガキ	(貝殻条痕→)ナデ	密	明黄褐色
763	122	A区	底部	-	5.2		丁寧なナデ	貝殻条痕	密	にぶい黄 褐色
764	122	H4	底部	-	5.2		ナデ	条痕(貝殻?)→ナ デ	密	にぶい黄 褐色
765	122	C2	底部	-	7.3		ナデ 底部：ミガキ	ミガキ	密	にぶい黄 褐色
766	122	H3	底部	-	5.4	ドーナツ状に粘土を貼付け	ナデ	ナデ	密	褐色
767	122	H3	底部	-	4.8		ナデ	ナデ	密	にぶい橙 色
768	123	C2	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の刻目突帯	丁寧なナデ	ナデ	やや密、雲母 若干含む	にぶい黄 褐色
769	123	B区	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の刻目突帯	ナデ	ナデ	密	灰色
770	123	D3	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の刻目突帯	ナデ	ナデ	密	褐色
771	123	C2	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の刻目突帯	ナデ	ナデ	やや粗、雲母 多く含む	にぶい黄 褐色
772	123	E4	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の刻目突帯			密	褐色
773	123	D3	浅鉢変容壺	-	-	口縁下に断面三角形の刻目突帯	ナデ	ナデ	やや粗、雲母 含む	にぶい黄 褐色
774	123	N8	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の刻目突帯	ナデ	ナデ	密	明黄褐色
775	123	A区	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の刻目突帯	ナデ	ナデ	密	明褐色
776	123	D4	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の刻目突帯	ナデ	ナデ	密	明赤褐色
777	123	N7	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の刻目突帯	ナデ	ナデ	密	にぶい橙 色
778	123	G2	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の刻目突帯	ナデ	ナデ	密	灰黄褐色

表57 縄文土器観察表(11)

掲載 番号	図	出土 位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	施文・特徴	外面調整	内面調整	胎土	色調
779	123	A区	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の刻目突帯。突帯下にもキザミ	ナデ	ナデ	やや粗、雲母含む	浅黄色
780	123	C4	深鉢	-	-	口縁端に断面三角形の刻目突帯	ナデ	ナデ	やや粗、雲母含む	浅黄色
781	123	H3	深鉢	-	-	口縁端に断面三角形突帯。突帯の下側から棒状工具で押し上げるように押圧してキザミ	ナデ	ナデ	やや密、雲母含む	灰黄～黒褐色
782	123	E5	深鉢	-	-	口縁端に断面三角形の刻目突帯	擦痕の残るナデ	ナデ	密	灰黄色
783	123	A区	深鉢	-	-	口縁端に断面三角形の刻目突帯。突帯下にもキザミ	ナデ	ナデ	密	暗灰黄～黄灰色
784	123	B区	深鉢	31.0	-	口縁端に断面三角～丸形の刻目突帯	(ケズリ)ナデ	ナデ	密	淡黄色
785	123	G1・G2	深鉢	-	-	口縁端部に細く深いキザミ施す断面D字の突帯	ナデ	ナデ	密	にぶい橙色
786	123	C区	深鉢	42.0	-	口縁端部よりわずかに下に断面三角～半円形の無刻目突帯	斜位のナデ	ヨコナデ	密	褐灰色
787	123	L7	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の無刻目突帯	ナデ	ナデ	やや密	にぶい赤褐色
788	123	A区	深鉢	-	-	口縁端に断面三角形の無刻目突帯	ナデ	ナデ	密	浅黄色
789	123	E6	深鉢	-	-	口縁端に断面三角形の無刻目突帯	ナデ	ナデ	やや密、雲母含む	にぶい黄褐色
790	124	J6	深鉢	34.0	-	口縁端よりわずかに下に断面三角形の無刻目突帯	ナデ	ナデ	密	黒褐色
791	124	M7	深鉢	-	-	口縁部に幅広で低い無刻目突帯	ナデ	ナデ	密	橙色
792	124	O8	深鉢	-	-	口縁端に断面三角形の無刻目突帯	ナデ	ナデ	密	灰黄褐色
793	124	N7	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の甲高の無刻目突帯	工具ナデ	工具ナデ	密	褐色
794	124	N7	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の甲高の無刻目突帯	ナデ	ナデ	密	にぶい橙色
795	124	E7	深鉢	-	-	口縁端部に断面三角形の無刻目突帯	ナデ	ナデ	密、雲母含む	にぶい黄褐色
796	124	N7	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の無刻目突帯	工具ナデ(ハケメ状条痕)	ナデ	密	淡黄色
797	124	E区	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の甲高の無刻目突帯	ナデ	ナデ	密	灰黄色
798	124	D2	深鉢	-	-	口縁下に断面三角形の無刻目突帯	ナデ	ナデ	密	にぶい黄褐色
799	124	E4	深鉢	-	-	口縁端に断面三角形の無刻目突帯	擦痕の残る粗いナデ、突帯上ナデ	ナデ	密	褐灰色

表58 玉類観察表

掲載 番号	図	遺構 層位	種類	材質	法量			色調	備考
					最大径 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)		
B1	77	竪穴住居6南東	小玉	緑色変成岩?	1.00	0.78	0.834	緑色	
B2	77	竪穴住居6北西検出中	小玉	ガラス	0.72	0.60	0.329	スカイブルー	
B3	77	竪穴住居6南東	小玉	ガラス	0.34	0.19	0.026	コバルトブルー	
B4	77	竪穴住居6南西	小玉	ガラス	0.35	0.26	0.040	コバルトブルー	
B5	77	竪穴住居6北西	小玉	ガラス	0.34	0.30	0.045	コバルトブルー	
B6	77	竪穴住居6P2	小玉	ガラス	0.40	0.19	0.040	コバルトブルー 淡	
B7	77	竪穴住居6南西	小玉	ガラス	0.41	0.28	0.054	コバルトブルー 淡	
B8	77	竪穴住居6南西	小玉	ガラス	0.40	0.24	0.040	コバルトブルー	
B9	77	竪穴住居6南東	小玉	ガラス	0.33	0.17	0.014	コバルトブルー	欠損
B10	77	竪穴住居6南西	小玉	ガラス	0.38	0.36	0.060	スカイブルー	
B11	77	竪穴住居6北東	小玉	ガラス	0.30	0.22	0.027	スカイブルー	
B12	77	竪穴住居6南東	小玉	ガラス	0.40	0.27	0.046	スカイブルー	
B13	77	竪穴住居6北西	小玉	ガラス	0.34	0.30	0.037	スカイブルー	
B14	77	竪穴住居6北西	小玉	ガラス	0.44	0.20	0.042	スカイブルー	
B15	77	竪穴住居6北西	小玉	ガラス	0.38	0.36	0.055	スカイブルー	
B16	77	竪穴住居6北西	小玉	ガラス	0.38	0.24	0.043	スカイブルー	
B17	77	竪穴住居6南西	小玉	ガラス	0.43	0.20	0.042	スカイブルー	
B18	77	竪穴住居6南西	小玉	ガラス	0.34	0.18	0.026	スカイブルー	
B19	77	竪穴住居6南西	小玉	ガラス	0.40	0.25	0.035	スカイブルー	
B20	83	土坑21	小玉	ガラス	0.34	0.33	0.046	コバルトブルー	
B21	83	土坑21北西	小玉	ガラス	0.42	0.25	0.043	スカイブルー	
B22	83	土坑21南西	小玉	ガラス	0.35	0.24	0.030	スカイブルー	
B23	83	土坑21	小玉	ガラス	0.39	0.38	0.073	スカイブルー	
B24	83	土坑21	小玉	ガラス	0.30	0.22	0.009	スカイブルー	欠損
B25	83	土坑21西ベルト下層	小玉	ガラス	0.29	0.15	0.009	スカイブルー	欠損

表59 石器計測表(1)

No.	図	出土位置	器種	石材	法量				No.	図	出土位置	器種	石材	法量			
					最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)
S1	15	第2調査地	石鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.2	0.4	S81	130	E2	石鏃	黒曜石	2.1	1.9	0.5	0.8
S2	15	第2調査地	石鏃	黒曜石	1.6	1.6	0.4	0.5	S82	130	E2	石鏃	黒曜石	2.5	1.7	0.5	1.0
S3	15	第2調査地	石鏃	黒曜石	1.6	1.8	0.6	1.1	S83	130	E区	石鏃	黒曜石	2.8	1.8	0.4	0.9
S4	15	第2調査地	石鏃	黒曜石	1.6	1.6	0.5	0.7	S84	130	D3	石鏃	黒曜石	1.7	1.55	0.3	0.5
S5	15	第2調査地	石鏃	黒曜石	2.5	1.4	0.4	0.8	S85	130	B区	石鏃	黒曜石	2.1	1.9	0.5	1.1
S6	15	第2調査地	石鏃	黒曜石	2.2	2.0	0.4	1.0	S86	130	C2	石鏃	黒曜石	2.0	1.15	0.4	0.7
S7	15	第2調査地	石鏃	黒曜石	1.7	1.1	0.4	0.4	S87	130	I3	石鏃	黒曜石	2.4	1.5	0.4	0.4
S8	15	第2調査地	石鏃	硬質安山岩	1.8	1.2	0.3	0.6	S88	130	B区	石鏃	黒曜石	2.5	1.9	0.4	0.9
S9	15	第2調査地	石鏃	硬質安山岩	2.2	1.9	0.4	0.8	S89	130	E2	石鏃	黒曜石	2.7	2.15	0.45	1.2
S10	15	第2調査地	ブランク	硬質安山岩	4.6	2.7	2.0	29.9	S90	130	G3	石鏃	黒曜石	2.5	2.1	0.5	1.3
S11	15	第2調査地	スクレイパー	黒曜石	1.5	2.8	0.7	2.7	S91	131	H3	石鏃	黒曜石	2.6	1.85	0.7	1.5
S12	15	第2調査地	スクレイパー	黒曜石	2.65	2.7	0.9	5.9	S92	131	D3	石鏃	黒曜石	2.7	2.0	0.5	1.4
S13	15	第2調査地	楔形石器	黒曜石	2.9	2.5	1.2	6.5	S93	131	D2	石鏃	黒曜石	2.9	1.9	0.5	1.5
S14	15	第2調査地	楔形石器	黒曜石	3.15	2.85	1.7	11.8	S94	131	G2	石鏃	黒曜石	2.2	2.0	0.5	1.6
S15	15	第2調査地	楔形石器	黒曜石	2.47	1.53	0.8	2.4	S95	131	P10	石鏃	黒曜石	2.5	1.2	0.3	0.5
S16	15	第2調査地	楔形石器	黒曜石	2.4	2.0	0.8	2.9	S96	131	I1	石鏃	黒曜石	2.3	1.3	0.4	0.8
S17	16	第2調査地	打製石斧	粗粒安山岩	10.1	5.9	2.1	132.8	S97	131	I2	石鏃	黒曜石	1.9	1.0	0.4	0.4
S18	16	第2調査地	石鏃	粗粒安山岩	7.3	6.1	2.0	149	S98	131	H3	石鏃	黒曜石	2.4	1.65	0.5	0.8
S19	46	竪穴2	敲石	粗粒安山岩	11.6	5.8	4.1	385	S99	131	M7	石鏃	黒曜石	3.2	1.4	0.6	1.4
S20	72	竪穴住居4	敲石	粗粒安山岩	7.9	4.4	2.2	131	S100	131	D2	石鏃	黒曜石	3.2	1.95	0.45	1.3
S21	72	竪穴住居4	磨石	粗粒安山岩	5.0	4.7	3.5	164	S101	131	G5	石鏃	黒曜石	3.1	1.8	0.4	1.3
S22	72	竪穴住居4	敲石	粘板岩	12.4	3.8	2.1	158	S102	131	A区	石鏃	黒曜石	2.3	1.5	0.3	0.7
S23	72	竪穴住居4	敲石	粗粒安山岩	8.7	5.3	2.9	165	S103	131	C1・D1	石鏃	黒曜石	2.8	1.7	0.65	1.8
S24	77	竪穴住居6	敲石	粗粒安山岩	13.1	9.6	5.7	957	S104	131	C2	石鏃	黒曜石	3.3	2.0	0.4	2.0
S25	85	土坑22	敲石	粗粒安山岩	5.8	4.1	3.3	113	S105	131	D2	石鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.35	0.9
S26	85	土坑22	敲石	粗粒安山岩	9.8	7.9	5.0	540	S106	131	H4	石鏃	黒曜石	1.5	1.5	0.5	0.9
S27	88	土坑25	石鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.5	1.1	S107	131	D3・E3	石鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.4
S28	89	土坑26	スクレイパー	黒曜石	3.0	3.8	0.6	6.5	S108	132	G3	石鏃	黒曜石	1.8	1.6	0.4	0.6
S29	89	土坑26	石鏃	硬質安山岩	1.7	1.6	0.5	0.7	S109	132	F3	石鏃	黒曜石	1.9	1.6	0.5	1.5
S30	128	E区	石鏃	黒曜石	1.2	1.2	0.3	0.3	S110	132	O8	石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.8
S31	128	M9	石鏃	黒曜石	1.4	1.2	0.3	0.3	S111	132	A区	石鏃	黒曜石	2.1	1.8	0.6	1.4
S32	128	N7	石鏃	黒曜石	1.0	1.0	0.3	0.1	S112	132	G3	石鏃	黒曜石	2.2	2.1	0.7	1.9
S33	128	M8	石鏃	黒曜石	0.9	1.1	0.2	0.1	S113	132	H3	石鏃	黒曜石	1.2	1.45	0.4	0.4
S34	128	M8	石鏃	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.6	S114	132	M9	石鏃	硬質安山岩	1.4	1.4	0.3	0.6
S35	128	A区	石鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.3	0.3	S115	132	H3	石鏃	硬質安山岩	2.0	1.6	0.3	0.8
S36	128	G1	石鏃	黒曜石	1.6	1.8	0.3	0.3	S116	132	M7	石鏃	硬質安山岩	2.0	1.5	0.3	0.7
S37	128	C区	石鏃	黒曜石	1.2	1.4	0.4	0.5	S117	132	O7・O8	石鏃	硬質安山岩	1.6	1.1	0.2	0.3
S38	128	M7	石鏃	黒曜石	1.6	1.6	0.4	0.6	S118	132	B区	石鏃	硬質安山岩	1.9	1.3	0.4	0.7
S39	128	N8	石鏃	黒曜石	1.8	1.9	0.4	0.9	S119	132	P11	石鏃	硬質安山岩	2.1	1.2	0.3	0.5
S40	128	L7	石鏃	黒曜石	1.9	1.7	0.4	0.9	S120	132	D区	石鏃	硬質安山岩	2.4	1.7	0.6	2.2
S41	128	G3	石鏃	黒曜石	1.2	1.7	0.35	0.3	S121	132	D区	石鏃	硬質安山岩	3.0	2.1	0.3	1.6
S42	128	D2	石鏃	黒曜石	1.1	1.4	0.3	0.3	S122	132	D2	石鏃	硬質安山岩	2.1	1.4	0.4	1.2
S43	128	B区	石鏃	黒曜石	1.4	1.6	0.3	0.3	S123	132	N7	石鏃	硬質安山岩	1.8	2.1	0.4	0.9
S44	128	M7	石鏃	黒曜石	1.6	1.5	0.4	0.4	S124	132	M7	石鏃	硬質安山岩	1.8	1.6	0.3	0.7
S45	128	F3	石鏃	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.3	S125	132	N10	石鏃	硬質安山岩	2.0	1.6	0.3	0.8
S46	128	B区	石鏃	黒曜石	1.75	1.5	0.3	0.3	S126	132	A区	石鏃	硬質安山岩	1.6	1.7	0.3	0.4
S47	128	C2	石鏃	黒曜石	1.2	1.4	0.4	0.4	S127	132	L8	石鏃	硬質安山岩	1.4	1.3	0.2	0.4
S48	128	I1	石鏃	黒曜石	1.5	1.6	0.4	0.7	S128	132	E2	石鏃	硬質安山岩	1.5	1.6	0.4	0.5
S49	128	N8	石鏃	黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.5	S129	133	M10・N10	石鏃	硬質安山岩	2.0	1.7	0.3	0.6
S50	128	G3	石鏃	黒曜石	1.8	1.8	0.5	0.9	S130	133	N8	石鏃	硬質安山岩	2.2	1.7	0.5	1.2
S51	128	E2	石鏃	黒曜石	1.8	1.8	0.5	0.8	S131	133	B区	石鏃	硬質安山岩	2.0	1.7	0.25	0.6
S52	128	A区	石鏃	黒曜石	2.2	1.7	0.5	0.5	S132	133	M10・N10	石鏃	硬質安山岩	1.5	1.4	0.3	0.6
S53	128	N7	石鏃	黒曜石	2.2	2.3	0.5	1.4	S133	133	D3	石鏃	硬質安山岩	1.8	1.5	0.4	0.6
S54	129	E5	石鏃	黒曜石	2.2	1.5	0.45	0.6	S134	133	L7・L8	石鏃	硬質安山岩	2.4	1.6	0.3	0.8
S55	129	J8	石鏃	黒曜石	2.15	1.7	0.4	0.7	S135	133	N8	石鏃	硬質安山岩	2.1	1.9	0.4	1.0
S56	129	H3	石鏃	黒曜石	1.7	1.45	0.5	0.6	S136	133	P11	石鏃	硬質安山岩	2.4	1.7	0.5	1.3
S57	129	E2	石鏃	黒曜石	1.65	2.05	0.5	1.2	S137	133	M7	石鏃	硬質安山岩	2.0	2.2	0.3	1.7
S58	129	E5	石鏃	黒曜石	1.4	2.3	0.4	0.3	S138	133	G3	石鏃	硬質安山岩	1.7	1.2	0.2	0.2
S59	129	N7	石鏃	黒曜石	2.35	2.1	0.4	0.8	S139	133	D3	石鏃	硬質安山岩	1.7	1.3	0.3	0.6
S60	129	H3	石鏃	黒曜石	1.6	1.8	0.3	0.5	S141	133	H3	石鏃	硬質安山岩	2.0	1.4	0.3	0.4
S61	129	E6	石鏃	黒曜石	1.8	1.6	0.3	0.4	S142	133	G3	石鏃	硬質安山岩	1.9	1.4	0.3	0.5
S62	129	G3	石鏃	黒曜石	1.7	1.8	0.3	0.4	S143	133	D区	石鏃	硬質安山岩	2.5	1.8	0.5	1.0
S63	129	N7	石鏃	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.4	S144	133	E2	石鏃	硬質安山岩	2.7	1.5	0.4	1.2
S64	129	N8	石鏃	黒曜石	1.8	1.6	0.3	0.4	S145	133	D2	石鏃	硬質安山岩	3.4	1.8	0.6	0.3
S65	129	M9	石鏃	黒曜石	2.0	1.6	0.4	0.8	S146	133	D3	石鏃	硬質安山岩	2.8	1.5	0.3	1.2
S66	129	O7	石鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.5	1.0	S147	133	J8	石鏃	硬質安山岩	2.0	1.0	0.4	0.6
S67	129	A区	石鏃	黒曜石	2.1	1.5	0.6	1.2	S148	134	A区	石鏃未製品	黒曜石	2.45	1.75	0.45	2.0
S68	129	E2	石鏃	黒曜石	2.2	1.6	0.45	0.9	S149	134	C2	石鏃未製品	黒曜石	2.4	2.25	0.5	2.1
S69	129	D3	石鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.5	0.8	S150	134	D2	石鏃未製品	黒曜石	2.3	2.0	0.4	1.3
S70	129	B区	石鏃	黒曜石	1.9	1.3	0.5	1.6	S151	134	F3	石鏃未製品	黒曜石	2.6	2.0	0.5	2.6
S71	129	E2	石鏃	黒曜石	3.75	2.2	0.65	3.8	S152	134	G3	石鏃未製品	黒曜石	2.1	1.6	0.45	1.0
S72	130	G3	石鏃	黒曜石	0.9	0.8	0.4	0.5	S153	134	D2	石鏃未製品	黒曜石	2.45	2.3	0.65	3.1
S73	130	G3	石鏃	黒曜石	2.0	1.8	0.5	1.2	S154	134	H3	石鏃未製品	黒曜石	2.1	2.2	0.7	1.0
S74	130	O8	石鏃	黒曜石	2.3	1.8	0.5	1.2	S155	134	H2	石鏃未製品	黒曜石	3.2	2.1	1.0	4.6
S75	130	G3	石鏃	黒曜石	1.95	1.1	0.25	0.2	S156	134	N7	石鏃未製品	黒曜石	2.8	2.3	0.7	2.5
S76	130	E3	石鏃	黒曜石	1.4	0.95	0.25	0.1	S157	134	G1・G2	石鏃未製品	黒曜石	2.5	2.6	0.9	3.8
S77	130	G3	石鏃	黒曜石	1.6	1.0	0.4	0.5	S158	134	E1	石鏃未製品	黒曜石	2.3	2.6	0.7	3.4
S78	130	A区	石鏃	黒曜石	2.0	1.3	0.45	0.5	S159	134	D3	石鏃未製品	硬質安山岩	2.2	1.3	0.4	1.0
S79	130	E区	石鏃	黒曜石	2.3	1.8	0.5	1.1	S160	134	A区	石鏃未製品	硬質安山岩	2.2	1.5	0.65	1.3
S80	130	M10・N10	石鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.4	0.5	S161	134	E5	石鏃未製品	硬質安山岩	1.9	2.1	0.7	2.2

表60 石器計測表(2)

No.	図	出土位置	器種	石材	法量				No.	図	出土位置	器種	石材	法量			
					最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)						最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)
S162	135	I2	スクレイパー	黒曜石	6.0	3.8	2.4	47.2	S240	143	H3	石核	黒曜石	5.1	5.15	3.2	95.2
S163	135	N10	スクレイパー	黒曜石	7.7	3.5	1.7	30.3	S241	143	G3	石核	黒曜石	5.0	3.4	2.7	52.1
S164	135	C2	スクレイパー	黒曜石	5.6	4.0	1.2	26.5	S242	143	H3	石核	黒曜石	5.1	8.1	3.4	110.5
S165	135	J8	スクレイパー	黒曜石	5.8	4.0	1.55	25.5	S243	143	N8	石核	黒曜石	10.2	2.6	4.4	70.2
S166	135	G3	スクレイパー	黒曜石	4.65	8.0	1.7	47.7	S244	143	G2	石核	黒曜石	5.7	3.0	1.9	25.4
S167	135	H5	スクレイパー	黒曜石	3.4	7.6	1.5	27.6	S245	143	A区	石核	黒曜石	4.0	3.2	2.1	19.4
S168	136	H3	スクレイパー	黒曜石	5.45	3.7	1.3	18.0	S246	144	I1	石核	黒曜石	5.4	5.9	3.0	61.3
S169	136	C2	スクレイパー	黒曜石	3.25	4.65	1.3	25.4	S247	144	N8	石核	黒曜石	4.0	4.1	2.3	20.8
S170	136	C2	スクレイパー	黒曜石	3.0	3.7	0.8	7.8	S248	144	A区	石核	黒曜石	3.3	3.9	2.3	29.0
S171	136	H3	スクレイパー	黒曜石	2.4	5.5	1.6	20.0	S249	144	M8	石核	黒曜石	5.0	5.2	2.3	54.3
S172	136	A区	スクレイパー	黒曜石	2.6	4.2	1.0	6.7	S250	144	F2	石核	黒曜石	4.9	4.3	1.7	33.7
S173	136	E2	スクレイパー	黒曜石	2.8	4.0	0.9	9.1	S251	145	C2	石核	黒曜石	3.2	5.05	1.75	19.9
S174	136	G3	スクレイパー	黒曜石	2.3	3.5	0.55	2.8	S252	145	E2	石核	黒曜石	2.4	6.1	2.7	27.7
S175	136	E5	スクレイパー	黒曜石	1.9	2.8	0.65	2.5	S253	145	B区	石核	黒曜石	2.1	6.7	2.6	31.3
S176	136	N8	スクレイパー	黒曜石	1.4	2.1	0.35	0.5	S254	145	L7	石核	黒曜石	2.7	3.5	2.3	14.3
S177	136	G1・G2	スクレイパー	黒曜石	1.65	2.25	0.7	1.9	S255	145	C区	石核	黒曜石	5.3	2.9	2.8	32.3
S178	136	A区	スクレイパー	黒曜石	2.2	2.3	0.9	3.2	S256	146	G2	ブランク	黒曜石	4.6	5.0	4.85	73.3
S179	136	H3	スクレイパー	黒曜石	2.3	3.2	1.2	6.7	S257	146	H3	ブランク	黒曜石	7.9	4.6	3.6	87.2
S180	136	G3	スクレイパー	黒曜石	3.1	2.7	1.1	8.6	S258	146	O8	ブランク	黒曜石	4.7	2.4	2.4	22.0
S181	137	H2	石匙	硬質安山岩	6.6	8.0	1.2	16.0	S259	146	P9	ブランク	黒曜石	5.2	3.45	2.3	25.1
S182	137	M7	石匙	硬質安山岩	5.0	7.1	0.7	20.6	S260	146	M10	ブランク	水晶	4.8	4.0	3.0	58.5
S183	137	G3	スクレイパー	硬質安山岩	3.4	7.0	1.0	20.4	S261	147	E2	打製石斧	硬質安山岩	9.2	9.6	1.4	120.7
S184	137	D3	スクレイパー	硬質安山岩	8.4	4.25	0.8	28.7	S262	147	A区	打製石斧	黒色頁岩	6.1	6.5	1.0	34.5
S185	137	N7	スクレイパー	硬質安山岩	5.0	6.0	0.7	16.4	S263	147	P10・P11	打製石斧	粗粒安山岩	10.3	6.2	1.7	135.9
S186	138	G1	楔形石器	黒曜石	4.9	6.8	2.0	55.4	S264	147	G3	打製石斧	粗粒安山岩	8.3	6.3	1.4	81.7
S187	138	H3	楔形石器	黒曜石	3.9	5.3	1.6	31.5	S265	148	A区	磨製石斧	緑色片岩	7.9	2.8	1.7	56
S188	138	B区	楔形石器	黒曜石	3.55	2.65	1.65	10.1	S266	148	M10	磨製石斧	蛇紋岩	4.3	2.0	0.6	9.0
S189	138	G3	楔形石器	黒曜石	5.0	2.7	1.9	17.6	S267	148	N8	磨製石斧	緑色片岩	11.4	5.7	3.3	354
S190	138	B区	楔形石器	黒曜石	3.65	2.85	1.35	11.2	S268	148	E4	磨製石斧剥片	硬質安山岩	3.0	2.2	0.8	3.8
S191	138	I4	楔形石器	黒曜石	3.5	4.7	1.8	23.9	S269	148	M8	石廬丁	粘板岩	5.0	10.2	1.5	90.0
S192	138	I2	楔形石器	黒曜石	3.2	4.5	2.1	22.4	S270	148	M8	石廬丁	細粒花崗岩	3.4	7.8	1.0	45
S193	138	F2	楔形石器	黒曜石	4.5	3.8	1.7	16.6	S271	148	M10	磨製石器	黒色頁岩	4.3	1.8	0.3	4.0
S194	139	A区	楔形石器	黒曜石	3.0	5.5	2.2	26.4	S272	149	G2	打欠石錘	粗粒安山岩	8.8	7.9	2.0	199
S195	139	A区	楔形石器	黒曜石	2.9	4.5	1.8	23.7	S273	149	G2	打欠石錘	粗粒安山岩	8.9	8.1	1.7	170
S196	139	A区	楔形石器	黒曜石	3.3	2.8	0.9	8.7	S274	149	G3	打欠石錘	粗粒安山岩	8.3	7.8	2.9	267
S197	139	A区	楔形石器	黒曜石	4.7	3.0	1.3	11.9	S275	149	G2	打欠石錘	粗粒安山岩	8.8	7.9	2.3	239
S198	139	F4	楔形石器	黒曜石	2.5	5.3	1.5	11.2	S276	149	F3	打欠石錘	粗粒安山岩	8.8	7.1	1.9	158
S199	139	E4	楔形石器	黒曜石	2.7	5.6	1.15	13.5	S277	149	D2	打欠石錘	粗粒安山岩	9.0	7.6	2.0	191
S200	139	O8	楔形石器	黒曜石	2.85	3.9	1.3	10.2	S278	149	F4	打欠石錘	粗粒安山岩	8.0	7.7	2.7	226
S201	139	O8	楔形石器	黒曜石	3.3	2.9	1.3	10.7	S279	149	G2	打欠石錘	粗粒安山岩	8.7	7.4	2.3	221
S202	139	F2	楔形石器	黒曜石	2.8	4.1	1.0	10.3	S280	149	E7	打欠石錘	粗粒安山岩	9.0	8.0	1.8	156
S203	139	A区	楔形石器	黒曜石	2.0	2.6	1.5	6.8	S281	149	H3	打欠石錘	粗粒安山岩	8.5	7.1	2.7	228
S204	139	O7	楔形石器	黒曜石	3.9	2.3	1.7	13.5	S282	149	G3	打欠石錘	粗粒安山岩	8.5	7.5	1.5	144
S205	140	H3	楔形石器	黒曜石	3.1	3.0	1.2	8.2	S283	149	G3	打欠石錘	粗粒安山岩	8.2	7.9	2.7	262
S206	140	A区	楔形石器	黒曜石	2.4	2.4	1.0	7.2	S284	150	C区	打欠石錘	粗粒安山岩	7.7	7.5	1.7	152
S207	140	O8	楔形石器	黒曜石	2.3	3.1	0.6	4.1	S285	150	B区	打欠石錘	粗粒安山岩	8.4	6.9	2.1	173
S208	140	A区	楔形石器	黒曜石	3.4	2.1	0.9	4.5	S286	150	F3	打欠石錘	粗粒安山岩	8.3	6.5	2.5	183
S209	140	A区	楔形石器	黒曜石	3.3	1.75	0.8	4.5	S287	150	G3	打欠石錘	粗粒安山岩	7.1	6.3	2.4	166
S210	140	N9	楔形石器	黒曜石	2.1	2.8	0.8	4.3	S288	150	G3	打欠石錘	粗粒安山岩	8.7	6.5	2.3	175
S211	140	A区	楔形石器	黒曜石	2.1	2.6	1.2	5.1	S289	150	G3	打欠石錘	粗粒安山岩	9.4	6.2	2.0	180
S212	140	C2	楔形石器	黒曜石	2.9	3.2	1.1	8.0	S290	150	G3	打欠石錘	粗粒安山岩	6.4	7.0	2.6	173
S213	140	E区	楔形石器	黒曜石	2.1	4.2	1.0	7.7	S291	150	G3	打欠石錘	粗粒安山岩	7.0	5.7	1.7	110
S214	140	A区	楔形石器	黒曜石	2.35	2.45	0.8	4.8	S292	150	G3	打欠石錘	粗粒安山岩	7.2	6.2	2.1	110
S215	140	A区	楔形石器	黒曜石	3.0	2.0	1.0	5.5	S293	150	F3	打欠石錘	粗粒安山岩	7.5	6.0	2.1	123
S216	140	B区	楔形石器	黒曜石	2.45	2.6	0.8	4.7	S294	150	H3	打欠石錘	粗粒安山岩	6.8	6.7	2.1	148
S217	140	J8	楔形石器	黒曜石	2.5	2.6	1.2	7.1	S295	150	C1・D1	打欠石錘	粗粒安山岩	7.7	5.9	2.1	135
S218	140	N8	楔形石器	黒曜石	2.3	2.7	1.3	7.6	S296	151	G3	打欠石錘	粗粒安山岩	8.3	6.0	2.2	153
S219	141	D1	楔形石器	黒曜石	2.7	2.0	1.1	4.7	S297	151	G2	打欠石錘	粗粒安山岩	7.3	7.0	2.2	147
S220	141	I2	楔形石器	黒曜石	2.65	2.1	1.0	6.2	S298	151	G4	打欠石錘	粗粒安山岩	7.5	6.0	2.4	160
S221	141	E2	楔形石器	黒曜石	2.5	1.6	1.0	3.7	S299	151	E2	打欠石錘	粗粒安山岩	7.2	6.2	2.3	150
S222	141	D1	楔形石器	黒曜石	1.6	2.8	0.5	2.5	S300	151	G4	打欠石錘	粗粒安山岩	7.9	6.2	2.0	169
S223	141	H5	楔形石器	黒曜石	2.15	1.8	0.6	2.3	S301	151	F3	打欠石錘	粗粒安山岩	7.6	6.0	1.4	108
S224	141	H4	楔形石器	黒曜石	2.5	2.2	0.8	4.0	S302	151	E区	打欠石錘	粗粒安山岩	6.8	6.3	1.9	95
S225	141	G1	楔形石器	黒曜石	2.1	2.5	0.9	3.1	S303	151	P8	打欠石錘	粗粒安山岩	5.4	4.8	1.4	46
S226	141	M7	楔形石器	硬質安山岩	2.0	1.6	0.7	2.0	S304	151	D4	切目石錘	ホルンフェルス	6.5	3.7	1.4	51
S227	141	M8	楔形石器	黒曜石	1.85	1.95	0.8	2.3	S305	152	E2	敲石	粗粒安山岩	9.0	6.9	4.1	342
S228	141	D6	楔形石器	黒曜石	1.6	1.6	0.65	1.5	S306	152	M7	敲石	粗粒安山岩	9.2	8.3	5.6	519
S229	141	M7	楔形石器	硬質安山岩	2.8	4.6	1.7	20.6	S307	152	P11	敲石	粗粒安山岩	8.2	6.8	6.0	450
S230	141	G3	楔形石器	黒曜石	3.3	1.12	0.54	1.0	S308	152	G3	敲石	粗粒安山岩	6.8	5.9	5.7	292
S231	141	B区	楔形石器	黒曜石	3.85	3.65	1.6	16.1	S309	152	G3	磨石	粗粒安山岩	7.5	7.5	3.1	257
S232	141	P11	楔形石器	硬質安山岩	2.3	1.3	0.7	2.0	S310	152	O11	磨石	粗粒安山岩	4.8	4.3	3.5	82.0
S233	141	M7	楔形石器	硬質安山岩	2.3	2.6	0.8	4.8	S311	152	M8	敲石	細粒花崗岩	12.4	6.4	1.7	275
S234	142	O8	打製石剣 (局部磨製)	硬質安山岩	7.3	2.6	0.8	63.0	S312	152	M9	砥石	細粒花崗岩	5.7	5.7	1.5	62
S235	142	C1	石錘	硬質安山岩	3.4	1.6	0.6	2.5									
S236	142	F1	石錘	黒曜石	3.75	2.45	1.0	5.5									
S237	142	G3	加工痕のある 剥片	黒曜石	12.2	7.6	1.7	144									
S238	142	A区	使用痕のある 剥片	黒曜石	5.3	1.7	0.9	9.0									
S239	142	A区	加工痕のある 剥片	黒曜石	7.4	2.4	1.5	20.0									



1 調査地遠景 1 調査前（北西から）



2 調査地遠景 2 2004年度調査後（南から）

図版2



1 調査地近景1 調査前（東から）



2 調査地近景2 2003年度調査後（西から）



1 調査地近景3 2004年度調査後（南東から）



2 調査地近景4 2004年度調査後（北から）

図版 4



1 第1調査地完掘状況
(南から)



2 第2調査地第1遺構面
完掘状況
(東から)



3 土坑1完掘状況
(南西から)



1 土坑 2 土層断面 (南西から)



2 土坑 3 土層断面 (北西から)



3 第 2 調査地
第 2 遺構面完掘状況
(北東から)



4 第 2 調査地
第 3 遺構面完掘状況
(北東から)

図版 6



1 第2調査地
第4遺構面完掘状況
(北東から)



2 第2調査地完掘状況
(北東から)



3 第2調査地
西壁土層断面
(東から)



1 A区北壁東半部
A-A 土層断面
(南東から)



2 A区北壁西半部
A-A 土層断面
(東から)



3 B区南北トレンチ
D-D 土層断面
(北西から)

図版 8



1 C区南北トレンチ
D-D 土層断面
(北西から)



2 E区北壁
F-F 土層断面
(南東から)



3 E区南北トレンチ
G-G 土層断面
(南東から)



1 A区第1遺構面完掘状況(南から)



2 E区第1遺構面完掘状況(北西から)



1 E区第1遺構面完掘状況(北東から)



1 D区第1遺構面完掘状況(北東から)



1 竪穴住居1
遺物出土状況1
(南から)



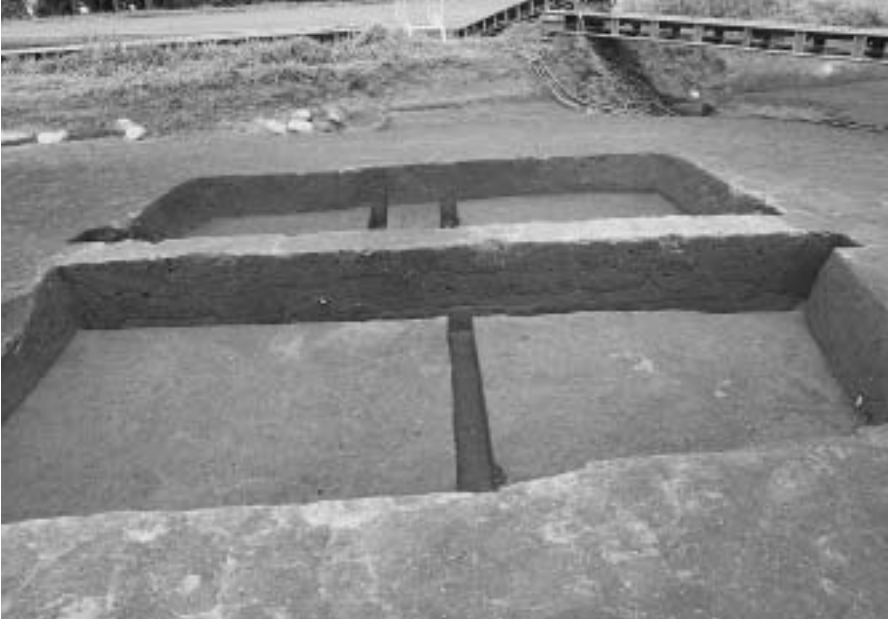
2 竪穴住居1
遺物出土状況2
(東から)



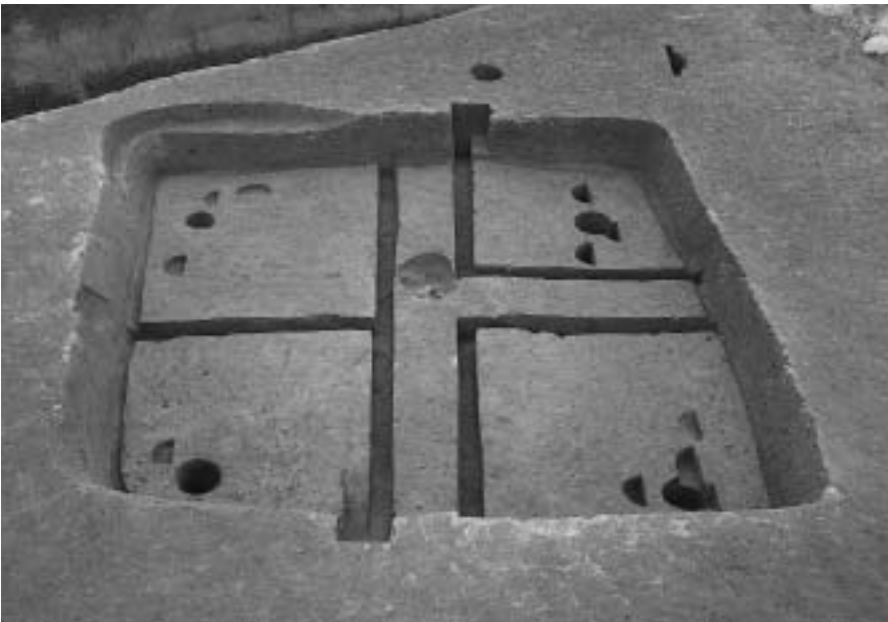
3 竪穴住居1 91出土状況(南東から)



4 竪穴住居1 P5土層断面(北から)



1 竪穴住居 1 土層断面
(東から)



2 竪穴住居 1 完掘状況
(北東から)



2 竪穴住居 1
掘り方完掘状況
(北東から)



1 竪穴住居 2
土層断面・遺物出土状況
(北から)



2 竪穴住居 2
遺物出土状況 1
(南から)



3 竪穴住居 2
遺物出土状況 2
(北から)



1 竪穴住居2完掘状況(北から)



2 竪穴住居2・3完掘状況(北から)



1 竪穴住居3土層断面
(南から)



2 竪穴住居3
遺物出土状況1
(東から)



3 竪穴住居3
遺物出土状況2
(西から)

図版16



1 竪穴住居3 165・159・162出土状況（東から）



2 竪穴住居3 161ほか出土状況（東から）



3 竪穴住居3 158・160出土状況（南から）



4 竪穴住居3 155出土状況（西から）



5 竪穴住居3 156・160出土状況（南から）



6 竪穴住居3 P5焼土検出状況（南西から）



1 竪穴住居3完掘状況(北東から)

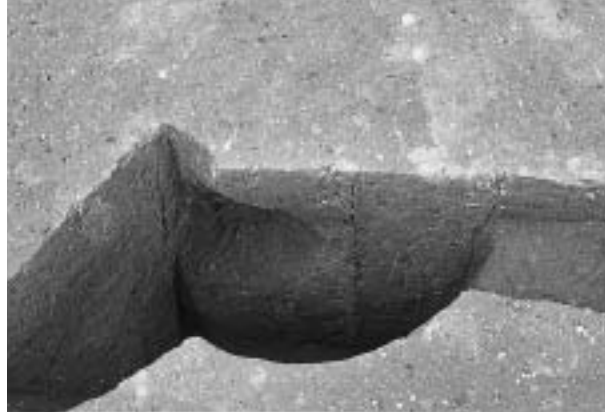


2 掘立柱建物1完掘状況1(南東から)

図版18



1 掘立柱建物1 P1土層断面(南から)



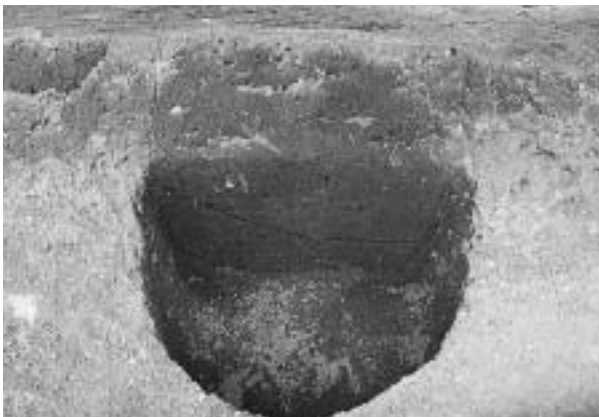
2 掘立柱建物1 P2土層断面(西から)



3 掘立柱建物1 P3土層断面(北東から)



4 掘立柱建物1 P9土層断面(南から)



5 掘立柱建物1 P13土層断面(東から)



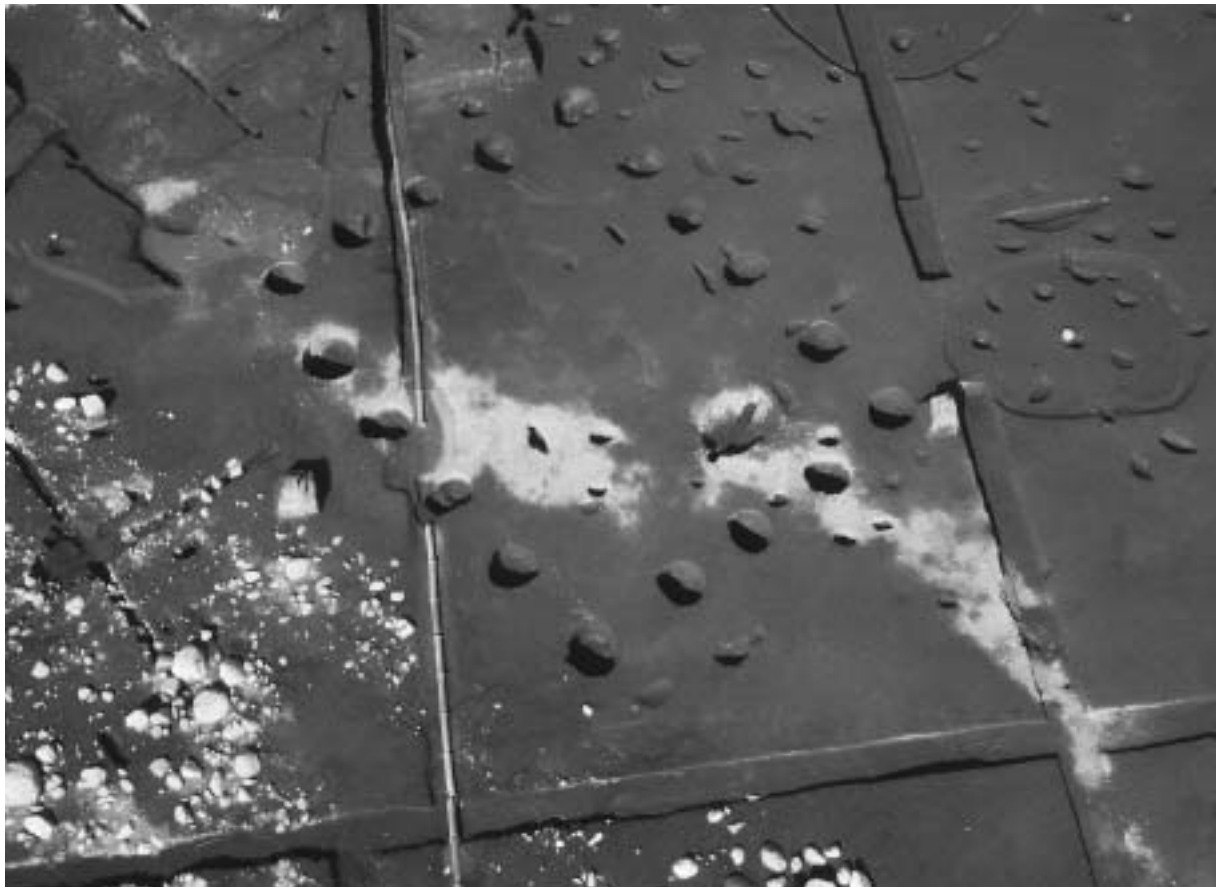
6 掘立柱建物1 P14土層断面(南西から)



7 掘立柱建物1 P15土層断面(北東から)



8 掘立柱建物1 P16土層断面(南東から)



1 掘立柱建物 1 完掘状況 2 (南から)



2 掘立柱建物 2 完掘状況 (西から)



1 掘立柱建物4 P3土層断面(北東から)



2 掘立柱建物4 P4土層断面(北東から)



3 掘立柱建物4 P5土層断面(西から)



4 掘立柱建物4 P11土層断面(北西から)



5 掘立柱建物4完掘状況(南東から)



1 竪穴1土層断面
(南から)



2 竪穴1遺物出土状況
(西から)



3 竪穴1 174・176出土状況(南西から)



4 竪穴1 171出土状況(南西から)



1 竪穴1 169出土状況(西から)



2 竪穴1 170出土状況(南西から)



3 竪穴2土層断面1
(北から)



4 竪穴2土層断面2
(東から)



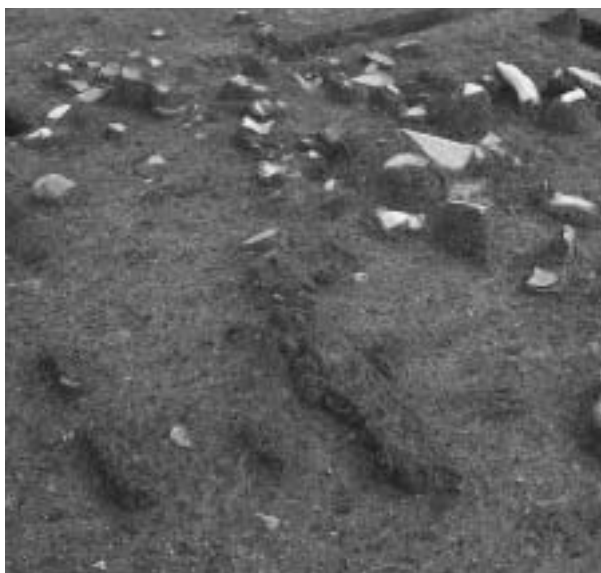
1 竪穴2 遺物出土状況1
(北から)



2 竪穴2 遺物出土状況2 (北西から)



3 竪穴2 炭化材出土状況1 (南東から)



4 竪穴2 炭化材出土状況2 (北東から)



5 竪穴2 P1 遺物出土状況 (北から)



1 竪穴2完掘状況
(北西から)



2 土坑4炭化材出土状況(北西から)



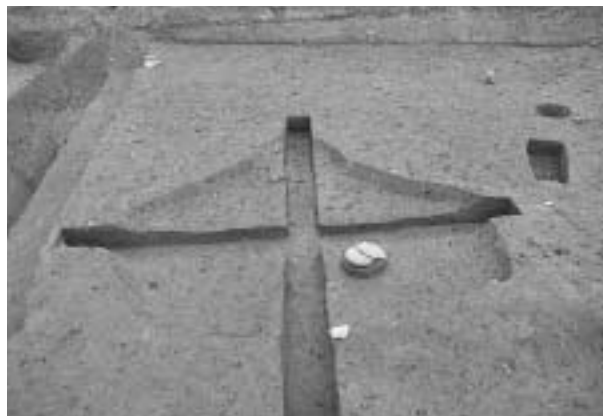
3 土坑4遺物出土状況(南東から)



4 土坑5土層断面(北東から)



5 土坑5遺物出土状況(北東から)



1 土坑6遺物出土状況(西から)



2 土坑7遺物出土状況(北西から)



3 土坑8土層断面(南から)



4 土坑9土層断面(南から)



5 土坑10完掘状況(北西から)



6 土坑11土層断面(西から)



7 土坑12土層断面(南から)

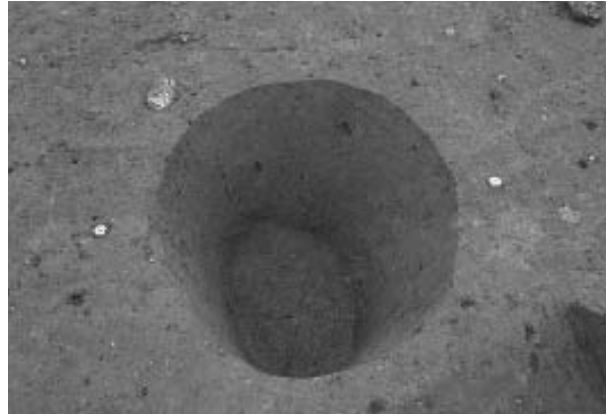


8 土坑13土層断面(東から)

図版26



1 土坑14完掘状況（北から）



2 土坑15完掘状況（西から）



3 土坑16完掘状況（南から）



4 土坑17完掘状況（南西から）



5 土坑18土層断面（南から）



6 土坑18完掘状況（南から）



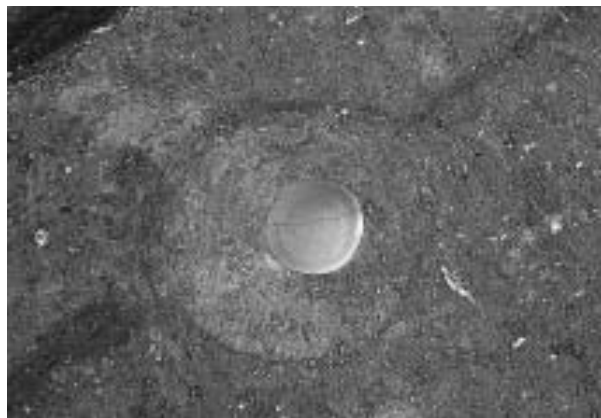
7 土坑19完掘状況（南西から）



8 P16遺物出土状況（南から）



1 P18遺物出土状況（南から）



2 P20遺物出土状況（南から）



3 P20被熱痕跡がある石出土状況（南から）



4 P21遺物出土状況（西から）



5 溝1 A-A 土層断面（北西から）



1 溝1完掘状況1
〔B区〕(南から)



2 溝1 B-B 土層断面(南東から)



3 溝1 C-C 土層断面(南から)



4 溝1完掘状況2〔E区〕(南東から)



5 D区第2遺構面完掘状況(北東から)



1 C・D・E区第2遺構面完掘状況(俯瞰)



2 E区第2遺構面完掘状況(南から)



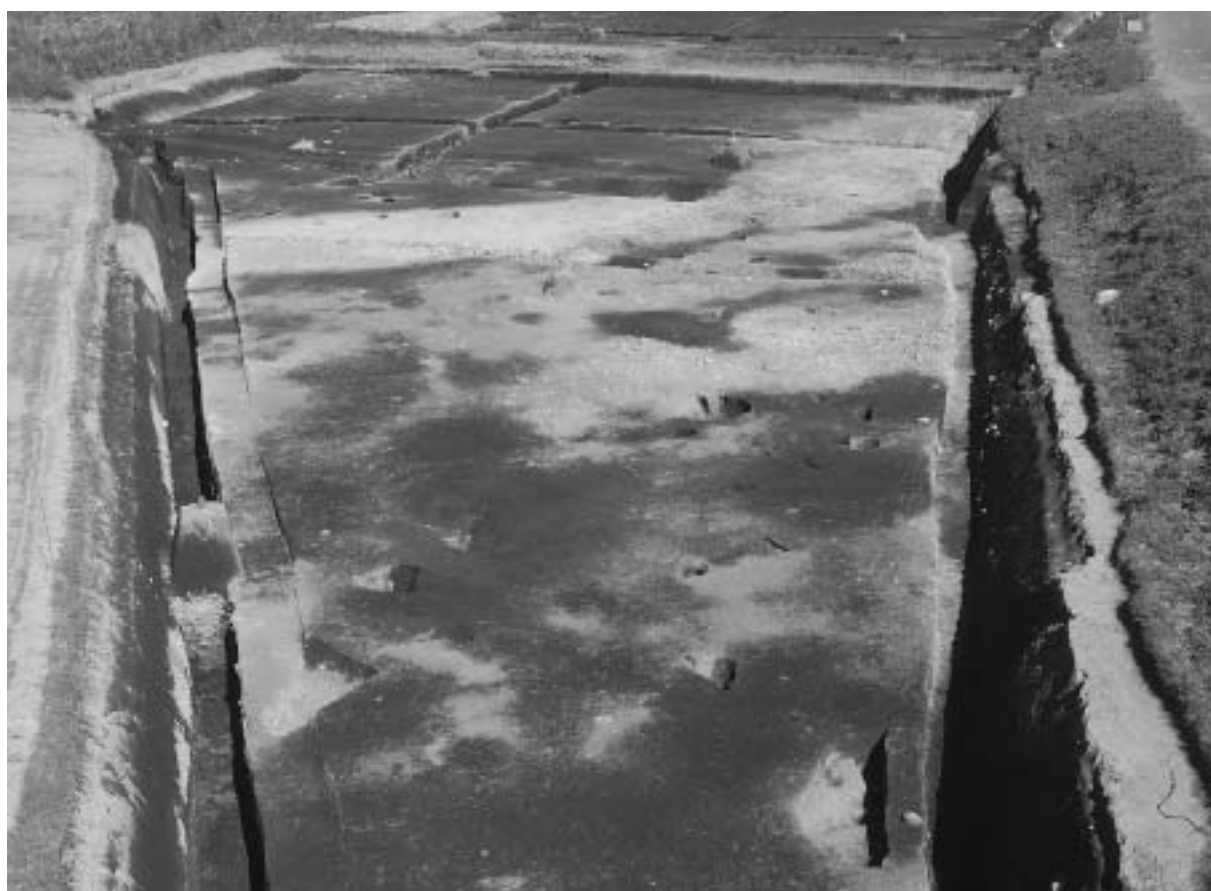
1 E区第2遺構面全景1(南東から)



2 E区第2遺構面全景2(東から)



1 A区東半第2遺構面完掘状況（東から）



2 A区西半第2遺構面完掘状況（西から）



1 B区第2遺構面完掘状況1(北東から)



2 B区第2遺構面完掘状況2(南から)



1 C区第2遺構面完掘状況(北東から)



2 E区第2遺構面完掘状況(北東から)



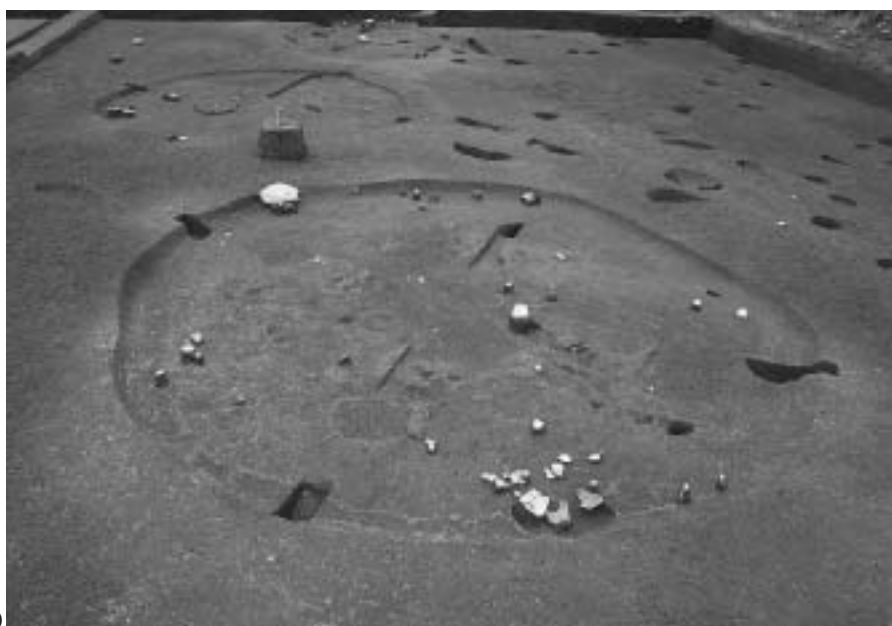
1 竪穴住居4・5、
竪穴3・4・5完掘状況1
(北から)



2 竪穴住居4・5、竪穴3・4・5完掘状況2(南東から)



1 竪穴住居4土層断面
(南から)



2 竪穴住居4
遺物出土状況
(北東から)



3 竪穴住居4 306・311・309出土状況(北東から)



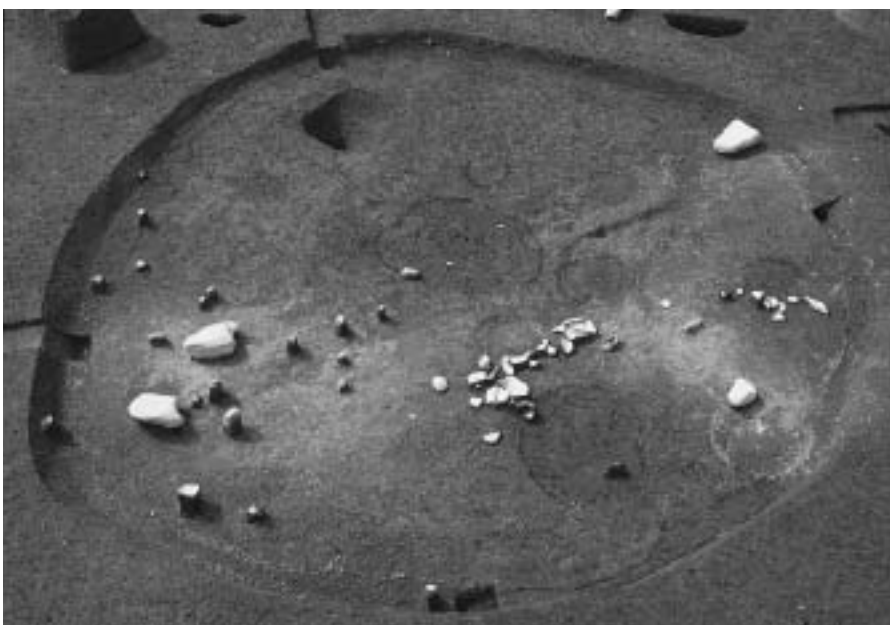
4 竪穴住居4 S22出土状況(北から)



1 竪穴住居 4 完掘状況
(東から)



2 竪穴住居 5 土層断面
(南から)



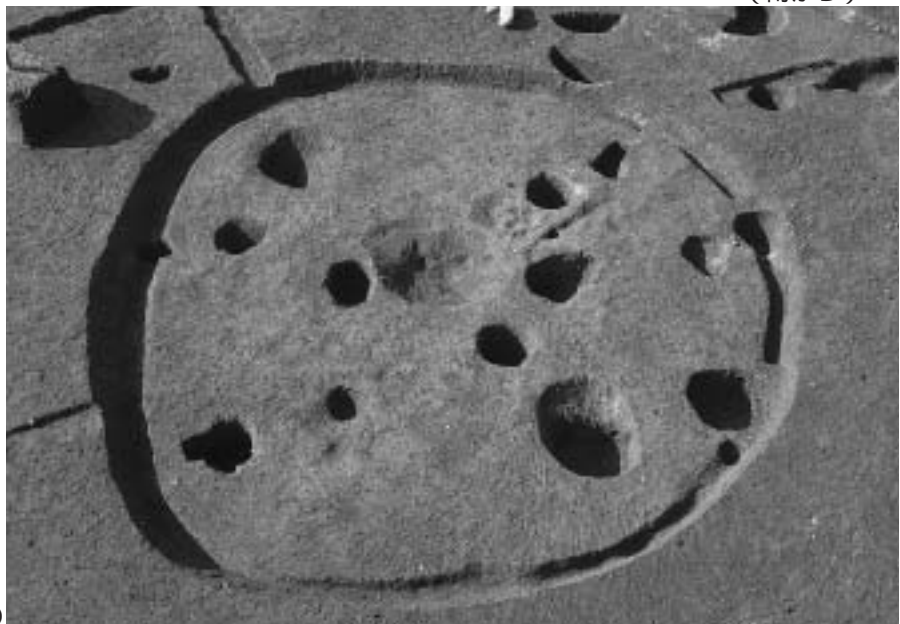
3 竪穴住居 5
遺物出土状況
(東から)



1 豎穴住居5 318出土状況(南から)



2 豎穴住居5 P2土層断面・遺物出土状況(南から)



3 豎穴住居5 完掘状況(南東から)



4 豎穴住居6 土層断面(北西から)



1 竪穴住居6
遺物出土状況
(東から)



2 竪穴住居6 320出土状況(東から)



3 竪穴住居6 P5土層断面(東から)



4 竪穴住居6 完掘状況
(北東から)



1 竪穴3土層断面
(南西から)



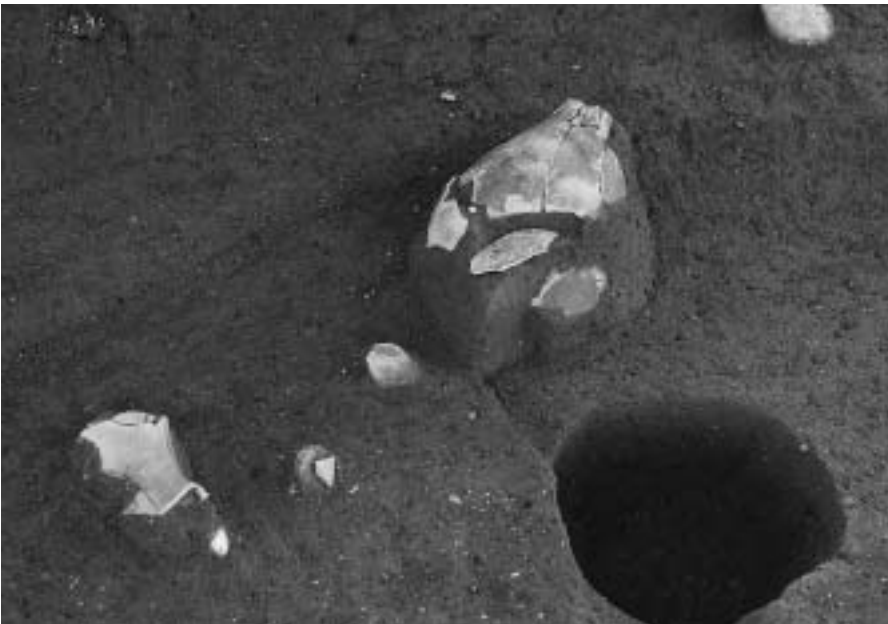
2 竪穴3遺物出土状況
(南から)



3 竪穴3完掘状況
(南から)



1 豎穴4土層断面
(南から)



2 豎穴4 325出土状況
(南東から)



3 豎穴4完掘状況
(南から)



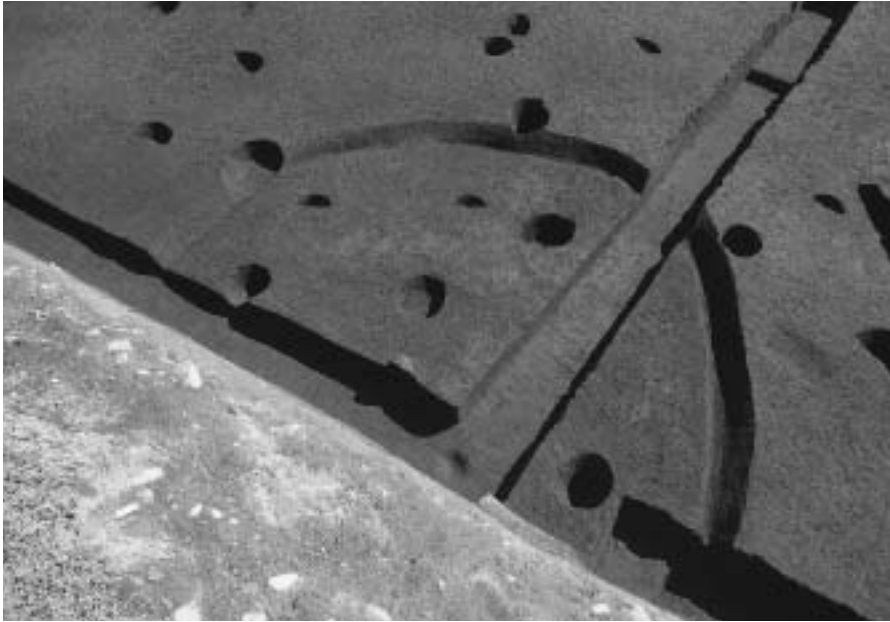
1 竪穴5土層断面1
(東から)



2 竪穴5土層断面2
(南から)



3 竪穴5遺物出土状況
(南東から)



1 竪穴5完掘状況
(北から)



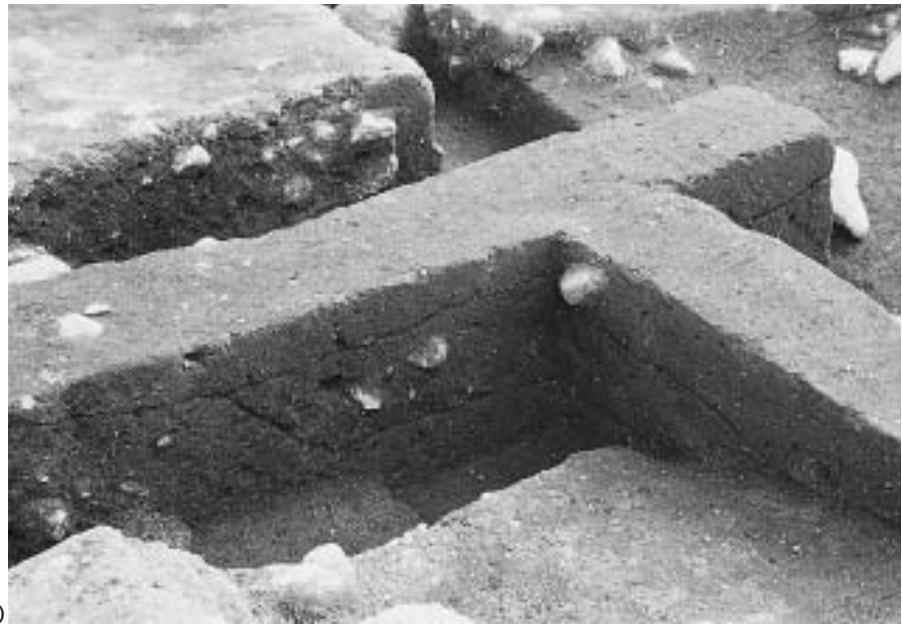
2 土坑22土層断面(東から)



3 土坑22遺物出土状況1(東から)



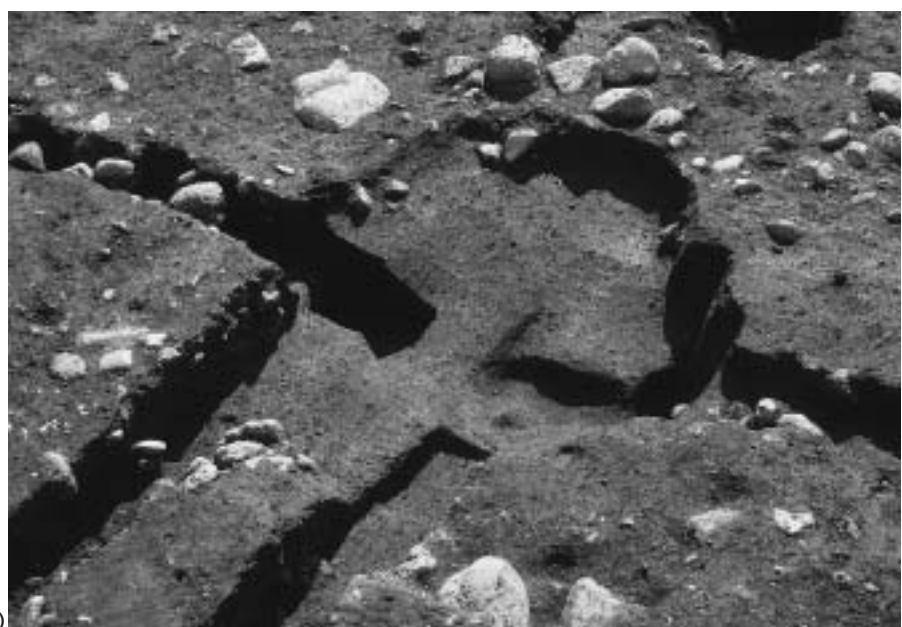
4 土坑22遺物出土状況2
(北から)



1 土坑21土層断面 1
(北から)



2 土坑21土層断面 2
(西から)



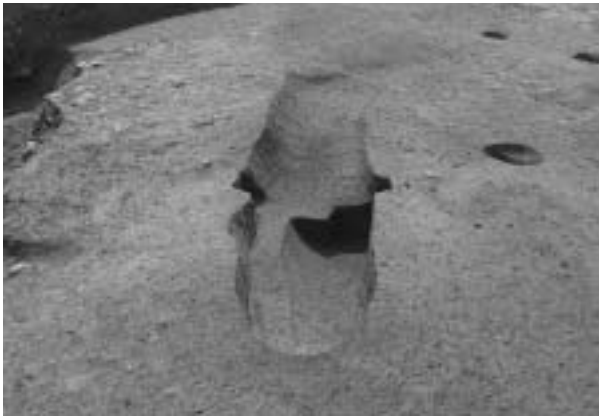
3 土坑21完掘状況
(北東から)



1 土坑23遺物出土状況（南から）



2 土坑24土層断面・遺物出土状況（北東から）



3 土坑24完掘状況（北東から）



4 土坑25完掘状況（南から）



5 土坑26完掘状況（南から）



6 土坑27完掘状況（北から）



7 土坑28完掘状況（南から）



8 土坑29完掘状況（南から）



1 土坑30完掘状況（南から）



2 土坑31完掘状況（南から）



3 土坑32完掘状況（南東から）



4 土坑33完掘状況（西から）



5 土坑34完掘状況（西から）



6 土坑35完掘状況（南から）



7 土坑36完掘状況（南西から）



8 土坑37完掘状況（西から）

図版46



1 土坑38完掘状況（北から）



2 土坑39完掘状況（西から）



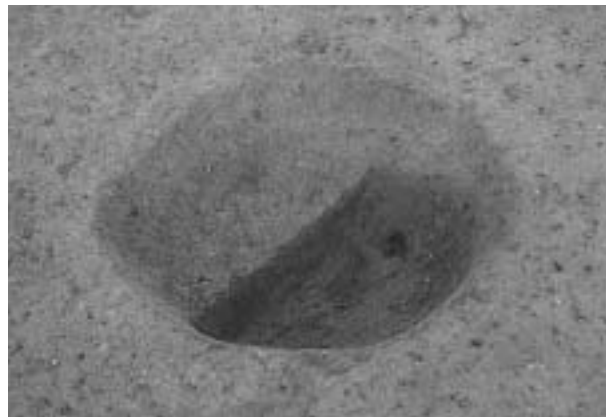
3 土坑40完掘状況（東から）



4 土坑43完掘状況（東から）



5 土坑44完掘状況（西から）



6 土坑45完掘状況（南から）



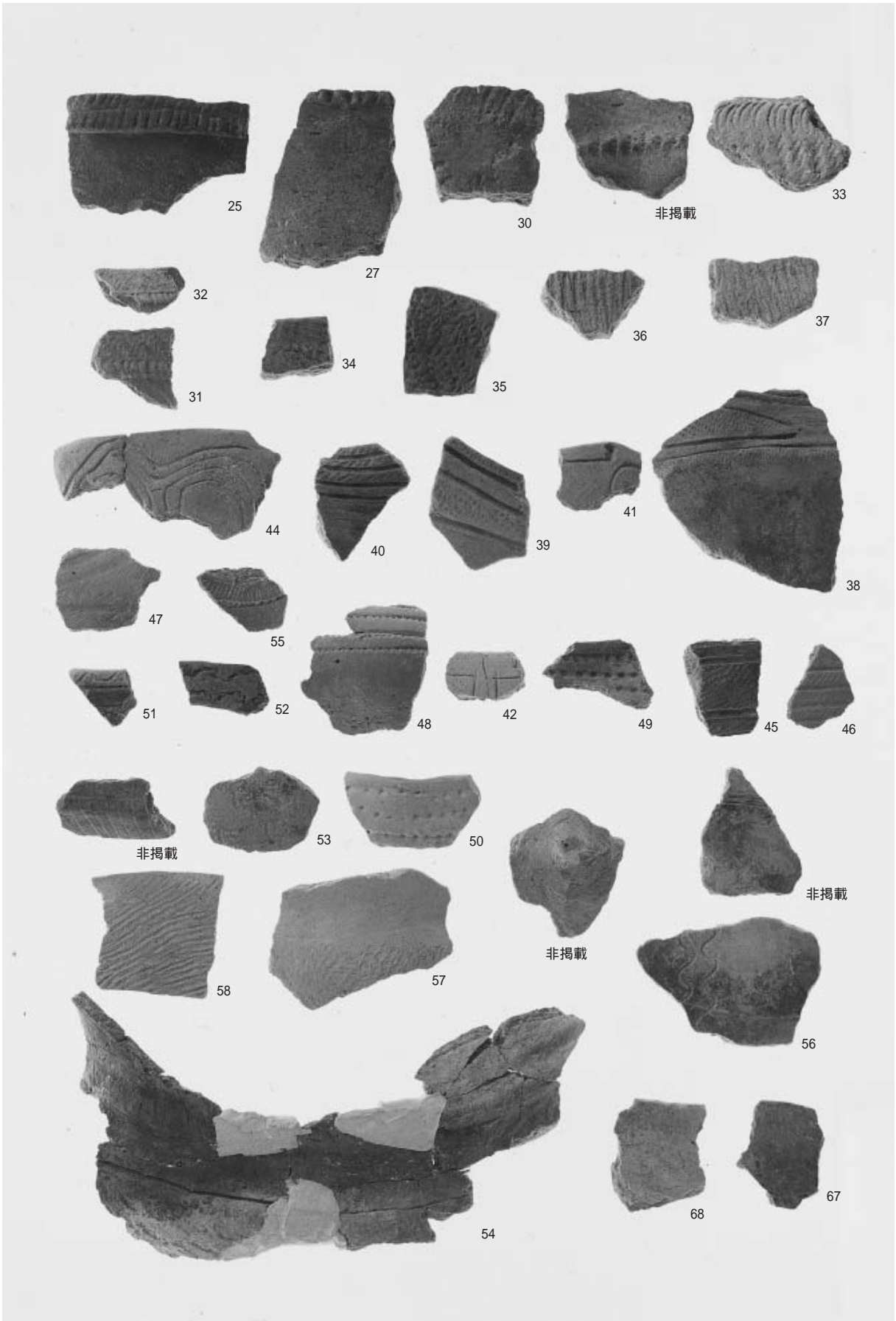
7 土坑46土層断面（北から）



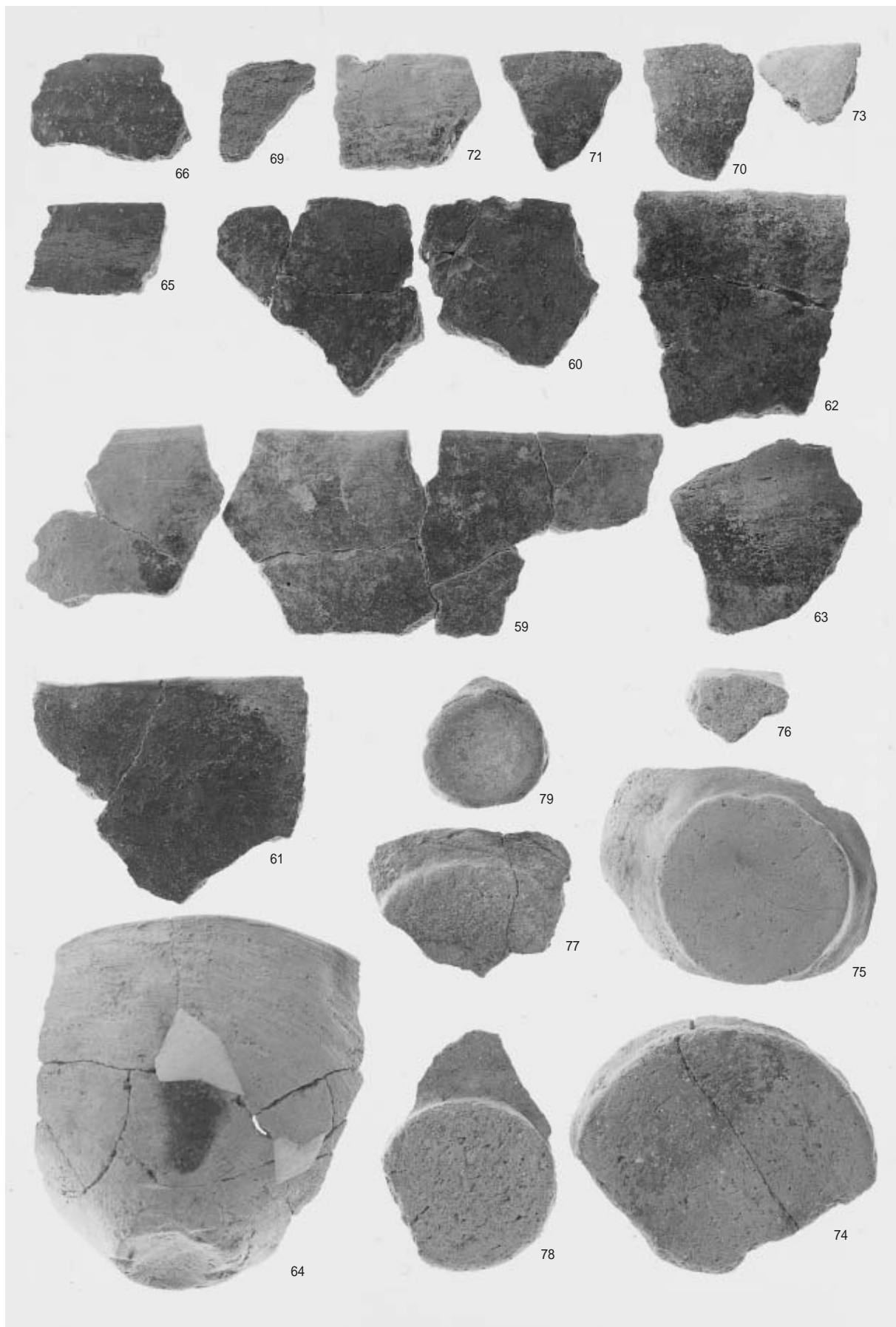
8 溝2完掘状況（西から）



第2調査地第4遺構面遺構外出土土器(1)



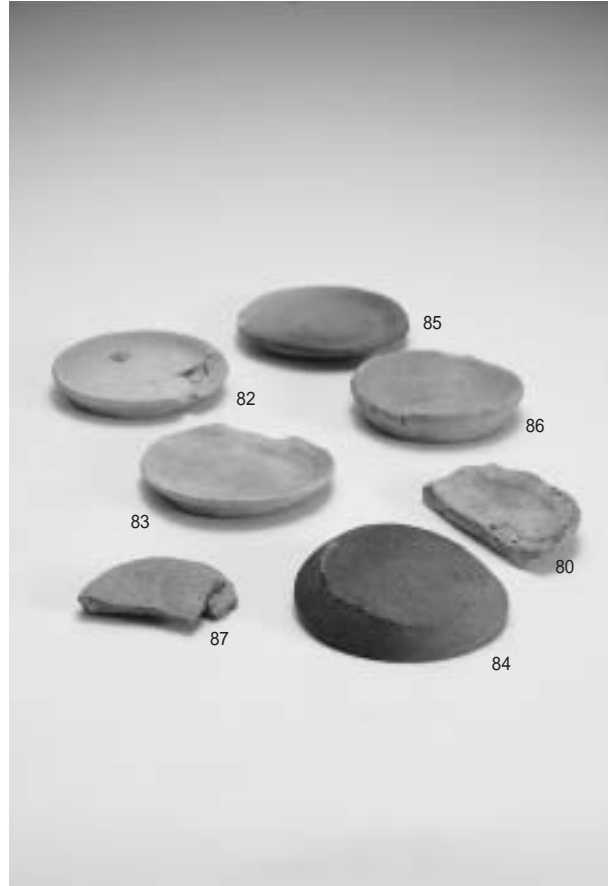
第2調査地⑤・⑥層出土縄文土器(1)



第2調査地⑤・⑥層出土縄文土器(2)



1 第2調査地第4遺構面遺構外出土土器(2)



2 第3調査地中世ビット出土土師皿



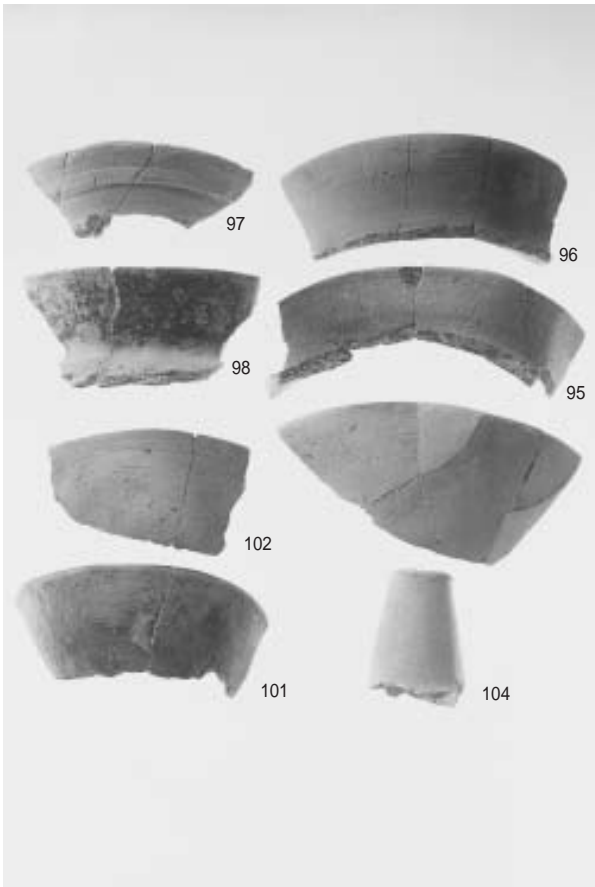
3 竪穴住居1出土土器(1)



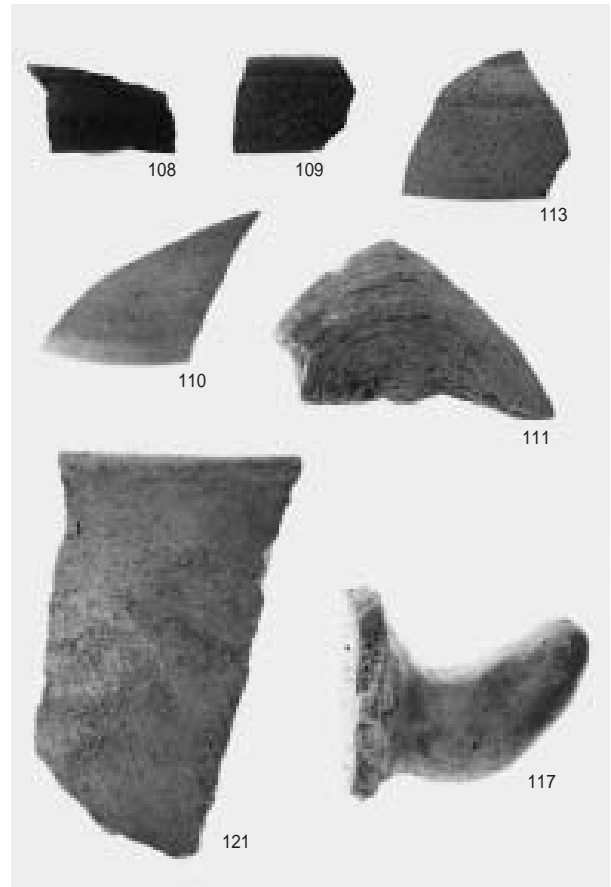
1 土坑4出土土器(1)



2 豎穴住居2出土土器(1)



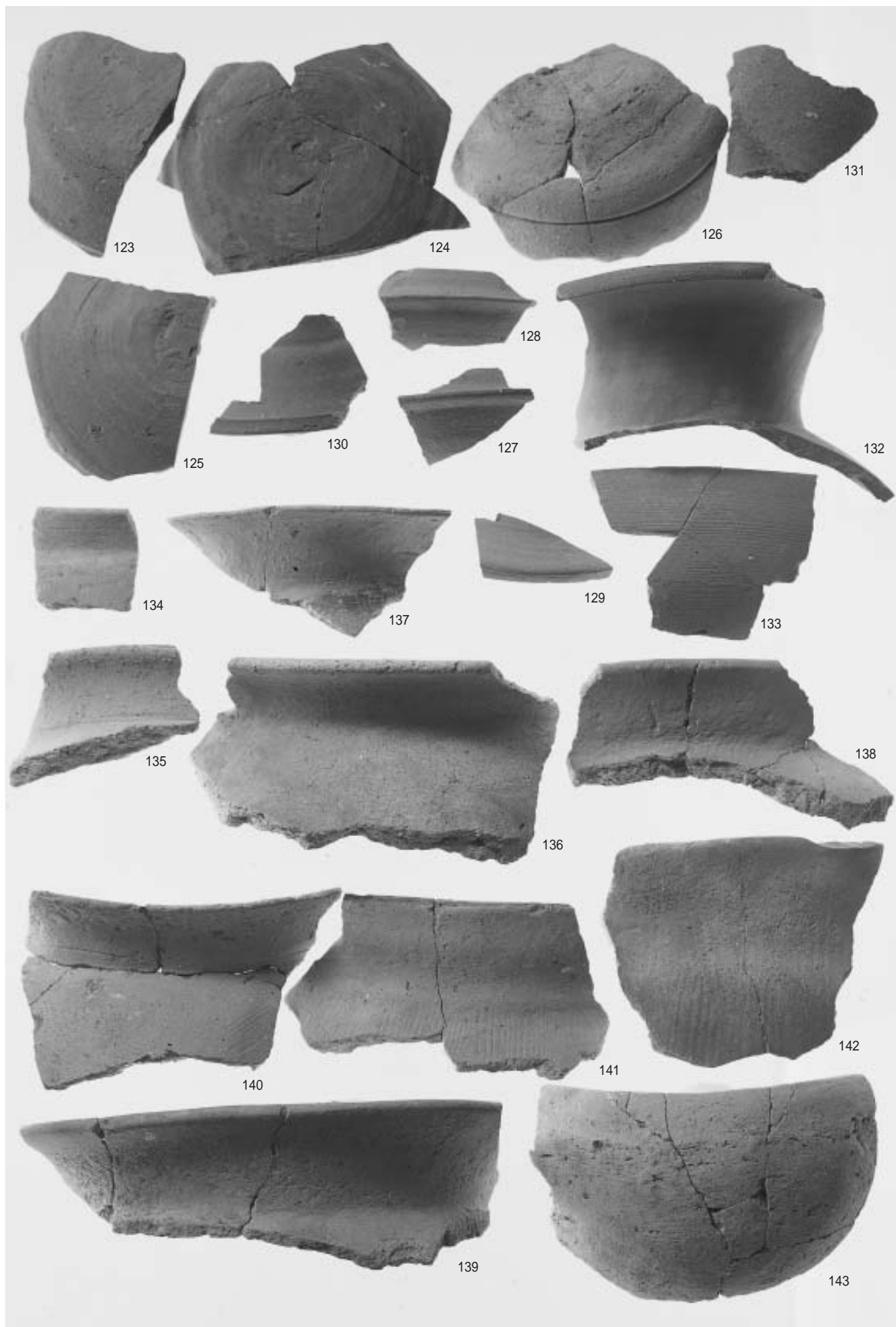
1 土坑4出土土器(2)



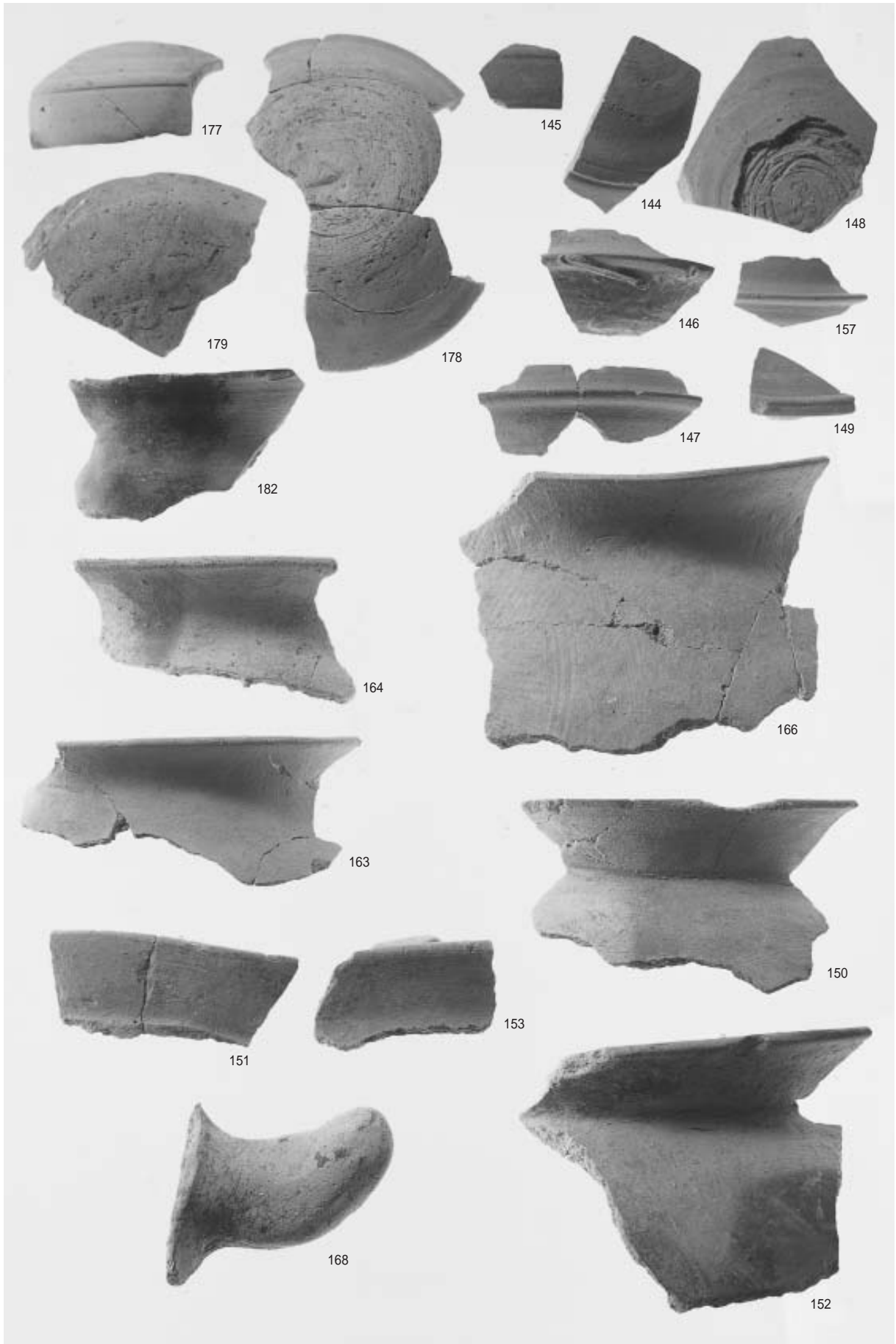
2 竖穴住居2出土土器(2)



3 竖穴住居3出土土器



豎穴住居 3 上層出土土器



豎穴住居3下層・床面出土土器、豎穴2出土土器



1 豎穴 1 出土土器



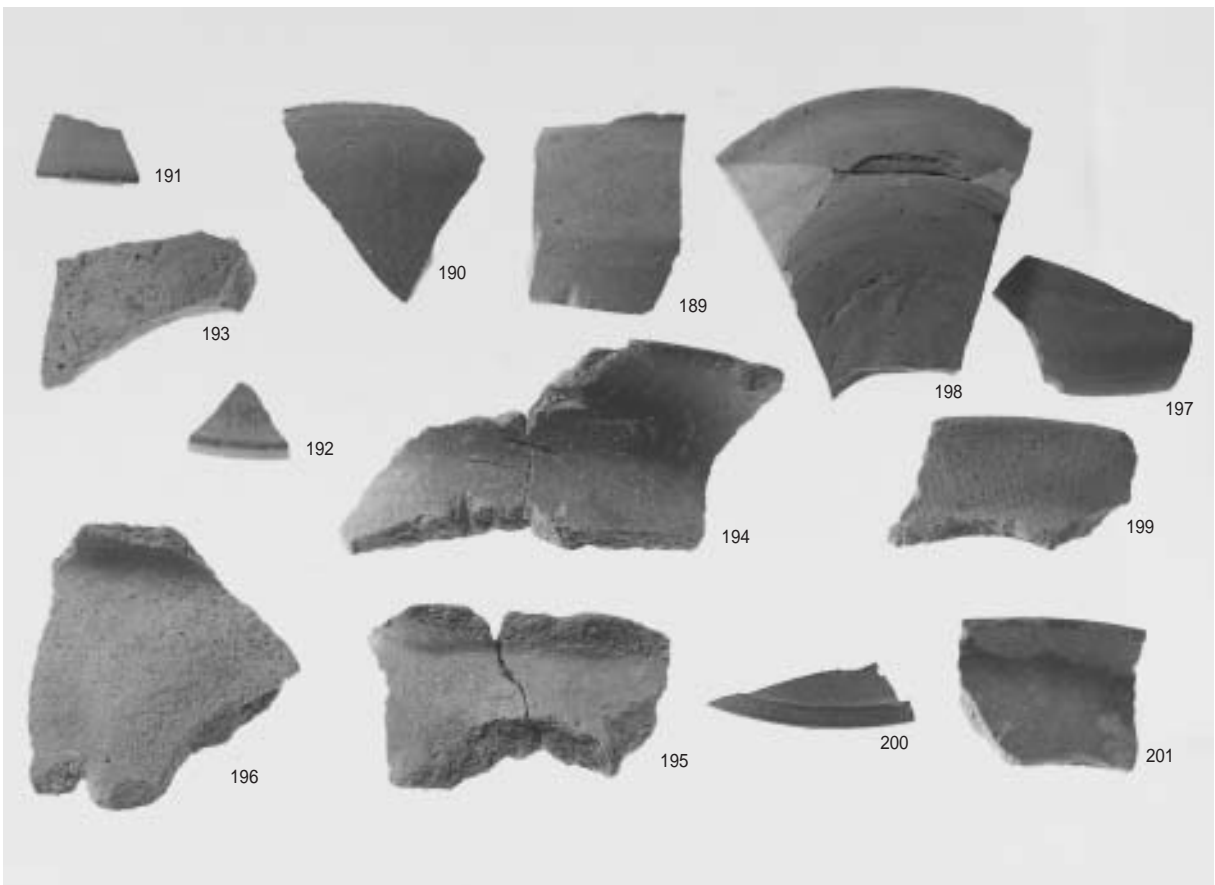
2 豎穴 2 出土土器



1 豎穴住居3・豎穴1出土手づくね土器



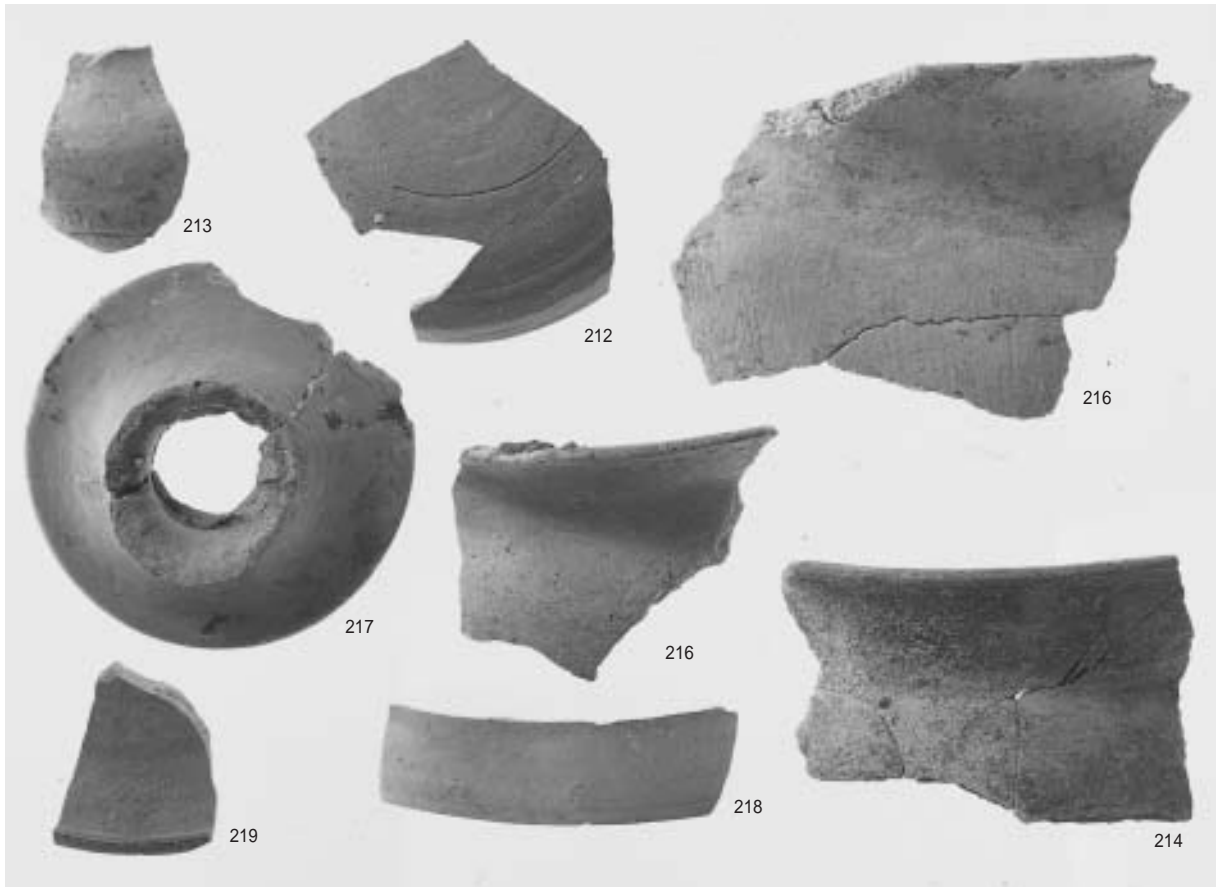
2 豎穴2出土移動式竈



3 掘立柱建物1・3・4出土土器



土坑 5 出土土器



1 土坑 7 · 8 · 9 出土土器



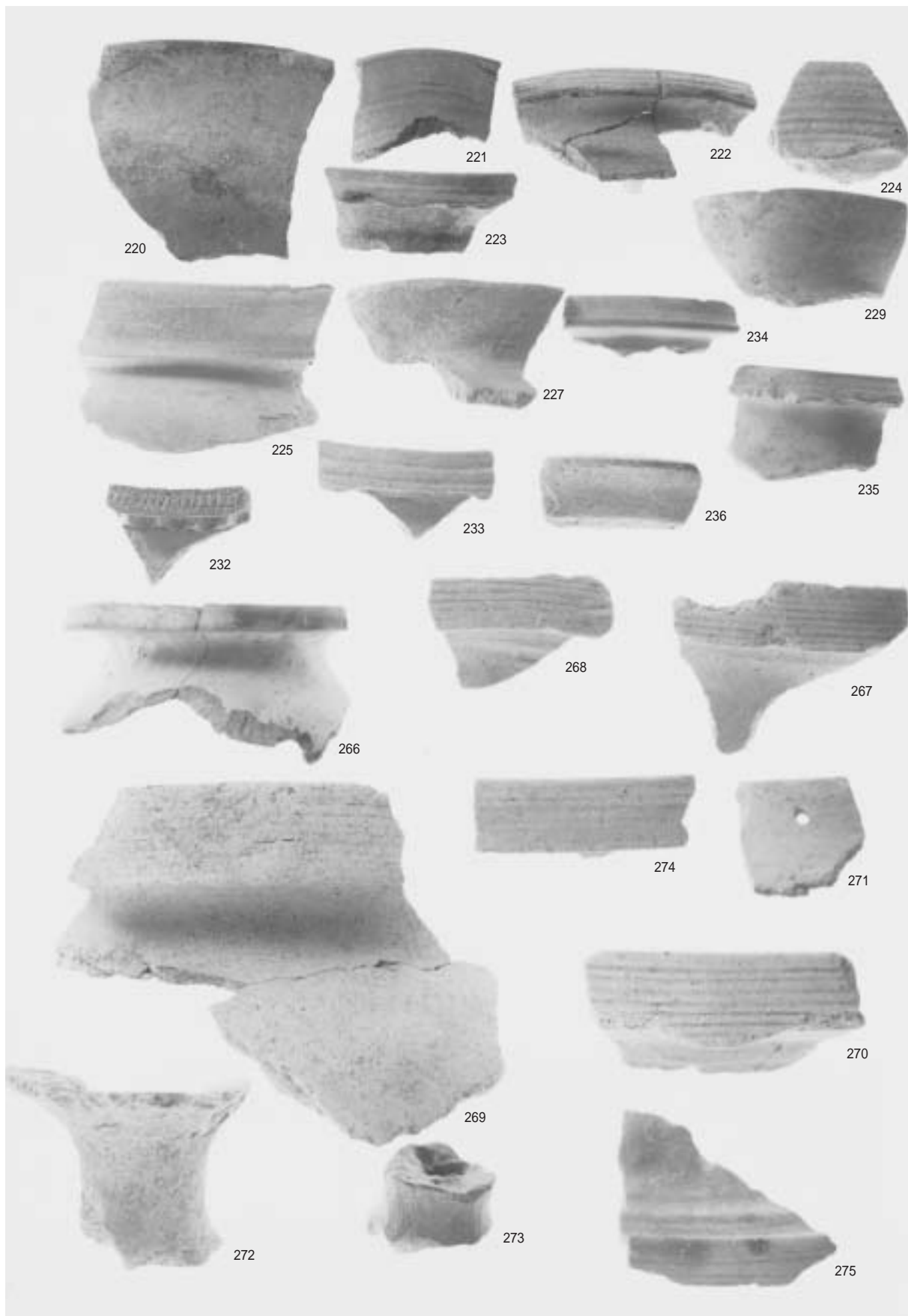
2 土坑 6 出土土器



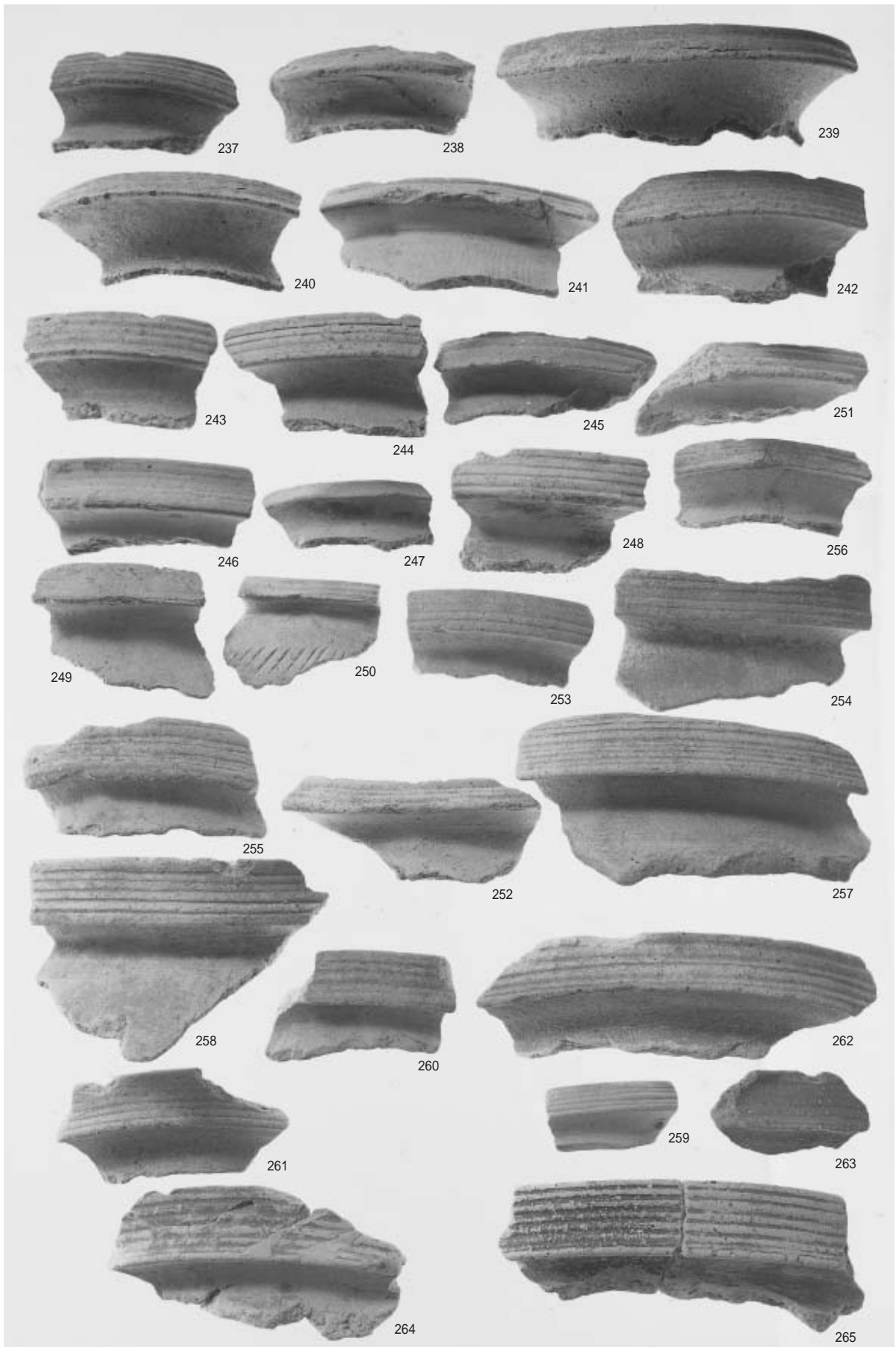
3 溝 1 上層出土土器



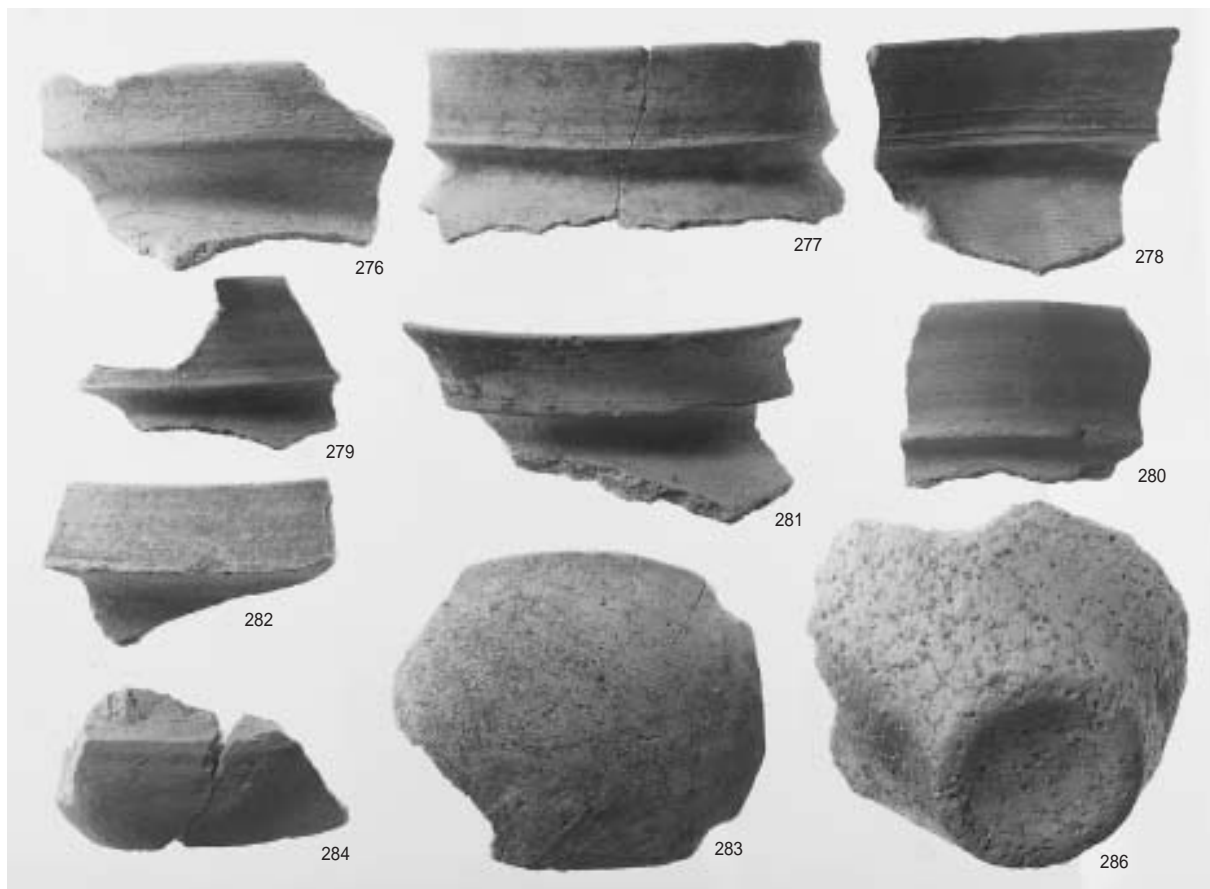
4 溝 1 下層出土土器



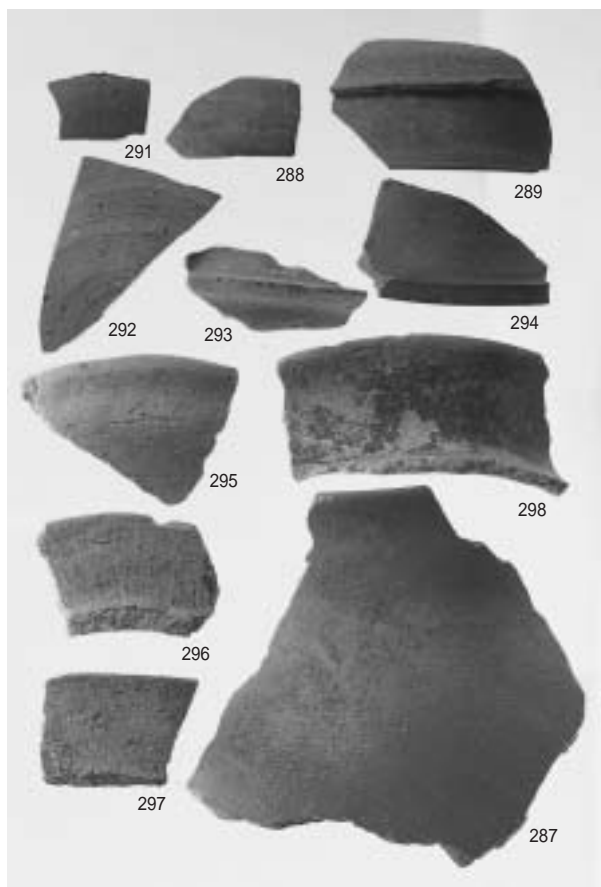
溝 1 出土土器 (1)



溝 1 出土土器 (2)



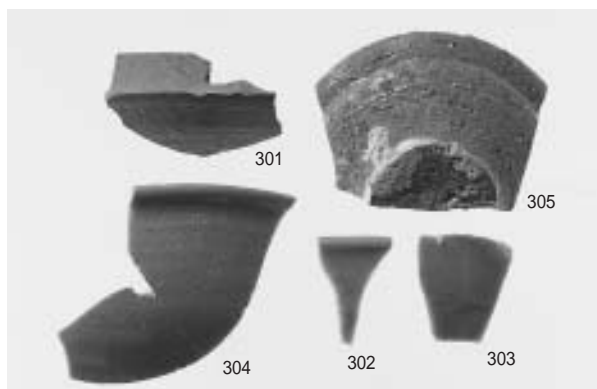
1 溝1出土土器(3)



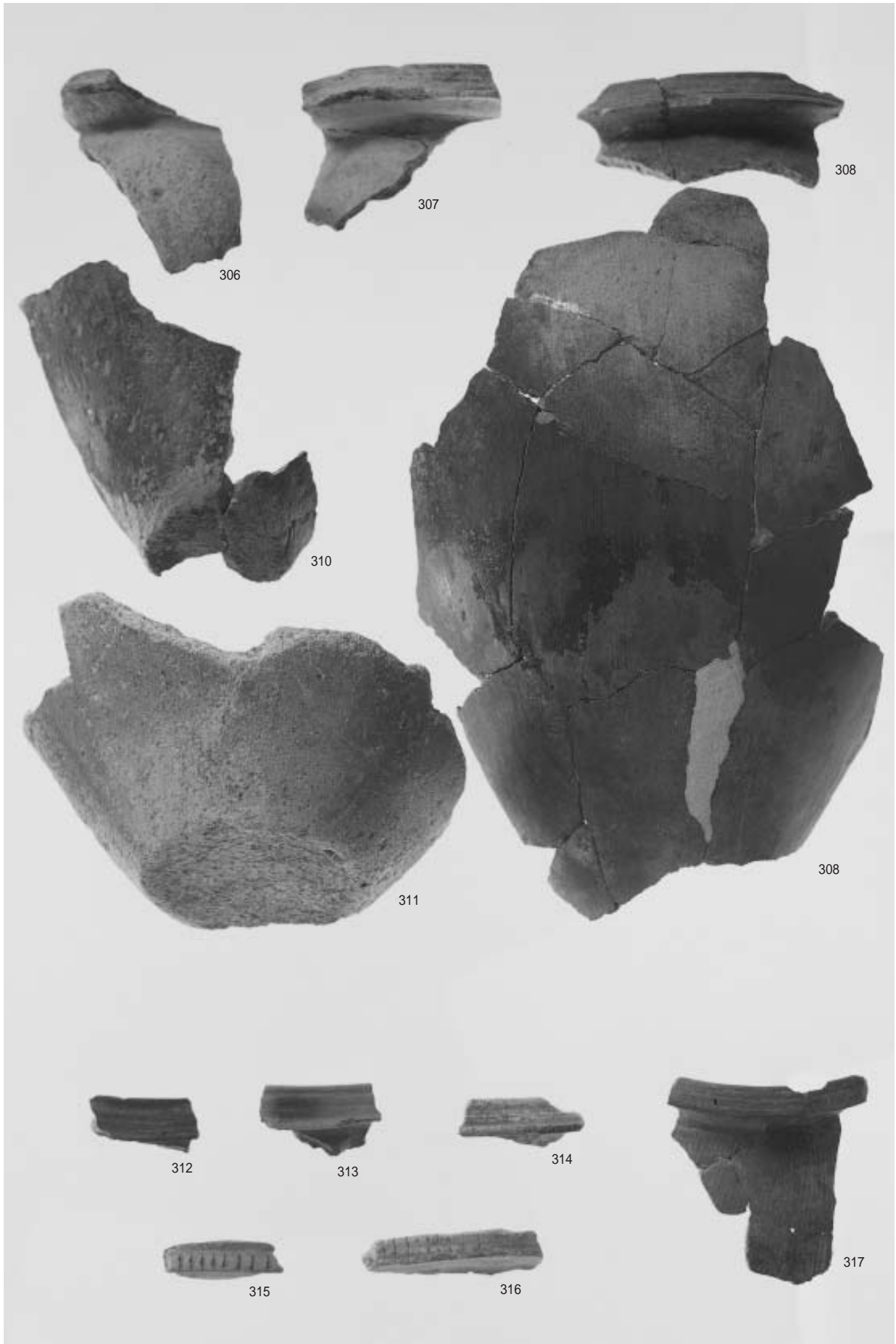
2 第1遺構面ピット出土土器



3 第1遺構面遺構外出土土器(1)



4 第1遺構面遺構外出土土器(2)



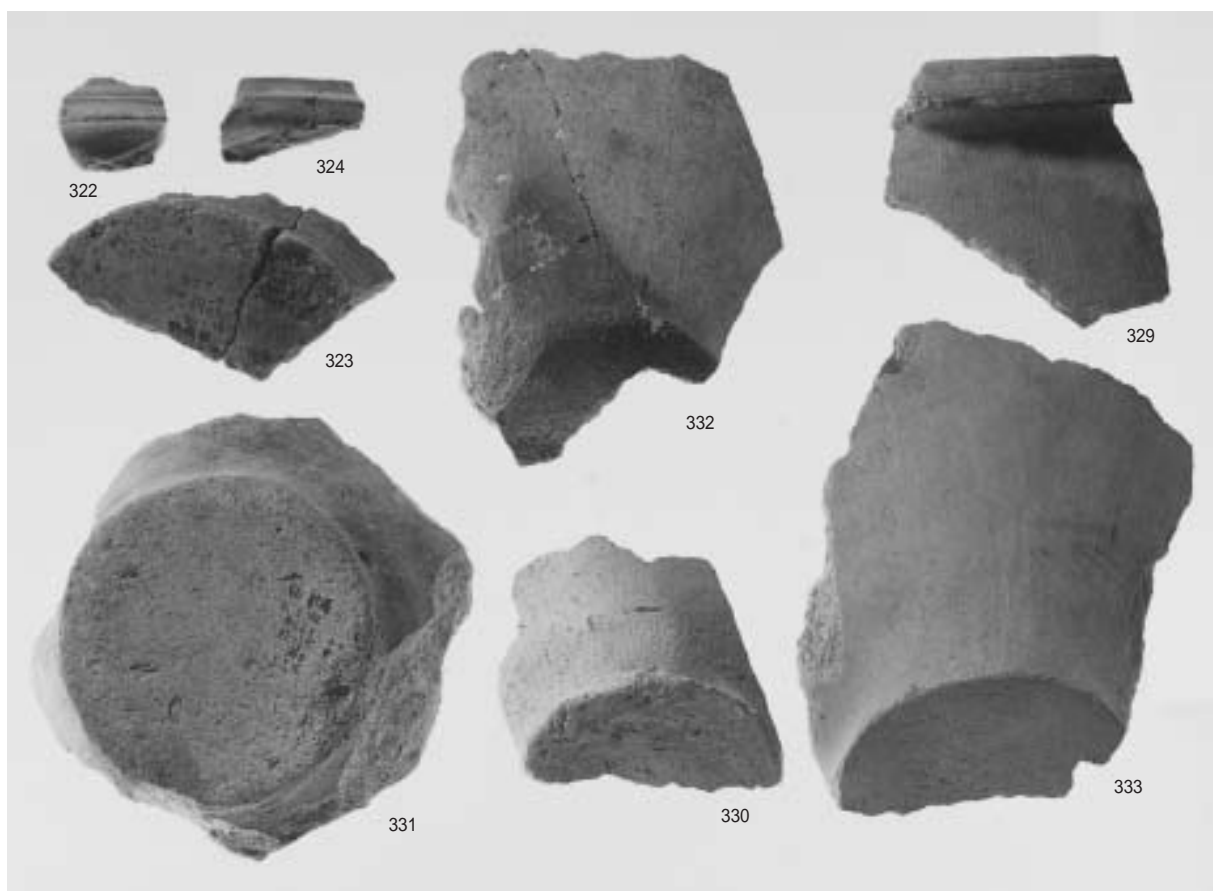
豎穴住居4・5出土土器



1 豎穴住居 4 出土土器



2 豎穴住居 5 出土土器



3 豎穴 3・4・5 出土土器



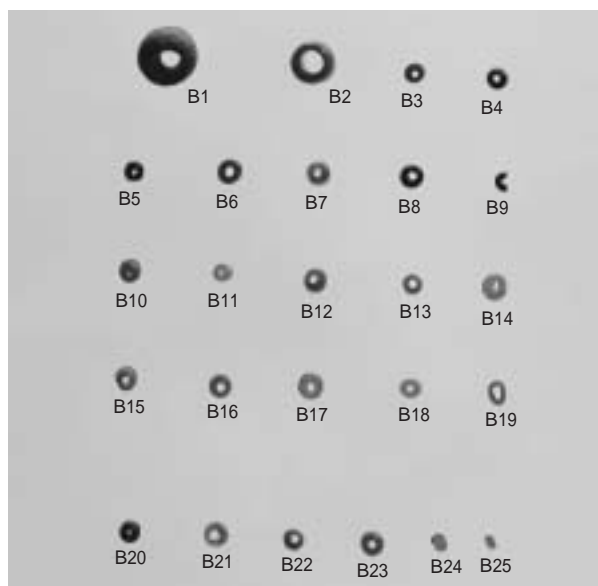
1 豎穴5出土土器



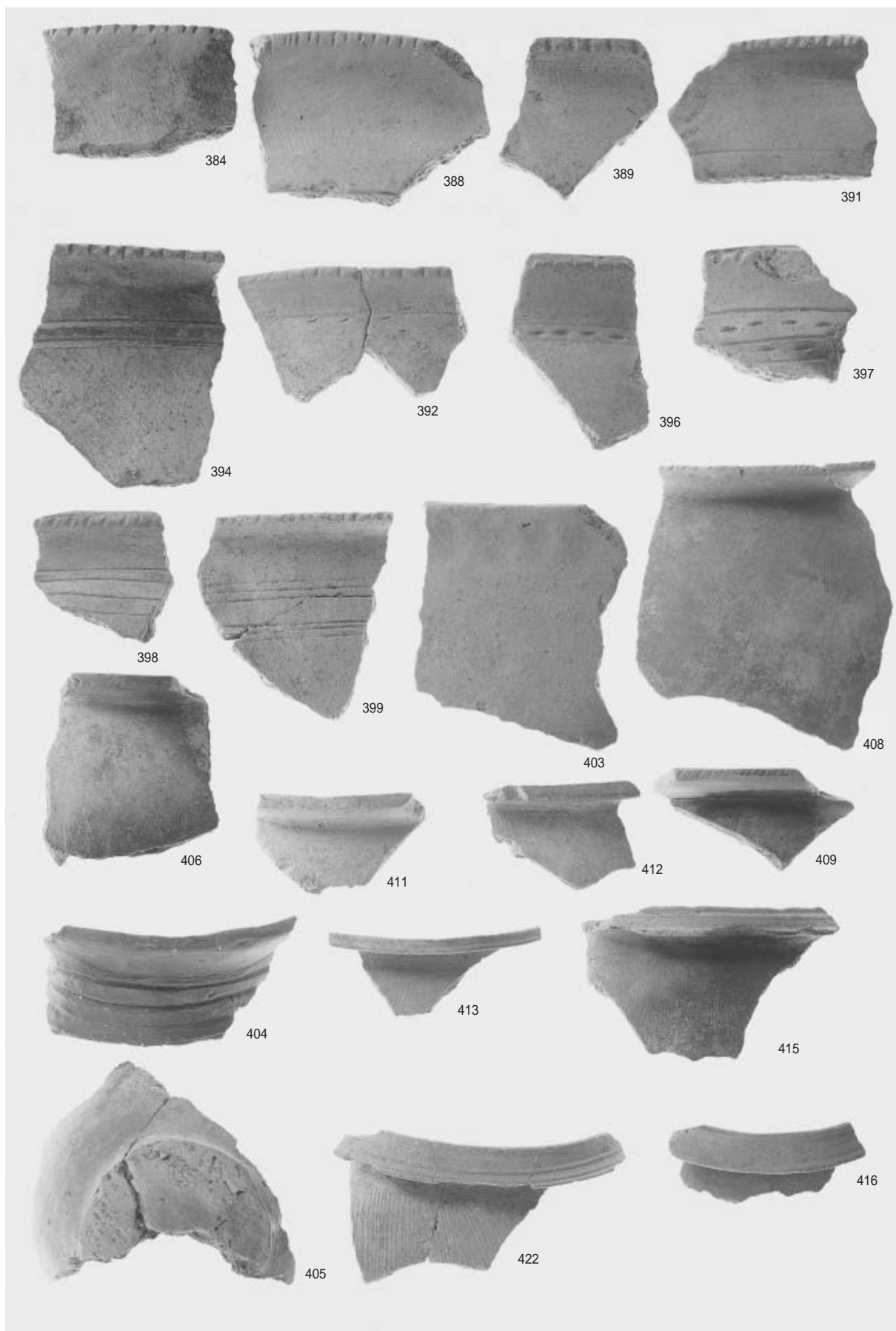
2 豎穴4出土土器



3 土坑20出土土器



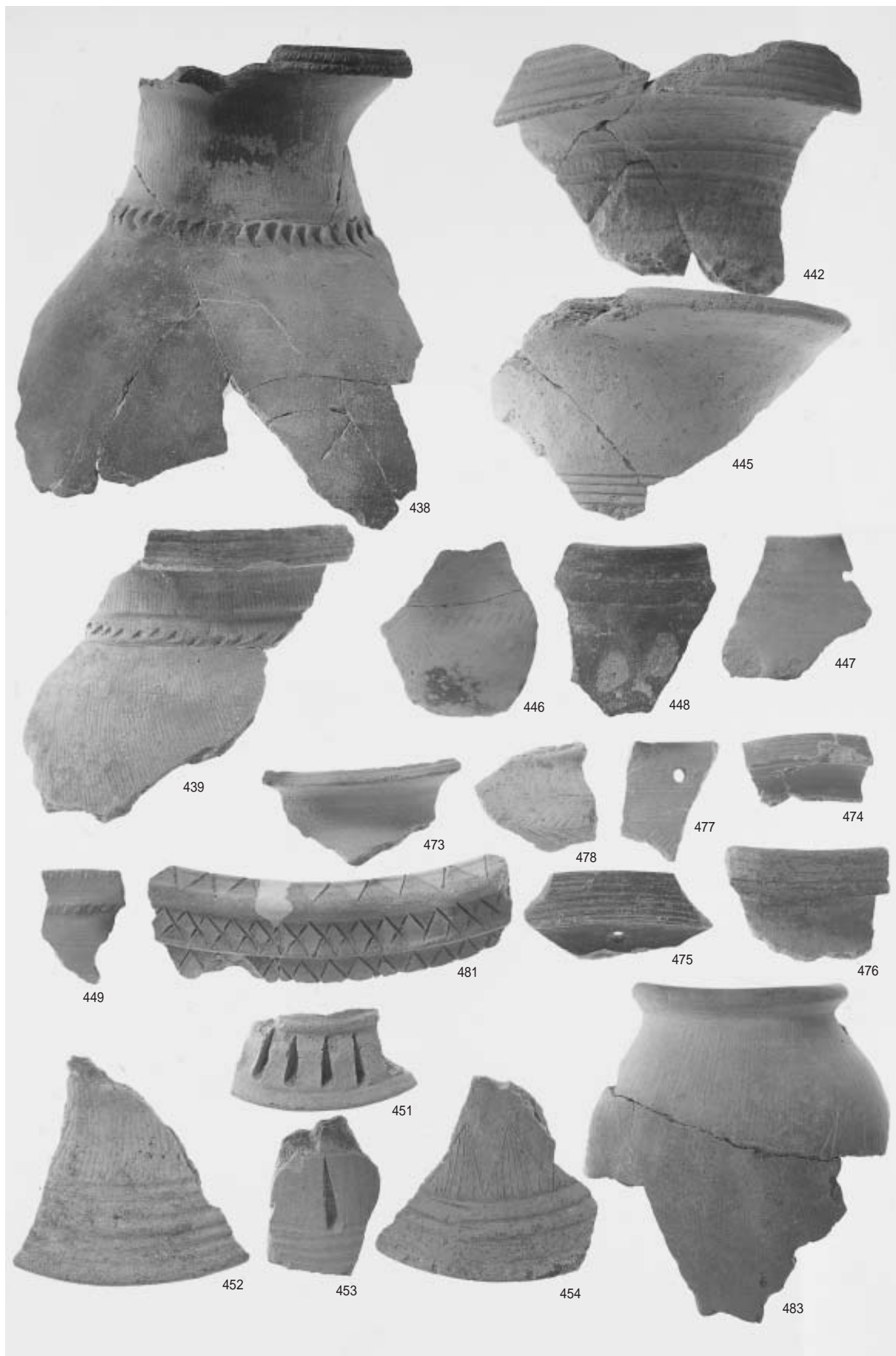
4 豎穴住居6・土坑21出土玉類



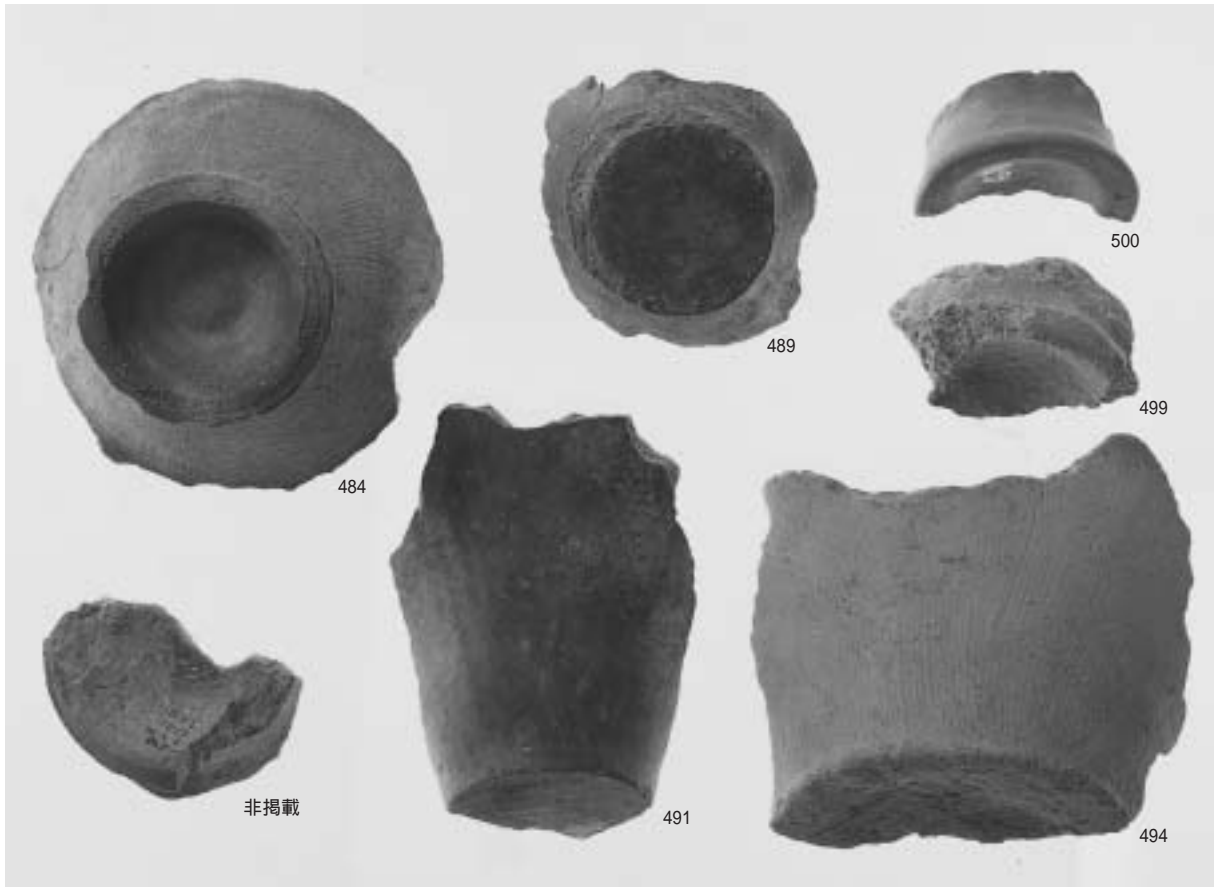
第3 調査地包含層出土弥生土器 (1)



第3調查地包含層出土弥生土器(2)



第3 調査地包含層出土弥生土器 (3)



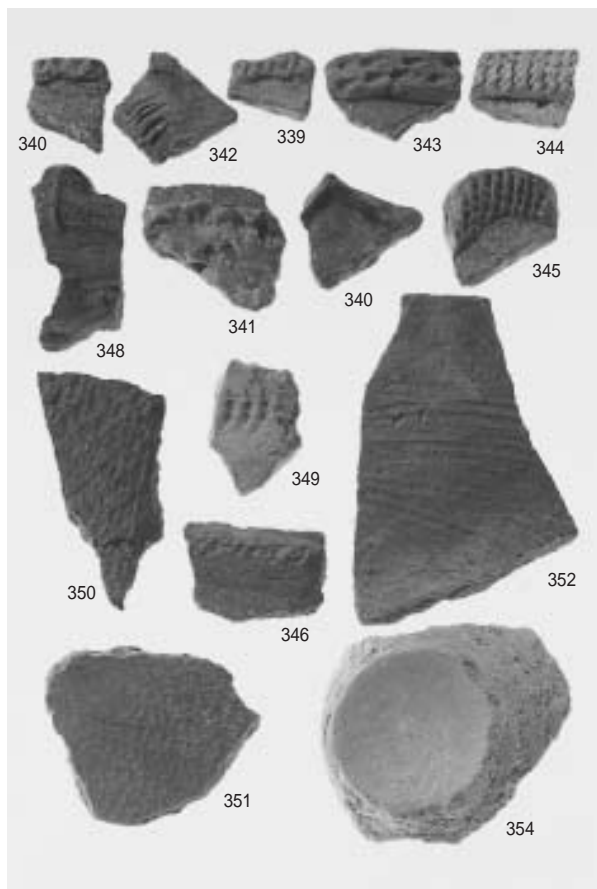
1 第3調査地包含層出土弥生土器(4)



2 第3調査地包含層出土弥生土器(5)



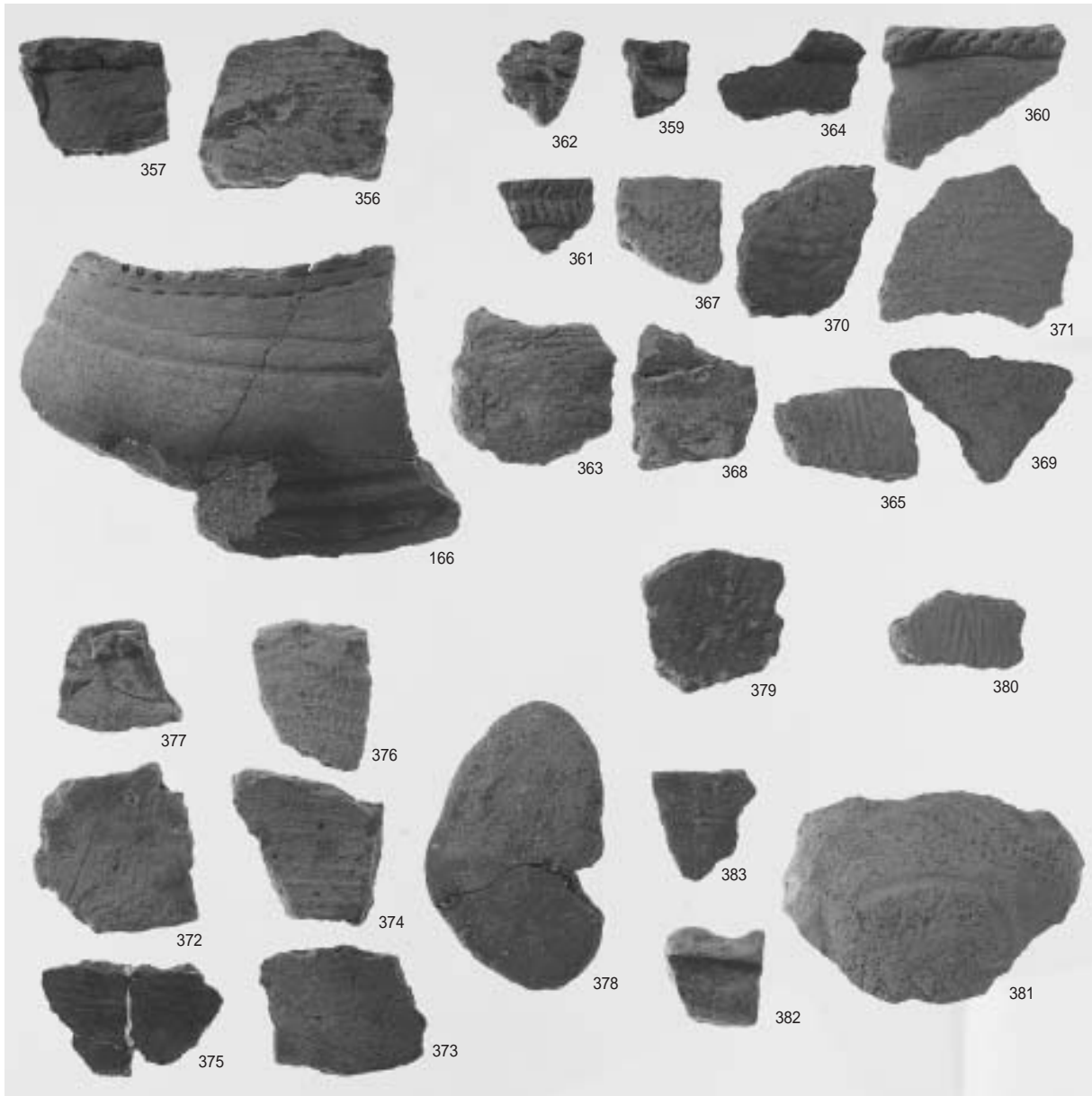
1 土坑22出土土器(1)



2 土坑22出土土器(2)



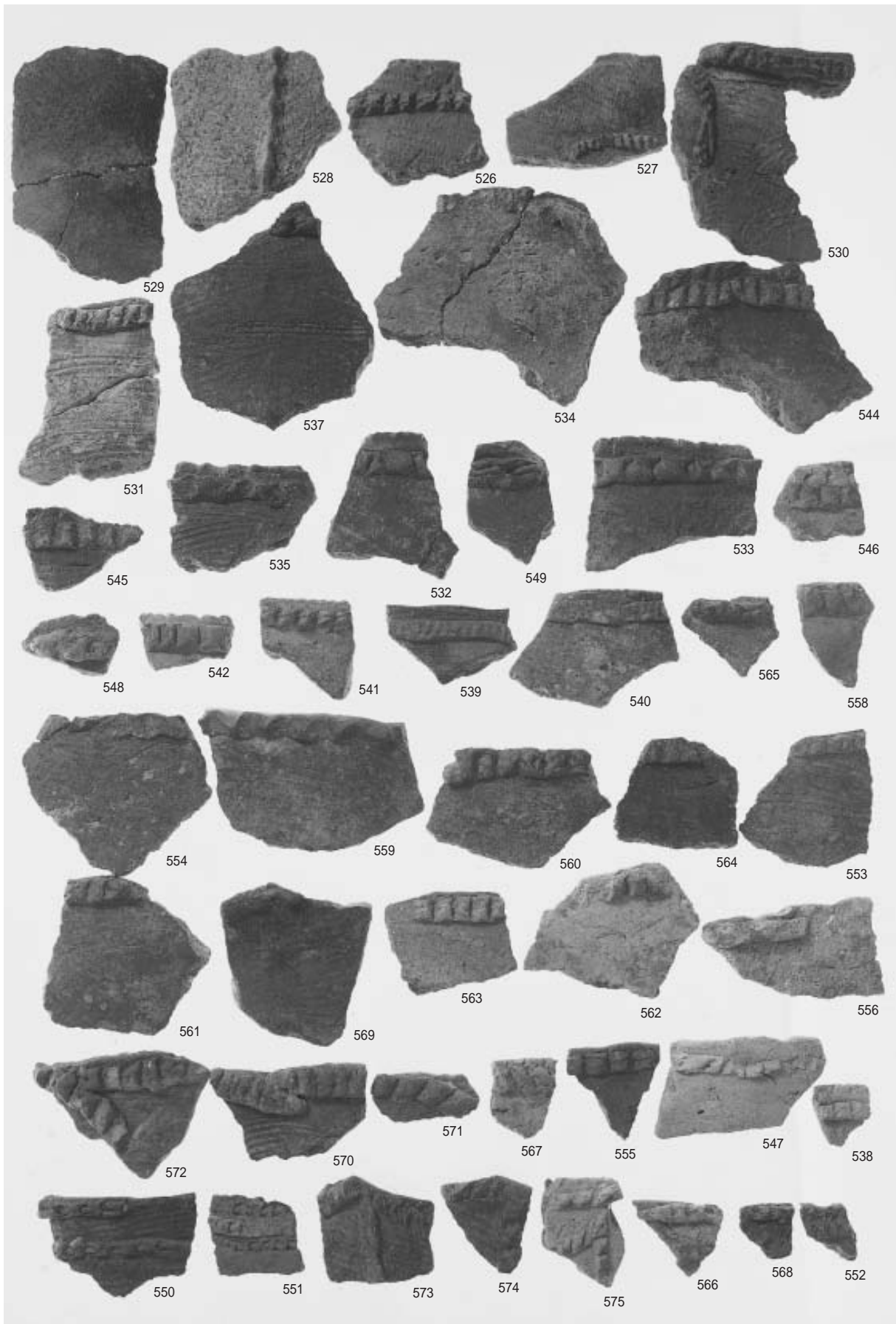
3 土坑23出土土器



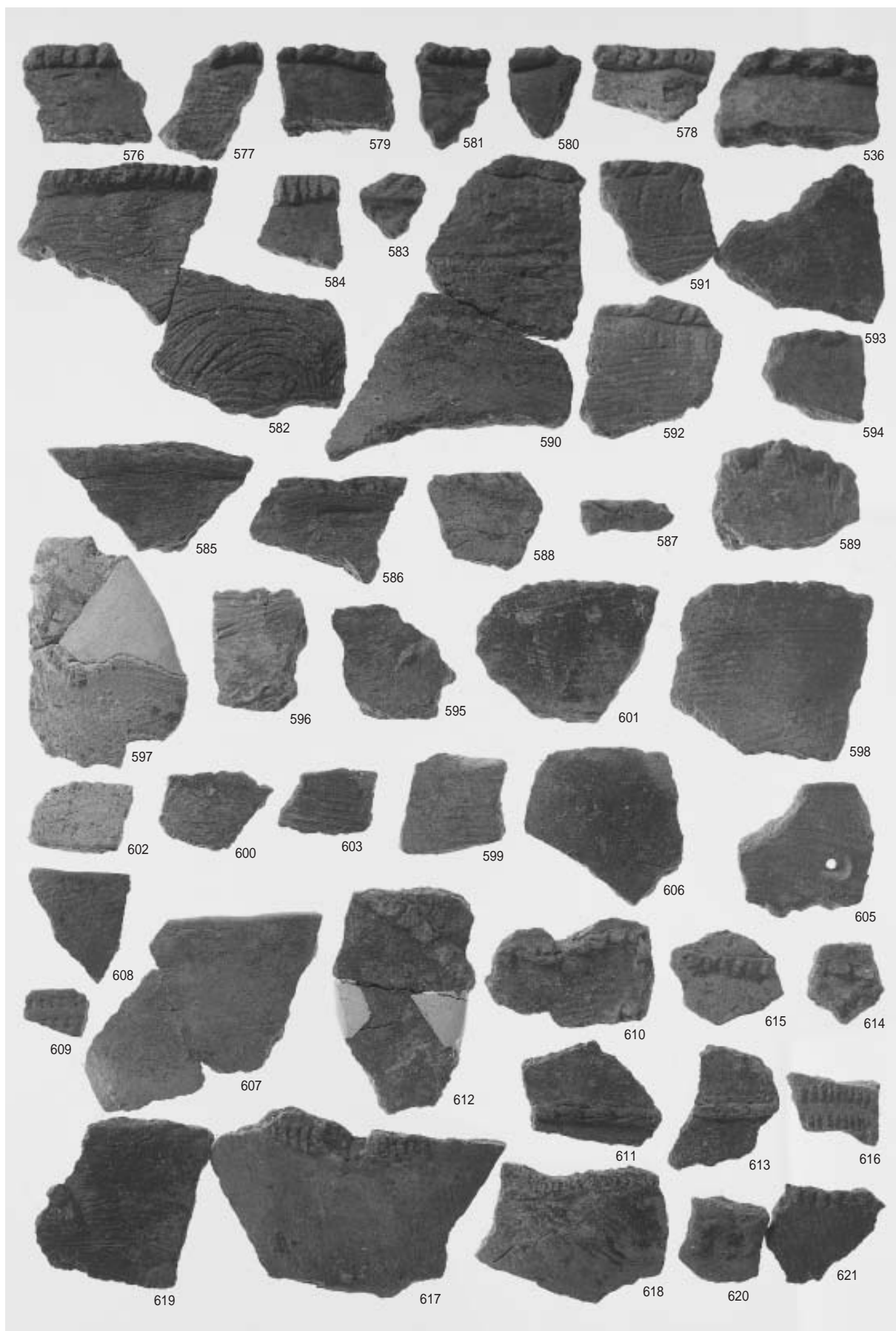
1 土坑24~28出土土器



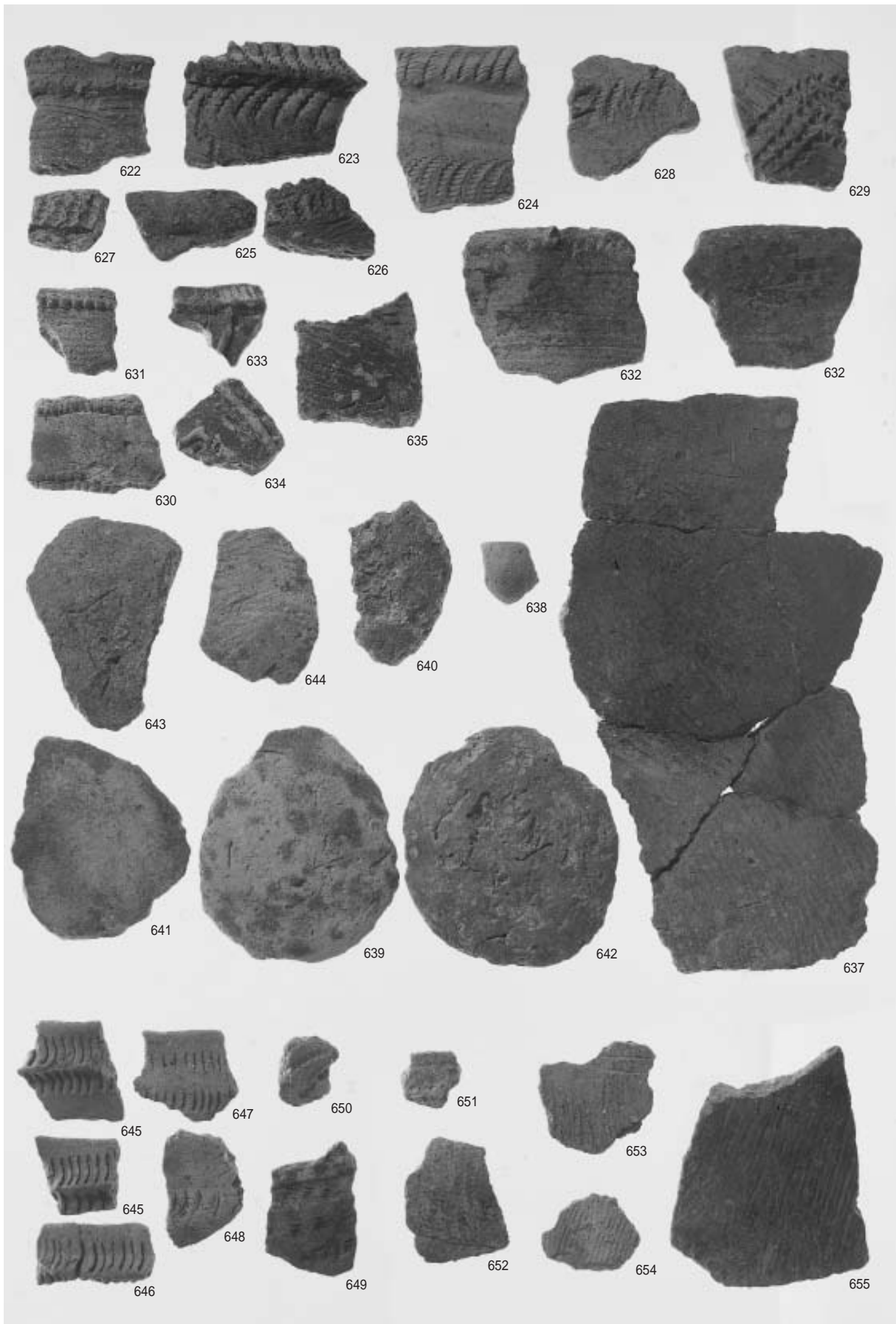
2 第3調査地包含層出土
縄文土器(1)



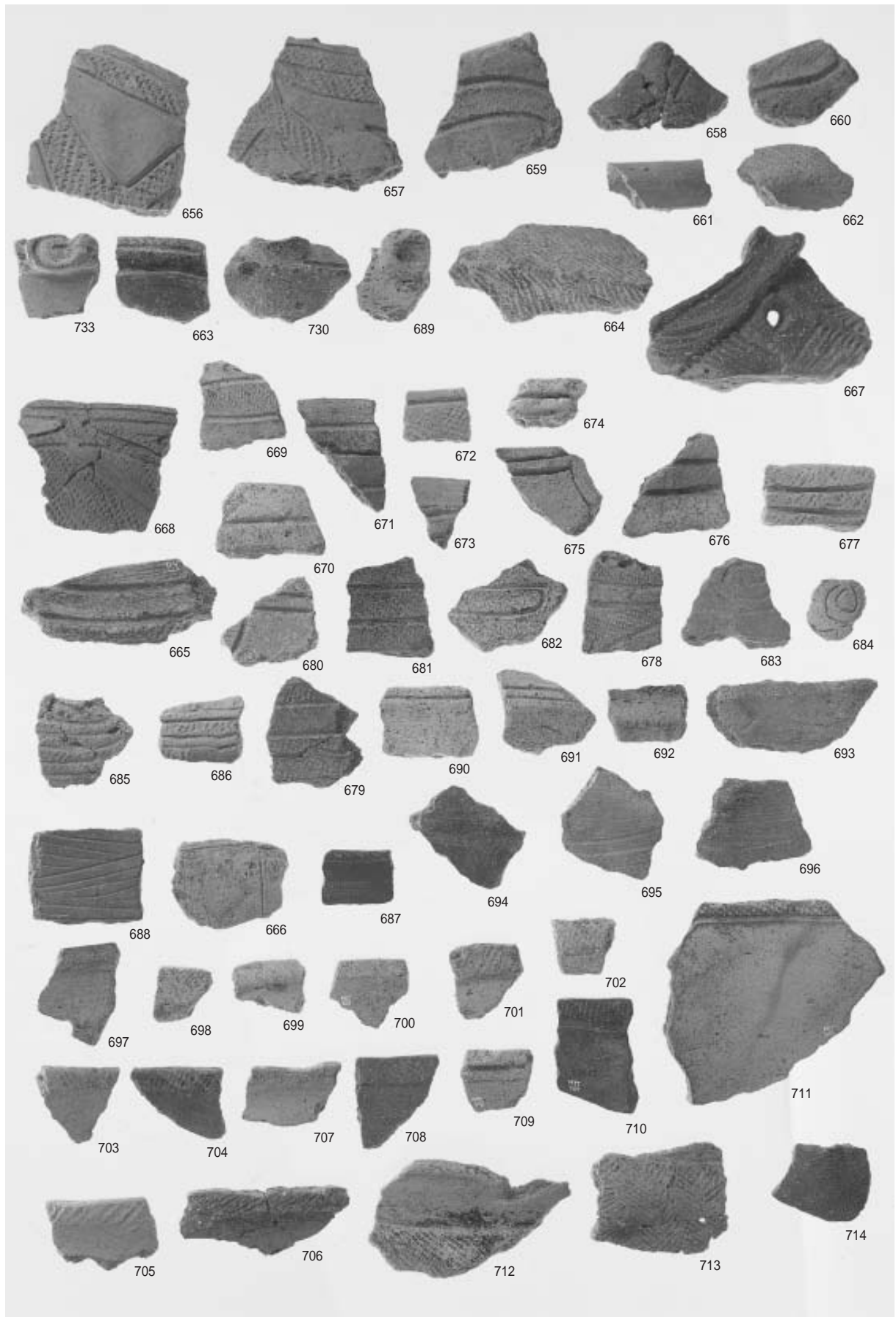
第3調查地包含層出土繩文土器(3)



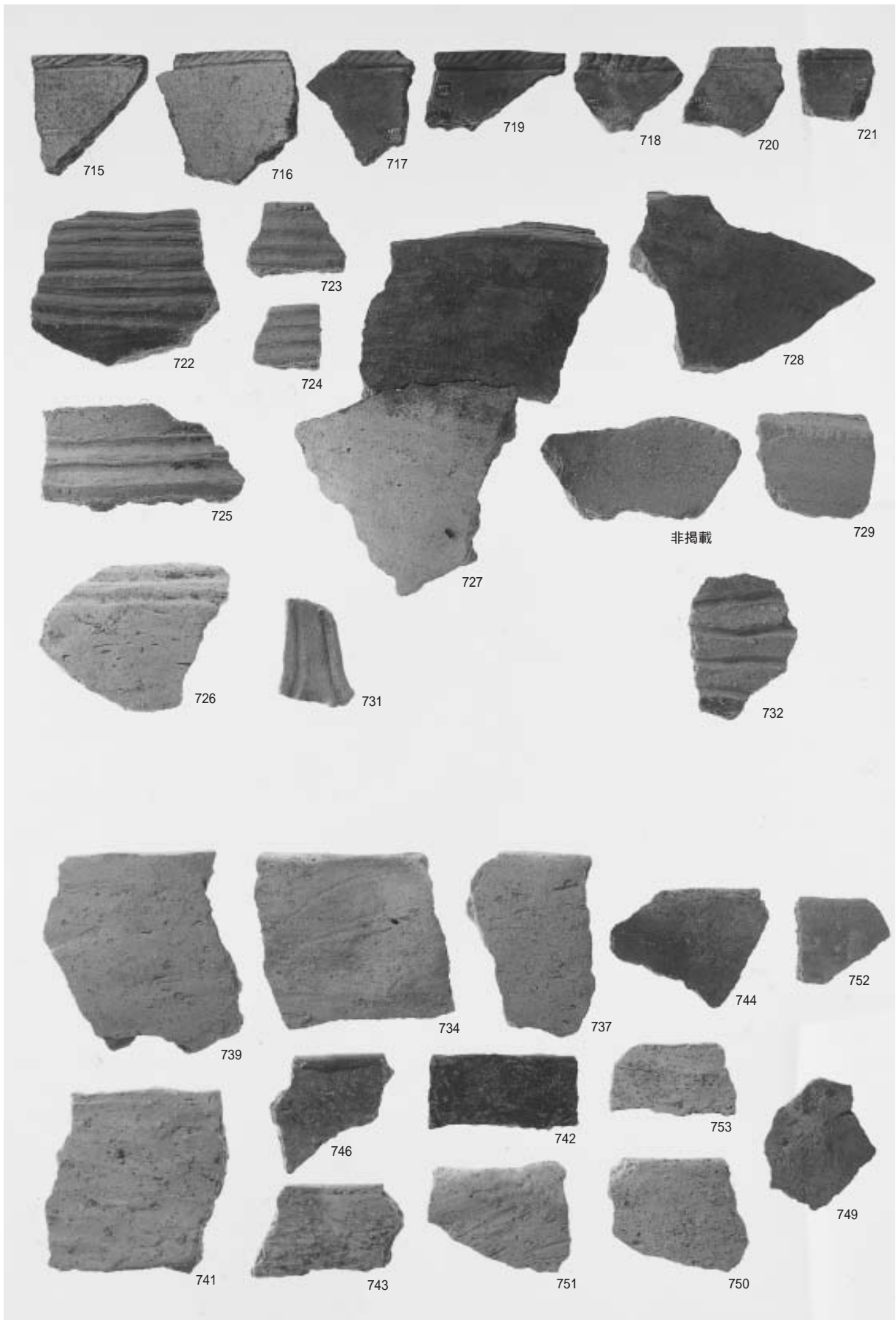
第3 調査地包含層出土縄文土器 (4)



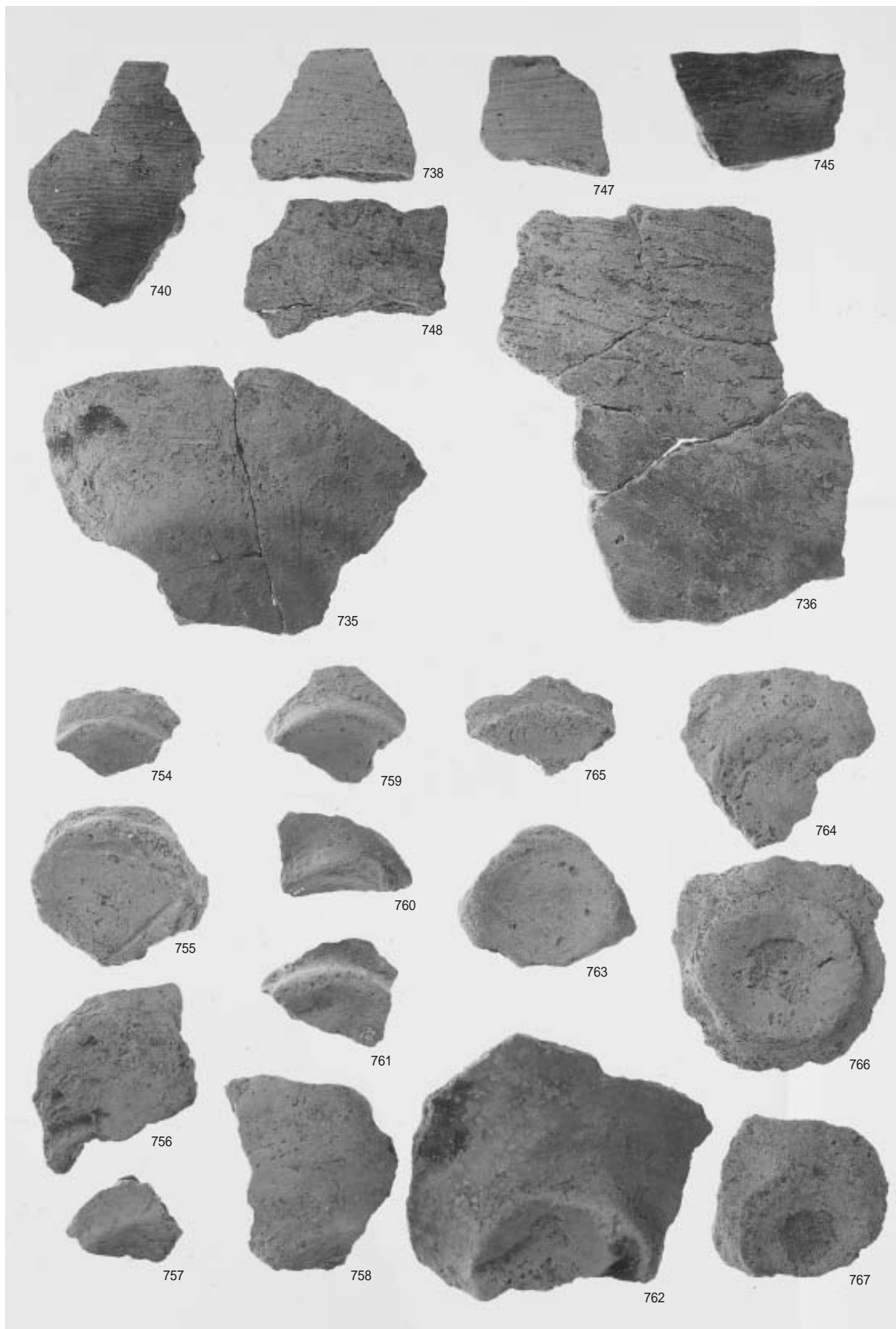
第3調查地包含層出土繩文土器(5)



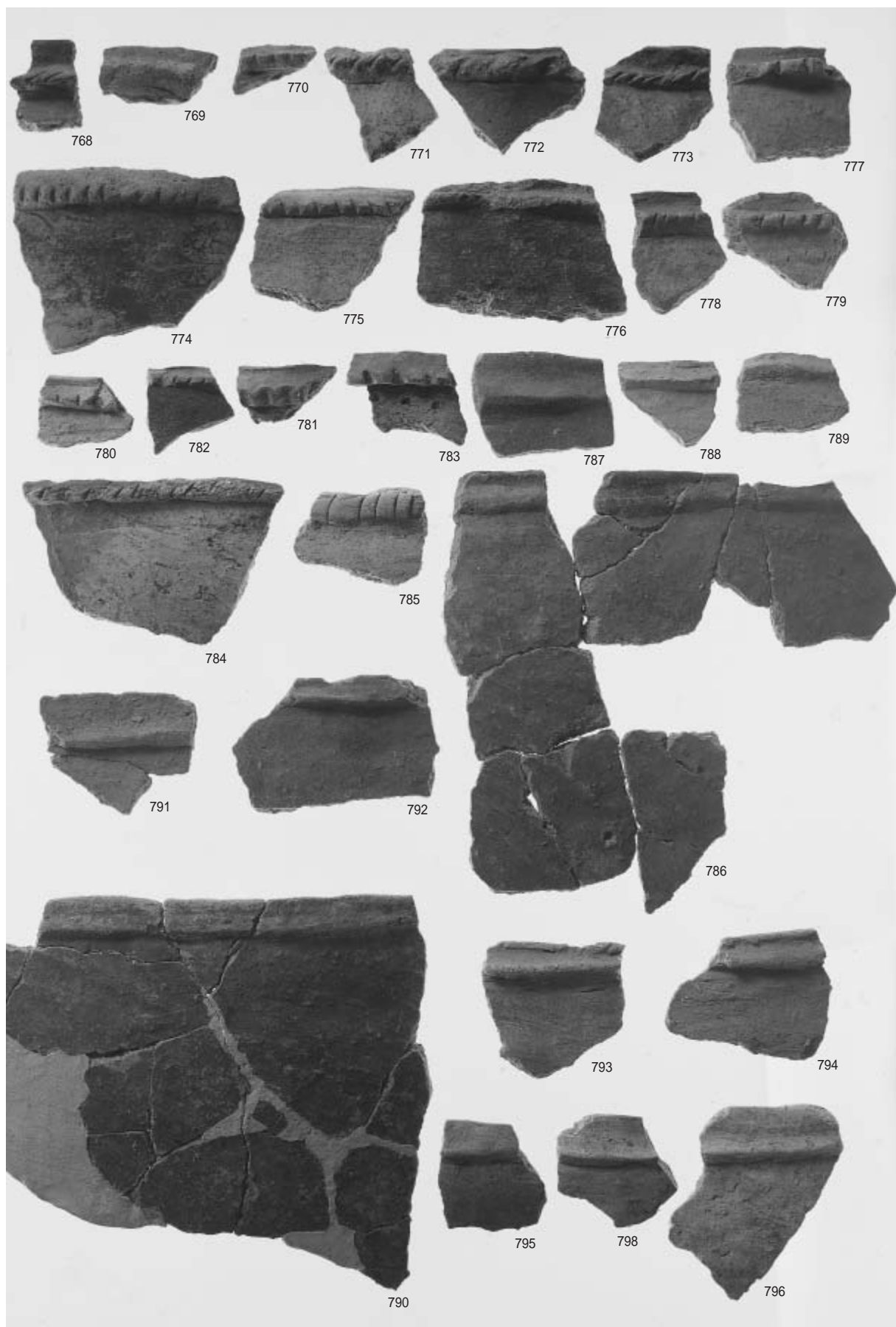
第3 調査地包含層出土縄文土器 (6)



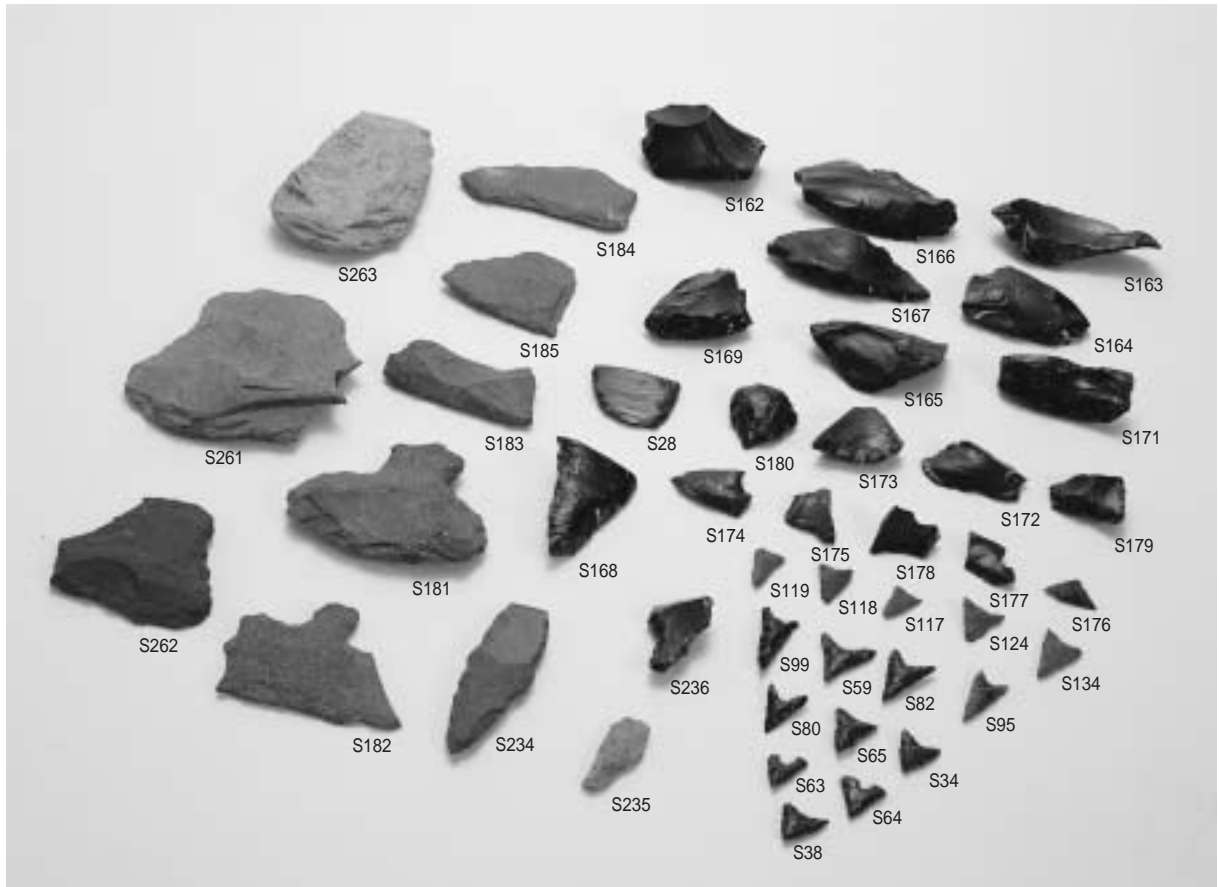
第3調査地包含層出土縄文土器(7)



第3 調査地包含層出土縄文土器 (8)



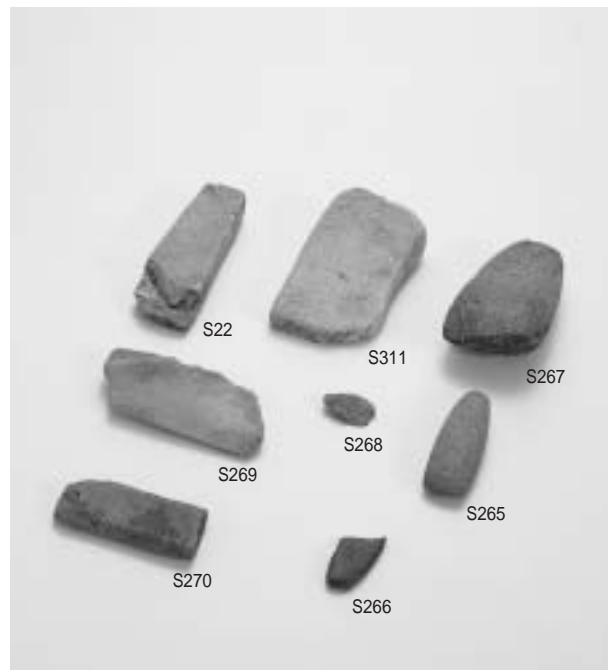
第3調查地包含層出土繩文土器(9)



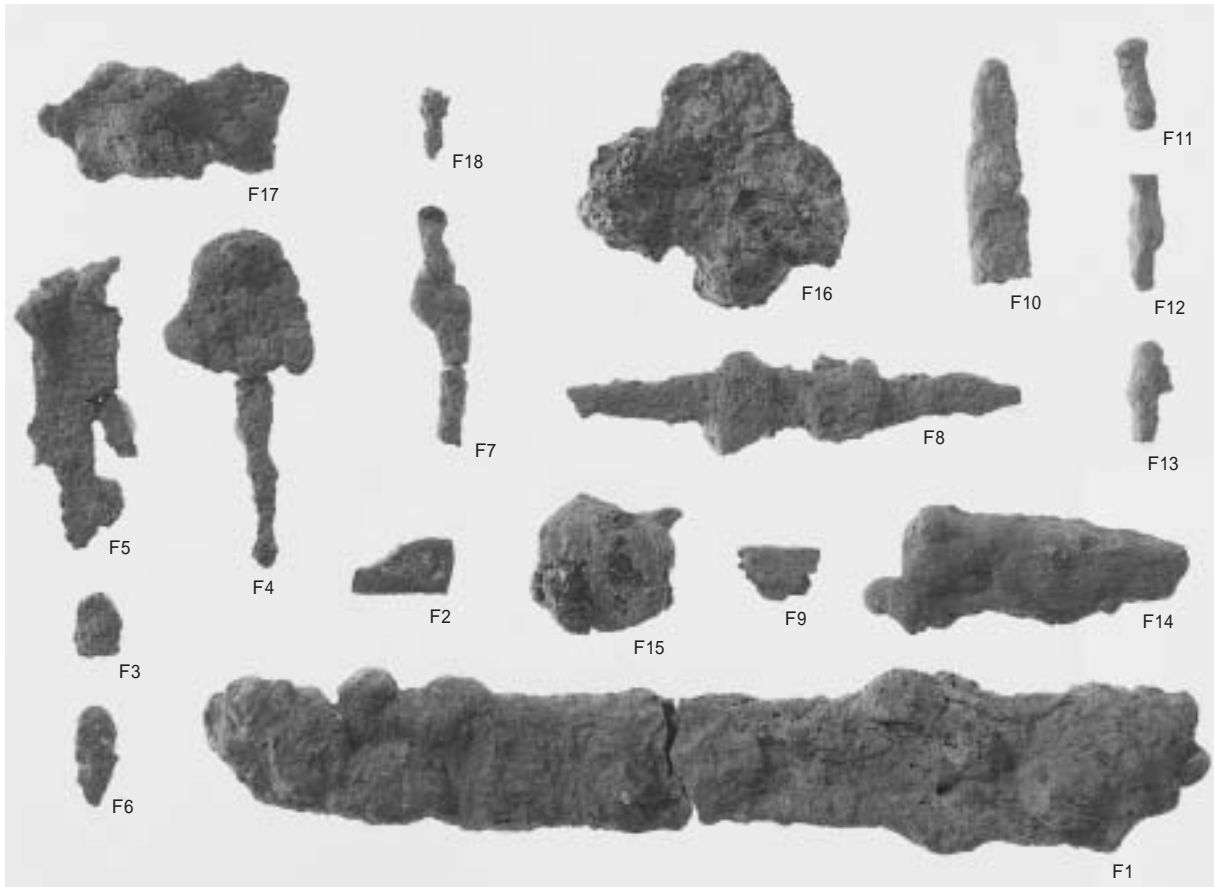
1 第3調查地包含層出土石器器種



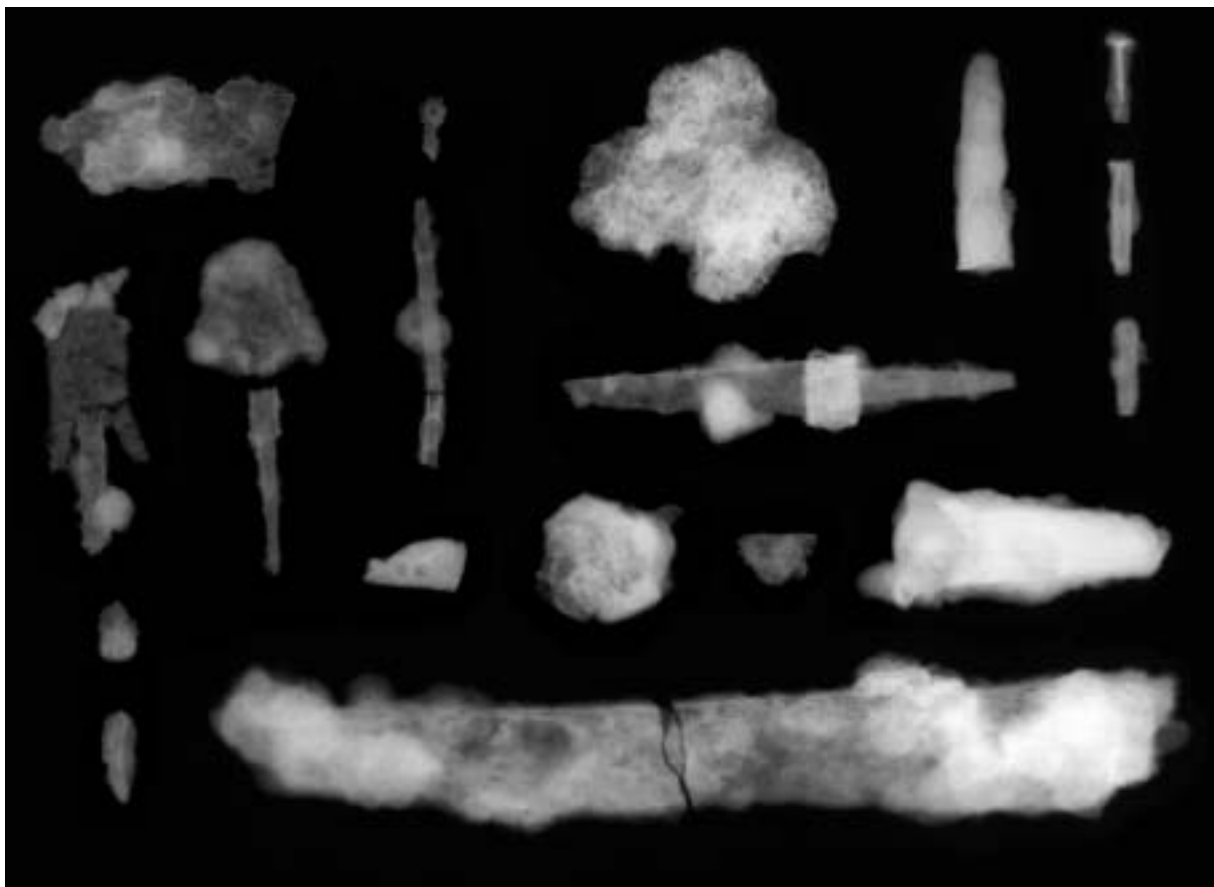
2 第3調查地包含層出土石核類



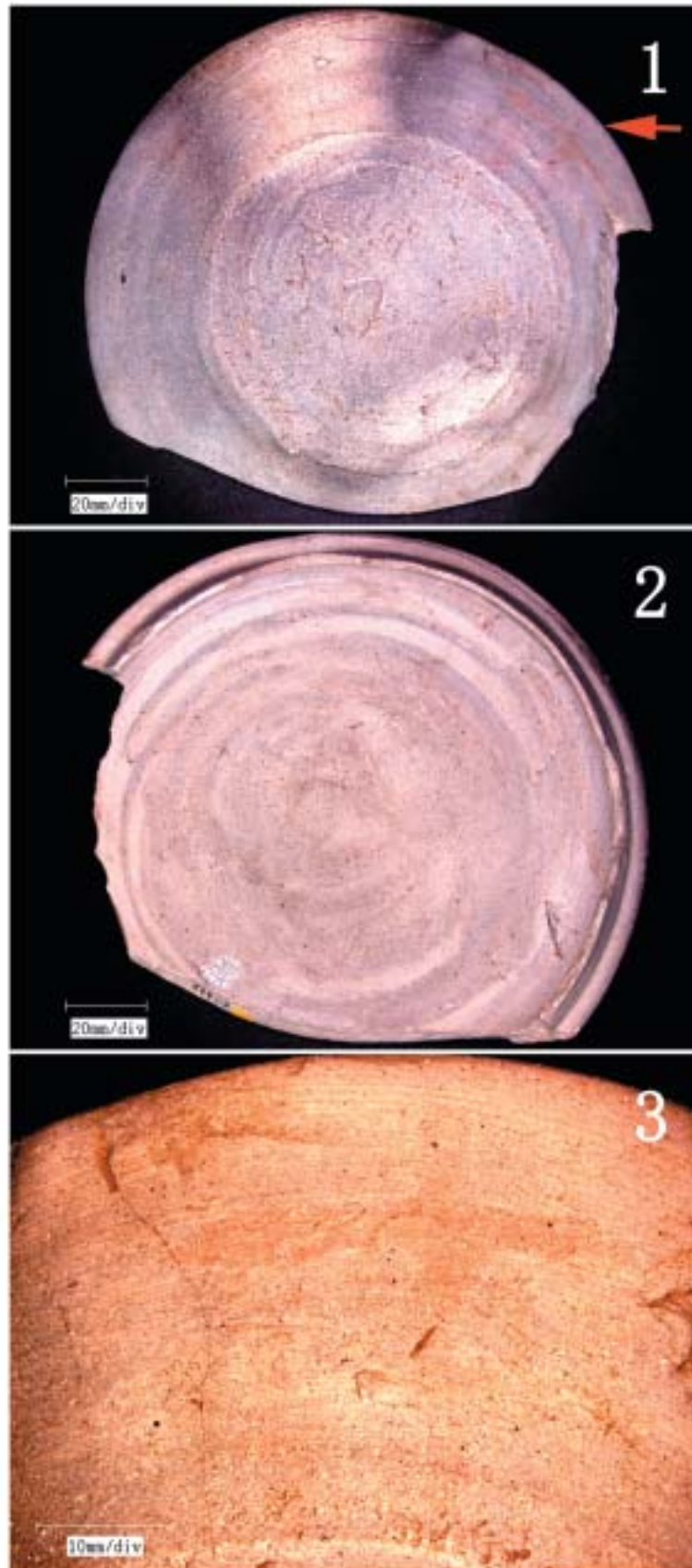
3 第3調查地出土磨製石器・砥石



1 第3調査地出土鉄製品・製鉄関連遺物

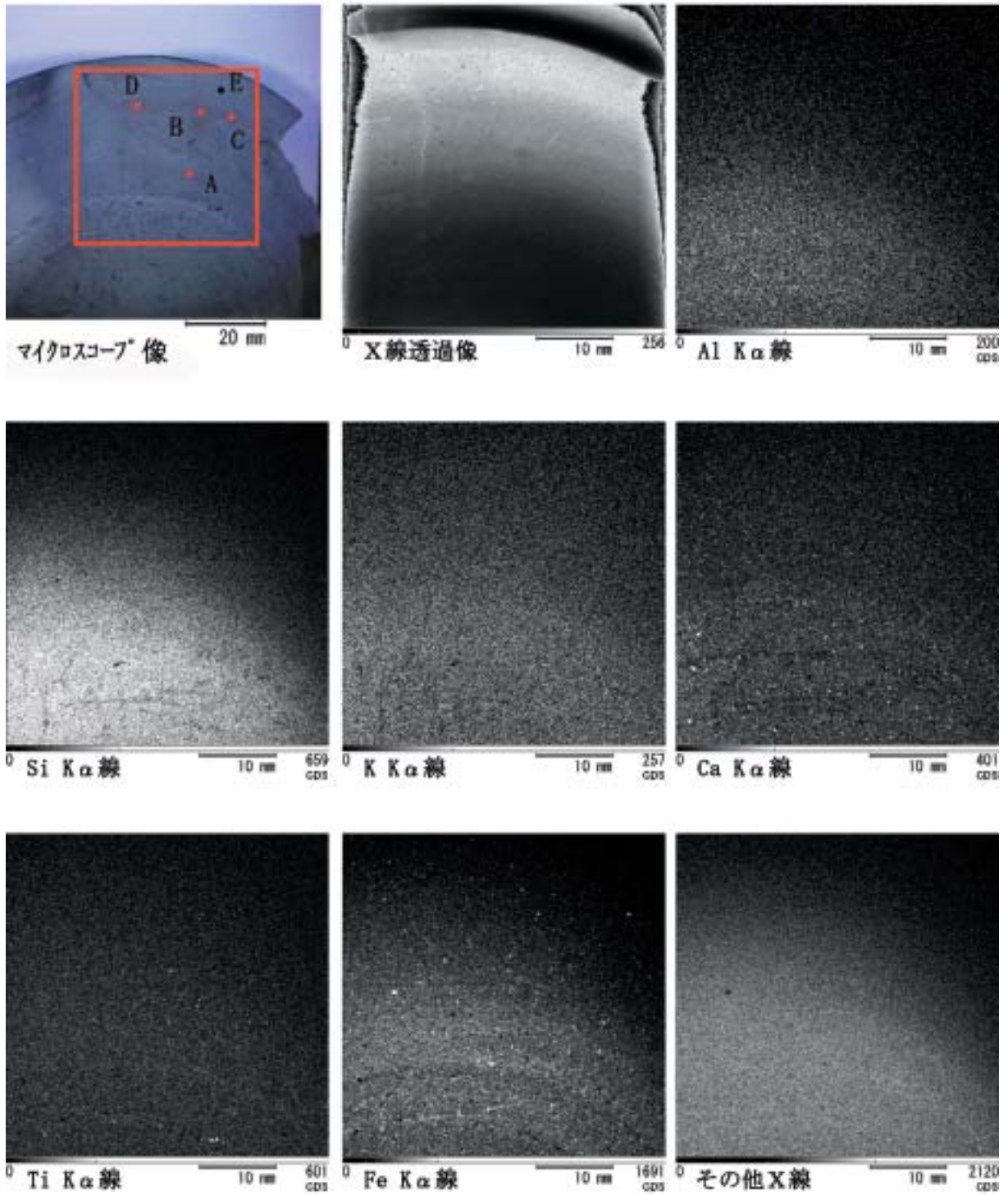


2 第3調査地出土鉄製品・製鉄関連遺物X線写真



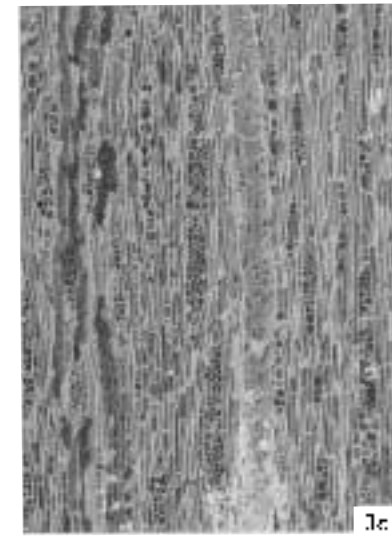
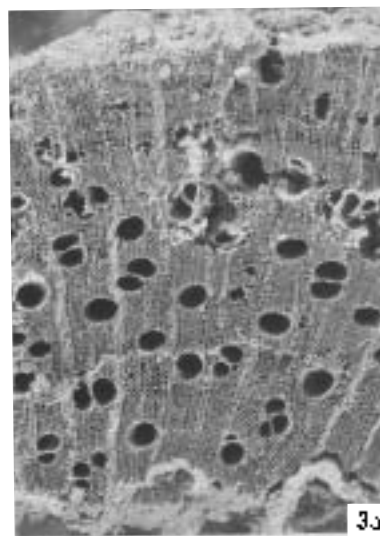
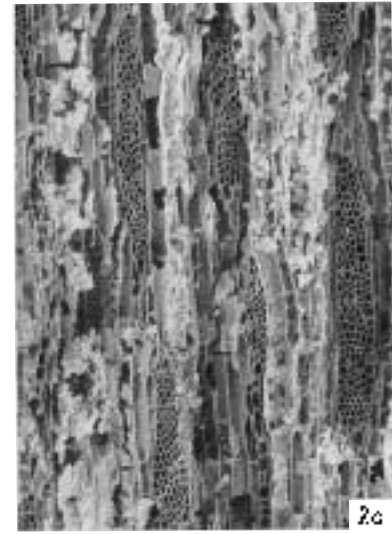
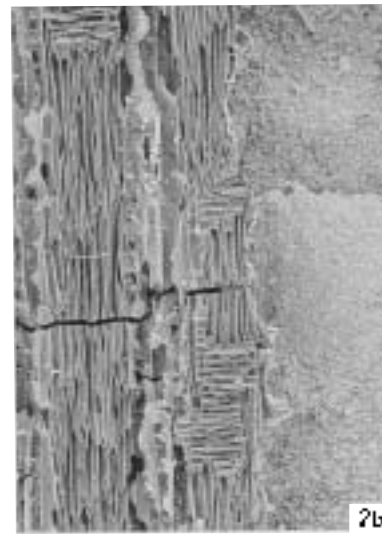
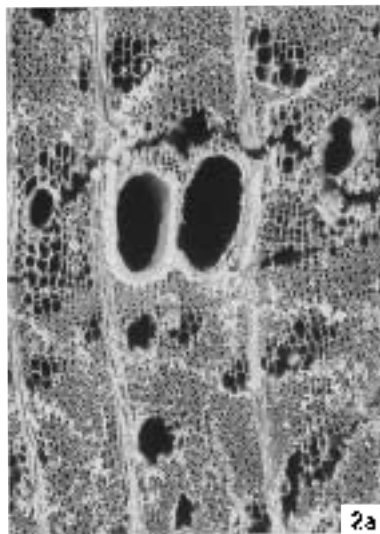
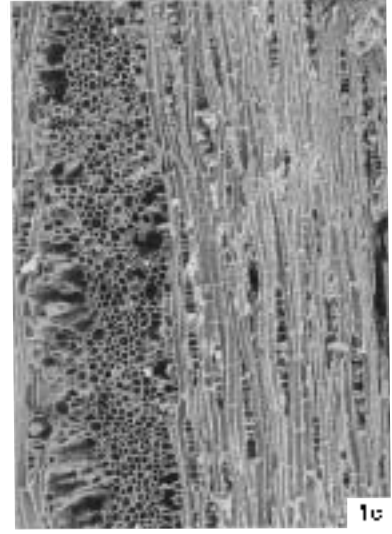
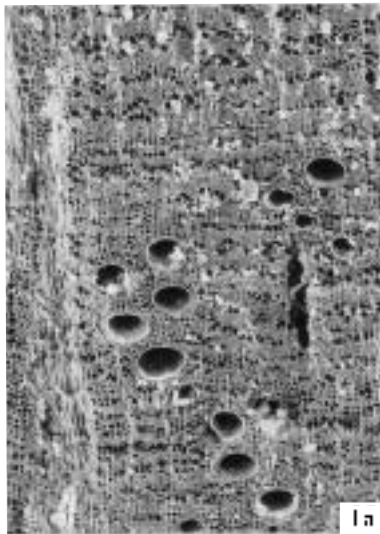
赤色顔料付着須恵器杯のマイクロスコブ写真

特論図版 2





赤色顔料付着須恵器杯身の元素マッピング図

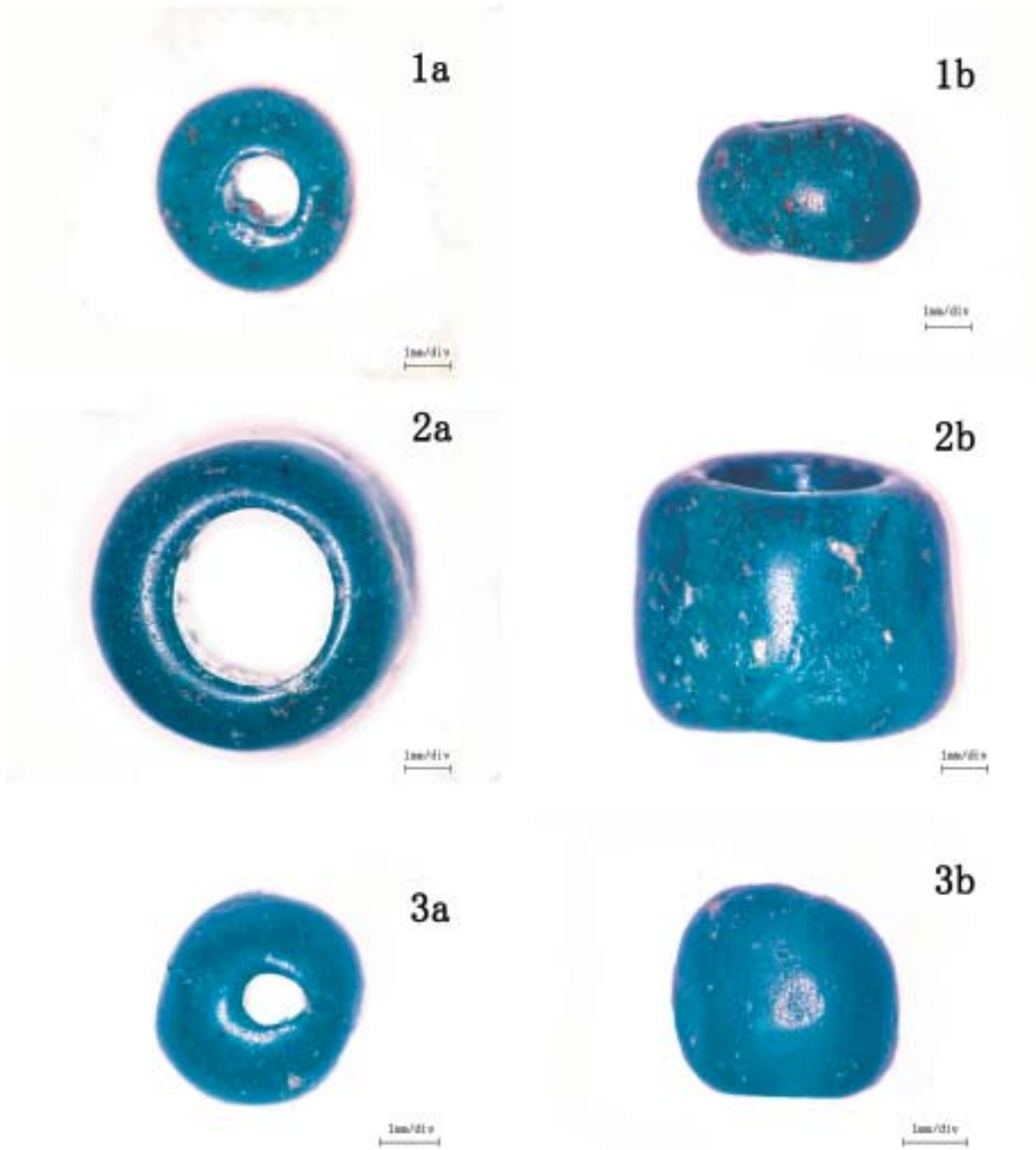
(マイクロSCOOP像の四角部分はマッピング範囲を示し、
記号はポイント分析位置を示す)



- 1 コナツ属アカガシ亜属 (SI4 No. 5)
- 2 ケヤキ (SI4 No. 3)
- 3 メルデ近似種 (SI4 No. 6)
- a 木口, b 径目, c 板目

 200 μ m a
 200 μ m b, c

豎穴 2 出土炭化材顕微鏡写真



ガラス小玉（ 1 ~ 3 ）のマイクロスコープ写真(1)

4a



4b



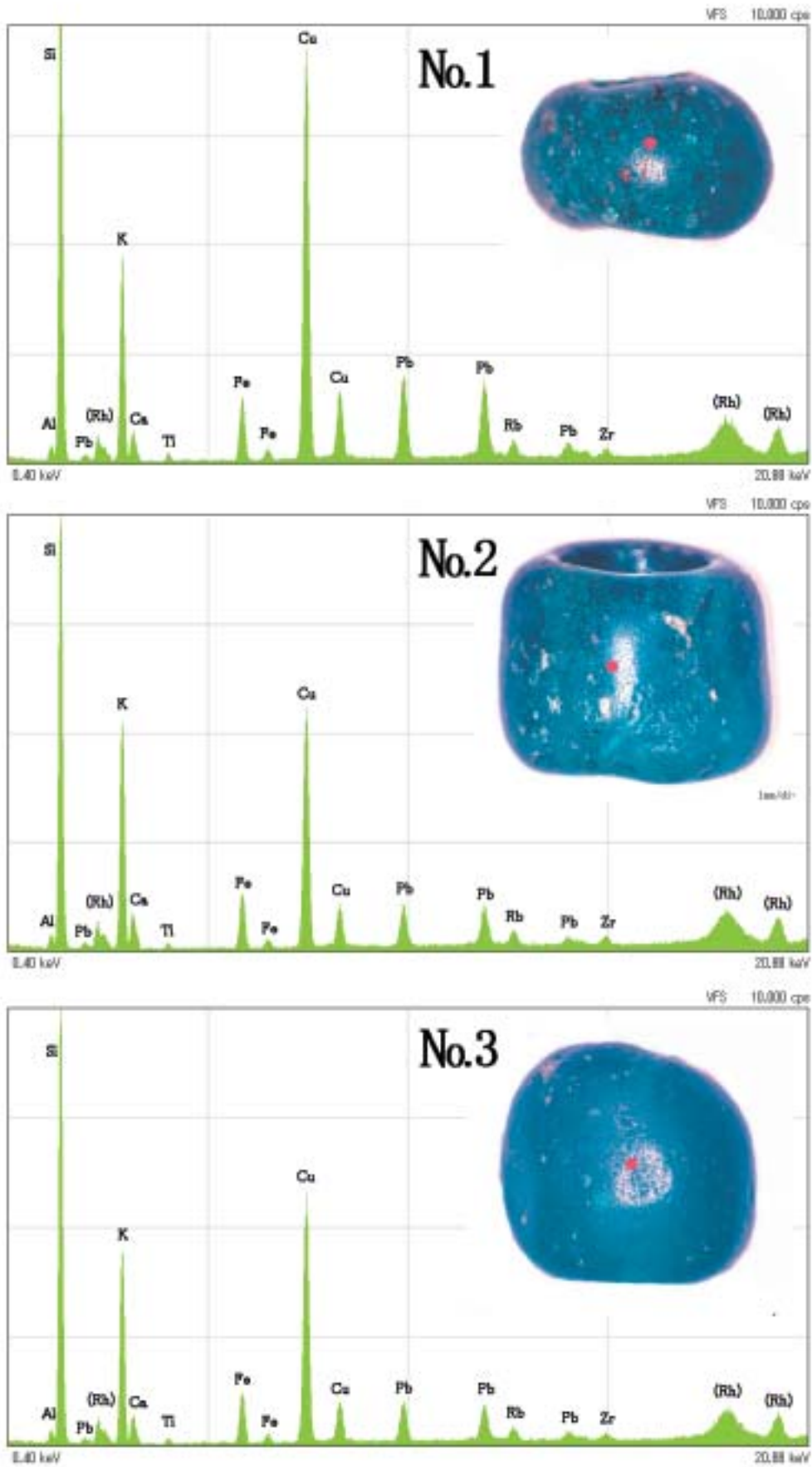
5a



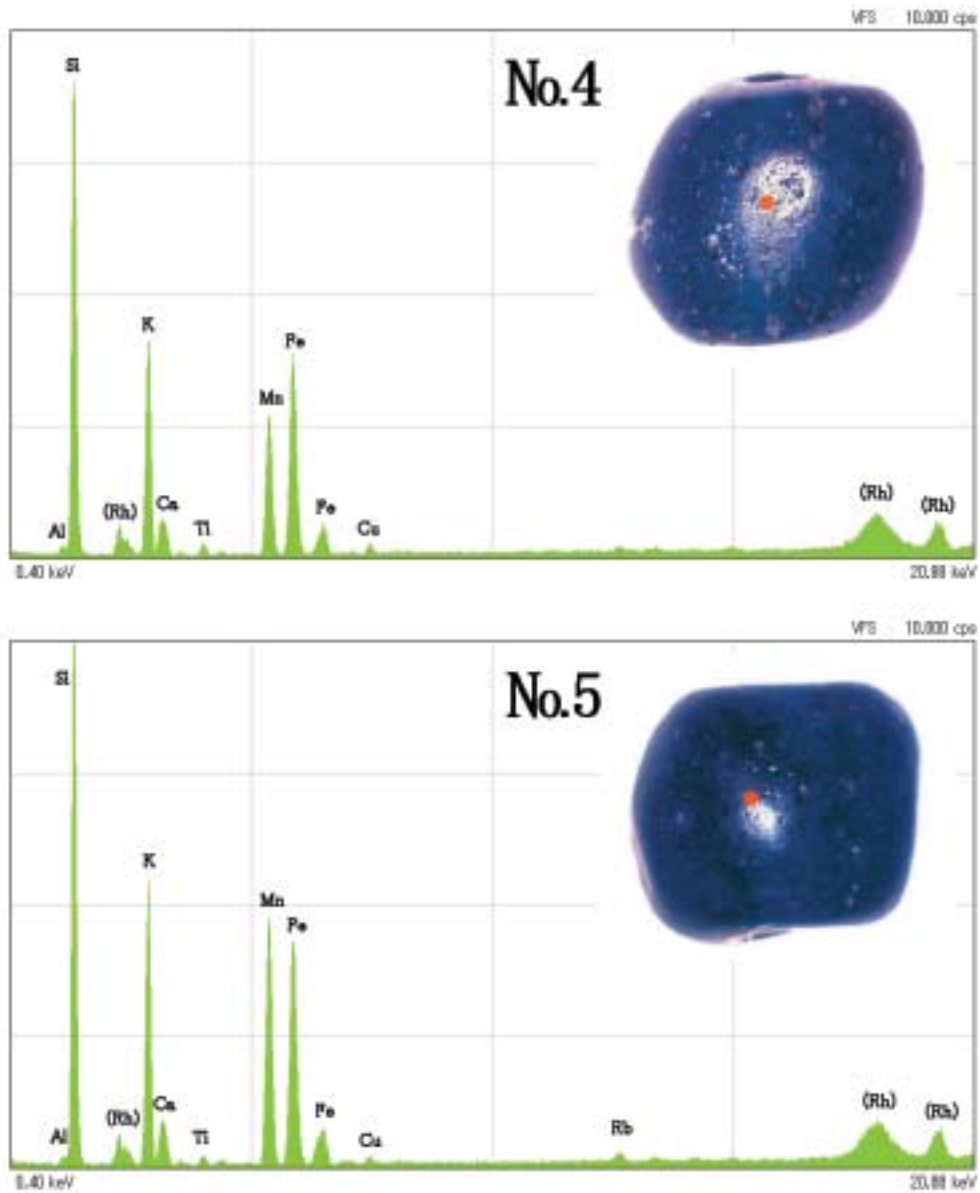
5b



ガラス小玉(4・5)のマイクロスコブ写真(2)



ガラス玉（ 1 ~ 3 ）の蛍光X線スペクトル図(1) 赤丸はポイント分析位置を示す)



ガラス玉（ 4・5 ）の蛍光X線スペクトル図(2)(赤丸はポイント分析位置を示す)

報告書抄録

ふりがな	なわとびたいせき							
書名	名和飛田遺跡							
副書名	一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	X							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	104							
編著者名	北 浩明 三木 雅子 日置 智							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260							
発行年月日	西暦2005年(平成17年)3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なわとびたいせき 名和飛田遺跡	とっとりけんさいほくぐんなわちよう 鳥取県西伯郡名和町 おおあぎなわ あぎとびた 大字名和 字飛田 2043番ほか	31387	310	35度 29分 51秒	133度 30分 13秒	20030502 ～20031014 20040417 ～20041122	16,631㎡	一般国道9号 (名和淀江道路) 改築工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
名和飛田遺跡	集落	縄文時代		土坑		縄文土器、石器		
	集落	弥生時代		竪穴住居、竪穴、土坑		弥生土器、鉄器、玉類		絵画土器
	集落	古墳時代		掘立柱建物、竪穴住居、 竪穴、土坑		須恵器、土師器、移動 式竈、鉄器		大型掘立柱建物 彩色記号須恵器
	集落	中世		ピット		土師皿、鉄器		

鳥取県教育文化財団調査報告書104
一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X

鳥取県西伯郡名和町
名和飛田遺跡

発行 2005年3月25日
編集 財団法人鳥取県教育文化財団
埋蔵文化財センター
〒680-0151 鳥取市国府町宮下1260
電話(0857)27-6717
発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団
印刷 米子プリント社